TRAL REVIEW

中央公論

春期大附録號

第三十四年第四號

第三百六十八號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

ライオン歯磨

完成せる歯磨として、内外専門家の齊しく賞揚す

ライオン歯磨

を愛用せらるるは最も合理的なる歯牙の衛生法なり。



東京市本所區外手町
ライオン歯磨
ライオン石鹸
本舗 合資會社 小林商店
支店 大阪市東區博勞町二丁目
名古屋市西區桑名町四丁目

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

豫約 抱月

●抱月全集豫約募集●

明治大正を通して過去廿五年間、稀に見る天才的文藝批評家として日月の如くに輝けるもの。前には高山樗牛氏あり、後に島村抱月氏あり。文壇の最高權威たる坪内博士が、抱月氏の飽く迄も透徹したる理解と直覺とに富み而かも其文章の獨得なる表現に天品の魅力を有するを指示して眞に絶倫也と激賞したるは、誠に以て典證とすべし。加之、抱月氏は又獨創的學者として其專攻科目たる美學に一新機軸を出さんと努め、更に其多年の蘊蓄を傾けて我邦空前の新美辭學を述作し。又別に創作家としても早く既に硯友社派以外に新作風を創め。又劇の飜譯家としてはイブセンの權威的飜譯の名篇を始め幾多の近代泰西劇の精粹を傳へ、其多方面にして行く所として可ならざるなき玲瓏の才分を發揮せる誠に一大驚異とすべし。苟くも思想、文藝を語り。生活、藝術を想ふの士は此稀有の文豪無二の新人抱月氏の全集を珍重せざるを得ざるべし。是本社が全力を擧げて之が完成を期せんとする所以也。其編輯を快諾せられたる諸氏は氏と生前最も深き縁故を有し文壇に於て各有力なる地位を占め居る人々なれば其眞摯と熱意とは毫も遺憾なきを期するもの也。

◎全集總て八卷（壹卷菊版約五百頁）抱月氏令孃君子氏畫及裝幀布表裝背金文字。外箱入美本◎

◎第一卷　文藝評論
◎第二卷　文藝評論
◎第三卷　美學及歐洲文藝史
◎第四卷　新美辭學及文藝概論
◎第五卷　飜譯各種
◎第六卷　小説創作及飜譯各種
◎第七卷　文藝雜纂
◎第八卷　隨筆及日記書簡

◎編輯囑托左の如し（イロハ順）

全集募集

顧問 金子馬治氏 中村吉藏氏

編輯擔當 本間久雄氏 片山伸氏 中村星湖氏 相馬御風氏

◎募集規程の大要左の通り◎

一、全集は豫約外の販賣を爲さず。

二、豫約者は必ず八卷全部の豫約をなすものとし、其中の分卷選擇の求めに應ぜず。

三、本年五月十五日より毎月壹卷宛刊行し、十二月を以て完結する豫定なり。
但發行順は必ずしも卷の順序を逐はず。

四、申込期日は大正八年四月三十日限りとす。

五、希望者は證據金として金三圓を添へ期限内に申込まるべし。
此申込證據金は最終の拂込金に充當し、如何なる事情ありとも中途拂戻しをなさず。

六、拂込金は左の通之を定む(各壹卷の定價を參圓の割合とす)

一時全拂 金廿二圓五十錢(申込證據金を含)四月卅日限

毎月拂 金三圓 毎月五日限

前項の外左の送本料を同時に申受く

	(東京市内)	内地	(朝鮮、臺灣)	(滿洲、支那)	外國
一時拂の分	卅二錢	九十六錢	二圓四十錢	三圓廿錢	四圓九十六錢
毎月拂の分	四錢	十二錢	三十錢	四十錢	六十二

回内容見本及詳細規則は(郵)便二錢切手封入御申込あらば三月下旬より出來次第送呈す

豫約元

東京市飯田町一丁目二番地

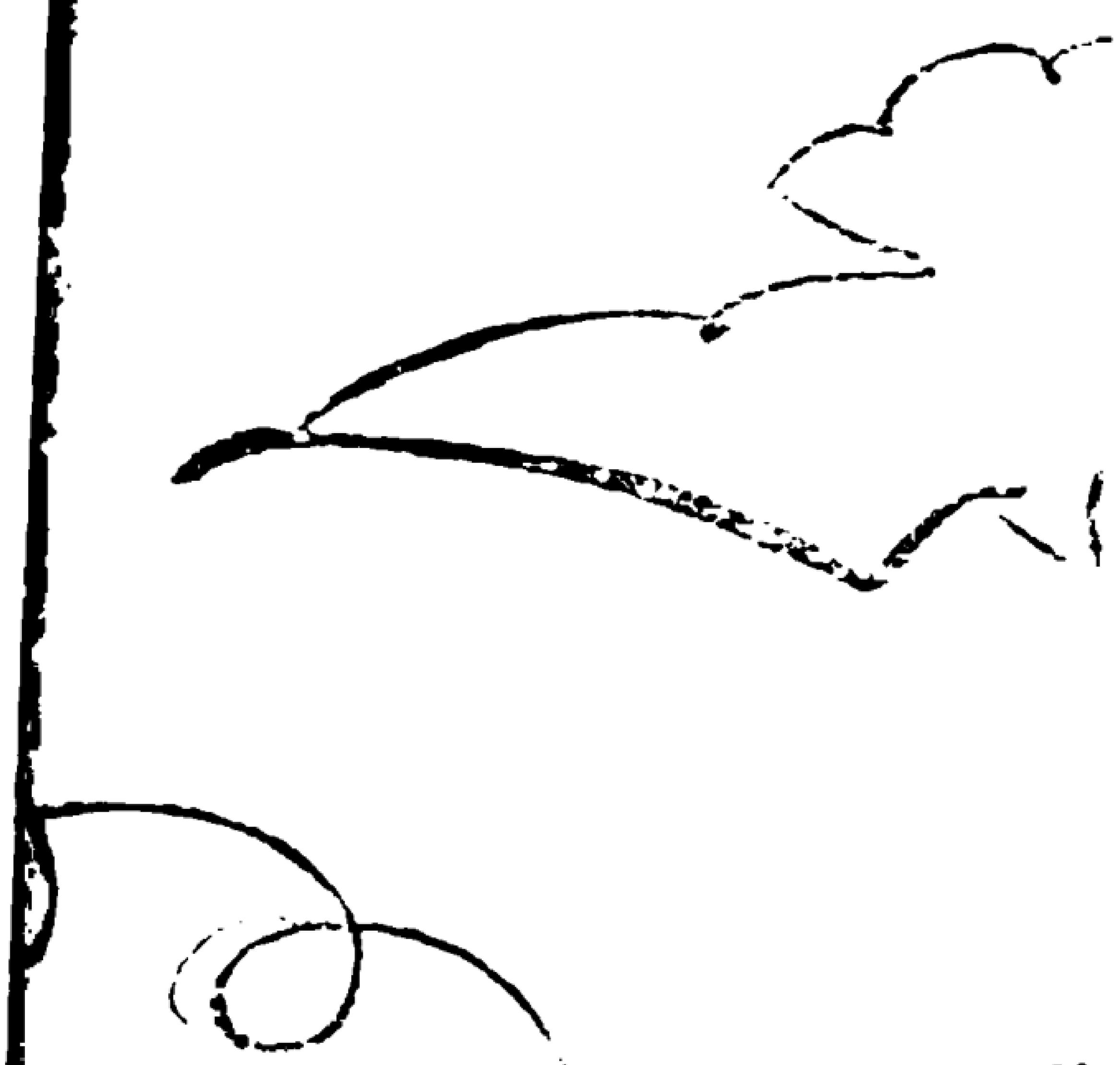
天佑社


振替東京一〇二二八番
電話番町一一七九番

申込取次店

(東京市内) 東京堂、上田屋、北隆館、東海堂、至誠堂

(大阪市内) 福音社、盛文館書籍部





營業品概目
○懐中時計 各種
○掛置時計 各種
○ダイヤモンド並ニ各寶石
指環手釦並ニ各種携帶品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話局新橋 一一〇三
一一〇四
振替口座 七八〇七



GIRL IN WHITE
BY WHISTLER.

浪六先生新著（創業十週年記念名著出版の内）

（函付二〇二）

裸體の人間

四六判上製美本
紙數四百餘頁
正價二圓八十錢
郵送料十二錢

內容目次一斑

●人間▲男女の不用意なる無意識中に祖先を倣向す▲創世記の作者▲進化順序十一▲エデンの樂園と佛說▲水中より陸上へ▲飛ぶ鳥と走る獸▲適者生存

●人と魚▲人間界の悲哀と海上魚族の不安▲鰯の生存狀態と人の生活狀態▲一將功成萬骨枯▲弱肉强食▲野蠻の戰ひと文明の戰ひ

●人と猿▲直立猿人▲未開と文明▲木に登る人▲始めて火を知る▲優勝劣敗▲原始人類の棲息分布▲世界人種の代表者集合▲人の手

●人と鳥▲鳥類に於ける二樣の戀愛作用と人間の戀愛競爭▲原始以來の依然たる行爲

●原始的の男女▲有史以前の闇き男女▲單純なる生殖作用▲性慾と物質と食物關係

●男女亂交時代▲性慾の無制限▲剥部の抱擁▲如何なる感情と驕げの寡婦▲酋長と奴隷の原因▲一夫多妻の原因▲內親姦の各國例▲猶いまだ動物系の血を脫せず▲父は子の愛を知らず▲母系的の原因▲姦の父と七面鳥の父▲分裂の小部落

●血を以て女を奪ひし時代▲慘憺たる血祭りを以て女を得たり▲青々たる原野に赤き血を彩られたる勇者の權威▲强者崇拜の女▲血は遺傳性の色彩▲本能的の潜在▲血の色と火の色

●女を財產とせし時代▲女を家畜に等しき財產として取扱へり▲姦通は盜賊の罪▲最も愛せる女を生きながら土中に埋む▲犧牲の虐殺▲父の愛せし女は悉く子に讓らる▲公然その女を饒賣す▲後世の夫に對して妻の貞操なるもの▲鳩の愛と啄木鳥の情

●女の提供を禮儀とせし時代▲女を賓客に提供して相互の親睦を繼續す▲親戚兄弟の間に於ける女の自由交換▲兄の死後その妻に子を產ましむるは弟の義務とせり▲總ての女に寡婦なし

●一夫多妻の時代▲動物性の本能を發揮す▲無人島に漂著せし男女に道德の有無▲弱を去りて强に就く女▲野蠻の鬪爭法則▲一人の男にして數十人その多きは二三百人の女を有せり▲一夫多妻と一妻多夫▲婆羅門敎とラマ敎と釋迦の佛敎▲妻と妾と下婢の遠縁

●婚姻の基礎時代▲希臘のセクロップスと支那の堯舜▲掠奪式の諸婚姻▲暴力强姦式の諸婚姻▲漸く和姦式の婚姻▲媒酌婚姻の起源

●婚姻の賣買時代▲漸く男女の平均數に近づけり▲後世の商取引と等しき婚姻の賣買▲十一歲の處女なし▲親は娘を賣り夫は妻を買る▲勞働に服して妻を買ふ▲年々一回の總婚姻▲日數を限れる夫婦

●一夫一婦の婚姻▲一夫一婦は人道より來れる乎男女平均數より來れるか▲財產分配の關係より來たる一夫一婦▲愚妻と一夫一婦

●我帝國の太古▲貝塚と石器と土器▲竪穴と橫穴▲先住人▲我々の祖神▲アイノ人とアイノ語▲我々の祖先は既に文化を得たる人種▲

第四十一議會を送る

此一文を書いてゐる時、未だ議會は終つて居ない。併し最早終りに近いてゐる。大なる掉尾の活劇の期待すべくもあらぬ以上、今期議會の成績は、今日までの所で判斷しても差支あるまい。

斯う考へて來ると、吾人は政界に對する如何なる貢獻を、今期議會に許し得るか、固より議會は政府と異り積極的の仕事をする處ではない。けれども彼は監督批評の機關として、果してどれ丈けの任務を盡したと云ひ得るか。

暫く議會を離れ、最近の政界に於ける最も喜ぶべき現象はと云へば、對支外交の刷新である、寺内内閣によりて始められた無謀の對支外交を根柢より覆したことは、一面よりすれば所謂軍閥外交の失態を遺憾なく暴露した悲喜劇である。併し之は世界の大勢に目醒めたる國論と周圍の事情とが自ら玆處に到らしめたもので、原内閣の功績ではない。固より議會の功績でもない。這個重大問題の糺彈に議會は如何に弱かつたかは、吾人の甚遺憾とする所である。軍閥外交の積弊に依て、日本帝國の煩累されて居るのは、單り支那方面ばかりではない。西伯利然り。朝鮮亦然り。

朝鮮に於ける最近の暴動は、實に昭代の大不祥事である。此問題に對し、予輩は義に於て亂徒の狂暴を憎み、情に於て一片の憐愍を寄せざるを得ない。少くとも彼等の衷情を諒として自ら反省するの雅量を失ひたくない。而かも政府は何を以て之を處せんとする乎。議會に於て亦吾人は不幸にして侃々諤々の議論を聞くを得なかつた。

今期議會の取扱つた唯一の重大問題は選擧法改正のみである。併し政府の提案といひ、憲國兩黨の夫れといひ、政治の理想に照し、果して幾何の價値を要請し得るか。院の内外に於て、普通選擧要求の聲亦頗る高かつたが、一今井博士を除き、多數論客の言說の杜撰なる、京都勞働團の理義明白なる堂々の宣言に比してすら、著しき遜色を示せるは、また以て現代政界の低調を語るものである。

世に隱れもない沒理想の原首相の、世界の大勢を知らぬ顏の乾燥な施政演說を以て始つた第四十一議會は、斯くして徹頭徹尾沒理想を以て終らんとする。吾人は其慶すべきか將た弔すべきかを知らない。

中央公論



第卅四年第四號
春期大附錄號
第三百六十八號

ナポレオンの人格と運命（下）

中澤臨川

第一執政官時代にナポレオンの爲し遂げた内政改革の事業は實に顯著なもので、彼はその意味からして佛蘭西革命の最後の解決者とも、近世佛蘭西の創造者とも謂はれてゐる。

軍人と政治家とは必ずしも異つた素質から成り立つわけはない。組織の才能と統率の才能とがどちらにも必要である。ナポレオンの言つてゐる通り、最高の戰術は凡ての知識の限りなく廣き了得から生れるのである。されば昔から立派な軍人にして同時に立派な經世家であつた者が稀らしくない。ペリクレス、シイザア、シヤーレマン、クロンウエル、ピーター大帝、フリードリッヒ大帝などが皆さうである。

ナポレオンがクーデターを行つて第一執政官となつた頃は、佛蘭西革命の行詰りで、ジャコバン黨の主義が實際政治に失敗して、民心を喪ひかけてゐた時代であつた。議會は餘りに長く空理空法を弄んだ。それで幾世紀か佛蘭西國民を

なづけで來た君主國的の本能が再び萌え始めたところへ、ちやうどナポレオンが現はれた。で、當時この國民の志向を支配してゐた新舊の二要素は彼のやうな聰明な專制家を迎へるに格好であつた。彼はジャコバン黨の出であつた。このことは彼の野心を遂行するに便宜であつた。

一八〇〇年のことである。今は第一執政官としての彼は二三の者を從へて偶まルーソオの墓に詣れた。つくぐくと碑石に見入つてから彼はかう言つた、

『佛蘭西の安寧の爲めにはこの男が生れなんだ方が却てよかつた』。

『なぜです』と從者が訊いた。

『佛蘭西革命を起したのはこの男だ』。

『で 執政官閣下が革命をお憐みになる理由はないでせう』と、從者が稍や皮肉に反問した。

『さうさ。世界の平和の爲めには余もルッソオも生れぬ方がよかつたと後世の者は言ふかも知れない』

この問答は當時のナポレオンの心境を最もよく談つてゐる。

然しその動機が彼の專制的野心から出たものであるにしても、彼の內政改革は光輝ある事業であつた。彼は第一に中央集權制度を確立した。そして革命政府が餘りに放埒に許した地方分權の情勢を一掃し、有機的國家としての近世佛蘭西を創設した。第二に彼の手を着けた事業は宗教統一のそれで、彼は機を觀て羅馬法王と和睦し、革命以來廢れてゐたカトリック教を國教として復活させた。それはふだんに彼の敵であつた王黨の武器を奪つて其裏をかく政略からも出てゐる。彼はマルメーゾンで或人に恁う話した——

『前の日曜に予はひとりで散歩しながらルエイの寺の鐘を聞いた。そしてひどく動かされた。幼い頃からの習慣の力といふ奴は馬鹿にならないものだ。その時俺はかう考へた、『俺やうな者をもこのやうに感動させるのだから、純な信心深い者どもに與へる感化はどんなに深からう』と。哲學者や理想家どもは之に就てどう言ふか知らんが。とにかく國民には宗教が必要だ。そして其の宗教は政府の支配の下に置かれんければならん』

彼としてはいかにも殊勝な話振だ。然しそのお終ひで彼はかう言つてゐる――

『他人(ひと)が俺のことを羅馬教徒と呼ぶのは勝手だ。ところが俺は何教徒でもない。埃及にゐる間は俺はマホメット教徒だつた。佛蘭西では人民の爲めにカトリック教徒になるさ。』

次に「榮號(レジヨンドノール)」の制を設けて人爵を復活させたこと、國家本位の教育制度を定めて盛んに人材の養成に努めたこと、財政に力を用ゐ、或は佛蘭西銀行を起したり、特許法を創めたりしたことなどは顯著であるが、彼の最大事業として認められてゐるのは有名な「ナポレオン法典」（Code Napoléon）の編纂である。つまりそれまでの佛蘭西の法律は、無數の習慣法と雜駁な勅令などを集めたものに過ぎなんだのを、秩序立つて一貫した法典が彼の手で作り上げられたのである。

法典編纂の事業に彼自らがどれだけ深く携はつたかといふことは、彼が殆んど毎日のやうにその會議に列したのを見ても分かる。彼はいつも從者を伴れて委員たちの居並ぶ室へ這入つて來た。そして稍や小高く造られた自分の席へ着いて討論に耳を傾けた。それが餘り彼の興味を牽かない場合は、彼は他の冥想に耽つてゐた。と思ふと、彼は急所々々で意味深い注意を發した。時としては彼の熱心な質疑のために、午前八時に始まつた會議が、僅か十五分の午餐の休みを置いたゞけで、午後五時まで續くやうなことがあつた。或時は深夜で會議が開かれた。

彼は委員の中でも特に老練な者の言を重んじた。彼は飽くまで實際的であつた。そしてこんな事を言つた。『諸君は唯だ理論上の法律を知つてゐるだけだ。予は人生の實情に通じてゐる。予は幾千萬の人に衣食を給し、且彼等を監督してゐる。予は男がどんな者か、女がどんな者かを具體的に知つてゐる。…………予は凡ての點に於て實際に適中する法律を作つて國民に與へるのだ』と。

彼は委員に長たらしい演說を許さなんだ。彼は凡ての事務に簡明を欲した。"No flowery—by command!" これが彼の要求であつた。彼は或時外務大臣の出した報告を非難して言つた。『この文體は充分に事務的でない、予の要求するのは堅實な推理(ハードリーゾニング)だ、模樣ではない』と。『究局的(カテゴリカル)に答へよ』いつも彼はかう言つた。彼は何人からも必ず明答を得なければ

満足できなんだ――已むなくんば事實を捏造してまでも。

ナポレオンが立法家及び行政家として施した政治的組織は、近世の國家にとつては些くとも模範的のものであつた。爲政家としての第一執政官ボナパルトは、皇帝ナポレオンよりも偉大であつた。革命の跡仕末を立派につける爲めに佛蘭西が彼を得たことは、彼の野心の犠牲となつてその國民が蒙つた悲慘を差引いても猶利益であつた。『予は無政府的混沌の淵を埋めた、予は革命を淨化し、國民を昂上させ、國々を強大にした』と、セント・ヘレナで彼が豪語した詞を、かの國民は甘んじて受けねばならぬ。

流行に疲弊し混亂してゐた佛蘭西も、彼が第一執政官となつてからの兩三年間に忽ち復蘇した。商業は榮へ、國民生活は活氣立つた。それは素養ある國民の歴史上で時々演ずる――一夜にして墮落の極から生れ替るやうな奇蹟的復活の一例である。現に今回歐洲戰爭に先だつて、一九一〇年前後にも、佛蘭西は同様な經驗をした。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ナポレオンが一般國民の歡迎に浸つて、殆んど獨裁に近い政治を行つてゐた一方には、極端に彼を憎む者があつて、ジヤコバン黨や王黨の陰謀がしつこく彼の身邊で企らまれた。

彼がマレンゴから凱旋した當時、廢帝は直ちに一書を裁して彼に寄せた。

「將軍よ、余が平素いかに貴下を尊敬しつゝあるかは從前より貴下の知らるゝところであらう。貴下にして若し余が感謝を疑ふならば、乞ふ余をして貴下自ら得んと欲する位置と、貴下が貴下の友人を置かうと思はれる位置とを告げられよ。予は主義に於ては佛蘭西人である。而して余は生れ付き寛大であり、懷感がそれを命ずる場合には一層寛大になれる。ロヂ、アルコールの戰捷者であり伊太利の回復者である者がその受くべき眞の榮譽の代りに空名を取るといふことはない。したが、貴下は今徒らに貴重な時を浪費しつゝある。我等二人で佛蘭西の繁榮は贏ちえられる。余は「我等二人」といふ。なぜなら。余はボナパルトを要し、彼は余なくしては何事も爲しえぬからである。將軍よ。歐洲の幾つかの眼は貴下の上に向つてゐる。榮譽は待ちつゝある。そして余は我邦の上に早く平和の回復せんことを佗感して已まない――ルイ」

之に對するナポレオンの答はむき出しでそして冷淡であつた。

『余は貴下の手紙を拜受した。貴下が余に對して書かれた情深は言葉に對して感謝する。然し貴下は佛蘭西へ歸ることを思ひ止つた方がお爲だ。貴下は幾十萬の屍の上を歩かねばならんのだから。貴下が御自身の利益を佛蘭西の平和と繁榮の爲めに犧牲にされるとき、歴史は貴下に感謝する。余と雖も貴下御一族の不幸に對して同情を持たないわけではない。余は貴下が居らるゝ避難地に於ける貴下の靜平と安全との爲めになら、喜んで助力を惜まぬであらう——ボナパルト』

兩方の手紙を見ると、前者の情けないほど屈辱的なのに反して、後者は殆んど自然的の尊大と冷靜とを構へてゐる。それこれで王黨の隱謀はいよ〳〵手を代へ品を代へて行はれた。或る時は假裝した暗殺者がマルメーゾンへ潜み込んだ。或時は劇場へその手がのびた。

その一つとして一八〇〇年の暮に發覺した隱謀は巴里全市を驚殺したものだ。クリスマス前夜にナポレオンとジョセフイーヌとは、ヘーツンの『創造』の奏演を聞く爲めにオペラ座へ出掛けた。七時少し前に職人風に裝つた二人の隱謀者は爆彈を載せた手車を牽いてサン＝ケーズ街へやつて來た。そしてわざとらしくなく路ばたへその手車を遺棄して置いた。その街は第一執政官の馬車が通る豫定地であつた。時間が最も緻密に計られて口火が點けられた。誰も知るとほりナポレオンは時間に正確だつた。然るにその日に限つて彼の馭者が少し醉つて拂つてゐた爲に、無暗に馬を鞭打つたせいで、恐ろしい爆發の起る兩三秒前に彼の馬車は危險地を通り過ぎてゐた。附近では五十六人の人間が傷けられ、二十二人が殺された。そして數軒の家がつぶされた。その風聞が丁度劇場へ傳はつて、人々の度膽を拔いてゐるところへ、第一執政官は平然として彼の席（ボックス）へ着いた。見物人の間にどつと名狀のできない喚聲が起つた。その時ばかりは誰の眼にも「撰ばれた人」としてよりほかには彼の姿が映らなんだ。

隱謀はその後も續いて企てられた。有名なモロオ將軍もこれに關係したといふので、初めは禁錮二年に處せられ、後には追放の命令を受けて亞米利加へ渡つた。王族アンジアンが無理矢理に拘せられ、ろく〳〵取調べも受けずに銃殺されたのもその頃であつた。

當時の社會ではまだ王族といふ詞は世人の耳に重要な響を傳へたものであつた。アンジアン公の銃殺がどれだけ巴里人を驚かしたかは推察することができる。それは實に革命以來の出來事であつた。マルメーゾンの連中も流石に氣味が惡るがつた。ジョセフィーヌは泣きながら夫の頸につらまつて哀願した、『どうぞ私の言ふことを聞いて下さい、貴夫があの仁を殺すやうなことがあつたら、次には貴夫が斷頭臺へ上せられて私の先夫のやうな目に遇ひます』フッシェは例の氣取つた見えで恁う言つた、『これは面白いぞ』タレーランは洒落のめした、『こいつは罪惡以上だ、こいつ大失錯だ』弟のルシアンは驚きの餘り妻君の部屋へ驅け込んで叫んだ、『おい逃げよう、彼は血を味つたぞ』實際にルシアンの眼には兄のナポレオンが血に餓えた暴君に映つたのである。

頻々たる王黨の陰謀は、却て國民をして一定の權威ある統治者を戴くことの安全なるを思はしめた。そこで一八〇四年四月に、國會はナポレオン・ボナパルトを皇帝に推し、彼の家族に世襲の皇統たる特權を與へた。

五

ナポレオンが帝位に卽くについて、あちこちに異論があつた。國會ではカルノーがたつた一票の反對投票を行つて、追放地に引き下がつた。口には出さなんだが海陸の將校中にも大分不平な者がゐた。殊に卑下的な手紙を書いたルイ十八世は、今は公然と彼を「簒奪者」と呼ぶのであつた。當時ウィーンにゐて佛蘭西革命に心醉してゐたベートーベンは、彼の爲めに有名な『エロイカ』の曲を作つたりしたが、彼が皇帝となつたと聞いて、憤怒のあまり恁う叫んだ、『彼奴もたゞの人間であつたか』

戴冠式はその年の十二月にノートルダムで行はれた。それは壯麗なそして長たらしい式であつた。場内の裝飾はすべて畫家ダビッドの設計になり、法王がわざ〳〵羅馬から出かけて來て式を掌つた。法王が黃金作りの桂の葉の帝冠を自分の前に置いて、敬々しく皇帝夫妻の爲めに祝福の辭を述べてゐると、ナポレオンはぐいと自分の冠をとつて冠つて了つた。それからジョセフィーヌの冠をも手づからとつて冠せてやつた。參列の將軍中には神聖な坊主の仕草を小聲で冷かす者さへあつた。

その後ナポレオンは盛んに、儀容を整へて自己の威厳を示した。宮中には侍臣や官女が増へ、もろ〳〵の禮式が次第にめんどうになつた。彼は人を呼びかける場合に今迄の「市民」といふ詞を廢めて、「臣」といふ詞を使ひ出した。國民はそれを怪まうとも思はなんだ。彼等はもうすつかり革命氣分から超脱して、la grande nation の誇りに浸つてゐた。

ナポレオンは帝位に即くとすぐ陰謀の嫌疑者を特赦した。それから廣く新舊の功臣に對して大袈裟な叙位叙勳を行つた。そのとき十八人の將軍が元帥に推され、同時に廣大な土地と巨額の金子とがめい〳〵に給された。新元帥の中にはラファブル、オーヂュロオ、スール、マッサナ、ベッシエル、ダヴウ、ネー、ランヌ、ベルナドット、ベルチエ、ムラーなどがあつた。その後彼は新貴族を作つて是等の人達を公侯に列した。

彼は皇帝となつてから金子(かね)を貯めた。然しそれは自分が欲しいからでなくて、惜氣もなく將軍やその他の功臣に頒つてやる爲めであつた。彼の叙勳は空名でなくて實質的であつた。元帥ダヴウはオイエルステッド公で同時にエックミュール大公を貰つたが、一時彼の年收は壹百八十萬フランに上つたといはれてゐる。その當時のこれだけの金額が何を意味するかを我等が想像したときに、どれだけ巨額の金錢がナポレオンの身邊に流通してゐたか、そしてどれだけふんだんに彼がそれを振り蒔いたかといふことが分かる。

彼には人を牽きつける不思議な人格の力があつたが、彼はそれを補ふ爲めに人の欲望に訴へることが最も有效な手段であることを知つてゐた。彼は最初の伊太利遠征の時から將士に掠奪を公許してゐた。埃及では敵の死骸は必ず裸にされたものだ。或時などは佛蘭西の兵士等は劍を曲げて鉤(はり)をつくり、ナイル河に流るゝ敵の死骸を釣り上げて其財寶を奪つた。『この時から兵士たちは漸く埃及を喜ぶやうになつた』とナポレオンは言つた。

殊に彼が曩に制定した「榮説」勳章は、軍隊内では皇帝自身の體現のやうに思はれて非常に尊重された。それを受けることが負傷なりどんな困苦なりを償つて餘りあるばかりでなく、それはまた彼と將卒との間の永久の楔となつた。

彼は能く酬ひたが、然し間違つて與へたことはなかつた。庸凡な君主のやうに寵臣や近侍に手厚いなどいふことは寸毫も見られなんだばかりか、かやうな問題に婦人の口出しを允すやうなことは彼には絶對になかつた。彼の恩賞は能く

までも男らしき仕事と勇氣とに對する男らしき認識のしるしであつて、將軍から一鼓手に至るまでが正當に酬ひられた。それだけ彼の恩賞には威嚴がありそして價値があつた。彼自ら言つた『余は酷な人間ではあるが、然し眞底は正しい人間だ』と。

『人を動かす二つの槓杆(こと)は利慾と恐怖だ』とナポレオンは言つた。彼に對する忠實を强ゆるに利慾の利き目がない場合彼は恐怖を用ゐた。或はその二つを併せて用ゐた。元來彼の容貌には人の怖れを牽くに足る何物かゞ潜んでゐた。時としてその冷靜な眉間に急に皺が寄り、その透明な眼いろに憤怒の閃光が過ぎる早さ險はしさは、秋の海の颶風のやうだつた。之に對してはどんなに剛毅な人間でも怖毛を振つて危險の襲來を感じた。オーヂュロオのやうな猛將が彼の前ではわけもなく戰慄を覺えたとある。

將校たちとは日常の交渉に於て、彼の態度は至て冷靜で、嚴格で、不撓に正しかつた。一日、グーヴイオン將軍がチユイエリイ宮殿の朝の謁見に伺候したところが、皇帝は彼に向て靜かに恁う言つた、

『將軍、貴下はナプレスから來られたか』

『然り、陛下。余は陛下が余の代りに御遣はしになつた。パリヅノン元帥に余の任務を讓つてまゐりました』

『貴下は勿論陸軍大臣から退去の許可を得たことと思ふが？』

『否え、陛下。余はナプレスにゐても爲すことがありませんので』

『二時間以內にナプレスに向つて立ちなさい。それでないと貴下はきつちり十二時に銃殺されますぞ』

かう言つて彼はポケツトから時計を出して見た。

マッサナ元帥が伊太利の戰地から私腹を肥して歸つたといふことが知れた。すると皇帝は何等の理由(わけ)も述べずに、即刻百萬フランの金子を國庫へ納めることを彼に命じた。元帥は一言の不平もいはずに命令通り仕拂つた。マッサナと一緒に伊太利にゐた某大佐は同じく八拾萬フランの納金を命ぜられたが、ちよつと躊躇したので、直ぐ一兵卒に下げられた。然し彼が平然として銃を肩にしてゐるさまを後に皇帝が見て、元(もと)の階に復へされた。

當時皇帝ナポレオンの用ゐた馬車は六頭の駿馬によつて牽かれた。或る場合の如き、彼は二拾キロメートル（五里）の道を行くに六たびも新手の馬車に代へたといふことである。從て彼の行幸の道々には幾臺もの馬車が用意されねばならなんだ。そして一つ〳〵の馬車の中には地圖、書籍、文具、望遠鏡などが必ず具へられてゐた。彼は殆んど全速力で馬を走らした。

實際彼は皇帝となつてから一層多くの仕事をせねばならなんだ。その頃の彼は一日に十二時間から十六時間働き、僅かに廿分間で夕食をとり、常人が數時間の睡眠によつて漸くうるほどの休息を、例の熱い湯の中の一時間で間に合せるといふほどであつた。彼の貪婪的な頭腦は仕事に食傷することがなかつた。繁多であればあるほど却てその精神は輝いた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

皇帝となつてからの彼の最初の企は英國討征であつた。彼は戴冠式の濟まないうちから大本營をブーローニュに移し、精英の軍隊と艦隊とをそこに集めて旺んに演習を行つた。その時英國では大ピットが再び宰相となり、ナポレオンの計畫に對抗する爲めに墺露の諸國を説いて對佛同盟を作つたので、大陸の風雲はまた急を告げて來た。將軍マックの指揮の下に墺軍は既にババリアに侵入した。時も時、佛蘭西の艦隊はトラファルガアの海戰で全滅したのであつた。

その知せをえたナポレオンは感慨の體で室内をあちこちと歩きながら、ダル伯爵を呼んだ。

『座れ、ダル。余の口述を筆記せよ』

ナポレオンは一朝にしてその計畫を變えた。彼は倫敦塔の上に鷲の旗を樹てる多年の望みを思ひ止まつて、踵を回すが早いかウイーンに向つた。この時即座に彼はアウストルリッツの大勝を以て終りを告げるまでの戰鬪計畫を事細かに口述して筆記させた。ハノバアに、和蘭に、伊太利に、南佛蘭西に駐屯してゐた各軍の採るべき行動が一々令的に指示された。それには毎日の行程までが明らかにきめられ、どの軍とどの軍とは何月何日にどの地點で合するといふことまで限定されたほど詳しいものであつた。ブーローニュからの本隊は豫定の計畫と寸分違はずに東方へ約二百哩の行軍

を設けた。それほどこの計謀は正確であつた。そして完全な勝利が之に次いだ。

當時のナポレオンの頭腦は何事をも受け入れるだけの充分の餘裕と準備とを有してゐた。若し第一の計畫が（英國討伐）失敗した場合、彼は直ちに第二の計畫（大陸政策）に移る爲めに慌てる必要を　めなんだ。『余はいつも默想する。余がどんな事件に遭遇しても決して狼狽しないのは、之に處する道を前々から工夫してゐるからである。余は凡ての起るべき事に先鞭をつける。不慮の事件に際して直ちに余の執るべき方法を余に啓示するものは、神でも魔でもなくて、實は余自らの沈思にほかならぬ』と彼は言つてゐる。

事物に對するかうした徹底的準備は彼に完全な自信力を與へ、それが不慮の出來事を處理する場合に一種の神通力となつて現はれる。されば失敗と困難との前に立つ時ほど彼の人格は偉きくあざやかに映出される。マレンゴの戰の場合がさうであつた。このたびの佛蘭西艦隊全滅の場合がさうであつた。それから一八〇九年に於けるワグラムの戰が矢張さうであつた。

一八〇五年の秋から冬へかけて中歐の野を驅けめぐつた grande armée ほど壯大なものはなかつた。凡ての組織が初めてナポレオン式に統一され、幾萬の精英は十年來彼の手で養成した者ばかりで、將校等は元氣の頂上にあつた。誰一人として疲勞を知らなんだ。近衞兵に護られた皇帝を中心として、彼等は殆んど無人の境を行く如くウイーンまで長驅した。

ナポレオンは墺露兩帝の率いる聯合軍と會戰する爲めにウイーンを去り、ダニューブ河を渡つた（彼はいつも背水の陣を布いた）。その時敵はブラッツェンの丘近くにあつた。彼の鋭敏な直覺は、敵がウイーンとの間の糧道を絶つ目的を以て、必ず我が右翼を强襲するであらうと考へた。そこでその裏をかく策戰に出た。『自分はブラッツェンの丘を固守すればよいのだ、然しそれでは餘りに平凡な勝利に了るのだ』。

十二月一日、即ち、戰の前夜、墺露軍は果してナポレオンの思ふ壺にはまつた行動を開始した。彼等の大部隊はブラッツェンの丘を棄てゝ南方に陣をとつた。彼は雀躍して叫んだ。『明晩を待たず敵は我ものだぞ』。その夜晩く、彼は單騎

陣營をめぐつたところが、兵卒たちは自分の寢床の藁を焚いて松火を作り、冬の闇夜に於ける皇帝の行く手を照した。火は隊から隊へ傳はつて全軍に連らなつた。幾萬人の口から『皇帝萬歲！』が叫ばれた。

翌くれば十二月二日、朝霧を破つて現はれた朝日はあたりの廣野一面に散つて、この日の吉兆をトふかに見えた。これが有名な『アウステルリッツの太陽』であつた。(その後この詞は戰の日の好日和をよぶ代名詞となつて、捷利の前兆のやうに思ひ做された。)

戰は始まつた。露將クツゾフは主力を佛軍の右翼に注いだが、ちやうどその朝戰場へ到着したダヴウの軍が之に當つて能く禦いだ。するとプラッツェンの丘上にあつた聯合軍の中央部に間隙が生じたので、スールの軍が虛に乘じて其處を突撃し始めた。

『元帥、貴下があの丘を取るに幾時間かゝるか？』からナポレオンがスールに訊いた。

『下、一時間でよろしい』

『ほんとか？　ではもう十五分餘分にやらう』

凡そ二時間に渡つて劇しい陣地爭奪戰が行はれた。ナポレオン自ら近衛兵を差し向けて之を救つた。敵はとう〳〵隊を亂して退却したが、附近の凍つた湖上を渡る場合、佛軍の砲擊に逢つて氷を破られ、溺死する者が非常の多數に上つた。その日佛軍の左翼はランヌによつて能く守られた。

アウステルリッツの戰は、ナポレオンが閱みした前後六十幾會戰のうちでも最大傑作として知られてゐる。この戰に於て彼はその戰略戰術の特徵を遺憾なく發揮したのである。銳敏な省察、平生からの徹底的用意、確乎不拔の意志を以て目的の敢行……これ等のことに加へて、彼の戰術には更に具體的な二つの特徵があつた。その第一は運兵の神速なことで、從て何時も攻勢的態度に出づることであつた。彼が英國討伐の爲めに集征した軍隊を、卽座に回轉してウイーンに振向け、二百哩の長行軍を息もつかずに敢行したのは正にそれであつた。一八〇〇年、彼が伊太利に向つた時は、七日間でアルプスの險を越えた。同じ征軍中に彼の軍隊は約百哩の進行を三十六時間に遂げたことがある。『彼は我等の

脚を鐵劍以上に利用した』と或る士官が笑つた。アウステルリッツに參加する爲めに急にウイーンから呼ばれたダヴウの軍隊は、四十八時間に九十哩を强行して、漸く戰の期間に合つた。そしてこの日の勝利を決定したのである。

ナポレオン式戰術の第二の特徴は、敵の弱所に對して密集的攻撃を加へることであつた。彼は敵が主力を傾倒した右翼に備へる爲めに、强行によつて疲れてゐたダヴウの軍を向けた。で、その方面は敵の精英四萬に對して、こちらは僅かに壹萬二千であつた。（この日の戰に參加した兵數は佛軍七萬、墺露軍八萬である）。而してプラッツェンの丘にあつた露將クツゾフの本營は一萬七千ばかりの步兵を餘すに過ぎなんだ。機を圖つて佛軍の中軸たるスールの軍がそこに向つて突撃した。その爲めに露軍は脆くも中斷せられ、一擧にしてその日の戰は決せられた。戰に於て機を見るに敏であつたといふことも、またナポレオンの一特徴であつた。彼は「處」よりもより多く「時」を重んじた。

この戰に於て墺露軍の損失は死傷二萬五千、捕虜二萬五千と謂はれた。露帝アレキサンダアも危く捕虜となるところを、ナポレオンの寛大によつて逃れることができた。

アウステルリッツ戰に對するナポレオンの行賞は殊に華々しかつた。戰死者の子供はみな國家によつて引取られ、そして「ナポレオン」を名のることを許された。寡婦は篤く報ひられた。將校は位階と勳章と金と土地とを得た。彼は賑はしき詞の限りを盡して將士をねぎらつた――

『我國民は滿面の得意を以て汝等を迎へるであらう。そして汝等の一人が「余はアウステルリッツにあつた」と揚言するとき、彼等の凡ては一聲に「汝は勇士である」と應へるであらう。』

その時フッシエは巴里で皮肉な笑ひ方をした。彼の言ふところによれば、伊太利の役以來墺太利は彼の手で易々と買收される習慣になつてゐたので、アウステルリッツの前にも敵軍の幹部は一人殘らず彼の手引のものであつたといふことだ。『だから、我が忠勇な將士と優秀な戰術とにとつては、ウィーン橋上の戰もアウステルリッツのそれも、みんな虚僞の戰さ』と彼は言つてゐる。その頃皇帝が財政困難の理由を以て大藏大臣を叱りつけたことなども、フッシェに言はせれば一つの芝居だ。なぜなら、『賄賂の目的で五百萬フランを國庫から引出したのは皇帝自身だらうぜ』。（歐洲近世史は或る意

味から言へば、國と國との間の大仕掛な探偵史だ。然しその面を作つた者がナポレオンであつたかどうかは知らない。）

戰後間もなくプレスブルグ條約が結ばれた。墺太利はベニスを伊太利の爲めに、ティロルをババリアの爲めに裂かれ、神聖羅馬帝國は瓦解した。そして佛蘭西の利益の爲めにライン同盟が成立した。

* * * * * * * * *

プルシアとの戰役が之に次ぎて起つた。アウステルリッツ戰の前後、メッテルニッヒは伯林にゐて、頻りにプルシアを味方に加へようと努力したものだが、フリードリッヒ・ウイルヘルムは仲々承諾を與へなんだ。然るに、一年後（一八〇六年）彼は、その祖國を殆んど滅亡に陷れるやうな不幸な戰をナポレオンに挑んだのである。宣戰の布告もなくして彼の軍は既うサクソニイまで進んだ。巴里にゐてこの事を聞いたナポレオンは、地圖を熟視しながら、プルシア軍の潰滅が來る十月十五日に行はれるといふことを豫言した。果してそれは一日早く十月十四日に實現された。

兩軍はライン河の附近で對陣した。フリードリッヒ大王の遺愛なるプルシア軍は、現に大帝の訓練を受けた將軍たちによつて師いられてゐた。ブランスウイック公、メーデンドルフ、ブルッヘル、ホーヘンローヘ大公などの名は、それだけでも畏れをなさしめるだけの歴史的威力を有してゐた。況してプルシア軍の總勢は二拾三萬と號された。之に對して佛軍はランヌ、ダヴウ、ネー、スール、オーヂユロー等十七元帥によつて率いられた。ナポレオン自らも近衛兵を以て之に加はつた。

十月十四日、兩軍はエナ及アウエルステッドに於て二手に分れて戰つた。どの方面でも劇しい接戰が行はれた。その結果は「フリードリッヒ大帝の軍隊」の潰滅に歸した。古い戰術は全く新しい戰術に蹴落されて、軍事上の革命が行はれた。光榮ある大帝の勳臣は殆んど皆な屈辱的の戰死を遂げた。それはプルシアにとつては物質上よりは精神的に却て大きな打擊であつた。殊にナポレオンはウイルヘルム皇帝及ルイ皇后に對して邪慳な取扱方をした（二人は生來そりが合はな　だと見える）。その時から普佛間の深い葛藤が結ばれて、終に廿世紀の歐洲大戰にまで及んだのである。

これに次ぐ二三の小戰のあとで、ナポレオンは十月廿七日に、フリードリッヒ大帝の凱旋門を通つて伯林へ進入つた。

プルシアとの戰役は之で終を告げたもの〻、露西亞がその同盟國として軍を進めたので、佛軍は更に東を指して嘻々としてワルショオへ向つた。

嘻々として戯れつ〻！。文字通りにそれは當時の佛軍の實情であつた。戰ひは決して初期伊太利遠征の時のやうに榮ではなかつた。然し彼等は既う勝ちいくさに馴れてゐた。戰ひさへすれば、厭やでもその結果は勝利と榮達のほかに道のないことを彼等は知り抜いてゐた。彼等は物見遊山をする氣で從軍した。行く先々の都にも宮廷にも彼等を邪魔する若い男はゐなんだ。そのかはり、奇麗な夫人やら娘やらは在り餘つてゐた。彼女等は花の巴里から來た伊達姿の騎士の誘惑を斥けるわけにはいかなんだ。佛軍の若い士官たちは春の花吹雪のやうに、戯れつ〻笑みつ〻、歐洲の野を飛んだ。情けの蝶が貸した一夜の宿は、次の朝はもう淋しい空き巣だつた。

武骨で我利的な野武士にとつても慰みは澤山にあつた。勝利のあとの街には獵り盡せないほどの寶財が遺棄せられてゐたので、彼等の好奇心と財利心とは際限なく滿足させられた。皇帝は之に對して寬大であつた。彼等は主人のない空家の寢所にまで侵入して、珍藏の古い葡萄酒に舌皷を打つたりした。彼等の到る處で演じた馬鹿々々しい狂態は市民を絕望させ、そして氣の弱い女達に腰を抜かさせた。兵卒等にもビーアと女と舞蹈があつた。彼等は重い裙(スカート)を牽いて逃げる給仕女をつらまへて、襤褸(ぼろ)入りの脚を有つた人形のやうに躍りはねた。

一八〇七年二月に、佛露の兩軍はアイラウで會戰した。この戰は寒氣と殊に咫尺を辨じないやうな劇しい吹雪との爲めに、佛軍は非常な困難をした。實際勝敗は五分々々であつた。ナポレオンのやつた幾十會戰のうちでも之が一番血醒い戰であつたと謂はれてゐる。それの終つた夜は皇帝自らも戰場に立つて負傷者の手當をし、死者の埋葬を指揮したほどであつた。血に染んだ白い軍服を見るのは殊に悽慘だつた。爲めに佛軍ではそれ以後白色の服を廢した。

然し之に次ぐフリードランドの戰に於て、佛軍は又しても大捷を博した。その結果はチルジットに於けるアレキサンダア一世との會見となり、歐洲の大半は正しくナポレオンの覊下に歸することになつた。佛蘭西の國民は非常な狂熱を以

て、約一個年の征旅から凱旋した皇帝と彼の軍隊とを迎へた。例によつて大袈裟な、然し公平な授賞が行はれて、「榮譽」勳章は益々その有難味を加へた。

越えて翌年（一八〇八年）、ナポレオンは再びエルフルトで露帝と會見した。その會議の形は同盟諸侯會議であつたが、彼は他の諸王には殆んど眼をくれたんだ。プルシヤ王と墺太利皇帝だけが缺席した。兩者は自國の再造と復讐の準備とに忙殺されてゐたのである。贅を盡した饗宴と演劇とは二週間に亘つて行はれた。彼が閑暇を見てゲーテと語つたのもこの時であつた。『沈着、素朴にして、溫和な容貌を有する偉人』とゲーテは後で御世辭を言つた。然し、彼は皇帝の人格に魅せられて『未曾有の大智識人』だと信じ、皇帝の前に立つたときに『崇高の歡喜』を感じたのは事實であらう。憐れなる老ゲーテは高價なる彼の晩年の平靜を亂さないためにどれだけ苦心したことか。その爲めには彼は權勢の前に額づくこと——少くとも權勢の前に妥協的態度をとること——を避けなんだ。

會見中の二皇帝は意氣の合つた百年の友のやうだつた。或る晩の觀劇中に舞臺の役者が、『英雄との交友は神々の賜物である』といふ臺辭を使ふと、未だ弱年のアレキサンダアは感に堪えてナポレオンの手を執つた——

『余は今日眞にさう思ふ』。

すると、鷹揚なナポレオンは、自分の腰から劍を取つてアレキサンダアに與へた。

『余に忝けなくこの友情の記念を受ける。余は陛下に對して決して之を拔かないことを誓ふ』

然し露帝の誓言は直きに反古にされた。彼は奸黠ではなかつたが、薄志で氣まぐれで、そして無責任だつた。

ナポレオンが歐洲の檜舞臺の唯一の立役者として、一生の大見えを切つたのは、實にこのエルフルトの會議であつた。當時彼は權勢と精力との絕頂に立つてゐた。試みにその頃の彼の軍隊がどれだけ廣く大仕掛に分布されてゐたかを擧げてみよう。一軍はパシヤヽに、一軍はワルシャウに、一軍はシュレスウイッグに、一軍はハンブルグに、一軍は伯林に、一軍はブーローニュに、一軍は伊太利に、一軍はダルマチアに、一軍はナプレスに、而して他の一軍は西班牙に進軍しつゝ。

* * * * * * *

當時葡萄牙に進軍しつゝあつた彼の軍隊ほど、彼にとつて厄介な重荷はなかつた。是より先きナポレオンは英國を苦める目的で大陸封鎖令なるものを布き、歐洲の諸王を說いて、一切英國との交易を絕ち、英國の船の歐洲諸港に這入ることを禁じた。(この政策は餘り有效でなかつた)然るに葡萄牙のみは英國に加擔して封鎖令に邪魔を入れたので、一八〇七年の暮、ナポレオンはジュノー元帥を遣つて之を討つた。その時彼は西班牙政府に交涉して、佛蘭西の軍隊がその領土內を通過することを許されたので(この時も彼は宰相のアルカデア公を買收した)ジュノーは一ケ月以內に葡萄牙を平げてリスボンへ這入つた。

然るにナポレオンの野心は二重であつた。彼は同時に西班牙をも占領しようと企んだのだ。で、ジュノー軍應援の名のもとに續々多數の軍隊が西班牙へ送られた。果して翌年の夏彼はナプレス王であつたヨセフ・ボナパルトを移して西班牙王とした。これを聞いたかの國民の憤り方は一通りでなかつた。彼等は殆んど國を擧げて各地に蜂起した。それが暴徒的で、到るところに散亂してゐただけ、佛軍にとつては仕末が惡るかつた。同年の暮は、ナポレオン自身討伐に出懸けたが、さしたる功も見なんだ。ヨセフはたつた八日間でマドリッドから逃げ出した。西班牙國民の抵抗は歲とともに拗執になつて行つた。葡萄牙ではスールの軍や英國のウェリントンの軍の爲めに致命傷を受けた。三年後(一八一〇年)に西班牙で無益に戰つてゐた佛軍の數は、ネー、マッサナなどの名將の下に四萬に上つた。終ひには西班牙へ遣られるといふことは將卒にとつて島流しのやうに思ひ做された。所謂半島戰爭はぢり〱とナポレオンの運命に喰入つたのである。

ナポレオンが西班牙に對してとつた政策は、彼の一生中の一番の拙作であり、且つ許すべからざる政治的背德であつた。彼は無賴漢(ごろつき)のやうな行動で由緖ある嚴たる一國民を騙いたのである。それにしても、なぜ彼はあのやうに執ねく無益な半島戰爭にこだはつたのであらうか。この事はあの神秘的な埃及遠征及び後年の無謀な露西亞遠征と共に、世間から謎のやうに思はれてゐるが、それを解く唯一の鍵は一八〇八年に書かれた彼の手紙である。彼は西班牙征服は彼の計畫した一大壯圖の序幕であつて、彼はそれからシシリイ島を取り、次に土耳古から埃及へ侵入し、更に印度を席捲する

のがその目的であつた。この目的の爲めに――先づ地中海を佛蘭西の湖水とする爲めに――彼は西班牙の港と船舶とを必要とするのであつた。

南の海から着手する彼の世界的帝國の壯圖が挫折したときに、北の野からする同一の計畫がそろ〳〵と頭を擡げた。それは彼がモスカウのクレムリンの御寺(みてら)に立つまでは消されなんだ。

* * * * * * * * *

珍らしくも墺太利は四年に亙つて隱忍を續けた。然しその國民が復讐の念を絕つたわけではなかつた。どうして彼等があの横柄で壓制な革命の私生兒を一日だつて忘れえよう。致命的な打擊のあとでの彼等の準備は慘憺たるものであつた。幸ひにして英國からいろ〳〵な物質上の援助が仰げた。遂々一八〇九年の始めから彼等は佛蘭西に對して公然と敵對行爲に出た。四月にはカール將軍の率ゆる三拾萬の大兵がイン河を越へた。之を聞いたナポレオンは卒如として西班牙を棄てた。そして諸地方からの兵を集めて又もや東に向つた。佛軍の總勢は二十六萬七千を算した。彼等は野の潮かとまがう勢で五月十日にウイーンまで推し寄せた。(ナポレオンはレゲンスブルグで踵(かしと)に裂傷を受けたが、それが彼の一生に一度の負傷であつた。)

敵の本陣は今やダニユーブ河の左岸にあつた。佛軍は難儀な架橋工事を施して之を渡つたが、彼岸の敵軍から飽くまで强硬な抵抗を受けようとは思ひ設けなんだ。佛軍が半ば渡るか渡らないうちに、右岸のアスペルン及びエスリンゲンの兩村では劇しい接近戰が始まつた。佛軍は數に於て非常に劣つてゐたが、然し彼等は歐洲きつての訓練された勇敢な兵士だつた。一日のうちに同一の陣地が敵味方から五六度も奪還され合つた。兩軍は疲れ切つて、申し合せたやうに數時間、休戰を餘儀なくされた。

ナポレオンは矢繼早やに使者を立て右岸に殘つてゐる味方の軍に渡橋を命じたが、その時既に橋は危うかつた。墺軍は橋の上流から重い石を積んだ舟や、水車や、水車小屋や、そのほか手當り次第の物を投じたので、橋は長くその重味に堪ふべくもなつた。次の日は午前二時から更により劇しい戰鬪が開始された。そして橋が斷絕したといふ報知とともに

に、墺軍は餘威を鼓して逆襲的態度にでた。戰はそれから更に十二時間も續いた。利は墺軍にあつた。佛軍は夜半にやつと小さな假橋を設けてロバウの中州へ退却した。

敵將カールもよく戰つた。ナポレオンもよく努めた。『陛下がどうしても御自身お退きにならないなら、私達は力づくで行きますぞ』から彼は士官たちから叱られたほどあせつて陣頭へ立ちたがつた。

最大の損失はランヌ元帥の戰死であつた。彼はナポレオンと與に伊太利遠征の初期から頭を擡げた名將だつた。そして皇帝とは殆んど友達づきあひで通ほした間柄であつた。流石のナポレオンも彼を失つたときは人前も憚らず大粒の涙を頬に傳はらした。

圖らずもロバウの小島には歐洲の各地から遣つて來た殆んど全部の佛軍が集まつた。遇ふ機會の稀れだつた戰友たちは互に顔を合せて久濶を述した。彼等は皆な千軍萬馬の武夫だつた。一人殘らずが澤山の手柄話を有してゐた。野營の火のまはりでは夜晩くまで話がはづんだ。西班牙歸りの聲の好い若い士官が、殊に人だかりのする火のそばで、センチメンタルな彼地の俚歌を得意氣に謡つたりした。彼等は新しい橋の出來るまで一ケ月餘もかうして待たねばならなんだ。

七月に這入つてから渡橋の命令が出た。その日は夕方からひどい荒れだつだ。風と雨とを冒して、各隊は次ぎ〳〵に橋を渡つて闇と嵐の中へ突入した。皇帝自身がその夜からかけて六十時間は不眠不休だつた。

これに次いで起つたのが有名なワグラムの戰であつた。そして又も佛軍の全勝に歸した。ヴェルサイユの宮殿に掲げられてある大幅のナポレオンの騎馬像は、この時の彼を寫したものである。彼は波斯の國王から送られた純白な駿馬に跨つて戰場を驅け廻つた。誰もこれほど白い馬は見たことがなかつた。彈丸雨注の中を物ともせぬ馬上の彼の勇姿は敵味方に仰がれた。

マグドナルドはこの日の英雄だつた。そして損失はラザル將軍の戰死であつた。彼は騎兵隊の驍將で且つ佛軍きつての色男であつた。短氣で金使ひが荒らかつた。埃及遠征中は、色女への手紙を英國の手であばかれたなどいふ挿話を有

してゐる。彼はワグラム戰の前夜皇帝へ手紙を書いて遺族のことを懇々と賴んだ。いかなる猛將にも悲しい豫兆と之に次ぐ心細さはあるのであらう。

ナポレオンはこの戰で多くの將校を失つた。ランヌの死以來彼は稍や神經的であつた。名ある者の戰死を聞くたびに彼はかう言つた、『我等はもうこれ以上泣く暇がない』と。エスリンゲンからワグラムまでの過度な努力のあとで、皇帝は暫らくわづらつた。

同年十月、シエーンブルンの講和條約が成立した。

六

一八一〇年と一八一一年との全（まる）二年間といふものは、ナポレオンは巴里にゐた。これは珍らしいことであつた。彼は今權勢の絶頂に立つてゐた。事實に於て彼は歐洲の大帝であつた。チエイエリイ宮殿には日々の如く各國からの使臣が參候して、彼の御機嫌を伺ふのであつた。然しそれは彼自らにとつては退屈な時であつたらうと思ふ。『余は創業には趣味を有するが、守成は好まない』と彼は言つた。私（著者）の眼にはその二年間に於けるナポレオンの姿が、いかにも手持無沙汰で困つてゐる滑稽なカリカチユアとして映つる。

彼は――些くとも彼の「天才」は――權勢それ自らに滿足のできる人間ではなかつた。彼は活動せねばならなんだ。彼自ら言つてゐる通り、彼にとつては『生きることは即ち苦しむこと』であつた。『余は權力を愛する、然し一個の藝術家として之を愛する、丁度音樂者がヴヰオリンを愛するやうに』とも彼は言つた。權勢は彼の終局目的ではなくて、彼の生みつけられた行爲欲を達するための道具に過ぎなんだ。

從て私の筆もまた暫く彼の私的生活に低徊せねばならぬ。

ナポレオンはジョセフィーヌと結婚してから二日目に伊太利遠征の旅に上つた。前にも言つたとほりこれは彼の出世の門出であつた。故島コルシカの獨立に對する絶望、佛蘭西革命に對するルツソオ的理想の幻滅は、感傷的な青年のナポ

レオンを殺して、彼が本來の面目たる冷靜な透明な活動家に再生せしめた。然しやさしき異性に對する彼の情熱はまだ充分に試みられる機會がなかつた。從てその方面に就ては彼は猶ほ純な尋常の青年であつた。その時彼はジョセフィーヌを得た。

彼女は當時三十二才で、女の盛りだつた。姿態のすらりとした、黒味勝ちの眼と有り餘る褐色の頭髮とを有つた美人であつた。彼女の優雅な仕草と表情には云はれぬ魅力があつた。彼女には少しも智的に冴へたところはなかつたが、微かに苦味を帶びたその顏色はエキゾチックで、肉情的に人を牽きつける力を有してゐた。一體が氣弱で、しだらなく、懶さうな女だつた。彼女の口から出る最初の言葉はいつも『いゝえ』であつた——彼女は本能的に受け身で、そして物を否定した。

それでゐて彼女は生れつき妖婉の技巧を解してゐた。ナポレオンのやうなきび〳〵した性格の男は、えてかうした女の捕虜になり易いものだ。彼等はお互に智的異様だつた。

伊太利征旅中のナポレオンのポケットにはいつもジョセフィーヌの寫眞と手紙が潜んでゐた。彼は毎日のやうに巴里に殘した新妻に宛てゝ長い手紙を書いた。

『私のたつた一人のジョセフィーヌよ、お前から離れてゐる私には何の慰みもない。お前の側にゐないとこの世界は孤獨の曠野だ。お前は私から魂以上のものを奪つた。お前は私の生命を支配するたつた一つの思想だ。自分の職業に厭氣がさした時、目的の不安定の時、他人と不和な時、自分の命の呪はしい時、私はいつも胸に秘めたお前の寫眞を取出して眺める。その時愛は私にとつてこの上なき幸福だ。凡ての物が歡びに笑ふ……』

然るに怠惰で輕薄で移り氣なジョセフィーヌは巴里の歡樂の眩るしさに氣をとられて、異郷にゐる夫の事はとかくに忘れ勝ちであつた。それが一層ナポレオンの情熱を燃え立たせた。『ジョセフィーヌ、なぜお前はさう手紙を呉れないのか。お前は二十八日前に一本の冷淡な手紙を寄越したきりだ。あの手紙では私は失望したが、然し今でもちやんとポケットに入れてある。私はいつもお前の寫眞と手紙とを眺めてゐる』と彼は書いた。『私がこれほど頻々と手紙を出すのにお前は

少しも返事をくれない。お前は悪黨で恩知らずだ、全く恩知らずの考無しだ』とも書いた。またかうも書いた、『お前の手紙は五十の老人が書いた物のやうに冷淡だ。俺たちは十五年も前に結婚したやうだ。誰が見てもその中には人生の冬枯れの友情と愛情があるだけだ。おい！ ジョセフィーヌ！ お前は全く悪黨だ、不親切者だ、恩知らずだ……お前の愛は早や去つたのか、宜しい、それで宜しい！。お前は私を嫌つてゐるのか、よし、それは私の欲するところだ！……百たび千たび接吻してこの手紙を終る』。

然らば彼の全　は戀の捕虜であつたかといふに、仲々さうでない。彼は忙しく愉快な征旅の閑暇々々だけを戀に利用した。彼の心は戀に對しても矢張『特殊の抽出し』を有してゐた。結婚後たつた二日間同棲した間にも、彼は一室に閉籠つて地圖と首引をしてゐた。ジョセフィースが部屋の外から呼出すと、『戀は凱旋の後だ』といつて取合はなんだ。彼の矛盾らしい性格はこゝにも現はれてゐる

時は熱を消し思ひを流す。彼がジョセフィーヌに對する忌々しい風聞を途中で受取りながら埃及から歸つたときは、戀に對して最早別人だつた。彼はコルシカや革命に幻滅したやうに戀にも幻滅した。彼はかの「種族」を知つたのだ。後に彼はセント・ヘレナで次のやうな述懐を洩した。『ベルチエはいつも戀々してゐるが、自分の心は夙くに硬まつて了つた。自分は思ひきり戀をしたことがない。尤もジョセフィーヌには少しばかり惚れたが、それも廿七歳といふ年頃だつたので』と。彼の戀はちやうど雪崩のやうで、激発したあとはから〳〵に乾いた。

戀の天秤はいつも不平均だ。ナポレオンの方で冷めるほどジョセフィーヌは愛着した。尠くともその後の彼女は消極的には良妻の資格を有してゐた。マルメーゾンの空氣は彼女によつて温められた。氣むづかしやのナポレオンを取りなす爲めには彼女は是非とも必要な役者だつた。彼が皇帝となるまでの間は、彼等は善良な中産者のやうに睦じく同じ部屋で寢た。

彼女は夫の仕事に對してさし出がましい行を愼んだ。然し彼の愛を牽き、同時に自分の虚榮を滿足されるためには随分馬鹿々々しい贅澤をした。派出好きで、意志が弱くて、おだてに乘り易い彼女は、お出入りの寶石商や呉服屋の持込

お眠ざむるやうな飾物や衣裳に抵抗する力を失くして了つた。彼女のこの癖は殆んど病的にまで及んで、物の値段などかまつてゐられなんだ。で、彼女が持つてゐた帽子の數だけでも想像のつかないほどで、その爲めに季節々々に支拂ふ代がまたたいしたものであつた。であるから、彼女はいつも請求書の心配ばかりしてゐた。然しナポレオンは惡い顔もせずにそれを拂つてやつた。尤もジヨセフィーヌの買物は普通の値段の七倍からに當つてゐることを彼は能く知つてゐるので、仕拂はいつも半額位にとゞめた。それでも商人はいゝ儲けをした。

こんなたはいのない缺點はあつたにしても、とにかく彼女はナポレオンには好い配偶者だつた――さうだ、若し子供さへ産めたら。彼女は斷えずこの事を思ひ思つた。年月のたつほどそれが彼女には人知れぬ重い苦痛になつた。口には出さないがナポレオンもその事で思ひ惱んでゐるのが彼女にはあり〳〵と讀めた。迷信な彼女はありとある方法を講じてみたが效き目がなかつた。或る場合は絶望の餘り、世間へ懷妊を装つてそつと貰兒をしたらなどと考へ、ナポレオンの氣を引いて見たりした。離別の豫覺が長い間彼女を苦めた。

とう〳〵その時が來た。愈々自分が皇帝となつて、ボナパルト家が佛蘭西世襲の統治者たる權利を得てみると、ナポレオンが肉身の子を欲しがるのに無理はなかつた。人は誰もが自己の繼續をその子孫に求めるのは生の意志である。彼は充分に思ひあぐんだ揚句、遂に離別を決行することに心を固めた。之に對する理想家の閑是非はとにかくにして、之に對するその前後に彼のとつた態度は全く立派で男らしかつた。一市民として觀たとき缺點だらけの彼もこの場合ばかりはgrand seigneurの名に値した。

彼は一日ユージェーヌ（ジヨセフィースの連子）をその母の所へ使に立てゝ、決心の由を事細かに説明させた。次いで皇族、大官等の集まつた席上で、正式に離婚の事が發表された。（國家の公事として已むを得ないといふ理由で）ジヨセフィーヌは立派にその文書に署名した。その時皇帝は極めて眞面目な態度で、彼等が十五個年間の共同生活に於て彼女の與へた幸福に就て熱い感謝を表した。そしてほろ〳〵と落涙した。それは一八〇九年の十二月十五日であつた。

次の日皇帝は急に思ひ立つて、殆んど供奉の者も連れずにトリアノンの離宮へ行つた。その時彼は珍らしくもまる三

日間全く政務も謁見も廢したと謂はれてゐる。

ジョセフィーヌの爲めには澤山の支給が決せられた。思出の多いマルメーゾンの離宮をも彼女は貰つた。二人は温かい友人として一生を終つた――エルバ島から脱れ歸つたナポレオンが彼女の墓の前に立つまで。

この離婚問題は佛蘭西のみならず全歐洲の注目を惹いた。つまり後繼者の撰擇が世人の好奇心以上、恐怖心をも喚るに充分であつたからである。ナポレオンは眞つ先に露西亞の皇妹に眼を着けた。ところがアレキサンダアはその撰擇を光榮と思ふ由を至て慇懃に申述べたけれども、皇妹のまだ弱年であることを口實として婚儀の延期を懇請した。

そこで性急なナポレオンは墺太利の宮室へ手を出した。そして皇女マリイ・ルイゼとの間に婚約が成り立つた。(ハプスブルゲル家にとつてそれがどれだけの屈辱であつたかは想像ができる)。ルイゼはその時十八歳であつた。

一八一〇年三月、ベルチェ元帥が特使に立つてウイーンに行つた。で、壯麗な儀式の後でルイゼは彼の手に渡されて巴里へ出發した。三百人の侍臣と女官が彼女に隨つた。國境のブラウノーでは矢張巴里からの多數の宮臣が彼女を迎えるのであつた。新皇后への皇帝からの贈物は美術の粹を集めたもので、その中には九十萬フランからする高價な首飾などがあつた。

巴里への沿道には各驛に驛馬が用意されて、光榮ある花嫁の馬車はしづ〳〵と西を指した。毎日の宿泊地には彼女に宛てた皇帝の手紙がとゞいてゐた。三月廿九日が定められた最後の旅程であつた。その晩彼女はコンピエーニュの城へ着き、翌朝ベルチェの手から公式に皇帝へ渡される手筈になつてゐた。ところが、その日皇帝はムラア一人を供につれて例の灰色の服のまゝでだしぬけに城を飛び出し、途中で皇后の馬車を待つてその中へ躍り込んだ。翌朝彼は花嫁の部屋で一緒に食事をとつた。この時は殊にウイーンの交際社會を震動させた。

婚儀はサンクルウ宮殿で取り行はれ、大袈裟な披露式がルーブルでなされた。その式に列した人の數は八千人に上つたと謂はれてゐる。

その後墺太利大使の催した祝賀會では一大珍事が起つた。その時そのホテルの部屋々々を開いて假舞踏室を造つたが不注意にもカンバスの幕を引いてその附近に盛んに蠟燭を點もしたので、ちよつとした事から火がカンバスに燃え移り、遂に一大事に到つた。そして多くの死傷者を出したが、輕い裾に火を呼んで燒け死んだり、火達磨となつて庭へ轉げ出したりした貴婦人たちの姿はみじめであつた。皇帝は人手も借りずに素早く皇后を腕へ抱へて逃げた。或る將軍は漸く自分の夫人をめつけて人込みの中を助け出さうとすると、長い手がぬつと出て、夫人の髮から高價な櫛を拔きとつた。

ナポレオン自ら言つてゐる通り、ジョセフィーヌは技巧に富んだ優美な女であつたが、ルイゼは無邪氣で單純な性質の女であつた。彼女はナポレオンの死後間もなく墺太利のナイプベルグ男爵と結婚した。

皇后となつた翌年、ルイゼは皇帝の希望通り皇子を擧げた。非常な難產だつたが幸ひ母子ともに助かつた。皇帝は喜びの餘り我を忘れて（こんな事は一生に一度だつた）、産れたばかりの赤兒を腕にかゝえながら、心配さうに次の部屋に控へてゐた多くの臣下に見せた、『これが羅馬王だ』。（皇子は古式に從つて直ちに羅馬王といふ稱號を與へられたのだ。

皇子の誕生と同時に祝砲が打たれた。その第一發とともに巴里全市は緊張し、そして耳を聳てた。市民は息を殺して大砲の音を數へた。なぜなら、それが廿一發の時は皇女で、廿二發の時は皇子だといふ布告があつたからである。その時砲手はもたせ振りをして廿二發目をうつ前に數秒のあひを置いたと謂ふことだ。祝砲が終ると同時に、全市からはどつと物凄いほどの歡聲が一度に破れた。それは佛蘭西帝國の永久を保證する皇儲ナポレオン二世を得た「大國民」の心からの叫びであつた。

戰捷國たる當時の巴里は表面、歡樂と饗宴との街であつた。それが十萬無辜の同胞の血を流してえた悲慘な光榮だといふことをば國民は強いて忘れてゐた。なぜなら、一時にせよ『彼等の第六感たる虛榮』は充分に滿足させれたのだから。その間に立つて景仰の中心であつたナポレオンは、愛兒羅馬王に悉く愛着して、餘事は忘れたかの如くであつた

が、彼の深い眼は人知れず凝つと東の方を視つめてゐた。

* * * * * * * *

ナポレオンの女に對する態度は全く獨特だつた。彼の無愛想は歐洲各國の宮廷で通り物になつてゐた。或る貴婦人は、『造物主はナポレオンを造る時にハートを與へることを忘れたのでせう』と下手な洒落を言つた。また或る貴婦人は彼の粗つぽい調子を廻りくどく評して『野蠻なる慇懃』だと言つた。私に言はせれば、それは野蠻なる冷酷といふのが至當だ。スタエル夫人から、貴下の最も貴ぶ女はと訊かれたとき、彼はそつぽを向きながら恁う答へた『一番多く子を産む女です』その時の彼の態度はからかひ半分であつたに違ひないが、然しそれが彼の眞情だつた。殊に彼は智的で饒舌の女をば好まなんだ。それが一生スタエル夫人とそりの合はなんだ原因である。彼女が『獨逸より』といふ本を出版したときは、全く無慈悲に之を禁止した。侍臣の話によれば彼はその書を取つて火の中へ投じたといふことである。剰さへ彼女は一週間内に故國をば棄てねばならなんだ。

佛蘭西革命は婦人の開放運動をも惹き起したが、ナポレオンの代になつてそれも鎭壓された。『婦人は舌で働くよりも針で働け、殊に彼等の政治に關係することは大禁物だ』と彼は言つた。彼の好むところは東洋流またはコルシカ流に、婦人を男子の絶對隷屬たらしめることであつた。セントヘレナでの彼の談話は女に關し往々非道徳な口吻を雜へ、一夫多妻や蓄妾を奬めるらしいことまで述べた。エマーソンが彼を「紳士」でないと評したのはこの點である。

彼の自白によれば、彼は一生中に七人の情婦を持つたさうだ。こんな一挿話がある。有名な化學者のシャプタールは暫く彼の外務大臣を務めてゐたが、或る夜二人が晩くまで執務してゐるところへ侍臣がやつて來て、B孃の訪問を告げた。B孃とは當時フランス座で有名な女優であつた。するとナポレオンはシャプタールに聞えよがしに、孃を自分の寢室で待たして置くやうにと命じた。それが相手の大臣にとつて大きな侮辱であつたといふのは、シャプタールとこの女優とは巴里全市が知つてゐるほどの親しい仲であつたからである。そこでシャプタールは即座に立つて、書類を片付けて、そして出て行つた。その夜彼は辭職願を出した。そしてその後十二年間といふものはナポレオンの處へ寄りつか

なんだ。

然し、前にも言つた通り、ナポレオンはどんなに情熱に驅られたときでも、自分の上に女の勢力を受けることを肯ぜなんだ。彼は女の爲めに一度でも政治的罪惡に陷つたことがなかつた。昔から君主の側に差し出口をする女のゐるのはダビッド王以來の通則であるが、彼は稀な例外の一人である。『余の宮廷では女の勢力を認めてはならぬ。彼等はその爲めに余を嫌ふに違ひない。然しこちらから言へば平和と靜肅が大切だ』と彼は言つた。

金錢に對する彼の態度もまた獨特だつた。彼は政財家としても有數な技能を有してゐたが、然し彼ぐらひ金錢(かね)に無頓着で湯水のやうに使ひ散らした者はなかつた。それでゐてその爲めに他人に乘せられたり、甘く見られることをば酷く嫌つてゐた。況して金持ちに頭を押へられるやうなことは金輪際彼の耐ゆるところでなかつた。

彼は隨分人の不信な行動を大眼に見る方だつた。タレーランでも、フッシェでも、ベルナドツトでも、さりして使つて行く方が彼には便利だつた。ジ・セフィーヌの不貞でさへ彼は見逃した。彼自身が抑も不信の行を平氣で行るただつたから。然し金錢問題にかけては、彼は神經質なほど嚴格だつた。であるから、銀行家や軍隊の御用商人からは、彼ば極度に怖(こは)がられてゐた。大相場師のオーブラアは彼の爲めに二度破產させられた。何によらず不正な利を攫んだなど睨んだ者があると、彼は有無を言はせずその者の上に思ひ切つた重税を課した。

彼は藝術に就ては到て素人だつた。彼は芝居や音樂が好きで、よく音樂に關する嘆稱の辭(ことば)などを吐いてゐるが、彼の解しえたのはほんの單純な端唄ぐらひのもので、ロシニが關の山だつた。外に藝術で彼の愛したのは、自分の軍隊式に、秩序、壯大、均整の勝つた物でなければならなんだ。それ故彼の趣好は建築や裝飾に傾いてゐた。彼は埃及のピラミッドに傾倒した。彼の立てた凱旋門がその結果だ。繪畫は殊に彼には分らなんだ。彼はいつもルーブルを足早に素通りした。文學では『オシアン』が好きで、修辭の壯麗なもの程お氣に召した。

彼は『ウェルテルの悲み』を七度も繰返して讀んだと謂はれてゐる。それも怪むほどのことはない。藝術は多くの場合その人の缺いてゐる性格に對する憧憬を表示する。されば肉のトルストイは靈に走り、謹直なニーチェは力の超人を持ち上げることになる。倦怠な生活にゐる者が藝術の中に活動を求めると同じ心理で、ナポレオンは『ウェルテル』や『ポールとベルジニイ』を見て慰むのだ。

宗教と僧侶とは、女や金錢と同様に、ナポレオンの上に些の力を持たなんだ。自力の信仰が彼を鍛へ上げた。神秘の霧に包まれるには彼は餘りに『透明』で、『冷やかな計算』の人であつた。それに彼は人間といふものに就て、低級な評價を有してゐた。(餘の人間が彼の眼には愚劣に見えすぎたせいもあらう)。彼によれば、人間は徹頭徹尾土の器だ。牛もさうだ。人間は牛の少し氣の利いた奴だ。恐らく未來には人間より優つた奴が出來やう。『赤兒や狂人に魂があるか?。魂は身體より後から出來るのだ。それは小兒の時に成長して老人になると枯れるのだ。……だが、神の思想は簡單でいゝなあ。誰が發明し居つたか知らんが』。その簡單で巧まい神の思想を――『宗教といふ道具』を――彼は巧みに利用する方法を知つてゐた。『宗教は人類に有用だ、爲政者は民衆を統御する方便として宜しく之を利用すべしだ』と彼は公言してゐた。で、彼は埃及では回教徒となり、佛蘭西ではカトリック教徒となり、羅馬法王をたらかす時には羅馬教徒となり濟した。彼は基督の存在をさへ疑つてゐた。事實そんな男があつたにしても一個の狂信者だつたらうぐらひに思つてゐた。彼はモハメッドに多少の興味を有してゐたが、然しそれは劍の力に依て大業を成就したといふ點で、その戰鬪的信條が氣に入つたのだ。

神を利用したやうに、彼は「運命」をも利用した。彼がよく軍隊などへ出した長たらしい布告文には、きまつて運命の幸ちを說いたものだが、それも兵卒たちの迷信に訴へる手段に過ぎなんだ。彼は幼ない頃からコルシカの漁夫などを見てゐるから、その呼吸は手に入つたものだつた。

たつた一つ彼の信じたものがある。それは自己の運命だつた。その點では彼は恐ろしく宿命論者だつた。晩年には一

個の狂信者(ファナチック)にまで進んだ。伊太利及埃及の兩度の遠征から歸つた後のナポレオンは、自分が『運命の主人』であるといふことを確く信じて疑はなんだ。彼は口癖のやうに、『余を斃す彈丸(たま)はまだ發明されぬ』と言つてゐた。

或晩、なんかの機會に、彼は大僧正のフェッシュとチュイエリイ宮殿で『運命』のことについて話し合つた。その時彼は僧正を伴つて一番高い窓の傍に寄つた。

『あなたにはあそこにある星が見えますか』

恁う言つて彼は天の一方を指さした。僧正は覗入り覗入つたが彼には一つの星も見えなんだ。で、『いゝえ』と答へた。

『さうですか、自分には見えるが』

と言つて、ナポレオンは窓を離れた。

彼は老僧正をからかつたのか、それとも實際自分にだけは運星(ほし)が見えると信じてゐたのか。

濟度のできない物質主義者だと言ふ者は言へ、大きな冒瀆者だと思ふ者は思へ、とにかく彼の自信と率直と大膽とは買つてやらねばならぬ。彼は彼自らが如何なる人間であるかを知つてゐた。彼は下手な野心家のやうに口實を作らなんだ。生一本な彼の偉きな功名心は健全でそして透明であつた。彼は自己以外のものには寸分も頼(たよ)らないだけの强味を有してゐた。彼は爪の先きまで雜りけのない「男性」であつた。

七

運命の神――俺は餘り寛大すぎた。人間といふ生き物に對して俺がこれほど寛大な處置をとつたことは初めてだ。不覺にも俺は知らぬまにこの男に魅せられてゐたのだ。俺の同情が過ぎたために、今では相手から輕蔑されてゐる形だ。

ナポレオン――俺は「運命の主人」だ。俺の權力と俺の自由には誰にだつて指一本差させるものでない。俺の大帝國は俺が自分の爲めに自力で造つたものだ。俺は飽くまでそれを擴げねばならぬ。俺を妨げる奴は片端から力づくで

沈默させろ！　彼奴等のもつ唯一の權利は沈默よりほかにない……

運命の神――恐ろしい男だ。然し增長しすぎてゐるやうだ。かうまでこの男を增長させたのは全く俺が惡いのだ。何とかせずばなるまい。だが手硬い男だ。

ナポレオン――俺の仕事はまだ終らない。俺は自分でも知らない大きな目的に向つて進んでゐるやうに思ふ。その目的の達せられないうちはどんな力でも俺を斃せるものでない。俺の運星はまだ輝いてゐる。

運命の神――いよ〳〵增長しきつてゐる。今まではこの男のするがまゝに任せて置いたが、今度は俺の番だぞ。先づ悟られぬやうに近づいてあの王冠から奪はう……

（黑裝束の男そつとナポレオンに近づく。ナポレオンその足音に聞き耳を立てゝ急にぞつとする。然し一秒後には彼は何事もなかつたやうに、その夢見るやうな眼を再び東方の空に向ける。）

かうした場面が私の眼の前に浮ぶ。それは以前から繰返し〳〵現はれて、今では私の眼の底にこびりついてゐるかの如く常習的になつた。で、或場合はそれが果して私自身の勝手な發見であるか、それとも事實ナポレオンの見た幻想であるかを判斷することのできないほど、この印象は私には深いものである。

ナポレオンの後半生は大きな運命のドラマであつた。

『昇り坂では踏止まることは容易だが、降り坂ではそれが困難だ』と彼自ら言つた。然うだ。

一八一二年露西亞遠征の始まつた當時、ナポレオンは四十三歲であつた。

彼がどんなに異常な天才であつたにしても、要するに一個の人間であるからには、多年に渡るあれだけの活動と苦心とが、その身心の上に何等かの影響を及ぼさない筈はない。歲は肉體といふ素焼の瓶の上に捺される致命的な刻印だ。果して彼のからだにもゆるみが來た。彼の髮の毛は次第に薄くなり、その險はしい容貌には生氣が著しく衰へた。骨節が追々硬ばつて、とき〴〵倦怠を催すやうになつた。あのきび〳〵した態度さへ追々少なくなつて、ともすれば

んやりと夢見るやうなことがあつた。埃及からの歸路に最先に小舟から陸へ飛び移つた活潑で敏捷で快濶な痩せぎすの將軍を知てゐる者の目から見れば、チュイエリィ宮殿での沈靜な横肥りのした皇帝は全く別人だつた。彼は歳とともに肉慾的になり、そして不決斷になつた。

私はとき〴〵こんな事を考へる、人間の肉が精神を支配する力は大きなものだと。大體論から言へば、人間が未來を持ちそして眞の仕事のできるのは痩せてゐるうちだ。人間は惡く肥つて來るほど不決斷になり、肉的になり、そして自己的になり易い。肥滿に墮落の象徴だ。勿論その人の才までがそれにつれて變化するわけはないので、肥えたとて思想家は思想家、活動家は飽くまで活動家で行けやうが、彼を特色づける根本の色合が變つてくる。思想家は粗暴になり皮肉的になり、活動家は殘虐になり利我的になる。(肥つた思想家も異なものだが、肥つた活動家は第一不便で億劫だらう。)

私はでぶ〴〵と横肥りのしたナポレオンを考へると、非常に醜いといふ感じを起す。あの緊張した顏の皮がゆるんで、あの深い眼の尻に小皺が寄り、あのひき締つた口元がどことなく弛るんだ相を私は想像したくない。然し事實は致方がない。超人的な多年の努力、それに次いだ一兩年の安泰(寧ろ無聊)自分の想像した大帝國の繼續を保證する可愛い皇子の出生――それ等の爲めに彼は氣が弛み、そしてどつと歳を老つた。

彼の純なイゴイズムが濁り出した。透明な大我へ汚賤な小我の影がさした。彼は偉きな「自己」の繼續を想ひ、その爲めにはジョセフィーヌを離別してまでも皇子を得ようとした。それまでは自然でそして無理のないことだ。なぜならそれは藝術家が自己の製作の永遠を希ふのと同じ慾求であるから。然し、その願が滿足されて可愛い羅馬王が出來てみると、人間の弱味にはそこにさもしい愛着が起り、之に伴ふ心配も生ずるといふわけで、一歩々々彼は小利我の淵にのめつた。

その頃彼は西班牙王ヨセフの小さな根性を罵つてから言つた。『俺を見よ。俺はサンクリウやチュイエリイを何とも思つてゐない。そんな物は燒けて了つても一向俺は構はない。俺には家や女の事は少しも念頭にない。唯だ我兒のことだけは少しばかり氣懸りだが……』と。然しここで確かに彼は嘘を言つてゐる。些くとも自己を欺いてゐる。なぜなら、露西亞遠征の途中からわざ〳〵皇后へ使者を立てゝ、羅馬王に齒が生へたかどうかを問ひ合せたり、肝心な軍議の最中に

皇子の寫眞を受取つて夢中になり、居並ぶ將軍どもを驚かしたりした者が、「少しばかり」の子煩惱だと謂はれようか。彼は或る場合は、『佛蘭西に次ぎて余の最も熱愛するのは我兒羅馬王だ』といつたが、これも嘘だ。彼は佛蘭西を愛してはゐなんだ。彼の愛してゐたのは佛蘭西國民を踏臺にして立てた自己の權力だつた。その權力を自己と共に永久に生かしたい爲めに彼は肉身の繼承者を望んだ。さてその繼承者が出來て見ると、今度はあべこべに可愛い皇子の爲めに是非ともその權力を維持する必要を感じた。次ぎてはサンクルウやチュイエリイも來てがたいものになり、思ひ餘つてはあのいたいけな幼な兒の肩の上に帝王といふ煩はしい重荷を負はせねばならぬ慘しさを考へることもあつた。かうして彼は位地權勢の捕虜と成り下つた。

彼はますます氣むづかしくなり、沈鬱になり、短氣になつた。唯一の緩和者であつたジョセフィーヌの無き後は、チュイエリイ宮殿の空氣は全く溫味のない牢獄と化した。彼は時々熱病やみのやうにそはそはしてゐた。或人の說によると、その頃の彼には癲癇の徵候があつたといひ、また或人の說によると、何とも分らない病氣が內臟に潛んでゐて、その爲めに彼の判斷力までを鈍らしたのだともいふ。彼が早くから糖尿病を持つてゐたのは事實だ。ワグラムの戰が濟むと直ぐ彼はジェーンブルンで患つた。それから露西亞遠征の際はボロヂノで數日間病床に就いた。剩さへ、彼はその頃から泣く癖がついた。ランヌ元帥を死なしたときでも、ジョセフィーヌに別れるときでも、彼は人に泣顏を見せた。それはよし至情であらうとも、ナポレオンともいはれる者が人前も憚らず泣くといふのは少し變だ。彼は元來泣くべくできた人間でないのだ。

一方、彼は順境に馴れ、好運に習慣附けられて、漸く自惚れに陷つた。人が彼を恐れるほど、彼には周圍の人間が馬鹿に見えた。遂に彼は自分を一種の半神――超人――と信ずるやうになつた。彼の大臣の一人が彼をかう評してゐる。「ナポレオンは彼の到達した高い位置から瞰下して、餘の人間を彼等の眞價以下に考へた、これが抑も彼の沒落の原因だ」と。それに彼の慢心と、壯大を好む趣味と、生理的原因とは、漸く彼の推理的能力を支配して、事毎に彼の明快な判斷を曇らせ、頑固に自ら欺く習慣を付けさせた。彼は無謀にも人間に定められた運命の限界を跳躍しようと企てた。

これで、てもなく「ネメシス」の神の張つた網に懸つたのである。

ナポレオンの將帥の幾人かは、引續き西班牙と墺太利とで失くなつた。が、猶ほ彼は頼むに足ると信じた良將の多數を有してゐた。然し彼等の凡ては彼と一緒に頭角を擡げて來た同年輩の連中で、その頃皆な五十近い歳格好をしてゐた。彼等の功名心は漸く衰へた。ナポレオンはこれ等の連中に酬ゆるに負ひ切れないほどの財寶を以てした。彼等はみな巴里に立派な邸宅を構え、その妻女たちは豪奢な生活に馴れ染んだ。ワグラム戰の以前にさへ皇帝を顰蹙させた彼等の驕慢は、これに次いだ泰平の二年間に一層彼等の骨を惰らせた。で、巴里のサロンの生温かい空氣を覺えた彼等の皮膚には露西亞の冬の荒い風に耐えることとであつた。彼等の衰へた功名心の一部は私鬪心と變り、同僚間の爭をさへ惹き起した。こうして士氣が銷磨して行つた。

或時彼は傲然として言つた、「余には拾萬人の收入がある」と。いかにもそれに相違なかつたが、然し收入の單位が年と共に異つて來た。兵卒の素質が段々と下つた。狩り盡されたあとの佛蘭西が飽くなき皇帝の野望を無理やりに滿足させる爲めには、可憐な少年や囚人の如く縛がれた忌避者をさへ送らなければならなんだ。加之に多くの雜多な異民族がその中に加へられた。そして彼等は目的の分らない雪の野へ餓ゆる爲めに導かれた。

これが露西亞遠征の際のナポレオンの軍隊であつた。彼と彼の人々とは一歩々々奈落の底へ落ちた。

ナポレオンを論じた多くの史家は、皆が皆言ひ合はしたやうに當時の半島戰爭と露西亞遠征との無謀を嘲り、彼の判斷力の衰兆を憐んでゐる。で、彼等の說によれば、この時彼が正當に履むべき道は、英吉利と和し、西班牙を引き上げ、露帝に從來の儘の敬意を表し、彼自らは大佛蘭西の皇帝として分を守るの策に出ることとであつた。いかにもと頷かれる。理は確かにさうである。然しナポレオンはこれまでも常識の理法によつて動いて來た男ではなかつた。彼には理外の理があつた。彼の天才は常識を無視した。彼は自分でも分らない偉きな力に左右されて、已むに已まれぬ奇道を踏ん

で來た。それを彼はどうすることもできなんだ。彼の「使命」はずんずん彼を驅つた——丁度彼の用ゐた六頭索きの馬車のやうな速さで——初めは埃及の熱地へ、最後は露西亞の野へ——ぐるぐるぐるぐる、眼まぐるしく、眩ぶしく、神馬のやうに、幽車のやうに、砂を卷き、雪を蹴りつゝ。何處まで行つてもその道は遼遠で果てしがなかつた。體力は衰へても、判斷力は鈍つても、彼のこの不退轉な目的だけは變りがなかつた。然かも彼の身心が衰兆を來たすほど、その目的は妄想的に見え出した。この意味から言へば、彼の晩年は「使命」（天才）と「運命」（人間）との相鬩ぐ悲劇であつたのだ。

ナポレオン自身がその事を朧氣ながら自覺してゐた。一八一三年に彼はかう言つた、『余は自分にも分らない到着點に向つて驀進してゐるやうに思ふ、やがて其到着點に達し、最早無用の者となつた時、余は恐らくたわいなく投げ出されるだらう』と。然し、その目的地まで行きつかないうちに、彼の身邊は既に危險の迫つてゐたことを彼は氣附かずにゐた。

* * * * * * * * *

ナポレオンが墺太利の皇女を娶つて以來、露西亞の彼に對する態度は次第に破兆を呈した。それは英國に對する彼の大陸封鎖令に不贊成を稱へ出したことが第一で、一八一二年には佛蘭西の軍隊をプルシアから撤退させることを要求して來た。然しエルフルトの會見以來アレキサンダアを信じきつてゐた彼は、何としてでも妥協の道の附かないことはないと考へた。で、彼は當時巴里に駐在してゐた露帝の副官チェルニチェフ大佐を使として、懇ろな信書を持たして歸した。チェルニチェフは篤く禮を述べて出立した。然し彼の立つた二日後に、彼が當局の官吏を買收して詳しく佛軍の實情を探索してゐたことが分つた。ナポレオンは慌はてゝ彼の跡を追はせたが既う間に合はなんだ。

同年三月九日、皇帝は奮然として巴里を出發した。ドレスデンまでは皇后を伴つた。五月には大露西亞劇の序幕として、同地で諸王侯の會見が行はれた。それは後にも先にも見ることのできない大袈裟なもので、ナポレオンとルイゼとを中心として、歐洲の大小王侯を悉く網羅した觀があつた。墺太利の皇帝と皇后とは連れ立つて、其娘と婿とを訪らう

ためにやつて來た。プルシア王も參加した。サクソニイ王、ウェストファリア王、其ほか多數小國の領主が殆ど頭をそろへた。セギュール伯爵の有名な頓智はこの折のことであつた。或る會合に彼が少時間遲れて出席すると、皇帝から恐い眼で睨まれた。其時彼の辯解はからであつた、『陛下、どうぞ私の遲刻を御許し下さい、いやどうも控室には諸王がうよ〳〵と群がつてゐて――ついその爲めに途を停められたので』。

この華かな序幕とともに、しづ〳〵と東に向つた雄大なgrande arméeは總勢六拾二萬を算した。そのうち佛蘭西兵が三拾七萬で、他は一ダースからの雜多な國民から成つた聯合軍であつた。先にも言つたやうに、ナポレオンには國民性の觀念がなかつた。

この悲壯な大露西亞劇の顚末は事新しく述べる必要のないほど著明な事實であるが、然らばナポレオンが蹉跌の原因は何處にあつたかといふに、それには幾つかの由緣を數へることができる。

第一は先に言つたやうな彼自らの身體及び理性の衰弱である、慢心と利己とから來た彼の天才の墮落である。これが一番に大きな主因に違ひない。『性格は運命だ』と詩人ノワリスの言つたのは眞理だ。私のこの稿の目的は、さうした意味で、ナポレオンの人格の變化に伴つた彼の運命の變化を研究しようとしたものだ。

第二の原因としては、之も先に言つたやうに彼の將帥たちの元氣の消耗といふこと、兵士の素質の低下といふこと、その軍隊が形容ばかりは立派であつても不統一な雜多な國民から成立つてゐたといふことなどを擧げることができる。

一體に征露の軍隊は初めから調子が變つてゐた。皇帝からがさうであつた。彼の動作は何となく重々しく、夢想者のやうであつた。彼は幾たびか逡巡した(彼はこの征戰中ウィルナでもスモーレンスクでも空しき時日を費して、ます〳〵困難な位置に自分の軍隊を陷れた)。昔から彼の性格動行に馴れてゐた將帥たちの眼には彼が別人のやうに見え出した。然し變つたのは彼ばかりではなかつた。彼等も共に老いた。アウステルリッツの役にナポレオンはオルダナア將軍を評して、『彼奴は耄碌したのだ、我等が戰ひうるのは短い年月に過ぎない、余自身にしても後五六年續けば關の山だ』と言

つたが、實際それから既に七年を過ぎてゐた。彼にも彼の將軍たちにも彼等の「時」が來たのだ。彼はボロヂノの戰では殊に疲れを見せた。

されば露西亞遠征の際に於ける「大軍隊」の破滅は風土と氣候の爲(せい)のみではなかつた。それはモスコウ入りの前から既に充分醸してゐたのだ。ニヱメン河を渡つた抑々から軍規が亂れてゐた。一七九六年に伊太利の野で日の輝くボルチノ河に沿つて進んだ軍隊の面影は既う見ることができなんだ。命令は最初から誤傳された。將軍たちは互に妬み爭つた。ベルチェとダヴウ、ダヴウとミュラーといふ風に、司令官たちの間に斷間なき不和があつて、それが少なからぬ障害となつた。殊にミュラーの無謀で放肆な擧動が皇帝をてこずらした。偶ま戰勝が敵を追擊する好機會を與へたときでも、皇帝から始めて之に乘ずるだけの元氣がなかつた。講和がいつも彼等の念頭にあつた。彼等は眞の戰を欲しなんだ。そして政略的にだけ戰つた。

第三の敗因は、「冷靜な計畫(ドライ、カルキュレーション)」の持主であつたナポレオンがこの時に限つて充分の準備を怠つたといふこと、若い頃は歷史地理の活きた研究者であつた彼が敵國の風土人情を全く無視してかゝつたといふことであつた。伊太利遠征の頃、彼はよく行軍中に馬から降りて輜重車を呼び止めては尋問したものだ。係りの士官が一々詳細に品物の名を擧げたあとでその車が檢閱される。衣類、釘、刃物の末までちやんと數が合つてゐなければならなんだ。不幸にして何もかも知り拔いてゐる皇帝の尋問に完全に答へることのできなかつた士官は永久に葬られた。然し征露軍の準備は仲々それまでの注意が屆かなんだ。次の一挿話は能く當時の事情を穿つてゐる。佛軍が道傍に遺棄した一つの馬蹄を拾ひ上げた露西亞の鍛冶屋が之を見て笑ひながら言つた『こんな物を履いてゐるのでは、霜が來たら一匹の馬だつて助かりつこはない』と。實際、佛軍の馬蹄には釘(スパイキ)が附いてゐなんだ。それで以て氷の道を重い大砲や車を牽いて、丘でも野でも越さうといふのは無謀過ぎるはなしだ。

ナポレオンが特使として露帝に差し向けたナルボンヌ伯に、露帝がかう言つた。『要するに皇帝はどう爲ようと言ふのだか。余の國を亡ぼすやうな手段を余に强ゆるのか。で、余がそれを拒んだら戰爭を以て余をおびやかすつもりか。恐ら

く二三回の戰ひで歐州を占領したら、彼の思ひ通りの和議を余から申込むものと皇帝は思つてゐるのだらう。然しそれは間違ひだ』と言ひながら彼は自國の地圖をとつて靜かにそれを机の上に擴げた。そして言葉を續けた――『伯爵、余の見るところでは、ナポレオンは確かに歐洲に於ける最大の軍人だ。彼の軍隊は最も勇敢だ。そして彼の士官は沈毅で經驗を踏んでゐる。然し廣袤(スペース)は一つの要塞だ。若し余が幾敗のあとで住民を引連れて退軍したら――余の防禦を時間と、氣候と、荒野とに任せたら、その時恐らく余は近代の最も恐ろしい軍隊の運命に最後の宣告を下すことができると思ふが、どうだ』と。實際この言葉は至言で、そして適中した。ナルボンヌは歸つてからその詳細をナポレオンに報告したが、彼はそれに耳傾けなんだ。

更に無謀だと思はれるのは、ナポレオンが露西亞の國民性を無視したことである。組織のない國民、消極的抵抗力のどこまでも強くて根深い持久力を持つた國民を相手に、彼の集中的で一氣呵成の戰略が全く無效であることは、西班牙に於ける彼の苦がい經驗から分つてゐることだ。それに今一つ惡いことは、露西亞國民が歐洲のそれと違つて英雄崇拜の觀念を持つてゐないことであつた。この國民の頭にナポレオンの偉大性が針の先ほどでも響いたら、それこそ奇蹟であらう。かやうな國民を彼が征服し感化し統一しようとしたのは抑も誤りである。

シイザアを出した羅馬はその瀕死の床まで『英雄！』を絶叫し續けた。希臘の理想は矢張現世的偉人の渴仰にあつた。これ等の歷史を受けついだ歐洲が英雄崇拜の巢であるに不思議はない。超人ナポレオンの出現は殊に彼等を驚かした。彼等は彼を恐れながら崇めた、憎みながら尊んだ。祖國の自由を蹂躪する不倶戴天の仇敵として憎み盡しても、猶ほ彼の偉大性は一種の磁石の如く彼等を牽き付けずには措かなんだ。佛軍とともに多數の日耳曼人や伊太利人や瑞典人がニエメン河を渡つたが、誰一人として討露の目的を解する者はなかつた。否寧ろ彼等の行が彼等の主義と相反することを知らない者はなかつた。それでゐて彼等には佛人と同じ熱心があつた。ナポレオンが彼等を指揮してゐるといふことが、何事にもまして彼等を動かす強い理由であつた。その當時親兵を指揮してゐる彼の姿を目擊した若い日耳曼人が感に打たれて次のやうに書いてゐる。『馬上に高き彼の姿が永久に私の瞳に殘る。運命の沈着さを以て彼の親兵の上に注

かれた彼の限に、皇帝の額なる大理石の上に刻まれた永遠の像だ……』と。看よ、半神ナポレオンの出現がその後もどれだけ欧洲の社會に影響したかといふことは、十九世紀の歴史が英雄崇拜の新しい熱に浮かれたのを見て分かる。カーライルは『英雄論』を書き、ニーチェは超人の福音を説き、ワクナアは『シーグフリイド』で未來の人道を偉人に體具させた。

然るに露西亞の國民性は歐洲のそれとは全く反してゐた。彼等は「偉大性」を認めずして、唯だ「神性」を認めた。ナポレオンに迷はされずに神に頼つた。トルストイがナポレオンの性格を殘酷に解剖して、尋常人よりもより大ならず、より當たらずと同時に斷定したのは、正しく露西亞の聲である。露西亞の文學はプーシュキンからゴーゴリ、ゴンチャロフ、ツールゲーネフ、トルストイ、ドストイエフスキイまで、彼の國民一流の心理解剖を以て貫かれてゐる。彼等の一致した論は洵に明白で、そして斷定的である。曰く、この世に偉人なる者は存在しない。ナポレオンもクツゾフもウェリントンも、アレキサンダア大帝もオスマンパシャも、法王も皇帝も、唯一人偉大ではない。食ひ、眠り、病み、悲み、怨み、憎み、そして死ぬ者がどうして偉大でありえようか、といふのが彼等の信條である。彼等の著作は機會のあるたびに、鋭い解剖の鋒先を以て、人間性の決して偉大でないことを詳しくまめ〳〵しく說明してゐる。『偉人?、歷史は汝等の造つたもので、人生の目的は汝等を生む爲めである』――かう西歐人が叫ぶと、『否々、この世には偉人は存在しない、唯だ神と聖徒のみが崇むべきである』――と、露西亞人が答へる。カアライルの『英雄論』と前後してトルストイの『戰爭と平和』が世に出たなどは好い對照である。

かゝうな國情のもとに、ナポレオンが露西亞で成功しやうとは、夢にも考へられないことだ。

『戰爭と平和』の中で、スルストイは萬事を運命の意志の働きに歸した。あらゆる波の推し寄する混亂の海の上に「靈なる手」が動いて風を呼び嵐を靜める。その海の中ではナポレオンもクツゾフも一兵卒も、等しく無能の人間に過ぎないのだ。かやうな見方もトルストイ一流の哲學の表現としては面白からう。然し史的事實はそれとは餘程相違してゐる。

が、ナポレオンのモスカウ入りは何となく運命劇がかつてゐて、魔の神の手に引かれながら、ふら〳〵とおびき出された形がないでもない。

一八一二年六月、ドレスデンを出發したナポレオンの本隊はニエメン河を渡つた。『七月初めには我等はペテルスブルグになるのだ』と彼は豪語した。渡河の際、彼は誤つて馬から墜落したので、或者は之を不吉の前兆だとして氣に病んだ。

露軍は二隊に分れて、北方にはバルクレーの軍があり、南方にはバグラチオンの軍があつた。で、佛軍の戰略は前者を追ひながら、後者が北進して前者と合するのを阻止することであつた。露軍は初めから退却の法をとつた。ナポレオンは何等を抵抗も受けない手持不沙汰で、波蘭の舊都ウィルナへ這入つた。それが第一に彼の元氣を挫いた。彼はぼんやりしながら、敵を急追することもせずに、最も貴い十一日間を此處で空費した。

ドリシヤは露軍が一年餘を費して堅塞を築いたところなので、勇んで進んでみると、そこにも敵の隻影だに見出せなんだ。行く先々に空しい營所の跡だけで、然もバルクレーの軍隊はちやんと眼のさきに見えてゐる。それが宛も『おいで〳〵』をきめてゐるやうで眼障りでならない。一方にはバグラチオンの軍が隙をねらつてはバルクレーと合しようとしてゐる。これがまた至つてうるさい。

ウィテブスクでは敵が對抗の氣を示したので、ナポレオンの喜びは一方でない。『將士等よ、我等の望む日が來た。明日は一擧にして敵を粉碎しよう』と言つたが、翌朝になつて見ると再び敵の影だにない。新しい失望がナポレオンを襲つて、そこで彼はまたもや爲事のない二週間を空費した。それは七月の初めであつた。烈しい炎熱が彼の軍隊を苦めた。兵士——殊に日耳曼人——の脫走が始まつた。死傷者は七千人に上らないのに、既に拾五萬からの人數が減つてゐた。

佛軍はだん〳〵深入りして、時々行はれる小競鬪のあとで、八月半ばにとう〳〵スモオレンスクに迫つた。此處で敵軍は初めて頑强な抵抗を試みたが、多くの死傷者を出して敗走した。久し振で勝ち勇んだ佛軍は潮のやうに街に押寄せ

た。然るに市内は寂寞たるもので、剰さへ四方から火が起り瞬く間に全市を烏有に歸した。その時ナポレオンは天幕の前に座し默然としてこの物凄き光景を視凝めながら思ひ入つた。

軍中には無言の失望と不平とが起つた。ベルチエ元帥の如きは面を冒して進軍の不利なることを皇帝に諫言した。ジユノーは氣が狂つて故郷へ送り返された。

然し飽くまで露軍を追窮するといふ皇帝の決意は動かすべくもなつた。夢魘に襲はれたやうな佛軍を、「運命」はずるずるとモスカウの方へ牽いた。ヴィアズマでは、スモーレンスクと同じやうに火が起つた。兵士の脱走は益々烈しくなつた。

露國側にも大きな不安があつた。輿論が沸騰したので、政府は司令官の更迭を行ひ、再び獨眼の老將軍クツゾフを立たせた。で、九月七日、佛軍はボロヂノの丘に陣取つてゐる露西亞の大軍と面した。その朝ナポレオンは本營を出て將士を勵ました。

『諸君、この輝く朝日を見よ。これはまさしくアウステルリッツの太陽だ。』

戰ひは劇しかつた。勝利は全く佛蘭西側にあつた。然しその效果は豫期したほどでなかつた。ナポレオンは十三人の將軍を失ひ、ほかに卅人の將軍が負傷した。或る士官がその時の光景を敍して次のやうに言つてゐる。『ボロジノ戰の當夜の野營は悲慘なものであつた。我等は死骸を積み重ねた上に腰を下して火にあたつた』と。クツゾフは敗軍を收めてモスカウの方へ退却した。

行き行きて小高い丘の上に立つた佛軍の前に、愈々かの古い都の全景が展けた。白色の大きな建物や金色の塔が日の輝く下で眞晝の夢のやうに聳えてゐた。彼等は自分たちを美しく冷たい物語の中に見出したやうに思つた。皆の口からは思はず知らず歡聲が上つた。ナポレオン自身さへ一時は我を忘れたほどであつた。『これが苦しい旅の最後だ』――といふ潮が何人の胸にもあつた。

九月十五日にナポレオンはクレムリンの宮殿へ這入つた。それは彼等が嘗て見舞つたことのある幾多の宮殿中でも殊

も有名な一つで、その中に立つたナポレオンは彼の生涯中での一番ローマンチツクな役割を演じた。然し意外にもその古都は全く死の都、寂寥の墓の觀があつて、市中には往來する人の影もなかつた。ナポレオンはダリウに命じて此處に住む貴族を伴れてこさせやうとしたが見附からなんだ。で、一人の捕虜が彼の前へ引き出された。

『ロストプチン（總督）は何處にゐるのだ。』

『彼は退去しました。』

『知事や他の官吏は何處に居るのだ。』

『彼等も退去しました。』

『然らばこゝに殘つてゐるのは誰々だ。』

『露西亞の官吏は一人もゐません。』

『ゐない筈はない！』

然しどう捜索してみても市民らしい市民は影を拂つてゐた。唯だこの都に數多く住んでゐる烏が執念に彼の後を追つた。

すると、その夜半から、市街の數個所に火が起つて、折から烈しい風の吹き卷くまゝに、モスカウ全市は見る／＼うちに凄まじい火焔につゝまれた。やがてクレムリンも危くなつて來たので（その倉庫の中には澤山の火藥が藏してあつた）、ナポレオンは餘義なく一旦そこを立退いた。セギュールの手記によれば、はげしい火氣に眼が燒け、熱風と火の子で息苦しく、殆んど窒息せんばかりだつたとある。

火は十六日から十八日にかけて全市の五分の四を燒き拂つた。ナポレオンは再びモスカウに這入つて、クレムリンに大本營を置いた。荒涼たる燒野ではあるが、ペテルベルグと並ぶ露西亞の一大都市を占めて、露帝(ツァー)とその邦を兩分するといふことが氣丈であつた。彼は今にもアレキサンダアから講和の特使がくるものと待ち設けてゐた。

然るに十月に這入つてから、モスカウの氣候は次第に寒氣を增して住み難くなつて來た。十一月になると霜が降りる

と謂はれてゐる。兵士は食料の缺乏から飢餓に迫られてゐた。玆に一つの殊勝な挿話がある。ナポレオンがクレムリンで閲兵式を行つた場合、忠實な兵士たちは空腹を忍びながら、努めて敏活な規律正しい姿勢を見せて、彼等の不幸を皇帝に知らせまいとした。ナポレオンに對する信念と愛着とはまだその頃でも大多數の兵卒の間に殘つてゐたのである。またこんな話がある。ベレシナからウイルナへ退却の際、全軍は殆んど沍寒の爲めに凍え死ぬやうな目に遇つたが、或る兵士たちは自分で拾ひ集めた薪をナポレオンの從卒に渡してからかう言つた、『皇帝に呈げてくれ』。

ナポレオンは是が非でもペテルブルグまで進軍しようと思つた。彼の威嚴勢望を歐洲各國から見透されることを彼は殊に恐れた。然るに彼の將軍連は殆んど一致して之に反對した。この上一歩でも北方へ乘り出すことを彼等は肯ぜなんだ。彼は自分の命令の行はれないことを知つて漸く我を折つた。そのことが彼にとつてどれだけ苦痛であつたかは察するに餘りある。彼が無理から他人の意志に從つたのはこの時が初めだ。丁度その頃巴里では皇帝崩御の噂が立つて、その爲めに小暴動が持上つた。之を聞いた彼はつくづく人心の輕薄で無常なことを悟らずにはゐられなんだ。彼が刻苦して築き上げた大帝國の礎も、彼の死のほんの噂だけで忽ち變調を呈するとは、思ひも及ばぬことであつた。彼は愈々モスカウを棄てるべく決心した。

モスカウで再造されたナポレオンの軍隊は僅かに拾餘萬に過ぎなんだ。それに砲六百門。著しく缺けてゐたのは馬匹であつた。

征露軍の受けた眞の困苦と悲慘とは退却の際にあつた。勇將の命令も最早絶望的な兵卒たちを統御することができなんだ。軍隊は全く無規律の姿で、貧しい移住民の群れを見るやうであつた。やがて降りしきる晩秋の雨に道がぬかつて行軍は遲々として捗らない。そのうちに露西亞特有の恐ろしい夜霜が降り始めたので、薄着で糧食に乏しい兵士たちは饑と寒さに慄へた。ナポレオンは彼の親兵を率ゐて先頭に立つた。そして道に横はるあらゆる必需品を眞先に掠奪したあとで、手當り次第に焼き拂つては進んだ。彼は後方部隊の困苦を察してやらなんだ、寧ろ何事をも知ることを欲せなんだ。

ぞろ〳〵と四五哩も續いた雜然たる行列の中には女子供も雜つてゐた。露軍はすぐそのあとから追跡した。慓悍で殘忍なコサック騎兵の襲撃が間斷なしに續いた。最も困難な殿軍の務めを最初に承つたのはダヴウであつた。默々として馬に跨つたナポレオンは、時々丘に上つて後方を顧みては、手酷しく將軍たちを叱つた。或る日ナポレオンとダヴウとの間に烈しい口論が行はれた。その後この征旅の終るまで二人は殆んど口をきかなんだ。その時からネー元帥が殿軍の役をとつた。

ドロゴブシュでは恐ろしい吹雪に遇つた。その爲めに五萬人からの兵士と婦人とが隊から離散した。親兵以外の騎兵は皆馬を失つた。泥濘につゞく結氷で、佛蘭西の馬匹の無能なことが證明し盡された。

ドログブシュからスモーレンスクまでの退軍は殊に悲慘だつた。雪は益々深くなり、氷のやうに冷たい風が際涯のない野を吹き卷くつた。その中を全軍はかちで歩いた疲勞のために落伍する者が日に日に加はつた。暖國から來た兵卒たちの手足の凍傷が慘ましかつた。全軍の殊に堪へられないのは餓であつた。かやうなあひだで、執念なコサック兵の追擊に當りながら、絶倫の勇を揮つて、佛軍の尊敬すべきことをクツゾフに敎へたのはネーであつた。

ナポレオンはスモーレンスクで糧食と軍需品とを整へ、それから再び軍隊の改造を行つて、持久の策を講ずるつもりでゐた。然るに餓を忍んで漸くこゝまで辿りついた軍隊は宛も貪存た獸の群のやうに漁つた。流石のナポレオンもかやうな名狀すべからざる混亂には匙を投げた。殊に兵燹に罹つて間もないこの町には、彼の豫想したほどの糧食がなかつた。そこで絶望の群れは、またもや同じやうな退却を續けた。

ベレシナ河へ達した頃は、武裝した兵士は僅かに貳萬五千に過ぎなんだ。露軍はその兩岸を扼して、佛軍の渡河を妨げ、最後の止めをさす筈にでだ。然しナポレオンは大膽な方略を以て渡河を强行し、辛うじて軍の大部分を救つた。兩岸では劇しい切迫戰が行はれた。チヤイコウスキイの合奏曲にあるやうに、「マルセイユ」の悲悽な合唱が消えると、暫く闇の中に聞えるものは唯だ劍戟の音ばかり。それが已んだあとで、徐かに聲高く血の野の上に響く露西亞の鐘。

十二月五日、敗殘の軍隊が辛うじてスモルゴニに達したとき、彼等は不意に皇帝の影を見失なつた。彼は數名の從者

を伴れたまゝ私かに軍を拔け出して、見すぼらしい百性馬車を驅り乍ら、近道をして西へ急いだ。ウィルナ、ワルショオ、ドレスデン、ライプチヒ、マインツを過て、晝夜兼行、十七日目の晩にそつとチュイエリイの宮殿へ還入つた。彼は眞先に羅馬王を抱いた。

取り殘された者の憤怒は想像に難くない。ナポレオンは所詮好き「同士（コンレード）」ではなかつた――殊に不幸の場合に於て。彼はスモルゴニを拔け出すときにかう言つた、『俺は寒氣で死にかゝつてゐる軍隊の長としてよりは、チュイエリイの玉座から命令する方が威力がある』と。

見棄てられた軍隊の困苦は更に倍加した。深い霜が降りて、氣溫は氷點下六拾度に下がつた。日に數千人の者が死んだ。ミュラー老ひ、ベルチエ病み、ダヴウ默然たる時、ひとり健氣にも佛軍の責任を雙肩に荷つて立つたのは豪勇並びなきネーであつた。

彼は伊太利以來ナポレオンの麾下にあつて、あらゆる大戰に參加した。然し彼の名が最も著聞したのは露西亞よりの退却戰に於てである。實際かやうに不撓の勇氣を持つた將軍がそれまで餘り知られずにゐたといふのは不思議である。彼は無雙の膽力に加ふるに鐵のやうな身體（からだ）を有してゐた。彼は疲勞や病氣を知らなんだ。夜る晝の差別なく働いて、兵卒と一緒に地面（ぢべた）に寢ね、食はうが餓えやうが我不關といふ樣子をしてゐた。退却の際彼は兵卒の間に雜つて徒足（かち）で步いた。時には五十人か百人の步兵を率いて一尉官のやうに敵彈の矢面に立つた。そして瀕死の兵の手から銃を奪つて代つて擊つた。彼は戰場で疲勞に倒れてゐる兵卒たちを起して步いた。リアチーでは彼は七千の兵を以て五萬の露軍の中へ躍り込んだ。彼には騎兵隊を率ゆるミュラーのやうな華々しい勇氣はなかつたが、地味で拗執で頑强で、決して倦むことを知らない奧底のない沈着があつた。若くして死んだランヌが稍や彼に似通つてゐた。思ふにかやうな勇氣は只なゝめ靜と命知らずの度胸とだけでは得られるものでない。そこには他人を畏れさせ又他人に感染する或る貴い靈火が燃えてゐたに違ひない。

ウィルナとコウノとで、餓え消えてゐた兵士たちは、丁度スモーレンスクの場合と同じやうに、隊を脫走して手當り次

第にあさつた。彼等は獸のやうに貪り食ひ、そして死ぬほどブランデーをあほつた。クツゾフの軍隊は踵を接して追つた。コウノではウィルナ街道から攻め寄せてくる露兵を喰ひ止めるために、僅か三十人で終日その門を固守した。その爲めに佛軍は漸くニエメン河を渡ることができた。彼等は總勢で五百人に過ぎなんだ。拗執なコサツクも漸くそこから引返した。

征露の役で失はれた佛國側の人員は三拾萬に上つた。

八

巴里へ着すると直ぐ、ナポレオンは皇帝の威嚴を維持し、不撓の爲政家としての常生活に歸つた。彼は彼の放膽を以て、露西亞に於ける自己の失敗を塗り隱さうとはしなんだ。それでゐて彼はその身邊に何事も起らなんだかの如き冷靜の態度をとつた。自分だけはあらゆる運命の浮沈を超越した人間であるといふことを自信し、人にもそれを信じさせやうとした。然し彼の癒すべからざる失敗が人々の額に與へた一種異様の表情は爭ふことができなんだ。

ナポレオンが全力を擧げて着手した第一事業は軍隊の再興であつた。歐洲の各地に散布した駐屯兵が呼び戻された。上院からは皇帝の命によつて募兵令が發せられた。立どころに五十萬の兵が集まつた。廿年間西歐に覇を稱へた「大國民」の名譽回復の爲めに、少年も壯者も皆な切齒勇躍して召集に應じた。ナポレオンは再び超人的精力を以て軍務に當り、一切の組織を完備した。

その間に、プルシヤ國民の勃興は目ざましいものがあつた。一たい十八世紀の歐洲には民族同國家と名くべきほどのものは一つも存在せなんだが、ナポレオンの壓迫は睡眠に近い各民族に覺醒を與へ、確固たる基礎の上に組織的國家を建設しようとする國民的意志を與へた。それがナポレオンの沒落に最後の止めを刺した有力な原因である。

そのうちでもプルシヤが先驅をなした。一八〇六年の屈辱的敗北とその後の壓迫とは、フリードリツヒ大王の子孫のとても堪えるところでなかつた。怯懦な王と老朽な外交家とが麗はしい辭令を用ゐ、巴里の使臣に高價な酒を振舞つて

ゐる間に、全獨逸の青年は祖國の自由に狂熱し、戰と死との聖壇に痛烈な祈願を籠めた。彼等は早晩來るべき自由の爭のどれだけ困難であるかを思ひながら、しかもそれが一日も早く彼等の頭上に落ちることを望んで已まなんだ。勝利か死か――彼等は好んでこの二途を撰んだ。

かやうな國民の意氣運を一身に體して、實行の道に當つたのはシャアンホルストであつた。熱烈な愛國家、軍事及行政の天才として、内には薄志の王を鞭き、外にはナポレオンの嚴しい監視を受けながら、彼は隱忍刻苦して祖國の强兵を圖つた。一八〇八年の巴里條約により、プルシアの備へうる現役兵の數は四萬二千人以下に限られてゐた。然るにシャアンホルストは、あらゆる假面のもとに增兵の策を講じた。退役年限は規定の廿年にして置きながら、現役期間を僅か數ケ月に短縮して、なるべく多くの兵員を作るといふ苦しい策さへ採つた。かうして彼は漸く拾五萬の戰鬪員を得たのである。

『偉人シャアンホルストが幾年にも亘り、さまざまの詭計と口實によつて、監視の嚴しい敵の注意を避けた事實は、一つの悲喜劇であつた。彼の魂は戰の歡喜に熱狂した。獨逸が再び自由であるためには、彼は人と馬との最後の呼吸、國内のあらゆる男子を犧牲にしても悔ゐなんだ。然し注意深い敵は何時も彼の動員計畫を破壞した。で、最後に公然戰が宣告された時に、命を縮めるやうな努力と、言ふべからざる烈苦との五個年間によつて用意された所のものが、凡て一時に活躍した。……シャアンホルスト唯一人が一八一三年の軍隊の父である』、とトライチュケが言つてゐる。

一方には愛國哲學者の老フィヒテが、彼の熱烈な講演によつて、當時の青年の血を沸かした。『人格を有つことと獨逸人たることとは同一事である』と彼は言つた。然も彼の人格とは『戰鬪的人格』の意味であつた。

要するに獨逸の國民主義はナポレオンの壓迫から生れ、一八一三年の國民的奮起を端緒として起つた。爾來それが帝國主義に變形し、廿世紀に於ける世界戰爭を誘致するにかつて一段落を劃した。

とまれ、一國勃興の元氣の雄々しい有樣は史上の華である。それは有爲な國民にのみ見る現象で、人間社會の感激に充ちた有機的活動は、かやうな稀な時代でなければ見られない。リュッツンの戰でも、ワーテルロオの戰でも、髮をおくし

た蒼白いプルシアの大學生――ライプニッツやカントの學徒――が頭をそろへて討死したのは、健氣にも痛ましい光景であつた。

それと並んで贏弱(ひよわ)な佛蘭西の少年の血に染んだ死骸を見ることは猶ほ悲慘であつた。當時この國では十六歲以上の男子は誰彼の區別なく徵集された。アレキサンダー・デュマの『追想記』を見ると、その頃の母親たちの憎しみと心配とが手にとるやうに描かれてゐる。或る一人の壓制家の野心を充たす爲めに、彼等の愛子の命は、西班牙の谷間か、露西亞の雪の野か、それでなければサクソニーの沼地で捨てられなければならなんだ。彼等は子供たちの齡を指折り數へては、月日の迅く過ぎるのを怨めしがつた。

以前ナポレオンは君主又は軍隊を相手にして比較的安易な戰を戰つたが、西班牙と露西亞では頑强な自然力と角力はなければならなんだ。然るにそれにも增して仕末の惡るかつたのは、一八一三年以後の戰爭であつた。なぜならそれは覺醒した國民が相手であつたから。誰やらがこれを評して『諸民族の戰』と稱したのはうがつた言葉である。

敵方の熱誠がつのるに反して、佛蘭西國民の意氣は次第に銷磨して來た。かうなれば最早一人の力の能く支ふるところではない。露西亞遠征以來ナポレオンの運命は、丁度ナイアガラの大瀑布のやうに、一段一段と致命的に、しかも比べもののない壯觀を以て墮落した。

一八一三年、機熟したと見たプルシアは聯盟に背いて露西亞と提携し、公然ナポレオンに對抗した。

そこで、同年四月十五日、皇帝は巴里を出發した。彼の大軍がエナへ現はれたとき世界は新しく驚嘆の眼を瞬つた。その軍隊は地から拔け出したと思はれるほどの不思議であつた。なぜなら、敵の算當によればその時彼が廿萬以上の兵員をえやうとは信じられなんだので。然しよく見るとそこには些なからぬ缺陷が潜んでゐた。殊に騎兵が尠なかつた。ナポレオンはネー、オーヂュロオ、ユージェーヌ等の猛將を伴れて、時々軍隊を見廻つた。彼獨特の魔力ある眼付で、古

い類馴染の士官に挨拶し、新募の兵卒に深い注意を拂ふやうにして、全軍の元氣をそそつた。

獨露の聯合軍に對し第一に行はれたルッチェンの戰に於て、佛軍は顯著な捷利を得た。終日の接戰の後戰場に横はる死骸は二萬五千に上つた。その野を取卷いた四個村の災火が物凄くこの光景をうつし出した。

この戰は佛軍に偉大な精神的效果を與へた。第一に皇帝自身が昔のナポレオンに還つた。將卒たちの元氣と彼に對する信賴が復舊した。露西亞で受けた不幸が朝かたの惡夢のやうに消えた。佛蘭西は再び自國の光榮と優越とを安心して皇帝の腕に任せた。一方には、露帝（ザア）とプルシア王と、バルクレーとブルッヘルとが尻に尾を卷いて逃げた。ナポレオンは何なくドレスデンに請入つた。

續いて劇しい追擊戰が始まつた。或時敵彈がナポレオンの馬卒を斃した。その時皇帝は笑ひながら、側にゐるデュロックを顧みて言つた『今日は幸運（しあはせ）の日だぞ』。然るに間もなく他の敵彈がデュロックを斃した。彼は若い頃からの皇帝の親友であつた。死ぬ前日に彼はから言つた『皇帝の戰爭熱は一通りのものでない、我等は皆な戰場で命をとられるのだ、それがお互の運命だ』と。

やがて獨露軍は休戰を申込んだ。この不幸な休戰にナポレオンが應じたといふことは何よりも彼の失策であつた。敵は何かと口實を設けて和議の締結を永引かせた。その間に墺太利の態度が甚だ危しくなつて來た。メッテルニッヒの仲裁申出が至極虫の好いものであつた。皇帝は堪へきれずしてから叫んだ、『お前は開戰する爲めに英國から幾ら貰つたのだ』。

墺太利の新に加はつた敵がたは、條約を無視して再び開戰した。ナポレオンは早速ドレスデンを出て迎へ擊ち、亦もや捷利を博したが、時既に遲かつた。敵は休戰中に充分の準備を整へ、兵力に於ても優に佛軍に倍加した。それのみならず、ババリア、ウュルテンブルグ、バーデンなどの全獨逸民族が立つて敵方に加盟した。

決勝戰はライプチッヒの野で行はれた。佛軍の拾五萬に對して聯合軍は三拾萬を數へた。戰ひは十月十六日から十八日まで三日間に亘り、佛軍の大敗に歸した。潰走した諸隊がエルベ河を渡るに當り、亦もや大きな過失が演ぜられ

た。當事者の不注意から、全軍が渡り了せないうちに爆彈により橋が破壞されたので、約二萬の兵は敵の蹂躙に殘された。その時ナポレオンは假睡を貪つてゐたが、一大音響の爲めに驚いてはね起きると、かくの始末と聞かされて失望した。對岸に殘された佛軍の多くは好んで決死し、或者は河を泳ぎ渡らうとして溺死した。かくて名譽な「大軍隊」の中心と佛蘭西青年の華とは、ライプチッヒの野にその最後を曝したのである。同時にナポレオンに對する信頼はあらゆる方面から崩れた。然し彼は馬の轡を締め、殘兵を督勵して、エルフルトへの道を四倍の强敵と戰ひ〱退軍した。かくて十月卅一日にマインツへ着した。その時の彼の馬上の姿には幽凄の感があつて、見る者の眼を避けしめた。

ナポレオンと對佛聯合軍とは暫くライン河を距てゝ相對した。聯合軍は平和を議する爲めに特使を送つたが、然しそれは一時の口實で、彼等の目的の巴里にあることは分りきつてゐた。アレキサンダー皇帝、フランシス皇帝、ウィルヘルム王等は自分の都を荒された怨を返すべく熱心であつた。一方ナポレオンは、かうなつても仲々屈辱的條件に應ずるほど謙遜でなかつた。そこで聯合軍は三手に分れて、瑞西と中部ラインと和蘭とから佛蘭西に侵入した。

その時に於けるナポレオンの行動戰略は軍事專門家の嘆稱して措かない所である。一八一四年の二月から三月へかけて、彼は隨分奇拔な捷利を博した。彼の大膽な攻擊に遇つて一夜にその髮を白くしたとは露帝の告白である。殊にモントローで彼は得意だつた。彈丸雨注の中に立つ皇帝を案じて或る兵卒が退去を哀願すると、彼はかう言つた、「默れ、まだ余にあたる彈丸は出來てゐないぞ」。同じ日にウィットゲンスタインの軍を追擊したマグドナルドとユーヂノーは、丁度敵が食卓に用意して置いた御馳走がまだ溫く食べられるのに出遇つたほど、神速な捷ち戰を戰つた。

次に佛軍は最も肝要なソアソンの開城を餘儀なくされたが、間もなくクローヌで勝つた。然し勝敗何れにしてもその結果は同じだつた。一戰毎に佛軍の戰鬪力は著しく減つて行つた。

四月十八日、皇帝はサン・デヂェールにゐたが、聯合軍が巴里に接近したといふ報知をえた。そこで彼は取るものも取り敢へず全速力で馬を驅つた。途中で彼は再び急使に遇つて、モルチエ及マルモン兩元帥の軍が破れたことを聞いた。

それでも彼は猶ほ望みを棄てなんだ。然るに翌日敵軍は既にモンマルトルの丘に上り、續いて巴里へ這入つた。皇后と皇子は皇兄ヨセフが保護してブロワに遁れた。佛軍の殘兵は、矢盡きてフォンテンブローへ引上げた。

老猾なタレーランはずつと以前から聯合軍と氣脈を通じ、古蜘蛛のやうにちやんと自分の巣に籠つてから諸王をまつ糸を張つてゐた。露帝がホテル・タレーランに宿をとつた。

その日ナポレオンは親兵とともに四十五哩を強行した。翌三十日も彼は早朝から鞍に跨つた。で、巴里に程遠からぬ或る驛で急使が驅け付けて、巴里の陷落を報告した。

皇帝は默つて聞いてゐた。

『よし、何にしても巴里へ這入らんければならん。』

『然し、陛下、巴里には軍隊がありません。』

『それでも關はん。余は國民軍を召集しよう。明日は他の軍隊も集まるだらう。汝も余に從へ。』

『陛下、あなたは捕虜にされますぞ。巴里の周りは拾三萬の軍で圍まれてゐます。』

『六時間遲かつた。萬事は失はれた！』

皇帝はかう叫んだまゝ、田舍馬車の立て場のみすぼらしい小椅子に腰を下して深い熟睡に落ちた。

四月一日フォンテンブローの宮へ這入つたナポレオンは、猶ほ巴里侵入を夢みてゐた。翌日彼は宮殿の廣場へ親兵を集めて飽くまで敵兵を驅逐するといふことを誓はせた。

四日の朝は皇帝の部屋で將官會議が行はれた。それにはベルチエ、マレー、コーランクール、マグドナルド、ラフアブル、ネーなどが集つた。諸將は一聲に和議を諫告した。そして飽くまで皇太子を保護するといふことを誓つた。で、ナポレオンは澁々ながら之を承諾し、敵方との交渉をコーランクール、ネー、マグドナルドの三人に任せた。

然し皇帝の意志はなほ迷つてゐたが、五日には遂に決心して退位を宣言した。聯合軍との交渉はそれで纏つたので、同月十二日、コーランクールとマグドナルドの二人が條約文を齎して皇帝の署名を求めた。が、その日彼はどうしても

之に署名する氣がなかつた。

その日のナポレオンの容子はいかにも怪しかつた。で、彼の部屋係はそつと寢室のピストルから彈丸を拔いて置いた。夜半に彼は從僕を呼び起して火をおこすことを命じた。その時ナポレオンは手紙を書いてはまた之を引き裂いてゐた。終ひに彼は化粧箱の秘密の隱しから小さい嚢を取出し、その中の物をコップの水へ注けて置いてから、寢に就いた。それが彼の常々用意してゐたといふ噂のある強い毒藥であつたかどうかは分らない。とにかくそのコップは翌朝確かに空らであつたといふ。然し彼は死ななんだ。彼の身體が强かつたのか、藥のきゝ目が失せてゐたのか。それとも彼が飮まなんだのか、それが實際の藥でなかつたのか。

翌朝彼は埃及から伴つた從僕イワンを呼び起して、常の如く用を命じた。それの濟んだあとでイワンは馬屋へ行き、一匹の馬を引出して乘つた。それきり彼は歸らなんだ。

然しあの場合皇帝の命に背いたのは哀れなイワンばかりではなかつた。第一にはタレーランがある。それからタレーランにそそのかされて聯合軍に加擔したマルモン元帥がある。倦んで氣の腐つたベルチェーは、一日皇帝の部屋へやつて來て、ちよつと巴里まで行つてくるから暇をくれと言つた。彼は丁寧に叩頭して出て行つたが、部屋の戶を締るや否、皇帝は靜かにかう言つた、「彼奴は歸つてこまい」と。實際その通りだつた。

臣下の不信がどれだけ皇帝を苦しめたか。「余には沒落よりも何よりも堪へ難いものがある。それは人間の忘恩だ。凡そ忘恩ほど下劣で恐ろしいものはない」と、その時彼はこぼした。

ナポレオンは遂に意を決した。で、十二日の朝マグドナルド元帥を呼んだ。一夜にして彼の頬はこけ、顏は蒼ざめた。然し彼は沈着の態度を失はなんだ。先づ退位の條約文に署名してから、丁寧にそして男らしく元帥の好意を謝し、今にして漸く彼を知つた自己の不明を謝した。皇帝は常々愛玩してゐた土耳古の名刀を紀念として彼に送つた。（マグドナルドは英國生れの將軍で、ナポレオンは彼を誤解してゐた）。

條約によつて、皇帝、皇后、皇太子、そのほか凡ての皇族は從來の爵位を失ひ、エルバ島を獨立王國として彼の[illegible]

のもとに置き、佛蘭西政府から二百萬フランの年金を支出することが定められた。彼の親族近侍の者にもそれぞれの手當が決められたが、實際に於て誰一人それを受取つた者がなかつた。之を見ても當時の政治家流のどれだけ不信で輕薄であつたかといふことが分る。

四月廿日には、ナポレオンはフォンテンブローの廣場へ再び將士を集めて告別式を行つた。彼はしづ〳〵と階段を下りてきて、やをら四邊を視やつた。その中には昔からの御馴染が多かつた。古くはアルコール、マレンゴ、アウステルリツツから、次ではフリードランド、ワグラム、モスカウでの戰友が並んでゐた。前生涯の華々しい歴史が彼の眼の前に開展した。彼はやつとのことで口をきつた。

『將士よ、余は今汝等に別れを告げる。我等は廿年このかた相共に働いた。余はそれを誇と思ふ。然るに歐洲は余に反對して立ち、我が將卒中の或る者は彼等の義務と彼等の祖國とに不信の態度を採つた。佛蘭西の未來も新しく變るであらう。余　汝等及余に忠實なる他の勇士と共に防戰するを妨げないが、然しそれでは佛蘭西の禍とならう。希くば諸士は新しき王と新しき長官に忠實であれ。我等の親愛なる國家をして一日も汝等の腕を缺かしめるな。余の運命に就いては決して慨いてくれるな。余は汝等の健在を聞かば滿足であらう。余としては死するも差支ないが、余が生を撰んだ理由は、汝等の偉大なる名譽を高めたいからである。余は我等が共々に爲した偉大な行爲を史記に殘さうと思ふ。余は汝等を一人々々抱きしめるわけにいかない。來れパレー將軍、余の胸に汝を抱かしてくれ。それから鷲章旗を貸してくれ。それに接吻しやう。この接吻が後々まで反響あれ。さらばよ、我子等。余の好意は永久に汝等を追ふだらう。希くば汝等の記憶に余を存してくれ。』

流石に猛けき武夫、鐵の如く強き者も泣いたに不思議はない。"Vive L'Empereur"が庭の隅々まで悲凄に響き亘つた。然しこれ最後の『皇帝萬歲』ではなかつた。

ナポレオンは英國の一軍艦に乘せられて、五月四日エルバ島へ着いた。多くの從者と共に彼の忠實な情婦ワレウスカが彼に從つた。(彼女は波蘭の伯爵夫人で、ワルツオーの美人と稱ばれた女であるが、先のプルシヤ役の際ナポレオンと

情を結んだ。一方には、同月廿九日、先夫思ひのジョセフィーヌが死んだ。然るにルイゼはと見ると、皇帝退位と同時に里方の墺太利へ歸つて、間もなく第二の夫ナイブペルグ男爵と出來合つた。『ウェリントン公がワーテルローで勝つて下すつたので、どれだけかまあ助かつたことでせう』とは彼女の述懐である。こゝにも我等は偉人の運命に伴つて曝露された人間の不信を見せつけられる。

九

佛蘭西では、自然の成行としてルイ十八世が王位に即き、二三十年間國を逃れてゐた王黨の人々が勢力を恢復した。チュイエリイ宮殿の空氣は瞬く間に一變した。一歩々々力強い響をはこぶ皇帝の騎馬靴の性急な足音の代りに、脂肪ぎつたブルボン王が重さうにその病足につけた大きな紫色の天鵞絨の上履の懶さうな響が聞かれた。凡ての變化は之と同じ對照で起つた。

幾月も經たないうちにブルボン家に對する深い憎惡と不平が國内に充ちて危險の相を呈した。暗愚な時勢知らずの君主の、思ひ上つた、不公平な施政の爲めに、國内の事物は層一層混亂の狀態に陷つた。脆弱な人情の常として、國民の心はおのづから前皇帝の方へ向いた。機敏なナポレオンが誰よりも先にそれを嗅ぎ附けない筈はなかつた。

漸くのことで重荷を下した歐洲の諸君主は、暫くの間はがつかりした形であつた。同年（一八一四）六月から有名なウィーン會議が始まつた。それはナポレオンによつて荒された歐洲各國の領土と利權とを整理する爲めであつた。その會議に、タレーランの發起で、ナポレオンをセント・ヘレナのやうな遠島へ移流しようといふ議案が出た。之を聞いたナポレオンは、最早一刻も遲疑する場合でないことを覺つた。佛蘭西の近狀から食指動いてゐた彼は、斷然伸るか反るかの運試しをやつてみる氣になつた。

内地の同士と示し合せて、一八一五年二月廿六日に、彼はエルバを脫出した。約一千の兵士が數艘の小舟に分乘して彼に從つた。その日彼は人の注意をまぎらす爲めに夜會を催したが、夜陰にそつと脫け出して舟へ滑り込んだ。その昔彼に僥倖を惠んだ地中海は、今度も不思議な幸運を以て彼を渡した。彼は英國艦隊の監視をくぐり了せて、無事にアン

チープに上陸した。その航海中たつた一度佛蘭西軍艦に出逢つて、エルバに於ける皇帝の動靜を訊かれたが、ナポレオン自らから答へた、『皇帝は無事だ』。

グレノーブルでは彼を召し捕るために向けられた軍隊が、彼の姿を見るや否や、『皇帝萬歳』を叫んで彼に從つた。その時彼は芝居式の大見えを切つた。例の灰色の外套を脫ぎ棄てゝ、とんと胸を叩きながら、『この中に美事皇帝に向つて發砲できる者があるか！』。

沿道の民は皆簞食壺漿して彼を迎へた。三月廿日彼はやす〳〵と巴里へ這入つた。『今後余は佛蘭西の專政君主でなくて、最善の一市民とならう』、と彼は宣言した。

ナポレオンの脫出がどれだけ當時の歐洲を震駭させたか分らない。即夜ルイ十八世は都を落ちのびた。ウィーンでは得意で、輕薄で、饒舌な君主たちが、度を失つて慌てふためいた。

諾威の小說家キーランドはウィーン會議を一つの戲畫に擬らへてゐる。紙製の王冠を被り、鉛の兵隊を持出して遊んでゐる子供等（諸君主）の前に、不意に一つの箱が持ち出される。それはナポレオンがエルバを脫け出したといふ謎である。件の箱の中からは腕組みをし帽を橫被りにしてゐる小柄な男が飛び出す。すると小供たちは急に驚いて机の下へ隱れる。その男はたつた一人で取り散らされた玩具の中に立つ――といふのである。

實際これ等の甘やかされた子供――實は橫柄な大供――ほど始末に了えない手合はなかつた。彼等はナポレオンによつて蹂躪された自分達の帝王神權を取戾す爲めに、業々しくウィーンに集つた。然し彼等は鷹の飛び去つたあとの喧しい鷄の群のやうに徒らに饒舌を弄して日を送つたばかりで、彼等自らの力では何事も生み出せなんだ。當時メッテルニッヒの秘書官であつた利け物のゲンツが次のやうに言つてゐる、『私はこの會議の爲した仕事がどんなにつまらない物だか、この世界を支配する賤しい動物たちがどんなものだかを熟々知つた』と。更に彼はかうも言つた、『會議の間に私の最も強く感じたことは、何れだけそれが氣拔けしたもので、その手に世界の運命を握る人たちがどれだけ下らないものだかといふ事であつた』と。之から見ても、ウィーン會議なるものが平凡な史家の說く如き重要なものでなかつたのが分る。これ

は偶の君主たちの暗愚が對照をなしてメッテルニッヒやタレーランの如き徒輩に名を成さしめたのが落ちであつた。勿論この會議の前後を劃して、歐洲の形勢に一大變化の起つたことは事實であるが、それは會議その物の產物ではなかつた。否なそれは彼等協同の讐敵ナポレオンが無意識に蒔いた種であつた。彼が廿年間の領土的野心は彼方此方(あちこち)に國民的覺醒をうながし、彼が佛蘭西の内治と軍事とに採つた行政は國家の有機的組織(オーガニゼーション)のいかなる物であるかの模範を與へ、かくて十九世紀の民族的、統一的の國家を盛り上げたのである。それに今一つ、十八世紀の帝王神權制度がナポレオンによつて粉碎されたことも特筆すべきである。皮肉で且つ詭辯(パラドックス)のやうではあるが、佛蘭西革命の精神を歐洲に振り蒔いた者はナポレオンであると謂へる。それにつけて私はミレーの『種蒔き』の畫を想ひ出す。蒔きうるものは力である。(この畫は見る者によつては劇しい革命的精神を挑き起すといはれてゐる)。

かうしてナポレオンは所謂『百日天下』をとり、自ら宣言した約を破つて再び皇帝となつた。其時彼は四十六歳であつた。聯合軍を迎へ擊つために、一八一五年六月十一日彼は巴里を出發した。白耳義の國境に近く英國のウエリントンとプルシアのブルツヘルがゐた。之に對するナポレオンの作戰はネーを左翼に据へてウエリントンの軍に當らせ、全時にグリューシーをしてブルツヘルの來る道をふせがせ、兩軍の聯絡を斷つて、一氣にブラッセルを占領するといふのであつた。それは彼が伊太利以來用ゐなれた集中的戰法で、策戰そのものとしては實に立派なものであつた。然しこのプログラムの性質上、兵の神速といふことが必須條件で、それには第一に將士の鋭氣と全軍の完全な連絡とが備はらなければならんだ。然るにネー老ひ、新米のグリューシーは款誤ついたので、折角の計畫も實行に於て大齟齬を來たした。殊に佛蘭西がたの一將軍が敵に欵を通じたので、ナポレオンの策略はすつかりブルッヘルに覺られた。

同月十六日、リーニーの一戰に於てナポレオンはブルッヘルの軍を破つた。その日プルシアの老將軍は落馬したが、佛蘭西の騎兵は彼とは知らずにそれを見すごして通つた。ナポレオンはグルーシーに五萬の大軍を與へてブルッヘルを追擊させた。そして一方にはネーをしてウエリントンの進路に當らしめた。

然るにどういふものか、その日ネーは逡巡して進まなんだので、翌日ウェリントンの軍は威武堂々とワーテルローの高地に陣を布き、プルシア兵の來援を待つてゐた。グルーシェーは更に重大な失策に出で、道に迷つてブルッヘルとを見失なつたので、英獨軍の聯絡は完全に行はれた。

ワーテルローの戰は午後一時から始まつた。前日の雨で道が惡るく、砲兵の運動は不便を極めた。その爲め開戰が遲刻したので、敵にとつてはブルッヘルの來援に多大の便利を與へたのである。佛軍はウェリントンの陣地に向つて幾回か猛烈な突撃を試みた。ネーは再び元氣を回復して屢々英軍を危地に陷れた。然るに、ナポレオンにとつては意外にも、來るべき筈のグルーシェーは來ずに、却つてビューロー、ブルッヘル等の大軍が敵に合したので、形勢は急に一變して、見る／＼佛軍は悲慘な崩壞を餘儀なくされた

最近代の科學的戰爭に入る前の戰爭に於て、勝敗の決が繫つて一髮の機微にあることは、ワーテルローの戰が顯著な實例を示してゐる。佛軍は戰略に於て確かに敵を壓してゐたので、若しネーが前日の進軍を今少し迅速に運んだなら、若しグルーシェーが道に迷ふことなくブルッヘルを喰ひ止めえたならば、若し落馬したブルッヘルが捕虜にされたなら、か若しユーゴーの指示した如く前日の雨が佛軍の活動を阻害しなんだら、勝利は明らかにナポレオンのものであつて、從つて世界の形勢にも大きな變化があつたらうと思はれる。脆弱な人間の歷史は凡てがかうした偶緣の連鎖である。然しまた思ふに、前に列擧した原因のうち最後の一つを除いたほかは人爲的原因といひうるもので、ナポレオンの人々と彼の凡ての機關とが、少なからず消耗したことを語つてゐる――皇帝自身をも加へて。近侍の一人がエルバ島から歸つた折の彼を評して、『私はナポレオンの天才體力共に著しく衰頽したことを信じないわけに行かなんだ』と言つてゐる。

算を亂して潰走した兵卒の間に雜つて、ナポレオンは單身落ち延びた。本營では彼の姿を見失なつたので慌て、捜索すると、程遠からぬ路傍の茅屋で慘めな樣をした彼を見出した。折好くそこへスール元帥の馬車が來たので、人々はそれへ彼を乘せた。これで彼は四たび不幸の中に戰友を棄てたのである――前には埃及と西班牙とスモルゴユで。

二十一日に彼は巴里へ着いた。彼は約七日間といふものは續けて馬上にあつたので、恐ろしく疲れ込んだ。例の

シエはその時臨時政府を組織してゐたが、議會を使嗾して彼に反對せしめた。そこで彼は第二回目の退位を宣告し、厭厭ながら夜陰窃かに巴里を出奔し、ロッシュホール港に落ち延びた。それは七月三日であつた。

彼はそこから亞米利加へ逃げるつもりであつたが、時既に遲かつた。で、自ら進んで英國巡洋艦ベレロフォンに投降した。『余は英國々民の寛大に身を任せる』と云つた。實際それは捕虜となるよりは賢明な仕打であつた。それに露西亞やプルシアや墺太利の手に渡るよりも、彼の屈辱は少なかつた。

英國への航海中、ナポレオンはユーシャン島の影の消え行くを眺めて、頻啜に最後の別れを惜むべく、永いこと甲板に立ち盡した。いよ〳〵その島の影も見えなくなつたので、從者の肩につかまつて船室へ降りた。

ベレロフォン號は彼を載せたまゝ幾日か港にゆれてゐた。その間に英國政府は、彼をセント・ヘレナへ遠流することに決した。當時英國が彼に對して隨分殘忍な所置を採つたことは爭はれない事實である。百の辯解にも拘らず、歷史は仁俠の假面のもとにその敵を苦めたアングロサクソンの汚點を、百年後の今日も拭つてゐない。殊にハドソン・ローの如き頑くなな小人をセント・ヘレナの知事として、ナポレオンの監理を委せたことは、當時の英國人すら批難の聲を放つたほどである。

ウィーンに會合してゐた諸君主は、此度こそはほんとに安心してめい〳〵自分の國へ歸つた。

暗愚なブルボンが再び佛蘭西に君臨した。彼等の第一の惡政はネー元帥を死刑に處したことである。彼の妻女及その他の人々の切なる哀願にも拘らず、佛蘭西の嘗て出したことのない最偉大な軍人は、厭がる兵卒の手で射殺された。やがてこの國には『白い恐怖』の時代が續いた。

* * * * * * * *

セント・ヘレナに於けるナポレオンの住家であつたロングウッドでは、彼を中心として彼に忠實な一團が集まつた。モントロン將軍の一家が彼の身邊の世話をした。ラ・カーズが若い息子を連れてゐた。ベルトラン將軍夫妻はロングウッド

から少し離れて住んだ。そのほかグールゴー將軍と小人數の從者が彼を取卷いた。

こゝでも彼の日常生活は規則正しかつた。彼は毎日定時間をさいて將軍たちに自分の經歷を筆記させた。彼は好んで讀書に耽つた。コルネーユやラシーヌが彼の愛讀書であつた。ホーマー、ミルトンなども讀まれた。初めは戸外運動をやり、晩年には園藝に趣味を持つた。夜は團欒がおもな樂みだつた。皇帝は所在なさに室内をあちこちと歩きながら、自分のさま〴〵な經歷談をして周圍の人を樂ました。歌留多や將棊に彼の加はることもあつた。戸外では岸に崩れる波の音が夜ごと親しく淋しい響を立てた。

孤獨がさせるわざの常でもあらう。彼の人々の間に、斷えざる不平と口論と嫉妬とが行はれた。それをなだめるのは何時も皇帝の役目であつた。氣の荒いグールゴーは、よく憤慨しては皇帝にたしなめられた。或時はモントロンとグールゴールの間に決鬪が行はれようとした。

皇帝の部屋にはジョセフィーヌやルイゼや愛兒羅馬王の寫眞のほかに、過去を紀念するさま〴〵の物が飾られた。つのる孤獨と英國政府の意地惡い干渉とで、島の生活は益々住みにくいものになつた。とかくして六年の歳月は過ぎた。

一八二〇年に這入つてからナポレオンの病氣は次第に惡るくなつた。それは胃癌と知れた。翌年は著しく病勢が增した。四月廿一日に彼は遺言をしたゝめた。彼獨特の周到な用意から、從僕や昔の乳母の末に到るまで、誰もが忘られなんだ。遺愛の品々、形見の金子の額までが詳しく誌し殘された。そして自分の灰は愛する祖國を流れるセーヌ河の畔へ埋めて貰ひたいといふことを書き加へた。然るに英國政府は最も殘忍にも、この希望にさへ承諾を與へなんだ。で、彼の遺骸はロングウッドの庭園内に葬られたが、後に巴里へ改葬された。

五月一日からは高度の熱で、皇帝はとき〴〵妄語を言つた。『スタインゲル、ダザイユ、マッサンナ！』――から彼は壯年頃の將軍の名を呼びつゞけた。彼の夢は伊太利の野を驅け廻つてゐたとみえる。

同月五日は島ぢゆうの大嵐で、ロングウッドの邸の樹は大抵吹き折られた。その中で彼は最期までうはごとに軍隊を指揮しながら死んだ。

（おはり）

勞働問題解決の一案として工業徴募制度を提唱す

法學博士　堀江歸一

勞働問題と富豪

過日東京の某官設工廠に勤務する一職工は余の寓を訪ひ、自ら起草したる職工組合設立の趣意書並に規約草案を示して、批評を求めたり。之を閲讀するに、文字に多少不熟の點あり、論斷に獨斷的の嫌あるを免かれざりしと雖も、大體に於て我國勞働者の當今懷抱しつゝある思想、資本家其他一般社會に對して未持しつゝある感情を披瀝したるものと認められたり。而して文中特に余の注意を惹きたるは、右の職工が新聞紙上に於て某有力者の勞働問題の解決に今後の生涯を送る可しと云へる記事を讀みて、自己の意見書を某有力者に郵送し、且つ何時面談する を得るやを照會し、爾來其回答を待ちたるに、遂に何等の音信に接せざりしと云へる一節にして、余は職工子に就て、某有力者の氏名を質し自ら勞働問題の解決に努力す可しと稱しつゝ、一勞働者に接觸すに冷淡なる彼等の心事を憎惡するの念を禁ずる能はざりき。

勞働問題は近時我國に於て一種の流行を極めつゝあり、隨て猫も杓子も之を口にして止まざるの狀ありと雖も、抑も彼等は何を目的として、此問題を喋々するや、或は單純なる賣名の手段に充てんとし、或は時好に投ぜんとし、或は勞働黨の組織に依て、自家の政治的運命を開拓せんとし、或は資本勞働の間に、今後必然發生す可き衝突を緩和豫防して、以て資本家自身の爲に供へんとするが如き、即ち一部の人士が近時に至りて、益に勞働問題に容喙するに至れる重なる動機なりとせざる可からず、嚴正なる見地より云はんか、彼等の目的は勞働問題に對して眞正の解決を下さんとするに非ずして、寧ろ自家の便宜に使用するものなるのみ。隨て某有力者の如き、口に勞働問題の解

決を唱へて、行に勞働者を冷遇する矛盾を敢てするもの亦怪むに足らざるなり。全國の勞働者中、斯る輩に自己頭上の問題を解決することを託して、晏如たるものあるや否やは、吾輩の知る所に非ずと雖も、要するに勞働者の問題は勞働者自身の實力、知識、行動に依て、之を解決せざる可からず。此覺悟なくして、勞働者が徒に他人に依賴し、以て之を爲さんとするが如き自卑自屈の甚だしきものと認めざるを得ず。吾輩が我國の工業勞働者に向つて職工組合主義に邁進することを勸告して已まざる所以なり。

資本家や富豪の輩が勞働問題解決の衝に當り。或は勞働者を不幸なる境遇より救ひ、或は彼等の爲めに幸福なる進路を開く可しと云ふ。斯る資本家富豪は如何にも稀世の義俠家たり、博愛家たり、篤行家たるが如しと雖も、彼等が思を玆に致せる理由は果して那邊に在りとす可きや。一國勞働者の富の生産に寄與し、社會生活に貢献することの大なる所以を認識し、從來法制を以て、社會の習慣を以て、資本的生産制度を確立して、勞働者を壓迫したるの不公平を確知し、資本的生産制度の根柢に或る改革を施して、以て勞働者の狀態を一新せんとするものならんか、彼等の計畫は極めて壯快なりとす可きも、彼等の勞働問題に對する態度は決して斯く徹底したるものに非ず。現代の資本的生産制度は飽くまでも之を繼續し、彼等自身資本家として占め來れる優勝的地位に居ること既往の如く、唯彼等の領有したる利益の一部分又は一小部分を割ひて、或は之を利益分配制度を實行する資金に充て、或は勞働者の慰安娯樂の費用に供し、一方に勞働者の資本家に對する不平反感を緩和すると共に、他の一方に於ては斯る方便に依て、勞働者の勞働能率を增進し、曩に彼等に與へたる利益を回收せんとするものなるのみ。斯る計畫が能く勞働者の滿足を收めて、勞働問題を解決するに値するものとせんか、天下に勞働問題の如く、解決に容易なるものは、之を求むる能はざるの道理ならずや。

勞働問題と政治家

昨今時として政界の話題に上るが如く、我國に今勞働黨組織せられたりとして、能く勞働問題の解決に資するを得べきや否や。勞働黨の組織には此條件として、普通選擧を必要とし、議員に對する歳費の給與を必要とし、鞏固なる職工組合の存立を必要とし、而して更に此職工組合が擧つて政治運動に參加する意思を有するを必要とす。是等諸要件中、普通選擧の一事は必ずしも絶對の必要條件とする能はず、制限選擧の下に於て、此制限比較的寛大にして、勞働者自ら選擧權を獲得するに難からざる場合には、勞働者の勢力を政治社會に波及するを得べし。現

國に於ても今回政府に依て提案せられたるが如き選擧法改正の成立したる曉には、從來と聊か面目を異にし、勞働者中誠實に所得の申告を爲す者は選擧權の一要件たる直接國稅の納稅者として、選擧權を獲得するに至る可し。然も彼等は勞働者としての利害を如何なる團體を通じて、世間に發表し、又如何なる勢力を後援として社會に行動す可きや、一個の疑問なりとす。

玆に於てか、政治家中、社會的勢力の消長に就て、觀察を怠らざる者は早くも勞働者の勢力の社會的に將た又政治的に勃興す可き機運に居ることを看取し、自ら勞働黨を組織して、勞働者の爲めに、犬馬の勞を取るを辭せざる可しと云ふ。思ふに斯る輩は我國に於て國民が到底在來の如き、將た又新に改正せらるゝ選擧法に於けるが如き制限選擧殊に納稅金額を標準とする選擧權制度に滿足せずして、普通選擧を要請す可く、國家亦之を容れざるべからざることを豫想し、普通選擧の下に、勞働者が一個の社會階級として、多數の選擧權を掌握するの機會を利用せんとするものなる可しと雖も、斯る政治的野心家と結合することが果して勞働者の利益に適合するや否や、將た又斯る野心家に依賴せざれば、勞働者は其社會的地位を上進する能はざるや否や、吾人の共に一考を要する所なり。

我國現時の勞働保護立法が其外形に於て、又其精神に於て、極めて幼稚なるは、吾輩の常に痛嘆措く能はざる所なりき。今や講和會議の議題に上れる國際聯盟規約の草案には國際間に於ける勞働者保護立法を統一するの議あり。我國の如き幼稚なる保護立法を有する國が勞働時間の制限に、婦人幼年工に對する操業上の保護に、將た又最低賃銀の決定に最も進步したる制度を有する英米兩國若しくは濠洲諸殖民地、加奈陀等と能く協調を保ちて、保護立法の統一を謀るは甚だ困難にして、講和會議に於ける我國代表者は斯る問題に接する度每に、我國社會的制度の亂雜蒙昧なるに就て、深く耻づるの念なき能はざる可し。

斯るに就ては、我國民として將來に施設を要するもの多々あり。第一工場法を修正して、幼年工並に婦人の勞働時間を短縮し、殊に彼等の夜業を禁止するが如き、第二職工組合の組織を奬勵し、勞働者をして團體的行動に依て、各自の利益を防衞するの手段に出でしむるが如き、第三職工組合に屬する能はざる下級勞働者の爲めに、最低賃銀制度を設け、彼等の勞働報酬の低下せざる限度を法律に依て保障するが如き、第四勞働者の爲めに各種の保險制度を設けて、失業病傷等の危險に對して、完全なる保護を加ふるが如き、第五現行工場法中、勞働者が從業中自己の過失に基かずして蒙れる傷痍に對して賠償を與ふる義務

を傭者に負はしむる諸規定を修正し、職工賠償法として獨立の法律を制定するが如き、第六國民養老年金制度を設け、一定の年限以上內國に於て勞働に從ひ、老後生活を維持するに必要なる所得を收むる能はざる者に對して、國家に於て一部の收入を給與するが如き、我國の將來に必要なる勞働保護立法を以て見る可きものなり。然らば斯る法制は、我國に勞働黨の組織せらるゝ爲めに、特に一段の進步を爲すを得るやと云へば、吾輩は其然るを信ずる能はず、勞働者にして職工組合の下に鞏固なる團結を組織し、既成政黨中、勞働問題の解決に誠意を有する黨員の選擧運動に援助して、政黨の內部に漸次勞働問題を尊重するの風を盛ならしむるに於ては、勞働黨を組織するまでもなく簡單に目的を達するを得るの道理なりとせざる可からず。

工業徵募の制度

即ち、我國の現狀に就て言はんか、勞働者が勞働問題を解決するに就て、資本家に依賴することも、將た又政治家に依賴することも、共に不可なり、又無用なりとせざるべからず。是等三者は階級的に分離せられたるものにして、其思想に於て、感情に於て、何等聯絡の通ずるものあるを知らず。此事たる、畢竟我國が諸般の形式的制度を設くるに忙はしく、不知不識の間に、社會の諸階級に踰越す可からざる障壁を築きたるの結果とす可く、當路者自ら、我國に階級の別を釀成しつゝあるの觀なき能はず。內閣制度の設けられて既に三四十年の永きに及ぶと雖も、此間職工勞働者より出でて、閣班に列したる者は一人として之を求むる能はず。某々氏等が巡査邏卒より身を起して、閣員に上れりとすれば、世人は之に對するに驚異の念を以てす。然も是等は明治初年諸般の制度尚ほ亂雜なる時代に釀成せられたる變則的事實にして、今後再び繰返さるゝや否やを必する能はず。資本家に就て見るも、越後の魚賣りや、橫濱のおでんやが時運に投じて、巨富を占め、一代の豪商と爲れるが如き事實は往時に之を求むるを得べしと雖も、今日に於ては成金者流の間にも、秩序的に學問を修め、修め得たる所を實際に應用しつゝある間に、致富の機會に乘じたる者少なからず。即ち今日の狀況を以てすれば、資本家たる可き者は當初より資本家たるの運命を荷ひ、勞働者たる可き者亦其運命を强ひらるゝものとす可く、更に資本保護に關する幾多の法制と社會の秩序習慣とは世襲的資本家に對して、世襲的勞働者の輩出する勢を生ぜしめざれば已まず、斯の如くにして、社會に階級的反感を生ずるに至るは當然の數とす可きなり。

斯る階級的反感を一掃し、社會的調和を求むるの方策に至つては固より少なしとせず。唯吾輩は今日の機會に於て一個の提

案を試みんとす。其は所謂工業徴募の制度を設け、總て全國の壯丁をして或る年間自己の好む所の工場に於て、或は國家の指定する工場に於て、勞働に就かしむること恰も今日の徴兵制度に於けるが如くするもの是れなり。徴兵制度が「ミリタリズム」の見地に於て必要なりとすれば、工業徴募の制度は「インダストリヤリズム」の見地に於て必要なりとす可し。徴兵制度が今回の講和會議に於て、諸强國を通じて廢止の運命に逢着するや否やは、之を知る能はず、假に徴兵制度にして廢止せらるゝものとせんか、之に代つて工業徴募の制度を行ふは最も容易なりとす可く、又前者の廢止せられざる場合には、全國の壯丁をして前者と後者との一を選擇せしめ、其好む所に服役せしむるを可なりとす。蓋し一國の國防は生産と相伴ふを要し、軍備は軍需品工業の盛大なるものあつて、之を完成するを得るは、今回の歐洲戰爭に於て交戰諸國の悉く實驗したる所にして、如何なる國も軍需品の製造に特殊の技能を有する者に限り、兵役の義務を免除したる事實に徴するも、兩者の關係の如何に密接なるやを知るを得べし。斯く觀察するときは徴兵制度と工業徴募制度とは互に相繋聯して、其一を離別す可きに非ざるなり。而して後者の勞働問題に對する關係を考ふるに、全國の壯丁が盡く或る期間或る工場に於て勞働に就くときは、第一彼等をして勞働の何ものたるやを理解し、眞に勞働の苦痛を嘗め、又勞働に伴ふ愉快を味ひて、勞働者に對する同情を懐かしむるを得べく、第二社會諸階級の壯丁が一團と爲りて、一の仕事の爲めに、勞役を勵まんか、彼等の間に共同の利害關係を生じ、思想感情の融和を來すを以て、彼等の一部が資本家の階級に轉じ、他の一部が依然勞働者の階級に留まるも、兩者の關係は圓滑なるを得べく、第三國家の必要とする場合には、今日よりも多く特殊の工業に熟練ある勞働者を容易に召集するを得るの利益ある可し。

余は好んで勞働問題を攻究し、又勞働者の經濟上、社會上に於ける境遇に對して大なる同情を寄する者なり。然も余は精神的勞働に就てこそ經驗を重ねたれども、肉體的勞働に對しては一の經驗の徴す可きものなく、隨て勞働者現時の生活若しくは勞働狀態の彼等に取つて苦痛なる可しと云ふが如きも、亦一個の臆斷にして、余が勞働者に寄せつゝある同情も純正のものなりや否やに就て、時に惑ふことなき能はず。世間勞働問題を論ずる諸氏に勞働の實驗あらんか、其議論に色彩を放つ可く、資本家並に政治家に勞働の經驗あらんか、前者の勞働者に對する處置に於て、後者の勞働立法を制定する上に於て、共に實際の必要に適合して、誤まらざるを得べし。社會階級の關係を調和するの方案は一にして止まらず、前記の如きもの亦其一案たる

可しとして、茲に提唱したる次第なり。所謂勞資併合制度の下に、勞働者をして一部の出資者たらしむるは、勞働者に資本家の所爲を學ばしむるものなり。然らば之に對して資本家をして擬似勞働者たらしむるの策を以てするも亦一の妙法たるを失はざる可し。平民内閣組織せられて平民宰相、内閣の首班に居ると稱するも、新聞雜誌中殊更に平民宰相の履歴を報ずるに當つて其東北大藩の家老格の出なることを特記して、一般人民の尊敬を買はんとするが如き輕佻なる風ある國に於て、民本主義が主張せられ、勞働問題の解決が提唱せらるゝは、頗る不釣合の感あるを免かれず、勞働問題を解決するには從來國民の腦裡に固着したる舊思想舊習慣を一洗するを以て先決問題とするを必要とす可し。是れ吾輩に斯論ある所以なり。

武備精神と人生の活動

文學博士　姉崎正治

軍國主義、精兵主義、徴兵制度などが問題となつて、賛否是非の論難が隨分現はれて居るが、其の多くは意見見解であり、或る前提を立ててそれで論議を進めて居る。自分は此の如き見解の論戰以外、更に事實を出發點として歸納的に此等の問題を研究したいと考へ、日本の歷史について思想信仰と武備精神との關係について、數年前から考究を始め、又ドイツの軍國主義についても同樣の研究をなし來つた。然るに此等の結果を纏め得ない中に、大戰の動搖や其の終結に際して、世間に隨分無謀な臆説や大膽な意見が出て、其が實際問題にもなるのを見て先に軍國主義（特にドイツの）に關して少しく評論を公にした。そこで十分に研究の結果として發表し得る前に、武備精神にして世に問ふ必要に迫られ、特に水野大佐の評論に關係して、此の問題についての意見を公にすべき運命に迫られた。然るにフランス大學へ講義に行く爲に其の準備に忙はしく、特に講義の題目が天然感情であつて、全く武備精神と縁の遠い方面に頭腦を集中して來た爲め、先に本誌で豫告した約束を、出發前に

果す事が甚だ覺束なくなつて來た。然し明朝の後まで約を果さずに居るのも心苦しいから、茲に極めて大綱だけを公にして、約束の一端を果すの已むを得ざるに至つた。

*　　*　　*

自分が玆に武備精神といふのは、軍事思想といふよりも弘く且つ深い人心の狀態を指すので、人が個人としても又團體としても、自ら守り自ら信ずる所を貫く爲に、其の主義の爲めの生存並に精神を犯す者(卽ち敵)に對して武力を用ふる事をも辭しない精神である。之に對して軍事思想といふのは、此の武備精神を實際的に組織して武を用ふるに當つて、如何に之を實行するかといふ研究、考案、方策をいふ。此の二方面が密接に聯關して離すべからざる事は、自分も十分に之を承知して居る。又人生の事は、精神主義のみでは實際の力とならず、主義を充實して意氣を鍛錬する爲めには、實行の組織案配を要する事も、萬々承知して居る。(知行一致といふのも此處の事で、現代ではプラグマテズムの心理學が能く此の關係を研究して居る)。然るに、軍國主義者の思想は、常に實行的組織の方面を偏重し、軍事思想は之を鼓吹するが、其の方策方面に拘泥する爲に、根本の武備精神について人生全般に關聯する意義を輕視する傾が明かに見える。卽ち武備を實力といふ方面から觀察する爲めに、この精神的根柢に到らず、其からして種々の弊害をも生ずる。

此等の弊害は、要するに黷武といふ一點に歸着し、手段たる武を目的と誤り、力を賴むが爲に、力の用ひ處を誤るといふ事になる。之に對して武備精神は、どこまでも義を守るを目的とし、武力を其の一手段とし、此の手段も不義の敵に對してのみ用ふべきといふ一點を失はない。孫子が『道』として論じて居るのは此の精神であつて、之を現代的に云ひ換ふれば國防の大本を國民全體の正義信仰に置き、此の精神的結合を以て不義を拒ぎ退けるにある。此の大本を確立して、之を實際の組織に實現し、武の用處を辨ずるのが、卽ち『道を修めて法を保つ』であり、一切武德の根本を一の『誠』に置けば、武備は人性の基礎に立つ事になる。近頃の軍事意見に此の大本が一向に現はれて居ない事は、僕の特に遺憾とする所である。のみならず、道や誠を無視した力や利の論點が特に多い事に於て、日本の軍事思想界は、確にドイツ軍國主義の僻見に陷つて居る。僕が今の軍閥者流に反對するのは、大本の此の一點に歸着し、其から生ずる結果に於ては、實に軍國主義が、國の內外共に大なる禍をなしつつあるを見る。

此の如く武備精神を見れば、其の根本が個人人格の確立にある事は、殆ど云ふまでもなからう。『山中の賊を破るは易く、心

中の賊を破るは難し」といふ古人の言は、實に武備精神の心髓であつて、武强の國又は人が外敵に勝つて、却て內部から破滅した古今東西の殷鑑、數多いに拘はらず、其の覆轍を踏まうとする人は常に世に現はれる。軍事思想を攻擊精神の一面に偏しては、終に義を守る心を一轉して他を侵す心になり、人心の機微、人生の活動を基本として其上に築き上げるべき軍事を以て却て人生を支配せうとしては、終に國家を單に權力の主體と見、人間を軍事の奴隷として、其極は國を亡ぼし、人世を轉覆する。是れ皆、軍事といふ組織を本位にする爲に、人生の基本を忘れ、人格の生命を無視する爲、卽ち武備精神の意義を誤まつた爲である。

一般に人格の確立といへば、甚だ空漠の感があらうが、一例を取つて、規律訓練といふ點から之を說明して見やう。

人間が社會的生活を遂げる上に於て、消極的には相互交讓の爲に、積極的には共同動作の爲に、規律を要する事は、今更說明するまでもない事である。此の如き意味の規律生活は、人生全般に亘つた事實であり、規律の精神と事實とは、家庭にも學校にも、又街上でも車中でも、社會何れの方面にも行はるべき事、而して此等諸方面に於ける規律生活は相互刺戟し扶育すべきである。軍隊生活に於ける規律も此の全般の規律の一發表であつて、軍隊の規律生活が他の方面に勢力を及ぼすと共に、他の方面の規律生活は又軍隊にも反映する。人間の精神は、方面を異にするに從つて多少は活動の樣態を異にするは勿論ながら、其等の諸方面に密接の聯絡があり相互の影響のある事も、亦忘れてならぬ重大事である。且つや一般社會に於ける規律の振興は、結局各個人の精神が、根本に於て社會生活の意義を體認して、自ら進んで規律に服すると共に、自發的に規律を增進し、規律を創作して之を新狀態新事情に活用して始めて行はれる事である。卽ち規律が單に死んだ形式となつて、徒に人を束縛するのみにならない樣に、新鮮な生命を以て社會に活躍し生活の變化に應ずる樣にするには、規律訓練に關する個人自發的精神の發動を要する。されば此の如き意味での規律生活、卽ち規律訓練の個人的基礎と社會的發達とを、武備精神に應用して見れば、軍隊生活に於ける規律が獨立の事實たらざるは勿論、又社會全體人生全般の精神と相離るべからざるは明白の事である。然るに、現在、日本の軍人が其の生活に特有な規律といふ觀念を出發點として、之を他に及ぼさうとする態度は如何。一々の事例を擧げるまでもなく、靑年團に對し、學校敎育に對する彼等の態度だけを見ても、そこに本末轉倒ある事は明白で、其の結果は却て靑年の反抗心を激發しつつあるではない

か、其の不結果が軍隊内部にも生じつゝあるとの事も、屢ば耳にするが、此は一々述べずにおきたい（實際問題としては、陸軍幼年學校を廢止すべきである）。

其他、國家總動員といふ觀念や徴兵制度の内容についても、同樣の觀察を下し得る事は多いが、要するに、武備精神の根柢に、人間を心の底から動かすべき德義精神がなくば、百の軍備も、周到の動員計劃も、畢竟砂上の宮殿に過ぎない。國民に社會生活の本義が徹底し、此の本義より生ずる義心が武備精神となり、此の如き武備精神が發して國防の軍備となつて始めて充實した軍事思想といひ得る。然らば、武備精神の眞相を研究し、其の意義を發揮するには、人生全般に亘つた思想の基本を要する次第であつて、此の大本は決して軍事思想を專門とし、其の方面に偏した人々、特に閥的、階級的思想に充ちた人々の能く支配し得る所でない。大戰中から今日に至るまで、世に公になる軍人の言論を見れば、彼等が果して武備精神の根本を握つて居るか、將た又階級的思想で動いて居るか、敢て辨論するまでもなく見える。

武備精神は人生の一面である。軍事の爲に存する人生でない。軍事本位の社會生活、即ち軍國主義でなくば、國家は成り立たないと考へる人は、富強亡國といふ壇上に國家を犧牲として捧げる人である。

縦の世界を支配せよ

醫學博士　永井　潜

▽

『行けど行けど至らぬ空を慕ひつゝ
登るや人の心なるらん』

之は故操山大西文學博士が、進歩向上を冀ふて已まざる人の心を詠んだものであるが、人は此俘き負け嫌ひの精神を、神に近けんと努力するのみならず、其身體を生理的關係より超越し

て、中天高くに翺翔せしめんとする欲求を有つて居る。人間の人間たる所以は、實に自然に征服せらるる代りに、此尊き負け嫌ひの精神によつて自然を征服せんとするにある。自然の征服即ち文明である。而して自然の征服は從來專ら廣さと幅の上に成された。換言すれば彼の仕事は地球の表面に於て專ら其偉力を逞くしたのも、其身體の生理的關係が魚の如く水に泳ぐ能はず、鳥の如く空を翔ける能はざりしが故であらう。一般の陸上動物が其生活を地面に營むが如く、人も亦地面を利用し、或は航海の術によりて水面を手中に收めて居たのである。然し乍ら人間の已み難き欲望は、單り此幅と廣さとの世界に滿足する事能はず、今や更に進んで天空と海底に通ずる縱の世界の支配をも掌握せんとするに至り、九天の下に翔り九地の底に潜る事が、單なる形容の辭にあらずして事實の文字なる事を立證し、此新たなる無限無邊際の領域に於て最も自在に活動し得るものが、今後の世界に於ける最大強者たらんとするに至つた。

自分は曩に海軍省の囑托を命ぜられて、一日横須賀の軍港を見學した。最初に參觀したのは水雷學校であつた。其處には多くの水雷が横へられ、其新造補修の爲め幾多の熟練の手が忙しく働いて居た。次で又無線電信及び無線電話の裝置と使用の教棟を觀た。水雷と言ひ無線電話と言ひ、之れ皆縱の世界に於けるゝ智の活動に他ならない。自分は次いで潜航艇に導かれて、親しく其内部の構造を觀察するを得た。亞いで小蒸汽に送られて追濱の飛行場に達し、特別なる好意により、一名の同乗者と共にモ式飛行機に搭乘して、約半時を天空界の人となる事を得て、下界に於て想像し得ざる壯快な氣分を味ふを得た。潜航艇と言ひ飛行機と言ふ、之亦向上を翼ふてゝまざる人の心の具體化である。自分は此一日の見學によつて、向後縱の世界の支配が人間の發展に如何に重大なる意義を有するかを泌々と感得したのである。實に此縱の世界の支配が如何に重大なる意義を有するかを最も適切に立證したものは、這次の有史以來の大戰であつた。さり乍ら縱の世界の支配は戰爭に止まるべきものでなく、此戰爭によつて進歩し訓練されたる縱の世界の支配者は、今後平和の戰爭に、如何に之を活用するかを刮目すべきものがあらう。斯かる見地より、現代の文明國が、此縱の世界の支配者たらん事に如何に努力しつつあるかを一瞥するのは、戰塵漸く洽まつて、更に平和の世界戰に移らんとする此際に於て無意義でもあるまいと思ふ。

▽

人が望んで達する事の出來なかつた天空界を、鳥は思ふがまゝに支配して居る。人はこの羨むべき自由を鳥から學ばんと企

てた。或は鳥の身體の構造、就中翼や搦の筋肉の有樣を調べ、或は又其運動狀態を細かに研究した。藝術家として理學者として曠古の天才と唱へられた伊のレオナルド、ダ、ヰンチは百年も前に既に此の目的から鳥を仔細に研究して居る。運動生理學で有名であつたフランスのマレーは鳥の飛んで居る有樣を、早取寫眞の列に取つて正確に觀察し「鳥の飛む」と題せる著書を今より約三十年の昔に公にした。飛行家として有名なるリリエンタール氏の如きも、鳥の研究に非常なる努力を拂つた。然らば人は相當なる仕掛けを、手や脚に付ける事によつて自分の筋肉の働きによつて、鳥の如うに自在に空中を翔け廻る事が出來るであらうか。若し夫れが出來るならば、それに勝した便利で且つ安全なる航空法はないのである。價格高き發動機の費用と危險と取扱ひの困難と、凡て是等が一掃されて、人は己の意の欲するがままに樂しき飛行を爲し得る譯である。然し乍ら悲しい哉此樂しき希望は全く裏切られたのである。土に生れて土に埋めらるべき運命を有つた人の身體を蒼空に高めて、己れの膝許近く近づかしむべく、神はそれほど容易く恩惠を人に與へなかつた。物理的に生理的に人は到底彼の身體の力に由つて其身體を空中に浮べる事は出來ないのである。然し乍ら彼の身體が爲し能はざる所のものを、人は彼の智識の力に由つて、成し能ふに到つたのである。神は人に此限りなき凡ての力の泉を惠んだ。

人は何故に彼の身體の力に由て自分を飛行せしむる事が出來ないであらうか。之に關して近時有名なる生理學者ツンツ氏は極めて興味ある報告を出して居る。言ふ迄もなく物體が一秒間に落つる距離は四・九「メーテル」であるから、此落下に對して落ちないやうに空中に身體を支へて居る爲には、體重一基瓦につき、一秒間に四・九基瓦「メーテル」の仕事を、成さなければならぬ。其處で假りに七〇基瓦の體重を有つた人が唯空中に身體を支へるだけの爲めにも、

70×4.9=343基瓦メーテル= 4.57馬力

の仕事を費さなければならぬ。ツンツ氏の研究に據ると、人が最大の努力を行つて山登りをする時に爲し得らるる仕事の最大限度は一秒間に二馬力卽ち一五〇基瓦「メーテル」である。而も斯樣な極度の勞働は稍々三十秒間しか續けて行ふ事が出來ない。元來人が一基瓦「メーテル」の仕事を爲す爲めには一・三立方「センチメーテル」の酸素を消費するものである。其處で今述べたやうな極度の勞働を三十秒間續けたとすると、其際には

1.3×150×30=5850 立方「センチメートル」

だけの酸素を空氣中から攝取しなければならぬ。併し乍ら此分量の酸素は實に同一の人が絕對安靜の下に要求する酸素量の四

十八倍に相當するのである。斯の如き多量の酸素は到底人が攝る事の出來ない分量である。之に由つて觀ても何等か適當なる他の動力の助を假るに非ざれば到底空中に身體を支へる事すらも出來ないのである。況んや風等の抵抗に打克つて自由に飛行するが如きは到底許されざる所である。

翻つて又筋肉の排列に就て考へて見ても、鳥の翼を動すべき胸筋と、人の胸筋とを比較して見ると非常な相違がある。例へば鶺鴒の翼を動す筋肉は非常によく發達して居つて、全體重の一四%を占めて居る。尚之に加ふるに翼を背の方に上げる働きある筋肉を勘定に入れると、體重の一九%を占める事になるのであつて、殆ど全身の筋肉の半分の重を占めるのである。然るに人の胸筋は到底斯の如き發達を遂げて居るものでない。且又骨の構造を見ても、鳥の骨は中腔の所が非常に多くて輕く且強く造られて居る。元來生物の活動の根原となるものは、食物によつて攝り入れらるる潜勢力であり、而して之が空氣中から攝る酸素によつて酸化されて、熱及其他の勢力を發現し得るのであるが、此際動物の大きい小いと云ふ事が非常な關係を有つのである。

今茲に大小の二の動物があつて、大い方がP小さい方がpなる體重を有つて居るものとすると、酸素の消費量は體質の立方根の二乘に正比例するものであるから、Sを以て大なる動物の酸素消費量、sを以て小動物の酸素消費量とすれば

$$S : s = P^{\frac{2}{3}} : p^{\frac{2}{3}}$$

隨つて體重一[illegible]に對する酸素消費量は

$$\frac{S}{P} : \frac{s}{p} = \frac{P^{\frac{2}{3}}}{P} : \frac{p^{\frac{2}{3}}}{p} = P^{-\frac{1}{3}} : p^{-\frac{1}{3}}$$

今七〇基(約二十貫)の體重を有する人が、安靜時に於て體重の一基一時間毎の酸素の攝取量即ち$\frac{S}{P}$は二一〇立方「センチメーテル」である。其處で上の式に基いて體重二〇瓦の鶺と云ふ小鳥が體重一基に對し一時間に安靜時に消費する酸素量をXとすれば、其の價は

$$210 : X = 70000^{-\frac{1}{3}} : 20^{-\frac{1}{3}}$$

$X = 3188$ ヒガキンチメーテル

即ち鶺は安靜時に於て每時間體重一基毎に三一八八立方「センチメーテル」の酸素を消費するのであるが、人は同じく一時間體重一基毎に僅に其十分の一にも足りない二一〇立方「センチメーテル」の酸素を攝取消費するだけである。斯く小い動物であればあるだけ比較的新陳代謝は盛んなもので、酸素を攝取し炭酸を排泄する分量を、同じ體重同じ時間に付て比較して見ると非常な相違がある。之れ畢竟小い動物は大きい動物に比べて體量の割合に體の表面が廣いといふ物理的關係から導き出され

るのである。

其處で前述のやうに體を空中に支へる爲めには體重一基瓦について毎秒四・九基瓦「メートル」の仕事を行はねばならぬのであるから一時間には4.9×60×60=17640基瓦「メートル」の仕事を爲さなければならぬ。而も上述の如く一基瓦「メートル」の仕事を爲す爲めには一・三立方「センチメートル」の酸素を要求するのであるから、一七六四〇基瓦「メートル」の仕事をする爲めには17640×1.3=22932「立方センチメートル」即ち二二・三二「リーテル」の酸素を要求する事になる。而して此量は靜止時に於ける體重一基一時間に人が攝取し得る酸素量たる二一〇立方「センチメートル」の百倍以上の巨額に當るのである。人は到底斯の如き分量の酸素を攝る事は出來ない。隨つて此點から論じても人は自分の力によつて身體を空中に浮べる事すらも出來ないのである。然るに鷲に於ては安靜時に於ける體重一基一時間の酸素攝取量が三一八八立方「センチメートル」であるから、二三〇〇〇立方「センチメートル」は僅に此安靜時に於ける酸素攝取量の五倍半にしか當らない。隨つて身體を空中に浮べる爲に爲すべき勞働時に於て、安靜時に於ける酸素攝取量よりも其五倍半に相當するだけの酸素を攝ればよいのであつて、此點から觀ても鳥が自分の筋肉によつて自在に飛行し得る所以を明にする事が出來る。雀の如きは安靜時に於ても體重一基一時間に對し七〇〇〇乃至一〇〇〇〇立方「センチメートル」の酸素を攝取消費し得るもので、即ち約安靜時の二倍そこ／＼の酸素さへ攝れば立派に自分の體を空中に支へて行くに必要なる仕事を爲し遂げる事が出來るのである。即ち人は鳥を學んで、而して自己の力に由つて飛ぶ事の出來ない所以を明にし得たのである。

▽

茲に於てか次に起つた考は、種々なる裝置を用ゐて風の力を利用せんとする企であつたが、然し之れ亦思ふやうに成功する事が出來なかつた。之が爲めに少からざる苦心と勞力と生命とを犧牲に供した後、最後に輕便にして而して强力なる動力を借り來り、之を相當なる裝置に付け加へて、自分の體力の及ばざる所を補はんと力めたのである。斯くて米國のライト兄弟等が獻身的努力により、發動機を利用して空中を翺翔し得て以來、歲を閱する事僅々十數年にして、其發達の目醒しき事、驚心駭目に値するものがある。而して之に對する佛蘭西のファルマン、プレリオ、アントワネット、エッヘル、米國のカーチス、獨逸のツェッペリン等の效績が甚だ多大であつた事は言ふまでもない。而して飛行機の數は、昨年春臨時軍用氣球研究會の報告に據れは最も多きは米國で、實に二億五千萬の建設をなすべ

き記錄を立てゝ居る。之に亞ぐものは佛蘭西であつて現に四千五百臺を有し、獨逸は四千臺、英吉利も四千臺、伊太利は千五百臺、露西亞は五百臺といふ順位であつた。現在は夫れと趣を異にするのは言ふ迄もない。更に同報告の示せる所によると一月の飛行機製造能力は米國は七十臺、佛蘭西四十五臺、獨逸三十五臺、英吉利二十臺、伊太利十臺となつて居る。是等各國の征空機關の完備せる事、之を使用する技術の優秀なる事、並に之に要する經費の莫大なる事等をとり來りて、我邦の航空界の現狀に比較せば、恰も是れ燭火を乘つて赫々たる太陽に對せしむると同樣の感があつて、到底其數字を羅列する勇氣がない。更に航空の技術が如何に駸々たる步度を以て進んで居るかは次の二三例を以て明かである。

▽

明治四十二年に於ては一時間の最大速度の記錄は僅に十九里强であつたものが、同四十四年には三十八里强となり、大正三年には五十三里强となつた。更に連續飛行の時間數は四十二年には六十時間弱であつたものが、四十四年には百八十時間弱、大正三年には四百三十三時間となり、殊に最近世人を驚かしたのは太西洋横斷の大膽なる企であつて、ニウファアンドランドよりアゾレスに至る千二百浬を十七時間に横斷し、更にアゾレスより葡國沿岸に至る八百五十浬を僅々十二時間を以て横斷するの好成績に見事成功して居る。又其速度に於ても、假へば東京○○間五十八里二十町を急行列車が五時間十分にして漸く通過するのを、今日の飛行機は僅に一時間にして之を成し得るのである。又高さに於ては最近の記錄に據れば八千「メーテル」卽ち二里一町の高度に達し得て、三十町の高さを有する富士の峻峯の二倍を超ゆるのである。其搭載能力の如きも亦機關銃三門、輕砲三十七粍砲一門、彈丸五十發、爆彈二百七十貫を積載するに堪へ、ツエッペリン航空船の如きに至りては、長さ七百七十五呎、總噸數七十七噸、動力千七百五十馬力の巨體を以てして二十人を乘せ、一時間六十八哩の最大速度を以て二晝夜續航し得る程度にまで成功したのである。是等の飛行機が戰時重要なる任務に服したるのみならず、今後平和の競爭に於ても亦敏活なる交通機關として、時間と空間とを最も有力に支配する上に刮目すべき應用を見るに至る事は決して空想ではない。現に米國の如きは早く既に遞信省に於て飛行郵便に關する試驗を實行し、之が費用として二十萬圓を支出し、四哩半の上空を二十七人を搭載して九百二十哩の遠距離飛行に成功して居るのである。

▽

轉じて深さの世界に於ける活動を見よ。[illegible]

く、潜航艇戰によりて聯合國の制海權を破壞せんとし、驚くべき大膽と熟練とによりて狂暴を逞くした。記錄に據れば千九百十七年末に世界の商船にして之が爲めに擊沈されたるもの千百八十萬噸に及び、同期までに新造及び捕拿によりて其損失を償ひ得たる九百二十萬噸を差引くも尚二百六十萬噸は此犧牲に供せられて居る譯である。若し此勢を以て潜航艇戰が久しきに亙りて繼續せられんか、或は獨逸は聯合國の制海權破壞の目的を達し得たかも知れない。幸にして米國の參戰し、其偉大なる工業力を造船に傾注したる爲め、昨年一月以降八月までの間に、世界に九百七十八萬噸の新なる勢力を得て頽勢を挽回し得たのである。之に依つても我隣邦亞米利加が所謂縦の世界を支配するに如何に多大の努力を致し、其計劃を現實ならしむるかに務めつゝあるか驚かざるを得ないのである。

▽

叙上は各國の征空活動の一端であるが、征空の働きは、單り飛行船の活動に限られては居ない。平和の戰爭文明の戰爭に於て、夫よりも更に偉大なる空中の利用が講ぜられ、人類の縦の世界を支配する努力は、一層進步せる形に於て具象せられ居る事を看過してはならない。空中窒素の利用即ち是である。窒素化合物は吾人人類を始めあらゆる生物體の體成分として、最も必要なる蛋白質を形成するに缺くべからざる資料であつて、生物の肥料としての重要な價値を有して居る。即ち肥料中の窒素化合物を植物が攝取して蛋白質を作り、之を食料とする事によりて、人間は其生存を保つて居るのである。而して此大切な窒素肥料は、從來專ら智利硝石から仰いで居たのであつて、歐羅巴に於ける智利硝石の輸入の如き、年額九十萬噸餘、其價格九千萬圓を越えて居たのである。然し乍ら斯の如き天產の窒素化合物は、素より其量に限あり無盡藏に供給を仰ぐを得ない。學者の推定によれば、此貴重なる智利硝石も採掘されて、現在に於ては餘す所、大約二億二千萬噸に上らない。若し今日の勢を以て採掘を續けたならば僅に六十年を以て盡くると云ふ事である。天產の窒素肥料としては、尚グアノ鳥糞があるが其分量は微々たるものにして、到底無限際の需要に應じ得ない。茲に於て人間生體の生存に缺くべからざる窒素肥料補給の問題が頗大なるものとして研究されたのであるが、比較的近年に至つて學者の努力は遂に空中の窒素化合物を得るの方法が發明せられたるのである。

▽

地球を圍む雰圍氣中に幾何の窒素があるかは、素より正確には測定されないが、空氣の容積の五分の四を占むる該元素、

少くとも其總額四〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇基瓦卽ち眞に謂ふ所の無盡藏なるものである。而も窒素と他の元素と化合すること極めて少きものであるから、從來此無盡藏の財寶も肥料問題の解決に適用することは不可能なりと考へられて居つたのである。然るにバークランド及アイデ氏が電力を應用して非常な高熱を喚び起し、此熱力に依つて酸素と窒素とを化合せしめ、酸化窒素を作り更に硝酸と水蒸氣とを加へ、硝酸及び亞硝酸を作り玆に空中窒素の利用によりて、窒素化合物を人造すべき最初の大成功を收めたのである。バークランド氏等は比較的低廉なる電力を利用せんが爲めに、瀑布多く水力に富めるノルウエーの地を選び、玆に始めて大規模の大工場を設け着着其事業に成效した。之に續いて獨逸に於ても更に一進歩の發明あり、空中窒素の利用の上に、一大革新を見るに至つた。ハーバー氏の研究卽ち是であつて、氏は空中の酸素と窒素とが、其沸騰點を異にし、窒素が瓦斯體となる溫度は酸素よりも十度低き性質を利用し、之に高壓と低溫とを應用して、空中より酸素のみを液化して之を除去する事とし、之によりて純粹の窒素瓦斯を得、更に又窒素に結合して「アンモニア」を作る材料たる水素を、低廉にして多量に製造せんが爲めに、水を材料として水蒸氣を熱せる骸炭中に通じ、之によりて水素及び一酸化炭素の混合瓦斯を得、而して一酸化炭素の沸騰點が水素よりも遙に高き性質を利用して、高壓低溫の下に液化せしめ、一酸化炭素を除き純粹なる水素を作り、空氣中より得たる窒素と此水素を合せ、比較的低溫度を以て「アンモニア」を製造するに至つた。獨逸の如き電力の高價なる地方に於ては最も經濟的方法と言はれて居る。更にフランク・カーロー氏が出でゝ「カーバイド」に空中窒素の利用に當り、高熱の下に電氣を通ずるに依りて、窒素化合物を得る方法に一進歩を加へ、今日に應用さるゝに至つたのである。

▽

窒素化合物が肥料として平和の生活に最も重要なる意義を有するのみならず、又爆發藥の材料としても亦戰時に缺く可らざるものであつて、從來の如く之が原料を專ら智利硝石の如き天産物に仰ぐならば、今次の大戰の如き海上封鎖の勵行せられ、之が輸入の杜絶は直ちに兜を聯合軍の軍門に脫がねばならなかつたかも知れないが、上述ハーバー氏の發明によつて、無盡藏空中窒素利用を得た爲めに、今日迄持ち堪え得たのである。實に獨逸に於て如何に熱烈なる努力を以て、空中窒素利用の道を講ぜられつゝありしかは、次の數字に徵して明である。卽ち獨逸に於て千九百十三年にハーバー氏の製法に依る三萬噸の

ンモニア」を製造して居たものが、同十四年には六萬噸、同十五年には十五萬噸、同十六年には三十萬噸、同十七年には實に五十萬噸の製造を豫想せられて居た。目覺ましき發達と言はねばならぬ。近時亞米利加も亦此事業の重要なるに着目し、莫大の資金を投下して一大トラストを作り、空中窒素製造の大企業計畫を實現せしめて居る事は既に屢々報ぜられて居る。我邦でも高峯博士の盡力に依り、米國の大規模計畫の一部を引き受けんとするの希望が遂せられんとするやうであるが、其の他無線電信と云ひ、無線電話と云ひ是れ皆人の力が縱の世界を利用せんとする努力の賜に外ならぬのは言ふ迄もない。之を要するに如上の說明に徵しても、人間の生活が今後此無限の新たなる領分に向つて、試みんとする活躍には測り知るべからざるものがある。而して此の活躍に於て優勝者たるものは、やがてまた今後の社會に於て最高の權力を掌握するものたるは疑を容れない。此優勝者たるべき大努力が吾國と海を隔てて相對峙せる大共和國に於て、最も大規模に實行せられつゝあることは、我國の將來を思ふ有識達觀の士の片時も看過すべからざる現象と信ずるのである。

軍閥外交の成敗

文學博士　三宅雪嶺

一

政府の最大要件は部内の統一にある。政令二途に出づる事は最も警むべきであつて、明治新政府の成立する時、先づ此點に注意した。然し創立の際、統一が難しく、力ある者は隨分勝手な事をするので、長州で薩の西郷の下に統一しようと言ひ出し、薩州で長の木戸の下に統一しようと挨拶し、此二人を中心とするに拘りながら幾許もなく事が難しくなり、薩州の中でも長州の中でも分れ、隨分面倒であつた。いろ〳〵紛擾ある內、大略武斷派と文治派とに岐れる形を呈し、征韓論の破裂は、武斷派が力を恃み過ぎ、文治派に背負投げを食はされた所がある。吾

吾が連袂辭職すれば跡が立ち行くまいと考へた所、文治派が裏を掻いて準備を整へたのである。

征韓論の主張者は西郷一派であり、後から見れば軍閥外交の實を示して居る。けれども當時文武の分業判明せず、何人でも臨時に兵を卒ゐたのであつて、軍閥の壓迫と言ひ難い。裏には裏があり、土と肥とが薩長に當るに苦しみ、薩をして朝鮮に力を伸ばさしめ、之を籍りて長を壓服し、やがて薩の力を殺がうとした所もある。薩は制し易く、長は制し難いと見ての事である。實に裏には裏があるが、兎も角表面に於て文治派が武斷派に勝つて居り、文治派は其勢に乘じて種々劃策し、西南役に勝利を得、充分に權力を占めた。

二

然し此統一は統一であつても、一方に偏した統一であり、何かにつけて短所を曝露する。内治を先にし國權に及ぼすと云ふので、事無かれ主義に傾かうとする。當時兵力を以て國外に爭ふなど全く考へ及ばなんだ。征韓論は無謀の事、支那との戰爭は痴人夢を説くの類とした。陸海軍に膺る者は智惠の無い連中の事、智惠の有る者は他に力を伸ばすべきであるとし、戰略を以て鳴る山田は法典編纂に從事し、絶えず軍職に勸め來つた山縣さへ内務に任じ、自治制を整へる事になつた。小西郷も軍事以外の職に就き、文部に當つた事もある。大山も警視總監に成つたりした。軍人が餘り幅が利かず、軍閥があるにしても政治に容喙する事が出來ず、容喙しようとも思はぬ。山縣も政治について伊藤と爭ひ得るものと思はなかつたらう。其中で山縣が大山と共に絶えず軍事に携り、軍人の先輩と看做され、西郷以後に大將と成つたのは親王以外先づ此二人である。

三

所がまだ軍閥と稱すべき程のもの無く、軍閥の出來初め、次いで發達したのは我陸軍に於て獨逸を學んだに基く。獨逸が佛國に勝つた後、日本で陸軍を佛式より獨式に變じ佛人の反感を買つたが、それでも獨式は外見に過ぎず、山縣が參謀總長に成つても特別に變つた事がない。獨逸軍制の骨髓を得て居らぬ。大山に隨行して獨逸に往つた川上、桂等が歸つてから頓に獨逸の色彩を鮮明にした。軍事のみでなく政治も獨逸に則る事になり、文治派の首領とも云ふべき伊藤も、何程かビスマルク冠ぶれして居る。日出の勢なる獨逸は何事にも模範となるを免かれぬ。先に武斷派に對抗した文治派も、自由民權運動に對し自分の位置を鞏固にする必要からでも獨逸に則るを得策とし、何でも獨逸式と云ふので、陸軍は徹頭徹尾之に據り、習ひ方の足らぬのを憂ふるのである。川上が參謀次長となり、後ちに總長と

なつたのは其機運に伴ひ、恰も留學から歸つた大學教授が、西洋で筆記した所を教場で述べるやうな調子がある。古い連中は何とも口出しやうがなく、新しい連中が感心する許りである。偶々メッケルが陸軍大學に新式の教へ方をし、愈々獨逸の有難味が分つて來た。何でも獨逸を持出しさへすれば周到なしに通過し、獨逸と云はねば事の搬びが着かぬ。其處で參謀本部は獨逸參謀本部の高弟と云ふ格に成り、實際よく學んだものである。昔から素養もあり、熱心に勉强した甲斐が現はれたと云ふ者、川上一人の功でなく、之を助けた者の力も多いが、川上の參謀本部は他の官廳に比べ設備が最も整ひ、參謀本部は智識の淵叢と見られるに至つた。其頃の外務省の機關に比ぶれば確に手が痒い處に屆いて居る。日本の利害に關する事は參謀本部の方が早く知らうとし、而して之を當前の事と考へて居る。

四

獨逸が佛國と戰つた時、ビスマルクは對外外交よりも對内外交を困難とする旨を語つた。佛國に對して要求する事は難しくない。既に戰勝を得た上何とでも云へる。然し戰役以前に聯邦を纏めたり、講和談判に軍人及び國民を滿足させるのが難しい。アルサス・ローレンを取るのは後に禍を貽すけれど、之を取らねば國内に騷ぎが起らうと言つた。ビスマルクは果して二州を取るの意なきか、軍閥に餘儀なくされたか。餘儀なくされたやうな顏をして二州を取つたか、其邊は斷言する事が出來ぬ。ビスマルクは他人の事のやうに言ふ癖がある。自分の考でも皇帝の御意見とする。ナポレオン三世も其手に罹つたと殘念さうに言ふて居る。二州を取り、後佛國をして絕えず復讐を思はしめたのは、ビスマルクが餘儀なくされたのでないかも知れぬが、軍閥が既に大なる勢力をなして居るを疑ふ譯に行かぬ。ビスマルクから見ればよく軍閥を利用するを得、軍閥から見ればよくビスマルクを利用した事になる。獨逸既に軍閥の力ある以上、日本で軍閥の力を增したとて他人は彼れ此れ言はれなくなつて居る。川上の獨逸に居る頃、モルトケは老年で執務して居つた。後幾許もなく歿したが、斯く著名なる元帥こそ出でざれ、參謀本部はいよいよますます整頓し、他の列强も之を參考せずに居れぬ。日本でも明治二十二年川上が先帝統監の下に尾張で獨逸式の大演習を擧行し、後五年にして支那と開戰するの段取となり、支那との戰役は演習よりも容易なりと感じた。そこで遼東を取る取らぬの問題が起り、之を取つて三國干涉を招き、其結果露國との開戰の準備に着手し、兒玉參謀次長が總參謀長となり、日本の戰勝を以て結果を告げる。

川上、後田村が希望を囑せられたが、其歿後生涯を參謀本部に

委ねやうとする者が無く、總長は飛入りの御客分たる形あるが、比較的設備が整つて居るので、東亞細亞に關し智識の一手販賣のやうに心得、外務省を眼中に置かぬ。外國にもそれ〴〵武官を置き、大使館公使館で知れぬ事を探り得てゐるやうに思ふ。何處でも陸軍の手が屆いて居る。海軍も之に負けぬ氣で手を擴げるが、陸の事は陸軍に敵はぬ。參謀本部の設備の整ふのは、外務省の管轄內に侵入するといふ事になる。實際參謀總長を勤むれば首相の候補者と成り易く、兒玉が曩に總長となつたのも首相となるべき順序であつた。兒玉は實に日露戰役の立て者であり、猛烈に開戰を主張し、又頻りに平和を急いだ。何でも角でも早く平和にせねばならぬとした。小村の外交の諒とすべきは、早く平和にするに斯の如き條件を以て滿足すべしと云ふにある。既に露に勝つたとあつては、參謀本部が一枚看板となるべきであり、外務省の機關が何程發展したとても、これ程に行かず、また外務の發展する程參謀本部に於て負けぬ氣になり、其上を超さうとする。川上の參謀總長頃、假想敵國に對して準備するに忙しく、懸命に骨折り、自分で外交に當らうなど考へると無く、それ程の余地も無かつた。露國との戰役後何人が總長たるを問はず、參謀本部員が總じて氣が大きくなり、國家の事は自分に聽かねばならぬやうな心得方となつた。以前から或目的を定めて人を派遣したが、派遣員が多くなると共にさま〴〵の報告をする。大公使館領事館員の迂濶を告げる。實際外務省管轄に手落ちがあり、それを誇張して報告する。參謀本部では我權力を伸ばさうとの了簡でなく、國家の爲めに外務省に任せて置く事が出來ず、自分は自分で手を着けねばならぬと考へ、部內で考へ付いた所を次長に云ひ、總長に云ふ。總長も捨て置けぬとして陸相に云つたり首相に云つたりする。支那を如何にすべきかと云ふ場合、何分にも土地廣く報告區々であり、閣議で外相が明晰に言ひ切れぬ事が尠くない。外相が明かに禁ずるやうに言はぬが爲め、陸軍關係者は思ひ〳〵に撒んで行く。海軍では陸軍に負けようとせず、何等か異つた態度に出ようとし、動もすれば外務と陸軍と海軍と鼎足の勢になり、それに實業家が加はり、なほ內閣の方針が動搖し、何とも名狀し難い悲喜劇を演ずるに及ぶ。大隈內閣の對支外交は隨分奇妙なものであつたが、之れに代つた寺內內閣も之れに讓らぬ狀態である。

五

軍閥と云へば陸海軍關係であつても、獨逸が陸軍で起つたやうに、軍閥は陸軍を主にする。而して日本の軍閥が外交に與る事獨逸の如く、延いて外交策も之に似て居る。過去の外交は何

國でも多少の弊を伴ふが、大陸式殊に獨逸式は自ら種を蒔き自ら之を刈らうとし、人工的に過ぎる嫌がある。獨逸の如く新に發展する國に於て已むを得ぬ事であつても、隨分無理と聞える事を敢てする。英米は餘り正義人道顔出來る方でないが、自分で種を蒔かず、他で自然に生ずるを待ち之を苅らうとする。既に領土が廣いので急ぐを要せず、溫和しく出掛ける。印度を領有したのは、內實は兎も角表面に於て印度の責任者が曲事を敢てし、英は其爲めに損害を受け、賠償を求むる形に於て出掛け、遂に權力を大半島に及ぼすに至つた。トランスバールを打つにも、その自ら旗を揭げて英人を襲擊してから掛かる。米國は外交を念としないやうで、巧みに領土を擴げて居る。而して皆他國の曲に歸する。墨其哥と戰ひ、西班牙と戰ひ、戰ふ度に領土を擴める。理由は已むを得ずして戰つたとなつて居り、已むを得ずして戰つたと言へる。同じ商賣をしても余ある者は無理をせず、無理せぬだけ苦しい羽目に陷らぬ。余ない者は一つあてが違へば取返しが難しく、何とか無理をせねばならなくなる。それも考へやうで無理しなくて濟む事もあるが、兎角損して無理し、無理して損し、いよ〱無理していよ〱損する。獨逸は丁抹に勝ち、墺に勝ち、佛に勝ち、爾來とん〱拍子で國運興隆したが、隨分無理をする所がある。日本に對して三國干涉したのも、支那に對して宣敎師の殺されたので靑島を得たのも、拳匪事變にワルデルジーを總指揮官にしたのも皆無理を伴ふ。それ程までの事をするに及ぶまいと考へられる。歐洲の外交舞臺に於ても之と同樣の事を敢てし、度重つて他國の同情を失ひ、事實上孤立に陷つた。餘り急いで結果を見ようとし、焦り氣味がある。トランスバール大統領に祝電を打つが如き、餘計な事で英の氣を揉ませる。獨逸が强國として恐れられる間、無理しても仕方が無いと諦められるが、最早力ないと知れば、寄つて集つて虐める事になる。當事者としては功を急ぎ、國家としては損をする事になる。獨逸は遲れ走せに現はれ出で急がねばならぬ事情あるにしても、今少しく思慮せねばならぬ所があつた。我力を恃み過ぎ、誰とでも喧嘩して叶はぬやうになつたのは間違である。力の强い者は兎角力自慢で喧嘩腰にならうとする。それだけ獨逸は恐れられたが、負けたが最後、悲慘な狀態になる。

六

參謀本部の習つたのは獨逸の參謀本部であり、何處へでも手を出さうとする主義である。惡く云へば、ちよつかい主義である。日本の外交は歐米に對して憶病な程正直であり無理をせぬ。それ程までにしなくてもと思はれる事がある。然し無理で

せぬのは可い。歐米に對し信用を損ねるやうな事が少い。日本の要求の容れられぬのは、日本が間違つて居るよりも先方が間違つて居るやうな事が多い。馬鹿正直にしても、正直は惡い事でない。所で歐米に對し斯く氣兼ねしながら、東亞細亞に勝手な眞似をしたりする。而して參謀本部が其邊で最も關係がある。例の獨逸式を持出すのである。何とか面白い事をして良い獲物を得ようとする。然し獨逸と同じく種を蒔く割に良い收獲が無い。世界戰役中は固より唯は置かず、いろ〳〵と工夫したが、支那許りで承知が出來ず、西伯利に一働きしようとした。心掛けは惡くないにしても、何分にも不謹愼になり易く、調査の上に調査を要する場合にも大抵にして決行し、後に始末に困るやうになる。露國との戰役中何うかならうとの自信が隨分功があつた。遼陽でも沙河でも、先の分らぬ時何うかならうとて打つて出で、果して何うかなつた。其調子が今も着き纏ひ、戰爭でない事にも及ぶ。露國の事情頗る複雜、一通りの報告で分るものでない。思想問題なんか何程理解して居るか。戰爭の心算で何處へでも出掛け、意外の事に狼狽したりする。占領地でないものを占領地とし、サーベルで叱り飛ばして後に困つたりする。畢り功を急ぎ無理をする。或時代はそれで通り、又必要と認められた。然し獨逸が屈服した後、それ相應に考へ直さねばならぬ。さしも強國なる獨逸が何故に瓦解したか。獨逸を模範とするものは深く慮かるを要する。今後外交は外務の外交、陸軍の外交、海軍の外交とせず、政府の外交とし、何處までも統一すべきである。然し政府部內の統一を缺くは制度上からも來て居り、殊更ら統一を破るやうな點がある。國政全體から考へ、統一に勗むべきである。國民思想の統一など餘計な事に屬する國民の思想は斯く無造作に統一せらるゝほど單純なものであつてはならぬ。種々樣々な說が出てよい。政府自ら統一すれば何の困難がない。部內の統一を缺きながら、國民思想の統一を思ひ立つは本末を顚倒して居る。（完）

懺悔——代筆事件の告白

ボストン　北　聆吉（寄）

一

余は元來書齋生活の閑寂を慕つてゐ。。書生々活を止めても鳴かず飛ばざる平穩な學徒生活を續けてゐたのが、一昨年一月より娑婆氣を出して、評論の筆を執つたり、公開の席上で講演などをやつたりし始めたのは、寧ろ友人諸君の勸めに依つたのであります。嘘から出た誠とも申すべきか、余は余の興味と能力との沿はない方面ではないかと懸念しつゝも、益々評論壇に深入りして、昨年九月日本を去るまで一年九ケ月の間、思ふ所感する所を、腹藏なく——時に粗製濫造の嫌ある程までに、友人諸君にさへ賣名行爲に近いではないかと心遣はるゝまでに——旺んに發表して、其の論文の分量は優に二卷の單行本を爲すに至つたのであります。本誌にも一昨年九月『第一義生活の提唱』と題する論文を、又昨年九月『妖雲に包まれたる政界の現狀』と題する論文を公にしたことは讀者の御承知のことゝ存じます。余の論文は蒼忙の際餘暇を盜んで一氣に書き上げたものが大部分を占めてゐるから、立論の過程に多大の遺憾はありますが、余の確信を僞なく披瀝したことは、今尚ほ讀者に公言し得る所であります。野村隈畔君が『六合雜誌』上に余を評して日蓮の異端折伏に似たりと稱揚され、加藤朝鳥君が『雄辯』誌上に『若し年月を閲して白髮白髯つぶさに想と文との練磨を經るならば、日本のカーライルたることを豫想しがたくない』とまで評價されたのは、素より過稱の辭であつて、余の敢て當る所でありませんが、余の論文が常に余の不動の確信より生れ出たことは事實です。

勿論余の數多き論文に就いては多少の批難を受けました。例へば武者小路君も『白樺』誌上に於て、余の論文『眞の自由と僞の自由』の一節『基督の心事を以て韓非子の策を行はざるべからざるが現在の時勢である』を捉へて大隈侯以上の法螺であると評されたる如き、山川均君が『無名氏』の名を以て『新日本』誌上に吉野博士と余との論爭に横鎗を入れられ余の所說を批評されたる如き、三井甲之君が『日本及び日本人』に余の哲學的の論文に依つて、余を以て桑木博士と同列の個人的瞑想を愛するものと評され、且つ北氏の主觀は出沒自在なりと好譏を弄せられたる如きは即ち之れであります。併し大體に於て、余の論文は世間の是認する所となり、殊に福田博士が余の郷里の新聞に對して余を以て郷黨の誇なりと稱されたる如き、吉野博士が今日より考へれば少しく酷評に近かりし余の博士に對する批評の大部分を稱讚的に是認せられたる如き、人を稱するに頗る吝なる岩野泡鳴君三井甲之君（三井君は余の政治論に對しては多く是認し且つ辯護の勞をさへ取り與れたり）其他の諸君が過分の御批評

を賜はつたとは年少淺學の自己を顧みて寧ろ慚愧に堪えざる次第であります。加之、余の發表した論文が緣となつて多數の知己を得、渡米後に於てさへ、全然專門違ひの方面の人々に未見の知己を持つてゐたことを發見し得たのは、文筆に携はる者の喜びと云はざるを得ません。

二

然るに昨年八月『中外』誌上に發表した『近世社會主義の檢討』の一文のみは、宿世何等の緣ぞ、學界の泰斗、論壇の雄將、新進の批評家等の總攻擊を受けるに至つたのであります。讀者は記憶されてゐるでせう。余が外遊の置土產として物した『妖雲に包まれたる政界の現狀』なる一篇の載つてゐる昨年九月號の本誌に、法學博士河上肇氏が『マルクス批評家の一模型』と題し、北昤吉君の『近世社會主義の檢討』に就いて」といふ傍註した、諷刺文としては模範的な一文を發表し、余の『中外』八月號の論文を飜弄されたことを、讀者は鮮やかに記憶されてゐるでせう。而して幾に余の主張に對して多少共鳴した讀者諸君は勿論のこと、さなくとも大過なきものと默過された讀者諸君には、余が英國のデモ學者マロック輩の謬說を其のまゝ借用に及んで、臆面もなく天下に紹介した學界未曾有の無鐵砲と破廉恥とに吃驚し、或者はこの喰せ者がと憤慨し、或者はこの前途ある身の賣名行爲と、嘲笑し憫笑したでもあらう。

啻に博士のみではない。社會主義者中第一の論客として世間からも公認され、又同人中にも、其筋にも暫認されてゐる山川均君は『中外』九月號に『北昤吉君の能力（アビリティ）』と題して、痛快と皮肉とを兼ね備ふる筆鋒を以て、余の能力に非ず、余の無能力を天下に暴露され、更に茅原華山君は同誌同號に『北、帆足二君に訂す』と傍註した『肉に死せんとする日本國民』なる一文に余の論文を以て剽窃[illegible]者の好評本なりと指摘し、更に大阪每日新聞紙上に余を以て飜譯學者の實例として（この方は未だ拜見せず、平素の同君より推して）極大の罪を弄されたりとのことであり、又新進批評家として將來なからざるべからざる西宮藤朝君も『河上博士對北氏の論爭』と題する一文を東方時論に寄せられたることは、當地に於て、時事新報紙上の廣告に依つて承知しました。

顧みれば、余は昨年九月は本誌にも『中外』にも、通俗雜誌への論文としては相當に努力したものを寄せたにも拘はらず、二誌共に余の置土產に對する餞として河上博士と山川均君の諷刺文を掲載したのは、余の芳名(?)と共に醜名を天下に香はしからしむるに、此の上なき好妙の策戰であつたことは保證されます。而も昨年の九月號は二誌共に寺内々閣の攻擊論を以て埋め

られてゐたのであるから、雜誌上の醜名に於ては、余は寺內伯と同一の程度にあつたことの名譽を有した譯になります。唯寺內伯に對するのは熱殺的であつたのに、余に對するのは冷殺的であつたのが、相違と云はヾ一の相違です。云はヾ寺內伯は憎惡され、余は輕蔑されたのです。フオツクスであつたか英國の或る政治家が　議員連の惡意の的となつた時に「余は輕蔑の敵を有せずして、憎惡の敵を有することを感謝する」と云つた相ですが、余は此の感謝の快感すら持ち得なかつたことに於て、寺內伯よりも不幸な位置に立つたと云はねばなりません。

三

こゝに於てか讀者——同情者も非同情者も——當然疑はるゝでせう。爾は如何なる天魔に魅入られてか『近世社會主義の檢討』なる奇文を公にしたのかと。今や余は正直に讀者に告白します。あの一文は生憎——讀者の或者は失望されるでせうが——余の執筆したものではありません。あれこそは、まがうかたなき余の自由意志——否氣な輕卒な自由意志を以て署名を快諾した論文には相違ありませんが、余の執筆にかゝるものでは、毛頭ありません。それで山川君が、あの一文に依つて、余の能力（アビリチイ）を疑ひ余の無能力を信ずるのは、余と同樣に輕卒であります。又茅原君があの一文に依つて、余を飜譯學者の一適例なることを實證せんとするならば、遺憾ながら君を實證派から絕々絕緣させる結果となります。又河上博士もあの一文を余の社會主義に關する答案として採點さるゝのは、敎官としての不注意の罪は免れません。博士の本尊とされるマルクスの靈體の尊嚴を冒瀆した眞の犯人は、老平巧妙、巧に其の蹤跡を晦まして、未だに縛に附きません。最後に、若し西宮氏にしてあの一文と河上博士の一文とに於て、我々二人の大立廻が始まつたと見たならば、舞踏と眞劍勝負との混同以上の混同です。余は改めて斷言します。あの一文は余の斷じて執筆したものでないことを淫祠邪敎に誓ひを立てゝまでも、斷言し切ります。要するに余は剽窃の罪は犯しませんでした。余とマロツク——長者が貧家に忍び入る筈はありません。併し余は學徒としては剽窃と同列、又は同列以上の罪惡とも云ふべき代筆の罪を、平氣に否氣に——今から考へれば頗る大膽に無鐵砲に——まんまと、やつてのけた次第であるのであります。

四

然り——『然らば爾は何故に他人の筆に成れる一文に署名したか』——讀者は直ちに追及されるでせう。余は幸か不幸か、坐禪で鍛へた野狐である。日本の野に棲んだ狐どころか、つい先達て一月かゝつて米國四十八州の野を跨にかけて來た許りの狐

である。到底逃げることの出來ない時には、潔ぎよく告白する丈けの度胸は持つてゐる。いでや余は正直に事件の眞相と余の心事とを讀者の前に告白して、讀者諸君の賢愚寛嚴其の宜しきを得た賢明に御裁斷を仰がうと思ふ。犯罪者に取つては減刑の唯一の望みは自白の程度に依るとのことです。それで余は淡白に、有りの儘に、時には有りの儘よりも詳しく(アフター・ソートの交つた)當時の事情を告白し、而も成るべく周圍に御迷惑のかゝらぬ樣にして、幾分の減刑を仰ぎ度いと思ひます。余は某々博士の樣に、代雜事件を、暗のまゝに、暗から暗に葬むることを欲しません。どうせ罪人になるなら腹の綺麗な罪人になり度いと思つてゐます。

事情は後から考へて見ると頗る複雜になります。後から考へて見るとは、後から自分に許り都合のいゝ理屈を附けて、自分を辯護すると云ふ意味ではありません。心理學的分析の興味——余は此告白に際しても、普通の罪人が感ずる罪の意識よりも、罪の意識を分析する心理學的興味の方がやゝともすると優勢であることを申し上げねばなりません——を中心として、其の當時平氣に呑氣にやつてのけた漠然たる心理狀態を分析し、且つ之を周圍の事情と關係させるに過ぎません。實際人間は熟慮して實行するよりか、實行して其の後に反省する場合が多過ぎるのです。

昨年の六月の末か七月の初めでした。余が飄然と中外社へ行つた時です。社の幹部とも申すべき二三士が集まつてゐました。其の時某君が、余に一綴りの原稿を見せて『北さん、どうぞ此の論文を訂正し、そうして差閊がなかつたら、貴下の名前で出して呉れる譯にはいかんでせうか。實名で御迷惑なら雅號(余は時々鴨湖漁人と云ふ雅號を用ゐました)でもいゝから』と申されました。其外こんなことも簡單に話されたようです。實は筆者は△△君で社會主義には反對なのだが、其の筋では勘違ひして危險視してゐるから、社會主義を攻撃した論文でも、或は通すまい(實際寺内々閣の言論抑壓と來ては非常なもので、生田長江君の毛頭危險とも認められない論文の爲めに『中外』が禁止されたこともあつた)。貴下なら大丈夫だらう。寺内々閣の下では將來の大問題たるべき(否現に各國共ボルシエビズムに手を燒いてゐる)社會主義の鼓吹は云はずとも、其の紹介批評すら出來ないのは遺憾である。苟しも『中外』が時代思潮の先驅・國民輿論の指導を以て任ずる以上は言論自由の端を啓くに力めなければならぬ。筆者は或る種本に依つたのだが文章に勢がないから、其のお積りで貴下のきびきびした筆で直して頂きたい必ず反響があらうと。

誠に尤もなお話しであるから、氣輕な余は言下に應じた。そうして余は斯樣に云つた。吉野博士、姉崎博士のやうな溫厚の紳士すら危險人物視する現内閣（原平民内閣のことに非ず、話は前内閣のこと）のことだから△△君の名も或は出せないかも知れぬ。余の名前でも隨分怪しいが、夫れでも觸れ出しが軍國主義國家主義丈けあつて、△△君よりはましかも知れぬ。又余が名前を出せば多分山川君あたりから反駁が來るであらう。（社會主義に挑戰する論文を書くと、山川君が飛び出すとは、其の筋でも懸念してゐたとのこと）。今度こそは余は眞物の反駁論を書き、議論は議論を生んで言論自由の端が啓ける。現内閣の下には止むを得ざる策戰だと。斯く告白すれば、あの代筆事件も徹頭徹尾ギヤステイフアイされる譯だが、こんな他所行きの理由のみではない。余一個の個人的理由もあつた。耻しいながら、小氣味よく告白しよう。余は其の時はつきりとではないが、少くとも半意識的に――心理學の講釋は場所柄ではないが、半意識的衝動と云ふものは行爲を支配するに頗る有力なものだ――こうも考へた。『無名氏などゝ、世を忍ぶ止むを得ぬ匿名とは云ひ條塹壕内で狙擊するのは怪しからぬ。余だけなら未だしも、吉野博士や大山君まで低腦扱ひにするのは以ての外である。一つ假面を剝がして、公の論壇で戰へば、天性議論好きの余の性癖を滿足させることにもなるし、又此頃は哲學の研究で忙しい　　十年前に二三年掛つて書いた社會主義研究の舊稿もある、之も世に浮び出させることが出來る。兎角世間では余を哲學一點張りと心得て、山川君などは、哲學的政論家などと敬稱だか惡罵だか理由の解らん稱號を與へてゐるから、意外の方面に論入して、社會主義者の一手販賣を奪つてやらう。現に今の日本の社會主義者中でも家兄の『國體論及び純正社會主義』を讀んで感化されたものも可なりあるさうだ、餘り大きな口を開かせてたまるものかといふ心底もあつた。又勿論眞の執筆者よりか、余の名を出す方が世間の反響もあらう。さすれば余も種々好意を受け、余も其の經營振りの勇猛さに、多少辟易する位に感心せる『中外』誌の爲めになる。賴むと云はれた時に應ずる俠氣の持合せも男には必要だとの客氣も幾分加つてゐた。夫れにもう一つ――之は多少迷信のやうであるが――余には何時頃よりか善惡何れの性質か解らない守神が附いてゐて、時々余の行動を支配する暗示を與へる。早稻田騷動の際の余の出處進退も、早稻田を去つて筆で立つ決心をしたのも、外國行きを熱心に望んだのも、今度の告白をなすのも、余は絕えず内心の暗示に從つた結果である。其の守神が前日人から賴まれた時には必ず應ぜよとの暗示を與えた。之も余が依賴に應じた大に有力な――否殆んど決

定的な原因であつた。そうして元氣能く承諾して、問題の原稿を携へて歸宅した次第であります。

五

家と云つても、當時妻は肺を病んで千葉の海岸にあり、家には老母と小兒とがゐるのみであつた。そうして余は近々渡米の豫定であつたので、一家を擧げて千葉縣に引き越さしめ、余獨り舊稿の社會主義研究のみを左右にして、例の中外社より携へ來つた問題の原稿を訂正する考へで、數日寡夫暮して、借家の權利を讓渡すべき木村鷹太郎君が埃乃より東征されるのを待つてゐた。然るに余は當時家族の病氣や家族の引越しに頭を惱ましてゐた以外に、余一身の不心得より生じた事件にも煩はされ、夏の炎天で暑さは著し大弱りに弱はつてゐた。そうして携へ來つて原稿は殆んど讀む暇もなかつた。唯寢に先だつ一時間許りの時間で半醒半夢の狀態で、一應眼を通して見た。流石は論壇の老將の手になつた丈けあつて、面白き着眼もあり悠容迫らざる大家の風があつて多々感心もしたが――此時には讀本に依つたと云はれたことなども忘れてゐた。勿論マロツクのマの字も知らなかつた――全然個人主義的立脚地より書かれたもの故、全部書き直すならば兎も角、訂正などする餘地のないことを發見した。勿論一つ奮發して全然書き直さうかとも思つたが、引越し後で家に一冊の書もなし、早稻田の圖書館へ行くのも億劫であつたし、十年前の草稿も大に不滿があつたし、殊には暑いし、心に惱みはあつたし、早く千葉縣へ行つて釣りでもやりたいとの誘惑は感じたし、原稿に手も附けずにゐた。其内内木村君は來られた。『詩は伶人に遇つて吟ずべし、酒は知己に遇つて飲むべし』で双方同趣味の間柄、殊に埃乃より來られた遠來の友、數日間は飲みかはして了つたのです。〆切の日を過ぎて中外社を訪ひて編輯長に對し、此の原稿は余の主張と大に距離があるから、訂正するとなると殆んど全部書き直さなければならぬ、けれども△△君は余の先輩だし手を容れるにも忍びない（勿論こういふ表面の申譯と共に、早く避暑地へ行つて釣でもやり度い半意識的衝動が猛烈であつた）何とか辻褄を合せ度いが期日の猶豫は出來まいかと計つて見た。（實際其の際期日の猶豫があつたら、却つて迷惑する程に倦怠してゐた）。編輯長は期日丈けはこまるとのことであつたから、こまる半分、嬉しい半分で、余は多少訂正したからと、いゝ加減の出駄羅目を云つて、先方を安心させ、何等精讀もせず、訂正もせざる論文に署名する事を快諾し、即座に筆を執りて論文の最後に社會主義者に對する挑戰的の言辭を附し、一は苛酷極まる當局者に對して本文が社會主義に對する同情を以て書かれたるものに非ざる

ことを印象し、一は山川君が論駁するに便にし、又余が渡米後悠々山川君の論文を反駁し社會主義の利非得失を品隲すべき餘地を作つて置いたのです。そうして余は即日千葉縣一の宮の海岸に赴いて、舘から出た島の如き自由の氣分で、毎日々々舟を河口に放つて太公望を氣取つてゐた。『近世社會主義の検討』の一文は以上の内的並びに外的事情から發表された奇しき運命の論文であります。

六

余が諏訪丸に乘じて横濱を出つたのは九月三日でありますが、其の前日既に『中央公論』と『中外』とを見て、大に驚きました。余は頗るズーズーしい性質ですが、實際誇張でも何でもない、あの時位驚いたことはない。當惑したことはない。常ならば多年の宿望たりし外遊の際であり、友人先輩に送られて去るのは、何とも云はれぬ愉快さがなくてはならぬ。然るに九月三日『中央公論』と『中外』とを手にして日本を去つた時の感じは、意地悪い探偵にでも附けられて漂浪する様な感じであつた。夫は外でもない。『近世社會主義の検討』の議論の内容に間違ひはあることは充分承知してゐたが、其がマロックとか云ふ學者の剽窃、否忠實の寫しであつたとは、誠に意外の事件であつた。河上博士の諷刺文――かの『中外』誌上に現はれた北氏の論文を揶揄せるものとまで新聞紙上に廣告されて稀代の諷刺文は、一々剽窃の跡を立證してゐた。マロックのアビリティを北君は『能力』と譯されて之にアビリティと振り假名を附けてゐると指摘したり、マロックが現在の學者をミスター・ショーと稱すれば、北君までがショー君と云つてゐると急所を衝いたり、マロックが其の著書の終りに基督教社會主義を批評してゐるが北君の論文もさうであると止めを差し、而も露骨に大上段から剽窃呼りなどをせず、マロックも北君も共にマルクスの偽本を見てゐるであらうと揶揄一番し、北君が此次に筆を執らるゝ時には宜しく資本論の偽版を棄てゝ先づ速に其の眞本を一讀されんことを希望すと、丁度耶蘇教を毛嫌ひする田舎出の書生に、牧師先生が、先づ聖書を御覧と云ふ様な御深切を示されてゐた。余は誠に以て恐縮の外はない。今は博士の論文を拜讀して剽窃の餘りに甚だしきに驚いたが、之と共に、問題の一文が山川君若しくは社會主義者一味の諸君を釣り出さうとしたのに、學界の泰斗論壇の雄將が鋒を揃へて立ち向はれたのは最も意外であつた。余が平氣に呑氣にやつてのけた茶目的行動が斯くも社會の反響を呼んだとなると、余たるもの以て瞑すべしである。クレオパトラの鼻尖が五分不足してゐたならば、世界歴史は其面目を一變したことか事實らしき想像であるならば、余にして一片愼重

と云ふ美徳があつたならば、大正七年の秋の評論壇は大に面目を一變したでもあらう。渺茫として際涯なき學海の一隅に投ぜられた一片の餌を見て、背中に苔の生えた龜も浮び出れば、海豚も躍り出す意外の結果を招いた。一犬虚を吠え、萬犬實を傳ふなど、戯れことではない。全くの所、あの當時は、余は事の意外に恐縮し苦笑した。そうして余の心底の守神は囁いた――天下の讀者に謝したら。

併し余は次男坊の通有性として頗る強情だ。敗け惜みが強い。首は刎られて飛んでも、左程の怪我も無いと云ひ張る傾向がある。他人に謝するなどゝは以ての外だ。よし止むなく頭を垂れて殊勝らしく謝意を表することがあつても、對手の叱り方が甚いと、なに糞と、下から睾丸でも握み兼ねない犯罪的悪癖が、余の人格のどん底に根を張つてゐる。それで意識の表流には、正直に事情を告白して、天下の讀者に謝さうと思ふ考へが浮んでゐても、半意識の底流にはこんな考へかよどんでゐた――今は考へではゐないが。

少々露骨ではあるが、露骨も正直の一種であるから御寛恕を願ひ度い。先づ余は山川君に對しては、かう思つてゐた。山川君は問題の論文が余の書いたものでないことを知りつゝも、余を以て、大蛇退治の岩見重太郎に比し、而も自分で此の岩見重太郎を見事仕止めた様なことを、白々しく宣言してゐる。そうして社會主義者がマルクスの大意に通ずることとは、餅屋が餅を知り、亭主が女房の顔を知るが如くに當然過ぎるにも拘はらず、余を獨文でも知らずと解してか、又マロックが英國人であるが爲めか、一々英譯のマルクスを引用して、余の否マロックの罪を訂すとは天下の奇觀ではないか。又夫子自身と雖も『北昤吉君の能力』の一文に依つて、『無名氏』が有名氏となり、幽谷の芝蘭が人里に高値を呼ばれるとは、岩見重太郎の似非而肖をかち得た自分を顧みて、世評の取るに足らざることを御考へになつたであらう。

又河上博士に對しては、こんなことを考へてゐた。博士はマルクスを尊重なさる餘り、其の尊厳を冒瀆した犯人の見定めも附かず、直ちに重刑を仰せ附けた失はなかつたか、博士たるもの、余を評せんとならば、須らく余の臉本を棄てゝ、速かに余の眞本を一讀すべきではないか。荘子も內篇外篇共に眞作と見做されては、如何な荘子でも高踏的態度は取れまい。余は荘子の如くエラクないから安心なものゝ、若し修養の[illegible]荘子の域に達したと空想するならば、余は後世の僞作に就いて恐るべき理由がある。余の文章は拙きに相違なきも一個の特色あり、問題の論文とは雲泥の差があることを御氣附きにならなかつたか。

併し余も亦、考へざるを得なかつた。余の文章が他人の夫れと混同さるゝ樣では、未だ文筆を以て世に立つことが出來ない。當分筆を折り論壇を退き、文と想とを練り、何人の追從をも、何人の代筆をも容す餘地なきに至つて、始めて論壇に立ち現はれるべきものでないかと。又斯くも考へた。否過去の記憶を喚び起した。博士が伊藤信澄君の無我愛に感激されて、駒場の先生を止め、早稻田の大講堂で孔孟の教を說かれた際に、當時早稻田の悪書生であつた我輩が、握り睪丸で拜聽に出掛けた十數年前の昔と、余の家兄が天才三分と空想三分とセコンドハンドノレッヂ四分とより成れる『國體論及び純正社會主義』を著はした際、博士が大に共鳴されて、著作中の『人類は美の進化の極地として、交接作用と排泄作用とは廢止すべし』との珍無類の空想にも同感の旨を讀賣紙上に發表された、同じく十數年前の一昔を想ひ出さざるを得なかつた。然して余が博士の御批評を受くるに當つても昔なつかしき感に堪えなかつた。

殊に茅原華山君に對しては、失禮ながら、頗る皮肉に考へた。山川君と河上博士とは問題の論文の種本を一九〇八年ロンドンで出版されたマロックの著だと申さるゝに、何事にも獨創でなければ夜の明けない我茅原華山君は三十年前にグレームと云ふ人の書いた『近世社會』を種本なりと斷定されて居る。果して然らば、マロックが十年前種本を書いた其の又二十年前に[illegible]ムが種本の種本を書いて、茅原君が之を見られた事になる。從つて、平凡な推理でも斯樣な斷定が下される。先づマルクスが資本論を書き、次に其の偶本が出で之に據つて三十年前グレームが『近世社會主義』を書き、更に之に據つてマロックが『近世社會主義の檢討』を書き、日本の某老大家が之を抄譯し、日本の驅け出し記者の余が之に署名したことになる。實にあの論文は三國傳來の家寶である。他人を直譯呼はりもいゝが、直譯の判定に先だつて、原書の鑑定が先決問題であると云ひ度くなる。夫れに附けても大阪每日新聞所載の論文を拜見し度いものだ。種本をグリームとせるか、果たマロックと訂正せるか。又氏は日本には社會がない、從つて社會主義發生の餘地はないと云はれてゐるが、然らば御問ひ申す、ボルシエビズムの跋扈してゐる露西亞には大に社會生活があつて、未だ此の主義の振はざる[illegible]國には殆んど社會生活がないことゝなるではないかと。若し[illegible]にして警視總監にでも任命さるれば、山川君の如きは正業に從事する良民と認定される譯である。茅原君の議論は常に天馬行空的であるが、時には飛行機墜落的でもあるのは、正に人意を弱くするに足りる。而も顧みるに余と茅原君とは共に同門である。君は御存じないかも知れぬが、余が此の地に來りて佛國生

れの此の地のラディクリフ・カレッヂ出のシモンと云ふ婦人を佛語の教師に雇へば、焉んぞ知らん、彼女は茅原君在米中の英語の教師ならんとは、誠に奇縁である。唯余は、天性の魯鈍、君の如く師の親任厚からざるを憾むのみである。昔、韓非は李斯と共に荀子の門に學ぶ。而も同門の朋、極めて親厚ならざれば、則ち又極めて疾悪なるは古來皆然らざるない。李斯は韓子の秦に使ひせるを殺した。余は茅原君と同門の出なれば、互に親厚ならんことを欲する。

七

余は自己の罪悪を告白するに當つて、以上の皮肉を並べ立てたのは、拜跪して相手の睾丸を掴むが如く、酌量減刑は愚か、益々罪の重きを加へるものである。併し、余は斷言する、今日は決してこんなことを考へて居ない。負け惜み強い余が過去に於て考へたことに過ぎない。露骨に正直に告白する序でに、他人の御迷惑にならざる範圍に於て、自分の半意識的底流に潛んでゐた考へを述べたまゝである。

今や紙數も重なつて來た、余の腕も疲れて來た。余の罪は告白に急がなければならなかつた。余は剽竊否代筆事件に就きて如何なる態度を執るべきか、此は渡米以來數ケ月悪夢の如く余に附き纏つた難問である。自分の利害のことには奇策縱横なる

余は直ちに二策を浮べた。早速第二回目の眞正眞銘の『社會主義檢討』を書いて日本に送ることが第一策。人の噂も七十五日、人の噂の鎮まつた後に、顧みて他を云ふ態度で、此の國の奇談珍聞を日本に通信することが第二策。併し奇策縱横の余も、今度と云ふ今度は、百計盡き降を軍門に乞ふの外なきことを知つた。即ち第一策を取りて早速社會主義檢討を書き送ることにも多大の困難がある。第一回の論は、後から雜誌を讀み直して見ると目茶苦茶の議論である。例へばあの論文にはマルクスは勞働を以て一切の富の源泉と認めたと書いてあるが、こんなことは余ですら考へない。況んや經濟學の泰斗マルクスに於てをや、人間が空拳を振つたとて、富の出來る筈がない。勞働が生產の一要素に過ぎないことは、餘りに明白である。河上博士や山川君の議論に眞理が宿つて、あの論文が誤つてゐる樣に餘りに明白である。又余はクロポトキンの眞似ではないが、現代の社會的生產の時代において、生產に寄與する各人の勞働の效果を計算し居ると考へたともない。然るにあの論文には能力者には能力に伴ふ報酬を以てし、之を萬世一系子孫に傳へよとの飛んでもない議論がある。又余は生產と分配とは一體としての社會に於て平衡を保たなければならぬと信ずるが、必ずしも各個人に於て之が平衡を要求するものではない。病人や小兒や[illegible]

産能力がないからとて之をして餓死せしめ、如何に働があるからとて、人間は胃擴張病になるまで多量に食はなければならぬとは夢にも思つたことはない。一體全體我々の有機體に於て、眼が、どれ丈けの貢献をなし、心臓がどれだけの貢献をし、肛門がどれ丈けの妨害を爲してゐるかと云ふ計算の爲し得らるゝものではない。現代の分配法は、現代人の如き劣等極まる人類の社會に比較的都合のいゝ分配法たるに過ぎない。然るにあの論文は之と反對のことを云つてゐる。又手を動かすには腦の運動中樞が働いてゐる。手の勞働は、何れの種類でも物質的機械的のものではない。精神的作用が加はつてゐる。然るにあの論文はそれと反對の主張をやつてゐる。又河上博士も山川君も『北君はマルクスの議論が單純である』と云つたのは怪しからんと叱られてゐる。余はマルクスの議論は單純だと思つたことはない。哲學學徒がアリストテレースのメタフイジクとヘーゲルの著作を難讀書と認めてゐると同一の程度に於て、資本論が經濟學書中の最大難讀書の一とは、二十年來知つてゐる所である。又博士と山川君は、北君はマルクスを讀まずしてマルクスを論ずと云はれたが、マルクスは云はず、問題の論文すら碌々讀まずして署名したものである。又河上博士はマルクスの死後資本論の續卷の出版の爲めにエンゲルスが困むだと云はれたが、之も先刻御承知のことである。エンゲルスは晩年哲學の研究を好んでゐたが、友人の遺稿の整理の爲めに、自分の趣味まで犠牲にした友情の美はしさも知つてゐる。そうして社會主義者と云へば、悪辣極まる人非人と誤解する當局者に、此の美談を語つてやり度いと思つてゐる。余は勿論哲學々徒であるから、社會主義と云ふ恐ろしいものは專攻しやうとは思はぬが、恐いもの見度しで、十數年前福田博士の門を叩き、社會主義研究の大體の順序を指示され、二三年研究して哲學々徒としては可なりに理解を持つてゐる積りである。マルクスは讀まぬが、マルクスに關する信頼すべき著作は可なり讀んでゐる、而して此の外遊中マルクスを一讀するのがプログラムに這入つてゐる。

話は側へそれたが要するにあの論文は誤謬に滿ちてゐる。余は博士や山川君より、論理學上の知識はあり、堅白異同の辯、白馬非馬流の詭辯も遁辭も心得てゐるが、生憎、あの論文の誤謬を眞理と變ずる論理を心得てゐない。生ま中それを試みれば、益々、議論に負けて嘲笑され飜弄される。負ける戰は始めからやらぬ方が得なことは、獨逸を見て解る。然らば、第一回の論文を無視して比較的精確に近い議論をやらうか。マルクスは未だ手を附けずとも、マルクスに關する物は多少讀んでゐるし、夫れに露西亞や獨逸の例を引いて、そら見たか、社會主義など

うして行はれるかと云ふ樣な、喧嘩腰の議論もやれやうが此の議論が正しければ正しい程、第一回の論議と矛盾して來て、山川君の例の筆で矛盾を指摘された時には立つ瀬がない。余は要するにディレンマに陷つてゐる。第一回の論文を辯護すれば謬を重ねる。それを無視して新たのものを書けば、矛盾を指摘されて窮地に陷る。止むなく負けても負けない樣な態度で、先方の揚げ足のみを取つて喧嘩を吹きかけてやらうか。そうして余の戰鬪本能を滿足させやうか。夫れにしては日本と米國では、距離が遠い。如何に喧嘩に熱心でも、三月も半歳も拳を握つた儘ではゐられない。加之、米國官憲の原稿の檢閲もある。余の議論が無事先方に到着するや否やも保證されぬ。

八

斯くて余は第二策に出でようと考へた。日本人は健忘症である。噂は短命だ。七十五日も時には掛値だ。宜しい、余は世評に對して知らぬ顏の半兵衛をきめ込んで、當分休養旁沈默し、其の内當方の珍談奇聞を通信してやらう。余は斯く考へて、書齋生活を嫌ふ自分の性質にも背いて、力めて米國の人情風物を視察することに力めた。渡米後は戰時氣分を捉へたいと想つて活動寫眞其他人込みの所へ顏を出した。そうして活動寫眞は日本の浪速節以上の傳道機關たることを知つた。對獨逸の敵愾心は一に之に依つて養はれたものである。教會でも軍歌を歌つたり、國旗を揭げたりしてゐるが、どうも間溫るい。活動寫眞ではカイゼルが惡魔に惱まされたり、獨逸人が亂暴をやつたりする際どいあくどい所を見せてモップ・スピリットに訴えてゐる。又余は樂隊交りの自由公債募集のデモンストレーションも見た。特に熱狂せる婦人の一隊は、百弗を出せば一回のキッスをやるとまで愛國心を發揮して、或る軍人は大枚二萬五千弗を奮發して、キッスの亂射に恐悅し且つ恐縮してゐた面白い光景をも見た。芝居は俗人相手、哲人劇場に入るべからずとの先天的哲學を奉じてゐて、日本でも芝居を見なかつた余は、此の地へ來てから、一週に一度は行き、或る役者と懇意になつて、人柄も辨へず先方の鬼門とする哲學の議論まで聞かせてやつて居る。音樂會へも解つた樣な顏をして度々出入した。有名なボストンの博物館へも、面白い半分面白くない半分の不得要領な態度で、邦畫、洋畫、彫刻を檢閲し廻つて、番人をして怪しませてゐた。又昨年秋の選擧演說には諸處を飛び廻つて、婦人連が血を沸して喝采するのを見て、醜惡を感じたことも、度々あつた。余には禁制の靈場であつた教會へも時々顏を出した。ユニテリアンにも、メソディスーにも、ユニバーサリストにも、クリスチヤン、サイエンスにも、八宗兼學の御熱心であつた。そうして

牧師諸君の解つたやうな、解らぬ樣な御說法に對して、敬意と憐憫との融合感情を感じた。教會は社會感情を養ふ倶樂部であつて こゝでは、自分の明滅しつゝあつた宗教心の微光も却つて消え入り相になつた。米國のデモクラシイは教會と活動寫眞と新聞紙とウイルソンの美文とを四本柱としてゐることも會得された。又余は大概にも米人のモツブ・スピリットを知らんが爲めに戰勝祝賀の行列隊にも加つて見て、米人の大茶目たることを發見し、余の代議の茶目などは問題にならぬと都合のいゝ理屈を考へた。余は山高を被つて成るべく高く見せてゐるか、余より小さい人はと見れば、其は例外なく傴僂である。山高はつぶされて、人込みの中に二時間もベソをかいて、米人の茶目に驚いたこともある。ボストンの婦人は世界第一に教養あるとかにて、常ならば威厳あるべきオールドミスが帽子を取られたり白粉を振りまかれたりして悲鳴を揚げてゐるのを見て一方ならず溜飲を下げた。危險思想家の集會にも出て見て、露西亞人にはイヷンの馬鹿がいくらも居ると驚いたこともあつた。小學校の式日を見に行つて演說を強いられ、呂律の廻らぬ雄辯を弄して、生徒が解つたかどうかと後悔もしたことがある。ある南部の大學へ行つて新米の社會學の教授を捉へて、駄法螺を吹いたら、教室へ引張り込まれて、男女學生の前で演說を強いられ、漸やく遁辭を設けて逃げ出した醜體もあつた。勿論廣い米國だ、こんな馬鹿々々しい經驗許りでもない。歴史多きコンコールドに遊び、エマソンと其の交人等の遺跡を探つてゐた時に、恰かも、獨逸降伏の知らせがあつたとかにて、寺院の鐘が平和の音を傳へたが、此時こそは、持ち合せもないと思つてゐた詩情らしきものが動いた樣な氣もした。否、之れ丈けのことではない。去る十二月廿二日より一月廿四日まで約一ケ月の間、米國の中部と南部を股に掛けて、メキシコ灣頭に南國の氣分を味はひ、芝生の緑に冬を忘れ、黒人――人間と家畜との中間動物たる黒人の悲慘なる運命に同情し、テキサスの原野に日本農夫を尋ねる等珍談奇聞の數々に接した。往復万千哩の旅行は、書齋的論客をして一角の世間的苦勞人たらしめた　時は過ぎ去つた。余は顧みて他を云ふ準備は充分に出來上つてゐた。

併しながら余は遂に此の準備も無用に歸したことを覺つた。余は日本の友人並びに舊子弟は勿論、在米の青年諸君よりさへ余の平素を知れるものは、何れも、余の喇叭事件の意外なるに驚きて、頻々として余に訴へて來た。或者は先生の名聲地に墜ちたりとまで云つて來た。余は名聲天に揚りたるとなし、焉んぞ地に墜ちんと思へども、先方の愛には動かざるを得なかつた。又或者は先生の將來の立身に妨げありとも云つて來た。余は學

徒の立身とは何を意味するや知らずと答へたれど、先方の厚意には感銘せざるを得なかつた。勿論中外社は余の不徳の災難に就いて日本の識者に辯明し呉るると誓はれ、今日まで力められたるを知るも、元來通俗雜誌は識者を相手とするものに非ず、一般讀者を相手とするものなれば、此等の諸君を誤まり、諸君の同情に背くは、文筆に從事するものの一日も堪ゆる能はざる所以を痛感するに至つた。

九

窮すれば亂すると云ふ。併し亂する餘裕のあるのは未だ眞に窮したのではない。遁辭は其の窮するを知ると云ふ。併し遁辭が設けらるる間は窮地に陷つたとは云へぬ。余は第一策第二策共に盡くるに至つて、無策の最上策なることを發見した。流石は禪的修養の極地に達せる丈けありて、いざ鎌倉と云ふ時には、一切放下着して大死一番の妙境に入ることが出來る。無策とは何ぞや。告白の一事即ち之れである。斯くて余は以上の如く、詳細に過ぎ露骨に過ぎる程に告白するに至つたのである。世には以上の告白を以て世間を馬鹿にしてゐると云ふかも知れぬ。又敬虔の念が足らぬと評するかも知れぬ。此は素より評する人の勝手である。余としては心事を正直に告白すれば足れるのである。實際余は一犬虚を吠へ萬犬實を傳ふる世間を餘りに悧巧とも思はぬ。又余の心事は告白の際ですら敬虔の念のみに滿されない。萬感並び起り、感喜交々至り、懺悔の念、滑稽の感群り生じてゐる。從來の告白や懺悔やは、何れもセンチメンタルな表現でなければならぬと定まつてゐるが、アーメンと結ばずば祈禱に非ず、頓首再拜せずば借金の申譯立たず、南無阿彌陀佛と唱へずば往生出來ずと限つたことはない。現に十返舍一九の如きは、小便花火を懷にして往生せんとしたではないか。果して然らば、余にして時に舌を出し、時に拜跪して例の一物を摑まんと威嚇したりとて、余の告白が懺悔とならざる理由もない。余は敎師を止め、記者を止め、酒を絶ち、煙草を禁じ、女色を遠ざけ――否日本留學生の如何はしき者共を監視するに足る程までに行ひ澄まして、十年昔の書生に返つて見たれど早稻田時代の惡書生の地金を出すのみにて、告白も懺悔とならざるが如く思惟されるは、自白して益々加刑されるに似ると云はなければならぬ。されど正直は懺悔以上の價値がある。余は告白に際して、近代人の常として頗る複雜なる意識狀態を感ずる。余は犯罪者なれども、一面心理學者なれば、告白に伴ふ意識を分析して聊か記述を試みよう。

余は何よりも先づ余に共鳴せる讀者殊に友人、諸弟子の期待に裏切つた罪を悔ゐる。されど之と共に見事に供せられた

似而非首であつて、眞の岩見重太郎は依然として健在なることを讀者に傳ふる愉快を感ずる。『中外』社の好意に背いて其の名譽を害へる忘恩の行爲を恥づる。されど他面、學者の買占めをなすと云はるゝ天下の成金雜誌に買收せられたりと好評せらるゝ自己の偉大を誇る。余は河上博士始め天下の識者無識者を騷がしたる罪を感ずると共に、余の眞本を見ずして馬鹿噪ぎをした世間の野呂間さも感ずる。余は代筆事件のいま〳〵しさを知りつゝ此の罪を犯したる自己の愚を恥づると共に、之を有耶無耶に葬らずして潔よく告白せる自己の大膽と潔白との誇りを感ずる。余は又代筆事件は小家が大家の名を僞はるに反して、余の如き小家が論壇の老大家をして代筆せしめた新例の開始者たる愉快さも感ずる。又余は余の事件が殷鑑となつて、將來代筆の跡を絶つべしとの期待と、共譯の名を附しながら、其の實原稿を一讀もせざる大家の惡風の根絶すべしとの期待をも感ずる。又余は余の告白と懺悔とが從來の型を破つた獨創的のものであるとの痛快味をも感ずる。別言すれば余はセンチメンタルな泣き入る樣な婦女子の涙を唆る樣な懺悔をやつて僞善者とならなかつた痛快味を感ずる。最後に此の告白が不眞面目なりと攻擊さるる純潔の士が多からんことをとの希望をも懷いてゐる。

余は既に告白した上は、懺悔の意を表して當分の間筆を折つて論壇を退く積りである。余は『中外』に罪を負ふを以て先づ『中外』を退かなければならぬ。又『中外』に關係する際他の評論雜誌に執筆せざることを盟つたのであるから、義として現在の凡ての評論雜誌に筆を絶たざるを得ぬ。『中外』誌は外遊中余の家族の生活費を支給し吳るる約である。今之を退くは、單に、余の代筆事件が數千圓の罰金に相當することを意味するものである。又論客が評論壇を退くは、盜賊が世間に顏を出さざる如く、余の罪が無期徒刑に相當することを意味するものである。實に余の罪惡は選擇刑に非ずして竝行刑に相當することを意味するものである。而して、余は世間の罪するに先だつて、自から罪したる誇りを感ずるものである。余は教壇を退きて論壇に立ち、今又論壇を退く。余は何等特殊的の形容詞も附かざる一個の原人として、混沌未剖の境に沈潜せんと欲する。而して若し余にして再び世に出づることあらば、余が研究の過程を進み盡して再び社會主義檢討の著作を以て河上博士竝び山川君の御批評を仰げる後でなければならぬ。否、余の文と想とが追從すべからざる獨特の特色を備へて、他の何人の夫れとも混同すべからざる後を待たなければならぬ。若し此の時期あらば余は大死に蘇生するものである。若し此の時期なくんば余は自から論壇

に自己の墓標を立てた者である。されば此の識者はなるべく余に就きて寛大ならんことを希求する。墓標を見れば、如何なる悪人も善人なるが如く、如何なる愚者も賢者なるが如く紀念されてゐる。余は日本の墓地を見て此の感があり、米國のセメタリーに遊びて更に此の感を强ふする。余は衷心の守神の暗示に從つて敢て之を希ふのである。若し余を死者と認め余の墓標に來つて余を呪ふものあらば、善悪何れと附かざる余の守神は直ちに悪靈となつて、却つて其の人を呪ふであらう。又若し余が此の儘に葬らるゝものに非ず、或は復活の時期あらんと余の能力を過當に評價せらるゝ者あらば、余を死者とせず、單に行衛不明者として、善悪何れの御批をも願ひたい。此の時は余の守護神は善靈となつて、其の人をも守護するであらう。最後に一言す。此の一文は、決して他人の代筆にかゝるものに非ざることを、余は淫祠邪敎に誓つて、讀者に斷言します。

×　×　×　×

追記、余はマロックの稀本を今に至るまで見ず、彼近年『Limits of Pure Democracy』なる書を著はす、ハーバート大學の政治哲學の某教授之を參考書として指示す。余立ちてマロックがデモ學者にして其の『社會主義檢討』は全然誤謬たることは、日本の經濟學者河上博士既に之を論證した。然るに何が故に、彼の如きデモ學者の書を參考書として指示するやと質問す。敵の利器を奪つて敵を切る策戰である。彼の黄檗禪師が『此の手何ぞ佛手に似たる』と問はれ、言下に『此の足何ぞ驢脚に似たる』と逆襲せるに似てゐる。教授辟易して曰く Really so!「さうですか」。余は大に得意を感じた。記して河上博士に感謝する。余若し此の外遊中マロック君の住處を知り得ば、希くは彼を尋ねて敬意を表し、且つ油を取らうと思ふ。而して出來得べくんば、彼と舊交を暖め、親交を求めやうと思ふ。呵々。（二月五日）

勞働契約の自由と治安警察法の改正

法學博士　曄道文藝

契約自由の原則は私法上の鐵則である。政治上の自治自主とへ併立すべき經濟上の自治自主の根本法則である。被用者たる

働者と其の使用者たる資本家との間に締結さるゝ勞働契約も亦私法上の契約として、當然此原則の適用を受くべきものであるから、兩者は相互に對等の關係に立つて、自由に相互間の契約をなし得べきものであり、またさうでなければならぬ。然るに、實際に於ては、勞働契約の成立につき、勞働者は經濟上の自治自主の根本法則である契約自由の原則の恩惠を被ることが極めて尠いのである。尤も、單純なる法律論としては、勞働契約についても、契約自由の原則は確かに行はれて居ると云ふことができるのであるが、併しそれは單に表面だけのことであつて、即ち法律上の形式論に過ぎぬのであつて、若しも一皮剝いて其の實情を窺ふならば、勞働契約は當事者が平等對立の關係に於て締結するものでないことが直に明になるのである。以下少しく其然る所以を述べよう。

契約自由の原則には二つの意義がある。その一は契約締結の自由であつて、その二は契約の內容を定むるの自由である。第一の締結の自由は勞働契約につき勞働者もこれを持て居るが、第二の內容決定の自由に至つては、勞働者は殆んど是れを持たない。即ち勞働者は資本家の組識せる企業なる專制團には入るか、は入らないかを決定するの自由は持て居る。否それすらも今日の經濟狀態の下に於ては勞働者の自由にはならぬ。何故なれば、經濟上の弱者たる勞働者は、本人が如何に資本家の專制團には入ることを嫌つたところが、彼は一日働かねば忽ち飢へに迫られるのであるから、否でも應でも、何れかの專制團に身を投ぜねばならない。故に實際に於ては、契結締結の自由の恩惠を受くることすらできないのである。併し此點に於ては勞働者も、甲或は乙と、資本家を選擇することができるのであるから、其の點で締結自由の原則が僅かに彼の爲めに留保されて居る譯である。然るに契約の內容の決定に關しては、勞働者は殆んど全く自由を有せず、資本家は實質上獨裁專擅で其の內容を極めることが出來るのである。換言すれば、勞働契約の內容は獨り資本家の意思に因りて決せらるので、勞働者の意思は毫も之に關與することが許されぬのである。故に一度資本家の專制團には入つた以上は、勞働者は其の專制團の元首たる資本家の專制的支配に甘んぜなければならぬ。是れ多くの學者が、勞働契約は單なる民本上の雇傭契約にあらずして、一個の支配契約なりと言ふ所以である。

勞働契約は賣買契約に類する有償契約で、勞働力の賣買に關する契約である。が、併し此契約は、現行法制の上では、物叉は權利の賣買に關する通常の賣買契約と其の選を異にし、此契約に因り、債權者即ち資本家は債務者即ち勞働者の身體を支配

することゝなるのである、即ち獨り勞働賃金又は勞働時間が資本家の一方的意思で決定せられ勞働者の要求が殆んど容れなれないのみならず、勞働契約に因り、勞働者は絕對に資本家の指揮命令殊に工場規則の如きものに服從すべく强制せられ、又勞働者の身體生命に重大なる關係を有する工場の設備操業の場所等に付き、勞働者の保健衞生嗜好等に關する要求は之を貫徹する途が與へられてなく、又勞働者の傷害疾病等より起る保護救濟の點に於ても勞働者の要求は顧みられないで、資本家の專擅によつて按配される。斯くの如く勞働者の身體生命に關する樣な重大な事項までが、殆んど全部資本家の任意の決定に放任せられ、勞働者の方面から其要求を貫徹する途が全然封ぜられて居る。尤も工場法、其の他の法規に於て、種々なる資本家の義務が定められては居るが、此義務は資本家に對して負ふ義務であつて、勞働者に對して負ふ義務でないから、其法規は勞働者が資本家に對し、其要求を貫徹する武器となるものでない。

勞働者の資本家に對抗する實力は之に因りて增大することはない。要するに現行法制の上では勞働契約は資本家が勞働者の財力體力を支配する契約であつて、墺太利のウイーン大學教授アントン・メンガー氏が、「今日の經濟界に於ける實際を觀るに、勞働契約に因りて資本家が勞働者に對して取得する權力は、其支配力の範圍より觀るも、內容より觀るも、妻子其他の家族に對する家長の權力又は被後見人に對する後見人の權力以上に强大なものである」と言つたが、これは勞働契約の實際的效果を洞察した卓見であると云ふを妨げぬ。

以上述べたるが如き、勞働者對資本家の契約上に於ける地位の不平等が、只單に經濟上の實力の相違より生ずるものでありとすれば、資本家があり、勞働階級が存在する以上已を得ないことであるかも知れないが、契約の內容決定に關する資本家の獨裁專擅を、國の法律が是認して居ることは、到底看過することのできない所である。立憲法治の我國に於て、宗教上、政治上の自由が國民一般に享有されて居るに拘らず、單り經濟上、就中勞働契約の上に於て、資本家の專擅を許容し或は助成するが如き法制の存在することは、誠に遺憾千萬である。

勞働者をして經濟上の自由を享有せしむるには、勞働契約の內容決定に付き勞働者の意思が十分に關與し得る樣にせねばならぬ。之が爲めには先づ勞働契約の內容決定の自由を阻害する惡法を改廢し、更に進んで內容決定の自由を確保する良法を制定するの必要がある。今日の社會的大患たる勞働問題の解決は、實に勞働者の契約自由を阻害する惡法の存在と之を助成す

る良法の存在しない事によつて非常に困難にされて居る。若し第一の障害たる惡法を除き、進んで勞働者を保護するの良法を制定するにあらざれば、此社會的大患は決して治らぬ。然も此大患は國家存在の根本を脅かすものである。國家の將來の爲め、余輩は切に惡法の廢止及良法の制定を希望する。

然らば勞働契約の自由に障害を與ふる惡法とは何であるか。既に世論の一致せる如く、その重なるものは、彼の治安警察法第十七條である。

勞働者はもと經濟上の弱者であるから、彼等は資本家と對等の地位に立つて勞働契約をなすことができない。故に國法は强者たる資本家に對して弱者たる勞働者を保護するの必要がある。不當に壓迫されやすい弱者を保護するは、法本來の使命である。彼の利息制限法の如きも、此の法本來の使命を發揮せるものであつて、債權者たる强者に對して、債務者たる弱者を保護するものである。經濟上の强者に對して、經濟上の弱者を保護するのである。斯の如く、我國法が契約の內容決定の自由を保持し得ざる者には相當の保護を與ふべきものであるといふ立法政策上の主義を明文に表はし、當事者が必然的に不平等の地位にある契約締結に關して、弱者を保護して契約上平等の地位に立たしめんと努めたる場合あるにも拘らず、勞働契約の締結につき勞働者を保護すること薄く、却て、治安警察法第十七條の如き規定を設け、勞働者が資本家の獨裁專制に對抗し、勞働契約の內容決定の自由を享有し得る唯一の手段たる勞働團結を不能ならしめたることは、啻に法の目的使命に副はないばかりでなく、正義公平に反することと言はなければならぬ。

既に述べた通り、勞働者は經濟上の弱者である。故に勞働者が一個人として資本家と勞働契約を締結するときは、强者たる資本家が契約上有利の地位に立つは自然の趨勢である。從つて勞働者をして資本家に對して實質上對等の契約をなさしむる爲めには、彼等の多數を併せた團結の力によつて勞働者の實際上の地歩を高めた上で、その力を以て對等の契約を協定することのできるやうにしなければならぬ。されば、契約締結につき勞働者を保護せんには、先づ第一に勞働者の團結權を認めなければならぬ。然るに治安警察法第十七條は此の勞働者の團結を阻害するもの、余の所謂惡法である。

就中治安警察法第十七條第一項第二號は、「同盟罷業を遂行する爲めに、勞働者をして勞務を停廢せしめ、若は勞務者として雇傭するの申込を拒絶せしむる目的を以て、他人を煽動若は誘惑することを得ず」といふことを規定し、同法第三十條は、右の規定に違反した者は、一ヶ月以上六月以下の重禁錮に處し、三

圓以上三十圓以下の罰金を附加する旨を規定して居る。此の規定の母法は獨逸法で、然も獨逸帝國議會に於て否決された政府提出の原案に基くもののやうである。獨逸政府は一千八百九十九年に同盟罷業を禁遏し社會民主黨の勢力を削減する目的で殆ど勞働團結權を否認した法律案を帝國議會に提出したのであつたが、これに對しては社會民主黨が先づ第一に反對の烽火を擧げ、中央黨、自由黨等も極力反對したので、保守黨のみは賛成したが、遂に法案は暗から暗に葬り去られたのである。我治安警察法が發布されたのは、明治三十三年の三月で、獨逸政府が該法案を提出した翌年である。當時日本に於ても勞働運動が漸く萌芽を發した時分で、政府は是れに對して禁遏の方針を立て、當時漸く全盛期に入つて居た獨逸法學の献策によつて此の獨逸では芽を生さなかつた種子を輸入し我國に蒔いたものと余は推斷するのである。此の推斷を下した根據は後日別に詳細に發表する考である。

治安警察法第十七條殊に其第一項第二號が何故に不都合な法律であるかといふことは、既に多くの人々によつて論ぜられて居ることであるから、爰には簡單に一言するに止める。抑も誘惑とは、他人の理智に訴へ、利害得失を論じて、其の人の意見を決定せしむることにつとめることであつて、誘惑それ自身は決して惡いことではない。從て犯罪となるべき性質の行爲ではない。若し誘惑それ自身が罪惡であるならば、選擧に際して候補者なりその運動者が、或は演說會を開いて政見を發表し、或は運動をなすが如きは、正に刑罰を以て禁止すべきこととなるのであるが、演說による理想的選擧運動が犯罪となると云はゞ何人も一驚を喫するであらう。又煽動といふは、他人の感情に訴へ、自己の意見に贊同を求むることであつて、若し煽動自身が罪惡であるならば、所謂政談演說の如き、宗教上の說教の如き、諫言忠告の如き、寄席芝居の呼聲の如き、賣買取引上に於ける勸誘の如き、何れも皆禁止さるべきことである。然るにも拘らず、是等の行動がすべて犯罪とされないのは何故であるか。言ふまでもなく誘惑煽動それ自身が決して罪惡でないからである。たゞ同盟罷業等の勞働者のなす勞働契約上に於ける運動についてのみ斯の如き行爲を罰する旨の規定を設けたのは、明かに勞働者殊に其首領たるべき者を壓迫せんとする政策的の目的に出たものと解するの外はないのである。又誘惑煽動といふが如き文字は、如何樣にも解釋され判斷される文字であつて、內容が極めて曖昧である。故に適用に於ても往々過誤に陷り易い。例へば「誘惑」と「勸誘」、「煽動」と「激動」の如きは、殆んど嚴密に區別し得ないものであつて、解釋の仕樣によつては、ど

うでもなるのである。かゝる曖昧なる文字は、法文として極めて拙劣なものであり從て弊害を生じ易いものであるから、此點からいつても誘惑煽動の文字はこれを改廢する必要がある。況んや誘惑煽動そのことが既に罪惡でないのであるから、此誘惑煽動の文字は當然削除すべきである。

若し勞働者の團結權を徹底的に認めんとするならば、治安警察法第十七條を廢止するのみならず、更に進で刑法の騷擾罪、脅迫罪、强要罪、恐喝罪等に就いても、勞働契約に關する運動として爲された行爲は其適用の外に在る旨の例外的明文を設くるの必要があるかと思ふ。

以上は廢止すべき所謂惡法に就いて述べたのであるが、更に一言を、更めて制定すべき所謂良法に就いて述ぶる必要がある。其の良法は勞働契約締結に際して勞働者を保護し、契約自由の原則を徹底せしむるものでなければならないが、我が現行民法の規定する所だけでは充分でない。別に特別な法規を設ける必要がある。一千九百十一年に發布施行したスイスの債務法中の勞働規約（共同勞働契約又は賃率契約）に關する立法の如きは、此種の立法の先駆をなすものである。佛蘭西も獨逸も此の種の立法を立案して居たのであるが、戰爭の爲めに中止されて居る。斯る立法は我日本でも必要の急に迫られて居る。一方惡法たる治安警察法を徹廢し、進んで勞働團結の健全なる發達を助成する良法を制定することは、紛糾せる勞働問題を解決する一大鍵鑰であつて、爲政家の將に任とすべき所である。それと同時に、我國の勞働者は、從來の如く徒らに法の天降りを待つが如き態度を棄て、敢然として惡法の改廢、良法の創定を天下に向つて要求しなければならぬ。尙ほ勞働規約については、述ぶべきことが多いが、此は他日の機會に讓ることとする。

對外的良心の發揮

法學博士　吉野作造

（一）

戰後世界の形勢に就ては殺伐なる國際競爭が一層激しくなる

だらうなどゝ悲觀する人も尠くないが、然し第十九世紀百年間の歴史的潮流の當然の歸結として、又最近大戰終結の道德的に展開せる現前の事實より見て、どうしても國際民主主義を外交關係の根基とする新局面を開かねばならぬ理は、之迄予輩の再三述べた所に依つて、或は讀者の諒解を得ることと思ふ。十九世紀文明の基調たる民主主義が百年を經て今日尙未だ完成せざるが如く、國際民主主義は假令來るべき新世界の基調たる運命を有するものとしても、之が相當の形に發達する事すら固より一朝一夕の事では無からう。けれども兎に角戰後の世界に於ては或は秘密外交の制限乃至廢止とか、或は國際關係の支配が野心に燃ゆる小數政治家の手より國民の掌裡に移さるゝとか、要するに道義の支配が漸を以て强力の支配に代らんとすべきは疑を容れない。而して今日平和會議を中心として各國の代表者が各々其國の歷史的立場に執着して紛々たる利己的主張を鬪はしつゝある間に、道義的創造力の大底潮の汪洋として暫くも其步を止めざるを見るは大いに吾人の意を强うするものである。然り、戰後の世界の形勢は眼あるものには既に明白となつた。此際に方つて吾人が對外的良心の發揮を同胞の國民に叫ぶのは決して無用の事では無い。

（二）

我國民は由來政治問題に關する道德的意識は甚だ鈍い。之れ道義心が一般に鋭敏を缺くが爲めに非ず、政治と云ふ事が國民にとつて全く新しい現象にして之に對する善惡の判斷が未だ社會的に確定しないからであらう。假令法律で罪惡と認めた事でも社會が眞に之を罪惡として憎むに非ずんば、一般の國民は之を犯して而かも恥づる所を知らない。其例は多く之を選擧犯罪に觀ることが出來る。僕の知人に田舍の富豪より嫁を貰はうとしたものがある。父親の身許を調べると前科がある。媒妁人に向つて前科者の娘を世話することは不都合だと責めると、あれは選擧犯罪ですからと平然たるものであつた。此類の事は他にも多からう。選擧犯罪なるが故に特に其醜陋を憎むと云ふやうにならなければ立憲政治の完成は期せられない。立憲政治になつてゐる國民が斯う云ふやうな氣持に居るのは、蓋し多年專制に馴れた餘弊であらう。此の點の良心の鋭敏でないのが、言ひ換へれば、斯う云ふ方面に訓練を積まれて居ないのが實に歐米と我國との異る所である。併し之は國情が異るからと云うて放任して置ける問題ではない。故に我々は常に例を歐米に採つて我國民に警戒するを怠らなかつた。然るを時々歐米人の爲せる所を直ちに今日の我國に責むるのは日本を知らず、又日本人を知らざるの罪なりなどと難ずるものあるは、前記の田舍の富豪のや

うな考の儘で放任していゝと云ふのか。我々は識者が眞に國家の發達と民心の開導とに誠意ありや否やを疑はざるを得ない。

然しそれでも國內政治の方面は心ある者の啓發誘導の結果、段々に改まつて行く傾向が見える。けれども更に一步眼を轉じて對外關係の方面を觀んか。之に關する國民の道德的判斷は全然吾人を失望せしむるものである。一々例證を引くまでもない。我々は朝鮮の問題を論ずる時に、曾て朝鮮人の利益幸福を眞實の考へた事があるか。又臺灣の生蕃問題を論ずる時に曾て彼等に生活を幸福ならしむる所以に想倒した事があるか。日本の國家並に日本臣民の利益幸福の名に於ては支那に於ても西比利亞に於ても凡ゆる罪惡が公然と許容され、否、時としては志士的行動として賞讃さるゝではないか。固より國權の伸張、國民利益の發展は大いに之を歡迎すべきである。殊に近來の所謂國際競爭の激烈なる時代に於ては自衛の爲めにする場合でさへ多少惡辣なる手段に訴ふるを必要とする事もある。況んや進んで國權國利の伸張を謀らんとする場合に於ておや。此點に於て國際關係が殆んど道義の支配の外に在つた事は、十九世紀を通じて總べての國に行はれる現象であつた。けれども我々は他の一面に於て其處に悲痛なる煩悶のあつた事を忘れてはならない。尠くとも殺伐なる國際競爭の反動として、極端な人道主義を主張する小數派のあつた事をも看過してはならない。露西亞のトルストイ、否、世界のトルストイは確に此一面を代表するものと云つていゝ。予輩は我國に必ずしも一人のトルストイ無かつた事を苦としない。けれども御多分に洩れず國際競爭の渦中に投じた我國が、獨り其多少の成功に得々として未だ曾て少しの煩悶の色をも示さなかつたのは、果して喜ぶ可き現象であらうか。今や時勢は一變せんとしつゝある。而して之に應ずべき何等の準備なくして漫然として新國際關係に入るは、我國の將來に取つて予輩は一種の不安を感ぜざるを得ない。

（三）

予輩は之まで道義的立場から內外各般の政治問題を評論して來た。殊に最近一兩年此立場から支那乃至西比利亞の問題に痛激なる批判を加へ來つた事は讀者の記憶せらるゝ所であらう。而して近時朝鮮暴動の勃發するに及び、之に關する朝野の言論を見て更に從來の感を深うした。朝鮮問題と前後して又日支軍事協定發表の問題がある。人種的差別撤廢の問題がある。此等の問題に關する各方面の言說の上に又同一の感想を繰り返さざるを得ない。外の問題は兎に角少くとも此等の問題、殊に朝鮮の問題の如きは、國民が之を銳敏なる道德判斷の鏡に照らすに非ずんば到底解決の緒に就くものでは無い。畢竟あのやうな大

事件も我國民が從來對外問題に對する良心の判斷を誤つたから起つた問題ではないか。

（四）

朝鮮の暴動は言ふまでもなく昭代の大不祥事である。之が眞因如何、又根本的解決の方策如何に就ては別に多少の意見はある。只此等の點を明にするの前提として予輩の茲に絶叫せざるを得ざる點は、國民の對外的良心の著しく痲痺して居る事である。今度の暴動が起つてから所謂識者階級の之に關する評論はいろ／＼の新聞雜誌等に現はれた。然れども其殆んど總べてが他を責むるに急にして自ら反省するの餘裕が無い。あれだけの暴動があつても尚ほ少しも覺醒の色を示さないのは、如何に良心の痲痺の深甚なるかを想像すべきである。斯くては帝國の將來にとつて至重至要なる此問題の解決も到底期せらるゝ見込はない。

一言にして言へば今度の朝鮮暴動の問題に就ても國民のどの部分にも「自己の反省」が無い。凡そ自己に對して反對の運動の起つた時、之を根本的に解決するの第一歩は自己の反省でなければならない。假令自分に過ち無しとの確信あるも、少くとも他から誤解せられたと言ふ事實に就ては何等か自から反省する丈けのものはある。誤解せらるべき何等の缺點も無かつた、斯くても鮮人が我に反抗すると言ふなら、併合の事實其物、同化政策其物に就て更に深く考ふべき點は無いだらうか。何れにしても朝鮮全土に亙つて排日思想の瀰蔓して居る事は疑ひもなき事實である。朝鮮に於ける少數の役人の強辯の外今や何人も之を疑はない。而して我國の當局者なり、又我國の論者なりが、曾て此事實を現前の問題として、鮮人其物の意見を參酌するの所置に出でた事があるか。

鮮人動搖の現前の事實に對して吾人の常識は到底之を從來の統治の失敗に歸するの外は無い。朝鮮統治に對する國民の一人としての不滿は予輩曾て本誌上に於て少しく之を述べた事がある。予輩の之を述べた所以は失政を曝露して當局を苦しめる積りは無い。只頑くなゝる彼等に自己反省の必要を促し、以て朝鮮問題の眞の解決を計らんとする微衷に出づるに外ならなかつた。けれども當局者は曾て自己の失政に反省の色を表はさない。或は云ふ、鮮人の統治には誤り無しと。或は云ふ、法規の命ずる所は洩らす所無く之を實行したと。或は云ふ、鮮人の發達の爲めに日々努力して怠る所が無いと。或は云ふ、彼等の今日物質的生活の幸福は遙かに併合以前に優ると。而して結論として曰く斯くして朝鮮人に日本の統治を不滿に思ふ理由は無い。現に多數のものは總督府の恩澤を謳歌して止まないと。若し此等の言

を時々起る排日的現象に對する責任回避の爲めに唱ふるものならば許し難い不都合として之を責めなければならない。若し又眞に善意を以て斯く信じて居るならば、彼等は異民族の心理に餘りに盲目にして、吾人は彼等に植民地統治の能力を疑はざるを得ない。而して我國民が、殊に國民中の識者と稱する者が、斯かる官吏の辯解を不問に附して怪まず、否、却つて多くの場合に於て彼等と同一の見解に立つて朝鮮問題を論ずるものあるは我々の甚だ意外とする所である。官吏の任務は或は法規の命ずる所をなすを以て畢るであらう。併し國民の任務は問題を本當に解決するまでは畢らない。而して問題の本當の解決は飽く迄事實の眞相の明瞭なる認識に根據しなければならない。

自己反省を缺く結果は所謂失政の批難を否認する。而も反抗の事實ある以上強いて原因を他に求めなければならない。玆に於て言ふ、朝鮮の暴動は第三者の煽動に因ると。而して其槍玉に上げらるゝものは外國基督教宣教師である。無論事實問題としては暴動と宣教師との關係を冷靜に攻究する必要あるは言ふを俟たない。随つて又責むべきものは假借する所なく責むるに何の妨げもない。けれども自分に失態が無い、随つて憤る筈も無い、それでも憤るのは誰か第三者の煽動があるだらうと云ふ風な考へ方は、第一に暴動の意義を輕視するの弊に陷り、第二に鎭定の方策を誤る。加之さうでも無いものを他人の煽動に乘つたのだらうなどゝ云ふ所から益々反感を挑發する事にもなるし、又不當の嫌疑を掛くる結果として其外國人の本國との友好を紛更するの惧が甚だ大である。獨り朝鮮許りでは無い。支那でも西比利亞でも、動もすれば某國の尻押だの某國の煽動だなどゝ云ふので、最近どれ丈け國交の妨害をなして居るか分らない。而して之も一部の當局者が自己の責任を免れる爲め窮策として唱へて居る間はいゝ、國民全體が之に附和雷同するに至つては以ての外の大事である。

（五）

自己反省を缺くの結果の如何に憂ふべきかは前述べた通りである。が中に就き差當り今度の朝鮮問題に關聯しては特に次の二點に注意する事が必要と思ふ。

第一は日本の朝鮮統治が鮮民の心理に事實上如何なる影響を與へたかを究めずしては問題の解決は出來ないと云ふ點である。日本の統治が善かつたか惡かつたか、又之に對して朝鮮人が如何なる考へを有つべき筈であるかと云ふ樣な事は暫らく問題外に置いていゝ。只之を朝鮮人がどう觀たかを檢するのが必要である。鮮民が斯く考へる事に道理ありや否やを姑く第二に置いて、事實鮮民が日本の統治をどう考へて居るかを鮮民の立

場から考へることが必要だと云ふのである。不幸にして形式政治家は此觀察を怠るを常とする。彼等は云ふ、之丈けの世話をやれば鮮民に文句は無い筈だと。無い筈だとの妄斷は一轉して彼等は日本の統治を謳歌して居ると云ふ迷信となる。戰前獨逸は自國文化の至上を信じ、殊に世界各國の青年學生が自國に來り學ぶの事實に迷うて、世界は皆自分の國に味方するものと極めて居つた。爲ぞ知らん、全世界は殆んど擧つて文化の名に於て我に抗敵して來る。此悲しむべき事實の前には獨逸國民も餘程眼が覺めたやうだが、我國の爲政家並に國民の多數は暴動の事實に遭遇して尙容易に覺めようとしない。如何に深切を盡しても繼母の深切は子供を懐かしめない。小糠三合あれば聟に行かないと云ふのが人間の意地である。此有り觸れた眞理に通曉せずしては容易に多數の人を操縦する事は出來ない。分つた人、捌けた人として下男や女中の尊敬を受くる大家の旦那などゝ云ふものは、畢竟斯かる平凡な人類の心理に通じた人である。植民政策成功の秘訣は又此外に出でない。多少趣が違ふが、昔伊太利王國が羅馬占領の際法皇領の市民に對して採つた態度の如きは、心理尊重の道に於て第一歩を正しく踏み出しさへすれば、其後の始末が如何に容易なるかを語るものである。要は第一歩の踏み出し方如何に在る。而して此第一歩に於て誤らんか、後に至つて如何に悔ゆるも及ばざるの難局に遭遇する事は現に我々の經驗しつゝある所である。聞く所に依れば、我々が從來動物に近しと迄蔑すんで居つた臺灣の生蕃さへ、所謂一寸の蟲にも五分の魂に洩れず、一部邦人の心無き所業に對して深き怨恨を抱いて居るとやら。況んや朝鮮人は兎も角も長き歴史を背景として獨特の文明を有する民族ではないか。自分の値打は自分の思ふ程世間で高く買つて呉れないと同じく、他の人は此方の思ふ程自分で自分をつまらないと思はないものである。自らを不當に高く値踏し、他をば不當に低く値踏みするの弊は殊に民族の間に甚だしい。其れ丈け我々が自ら一日の長を自負して他の民族に臨む場合には、取り分け對手の心理を尊重するの必要がある。之を等閑に附して而も朝鮮統治に成功を期するは、所謂木に縁つて魚を求むるよりも難い。

第二に暴動の起因が第三者の煽動に在りと考へて居る間も亦吾人は到底根本的解決に達する事が出來ない。外國宣教師が事實どれ丈け朝鮮の暴動に關係ありやは先入の偏見を去つて冷靜に事實其物を明白にする必要がある。彼我共に納得し得べき明白なる事實に基くに非ざれば人を責むるも何の效も奏しない。予輩は一部の宣教師の間に極端に日本の統治を誤解し、又極端な反感を之に向けて居る者あることを耳にして居る。けれども

基督教の精神並びに其傳道の動機其他いろ〳〵の事情から考へて、彼等の大部分が暴動其物の同情者であるとは思はれない。況んや教唆煽動の事實おや。予輩は又外國宣教師と總督府との間に詰まらぬ誤解に基ゐする反感の有つた事を知つて居る。若し夫れ朝鮮統治の政策に對する多少の不平に至つては、我々日本人が日本の立場から考へて之を抱いて居る位だから、彼等が鮮民其物の立場から考へて之を抱くは許し難い事であるにしろ、多少之を諒とすべき事情はある。況して彼等は鮮民の開發指導に就ては日本人の先輩である。而して對日暴動の指導者の多くが彼等の教育したもの丶間から出て居る以上、自ら之に一種の同情を寄するは又怪しむに足らない。之丈けの情狀を酌量して、然る後に我々は彼等宣教師の態度を吟味すると云ふ措置に出でなければならない。輕々に彼等を煽動者呼ばはりをするのは國交上面白くない事は言ふ迄も無いが、一つは日本人の偏狹を曝露する實例たるのみならず、又一つには事實の眞相を明かにする所以でも無い。

朝鮮の暴徒が多く基督教徒の間から出たからと云ふて、宣教師其物が日本の敵であるかの如くに考ふるのは餘りに輕卒な論斷である。總べて斯くの如き運動は國民の開發に伴ふ一つの免る可らさる結果である。何故民心が開發して而も日本に敵對すると云ふ馬鹿な事をするかと問ふならば、此處に日本の[illegible]反省すべき何物かゞあると答へて置かう。善かれ惡かれ鮮民は教育され開發されてあ丶云ふ運動を起したのは、恰度支那の留學生が日本の教育を受けて熱烈な革命黨となつたと同樣である。日本の教育は決して留學生に革命を鼓吹はしなかつた。朝鮮の基督教學生が暴動を起したが故に宣教師の教育に責任ありと云ふならば、日本の教育は正に前清朝に向つて大いなる責任を負はねばならぬ道理であつた。

予輩は固より茲に宣教師の無罪を辯護せんとするものではない。只かゝる國交上極めてデリケートな問題は事實の愼重にして公平なる糺明を俟つて論ずべく、而して輕卒なる論斷の結果、徒らに責任を他に嫁して自ら反省するの勞を避くるは斷じて大國民の襟度に非ざるを斷言し度い。自分の事を棚に上げて徒らに人を傷けるのは個人の間に在つても此上も無き醜態である。而して國家問題としては啻に醜態だと云ふ許りでなく、事實の糺明を怠らしめ、問題の根本的解決を誤らしむる所に、[illegible]ろべからざる弊害が横つて居る。

一體我國には何か事があると、其れを一二少數の陰謀に歸し度がる僻がある。早稻田大學に騷動が起つたと云へば後藤男が黑幕に居つて操縦したとか、朝日新聞撲滅の運動が起ると、其

藩に犬養氏があるとか、事實さうであつたかなかつたかは固より予輩の與り知らざる所であるが、斯んな風の解釋をして喜ぶ輩、又斯んな風に解釋せねば根本の眞相が擢まつたとは云へないと云ふやうな輩がある。之惟ふに古い專制時代の歷史哲學に累せらるゝ謬解ではあるまいか。專制時代では一人の英雄が天下を率ゐ、又英雄と英雄との談笑の間に外交の懸引が決まる。隨つて又此間に無限の歷史的興味もある。例へば維新の大業も之を南洲と海舟との一場の會合の展開として觀れば歷史は茲に一個の微妙なるローマンスとなる。而して歷史を總べて斯う云ふ立場から解釋すると、歷史的進化は卽ち個人的なる陰謀譎詐、誤解瞞着等の綜合的成果にして、後から見れば興味ある物語になるが、直接其事に當れば之程危い仕事は無い。併し今日の時勢は最早斯くの如き個人的なる不合理の橫行を許さない。無論其局に當る者は少數の識者であるに相異ないが、併し彼等を動かすものは大體に於て國民の間に流るゝ犯し難い一大潮流である。隨つて所謂裏面に活躍する個人的陰謀は固より小波瀾を誘起するの效無きに非ざるも、汪洋として流るゝ一大底潮を如何ともすることが出來ない。熊谷直實が一子小次郎の首を無官太夫敦盛の首なりと僞つて實檢に供へた。何も彼も飲み込んで居る義經は直實の苦衷に感激して敦盛の首に相異ないと之を受け取つた。併し今日の時勢に於ては如何に義經と直實との間に意志の疏通があつても、小次郎の首は何處までも小次郎の首と云はずしては到底問題の解決は出來ない。けれども陣屋の熊谷に限りなき興趣を感ずる日本の國民は現代の歷史の解決にも動もすれば此筆法を用ゐたがる。ロイド・ジョーヂを操縱するものがノースクリッツフなりとか、ウイルソンを操縱するものはハウス大佐であるとか、又はロイド・ジョーヂがヒウスをして南洋諸島の問題に關して日本に當らしめて居るとか樣々の事を言ふ。予輩は之等の事實を直ちに否認するものではないが、斯う云ふ考へ方が常に我々を誤つて、朝鮮の問題に就ても、支那、西比利亞の問題に就ても、何かと云ふと二言目には何某が黑幕に居ると云ふ風に解して遂に問題の眞相を捕捉するに失敗せしむる。孫逸仙は曾て從來の革命は英雄革命なり、我輩の陣頭に立つ今後の革命は國民革命なりと稱して、新時代に於ける運動の國民的意氣を發揮したが、此見識が無ければ到底現代各種の運動を諒解することは出來ない。

舊式の歷史哲學に拘泥するの弊が唯事實の眞相に通ずるを妨ぐる丈けに止まるならまだ我慢も出來る。けれども此思想が更に一步を進めて各種の對外政策を指導するに至つては國家の利益の爲めに到底之を默視することは出來ない。何となれば此思

想は外交に於ける國民的勢力の影響を無視するからである。近時我國の對支並びに對西比利亞政策の失敗の原因は、外交問題の解決は其局に當る個人を操縱すればいゝものだと云ふ考に基き、凡ゆる手段を盡して其籠絡に努めた結果では無いか。人間は器機ではない。如何に巧妙な手段を盡しても必ずしも此方の寸法に合ふやうに動くと限らない。況んや彼が如何に動いたからとて背後の國民が納得しない以上、外交問題の解決は決して一步をも進むるものではない。

（六）

前内閣の援段政策が原内閣となつて不徹底な南北融和勸誘策となり、而して勢の迫る所遂に日支兩國間に締結せられたる凡ゆる秘密條約公表と云ふ段取にまで進んだのは、當局者に何の辯解があるにしろ、我々國民は斷じて之を最も見苦しき失態の曝露と斷ずる。我國の外交史上に斯くの如き一大汚點を印したる原因は、一つには偏狹なる利己的政策の誤りにも因るけれども、又一つには世界の物議と支那民衆の排日心理とに重きを措かなかつた罪であり、殊に袁世凱とか段祺瑞とか有力な一人の利己心を滿足せしめれば、支那の天下は如何樣にも操縱が出來ると誤解した事である。而して排日の事實起れば、當局は故意か有意か自ら反省するの煩を避けて直ちに第三者の煽動に歸する。而してさらでだに開拓を怠つた彼の國の民心をして之が爲めに一層憤慨の念を强うせしめる。斯くまでして努めた苦心と又投じたる巨資とは、今日になつて見れば只失態の曝露によつて酬いられたに止つたではないか。斯くても當時對支外交の衝に當つた人々は、我々は斯く々々の計畫を立て斯く々々の利權を擴張する積りであつたと負惜しみを言ふ。それ丈けの計畫が先方の民心の自由な納得を得て確實に得られるかどうかを顧慮することなく、只所謂經綸を述べ立つる丈けの事なら、我輩は一夜の中に世界併合の方策を立案するを難しとせない。

之と同じやうな事は滿蒙の問題、西比利亞の問題に就ても一一實例に徴して論ずる事が出來るが管々しいから今は略する。

日米問題の如きも、多少趣は違ふが結局は同一に歸すると思ふ。米國に於ける排日の根本原因は一つは、日米兩國人の接觸より來る共同生活上の幾多の不便であり、又一つには我國の東洋政策より類推して米人が我對外發展の根本動機に對する不安疑惧の念である。此中のどれ丈けが誤解に屬するかは事實問題として別に論究するを要するも、少くとも我に於て大いに反省するの必要あるは云ふを俟たない。而して漫然人種的差別待遇の不當を說いて彼を責むるは、其主張にどれ丈けの眞理あるにしろ、自己反省を缺く點に於て我々は國民を警告するの必要を認

める。況んや日米問題の本質は所謂人種的差別待遇に非ざるに於てをや。隨つて予輩は日米問題の解決も亦或意味に於て國民の自己反省を缺くの態度に誤られて居ると信ずるものである。

何れにしても我々の自己反省を缺くの態度が今日どれ丈け外交的失敗の原因を爲して居るか分らない。人は云ふ。國際關係は殺伐だと。けれども一面に於て世界は割合に公平である。我々は事實の公平明白なる諒解の上に、道理によつて問題を解決せんとする態度さへ誤らなければ、世界的共同生活の中に帝國の地歩を確立するに毫も困難は無いと思ふ。此考よりして吾人は國民に向つて對外的良心の發揮を力說するの必要、今日より急なるは無いと考ふるものである。

社會改造運動の二潮流

私有資本制度の能率―生產本位の獨逸―英國の產業自治

ドクトル・オブ・フイロソフイ(ハーヴアト) 鷲尾正五郎

一

カール・マルクスが其の名著を「資本論」と名づけたるは何故であらうか。此れには深い意義が籠つてゐると思ふ。蓋し、社會主義の聖典と見做されて居る此の著述は、社會主義其物の經濟學の祖述と云ふよりも、寧ろ私有資本制度に基く經濟學の批判である。私有資本制度の分析批判につきては、彼の論理は精徹を極めて、殆と間然する所なく、其の結論も大體に於て今日の經濟學者の齊しく認むる所である。併しながら、社會主義其物の經濟學の建設的祖述に就ては、「資本論」中には殆ど見るべきものが無い。マルクスの所謂 labor theory of value の如きは、

彼自身にとりても一個の暗示として思考されたまでに過ぎない。今日此を學說として眞面目に取扱ふ人は殆ど無いと言つてもよろしい。「起てよ世界の勞働者！ 起つて汝等の鐵鎖を切れ、汝等は失ふべき何物をも有せず、贏ち得べき全世界を有す」と云ふ有名なる卷末の箴言が、勞働運動の暗示となり、また實際其の導火線となつて居る以外に、社會主義者の採るべき積極的乃至建設的方針としては、「資本論」中殆ど何物をも與へられてゐない。マルクスの「資本論」は私有資本制度の批判に止まつて、新社會の經濟組織に言及してゐない事は、彼の著述の偉大なる點でもあり、また觀やうによりては其の弱點でもある。

弱點であるか、强點であるかは別問題として、社會主義其物の祖述としては、「資本論」は全く白紙である。此の白紙が驅て種々の荒唐無稽なる空想の天地と化した。即ち一方に於ては虛無主義が起り、他方に於ては所謂ユトピヤが產れた。「資本論」にあれ程の精微精錬の論理を遣つたマルクス自身は、無謀なる破壞主義や、愚劣なる耽美主義に對しては、聊かの同情もなく私有資本制度に加へた彼の鋭利なる筆は虛無主義やユトピヤにも假借なく加へられたであらうと思ふが、彼の明智なくして彼の主義を弄ぶ自墮落なる人間の憧憬は、彼の殘した餘白に勝手氣儘の空想を描き出して、社會主義を玩弄視して、祖師の面目を塗抹するに到つたのは誠に殘念である。社會主義は現社會制度の壓制を解くものであつても、遊蕩兒の無責任なる空想を滿足せしむるやうな社會を決して齎すものではない。マルクスの批判論理を盾として現社會を呪ふ人々は、同じ峻嚴なる論理が、彼等の夢想する新社會の批判にも假借なく加へられるものである事を覺悟しなければならぬ。

私は本論に於て、英獨に勃興せんとしつゝある社會改造運動の二潮流を概論して、其の色彩を明かにし、其の優劣を比較せんとする。そして私の批判の標準は、空漠なる民主主義とか、自由とか、正義人道とかの問題ではなくして、英獨國民性及び國際關係の現實に照し、主として經濟的能率の優劣問題として論ぜんとする。二潮流の中孰れにしても、其の經濟上の能率は現在の私有資本制度のそれよりも遙に優れたものであらうと思ふ。從つて社會改造運動は最早富の不平均を匡すなどと云ふ漠然たる正義人道上の立場から鼓吹せらるよりも、新しい國際關係に於ける生存競爭上必至の勢として提唱せらるべきものであらうと思ふ。

二

私有資本制度の罪惡は社會主義者の好んで彈劾する所であるが、此の彈劾には半面の理があつて、半面の無理がある。富の

壓制が富の文化力と相伴つてゐる以上は、彈劾はどうしても無理ならざるを得ない。併しながら、私有資本制度が社會の建設力であつた時代は最早過去に屬せんとして居る。今日の社會に於ては、私有資本制度の罪惡よりも其の能率が疑問となつて居る。由來社會主義の美點は富の公平なる分配にありて、其の弱點は生産能力を殺滅せんとする傾向にありと考へられてゐた。社會主義は分配の經濟學であつて、生産の經濟學ではないと信ぜられてゐた。社會主義の世の中では、勞働は甚だしく貴重なるものとなる。從つて生産費が增加する。現工場制度に於けるが如く汗油の勞力を驅使して、安價の物品を多量に生産し、まだ其上に所謂 surplus value を多分に絞り取ると云ふ事が可能ないであらう。從つて、社會主義の國家と私有資本制度の國家と競爭するならば、必ず前者の敗北に終らざるを得ない。私有資本制度には如何なる不義、不公平があり、罪惡があつても、生産能力の點に於ては之に優る經濟制度はないと云ふ意見が、堂々たる經濟學者の中にさへも一般に主張せられてゐた。此の意見はランカツシャイヤーの紡績工業に於て賃金勞働の虐制を極度まで實行し、それに加へて他種族の勞働を奴隷の如く犧牲となし得べき位置にあつた英國に於て殊に固く主張されたのであるが、之は言ふまでもなく、生産費を以つて勞働能率の標準とした議論である。私有資本制度の社會に於てのみ言はるべき循環論法である。若し社會主義の經濟組織が自墮落なる人間の想像するが如きユトピヤであつて、人は一日に三時間か四時間働き、後は各人銘々好む所に從ひ放肆放縱なる耽溺生活を營むと云ふやうな事であれば、此の論理は事實上どこまでも貫徹せられ、社會主義の國家は到底國際競爭の壓迫に耐へ得べくもあらず、理想家の愚劣なる迷夢は冷酷なる現實の突破する所になるであらう。併しながら、今日戰後社會改造の方針として社會主義的方向を採らんとしてゐる國民は、決して斯るユトピヤを夢想しては居らない。彼等は勞力を惜むものではないが、たゞ現制度の不義不公平、浪費亂調を許さないと云ふまでである。

そこで、勞働者の努力の程度が同一であるとして、私有資本制度の下に於ける生産能率と社會主義的制度の下に於ける生産能率とを比較するならば、後者は組織統一があり、前者には私有資本に伴ふ遊民がある、また其の自由競爭に伴ふ浪費亂調があるだけでも、兩者優劣の差言はずして明かである。況んや近世勞働組合の勃興は、資本家をして最早安價なる勞力を賴とする能はざらしめ、且つ勞働對資本の格鬪が、斷へず勞働者の精神を動亂せしめ、産業の圓滑なる運轉を脅し、勞働黨は自己に不利なる場合には、勞力節約機械の採用にさへ反抗するが如き態

向ある時に於て私有資本制度の生產能率は愈々疑問となつて來て居る。殊に國際勞働運動と云ふやうなものが起つて、國際間に賃金及び勞働時間の統一を計らんとする氣運さへ發生し居る時に於ては、安價の勞働を唯一の武器として居つた國家は、從來の私有資本制度では到底競爭が覺束ないのである。

想ふに、私有資本制度に基く產業の發展は十九世紀の後半に於て其の絕頂に達し、其後社會の進化は事々に私有資本制度の破綻を曝露しつゝある。一方に勞働對資本の對立暗鬪があり他方には消費階級の覺醒がある。勞働黨の勢力が勃興するに連れて、資本家は其の虐制を一般消費階級に轉嫁せんとする。虐げらるる者は勞働者にあらずして中流以下の消費階級である。然るに此の階級も今や英國の如き社會に於ては組合運動によりて組織せられんとして居る。此等三勢力の前途は軈て社會主義的政策によりて統一せらるるに非ざれば、現社會の破綻は益々生產能率を殺減するであらう。よし血を流す革命がなくとも、單に經濟組織としての優劣の數から考へても、私有資本制度の社會は軈て改造せらるべき運命にある。試に想へ、彼の獨逸が國家社會主義を採用して、組織統一の威力を再び發揮するに到ればどうであらうか。他の國家は、厭でも應でも競爭上獨逸の範に倣ふより外なからう。況んや今次の戰爭に於て、列强は孰も工業動員の實を擧げて、其が經濟組織としての優秀なる功果を一度經驗した以上は、到底再び其の散漫なる私有資本制度の自由競爭を其儘に是認するものではなからう。

私有資本制度には夥しい浪費があり、亂調子がある。思惑、投機、生產過剩、恐慌、生產抑壓、買占、價格釣上等は、凡て私有資本制度に伴ふ必至の論理的附帶性である事は、マルクスの「資本論」に遺憾なく闡明せられて居る。日本が戰爭のため金を握つて、反つて物資の缺乏を嘆じたといふ事も、私有資本制度のお蔭であらう。勿論思惑投機も、社會の產業組織が今日程發達せず、資本の集中も今日の如く甚だしからざる時代に於ては、需要供給の調節を圖る有要なる原動力であつたであらうが、今日の文明社會に於ては、思惑投機は甚だしく人工的であつて、主として金儲の手段である。今次の戰爭の如き異常なる場合に於ては、國家は組織的調査によりて、思惑投機の機會を減すべきであるのに、之と反對に商人は今は商買の機會であると附込み、盛に攪亂運動を行つた。蓋し、思惑、投機、生產過剩、生產抑壓は、私有資本制度の經濟組織に於ては經綸であつて、之が無ければ商人は商賣が可能ないと云ふ。私有資本制度の下に於ては、實業家は生產其物よりも、寧ろ思惑投機に腐心して、實業界の所謂敏腕家とは思惑投機に長じた人の謂であ

る。現在の實業界に於て、思惑投機のために働く人が如何に多く、思惑投機のために浪費せらるる金額と時間が如何も大なるかを思ふても、私有資本制度は果して生産のためであるか、或は寧ろ生産妨害のためであるかを疑はざるを得ない。殊に日本の如く、商人は閥を作り、故意に取引を妨害し、大會社の支入方さへも金を掴まなければ交渉に應じないと云ふが如き弊風の一般なる國に於ては、私有資本制度の能率は益々疑はれざるを得ない。

蓋し、産業發達の初期に在りて、生産機會の富裕なる時に於ては、資本は自ら企業の方面に流出し、商人の努力も亦生産を主たる目的として他を顧みるの暇が無いのであるが、經濟組織の既に或る程度以上發達したる社會に於ては、生産は全然金儲の一手段として考へられ、また金儲と云ふ點から云へば事實不生産的の投資と毫も選ぶ所がない。生産を輔けて儲けるも、生産を妨害して儲けるも、儲は一つである。甚だしきに至つては、製造工業では儲からない。儲は販賣方一つであると云ふ聲を聞くに到る。そこで廣告と云ふ近世經濟組織に於ける大浪費が起る。商人は儲かる物品を供給して、其需要を唆り、儲から物の需要は極力之を抑壓せんとする。其の勢玆に停止せずして、遂には、ツラストと云ひモノポリーと云ふが如き組織の下に資本家は生産を制限し、價格を獨斷するに到る。此は私有資本制度の論理的歸結であつて、私有資本制度の論理を貫徹すれば必ず玆に到る。而して貫徹の結果は矛盾となり、矛盾は自らを裏切りて遂に社會主義を産む。蓋し經濟的進化の必然の運命である。

私有資本制度の目的は生産にあらずして、金錢である。生産は金を産む方便に過ぎない。マルクスは「資本論」中に historical materialism と云ふ哲理を提唱して、社會の文化は畢竟其の社會を支配する經濟組織の反映に過ぎないと論じた。私は玆に此哲學を裏書せんとするものではないが、現社會の風潮に照して此の哲學は歷史哲學として特に妥當なる事と感ずるものである。俗に云ふ「金の世の中」とは私有資本制度の社會に於ける文化を言ひ表した言葉で、マルクスの哲學の俗稱である。今や私有資本制度の經濟組織に基く拜金宗は、其の感化を社會の各方面に及ぼし、吾々は青年時代にどんな教育を受け、今日も本人としてどんな思想を抱いて居ても、一旦社會生活の圏内に入つた以上は一日も其の魅力から脱する事が可能ない。不自然であるとは知りながら金の爲めに本能をも犧牲とし、主義主張をも曲げる。虚榮に仕ふる事權威に仕ふるが如くにして、清貧を自ら耻辱と思ふ。現實と思想との間に矛盾を感ぜざる人は幸であ

るかも知れないが、現實に徹底し同時に思想生活にも徹底せんとする人にとりては、二重生活を送るより外途がない。擧世滔々として黄金の麻痺勢力に感染せる中にありて、まだしも男らしき氣概の閃を表してゐる者は勞働者であると思ふが、哀むべき中流階級の者には勞働者程の勇氣も無いのである。私は茲に月並的の社會彈劾をやる暇がない。たゞ一言して置きたい事は私有資本制度の文化は、たゞに人類の精神生活を腐敗せしむるのみならず、軈て其の經濟的能率をも減殺するものであると云ふ事である。

人間は働くべく生れて來たものである。働く事は人間の本能である。然るに私有資本制度は一方に於て資本を擁して徒食する遊民を作り、他方に於て苛酷なる賃金勞働に虐げらるる細民を作る。勞働黨の勢力の盛んなる今日於ては、賃金勞働に虐げらるると云ふ言葉は最早人心に共鳴せざる言葉であり、また資本を擁して徒食すると云ふ言葉も、日本では兎も角も、米國などの資本家には餘り適中せぬ言葉であるが、併し勞働者は資本家の活動を疑ひ、資本家は勞働者の働を卑み、相對して互に相容れられざる社會階級をなしてゐる事は、資本對勞働の格鬪が盛んなる程益々顯著なる現象である。而して兩者の中間に位する階級も、其の目的は概して遊民の生活を享樂し乃至資本家的の仕事を爲し得るだけの資力を作らんとする事にありて、其の怖る所は貧民の階級に陷りて、手足の勞働に從事する事である。苛酷なる勞働と遊民の生活は共に人間の精力を消衰せしむる事は言ふまでもなく、よし、勞働は苛酷ならずとも、資本家の生活は遊民的ならずとも、兩者の猜疑確執は自ら惑溺捨鉢的の氣風をなして生産能力を鈍らす。そして、中流階級の不安は業務に對する誠意を奪ふ。此の階級は前二者よりも深刻なる意味に於て金のために働き、金のために活き、金を慕ふ心は生の恐怖となりて斷えず彼等を脅し、軈て悲觀となり、懷疑となり、幻滅となりて、耽溺生活に慰籍を求むるに到る。是れ近世都市生活の特徵である。開戰當時英國は壯丁の體格を驗して、一般國民の精力の消衰せる事實を觀て驚いたと云ふ。而して有識者の意見は、之を私有資本制度の經濟組織に起因する現象であると云ふ事に一致して居る。果して然りとすれば、此の事實は私有資本制度の生産能率に對して、根本的の疑問を提出するものではないか。私有資本制度の生産能率を根本的に疑ふべき證據は之のみではない。もつと確實なる證據は佛蘭西の社會狀態に於て觀る。世界の文化國として誇る佛蘭西は有名なる金貨の國であつた。金錢崇拜は恐らく佛蘭西に於て最も露骨に、そして最も消極的に表れて居る。此の佛蘭西は金貨で有名であつたと同

時に、避妊で有名であつた。そして二つとも、遊んで金で暮して行かうと云ふ同一の消極的動機から出でた現象である。米國の如き新進國に於ては産業熱が旺盛なるため、私有資本制度に如何なる腐敗の種が宿つてゐても、それは消極的に表れないが、佛蘭西の如き文明の爛熟したる國に於ては、生産事業を起して儲る機會は極めて稀である。從つて人間の生産欲は消滅して、金が唯一の賴となる。新な儲ける機會はなし、贅澤はしたいし、そこで不生産的に金を增さんとする工面をする。金貸と避妊は其の結果である。私有資本制度の文明も玆に到つては自殺であるが、此は寧ろ其の當然の論理的歸結ではなからうか。佛蘭西の實例を見て居つた獨逸は、戰爭中にも拘らず女子國有を計畫せんとした事があり、今日は露西亞の過激派が之を實行せんとして居ると傳へらる。斯る不粹なる政策が必要なりと認められるまでに、私有資本制度の生産能率が疑はれるものとすれば、其の破綻は最早蔽ふべからざるものである。

三

想ふに、二十世紀の前半は世界の歴史に於て、私有資本制度の文明が崩解する時代であらう。而して今次の大戰は著しく此の氣運を助成するものである。私は戰後世界の戰爭は之を限りに終るものであるとは期待せず、況んや永遠の平和などは夢にも考へてゐない。併しながら今次の大戰は、愈々私有資本制度破滅の機會を與へたと云ふ意味に於て、最も有意義なる戰爭であつたと考へて居る。而して新文明の曙光は先づ敗戰國たる中歐の天地を照さんとしてゐるとは何と云ふ運命のアイロニーであらう。露國の過激派は今後どう轉がつても、自分等の成した地均の上に轉るもので、其の社會民主的基礎は再び覆さるるに餘りに廣汎である。併しながら過激派の事業は、其の破壞運動の壯烈なりし割合に未だ建設運動の觀るべきものがない。「起てよ世界の勞働者、起つて汝等の鐵鎖を切れ！」と云ふ所までは文字通りに實行されたが、マルクスの殘した餘白は過激派の手によりて埋められてゐない。新に建設せらるべき社會經濟組織の如何なるものなるかを觀んとすれば、露西亞より眼を轉じて、獨逸及び英國の形勢に注目すべきである。建設運動の大勢は既に英獨社會の輿論及び實狀に於て十分に示されて居ると思ふ。而も英獨は互に相異なる二潮流を代表せるため、其の比較對照は殊に暗示に富んで居ると思ふ。

先づ獨逸側の潮流より論ずる。

獨逸の運命をトするに當り、獨逸は既に經濟的にも文化的にも世界に於て最も優秀なる組織を有つて居る事を忘れてはならぬ。アングロサクソンの嫉妬の標的となつて居る獨逸の優秀な

る組織は、侵略の武器として用ゐても、平和の手段として用ゐても等しく世界の耳目を集注すべき威力あるものである事を看過してはならぬ。此に加へ獨逸人は緻密で大膽、奸智を逞ましくするだけの明あつて、而も本來正直である事を忘れてはならぬ。

戰前より獨逸は最もよく社會主義的政策を實行して來た國である。鐵道、電信、電話、運河、飛行機、其他の交通機關は悉く官營であるのみならず、市は凡ての公共事業を經營し、廣い土地は概して市の所有であり、市場劇場、大規模の肉屋、八百屋、日用品店、電力發動所、其他公衆の需要品を製造する工場は多く市の經營する所であつた。勞働者は政府で養育せられた政府の看護婦によりて育てられ、政府の牧師によりて命名せられ、政府の費用で教育せられ、政府の監督の下に技術を習ひ、政府の命によりて兵役に服し、政府の援助によりて職業を與へられ、政府の特許によりて結婚し、病めば政府の病院に入つて治療せられ、不具者となれば政府の手當によりて生活し、死すれば妻子は政府の保護する所となり、職業を轉ぜんと欲すれば政府は其便宜を與へ、旅行すれば市は宿所を供し、雇主と爭ふ時には政府は仲裁の勞を取り、雇主を訴へんとすれば政府は辯護士を供し、若し活き長らへて齢七十に達すれば、政府は相當の恩給を與へて餘世の平和を保障する。政府の勞働保險に加入せる勞働者の數は千六百萬人に達し、之が爲政府の支出する金額は日割にして一日八十萬マークに達し、前も此の金額の中には經常費が含まれてゐない。此の勞働保護政策の中に網羅せられざる階級は、銀行會社の書記とか、タイピストと云ふか如き所謂安月給取のみで、最近には、此等の階級をも勞働者として取扱ひ、保護政策の中に網羅する議案が提出せられ居つた。

此はビスマークの計畫した所謂 state socialism であるが、社會政策としては殆ど間然する所がない。社會主義者と雖此れ以上の勞働者保護政策を夢想しては居らない。然るに舊獨逸に於ては此勞働政策は階級的官僚政策と兩立し、勞働者、社會主義者は國會の議員とはなれども、官途の門戸は全然閉塞されて居つた。民間有爲の士は社會主義者となるか然らざれば實業界へ走つたのである。今次の獨逸革命は先づ此階級的官僚政治を打破し、併せて產業官營の範圍を一層擴張し、私有資本制度を滅ぼさんとする企圖である。階級打破は既に成つて居る。產業官營も既定の方針である。たゞ私有資本制度を如何なる範圍まで撲滅するかと云ふ事につきては多少の疑問が存在して居るが、此も甚だしく制限せられて、此に伴ふ弊害は悉く除去せらるべきは最早疑ふの餘地がないやうに思はれる。

戰前に於ても、獨逸の強味は官僚的軍國主義よりも、寧ろ其

實業組織にあつた。此は夙に獨逸有識者の主張してゐた所で、敗戰後の獨逸は軍國主義を捨てゝ、專ら其の勢力を實業組織の完成に用ゐんとしてゐる事は顯著なる事實である。獨逸の私有資本制度は英米佛のそれと比して、戰前より著しく其趣を異ふし、戰前に於て既に甚だしく國家的色彩を帶び、總て社會主義化せんとする傾向を示して居つた。獨逸の實業家は金儲は國家のための金儲であると云ふ思想を抱いて、此の信念の下に活動して居つた。獨逸實業の國家的特色は、彼の有名なるカルテルと稱する組織に於て最も明かに表れて居つた。カルテルは獨逸實業の參謀本部とも稱すべきものにして、此の組織の下に獨逸は銀行家、製造業者、貿易商人の利害關係を打つて一丸としてゐたのみならず、對內對外の商策を殆ど一手に支配して居つた。內には關税の障壁を築いて自國の市場を保護し（此は獨逸にとりて最早其必要なく、また戰後は主義として撤廢すべし）外には組織統一の商略によりて例のダンピングを行ひ、後進の貧乏の國でありながら、先進國の市場に侵入して、戰前あれ程までに經濟的運命を開拓したものである。私有資本制度の經濟組織に伴ふ浪費、亂調は、獨逸に於ては、或る程度まで此のカルテルの組織統一の力によりて防止されて居つた。スイツランドの或る經濟學者が、開戰當時獨逸の經濟狀態を論じて、若しカルテルが無かつたならば、戰前獨逸は幾度恐慌の浪に洗はれて、破産の淵に打上げられたか知れないと云ふ事を、統計上に說明して居つたが、實に其通りで、獨逸は限りある資力を以つて尨大な實業を營み、全世界の市場に其魔手を延べ、信用に重ねるに信用を以つて唯一の金融策となし、能く經濟界の荒浪を切拔けて來たのは、全くカルテルと稱する實業參謀本部の劃策指導があつた爲めである。

併しながら獨逸實業の雄大なりし理由を極めんとすれば、更に根本に遡つて其の精神を捉へなければならない。戰前より獨逸の經濟思想は英米佛のそれとは異りて、金よりも生產を本位として居つた。私有資本制度の許す限りに於て獨進は生產を主として利益を從とした。獨逸の實業は利益目當の投資で自然に發達したものではなくして、利益の如何に拘らず故意の計劃[illegible]たものである。市場があつても無くても、先づ生產をやつて、賣れなければ損失を構はずに賣る。大局に於て生產力の優越なる者は勝利を占むると云ふ自信の下に掛つたものである。獨逸のダンピングは此の經濟思想の結果であつた。競爭者から酷く厭はれたが、世界の消費者を益したるは夥しいものである。資本勢力を以つて世界の富を壟斷せんとする英國の經濟思想に慣れた人にとりては、獨逸の思想は逆說のやうにも思はれるでも

らうが、金を生産の方便とすると生産を金の方便とすると、果して孰が正しからうか。兎も角も、獨逸は國家の資力を擧げて生産のために用ゐて居たがために、獨逸には私有資本制度に伴ふ金錢崇拜の氣風が比較的薄かつた。戰前獨逸の實業は其發展の割合に利益が無かつた事は事實であらうが、之と同時に金錢崇拜の氣風が薄いだけ生産欲が強く、獨逸實業の生産能率は世界に冠たるものであつた事も亦事實である。

戰後の獨逸は如何に變化するであらうか、未だ逆賭し難い點もある。講和條件が愈々提出せらるる時に到れば、暗雲再び獨逸の天地を蔽はんとも限らない。併しながら、今次の革命の結果が順潮に發達するものならば、上述の獨逸經濟思想は、徹底的國家社會主義の下に益々其特性を發揮するであらうと思ふ。思潮としては國家社會主義は既に二年程前より、neo marxismと云ふ名によりて、學説化されて盛に宣傳せられて居る。私は嘗て之をポール・レンシュの説として「中央公論」で紹介した事があるから、玆に再び論ずる事を避ける。たゞ新讀者のために、一言にして言ひ表せば、此はマルクスの經濟學の應用である。恰度カントの哲學をフイヒテが「獨逸國民化」したやうに、マルクスの純社會主義思想を、獨逸の現狀と其將來の國際的位置に鑑みて、「獨逸國家化」せんとする思想である。此の派の人々の考では、露國の過激派の如き純理想主義は、今日の世界に於ては到底實現せられ得べきものではない。社會主義は獨逸國民の文化思想の中心となすべき十分の價値と權威を備へて居るが、之を實勢力とするには先づ之を「國家化」して獨逸の實利と調和せしめなければならない。即ち、資本を政府の手に集中して、産業組織を統一し、生産を本位として國家の經濟基礎を固め、之と同時に民主主義を徹底せしめて、其思潮を世界に押擴げ、政治的民主主義の空名の下に依然として利權政策を行ふ英國の殖民政策を根柢より覆さんと云ふ主張である。レンシュは之を「産業の國家化、國家の社會化」と稱して居る。獨逸はユトピヤに憬れて社會主義を求むるにあらずして、國家の經濟的能率を增進せしめんがため、社會主義的制度を布かんとするものなる事は、此の學説によりても明かである。

レンシュは一個の論客であつて、彼の思想には幾分過激の節もあり、殊に英國嫌ひの點は餘りに露骨であるが、之と同様の思想は獨逸の有力なる實業家の中にもある。資本家が自ら進んで社會主義を抱擁せんとする。流石は獨逸人である。此等の實業家は私有資本制度の浪費亂調を十分に認めて、大規模の産業官營を主張し、戰時に行つた工業動員を其儘戰後にも永久に持續せんとするのである。國家經營の下に有らゆる浪費を省き、

不生産的勞働、贅澤品の製造、重複の取引機關、無用の廣告等は悉く廢止し、擧國一致必要品の生産事業に當らんとする計畫である。彼等は組織統一の力によりて凡の戰費を償却し、獨逸の實業を再び戰前の昔に復せんとする覺悟である。此等の實業家と多數社會黨との間には完全なる政見の一致があつて、舊官僚系の有志も亦此の政策を助けて居るものと見做してよいのである。

支那人は資本が無ければ仕事が可能ない國民であるかも知れないが、今日の獨逸は資本などを眼中に置いて居ない。資本が無くとも原料品さへあれば、立派に生産事業で列强と競爭する覺悟であるが、悲夫、獨逸には鐵、石炭、化學品の原料は豐富であるが、羊毛、石油、綿花、樹脂、銅等の原料は之を世界に仰がねばならぬ。此等原料の幾分は獨逸はバルカン、露西亞の方面より得る見込であるが、將來は知らず今暫くは、此の方面よりの供給は到底十分ではない。どうしても不足は敵國の勢力範圍に於て求めねばならない。英佛は之を自由に供給してくれるであらうかどうか、此點は獨逸の凝つと虫を殺して待つて居る點である。

然るに英佛側では今尙ほ獨逸の組織統一の力を怖れて、獨逸復活の將來を苦にして居る。呪はれたる獨逸の悲痛と呪はんとする英佛の苦心は、共に眞劍眞味である。まだまだ如何なる悲劇が發生しないとも限らない。英佛の獨逸の將來に對する恐怖心は甚だ卑怯である。其の卑怯なる心理狀態は、獨逸に課すべき賠償金の取立方法に關する議論に最も露骨に表れて居る。英佛は紙の上では何程の償金でも課し得る位置にあるが、其徴收法には自ら限度がある。獨逸には勿論今直ぐ取立つべき現金がない。將來も之を取立てるには物品で取るか然からされば勞働で取るより他に方法がない。勞働で取立てるとすれば、荒廢地を再興せしむると云ふ適當な仕事はあるが、それでも自國の勞働黨は默つてゐない。物品で取立てるとすれば、獨逸の生産に相當の便宜を與へて、通商貿易の途を開いてやらねばならぬ。それでは獨逸生産事業勃興の手傳をするやうなものである。取立る側の生産能力が衰へて、取らるる方の生産能力が增進するは極つた事である。取立てて居る間はよいとしても、後は怖ろしい。然らば種々の制限を加して永久に獨逸が復活し能はさるやうな、所謂眞綿で首を絞めるやうな方法で取立てるか。それも不可能である。何となれば、獨逸國民はそんな苛酷なる奴隷的條件の下に働くよりは、寧ろ明日にも擧つて過激派化するであらう。露西亞の過激派は手を擴げて、そんな時期の到らん事を待つて居る。若し獨逸が擧國一致過激派化して露國と

提携すれば、それこそ英佛自身にとりて由々しき一大事である。獨逸の勃興を助けても過激派の洪水ばかりは堰止めねばならぬ。此が所謂賠償金問題のディレンマである。此のディレンマの裡に伏在せる論理は資本主義の論理である。噫々・資本主義の論理、金錢本位の經濟學は、今や國際關係に於てさへも其の破綻を曝露せんとして居る。

四

以下英國の潮流を觀ん。

英國の潮流は獨逸のそれの如き濃厚なる色彩を有せず、又其の變化にも獨逸の如き戲曲的背景を缺く。英國は戰勝國である、其の國際的位置は戰前よりも鞏固である。且つ英國は今尚ほ世界に對して債權國である。從つて因習勢力は容易に去らず、加ふるに英人は有名な粘液質の國民であるから、乾坤一擲の革命などは英人には到底期待されない。併しながら社會經濟進化の大勢は英國と雖堰き止め得ざる不可抗力である。私有資本制度の自由競爭は此所にも今や破滅の運命に陷らんとして居る。自由競爭の浪費亂調は資本家自身進んで之を整理せんとして居る。之と同時に、私有資本の不義は勞働黨の壓迫によりて早晩滅ぼさるべき運命にある。

久しくマンチェスター學派の支配下にあつて。私有資本制度の自由競爭に慣れ親んだ英國の經濟思想は。今も尚ほ社會主義に對して一種の僻見を抱き、其の能率を疑つて居る。社會主義的氣運の世界に旺盛なる今日に於ては、流石のマンチェスター學派も聲を潛め、又昔日の散漫なる自由競爭主義を主張する者はないが、彼等年來の主張たる private initiative 即ち産業發達の原動力は自由競爭を基礎とする個人の創造努力に在りと云ふ思想は、思想としては今も依然として唱へられて居る。競爭と云ふ意味を善意に解すれば、思想としては此は永遠に否定すべからざる思想であるが、此の思想がマンチェスター學派によりて今日迄特色として代表して居つた經濟制度其物は既に動搖瓦解せんとして居る。

マンチエスター學派の自由競爭主義には深い歷史的根據がある。十八世紀より十九世紀にかけての英國の經濟的發展はその私有資本制度の自由競爭によりて成つた事は、十七世紀頃から英國は海賊として建國の基礎を築いたと云ふ事と共に、疑ふべからざる事實である。蓋し産業組織の規模は未だ甚だしく大ならず、加ふるに外國の市場に於ても强敵とすべき程の競爭國が一つもなかつた時代には、此の經濟制度は英國にとりて最も都合好き制度であつて、英國の富は之によりて殆ど自然的に築き上げられたのである。アダム・スミスを祖師とする英國の自由

主義經濟學は、此時代の制度を學說として言ひ表したるに過ぎない。學說が制度を作つたのではなくして、制度が學說を作つたのである。マルクスの歷史哲學は此所にも其の適用を觀る。然るに十九世紀の後年より、私有資本が小數資本家の手に集中するに連れて產業組織が一變して、ツラスト、モノポリーと云ふが如き所謂近世的大事業が起りて自由競爭の實を一蹴し、他方には獨逸と云ふ新進國が現れて英國の虛に乘じ、組織統一の商略によりて外國市場を攪亂するに到り、玆に自由競爭の舊制度は自ら瓦解せざるを得ざる運命に迫つて來たのである。

此の運命は、今次の英國總選擧に於ける自由黨の凋落破滅によりて象徵せられて居る。選擧の結果を見るに、政府黨は反對黨に對し、五對一の成績を以つて豫期以上の大勝を贏つて居るが、此はロイド・ジョージの巧妙なる選擧劃策が齎らした結果であつて、實際勢力の相違には決して斯る甚だしき懸隔がない。選出せられた議員の數から比較せずして、投票數から比較してみると、政府黨と反對黨との差は、四對三である。而して反對黨の大多數は言ふまでもなく勞働黨である。自由黨の勢力は統一黨と勞働黨との双方より切崩されて分裂の姿となり、政界の分野は今は明かに統一黨と勞働黨との對峙である。此の變化の著しき殆ど一種の革命と見做してもよい程である。

今日の統一黨は最早戰前の統一黨ではない。彼等は地位名門を誇とする封建的氣風の惰眠より醒めて、近世產業組織變化の氣運を眞向に觀て居る。自由競爭制度の因習に囚はれたる英國の產業は、戰前或る意味に於て世界に於て最も沈滯したる產業であつたが、戰爭の刺戟と獨逸の教訓によつて新生命を與へられて、今は國家的乃至帝國主義的組織統一の緒に附かんとして居る。そして此の傾向は對外政策に於て殊に著しく表れて居る。領事館を通商補助機關とする計畫とか、或は原料品の分布を管理せんとする企圖の如きは明かに獨逸式の模倣である。昨年中は銀行業者の資本合動運動が盛んに行はれ、其他の事業も種類別によりて統一綜合せられんとして居る。而して斯る氣運を促進しつゝある者は統一黨の資本家と政治家であつて、統一黨の新政策を指導しつゝある人はロイド・ジョージよりも寧ろ例の無冠の宰相ノースクリフ卿である。彼の指導の下に英國の產業政策は着々として組織化されんとして居る事は疑ふべからざる事實である。

統一黨が舊時代の散漫な產業制度を整理して、國家的見地から之が統一の實を擧げんとするは多とすべきである。併しながら統一黨の計畫は、單に私有資本を可能るだけ組織統一せんとする程度に止まりて、決して獨逸に於けるが如くに「產業の

國家化、國家の社會化」と云ふ程の運動ではない。統一黨はどこまでも私有資本制度の擁護者である。彼等は自由競爭の浪費亂調は認めても、私有權利だけは假定社會の利害と衝突しても、飽迄も之を維持せんとするものである。結局自分等自身の利害問題が主である。彼等は今尚ほ社會一般及び勞働黨から敵視せらるるは此が爲めである。であるから英國に於ける社會改造運動の本當の精神は之を勞働黨側の大勢に觀るより外はない。

私は社會主義的潮流は今日既に英國の大勢であると斷言して憚らない。併しながら其の實現の過程は獨逸とは趣を異にし、漸進的、妥協的、部分的であつて、政治上の自治を經濟上の自治まで押し擴げて行く事によりて實現せらるべきものであると思ふ。此の點が英國式の社會改造運動を獨逸式のそれより分つ特色である。

勿論、英國にも急進派、理想派の社會黨がある。ヘンダーソンの如き人は、凡の勞働勢力を結合し、之に智識階級の社會黨即ちフアビヤン派を加へ、學者が猛獸を驅るやうな陣を作り、一擧にして社會主義を實現せんとする考を有つてゐた人であるが、彼の運動は遂に成熟しなかつたやうである。英國の勞働黨中、今日現に社會主義を稱へて居るのは獨立黨と稱する少數團體に過ぎずして、ツレード・ユニオンは政策や辯論の上では常に獨立黨の指導を受けて居るが、實際問題になると自家當面の利害に沒頭し、自分等の利益のためには殆ど主義も理想も顧みず、隨分非社會的の暴行をも敢てする。それがため勞働黨は往往智識階級の忌憚する所となり、文學者や美術家からは社會主義は勞働者の文明であつて、勞働者の文明は文化を滅すものであるとまで誤解せられ、甚だしきは社會主義者からさへも苦々しく思はれる事がある。之に加へ、英人は今尚ほ自治自由と云ふ事に固い信仰を有つて居つて、社會主義の劃一制を好まない。社會主義は劃一制であるか否かは別問題であるが、英人は一般に劃一制であると思つて居る。斯る有樣であるから、綜合的急進的社會主義運動は英國の今日に於て餘り望ありとは考へられない。併しながら、部分的運動は經濟的自治制の形に於て各方面に勃興しつゝある。私は此の部分的運動は軈て英國を社會主義化する種子であらうと考へて居る、然らば部分的運動とは何か、組合運動とシンジカリズムである。

組合運動とは消費生産兩方面に亙りて小資本家の組織である。小資本家が大産業組織の實を現すべき制度である。農業、手藝工業、日用購買等凡て小資本の經濟行爲に適用して之を近世的大經濟行爲とすべき組織方法である。一言にして言へば即ち經濟自治制である。政治自治制の淵源地たる英國がまた經濟自

治制の發源地であるとは、英國の歴史も亦誇とするに足る。

消費組合運動は、英國に於て戰前より既に盛んに行はれ、其の組織も大規模のもので、宛然一個の經濟自治團と見做される程のものがあつた。此の運動が益々發達して社會各方面に擴がるに連れ、仲買業者、卸賣業者、投機業者と云ふが如き不生産的機關は省かれて、現在の小賣業者は漸々組合の分配機關と變化するに到るであらう。獨逸が市で肉屋、八百屋を經營する所を、英國は組合自治團で經營すると云ふ事になる。

併しながら、組合運動の本源地は農村である。農村の組合運動は、單に消費の方面に限られずして、生産方面に應用して特に其功果を觀る。「農具改良、農事試驗所設立、其他共通事業は凡て組合自治團の經營となるべき自然の性質を有して居る。英國は戰時食料の供給に就て、農村組合の援助を受けた事は實に夥しいものである。其の報酬として農民は土地國有を主張し、英國識者の輿論も土地國有に傾き、之に對し絕對的反對の聲を上げ得る者は殆ど一人もない。此は早晩實行せられる事であらうと思ふ。唯に英國ばかりではない、歐米の輿論は一般に土地國有である。米國では、借地料と略ぼ同額の税を地主に課して土地所有の實を地主の手より奪ひ、其の税金を擧げて農村改良に用ふべしと云ふ説が最も盛んである。土地國有は私有資本制度の根柢を覆すもので、之が實行せられたならば、私有資本制度の大部分が滅びる事となる。

組合運動は手藝工業、其他小資本の工業に應用せられて居るが、此應用は英國よりも、寧ろ獨逸に於て盛んであらうと思ふ。獨逸の玩具製造業は、之を各々別々に見れば家族工業の範圍を出でないが、全體としての組合組織を見れば近世的大産業である。兎も角も組合運動は之を擴張して、社會の各階級、各方面に及ぼせば、總て私有資本制度、金錢本位の經濟組織の寄生蟲たる商人と云ふ階級を陶汰し、今日の商人は分配機關の勞働者と化すべきものである。斯く考へてみると、組合運動は現社會を改造すべき一大原動力である。併しながら組合運動の力では到底及ばぬ私有資本制度の本城がまだ一つ殘つて居る。即ち近世の工業組織である。造船所、鐵工場、其他の大工業を社會主義化するには他の運動の力を要する。シンジカリズムの起るのは此所である。

英國には未だシンジカリズムの實際運動として特に見るべきものはないが、ツレード・ユニオンは既に此の思想を抱いて居る。想ふに資本對勞働の衝突妥協の歴史の前途はシンジカリズム迄行かねば止まないであらう。シンジカリズムは職工の自治制である。職工及び工場事務員が自治團を作つて自ら製造工業を經營せんとする運動である。「生産機關を吾等の手に渡せ、重役や株主には用が無い」と云ふ叫びである。支配人も投票で撰び、經營の方針も投票で極めやうと云ふ運動である。即ち製造工業は職工及び事務員を網羅する自治團の所有物として、所謂資本家階級を省かんとする運動である。此の運動の極端なる現れは露國の過激派、米國のI、W、W、の如きものであるが、英國の如き社會に於ては、訓練あるツレード・ユニオンの要求となつて漸を以つて進むべき望みがある。現に英國に於ては、製造工業の經營はツレード・ユニオンの意見を無視しては全然不可能である。ツレード・ユニオンの要求と資本家の權利とが妥協によりて解決し得らるゝ間はよいが、戰後産業が平時狀態に回復すると共に、資本家の利益が稀薄となり、而も勞働黨は益々其の要求を増長せしめて頑として妥協に應ぜざるに到らば、經營者は凡てを投出すより他に途がなからう。斯る時の到る頃には政府も既に勞働黨の勢力範圍となつて居るであらう。而已ならず、英國では自治精神を重ずる所から、識者の輿論も、

官僚よりも此のシンジカリズムを推撰せんとする傾がある。論者の中には、政府は宜しく、地方的區別に依る政治的自治制の外に、産業の種類別による經濟的自治制を布くべしなどと主張する人さへある。理論家の意見は姑く別として、實際勢力たるツレード・ユニオンは勢ひ此のシンジカリズムの方向へ發達する傾向あるやうに思はれる。

組合運動、殊に消費組合運動とシンジカリズムとの利害は果して調和するであらうか、また此等兩者の孰も一般社會の綜合的利害と矛盾衝突する所がなからうか。此は明かに疑問である。併しながら英國と云ふ國はマグナ・カルター以來衝突妥協の長い過程を經て發達して來た國である。雜然たる所に統一を見出して行くのが英國政治の特長である。英國の將來は、漸進的、部分的なる經濟自治運動と對外帝國政策との調和である。熟すれば此も亦完全なる國家社會主義である

五

私は英獨の例を借りて社會改造運動の二潮流を示したのであるが、英獨の思潮は截然と異なつた方向に流れてゐるものと考へたならば誤である。英國にも獨逸式の思潮があつて、統一黨の政策の如きは寧ろ純獨逸式に類似したる點さへある。社會主義者の方に於ても、例へば炭坑官營、勞働者住居官設と云ふが如き state socialism を主張する運動がある。他方獨逸を觀るに獨逸にも英國式の思潮がある。獨逸の産業は戰前より種類別によりて一種の自治制が行はれて居つた。ハンザ同盟は其著しき例である。今次の革命によりて愈々社會主義が實行せられても、産業經營の實質には格別變りなく、戰前既に一種の自治團であつたものを共催政府の管理に移するまでの事である。併しながら獨逸式は大局から考へた組織的計畫であつて、英國式は民間自然の發達に任せる部分的組上策である事は著しい區別で

ある。英獨に此の區別あるは、兩國民の異なる歴史、異なる民族性、異なる國際關係の致す所で、理論の問題ではない。若し獨逸式を官僚式、英國式を民主的と區別して、一を排し他を揚げる人があるならば、其人は事の眞相を看破し得ざる人である。斯る形式論を弄ぶ人に對しては、獨逸の官僚式は民主的、英國の民主主義は官僚的とでも答へて置くべきである。社會化したる國家に於ては、官僚則民主民主則官僚と云ふやうな逆說が成立するのである。

戰前に於ても、獨逸を官僚と呪ひ、英國を民主的と信じて官僚に軍國主義を結附け、民主に平和主義を結附けて、聯合軍の旗印を鵜呑みにして居つた。成程形式上にもそんな區別もあつたであらうが、實質に於ては決して差別が無かつた。英國は大海軍を擁して立派に軍國主義の國であつた。社會の階級制度も英國の方が古いだけ一層固定して居つた。經濟上の自由主義も決して本當の自由主義ではなかつた。十九世紀の英國の自由貿易政策は偶々帝國主義的利害の實質と調和する所あつたがために採用せられたので、決して平和主義として用ゐたのではない。獨逸の政策は英國の此巧妙なる政策の眞相を看破して、其僞善の假面を剝ぎ、赤裸の形に於て自ら之を採用したまでゝある。獨逸の識者は夙に獨逸軍國主義は英國軍國主義に倣つて建つたものであると言つて居つたが、之は公平なる歴史家の否定し能はざる所であらう。軍國主義乃至帝國主義と云ふ點に於ては獨逸も英國も同類である。決して異なる所がない。たゞ一方は進取的、他方は保守的と云ふ差別があつたのみである。業成り功遂げ、既に必要以上の廣大なる領土を有せる英國が保守主義、自衛主義であつたのは固より自然の傾向で、之と同時に新進氣鋭の獨逸が進取主義であつたのも亦自然の勢であつた。此は物理的原則である。之を民主主義官僚主義と區別する如きは

末の亦末である。

さて、英國式と獨逸式とを比較して、能率の優劣如何と云ふ問題に就ては、此は組織其物を抽象して辯ずべき問題ではない。英國の國民性には自治制が適して、自治制の下に新鮮なる生氣の發露するを觀るかも知れないが、獨逸は今は革命時代である。大局から極めて掛からねばならぬ境遇にある。而已ならず獨逸の特長は組織である。併しながら能率の問題は謂ふる所精力の問題である。英獨孰の國民がより優越なる精力を有せりやと云ふ問題である。之には殆ど答ふるの必要がない。若し英獨が同一條件の下に競爭するならば、英國は到底獨逸の敵ではなからう。人種的相違は姑く措くも、英國は長い間の私有資本制度の下にあつて國民の精力は消衰して居る。獨逸は私有資本制度の麻痺勢力をまだそれ程に受けて居らない。併しながら英國も今は戰前の英國ではない。今日の英國は戰爭の刺戟によつて大に覺醒して居る。獨逸も亦益々覺醒して居る。益々覺醒しては居るが、何分にも競爭の條件も甚だしく不利である。獨逸國民は此の不利なる條件の壓抑に耐へ得るであらうか。總て悲觀の風に襲れて、あたら健氣なる希望抱負も幻滅と化するやうな事がなからうか。

呪はれたる獨逸！汝の神は超人の子を抱いて濃霧の中に立てり。汝の運命は晝か夜か。リチーウスキー公は有名なる告白錄の終に映じて曰く「吾等獨逸人は後れ馳せなり、世界は既にアングロサクソンの天下なり」と。併しながら獨逸の希望が幻滅と化した時は、歐洲全土が過激派の洪水に洗はれる時であらう。佛蘭西に於てさへ、過激派は戰爭のために増へてこそ居れ、決して減つては居らない。伊太利の社會黨も亦甚だしく危險性を帶びたるものと云はれて居る。若し獨逸が全々過激派化して、金はなし拂ふ氣もなし、サアどうでもしろうと居坐れば、聯合國も手の下しやうが無からう。佛軍の伯林占領などと云ふ事は草叢を打つて野獸を起たしむるやうなものである。一時妖夢に襲はれて捨鉢的に出でんとするやうにも見えた獨逸が持直したと云ふ事は、まだ獨逸國民は復活の希望を失つてゐないと云ふ證據である。講和條件にして苛酷ならざる以上は、社會主義の下に獨逸生産事業の勃興は再び世界の耳目を驚かす時が來るであらう。況んや露獨提携の將來あるに於てをや。

* * * * *

私の本論を草したる目的は、私有資本制度、金錢本位の文明榮ゆれば榮ゆる程、人間の精力は消衰し生産能力が減退するものである事と說かんとするに在つた。私有資本制度の自由競爭主義に基く文明は既に發展し得る最高限度まで發展して、今や此の文明が破壞する腐敗の種子の成熟して自ら腐朽せんとして居る。正しく了解すれば社會主義的思潮は近世文明の破綻を救ふべき建設的勢力である。

翻つて日本を觀るに戰爭のお蔭で一時成金國となつた日本に於ても、私有資本制度の文明は今や爛熟の極に達せんとし、國民精神は腐敗のドン底に陥らんとして居る。まだ金が儲かつてゐた間はよかつたが、此れからは金錢崇拜の氣風が消極的となつて、昔の佛蘭西の轍を踏まんとする恐れがある、政府は保守主義、國民はデモ主義、共に時代を解せず。誠に今日は日本の危期である。宜しく速に社會改造運動を起すべきである。それと同時に私は玆に社會主義のユトピヤを辯めて置く。カール・マルクスの殘した餘白は決してユトピヤで埋めらるべきものではない。彼が私有資本制度の批判に加へたと同樣の峻嚴なる論理とリヤリズムを以つて埋めらるべきものである。(完)





金の光琳と銀の乾山

野口米次郎

光琳の草花に對する態度は理論（もと〳〵この理論なるものは欽仰の念が蒸溜されて凝結したものに相違ないけれども）に煩はされたもので無い。彼の態度は偶然的であつた。然し彼の態度の偶然はいつも本質的必然とよく一致して居た。故に彼の草花に對する態度は何處までも自然で、決して草花を裝飾的に取扱つたので無い。元來草花は別に「力說（エンファシス）」の或物を加へられなくても、それ自身に性質として裝飾的である。日本ばかりで無く西洋でも、草花（その又他）に於ける光琳を裝飾的藝術の一句で蔽はふとする批評が一般に行はれて居るが僕自身はそれに賛成せぬ。眞實に裝飾的藝術は單に技工的力說の點から得られるもので無い。光琳の裝飾的藝術――假にそういつてもいゝとして――は彼の自然的態度が產んだものだ。僕は最も自然にして初めて最も裝飾的たることが出來ると信ずるものである。光琳の草花に對する態度は自然であつた。何故なら彼は繪の上で草花の美を特別に制限したり又修正しやうとしなかつた、故に彼は草花の選擇を特別に喜んだ男でないからである。光琳こそ草花に眞實なる自然を見た藝術家であつたと僕は思つて居る、――重ねていふが、彼の草花に對する態度は極めて自然であつた。草花の崇拜者としての彼の價値は、彼が紙の上なり又絹の上なり乃至は漆（ラツカー）の上に草花をして本質的にその美を歌はしめた點にある。草花は獨唱（ソロ）の場合にその本質美を最も完全に發揮するものだ。光琳が描いた草花の大部分は獨唱家としての草花で

ある。

十六世紀の所謂茶の宗匠利休が嘗て太閤を『朝顔の茶』に招いた一挿話を僕は聞いたことがある。その當時では朝顔は至つて珍らしかつたものであるのはいふまでも無い。太閤が來ると定められた當日になると、茶の宗匠利休は朝顔の花全部を園庭から切捨させて仕舞つた。太閤はお茶より寧ろ朝顔見たさに遣つて來たのである、然るに朝顔の花一つも彼の眼に觸れ無かつたので、頗る不興の體で彼は茶席の方へ歩みを進めた。太閤は利休へ汝の自慢の朝顔は何處に植へてあるぞと詰問を掛けた。休利は無言であつた。太閤は更に一層不興の顔を顰めて茶席に入つた――そうすると、見よ、朝顔の花一つ如何にも忘れられた日光一片とでもいつたやうに、妖嬌たる姿を床の間から顯して居た！　利休は其他の朝顔全部を犠牲にして、たゞ一つの朝顔に女王的名譽を輝かさしめたのである。こうなつて見ると、犠牲になつた澤山の朝顔も必ずしも犬死したものと云へない。又床の間に上ぼせられた一本の朝顔の生き甲斐あつたのはいふまでも無いことだ。この利休の態度が軈て草花に對する光琳の態度であると僕は思ふ。光琳は――梅の老木一本或は椿一枝或は朝顔の匍匐或は牡丹一輪或は菊の亂れ咲或は藤のひと垂の繪の上に於ても、彼の要求する所はたゞもうその美の暗示だけに止まつた。彼は他の朝顔全部を犠牲にした利休のやうに、我々に示さんとする草花の一本だけを持出したのである。決して彼は草花の總數を提供しやうとしなかつた。この彼の態度には卓越した藝術的價値がある、――彼は如何に喜ばしき空間を畫面に殘し、そしてその空間を如何に麗しき『無（ナッシング）』で滿すかの秘訣を我々に教へた。諸君がたゞ單にこれを光琳の裝飾的藝術だといゝたくばいつてもよからう。僕は信ずる、――彼は草花に偶然的な自然の身振を見て、彼等に本質的な美を歌はしめたのみである。而して彼等が本質的美を最も完全に歌ふ時は彼等が孤獨に起つて居る時である。

勿論草花の美は他の美と融和することを拒むもので無い。然し彼等は沈默や獨立の力で最高價値に到達することが出來る。彼等の美が他の美と融和せんとする場合はいつも詩歌の音律に依らねばならぬ。而して如何に見事に草花の美が他の美と融和するかを見ると實に驚嘆に價するといへる。彼等は雲とも星とも融和する、彼等は山とも岩とも融和する、彼等は鳥とも川とも融和する。そして其等の自然の現象がそれ〴〵如何に自分の場所と力とを知つて居るかを見ると實に驚くべきものと云はねばならぬ。彼等は決して他の埒内に踏み込まぬ。彼等は他を尊敬する、そして音律的に自分の最善を遂行するのである。然し

自然の現象が他と融和してその音樂を一つにしやうとする場合にはその箇性はいつも弱められ多少傷付けらる。今此處に光琳の『椿に蝴蝶』があるとする、『蘆に鷺』があるとする、『鳩に波』があるとする、波に千鳥を描いた『須磨の浦』があるとする、『岩に小菊』があるとする、『紫陽花に兎』があるとする、『梅に鶴』があるとする、『紅葉に鹿』があるとする。其等の描かれたものを箇々別々に調査したならば必ずしもその最善を盡したものと云へないかも知れぬ。然し一枚の繪として全體の上に、描がいた物象は他の物質と麗はしい骨肉關係が存在して居るとまでいふことが出來る。而してこの完全な融和は多少描がいた物象の箇性の犠牲から得られたものだと氣が附くであらう。故に僕は自然の現象が最高價値に達した時は彼等が沈默と獨立的孤獨を支配し得た時、云ひ替へると彼等が箇々別々の存在を明瞭にする權威を攫み得た時であると思ふ。そして僕は光琳が描いた一本一本の草花はさういふ最高權威を示した自然の姿であると思ふ。僕が一本立ちに描いた光琳の草花を見ると、時には宛も優秀な佛蘭を見る如きいふに云へない尊嚴の感に撃たれることがある。實際涙さへ僕は流れ出すやうに思ふことがある。僕は草花に於ける光琳をまづ以て崇拜する。彼は偉大な藝術家であつた。

僕は嘗て詩論のなかにかういつたことがある、『文藝上の表現ではその主題の物質に餘りに即し餘りに膠着することは、斷じて眞の滲透狀態を具現する所以で無い。眞實なる無限の表現的意義を齎し得るものは、只たゞ統覺的高潮の一刹那であつて、此の一刹那に於ては目的と手段とは渾一して判ち難く、題材と表白との間に一髮を容るゝの罅隙が無い完全なる定道である、鎭座である。玆に題材と表白は各自本來の職能として誇る生得權を沒却し終つて、初めて藝術的勝利の光榮を贏ち得るのである。西洋では餘り無意識に使ひ馴らされてその實際の意味はただ稀に了解されるのみである言葉がこゝにある、――則ち『暗示』なる一言である。日本人として私に藝術がある、これは『暗示の藝術』である。何んの暗示ぞ？と諸君は問うであらう。諸君にして正しい藝術的感受性の賦與をうけて居るならば、私は日光の樹木と水面の微笑の上に落つる所、諸鳥花によつて歌ふ所を指さして、暗示往來の路を示すでありませう。』この暗示の藝術に對する指導者たるものは自分自身の外だれでも無く、外面的美を見又了解するといふことは餘りその藝術を養ふ方法にならない。眞實なる藝術的勇氣の力で外面的美に對する欲望を斷つて仕舞ふといふことも必要だ。精神的といふことで滿足するには撓まざる固持力が無くてはならぬ。自覺力があつて初めて

『暗示の藝術』の島國性を防護することが出來る。我々の思想が極點まで蒸溜され緊張しきつて『暗示の藝術』を掴むことが出來る。『暗示の藝術』はたゞ眞實な藝術心の誇と努力の眞經濟から達れる――然らば『暗示の藝術』は技工上に於てどんなものか。

僕は不必要な文字の修辭を否定するといふことがそれに接近する最も重要だと考へる。勿論不必要な文字を捨てるに當つては、内部思想上の節約に極力執着せねばならないことはいふまでも無い。所で僕は光琳が草花を獨唱家として畫面に上した態度は、無駄な言葉の修辭を捨てゝ書かれないいい詩を歌つた暗示詩人の態度である。彼の藝術は單なる繪畫に頽廢したもので無い。彼の藝術は清澄な一團の雰圍氣でつゝまれた淨滌界それ自身で其處には默靜の神秘が住んで居る。其處には藝術心の無礙自在がある、麗はしい恍惚がある。光琳が描いた單獨の草花の繪には孤獨に生くる無邊と無言の祝福がある。僕はそれを眺めて居ると、不思議な寂寥の幽かな光に導かれて遂には眞實なる現實主義の聖殿に辿りつくやうな感じがある。彼の繪畫は（その點からいふと）確に現實主義である。決して單に弱い無責任な理想派でない。故に彼の藝術を裝飾美として見るのはその全部で無い。

技工上から見ると光琳の藝術（草花に限らずその他の題材を取扱つても）は抜きさし出來ぬ程まで描寫の省略を實行したものであることは云ふまでも無い。彼は傳統的方法を調節し又配列して藝術的に解脱して技工上の無礙自在を得た。彼が清澄した暗示的生命を畫面に表現し得た理由も其處にある。又暗示的藝術の眞生命を握つた光琳が畫面の上に「如何に空間を置くか」の魔法を使つた奇蹟に對して、我々は何等の不思議を持たない――たゞ感嘆するのみである。彼の畫面に於ける空間は實在、或は實在以上に價値する空間である。日本に美術家多しと雖もこの光琳位洗錬巧妙に『空間の秘密』を畫面に實行した大家はないと僕は思つて居る。實際彼の繪畫の價値はその一點に懸つて居るとさへいふことが出來る。

七八年以前に死んだ米國の美術家にジョン・ラファージといふ人があつて、二十年前のふた昔に日本を漫遊して『畫家東遊錄』"An Artist's Letter from Japan" を書いた。僕はこの本のなかにある散漫ではあるが可なり徹底した彼の東洋畫論を喜んで幾度も讀んだことがある。ラファージは故岡倉フェノロサ兩氏の指導を受けて東洋美術の寶藏に入つた人だといつても、僕は決して彼の美術眼を侮辱したので無い。この『畫家東遊錄』中の一篇『骨董』"Bric-a-Brac" と題したものゝを見ると、沈南蘋の繪を復寫して彼はこう書いて居る。手當り次第に一枚の素描、

畫を拔いて見ると此處に沈南蘋の作品がある。彼は十八世紀の初葉に日本へ渡つて來た、又一說には日本で產れた共云はれて居る、而して彼の時代に南蘋流 a certain Chinomania をはやらした顯著な一支那人である。僕は今大家の作品の例を出して、論ずることが出來ないを遺憾とする、又この寫眞も粗末なものである。然しこれからでもこの繪の構圖の式樣乃至 Masses と稱せられるものは知ることが出來る。馬――馬といつても日本の馬だ――が一樹木に繫がれ、樹上の猿が幹をすべり降つて馬を縛つた細引に手を掛けて居る繪だ。僕は君にこの猿の自信ありげな忍足や、又馬の嫌惡と恐怖の感激を賞讚せよといふのでない。外面的にこの繪には、一班的輪廓と外觀の壯重がある、又愉快に取扱はれた實在と空間の釣合がある。……この繪は精神的でないかも知れないが、如何に遠く我々が寫實主義と稱するものから離れて居るだらう。この畫家が「踏襲（コンベンション）」を是認し有らゆる精力を擧げて新解釋に捧げることが出來た態度は賢明であつた。宗教的題目を撰んで斬新を全く缺いて居るに係らずその繪を生氣と人格の力で成功せしめる畫家の如く、沈南蘋も題材を一班普通の範圍に限つて、畫家は相對の觀客の心を知り又觀客は畫家の意味を理解しその成功を味ふことが出來るのは必ずしも惡な行爲でない。それ等一班的題材は力ある畫家に對してはその獨自性を益々緊密せしめる、又我々大部分の連中のやうに獨自性を缺いた場合に當つても、必ずしも不愉快な堪ゆべからざる結果とならしめない。一班的題材を取扱ふ畫家は、假令人から愛されないとしても、決して人の心持を害ふ理由が無い。我々が愛さない西洋の畫家となると、その個人的虛榮心が愚鈍の面上に顯はれて鼻持ちならぬこと夥しい。日本の藝術少くも人種と共に育つた一班の影響を受けて作られた昔の作品に、人を不快ならしめるものが無い理由は其處にある。又驚くべき變化もそのうちにあることを注意する。千たびも幾千たびも同じ題目に遭遇するけれども、それは同手法と同目的が繰返へされて居ると云譯では決してない。優秀なる日本の藝術を見ると、それを組成して居る最も高貴な部分則ち作品ににじみ込んで居る人情と愛とに觸れざるを得無い。我々西洋の大家が過去になした凡てのものは近代藝術の傾向とは正反對であつて、日本の藝術家が生き且つ働いた所と同じ基礎の上に起つた――則ち彼等は現實を尊重して外觀に走らなかつた、又遂行如何が問題で題材はどうでもいゝとした。凡ての原則は自然の解剖乃至成功的研究の一つに懸つて居る――題材は隨所にころがつて居る、藝術家の成功は供給された事實に對する敏覺性とそれを記錄する傳統的手法の使用又それ等の手法に對する彼の個性の

振動如何にあると云はねばならぬ。空といふ事實がその[illegible]されて居るといふ單なる理由で、我々は空の繪を賞讃するもので無い。藝術家を賞讃する理由は如何に彼が事實を取扱つたかの上にあるべき筈だ。』この評論は沈南蘋から更いて日本藝術一般に渡つたものだが、僕はこのまゝ尾形光琳の藝術に適用することが出來ると思ふ。云ひ替へるとラフアージは光琳を賞讃する場合にも上記の言葉以外に出ることが出來まいと信ずる。僕は如何なる驚嘆の眼を以てこの米國著名の畫家は、光琳の畫面が示す空間と實在の釣合——驚くべく巧妙な空間の使用法を眺めるであらうかと想像せざるを得ない。

新春の吉例とあつて一月某日に淺草藏前近くの小林文七氏は、所藏の「光琳」を並べて人に見せた。抱一上人の青簾春の曙のなかにある言葉に「玄關に立てる二枚折光琳風のつる鶴も八千世のすへや祝ふらむ。」鶴の光琳屏風ならば至極結構、何んな繪の光琳屏風(若しそれが金でゝもあるならば)でもいゝ、この位一陽來復の渾厚な平和氣分を燦然と背景付けるものは無い。光琳は見るべし——特に舊冬の屈託をさらりと忘れた正月に見るべき藝術だ。僕は小村氏宅へ出掛けて階上階下に展覽されて居た諸品を一覽した。なかに牡鹿牝鹿の二枚折があつた——如何にも落付いた濃彩の牝鹿が澤山工合よく配列された左の一枚に對し、右の一枚にはたつた一疋の牡鹿。この廣々とした潤澤な畫面の空間を他方一杯に描きつぶされたのに對照させた所に光琳の藝術が輝いて居る。この空間は『單なる無』で無い、緊密で充實した生命の空間である——半面の實在に對し少しも敗北を取らぬ眞實の價値(メリツト)ある空間である。又この繪を見ると、作者は落款を廣い空間を持つて居る一面に押さずに、他面の描きつぶされて殆ど餘白のない窮屈な隅に押して居る所にも彼の非凡な藝術心が潜んで居る。若し彼が前者の何處かへ押したならば、折角の空間が無意味に傷付けられるであらう。そして又彼は後者の隅へ落款まで入れて藝術的集中(コンセントレーシヨン)の意義を一層強くならしめたといへる。光琳は實に世界に稀れなる魔法を、畫面上の空間と實在の釣合に使つた藝術家である。この男位畫面の虚と實とを絡み合せて千變萬化の秘術を演じた藝術家は何處にも居らぬ。彼の筆墨に淋漓たる生氣がある如く、等しく彼の空間にも淋漓たる生氣がある。彼の追從者として酒井抱一は偉大な藝術家であつた、然し畫面上の空間の點から見ると、少くも僕自身の意見では遺憾とする所が多い。僕の言葉を疑ふ人は須らく光琳百圖と抱一上人眞蹟鏡でもいゝから手取り早く對照して調べて見るがよい。

光琳百圖の後篇に出て居る繪で總金地に極彩色の鳳凰

描いた二枚折一双がある。風伯雷神共に風雲に跨り雷神は殷然と鼓を撃つて居る。又その屏風の背面は銀地、その上へ靡き伏した芒藤袴や風で葛蔦かつらの葉裏かへして居る『秋草疾風の圖』を抱一上人が描いて居るので有名な美術品である。僕はこの卓越した光琳の屏風が示して居る藝術的構圖上の意義は實に『如何に彼が空間を畫面に與へたか』の一點に懸つて居ると思つて居る。重ねていふが光琳は How to use the empty space in the picture の上に於ける古今未曾有の大家であると斷言することが出來る。若し本派本願寺傳來の杜若圖（審美書院出版の光琳派畫集に復寫されて居る）にしても、又深川の冬木家の重寶を抱一が模寫して光琳百圖中に入れたといはれて居る杜若に八ツ橋の圖にしても、筆者が金地の空間（西洋の批評家は宗達や光琳は金地を日光に又銀地を月光に見立てゝ構圖したと書いて居るが、必ずしもそれは臆説とのみ云へない場合がある）に鳥一羽でも飛ばそうものなら折角の空間が傷付けられ、又杜若の絶對美が破壊されたかも知れない。又光琳の有名な二枚折屏風三十六歌仙の圖にしても、人物と人物との間に巧妙に配布された空間が何んなに全體の構圖の單調を破つて居るであらう。こう見て來ると光琳の畫面に於ける空間は、『無』の最高至上の聲で歌はれた藝術上最も重大な價値ある部分で、或は作畫の實在部分以上に尊重せねばならぬと思ふ。彼の空間は一種の呪符である。一種の魔法である。この呪符この魔法の力で、彼の繪畫は音樂的情調の極致に到達するのである。

時は二十五年前の春老ゐて微風が初夏の消息を傳へかけた頃。場所は米國の太平洋岸小な灣をへだてゝ桑港に對するヲークランドの後丘を飾る路傍の樹蔭。二人のものが今しも頭を前へのめらして熱心に日本の繪本を眺めて居る。一人は日本人で——則ち昔の僕だ。そして他は僕の友人ジレット・バージスである。僕等が路傍の樹蔭で休憩し乍ら見て居る繪本は光琳百圖四卷である。この本を携へてバージスは僕を詩人ミラーの山莊に訪問したのである。その理由は僕の處女詩集（バージスがその出版者とさへならんとして居る）の表紙の圖案に對する暗示を光琳百圖のなかに發見しやうとしたからである。僕はこの本ばかりで無く、光琳といふ名前さへ聞くのが其時初めてであつた。僕は何處から彼がこの本を得たかを彼に尋ねなかつた——又その必要も無つた。僕等はミラーの山莊を辭して桑港へ向ふ路すがら、今路傍の樹蔭で再び光琳百圖を繙へして眺めて居るのである。多くの意味で美術家であつたバージスは僕に光琳の偉大なることを說いた。僕は彼に謹聽した。僕はその本を一頁一頁くつて『白樂天六枚折屏風』に至り・初めて光琳の不思議

な波に接した。僕の友人で著名な米國の文學者なるバージスは「何んたる表象的！」と叫んだ。

だれでも僕の第一詩集 Seen and Unseen を見ると、表紙の圖案は光琳の素敵な波であることを注意するであらう。僕は僕の詩集が光琳の厄介になつたことを心から感謝する。

又僕は光琳に理解ある米國の文學者から紹介されたことも心から感謝する。二十五年前の僕の頭のなかには光琳の二字が存在しなかつたことに對しては心から耻づる。然し其後僕は熱烈な光琳崇拜となつたことをまた心から喜んで居る。

今僕がこの文を書いて居ると、僕の想像の眼は十年も以前に開催された倫敦の日英博覽會即ち白亞都城（ホワイトシチー）の驚くべき日本美術のなか、光琳の『波の屛風』の前に彼の地の藝術家が澤山集つて嘆美の聲を發して居る光景を描く。其處へ靜かに集つた藝術家の群集のなかに僕の友人チヤールス・リケツも居る。彼は獨語するやうに見へた、「光琳は無比だ無敵だ。」現にこの波の屛風を眺めて居ると、僕は彼が「繪を描く時王様のやうな氣分でありたい」"I wish to feel that I am a prince when I paint" といつた言葉を想起する、――實に光琳の藝術は王様の藝術だ、豪華な王様の藝術だ。確に彼は世界の美術史中最も高尚な藝術家の一人である。彼の手で審美的又表象的藝術の價値が完全に整理された、貴重な裝飾美の觀念が極點まで發達した、幕府の客觀的藝術には愁殺傷心の理想が動いて居る、――默想的寂寞がある。然し彼の藝術は行止つた。新しい時代の壯大艶麗な繪畫は新しい人で成されねばならぬ。所で光琳は光悅宗達の後繼者として世に顯はれた。彼は事實を表象の點まで洗錬し又蒸溜した。He reduced facts to symbols である。彼は事實を表象化し得たから彼には外的制限が無つた。然し一面に貴重な藝術的經驗を獨斷的に律した場合が彼にあつた理由も其處にあつたかも知れない。勿論彼の藝術は無責任な出來心の藝術であると誤解してはならない、――彼光琳位意識せる知覺で自分の藝術を支配し、又力強い音樂的觀念で整理した藝術家は二人とは無い。一言で蔽ふと彼の作品は驚異の藝術だ。我々は彼に依つて魅惑せしめられるを喜ぶ。彼は大膽で横溢する生氣に滿ちて居る。今僕の面前にある彼の有名な波の屛風は日本の岩崎男爵の所有に掛つて居る。こうゆう偉大な作品の所有者となることは天下の幸福である。灰色の波は奇怪にうねりうねつて、巨大な沈默の岩石を撃つて居る。こういふ彼の海を渡る時ファディナンドの着物は決して濡れないであらう。又エリアルの一命令で直に靜謐になるであらう。見よ海中の岩石は火山性の色彩を帶び、斯かる奇怪な形狀は如何な物質學者も未だ嘗て見たことはあるま

い。岩上に青い〳〵松の木が生、榮、不變の光榮を誇つて居る、そしてその下に流れる神仙界の嵐は一言の聲無く永遠に靜づ靜つとうねつて居る。こう僕がこの波の屏風から得た印象を言葉で語ると、諸君は悲劇的壯大の藝術であると感ずるであらう。然しこの光琳の屏風は濃艶瑰麗の作品で、實際は感激的な花やかさに驚かされる。則ち其處が光琳の本領だ、——若し彼に花やかさがあるとすると(實際花やかに相違ないが)、その花やかさは古い灰色の老木から不思議に率然と咲いた梅花一輪の花やかさである。

この王樣氣分の藝術家、金屏風の豪華な藝術家光琳は澤山波の屏風を描いて居る、僕自身でも六つや七つは見て居る、——中には擬物もまぢつて居たであらう。(實際英國博物館に出て居た彼の二枚折波の屏風には多少遺憾な點があるやうに僕は感じた。)光琳は金屏風に波を描いたばかりで無く漆の箱の上にも波を描いた。其中最も有名な作品は岩崎家所藏の『住江硯箱』である。これは敏行朝臣の『住江の岸に寄る波よるさへや』の歌に因んで構圖したものであることはいふまでも無い。箱の全體に金泥の波が描いてある。又所々に鉛で岸を作り銀を嵌入して歌句が書いてある。岸と波の二字が脱してあつて圖で歌句全體が表顯してあるのも光琳式の思付きだ、秀拔な構想といへる。線條は黑漆で金地に描いたもの無く、黑漆地の上に金泥を塗り線條だけは塗りのこしたもの所謂黑地上繪と稱せられる作品だが、評者の『輕僞なる筆致大に見るべし』といふ所のものである又彼は波を帝國博物館所藏の有名な『八橋硯箱』の内面にも描いて居る。この八橋硯箱は二重になつて居る。上は淺くて硯箱下は深くて料紙入れ。全體は黑漆地で金泥の葉。花は嵌入された青貝。橋は鉛を用ゐ杭は銀を嵌して出來て居る。『住江硯箱』は現に『鷹峰大虛庵住物光悦造以寫之法橋』と書入れられて居る如く所謂光悦うつしである。又前記風伯雷神の屏風(徳川伯所藏)も京都建仁寺にある宗達の風伯雷神を模造したもので、ある批評家は此等二箇の屏風を比較して『前者は潑々たる色彩で勝り後者は氣魄の高尚の上で前者を凌いで居る』といつて居る。それから又岩崎家所藏前記波の屏風も宗達初期時代の作品を模したものともいはれて居る。そして宗達の原圖は今米國デトロイトのフリーア氏(米國に於ける有名な東洋美術蒐集者)の所有になつて居るそうだ。僕はこの宗達の原圖を見たことが無いが、英國の日本美術觀賞家モリソン氏に聞くと如何にもよく相互に似て又如何にも相違して居るそうである。岩有の輪廓の調整が第一異つて、波の取扱方に於ても同一で無い。そして又金の雲の配布の上にも相違した筆者の藝術的力か

ら非常に異つた心持が出て居るといふことだ。同題材を同じ構圖から取扱つても光琳が宗達と別人であるやうに作品上に變化があることは議論するまでも無いことだ。其處が模寫(カピー)にして模寫に終らない點だ、——藝術家が粉本に依つたとしても、それは少しも差支ない點だ。宗達と光琳の關係のみでなく、又光琳と抱一上人の關係に於てもそうである。抱一は光琳の櫻町中納言を模して同じ繪を畫いてゐる。然し一は潤澤な雅趣、他は艶麗な情調の相違がある。又『みそぎ』や『老梅』や其他いくらも同題目を描いた作品はあるが、光琳と抱一は全然異つた心持の繪を畫いて居る。

僕の一友人の家の客間は襖の引手に『光琳千鳥』の金具を用ゐてゐる、——でつぷり肥つた生氣潑溂たる千鳥だ。僕はこの金具を見るたびに『千鳥は實際こう肥つた鳥かしらん』と疑はざるを得無つた。然るに僕はつい近頃ある動物學者から千鳥は小い外形に何等人を魅する特質の無い鳥に過ぎないと聞いて、僕は思はず膝をぱたと擊つて、『千鳥の恰好を模したので無く藝術的に千鳥を創造した所に光琳の價値があるのだ』と叫んだ。……僕は種々な場合に光琳の梅を見た。今現に僕の机の上に版畫になつた彼の老梅の繪が擴げられて居る、——恐ろしく古い幹から上へ上へと幾本の小枝が出てそれに一杯大な花が付いて居る。花といつでも花になつた圖に過ぎない。然しそれが云ふにいへない豪華な風致を傳へて居るから不思議だ。實際の梅花と比較したならば、誰れもこんな素敵に大な變な梅花があるものかと否定するであらう。所で光琳の藝術家としての價値は其處にある、——彼は梅花を寫實したので無い、彼は梅花を創造したのだ。千鳥にも梅花にも絕對的存在なる誇りの態度を與へた所に彼の價値がある。實に彼は何んな小な細い自然の物象を畫くにも、宇宙の中心であるといふ自信の態度を與へて居るやうに感ぜられる。彼は自然の現象を形の大小から見なかつたと思はれる。逆にいふと彼は小な自然の物象にも宇宙の中心といふ存在の大權威を與へたやうに思はれる。藝術家としての光琳は自然を何處までも平等視した虛無思想家であつた。古い言葉でいふと豪放逸脫、新しくいふと自我性の卓越を持つて產れた巨人であつたといへる。僕は彼が藝術的に比例や分量を無視した態度を喜ぶ。僕は彼が藝術的に小な存在にも大な現象と同じ生命の權威を與へた態度を喜ぶ。僕は彼が千鳥一羽でも又梅一輪でも、王樣のやうな洋々たる氣分で取扱つた彼の藝術心を愛する、——彼の藝術は實に王樣の藝術だ、金屏風の藝術だ……彼は金の雁金屋藤十郎の長江軒光琳だ。

僕は金の光琳を嘆美するものである。金は美々しい[illegible]

素だ放埒だ。然し金の心の寂しい一面を誰れが知つて居る。……金の心の落付いた悲哀を誰れが知つて居る。光琳は金だ、――彼の藝術は大な半面に寂莫がある、孤獨がある。これを知らずして單に彼の外面的艶麗豪華だけを見るのは彼を理解したとは云へぬ。彼は彼の時代則ち元祿時代の代表的一兒であつた。元祿時代の絢爛だけを見て、その寂莫の半面を知らなくては完全な理解者とはいへまい。又僕は金の光琳の寂しい一面を味へと人に云ひたい。――寂莫に對する完全な理解無くして彼のやうな永遠無終の[illegible]きた藝術を完成されるものか。『彼の花やかさは古い灰色の老木から不思議に卒然と咲いた梅花一輪の花やかさである』と評語を下した英國のリケツは偉い。この男の光琳觀は實に肺腑を突いて居る。――こうなると西洋人の印象批評も中々隅に置けない。

時は春、時代は豪奢の風俗迄に吹きながれる元祿、そして場所は花の雲飛ぶ嵐山。こゝ一面に擴げられた脂粉ゆたかな土佐繪風の大堰川を靜しづ渡る一箇の遊船がある。乘つて居る連中は金銭を湯水と心得た銀座方の商人、――中に頭丈作り小肥りの雁金屋藤三郎こと尾形光琳も居た（健康體の所有者で初めて光琳のやうな繪を畫けると僕は思つて居る）。船中飯どきに成つた。人々はそろ／＼携へて來た華美な辨當を出し初めた、――光琳はと見ると、彼の懷に入れて來たのは竹の皮包。人々はこれを見て驚いた、――そして竹の皮のなかを見て彼等は二度びつくりした。握飯を包んだ竹の皮の裏は金色燦爛たる花鳥山水の蒔繪であつた。光琳は呆然たる彼等をじろりと見乍ら握飯を食ひ終つた。而して無造作に金蒔繪した竹の皮を川のなかへ捨てた。……僕はこの挿話が眞實ならんことを希望する。少くも光琳に相應しい挿話である。表は竹の皮裏は金蒔繪その中に無邪氣な握飯數箇！――何んたる粗野でしかも濃彩華麗な一繪畫ぞ。殊にそれを水に流した彼の態度に、唯美的雰圍氣を誘致する藝術がある。彼は繪畫の上に於ける如くその實際的行爲に於ても、如何に藝術を選擇し單純化してその秘術を高潮せしめるかの機微に觸れて居たのである。

この偉大な散文的實生活を藝術化して眺めた光琳は寧ろ若死であつた。古畫備考に從つて正德六丙申六月二日に逝れたとすると彼が死んだ年は五十二。尾形流略功譜や光琳百圖に依ると彼は六十二で死んで居る。又『思ひよる日』『書畫時代一覽』や『名家全書』に依ると彼は五十六で死んで居る。然るに明治十一年十一月十一日のこと、京都[illegible]下[illegible]場[illegible]する[illegible]に其[illegible]を當

とした光琳の末孫小西彦右衛門（その時七十一歳）なる人の直話であるといつて川崎千虎が書いて居る文章を讀むと、光琳は五十九で死んで居る。その何れにしても彼は六十歳以前に死んで居ると見られる。然し祖父以來東福門院の御服所を務めた有福な家に産れ、幼少の頃から藝術界の人となつて優然と構へこみ所謂遊藝の眞本領を得て死んだとすると、彼が六十を越へなかつたとしても遺憾は無い、——要は藝術家として何程眞實な作をなしたかの一問題に懸つて居る。

彼の親は尾形宗謙。宗謙の祖母は本阿彌光悅。宗謙は光悅から書の骨髓を學んだと云はれて居る。その宗謙の悴光琳が俵屋宗達から光悅に入つたことは最も自然であつた。光琳は繪畫をはじめ狩野安信に學んだといふことだ、——實際彼の作品には狩野風の筆致を一層老道瓢逸ならしめたものが澤山ある。それから彼は古土佐を喜んだといふ證據になる作品も隨分と澤山ある。『しら玉か何ぞと人のとひしとき露とこたへて消えなましものを』の伊勢物語を題材にした一枚、又『風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君かひとり越ゆらん』といふ等しく伊勢物語を取扱つた一枚、それから『松のある方に幽に琴ぞ聞えける』の平家物語の小督を題材にしたもの（一曲の想夫戀の情韻が水に落ちて幽愁極まりない印象を與へる）などを見ると、如何に光琳が古土佐の蘊奥に入つて居たかを推察することが難くない。

彼が宗達に入つた初期時代の草花には隨分沈着な正直な作品がある。そうゆう初期の作品を見ても彼が寫生から、——再び寫生を出て進んで寫意の極に達せんとする精到綿密な藝術的用意如何がなく伺はれる。團琢磨氏所藏の作品で國華第百四十二號に復寫した躑躅圖、——溪痕數條溪水の意を寫して數株の躑躅が花影をさかさまに印して居るものなどは、光琳がまた宗達の影響を思ひ切つて離脫することが出來なかつた時代をよく說明して居る。それを彼晩年の所謂光琳式なる金屛風の杜若や波と比較すると、彼に大膽な藝術的飛躍があつたことを容易に知ることが出來る。

光琳が生前の名聲もほゞ推察されるけれども、彼の藝術を更に一層廣く世間に觀賞せしめた功績は勿論酒井抱一に則する。抱一は光琳の百年忌にあたり、『同好のものを招く法橋畫一幅づゝ携來りて百幅に充ぬ』とあて『光琳百圖』の記念出版をした。時に文化十二年六月二日。龜田鵬齋が書いた『光琳百圖』の序文中にこう書いて居る、『嗚呼此擧足以覩上人夙好之篤矣。死者如有知。則光琳以上人爲旦暮相遇之知己也。』…… 僕は抱一の得意顏を眼に見るやうな氣がする。文化十二年前後は畫家として抱一上人繁昌の絕頂であつた。

彼に京都上京小川頭妙顯寺中善行院に光琳墓を新たに建立する爲め、わざ〳〵墓石一切江戸から送つて、自分自ら京都へ出掛けられんので今の、向島百花園の初祖なる鞠宇なるものを代理にさし向けた。建石の法養を營んで三十日間茶莚を張らせた。日に五客と限つて接待させたといふことである。……僕は抱一の得意顔を眼にあり〳〵と見るやうな氣がする。

* * * * * * * * * * * * *

僕は偉大な『田舍主義（プロビンシアリズム）』の藝術家（The pageant of life を感覺的に取扱ふ壯大なローマンチシストといつてよい）ブラングウヰンと今彼のハマスミス橋畔の畫室で對座して居ると想像し給へ。而して彼は側にある茶箪笥のなかゝら一箇の抹茶々碗を取出したと想像し給へ、——この茶碗が例に依つて梅の花を厚く盛上げた本當の『乾山』だから一驚を喫せられる。彼がどつかと小肥りの尻を柔かい椅子に落して外觀は至つて武骨な顔に一味の微笑をたゝへ乍ら兩手でそれをいぢり廻はして居る一畫面を、僕は心にいつでも思ひうかべる、——藝術の『無終（エタニチー）』を外面的現象に見た力強い叙事詩人である彼と藝術的雜音を嫌ひぬいた清淨教徒（ピューリタン）なる乾山とは何たる對照！然し眞實なる藝術の表現

に相違はあるがその心は一つである。『南瓜を積んだやう[illegible]藝術が理解されるといふことは愉快だ。

ブラングウヰンは本當の『乾山』ともう一つ茶碗を持出して來て僕に見せた、そしていつた。『これは乾山まがひの和蘭茶碗だ、——君試みに比較して見給へ、何んたる相違が其間にあるだらう。』和蘭で模造せられる乾山の名聲々僕は聞いて、着英以來益々躍んで來るやうに感じた僕の身體は忽ち一二寸も延びたやうに思つた。過去日本の藝術家が西洋に向つて勇敢に挑戰し而かも打勝ちつゝある事實に對して今日の我々はたゞもう感謝の言葉あるのみである。今この和蘭模造を手に取つて見ると、——本當の『乾山』にあるやうな温和な光澤（重もに褐色を帶びた淡青色の釉から出て居る）が無い。従而沈着高雅な氣分が漂つて居らぬ。西洋人が眞似た繪だから筆痕明白とは行かない、頗る澁滯を極めて居る。僕はブラングウヰンに日本帝室博物館所藏の桔梗模様の抹茶茶碗のことを語つた。『白い花と藍色の葉と褐色の莖と萼の三色の配合柔軟な土の味で完全に統御されて居る作品だ。』といひ添へた。それから僕は乾山の有名な作として知られて居る益田孝氏所藏の雪松模様菓子器にも及んで、この作品が持つて居る金と白と淡黒の整調を物語つた。そして僕はこの

菓子器の蓋と中身の内面に畫いてある白色に紅の花模様を彼に訪ねることも忘れなかつたと記憶して居る。

僕をブラングウヰンへ同道して異れた寫眞師コーバン君は、ブラングウヰンを辭しての歸路僕に『手に乾山を持つブ君』を一つ寫眞に入れたいと語つた。コーバンは果してその寫眞を撮つたであらうか。僕が倫敦から日本へ歸つて最早や六年になる今日でも、僕は時々『手に乾山を持つブラングウヰン』のことを考へる。而して僕は乾山崇拜者の一人であることを極めて愉快に思ふ。

小十年以前僕が根岸に住んだ頃毎日のやうに鶯谷邊を散歩して、僕はいつも輪王寺の北の森に巣をくつた鶯のことを考へた、――それに輪王寺の宮公寛親王の好鶯趣味を滿させるため乾山が京都へ行つた時買つて來たが、僧侶として鳥を飼ふことは遠慮したいとあつて外へ放たれたといふ鶯のことだ。根岸に初音の里といふ異名が付いた所から考へても、何んなに昔は澤山鶯が其處に居たであらう。又其等の鶯は乾山が京都から持つて來た鶯の子孫では無かつたであらうか。

僕は鶯谷から公園内へ散歩の足を向けるたび、輪王寺の召に應じて泥だらけの着物を纏ひ門内に消へる姿を想像した。彼はその當時江戸の六軒堀の築島屋と稱する材木屋の長屋に獨居したのである。彼は[illegible]に住遁つて痩せた小作りの男であつたであらう、――金屏風六枚折と銀屏風二枚折の相違は（價格の上にも）あつたに相違無い。乾山の藝術は銀だ、――渋い銀、いぶした銀だ――と僕は彼を思ふ毎に叫んだのである。僕は彼が輪王寺の門内に入つたと想像すると、また宮様から頂戴した黒羽二重の小袖下着をつけて出て來る彼を想像しない譯にいかなかつた。それから僕は彼が拜領した着物を脱ぎもせずに直ぐ土いぢりを初めて折角の黒羽二重をだい無しにして平然として居る彼をも想像した。

僕は入谷邊をぶら付いて彼が拵えた陶窯の場所は此處か其處かと出放題に想像したことがあつた。彼は與保院の宮公寛親王が江戸へ下つて、上野東叡山輪王寺へ入られた時共に江戸へ來て入谷に居所を得たのである。彼は寛保三年六月二日八十一歳で、『憂き事もうれしき事も過ぎぬればたゞあけくれの夢ばかりなる』の辭世を殘こして死んだが、輪王寺の擁護で葬式も營まれ上野山下坂本の天台宗善養寺に埋められた。

彼の名は惟元。通稱は權平。乾山の外深省、尙古、陶隱、紫翠、靈海、玉堂、逃禪、習靜堂など色々の號を持つて居た。彼は當時の文學者藤村庸軒から茶事一班を學び、佛道の師匠を嵯峨直指庵の獨照和尙に得た。皇城の乾の方に當つた京都の[illegible]

鳴瀧村に陶窯を持つた所から、彼は自分を乾山と呼ぶに至つたそうである。

僕が根岸に住んだ時坂本から上野へ出る途中毎日のやうに善養寺（この寺位風が吹込む砂塵と汽車の煙にいぢめられた痛ましい姿の建物も少なかつた）の門前を通つて、其處に建てゝある案内の石に注意を拂つた。この石は則ち乾山の沒後八十一年目の文政六年に抱一が寄進したもので、昔の事であるから石質は勿論『深省乾山』の彫刻も中々吟味してあると受取られた。僕は何んな人の墓場にも特別な興味を持つて居ない男であるから、ついぞ寺内に踏込もうといふ氣にはなれ無つた。たゞ僕はこういふ場所に横たはつて終日終夜汽車の欠伸や唸聲やを聞かされる乾山の靈を不憫に思つた、そして又彼に遠い將來を前知する明があつたならこんなお寺に葬むられ無かつたかも知れぬと思つたりした。然るに其後鐵道の官舍が建つのでこの善養寺が他へ移轉すると聞いた時、僕は乾山の墓場の爲め至極結構なことだと思つた。それから彼の墓場の移轉地(寺自身は何處へ移つたか僕は知らないが）は乾山が京都から持つて來た鶯と深い關係のある鶯谷の國華倶樂部の庭内だと聞いて、僕は殊の外な愉快を感じた。國華倶樂部の庭内には大な錆びた池があつて、傘のやうな蓮の葉の下を金魚や緋鯉が泳いで居やう、又秋になると白露が溢れぬ程度にうねつた萩が茂るであらう。秋草などを得意に畫いた彼は初めて滿足な場所を得たと思ふであらうと僕は感傷的心持ちで喜んだ。僕は彼の墓場移轉の記念展覽會の通知を得て、友人二三人(僕同樣乾山の崇拜者だ）と一所に國華倶樂部へ出掛けた。時に明治四十五年六月二日。

僕等が其處に展覽されて居た彼の遺作（作品の並べ工合が第一氣に入つた、則ち一所くちやに詰める所謂展覽會式で無いのが）をそろり〳〵と眺めて居ると、池の彼方から空也念佛の瓢逸な聲が盛んに聞へて來た。障子の外へ頭を出すと僕等は十二三人の墨染の衣を着た素人坊主(何れも倶樂部の會員）が、宛も風狂の惟然坊でゝもあるかのやうな姿が青い木の葉の間からぴよん〳〵飛んで見へた。周圍の靜謐を破る念佛の聲！ 念佛の音のため一入靜まりかへつた展覽場を見廻はる僕等の態度は、丁度聖なる殿堂で心に無言の祈禱を唱へて居るやうであつた。僕等は乾山の移された墓場をあはてゝ見たいと思はなかつた、——今彼の遺作を見て適當に觀賞するといふこと自身が、彼に僕等が拂ふ最大敬意だとも感じた。僕等がこの場内に入つた最初の間は、實際一語も發することが出來なかつた。その理由は——最も古くてしかも最も新しい乾山の傑出した藝術の權威に撃たれて言葉を失つて仕舞つたからであつた。それは決して誇

張で無つた、又乾山に對する無責任な阿諛でも無つた。一渡の見終つて、僕等が自分の言葉を回復した時僕等は部屋の隅に陣取つてこういふ乾山の藝術論を互に交換した。

『光琳も主我主義の藝術だが、乾山となるとその主我主義が一層嚴肅だ。光琳には濃艶瑰麗な半面があつてその主我主義がそう赤裸で無い、――藝術的潤ひが一味の溫情を添へて居る。彼は如何なる場合にも藝術を忘れなかつた。然るに乾山の主我主義は彼最後の到着地で、其處には彼を蔽ふ何物も無い、――彼は赤裸だ。彼の藝術は所謂藝術を超絶した藝術だ。極點まで單純化された彼の生命のみだ、云ひ替へると嚴肅な自己否定(セルフ・デナイアル)の力で謎語化(エニグマタイズ)された藝術があるだけだ。赤裸であるから彼の藝術は眞實な意味に於て現實的だ。彼の主我主義位孤獨なものは無い、――その表現として顯はれた彼の一本の梅又一輪の花の繪にしても、凡庸な畫家の作に於ける如く畫面上の附屬物で無い、絶對無比な權威ある赤裸な存在の表象だ……』

『草花は一班に婦人的だといへばいへないことも無いが、實際は草花位主我主義の表現は無いと思ふ、――而して草花の主我主義を繪で畫いたのが乾山だ。それが彼が題材に對する熱心な愛と尊敬の結果だとも見られる。藝術家に對する無念無想といふ態度は、彼が繪を畫く場合に何等他の思想に煩はされず一向專念に描かんとする繪の題材に突進することを意味して居る。乾山がこれ等の繪を畫いた態度は則ちそれである。又この態度は天賦の藝術家にして初めて掴むことが出來る態度だ。一言でいふと乾山の最大なる價値は彼の正直な點にあるといへる。こう云ふ筆力を通で畫味素朴な繪を畫いた彼は如何に正直であつたことが容易に推察される。勿論これ等の繪や又陶器は人の注文に應じ金錢を目當てに製作したもので無い。若しそうであつたなら、我々がそれ等に對して斯くも沈默の敬意が表される筈のもので無い。彼の藝術は精神的だともいつていゝ。それは彼の作品が持つて居ない所のものまで想像する有らゆる機會を我々に與へるといふ意味だ。彼の作品に對する我々の想像は直に清澄となる、又より深くなり單純になる、――彼の藝術位單純の生氣あるものは無い。在來の言葉を使用すると彼の藝術は風韻道勁だ。決して外形的修辭や不必要な附屬物のお陰を蒙つたもので無い。こういふ藝術の極致に到達した稀有の作家は、筆を操る前まづ以てその心を單純ならしめ≡ならしめねばならぬことはいふまでも無い。乾山は實に生氣ある單純性の所有者だ。』

『乾山に紅花綠葉の艶麗は無い、――彼の繪を單に麗はしいといつたらば、それは彼に對する侮辱かも知れない、彼が目的と

した所は近代の批評家が好んで使ふ「藝術的表現」の一面に懸つて居る。彼が眞實である場合に最もよく成功して居ることはいふまでも無い。東西の大藝術家に於ける場合と等しく、彼に對する「美」はただ偶然に起るのみであつた、——彼の單純な藝術が装飾的である場合に彼は「美」を工合よく表現して居る。僕は彼を偉大な藝術家だと思ふ、彼はその作品に感激と理智の合一を完成して居る。よく人格の表現といふ言葉が使用されるが、乾山の場合位眞實な藝を出したことは無い。光琳は藝術を忘れることが出來なかつた。而して乾山は藝術を忘れる場合を持つた。故に人格の表現としては乾山の方が兄の光琳に勝つて居るともいふことが出來る。

乾山には氣高い人格があつた。この人格の力が、小い細い無名の雜草でも又脚の小枝一本でも眞實な藝術として居る。彼は確に人格の人であつた、——彼は如何なる繪や如何な土燒の抹茶々碗にも愛と同情の味を持込んで居る。實際藝術家の大問題は彼の愛と同情の問題に過ぎないといへる。外面的技工は實際第二位的のものに外ならない。内面的意義に觸れるといふことが最初で而かも最後の問題である。此處に展覽されて居る一枚の繪に赤い花が咲いた櫻の樹が畫いてある。技工論からいふとこの位の惡畫はないかも知れぬ、——然しこの繪は氣高く麗はしい櫻の木として充分に受取ることが出來る、こうなれば畫面の目的は滿足に遂せられて居る。彼にこれ以上の技工は不必要だといへる。彼は綿密の正確と詳細を期する拆細描きでも無ければ又普通の圖案家でも無い。彼は藝術家だ、——如何に技工の上で彼は缺點が多かつたにしても、彼の作品が月の如く又花の如く斯くも新しい理由は彼が眞實の藝術家だからだ、又花の如く又月の如く斯くも古い理由も彼が眞實な藝術家だからだ。

僕は欧羅巴の後印象派の諸士が乾山の繪を見たなら何んといふだらうかと想像することがある。此處にある罌粟の六折屏風を一つバン・ゴウホにでも見せたかつたと思ふことがある。この六枚折は花の精神を描いたもので外面的描寫で無い。花が神秘的である如くこの繪も神秘的である。僕は乾山がこの屏風を描いた時の態度を想像する、——彼はきつと神秘の境地に到つて佛像でも描いた時のやうな同じ敬虔な態度で罌粟を描いたに相違ないと思ふ。無言の祈禱が繪のうちに響いて居る。たとへ題材は花であるけれども、僕の心の眼には一種の宗教畫として映ずるのである。僕はこの六枚折の前に聖なる蠟燭を點して貰い香を焚きたいとさへ思ふ。僕は光琳が畫いた單獨の草花の繪畫に對しても佛畫に比較したい場合があつた。然し乾山に徹頭徹尾脂粉的華麗がなく銀のつや消しのやうな清教徒(ピューリタン)的風

致がある丈けそれだけ我々の敬意も深い、――ある場合には乾山が光琳に一枚價値が上だといへる。

　乾山のやうな天賦の藝術家の作品に接すると、僕等は驀地に彼の人生を理解することが出來ると感ずる。ある批評家がいつた如く、眞實の藝術は『人生の挿話』である。僕は彼の藝術心がむら／＼と動いて一作品が出來上ると、彼はそれを『時の波』のなかにさつと投げ込んでそれを忘れて仕舞つたに相違ないと思ふのである。彼は藝術的執着が無つた、少くも稀薄であつたと僕は想像する。彼の作品はその存在に對し一錢の銅貨にも何等負ふ所があるので無いといふことが出來る、金錢を支拂はれたが爲め描いたもので無い、――これは藝術の何等の作品にも與へることが出來る最大稱贊の言葉であると信ずる。實に彼の作品には少しも銅臭が無い。

　書いたものを讀むと彼は公寛親王の逝去されて後、生活上貧苦になやんだといふことであるが、考へやうに依ると貧乏は彼の藝術を更に一層洗錬し彼の人格を更に一層高潔ならしめたに相違なかつたであらう。丁度火焔のうちから赤の色が取去られたやうに、彼は貧乏の洗禮を經て益々飄逸高雅な領域に入つたであらう。この紀念展覽會に見た繪畫や陶器、又彼の作品として今日遺つて居るものは槪して彼が七十歳に達してからの製作に懸つて居るやうである。彼の京都時代に於ける兄光琳の影響はそう薄いものでなかつたらしい。然し彼が京都と光琳の影響を離れて、江戸の男性的な豁達な武士的空氣に觸れるに至つて彼の藝術は一大變轉を劃したといへる。京都と異つた率直個[illegible]な江戸氣分は彼の藝術を更に簡素輕雋ならしめたに相違ない。懶瓚和尙の圖に彼が描いた文字を讀むと、『不朝天子豈羨王侯生死無慮更復何憂、水月無形我常只寧、萬法皆爾本自無生』。これが彼の心の眞實な響であつたであらう。東京帝國博物館所藏の梅の木の掛物や又乾山遺墨のなかに納められて居る梅の六枚折の原畫を見ると、如何に彼の藝術心が遒勁素撲に進んだかを容易に知ることが出來る。彼の心は豪邁單純な武士を想起せしめる氣高い梅花一輪に比較されるとも僕は思ふ。

　金地に墨と胡粉と朱の三色で描いた癸圖屛風は有名な『乾山』である。花は紅白、その配置工合が如何にも妙を極めて居る。こういふ作品こそ豪宕沈厚とでも評することが出來る。別府氏所藏に懸る『竹の葉はうす雪ながら色かへてしぐれふりにしつれなさもなし』の歌が入つて居る『雪中竹の圖』や、又抱一上人の審定付きで有名な『絲瓜圖』(大阪平瀨貂之輔氏所藏)は實に高邁な藝術の意境に入つた作品だといふことが出來る。

乾山にも蒔繪があるけれども畢竟第二位的に過ぎない。或は

彼が圖案だけしたに止つたかも知れない。又多くの場合には彼は單簡な器具に髹漆したのみである。別府金七氏所藏の『芒及波模樣盆』などはその中での有名なもので、盆の内面に波と千鳥、蛇籠を墨と金とで描き又裏に芒を墨、綠靑、胡粉と臙脂の各色で現はして居る。然しこれを『夜鹿の香合』などに比較すると藝術の光澤がをのづと違ふ。『乾山遺墨』のなかにも入れてあるこの香合は、元來は抱一が愛藏して居たものを祖先の永三翁が讓りの二貫のたといふことで、今日大倉久右衛門氏の所藏にあるそうである。

僕は金屛風藝術の光琳を嘆美すると同時に、銀屛風藝術の乾山を提敬する。あゝ金の光琳と銀の乾山！　日本の美術史中一あつて二無き著名な兄弟二人！　一人は太陽で一人は月だ。僕はこの稿を終るに當つて繰返へしていふ『金の光琳と銀の乾山！』と。

肉彈の跡

——旅順めぐり——

大町桂月

一　攻城山

『いきなり旅順に入りて、白玉山に上るは、餘りに月並なり。先づ日本軍の氣分になりて、手前より要塞の形勢を看ざるべからず。而して後旅順に入りては、守る者の氣分にならざるべからず』と、案内者に智慧づけられて、旅順驛より一つ手前の龍頭驛に下る。案内者は春日雜太郎氏也。今は滿鐵の工務局に在勤せるが、陸軍砲兵大尉にして、明治三十七八年役に參加したる人也。外に堀純一、佃松太郎の二氏同行す。龍頭驛長の片山勤市氏待ち迎へて、一行に加はる。西に小山を越へ、劉家屯子といふ小部落を過ぎて、一峯の背を傳ふ。右手の山壁に、凡そ一間四方ばかり崩壞せる處、いくつもあり。春日大尉曰く、『三十七八年役の彈痕也』

進み〳〵て、最高處に至れば、攻城山紀念碑立てり。『當年我が砲兵司令官の陣したる處にて、乃木大將も時々來り臨めり』と、春日大尉の說明するを聞きて、心まづ躍る。近く旅順の要塞を望みて、心更に躍る。この攻城山は標高二百三十六米にして山脈東西に連る。北は山又山なるが、南は眺望開けたり。少しの凸凹はあれど、低く平らかにして、東西に延ぶ。數町乃至十數町を隔てゝ、東鷄冠山や、望臺や、二龍山や、松樹山や、盤龍山や、小案子山や、椅子山や、赤坂山や、海鼠山や、周匝として旅順の背面を圍む。爾靈山は富士の形を成す。白玉山の表忠塔、特に目立ちて見ゆ。奥の奥、山又山の末に、老鐵山最も大にして且つ取放れて高く、巍峩として半天を横斷す。見渡す限りの山々には、當年活きたる砲臺若しくは堡壘ありき。あゝ我が忠勇なる軍人なればこそと、覺えず涙下る。

當時砲兵の司令官は豐島少將也。別に黑井海軍中佐、二十門の海軍陸戰重砲を指揮せり。中央に大島陸軍中將の率ゐたる第九師團、右に松村陸軍中將の率ゐたる第一師團、左に土屋陸軍中將の率ゐたる第十一師團、それ〴〵部署を定めて、愈、本攻擊に取掛らむとするに際し、乃木大將は先づ山岡少佐を使者として敵に勸降書を送りしが、敵は應ぜざりき。さらばとて、明治三十七年八月十九日の午前六時、我が四百十六門の大砲一時に砲火を開く。天柱も碎けゝむ。地維も缺けゝむ。第一回の總攻擊は十九日より二十四日にかけて突擊强襲を試みたれども、難攻不落の要塞を如何ともする能はず。唯僅に龍盤山の東西兩堡壘を占領したるに過ぎざりき。

九月十九日より二十二日に掛けて、第二回の總攻擊を試みたるが、唯クロパトキン堡壘、水師營南方堡壘團、海鼠山堡壘を占領したるにとゞまりたりき。

十月三十日より十一月二日に掛けて、第三回の總攻擊を試みたるも、唯瘤山を占領したるのみなりき。敵の第二太平洋艦隊は、本國を發して東洋に向へり。敵の總大將クロパトキンは得利寺に、大石橋に、遼陽に、沙河に、所謂豫定の退却を爲したるも、愈奉天に踏み止まり、多數の增援隊を得て、攻勢を取らむとす。この際、旅順の陷否は、皇國の興廢に關す。乃木大將は如何に肝膽を碎きたりけむ。

第四回の總攻擊は十一月二十六七の兩日を以て行はれたるが、更に得る所なかりき。轉じて爾靈山の攻擊に全力を注ぎ、十二月五日終に之を陷れたり。是に於て、一道の光明始めて輝けり。十八日には、東鷄冠山北堡壘陷りたり。二十九日には、二龍山堡壘陷りたり。三十一日には松樹山堡壘陷りたり。明けて明治三十八年一月一日望臺陷りたり。敵最早支ふること能は

す。この夕、降伏書を送り來り、五日水師營に於ける乃木ステッセル兩將軍の會見となりて、旅順戰爭全く終れり。

當時の號外は、日本國民を躍らせぬ。十五年後の今日、こゝに旅順の要塞を見渡して、乃木大將の英姿眼前に彷彿たるを覺ゆ。時は十一月二十四日、第四回の總攻擊の二日前也。一天晴れ渡りて、日は明かなれど、渤海灣より吹き來る西風、身を切るやうに寒し。當時も斯くや寒かりけむ。

二　クロパトキン堡壘

東の斜面に風をよけて午食し、地圖に對して春日大尉の說明を聞き、いざとて、攻城山を下り、一條の地隙を行く。『當時幾度收容しても、この地隙には、死體滿ちたりしかば、地獄谷と稱したりき』と、春日大尉說明するに、いと物凄し。水師營の市街を右に見て、クロパトキン堡壘に至る。龍眼北堡壘と稱するが、クロパトキンの注意によりて設けたるを以て、一にクロパトキン堡壘とも稱するなりと也。思ふに後方の水源地を掩護する爲めに設けたるにや。ほんの平地の小突起にして、堡壘の面積も狹くして五六百坪に過ぎざるが、堡壘となれば、陷れ難く、第一回總攻擊には陷るゝこと能はず。第二回總攻擊に三原大佐の死、小野本鄕兩少佐の負傷、其他千餘人の死傷を以て、こ漸く之を占領せり。この堡壘陷りたるによりて、我軍は水源の遮斷を行ふを得たり。二龍山松樹山に肉薄することをも得たる也。

三　旅順の水源地

水源地の事務所に至り、廣野四次郎氏の案內にて松林の中に入る。水源地ならば、池あらむと思ひしに、池なし。流るゝ水あらむと思ふに、それも無し。見渡す限り、唯松の林也。廣野氏鍵にて地上の鐵蓋を明くれば、始めて水聲を聞く。穴を覗けば、水流るゝを見る。廣野氏の說明を聞きて、始めて一種特別の水源地なるを知れり。幅二尺半、深さ七尺の坑、地下に通じ、二千七百尺の長さに達し、坑の兩側より水涌きて流る。これが即ち水源也。かゝる水源の仕掛は、こゝと獨逸に一つあるとのみなりと聞く。今も旅順の上水の水源なるが、こゝのみにては足らず、大孤山の麓にも水源地を設けて、その水、こゝに來り加はり、合して坑道を流れゆき、龍河右岸にて、蒸氣喞筒にて高處に引上げられ、然る後鐵管にて旅順の市街に導かる。當年我軍はクロパトキン堡壘を占領すると共に、この水源を遮斷せり。敵は如何に驚きたりけむ。

四　松樹山補備砲臺

松林を出でゝ、線路の上に出づ。片山驛長は線路を傳ひて龍頭驛に歸らむとし、我等は線路を傳ひて旅順驛に行かむとて、

相別る。右に二龍山を仰ぎ、次に松樹山を仰ぎ、次に松樹山補備砲臺を仰ぐ。この補備砲臺は、當年白襷の決死隊が突撃を試みたる處也。三回まで總攻撃を行ひたるに、效果なかりしかば、第四回總攻撃に際しては、決死隊編成せられたり。其數三千八百人、中村少將之を率ゐて、左右の砲臺堡壘を物ともせず、深く入りて、此の補備砲臺に肉薄せり。夜間白襷を袈裟掛けにして相辨ぜしかば、白襷隊の稱あり。相約して曰く、『如何なる困危に陷るも斷じて退かず。』又曰く、『砲臺に突入する迄は、如何に猛烈なる射撃を受くとも、斷じて發射せず。』又曰く、『故なくして止まり、隊伍を離れ、退却する者は、幹部にて斬に處す。』眞にこれ單身虎穴に入るもの、世にも壯烈を極めたる哉。かくて白襷隊は明治三十七年十一月廿六日午後五時より進行して、翌二十七日午前二時半まで肉薄を續け、中村少將負傷し、以下死傷者千四百九十五人の多きに及ぶも、なほ約を守りて退かず。少尉加地辰巳の如きは、探照燈破壞の命を受けて進み、部下悉く死したるも、單身砲臺に躍り入り、首尾能く目的を達して屍を砲臺の中に曝せり。乃木大將退却の命を下すに及びて、一隊始めて退却せり。當年屍骸に埋れし山壁、今は矮松立ち連れるが、思うて當年の事に至れば、腥氣一山に迸るを覺えずんばあらず。

五　白玉山の表忠塔

金州街道に出づれば、路二つに岐れて、白玉山を挾む。左すれば旅順の舊市街に達すべく、右すれば新市街に達すべし。右して左に白玉山を仰ぎつゝ、龍河に沿ひて旅順驛に至り、表忠塔に登る許可證を得て驛を辭し、白玉山の麓に第三回閉塞船將卒の記念碑を弔ふ。もと露軍が我第三回閉塞船の將士の屍骸を埋葬せしたりし跡也。頂上に達して、納骨祠を拜す。旅順方面の攻撃に戰死したる海陸將卒の遺骨、納まつて、こゝに在り。その數二萬三千に及ぶ。當年、海には閉塞船の壯擧をさへ行ふこと三回、陸には決死の總攻撃を行ふこと四回、怒濤を冒し、濃霧を冒し、水雷を冒し、探照燈を冒し、塹壕を冒し、地雷を冒し、鐵條網を冒し、爆彈を冒し、鐵壁を冒し、死に次ぐに死を以てして、さすがに難攻不落と稱せられたる旅順の要塞も、我忠勇無双なる日本軍人の肉彈の爲めに陷りたり。この要塞にして陷らずんば、よしや日本海の大海戰に、露國の第二太平洋艦隊を殲したりとも、奉天に大捷を得たりとも、日露の戰爭は、未だ其局を結ばさるべく、勝敗の數未だ知るべからさりき。否、この要塞陷りたるが爲めに、海軍は日本海の大捷を奏するを得たり。乃木大將の第三軍奉天の大戰に加はるを得たり。而して陸軍は奉天の大捷を奏するを得たり。旅順一たび陷

りて、大勢定まれり。海に陸に壯烈を極めたること、古今東西絕えて其比を見ず。鬼神も爲めに泣かざるを得ざるべし。

納骨祠は山頂の北端に在り。表忠塔は南端に在り。其間三町を隔つ。表忠塔に近く休息所あり。就いて休息し、許可證を渡して主人に導かれ、入口に伏見宮殿下の御親筆なる『表忠塔』を仰ぎて塔内に入り、螺線形の梯子段を上り〳〵て、塔頂の廻廊に出づ。中央に高さ三丈ばかりの砲彈型ありて、東郷乃木兩大將共撰に係れる『表忠塔記』を刻す。この白玉山は標高四百八尺、塔の高さ二百十五尺、避雷針を加へて二百十八尺に達す。旅順の中心に孤立して、山頂の眺望開けたるが、塔上に立てば、眼界更に廣し。四方の山々に連續せる數十の砲臺堡壘、すべて一目の下にあり。東港に接して、舊市街の人家密集し、西港に接して新市街の人家散在す。東港は方形を成して小さきが、西港は東西一里半南北半里ばかりもありて、長汀曲浦の趣を呈す。雞冠、饅頭、城頭の連山西港と海の間に横はり、餘脈老虎尾の長洲となり、一曲して西港の東端を劃す。老虎尾とは名づけ得て妙なる哉。その老虎尾と黃金山との間は、僅々二町ばかりの港口を成す。洵に天險の軍港にして、風光の美も世に稀なるが、苦戰の歷史を印して、人をして無量の感慨に堪へざらしむ。夕日老鐵山に入りて、暮色山海の趣を添ふ。悲風颯颯として塔に激す。塔に靈ありて、聲を發するが如し。嗚呼この表忠塔は長へに當年の日本軍人の忠勇を語る也。知らず、日本國民の忠勇は萬古依然たるや否や。

六　乃木室

夏秋十郎、石川寅治二氏と旅順に赴きたる時は、國澤滿鐵理事長の紹介によりて、旅順驛長久保田金平氏、營城子驛まで來り迎へ、行く〳〵戰蹟を指して說明し、旅順驛に下りては、先づ余等を其家の乃木室に延きて、午食を饗す。久保田氏は旅順驛我國の手に歸してより驛長となり居れる人なるが、最も熱心に乃木大將を崇拜す。親しく大將に接して、旅順攻擊の苦心談を聽けり。其他旅順の役に參加せる將卒の來る每に、一々實地に就きて、實戰談を聽き、最も廣く、且つ最も精しく旅順の戰史に通ず。旅順の久保田か、久保田の旅順かとまで言はれて、こ旅順に缺くべからざる人也。其乃木室には、乃木大將の遺像を安置し、遺筆を揭ぐ。旅順や、此室なかるべからず。白玉山の麓、驛を距ること數十間の外にあり。この地、私人の家を建つるを許さゞるが、氏にだけは許したり。而して氏は死後其家一切を市に寄附することを公約せりとの事也。氏曰く、『生きて旅順の戰功を語り傳へて元氣を鼓舞し、死して骨を旅順に埋むるを得ば、我願足る。』世にも殊勝なる哉。

七 支那圍壁

久保田驛長に導かれ、二輛の馬車を驅つて、先づ納骨祠に詣で、舊市街を通り抜け、坂路を登りて峯背に至れば、土壘長く連れるを見る。これ當年の支那圍壁也。

明治二十七八年役に際し、支那兵旅順に據りたるが、其防備は到底三十七八年役の時とは、日を同じうして語るべくもあらず。當時我軍の總大將は猛將の聞高き山地將軍なりしが、英雄は英雄を知る。不遇の地位に在りし乃木將軍を拔擢すれば、乃木將軍も喜びて、其部下となりて、こゝに戰へり。我には上に斯る名將あり、下に忠勇の將卒あるに、防備は不十分也。支那兵は几千餘ありたるも、統率する大將なく、言はゞ烏合の衆也。明治二十七年十一月二十一日朝、我軍先づ案子山堡壘團を陷れ、次に松樹山、二龍山、望臺を陷れ、其夕旅順全く我有に歸したりき。

八 東雞冠山北堡壘

東雞冠山北堡壘に至り、驛長現地に就きて、當年の戰爭を語る。音吐雄渾、言々肺腑より出でゝ、自ら人を動かす。この堡壘、今は原形を失ひたるが、胸墻も、それと知られ、外濠もそれと知られ、外岸内の穹窖の大部分現に存して、この穹窖内にて、敵味方土嚢を前に據り、僅か一間ばかりを隔てゝ相戰ひて、數十日の間、所謂地下戰を爲したる場所も、それと知らる。此方より銃劍に着けて、酒肉を贈れば、彼方よりパンを贈る。『日本人は殘酷なり、もう戰爭を止めずや』と云ふに、戰爭を止めたければ、降參せよ」と答ふるなど、古今無類の苦戰を爲したることとは、十五年後の記憶にも新たなるが、現に其場所に來り、驛長の說明を聞きて、感更に切也。

第一回總攻擊の際、石原大佐の率ゐたる第四十四聯隊、この堡壘に攻め上れり。而して勇敢にも進んで外岸の頂に聯隊旗を立てたり。されど猶進んで外濠に飛下りたるものは、悉く機關銃に斃れたり。外濠の深さ二三丈にして外岸は直下す。幅は四五丈もありて內岸急峻也。我兵この外濠を如何ともする能はざりき。

第二回總攻擊の時は、砲擊するに止めて突擊は爲さざりき。されど、左右二條の坑道を穿ちて、日に〳〵堡壘に接近せり。十一月二十二日に至りて、右坑道の下に鍬の音を聞く。翌日左坑道の下にも聞く。敵も坑道を穿つと見ゆ。いつ爆發せらるゝかも知れず。危しとも危し。さるにても、死體の收容を便ならしめむとて、工事者は麻繩の一端を木杭に縛りつけ、他の一端を己れの腰に結び付けて、工事を進行せり。二十五日、右坑道の方に一二は、敵の坑道を[illegible]、二三米ばかり掘り下げたる[illegible]

工事困難なるを以て一頓挫し、前進を續けたるに、二十七日に至りて、果して爆發に逢ひたり。三人死し、三人重傷を負ひたり。其爆發の爲めに、外岸壁のベトン體露出す。我軍之に勢を得て、ベトン體の一部を破壊し、穹窖内に入つて、所謂地下戰を爲すに至れり。

第三回總攻擊の際は、穹窖の壁を破り、進んで内岸を攀ぢしも、十中七八は戰死して、砲臺に達すること能はざりき。

第四回總攻擊の際は、二條の坑道を作りて、爆發を試みたるが、僅か内岸の一少部分を破壊せしに止まりたりき。我兵進んで内岸を攀ぢしも、また空しく死傷するのみなりき。さるに敵には一大損害起りたり。十二月十五日の夜、背面要塞の指揮官なるコンドラテンコ中將此堡壘に來りて掩蔽部に休息し居りしに、我軍の放てる二十八珊米榴彈爆裂して、一命を失へり。露國の士氣大に沮喪せり。間もなく、十八日に至り我軍は四條の坑道より爆發を試み、之に乘じて奮戰突擊して、全くこの堡壘を占領したりき。

九　二龍山堡壘

望臺の下を過ぎて、驛長の說明を聞く。この望臺は旅順の北より東へかけて連續せる山の中にて、最も高く突起し、この方面の砲臺堡壘の指揮者の觀を呈す。露軍は之に砲臺を設けたるが、大砲露出して、我軍の目標となりしを以て、第一回總攻擊始まりてより間もなく砲身傾きて用を爲さゞるに至れり。されど、我軍多大の犠牲を拂ひたるも、之を占領すること能はざりき。『肉彈』の著者櫻井大尉は、萬死の中に一生を得たる一人也。第二、第三、第四總攻擊の時は、之を突擊せず。松樹山陷りたる翌日、突擊して、首尾よく成功せり。實に明治三十八年一月一日午后三時半也。露の軍使降伏書を齎らして、我水師營南方の第一線に來りたるは、それより一時間半の後なりき。

二龍山堡壘に至りしに、こゝも破壊せられて、原形を存せざるが、二萬坪もありて、この方面の堡壘中にて、最も大也。第一回總攻擊の際は、我軍唯砲擊を加へたるのみ也。第二、第三、第四の總攻擊には、突擊に次ぐに突擊を以てしたるも、功を奏せず。十二月二十八日に至り、胸壁に爆發を行ひて、我前隊の一部爲めに土中に埋沒したるも、後隊突進して奮闘し、翌二十九日の午前三時、全く之を占領したりき。

一〇　松樹山堡壘

二龍山堡壘に至りし時、旅順工科學堂の生徒數十人驛長を待ち構へ居りたり。驛長聲を勵まし、而かも痛ましさうに當年の苦戰を說きしが、進んで、松樹山堡壘に至れば、忽ち嬉しさうなる顏付を爲して、『この堡壘には、我軍の爆發最も能く功を奏

して、一擧にして堡壘の全部を埋沒せり。これを見よ」とて、」穹窖の中に入る。二三間にして、土石道を塞ぐ。『今もなほこの中には、露兵の百五十人も埋れ居るなり』と云ひつゝ、壁の石垣とベトン體との少しの隙間より毛の如きものを抓み出し、『これ露兵の軍服なり。爆發の際、一時間隙を生じて、露兵之に吹き込まれたるまゝになり居るなり』といふに、鬼氣人に逼るを覺ゆ。日暮れむとして、暮色殊に悽愴の意を添へぬ。

この堡壘は開城より一日前に陷りたり。爆發見事に功を奏したるは、その陷る際の事也。第一回第二回總攻擊の際は砲擊を加ふるに止まりしも、第三回第四回總攻擊の際は、我軍苦戰したりき。

一一 高等法院長の官舍

この夜、石川氏と共に、平石高等法院長の官舍に宿りぬ。余は旅順を訪ふこと三度、前後八日を費して、五宿したるが、この官舍に宿すること四夜に及びたりき。この官舍は、もと露軍砲兵司令官ベーリー少將の官舍なりき。舊市街より少し離れたる岡の上にあり。石壁に圍まれて、小城廓の如し。黃金山に對して、風致も閑散也。

平石氏は同鄕の先輩なるが、遠足を好めり。余の青年時代、氏の發起にて遠足會を起して、共に遠足したりき。余の旅行癖は、氏の感化に由りて、愈高まれり。指を屈すれば、旣に三十年の昔となりぬ。「相變らず旅行して居るか」とて笑ふ。「君は如何に」と問へば、「我も依然として脚健なり。久しぶりにて共に遠足したきが」とは云ひたるが、公務の爲めに果さゞりき。壽相は眉毛の長きにも現はれて、快濶にして明敏なり。數十鉢の黃菊を置きて、玄關は菊の花園となり、お多福の綺や置物を飾りて、客室はお多福の陳列所となれり。酒は二三杯飲めば、直に酡顏となる。俳句を善くし、謠曲を嗜み、圍碁を好む。夜は必ず碁を打ちたるが、余の負くること多かりき。

平石氏の語る所に據れば、鶉が旅順の名物也。秋の初、高粱の熟する頃、鶉の群北より來り、こゝに暫し休息して、然る後、廟島列島を傳ひて、山東省に飛び行く。この際、支那人高粱畑の一端に網を張り、他の一端よりホー／＼と云ひつゝ、急がず、あせらず、高粱の中を行く。鶉は其聲を避けて網に近づく。網は地に向つて開き。入口稍高く、奧は地に着けり。鶉知らず／＼其中に入る。網全く地に卸されて、鶉最早出づる能はず。斯くて年々捕ふる鶉幾萬羽といふことを知らず。もとは一羽一錢にて買へたりしが、この頃は買占を爲す者出來て、一羽の價六七錢に上るに至れり。

又平石氏の語る所に據れば、[illegible]も旅順の名物也。冬寒くして

沖の荒るゝ節は、鰤の群來つて東港に入り、じつとして動かず。釣を要せず、網を要せず、唯銅線を碇の如くに爲して綱に着け、水底に卸して引上げさへすれば、瞬く間に數百尾も獲らるゝ也。

處かはれば、いろ〳〵珍らしきこともあるもの哉。されど、余の旅順に行きたるは、鰤の時節にもあらざりき。鰯の時節にもあらざりき。

一二 爾靈山

平石氏に導かれて、石川氏と共に、程近き旅順要塞戰利記念品陳列場に至りしに、月曜にて休日なりしかど、次長本田德太郎氏特に我等の見物を許し、自ら説明の勞を執れり。

當年露軍の使用したる兵器一切陳列せられたるが、十字鍬磨滅して、鐵槌かと疑はるゝばかりになれるもありて、今に露兵の苦心を語る。手投爆彈もあれば、陸戰に應用したる魚形水雷もあり。東鷄冠山北堡壘、二龍山、松樹山、爾靈山などの模型もあるが、本田氏は實戰せしことゝて、爾靈山の模型に對して、説明すること精細を極めたりき。

種々の大砲も館の内外に陳列せられたり。中に英支相戰ひし際、英兵より支兵の手に歸し、後、露兵の手に歸し、更に我軍の手に歸して、四國に歴仕したる歴史づきの大砲もある也。

平石氏の官舍に引返し、石川氏と馬車に乘りて旅順驛に至り、又も久保田驛長に案内を請ひて、爾靈山に向ふ。龍河の西、港に會する處に架れる日本橋を渡れば、旅順の新市街也。東京に比して云へば、大連は下町にして、旅順は山手也。更に旅順の中にて、舊市街は下町にして、新市街は山手也。驛長高等女學校の校舍を指して曰く、『露國の紳士淑女こゝに舞踏しつゝありしに、圖らずも、三十七八年役に於ける我軍の第一彈落ちたりき。』

爾靈山の麓にて馬車を下りて徒歩す。路に黑き斑點の連れるを見る。驛長曰く、『當年の血と油との混合したるもの也。』

頂は分れて二峯となる。鞍部に掛茶屋あり。先づ右峯に上り、乃木大將の筆蹟を留めたる『爾靈山』の記念碑に對して、無量の感に打たる。轉じて左峯に上る。南の陣營山、北の海鼠山、東の赤坂山近く相接す。白玉山に蔽はるゝ一小部分を除きて、旅順港全く露出す。當年四回まで總攻擊を行ひたれども、功を奏せざりしかば、我軍轉じて全力をこの一山に注げり。敵も全力を盡して防げり。第一師團の兵おもにこゝに戰ひたるが、後には第七師團の兵も加はれり。敵は八十中隊の兵、こゝに戰へり。突擊又突擊、屍骸を超えては超え、猛火を衝きては衝き占得しては奪ひ返され、奪ひ返されては占領し、晝夜間

斷なく血戰を續くること十日の久しきに及びて、漸く之を占領せり。我軍前後この山に死したるもの三千百五十四人、負傷したる者六千八百五十三人、我軍がこの山より改葬したる敵の屍骸は五千三百八十、負傷者は猶多かりけむ。我死傷も多かりしが、敵の死傷は更に多かりき。壯絕慘絕、古今に其類ありとも覺えざる也。

爾靈山の陷りたるは、明治三十七年十二月六日の朝なりしが、赤坂山の敵も陣笠山の敵も退き去つて、自ら我手に歸せり。而して爾靈山我手に歸してより、こゝに觀測所を設けて敵艦を砲擊するの便を得たり。而して八日に至りて、見ゆる限りの敵艦は、悉く沈沒し、若しくは燒失せり。唯一艦逸出を圖りしも、港外にて擊沈せられて、旅順の艦隊こゝに全滅せり。

驛長山腹の石碑を指して曰く、『乃木大將の次男、保典少尉の戰死せる處なり。』大將や唯二子あり。長男の勝典中尉はさきに金州城外に戰死せり。後八年、大將は明治天皇に殉死し、其夫人は大將に殉死せり。嗚呼一家の血肉悉く君國の爲めに竭くし果てける也。

四人づれの一行、西南の山腹より上り來り、驛長に一禮して、『髑髏あり』といふ。敎へられたるまゝに、一町ばかり下れば、長方形に地割れて、髑髏一つ、手足の骨と思はるゝもの三つ四つありき。

一三 水師營

新市街に引返し、龍河を左にし、小案子山、椅子山を左に仰ぐ。人家の前に、屍體直に地に遺かれたるが、唯席にて蔽はれたるのみにて、頭足露出せるを見る。これはと驚けば、驛長曰く、『この頃流行る世界感冒にて死したるならむ。斯くして葬師の來るを待つ也』。驛長山麓の畑を指して曰く、『日本人の火葬也。支那人は火葬せず。』

水師營に至るに、數百の人家立ち連りて、小市街を成す。露店も少なからず。曲り〳〵て乃木ステッセル兩將軍會見所の門に至りて馬車を下る。石の垣に擁せられて、二百坪もあるらむ。本屋は唯二室のみ也。右手に小屋あり。左手に乃木將軍が馬を繫ぎたる棗の木一本立てり。明治三十八年一月一日午後五時、ステッセル將軍の降伏書我軍に達す。翌二日午前九時、乃木大將は山岡少佐を軍使として答書を送り、午後一時半我軍の委員伊地知參謀長以下六名、露國の委員レース參謀長以下七名とこゝに會見して談判し、四時半に至りて談判を終へたり。越えて五日、乃木將軍はこゝにステッセル將軍を迎へ、手を執つて歡談し、午食を共にしたりき。

降りし人員は、將校八百七十八名、下士卒二萬三千四百九十

一名、病院に於ける將卒一萬六千名ありき。當時水師營の人家は悉く兵燹に罹りて、唯此家一つのみ殘り居りたりとかや。旅順民政署にて買收して、公學堂に充てたりしが、それも今は止めて、單に古蹟として保存し居れり。兩方に丸太の柱を立て、上に餘端を存して丸太を載せ、其下直に柱と柱との間に丸太を横へて、門と成せるは、この會見所にも見受くるが、滿洲にては他にも折り〳〵見受く。これ滿洲人の古風なりと聞く。我國の鳥居は我國にのみあつて、他には無しと聞きつるが、滿洲人の門は我國の鳥居とほゞ相同じき構造也。

一四 黃金山

平石氏の紹介にて要港部に司令官黑井中將を訪ひ、導かれて、而かも其馬車に載せられて水交社に至り、開城當時の旅順の模型を見る。幅一間、長さ一間半もありて一室を占む。砲臺や、堡壘や、沈みし軍艦や、閉塞船や、一々それと知られて、構造精巧を極はめたり。小蒸汽船にて東港を渡りて、黃金山に上る。中將は當年二十門の海軍重砲を指揮して陸上より旅順を攻撃したる人也。能く語り、話柄滾々として盡きず。急坂を上るに、息も切らさず。「曾て伊太利に往きたりし時、ベスビア山に上りしに、一獨逸人と道連になる。突然問うて曰く、「貴方は何度富士山に上られしか」。「一度上らぬも馬鹿、二度上るも馬鹿」と答ふれば、「富士山の如き立派なる山は、世界に二つとは無し。折角日本に生れながら、唯一度しか上られざるは、さてさて勿體なきことと也。余は四度登山したり」と笑はれたり」とて笑ふ。黃金山は今もなほ活きたる砲臺也。無線電信の裝置もあり。その係の人、早合點して、我等を導き入れむとすれば、「そんな俗なことを見に來りたるに非ず」と中將輕く答へて、最高處に上り、なほ幅一尺ばかりの石壁に上りてすた〳〵歩く。風強くして吹飛ばされむとす。余ステッキにて身を支へて、漸く之に尾す。電柱より斜下せる銅線に取り付けば、中將も歩を停めて、彼方より同じく銅線に取付きながら、山海を顧みて簡單に當年の事を語る。滿寵山を指しては、「彼の山我手に歸して後、我れ彼山より觀測して、港內の敵艦を悉く擊沈したりき」とて、感に堪へざるものゝ如くなりき。

一五 閉塞船の跡

『閉塞船の跡を弔ひたし』と云へば、中將諾して、共に小蒸汽船に乘り、老虎尾半島に接したる巖の上に、碇型の閉塞船紀念碑を見て、港外に出づ。風依然として強く、且つ寒く、怒濤吼んで、船を呑まむとす。思ふも勇まし、あゝこれ當年閉塞船の沈沒したる跡也。

我海軍が旅順に向つて、砲火を開きたるは明治三十七年二月

八日の夜なりしが、二十四日に至り、第一回の閉塞を行へり。三月二十六日に第二回の閉塞を行へり。四月二十七日に第三回の閉塞を行へり。第一回は五艘七十七名にして、死傷三名ありき。第二回は四艘六十五名にして、軍神の廣瀬中佐が唯一片の肉を殘したるを始めとして、死傷十五名ありき。第三回は十二艘百五十九名にて大擧したるが、惜しや、風浪甚しかりしを以て、中止の令下る。されど其令の達したる船もあれば、達せざる船もあり。達せざる八艘だけ沈沒して、死傷八十名の多きに達したりき。

閉塞のみならず、凡そ一年の久しき、危を冒し、苦を忍び、戰艦初瀨、八島、砲艦大島、巡洋艦吉野、通報艦宮古などをさへ犧牲にして、旅順封鎖の任を全うし、而して日本海の偉勳を奏したる我海軍の苦心は、如何ばかりなりけむ。

日沒して、暮色閉塞船の跡を蔽はむとす。寒さ益加はり風浪益激す。當年の死傷者の中には知己もあらむ、能く語る中將も默して感慨に沈みたりき。

一六 老鐵山

中將の馬車に送られ、新市街に友人八木奘三郎氏を訪ひて、こゝに一宿しぬ。氏は考古學者として著書も少なからざるが、今旅順博物館の別館なる考古館の主任となりて、逸才を適應に發揮せる也。

明くれば、豫て老鐵山に上るを約したることゝて、陳列場に陸軍歩兵少佐細川良久氏馬車にて來迎ふ。旅順攻撃に參加したる人也。共に乘りて、西港の西岸を進み、白鼠子といふ部落に至りて、馬車を下り、右に折れて山間に入る。溪ありて、水なし。この溪谷より沙金出づと聞く。路次第〳〵に高まりて、いつしか後の眺望開く。いよ〳〵峠に取付かむとする處より、左折して急なる傾斜面を攀づること數町にして峯背に出で、更に一二町左に上りて、老鐵山の最高峯に達す。こゝに砲臺の跡あり。細川少佐曰く、二十五珊の大砲完全に存し居りしが、歐洲の大戰起るに當り、露國に還付して持去らしめたりきと。

標高四百五十六米、爾靈山の倍以上もありて、金州以南最高の山也。殊に旅順附近にては、飛放れて獨り高く、金州半島の最末端に崛起して、金州半島爲めに掉尾の勢を呈す。三面海也。陸の一線北に延びて、旅順附近の山々は、幾んど平地の小突起となる。數里を隔てゝ、古城山、劍山、盃頭山、老牛山など重り合ひ、その末に飛放れて、大和尙山獨り高く峙つ。其左更に遠く且つ小さく小黑山孤立す。旅順附近の山々は、どこに登りても、人間の臭氣鼻につき、古戰場の感に打たるゝが、こゝに上れば、忽ち仙界の氣分に[illegible]までに、下界を超脫し

て、自然美の分量多し。一天澄み切つて、些の濁氣なく、肉眼に見らるゝ限りは、悉く見ゆ。殊に風寒からず。山靈喜んで我を迎ふるかと思はるゝばかり也。

辨當を食ひて後、米を傳ひて、北砲臺に至りしに、二十三珊の大砲、破損せるまゝに存す。當年爾靈山の我軍に仇したるものゝ一なるべしと、ステッキにてぽんと砲身をたゝく。山麓よりこゝに至るまで、思ひの外に廣き路通ず。こゝより戻るにも、廣き道あれど、傾斜面に捷路を取つて沙金の谷に下り、沙金やあると、目を注ぎたれど見當らず。この山には蝎棲めりと聞きつるが、それも見當らざりき。

白嵐子を過ぎて海濱に出づ。山自然に缺けたる處、將に海に達せむとする掘割の跡あり。細川少佐曰く、『當年露國にては、西港を商港にせむとてこゝを掘割りて別に港口を作らむとせしが、軍港と商業とを一つにするは得策に非ずとの議出で、大連を商港とし、旅順を軍港とすることに定めて、この掘割を中止しける也。』

城頭、雞冠、殷頭一帶の山の麓に沿ひて、西港の東岸を行く。處々に廢屋あり。細川少佐曰く、『當年このあたりの砲臺を守りたる露軍の將校の住家也。』

日落ちて、暮色迫る。暮色は終に夜色となりけるが、られしや、新舊市街の電燈地に輝き、表忠塔の電燈半空に輝く。地の燈光は人間を語りて懐かしく、半空の燈光は忠魂を語りて尊し。細川少佐曰く、『船にて芝罘を發すれば、間もなくこの表忠塔の光見ゆる也。』

『まだ渡船あれば好きが』と、足を早めて老虎尾の端に至れば、恰も渡舟來れり。このあたり四五町の幅あり。櫓綱長きが、右手にて握り、櫓をば左手にて握り、櫓を動かすにつれて、綱を握れる手をも同じ方向に動かし、櫓を深く水に入れて漕ぐ。內地の漕ぎ方とは異なれるが、舟の進むことは、內地に比して早きやう也。

この夜は平石氏の官舍に宿し、明くる日、考古館に至り、八木氏に導かれ、說明せられて、上古の遺物を見る。老鐵山より出でたる古器最も多し。大谷光瑞師の回疆より齎せる三體の木乃伊、殊に目を惹く。一體は老いたる男、一體は老いたる女、一體は軍人と、服裝にてもわかる。內地には見られぬ珍物也。

一七 大孤山

將に旅順の要塞線に入らむとして、左を見れば、一山特立して峻巖絶壁に取卷かる。その先きに一山又特立す。手前の山大に且つ高くして、大孤山の名を負ひ、先きの山稍小に且つ稍低くして、小孤山の名を負ふ。大孤山を見るに、登れさらにも無

し。さるに我兵は登りて、頂上の砲臺を陷れたり。當時外國の觀戰武官之を見て、『日本兵は鋼鐵の爪を有するか』とて驚歎したりとかや。余攻城山に上りて此山を望み、春日大尉より此事を聞きて、旅順を訪ふ以上は此山に登らざるべからずと思ひぬ。

三度目に旅順を訪ひし時は、余一人なりき。旅順驛に至り、驛長に向つて、『今日は大孤山に登らむとす。御老體にして且つ肥滿せらるゝ貴方に、御案内は請はれず。誰れか然るべき方に御案内を願ひたし』と云へば、『我れ案内せむ。萬一の時の用心にとて案内の助手として、大坪要三郎氏をも伴ひ、馬車を驅つて舊市街を通り拔け、山を越えて、本防禦線の外に出で、前に大孤山を仰ぐ。この方面より見れば、登れる山也。されど、當年日本兵はこの方面まで廻らるべくもあらず。轉じて西に至るに、とても登られず。北に至るに、矢張り登られず。東に至りしに、こゝならと思はる。馬車は南麓に廻らせて、山に就きしに登られるには登られたるが、困苦一方ならず。たゞ登りてもなほ此通り也。觀戰武官の驚歎も、げに宜べなる哉。

『貴方は何歳にか』と、驛長不意に余の年を問ふ。『五十歳』と答ふれば、『それにて安心したり』といふ。『如何なれば、そのやうなる事を云はるゝぞ』と問へば、『貴方が余より年上なりとのみ思ひ込みたり。その年上の貴方が少しも弱りたる様子なく、すら／＼歩かるゝに、年下の余は弱りて、大坪君の力を借りたり。洵に殘念千萬なりと思ひしが、余が年上なりと知りては、稍心を安んずるに足れり』とて打笑ひぬ。

當年露軍はこの砲臺より我が最終停車場を見下して、妨害を加ふること大也。この砲臺を陷るゝに非ずんば、旅順の攻撃には取掛れず。第十一師團は必ず之を陷れむと決心せり。同時に大孤山と相呼應せる小孤山をも陷れむと決心せり。第一回總攻撃に先だつこと十二日、即ち明治三十七年八月七日進んで攻撃せり。大孤山に向ひしは、第十二、第二十二、第四十四の三聯隊にして、小孤山に向ひしは第四十三聯隊也。前はこの砲臺のみならず、本防禦線の諸砲臺より砲火を蒙り、後は海上の敵艦より攻撃せられて、損害大なりしも、終に八日の夜、大孤山を占領し、翌九日小孤山を占領しける也。

一八　東雞冠山

南麓に下りて馬車に乗り、本防禦線の山坂に取付かむとする處にて、大坪氏と余とは馬車を下る。當年日兵の進みし路を選みて東雞冠山に上らむとする也。而して所謂年上の驛長は馬車にて露兵の行きし路を行きて、東雞冠山上に我等を待つ筈也。戯れに驛長に向つて、『貴方は露兵となつて山上にあれ、我は日

兵となつて攻め上らむ』と云ひたるが、上りて見れば、露長あらず。『おうい』と呼べば、思ひがけずも、『おうい』と山腹の方より答へて、露長上り來る。『日兵となる筈が却つて露兵となりたり』とて相笑ふ。『余は瘤山に廻りて待ち居りたり。あれ見られよ、この下のあの瘤の如きが、即ち瘤山也。あれでも占領するには、中々骨が折れたるものなり』と、露長は恰も自ら占領したるが如くに語る。

東雞冠山北堡壘は、東雞冠山砲臺よりも一段低し。瘤山は二者の間にありて、更に低くして小也。第三回總攻擊の時、我軍之を占領せり。さるに東雞冠山は突擊に次ぐに突擊を以てしたれど、占領すること能はざりき。而して敵は降を乞ひたる翌日、自らこの砲臺を爆發して退却したりき。

休息する程に冬の日の暮れ易く、砲臺はいつしか暮色に占領せられぬ。

一九　完全なる堡壘

この夜も、平石氏の官舍に宿しぬ。明くれば十一月卅日也。いよ〳〵此日を以て、旅順めぐりの千秋樂となさむとするに、寒雨瀟々たり。大坪氏に導かれて、馬車にて大案子山堡壘に向ひ、山麓に馬車を下り、徒歩して堡壘の中に入る。この堡壘は我軍に攻められず、武器なきだけにて、もとの形を失はず。今迄は砲臺堡壘の跡を見たりしが、茲に始めて堡壘を見る。大坪氏の説明を聞きて、始めて砲臺と堡壘との區別を知れり。構造も異なれるが、高き山に砲臺ありて、低き山に堡壘あるを知れり。余は先づこの堡壘を見て、然る後東雞冠山北堡壘、二龍山堡壘、松樹山堡壘などを見ざりしことを悔ゆ。されど、後れたるにもせよ、終に堡壘を見たることを喜ぶ。而して砲臺堡壘を攻むることの困難なるを痛切に感ぜずんばあらず。能くも我軍は東雞冠山北堡壘を陥れたる哉。二龍山堡壘を陥れたる哉。松樹山堡壘を陥れたる哉。爾靈山を陥れたる哉。

このあたり矮松しげる。大坪氏曰く、『旅順の山々には、もと一木も無かりしが、植林の結果、漸く山林を爲さむとす。その代りに、狼棲むに至れり。このあたりにも狼棲める也。』

二〇　露國軍人の墓

轉じて小案子山の北麓に至り、露國軍人の墓に詣でぬ。番人の家ありて、支那人墓を守る。墓地の廣さ萬坪に餘る。下士卒は合葬せられ、將校は一人〳〵に其墓あり。就中モーラス參謀長の墓最も偉大也。露國の手にて葬りたるものを別にして、我國の委員の手に葬りたるものゝみを數ふるも、一萬四千八百七十三人の多きに上れりと聞く。當年露國の死傷も多かりし哉。而して能くも國の爲めに死したる哉。

拜し終ると共に、余は旅順を去れり。雨なほ蕭々たりき。

いかめしき取手のあとに松生ひて狼すだく世とぞなりぬる。

京の春花見奇談

澤田撫松

一　嵐山の一重櫻

未だ嵯峨に停車場の出來なかつた時であつた。嵐山の花だよりが京の街へ傳はると、三條室町の近江屋呉服店では、明日が花見だと言ふので、番頭も丁稚も仕事が手につかなかつた。烏打帽子の埃を拂ふたり、正月のお四季施に貰ふた着物の皺を伸したりして、有頂天になつて居た。臺所の方では、蒔繪の重箱に玉子の卷燒、色瀬鉢、阿多福豆の樣な、前の日から詰め込むで置いてよいものを詰めたり、大きな瓢簞を洗ふたりして居た。明日の朝は五時起きと言ふので、其の晩はいつもより早く寢ることを許された。番頭が提燈を持つて先に立つと、丁稚がその後について裏庭へ出た。一の倉二の倉三の倉と順番に倉の周圍を廻りながら、

『ヒノーヨージンー、ヒノヨウジン、ヒノーヨージーン、ヒノヨウジン』

聲に節をつけて、わめきながら火の用心廻りをして、店の二階の寢室へ潛り込むだが、明日の天氣の心配をしたり、昨年の花見の思出話をしたりして、丁稚連はなか〱眠り相でない。

『皆早うねんか、いつまでも起きて居ると、五時に起きられやへんがな』

番頭がどなると、丁稚の頭が皆布團の中へ隱れて、間もなく鼾をかき出した。烏の聲に目を覺した丁稚連は、枕頭に目覺時計を置いて寢込むで居た番頭を起して、ワイ〱騷ぎながら下へ降りると、臺所ではもう女中が重箱に握飯を詰めて居た。皆の仕度が出來ると、今日一日は無禮講と言ふので、主人も奉公人も隔てのない話をしながら、三條通りを西へ歩いた。街はづれから嵯峨街道へ出ると、兩側一面に黄金をまいた樣に菜種の

花が咲いて居た。美しく着飾つた娘や、瓢簞をさげた隱居や、白い線の入つた學生帽を冠つた高等中學の生徒やらが、緩かな足どりで歩いて居た。道に沿ふた小川には、長い柄のついた絽網を持つた子供が、大勢集つて居た。路端に置いてある竹筒やビール壜の中にはちいさい魚族が游泳して居た。それは此邊の小川に繁殖する目高であつた。小川の周圍には、萩の花を散しかと思はれる、可憐な蓮華草が、花毛氈を敷いた樣に咲いて居た。褄からげをして、緋縮緬の蹴出しを裾長に着けた若い女の一群が、白い手を動かして蓮華草を摘むで居た。花と莖との天地を揃へて、一握程の束が出來ると、紙縒で莖のところを括つて、牡丹の花の樣な花束を作つて居た。春の陽が、島田や、銀杏返や、束髮の艶やかな黒髮に、柔かい光線を投げて、空には雲雀が啼いて居た。花園から太秦へ出て、廣隆寺を過ぎると、もう其所は嵯峨野で、路端の所々に、櫻が咲いて居た。渡月橋の手前まで來ると、一重櫻は滿開で、赤い毛氈を敷いた掛茶屋の棧敷は、重箱をひろげた花見客の團欒で一ぱいになつて居た。三階建の三軒家は三軒とも團體客で上も下も埋まつて居た。近江屋の一行は、桂川に面して枝を張つて居る櫻の下に、牀机が二脚空いて居るのを見つけ出して、其所へ皆腰を下した。重箱は赤い毛氈の中央に運ばれて、瓢簞の栓が拔かれると、主從打ち寛ろいだ花見の宴が開かれた。

『三曲の、水責火責は厭はねど、……』

曾我兄弟の裝ひをした法界節が二人、月琴をひきながら踊つて來ると、その後から聲色つかいがやつて來て雁次郎の物眞似をする、菓子の入つた大きな箱を頭へ載せた小原女が、

『あにい、何ぞ買うとくれ』

頭から箱を下して、挺子でも動きさうにない。仕方なしに二ツ三ツ菓子を買ふてやると、

『よう買うておくれたな、又買うとおくれ』

さつさと次の客へ賣りつけに行く。義太夫の連彈が通る、新内の流しが通る、帶をだらりに結むで、褄を高く取つた舞子の一群が通る。三軒家の三階から三味線の音が聞えると、若い藝子がしとやかな京舞を舞ふて居るのが、欄干の間から見える。十二三の女の子を御守殿風に仕立てゝ、盛裝した母親や女中がついて渡月橋を渡ると、花見客が皆振り返つて眺める。京では、女の子が十三になると、春、花の盛りに、嵯峨の法輪寺へ參詣して、虚空藏菩薩から智惠を貰ふと言ふ習慣がある。御守殿風の一行は、智惠貰ひの十三詣りであつた。櫻の樹の下に陣を取つた近江屋の花見團は、重箱の底が見えかゝつて、酒もかなり廻つて來たので、じつとして居られなくなつた。

『大悲閣へ行かうか』

主人の清兵衛が發議すると、

『さうどすな、ゆつくり温泉へ入つてから、虚空藏さんへお詣りしまへう』

女房のお時が賛成する。番頭や丁稚に異存のある筈なく、衆議忽ち一決して、重箱を萌黄の風呂敷に包むで、丁稚の定吉に負はすと、渡月橋の川下、桂川の河畔へ下りた。其所には大悲閣通ひの渡し船が幾艘も客を待つて居た。一艘買切つて一行が乘つた。船の中には清兵衛夫婦、昨年商業學校を卒業した長男の清太郎、善七、勘七、友七の三番頭、定吉、豐吉、仙吉、末吉、幾吉の五丁稚、お霜、お竹、お種の三女中がぎつしりと詰つて居た。保津川を下つて來る筏舟と幾度も擦れ違ふて、船が大悲閣の下へ着くと、一行は皆温泉へ登つて行つた。炭酸泉につかつて、のんびりとなつた軀を、桂川を眼の下に見下せる座敷へ運むで、清兵衛が盃をあげると、飲む者は飲み、食ふ者は食ふて、皆軀の倦怠を覺え出したが、血氣の清太郎は番頭や丁稚をつれて、夢窓國師座禪石の方へ登つて行つた。ともすれば滑りさうな櫻細路をつたふて行くうちに、清太郎は番頭や丁稚の一行にはぐれた。

二

清太郎は大きな聲を出して、善七や友七の名を呼むで見たが、木魂に響くばかりで返辭がない。先へ行つたのかと思ふて、山道を登つて行つたが、一行に逢はなかつた。後へ戻つて見たが矢張り逢はなかつた。山路を行つたり戻つたりして居るうちに座禪石の方へ行く路が分らなくなつたので、後へ引きかへすつもりで細い坂路を下りたが、もと來た路へ出られなかつた。清太郎は初めて路に迷ふたことを知つたが、唯さへ人通りのない山路で、日が暮れかゝつて樹の間がうす暗くなつて來たのだから、路問ふ人にも逢はなかつた。名の知れない鳥の聲があちこちにして、櫻の花が散つて來た。清太郎は岩角に腰を下して方角を考へたが、暗くなつて來たので、東西の識別さへもつかなかつた。夜になつたら一歩も歩けないから、今のうちに坂道を下りさへすれば人通りのある所へ出られるであらうと思案を定め、足にまかせて歩いたが、名の知れない池の邊へ出た時は、もう一寸先も見えない闇夜になつて居た。足は痛む、軀は疲れる、精も根も盡き果てた清太郎は、ぐつたりとなつて、こ櫻の樹に凭り掛かつて居ると、何所からともなく鉦の音がする、耳を澄まして聽くと、餘り遠くでない。邊を見ると、池の彼方に幽な火影が揺めく、これを見た清太郎は、池をめぐつて火影に近づいた。其所には、さゝやかな草庵が、生垣で取り巻か

れて、柴門があつた。窓から洩れる經讀む聲は、正しく女であつた。

カンカン〳〵

鉦の音は山中の靜寂を破つて、身にしむ樣であつた。こうした場合、人間の聲の懐しさに、柴門に立つた淸太郎は、思はず聲をかけた。

『一寸お尋ねいたします、路に迷ふたんですが、大悲閣の方へはどう行けばよろしいでしやうか。』

同じことを二度くり返へした時、内から柴門を開けた者があつた。共人の持つた手燭の光線は、白い着物に黑い腰衲衣をつけた、若い尼僧の姿を照した。

『どなた樣』

これを見た淸太郎は、二の句がつげなかつた。路に迷ふた闇の山中で、水の垂れる樣な美しい尼に聲かけられたことが餘りに豫期に反したからであつた。尼の方でも、若い男が突然柴門を叩いたので、かなり驚いた樣子であつた。

『どちらからおいでになりました』

尼は手燭をかさして、不意の訪問者を眺めた。淸太郎はおづおづしながら、

『實は大悲閣から座禪石の方へ行く路を間違へまして、こう言ふ所へ來たのですが、日が暮れてさつぱり路が分らないので困つて居ります、大悲閣の方へはどう行けばよいのでしやうか』

慇懃に路を尋ねると、尼は淸太郎の視線を避けながら、

『これから大悲閣へは隨分のみちのりですし、それに險阻な所がありますから、闇夜では路をお敎へしたところで……』

折柄、バラ〳〵と雨が降つて來た。淸太郎は一寸空を仰いで、

『雨が降つてまいりました、ぢき止むかも知れませんが……甚だ申し兼ねますけれど、簷下までおいれを願ひたいのですが』

尼の顏色を窺ひながら哀願した。尼は白い袖で手燭を被ふて暫らく考へて居たが、雨が止みさうにないので、

『ではこちらへ』

尼は庵へ入つた。淸太郎もあとについて入ると、共所は六疊の間で、次の八疊の間が持佛堂になつて居る。春ではあるが、夜氣と山氣に打たれた淸太郎は、體がぞく〳〵するところへ、氣がゆるんで、疲勞が益々加はつたので路を敎へて貰ふても、一歩も歩く氣にはなれかつた。尼が出す番茶を一息に飮むで、

『只今のお話に依りますと、これから大悲閣へ下りますのは、夜路では六ケ敷さうですが、如何でしやう。夜の明けますまでこちらに置いて戴く譯にまいりますまいか、御迷惑とは存じま

すが』

猶下よりも更に進むだ要求をした。尼は困つたと言ふ顏つきで、

『さうですね、夜路を大悲閣へおいでになるのは大變ですから、夜の明けるまでお泊めすればよろしいのですが、御覽の通り、當庵には私一人より居りませんので、世捨人でも女一人の所へ、男の方をお泊め申す譯にもまいりませんが……』

氣の毒さうに斷りを言ふと、淸太郎も强いてとは言へず、

『御もつともなお話です、御無理な御願ひを申しましたのは、私が惡うござりました、ではこれでお暇をいたします』

疲れた足で立ちあがると、

『あゝもし』

尼はやさしい聲で呼び止めて、

『雨も止みませんし、それに路がとてもお分りになりますまいから、お泊め申すと言ふ譯ではありませんが、夜が明けますまでお談をいたしましやう』

淋しい尼の口元に、微かな笑みが洩れた。外には春雨がしと〳〵と降つて居た。

三

淸兵衛夫婦を始め、番頭丁稚が歸り仕度をしたが淸太郎の姿が見えない。暫らく待ち合はして居ても歸つて來ない。途中で友達にでも逢ふたので、渡月橋へ廻つたのであらうと今度は船に乘らず、嵐山の麓を渡月橋へ出て、橋を渡つて三軒家の前まで來たが、淸太郎には逢はなかつた。子供じやないから迷子になる氣遣もなからうと言ふので、花見街道を唄なぞうたひながら歩いた。一行が三條の家へ着いた時はもう日が暮れて居た。皆朝早かつたのと草臥て居るのとで、早寢をすることになつたが淸太郎の歸らない爲め表を閉める譯に行かないから、一番〻頭の善七が起きて居ることになつて、他の者は皆床へ入つた。善七は火鉢にもたれて居睡りしながら待つて居たが、十二時になつても歸つて來ないので、仕方なしに表を閉めて寢てしまうた。翌朝になると家中の者が心配した。今まで無斷で家をあけたことのない淸太郎が、今になつて歸つて來ないのは變だ。何か途中で間違ひでもあつたのではないかと、勘七と友七とを嵐山へ搜しにやつた。其の日の夕暮れになると、二人の番頭が淸太郎を車に乘せてつれて歸つた。淸太郎は顏の色が青冷めて、死人の様になつて居た。着物は所々破れて、手にも足にも擦過傷があつた。直ぐ奥の座敷へ寢さして、醫者を呼むで來たが、唯熱が高いと言ふことは分つても、何分意識が明瞭でない爲め、どうして斯う言ふ容體になつたのやら、何として傷を負ふ

たのやら、さつぱり分らなかつた。迎ひに行つた二人の番頭の話に依ると、渡月橋から大悲閣附近も捜査したが何の手懸りもないから、念の爲めに嵯峨警察署へ寄ると、人事不省の男が居た。見るとそれが清太郎であつたから、これはどうしたことかと聞くと、千鳥ケ淵の松林に倒れて居たもの、今此所へつれて來たのだと言ふ警察官の話であつた。當人に事情を尋ねて見たが、囈語を言ふばかりで、少しも要領を得ないから、伴でつれて歸へつたと言ふのであつた。看護婦を雇ふやら、更に醫者を呼び迎へるやら、家中はえらい騒ぎであつた。一週間もたつと漸く正氣になつたから、一體どうして斯う言ふことになつたのかと尋ねると、

『私が悪かつたのです、ア、恐しかつた』

こうしたことを繰り返へすばかりで、ほかのことは何事も語らない。何か事情がなければこう言ふことになる譯がないから、段々と問ひ詰めると、清太郎はきまりのわる相な風をして、奇怪な話をした。座禪石へ行く途中で方角を取り違がへ、池の傍の草庵の前へ出たから、路を尋ねると、若い美しい尼が夜路では分るまいと言ふた。闇夜ではあり、雨は降つて來たので、無理に其の尼寺へ泊めて貰ふた。春の夜長を二人で話をして居ると、尼は東京の者で、上流の家庭に育つたのだが、不具の身を悲觀して、尼となつて人目のつかぬ嵯峨野の奥へ隱れたのだと言ふ物語をした。尼の清い姿が神々しい程美しいのと、何となく引きつけられる様な哀れな話に、尼の身がいとしくなつて、心から佛門に歸依して居る様子でもなかつたから、還俗して人の妻になることを勸めると、自分もさう言ふ心持ちがないではないが、容易ならぬ不具者であるから、人交りは出來ないと悲しさうな話をするのであつた。頭を丸めて、衲衣を着けて居てさへこの美しさであるから、髮を結はして流行の着物を着せたら、どんなに綺麗であらうと思ふと、獨身の清太郎は身内の血が沸くのを押へることが出來なかつた。かず〳〵の同情ある言葉をかけて居る中に、自分の妻として世の中へ救ひ出さうと言ふ様なことも語つた。最初の中は承知しさうにもなかつたが、清太郎の熱心に動かされて、尼も不言のうちに清太郎の眞心を受け入れるべき意思を表明した。春の夜は更けて、甘い戀の雰圍氣が山中の尼寺に漂ふて居た。明け方に清太郎がふと眼を覺ますと、美しい尼の寢姿が艶めかしかつた、白い雪の様な腕が玉の肌と共にあらはに見えた。と、肩から曲線美を發揮した兩腕の下に、腰のあたり、丁度腰衲衣で隱れて居た腰骨の所から、白い、然しながら發育不充分な、細い腕が二本兩方にだらりとさがつて居た。清太郎の耳には早鐘の音がして、水を浴

びた樣に全身の寒さを感じた、歯の根が合はなくなつて、足も顫へて立てなかつたのを、四ッ辻になつて、勝手口から外へ出たまでは覺えて居るが、それから後は夢中だと言ふのであつた。こうした清太郎の話を聞くと、囈語を續けて居るとも思はれないので、果してそれが事實であつたとしたならば、狐狸の惡戯か變化の仕業か、孰れにしても正體を見定めて置かねばならぬと、いやがる清太郎を無理に引き立てゝ、嵯峨野の奥を捜し廻ると、目じるしの池の邊へ來た。見るとさゝやかな庵室がある。清太郎は立つたまゝ動かなかつた。清兵衞、善七、勘七、友七の一行と、視察の爲めについて來た嵯峨警察署の巡査とが庵室へ入ると、其所には尼の姿が見えなかつた。清太郎も共々その邊を捜すと、鍋釜茶碗なぞの臺所道具はあるが、居間には何物も置いてなかつた。裏口へ出ると、黑いものがある。それは物を燒いた灰であつた。灰の中には白い着物や黑い衲衣の燃差しがあつた。傍に散つて居たちいさい物體は、百八の數を繋ぐ糸から離れた念珠の玉であつた。これを見た一行の顏の色は變つた。遠くに鶯が啼いた。

丸山の夜櫻

一

『都踊はヨーイヤサー』

美代鶴は皆と一緒に細い聲を出した。鉦と太鼓と鼓と三味線の賑かな囃につれて、踊子が左右の花道から繰つて出た。双方の踊子が舞臺の中央で合すると、手に持つて居る櫻の花笠で華かな踊りが始まる。左の端から三番目に踊つて居るのが美代鶴であつた。舞臺の背景が幾度も變つて、朱塗の橋のかゝつた、秋の高尾の舞臺面になると、紅葉の枝を持つた踊子が、互ひに縺れ合ふて踊る。硝子仕掛の瀧が强力な電氣を浴びると、目映ゆい程舞臺が明るくなつた。華かな囃につれて、綺麗な踊子は右と左の花道へ別れて入つた。美しい幻が消えて、夢から覺めた樣な見物人は、殘り惜しさうに座席を立つた。仲居のお春は東京から來て居るお客の袂を引いて、

『旦那はん、お美やんを呼むできますさかい、お茶室で待つてとくれやす』

あたふたと茶屋の方へ行つた。東京の客は、小奴と小照の二人の舞子に兩手を引かれて、二階の茶室へ入ると、黑の衣裝に白襟をかけて、緋縮緬の裏を返へしてなまめかしい、福三桝の駒鶴が、袱紗捌きもあざやかに、裏千家の御手前最中であつた。新來の三人が右の端の椅子に腰を下すと、串團子の模樣の書いた土器に蒸菓子を入れたのを、友禪の振袖を着た舞子が持

つて來て、黑塗の卓子の上に置くと、今一人の舞子が、赤い潮瀬の袱紗に薄茶々碗を載せて持つて來る。皆しかつめらしい顏して、三口半に飮むで居た。東京の客の肩のあたりを、輕く突く者がある、振り向いで見ると、紅白の丈長をかけて、赤い鹿子や花簪で飾り立てた踊子髷をそのまゝ、着物だけを部屋着に着替へた美代鶴が莞爾り笑ふて居た。お春にせきたてられて表へ出ると、都踊の果てゞ、花見小路は歩けない程の人通りであつた。人に押されながら祇園町の通りへ出た。右の方を向くと、强烈なアーク燈に照らされた八阪神社の赤い樓門が正面に見えた。

『まだ早いさかい、公園へお廻りやはんか』

肩を並べて歩いて居た美代鶴は、東京の客に寄り添ふて、下から斜に、男の顏を覗いた。

『明日東京へお歸りやすなら、もう一ぺん夜櫻を見とう置きやす』

傍からお春も勸める、男は無語で東の方へ足を向けた。樓門の石段下は、下りて來る人と、これから上る人とで、步けない程の混雜であつたから、左に折れて、公園の方へ出るとしたれ櫻のあたりは、電燈と、篝と雪洞とで、晝の樣にあかるかつた。綺麗に着飾つた町の娘の一むれが、手を引き合ふて行く後から、濃化粧に玉蟲色の口紅さした、京人形の樣な舞子の五人連れが、肩をひつけて步いて行く、垂れ櫻の枝に吊した雪洞の火が、花の樣な若い女性に淡い光線を投げて、雪の領脚に花簪が散つたりした。頭に手拭を載せた男が二人、三味線を抱へて、新内の流しをひいて通る、よぼ〲した老爺が、瓢簞山の辻占を賣つて步く。白い脚半に白い手甲をつけた、若い小原女を呼び止めて、堅い駄菓子を買ふて居る學生があつた。赤い塗物の箱を二つ並べて、大きな釜を其の上に載せた甘酒屋の前に、丁稚の一團が手々に湯呑を持つて、熱い甘酒を飮むで居ると、其の傍のベンチの上へ竹の皮をひろげて、印半纏を着た男が手酌で酒を飮むで居た。茶店の床机はどこもかも酒盛最中で、なかには立つて踊つて居る者もあつた。東京の客は、美代鶴とお春と小照と小奴とをつれて、垂れ櫻の下まで來ると、三十位の女が可愛い赤ん坊を抱いて花を眺めて居た。美代鶴はそれを見ると、女の傍へ駈け出して、抱いて居る嬰兒を奪ひ取らうとすると、女は驚いて逃げる、美代鶴は追ひかける、

「お美やん……」

お春は美代鶴の袂を捉へて止めた。

「はなして、彼ちやんを取り戾さんならん」

美代鶴は袂を振り離さうと踠いた。

『ちがふ、粂ちやんやない』

『お美やんそれがあんたの病氣やないか』

小照と小奴が、左右から美代鶴の軀を抱いた。花見客がこの美しい椿事を取り卷いて、珍らしさうに眺めて居た。お春は極りが惡くなつて、美代鶴の手を執り、無理に茶店へつれて入つたが、表の床机では人が見るから、番傘を丸窓の障子にした風雅な離れ座敷へあがつた。美代鶴は袖を顔に當てゝ、さめ〲と泣いた。

二

東京の客は、何が何だかさつぱり譯が分らないので、不思議さうに美代鶴の泣いて居る姿を眺めて居ると、

『すまんこと。これがお美やんの病氣どす、考へると、ほんまに氣の毒でなりまへん』

お春は美代鶴の哀れな運命を語るのであつた。美代鶴の父親は、山本彌兵衛と言ふ古道具家で、貧しい暮をして居た。女の子が小學校を卒業すると、女學校へあげるか、さもなければ、行儀見習の爲めに、女中奉公さすのが京の習はせであつたから、美代鶴がお鶴と言ふて居た娘時代は、西陣の織屋で名高い榊原の小間使であつた。榊原の次男の貞之助は京都大學の寄宿舍に居たが、土曜日から月曜日の朝まで、毎週二晩づゝ家へ寢に歸るので、いつとはなしにお鶴と甘い戀を語る仲となつた。母親は二人の關係をうす〲知つては居たが、お鶴が十七の娘には似合はない、何事にもよく氣がついて、利發な女であつたから、好き合ふた仲なら夫婦にしてもよいと言ふ考があつたので、見て見ぬふりをして居た。父親は商賣一方で、家庭のことなぞは無頓着で、貞之助なぞは殆ど眼中に置いて居なかつたから、二人はまるで默許されたかの樣に、一週二日の逢瀨を待ち兼ねて青春の悅樂を恣にして居た。こうした毎も春の樣な生活を續けて行くうちに、一問題が起つた。それはお鶴の肉體に異狀の起つたことを發見したのであつた。初の中は食物の趣味が變つたのと、時々嘔氣を催すだけであつたが、その中誰の眼にも姙娠と言ふことが分るやうになると、兩親の手前だまつて居る譯に行かぬ。この問題の解決はどうしても親の手を借りるより外に手段がないから、自分等の口から親に言はねばならぬ羽目になつた。けれどもどう言ふ風に言へばよいか、こう一た問題を處理した經驗のない二人は、發表の方法に就いて煩悶して居る中に、とう〲母親の方から切り出された。今は包み隱す譯にも行かないから、妊娠の事實を告白すると、母親の顏には當惑の色が見えたが、それでもこゞとは言はなかつた。身分が違ふと言ふので、反對する者もあつたが、ものゝ分つた母親のはから

ひで、二人は夫婦となるべき幸福な運命の下にお鶴は安々と女の子を生むで、お粂と名をつけた。それから間もなく二人の頭上に悲しむべき事件が落ちて來た。お鶴の父親の彌兵衛が、贓物故買で入監したことは、前途ある二人の幸福を根柢から破壊し去つた。彌兵衛の主人に當る竹内藤助と言ふ道具屋は、京都で一流の道具屋であつたが、當主の藤助の代になつてから身代が曲つて、三年前にとう〳〵破産した。その後は生活にも困る身の上となつたので、彌兵衛としては出來るだけの補助もしてゐたが、彌兵衛の家も貧乏で、主家を助けて行く力がなかつたから、竹内家は見る蔭もない不見目な零落をした。金になり相な物は皆賣り盡して、今は賣るべき何物もなかつた。折りも折りとて妻のお常が肋膜を病むで、醫者にかゝらねばならぬことになつたが、米を買ふ金にも困つて居たので、藤助は思案にくれて居た。苦しまぎれに思ひ出したのは、從兄の谷田佐助へ五十圓の抵當に預けて置いた田能村竹田翁の軸物のことである。どんなに捨て賣りにしても三百圓のものはあるから、これを賣れば五十圓を返へしたところで尚ほ二百五十圓は殘る。こう思ふと、矢も盾もたまらなくなつて、谷田に譯を話して、軸物を借らうとしたが、谷田は承知しなかつた。約束の期限が來ても受け出しに來ないから、所有權は俺にうつつて居る、三百圓が五百圓だつて賣るものでないと、けんもほろゝの挨拶であつた。これには藤助も憤慨せずには居られなかつた。返濟期限のきれたことは事實であるが、他人でない親戚の間柄であるから、借りた金さへ返へせば品物は返へしてくれてもよかり相なものだと谷田を怨むで居た。軸物のことがどうしても諦められぬので、も一度頼むで見やうと谷田の家へ行くと、佐助は不在であつた。通された座敷で待つて居ると、床の間に細長い箱のあるのは見覺のある軸物の箱であつた。蓋を取つて見ると中に竹田翁の軸物があつた。思はず後を向いたが誰も居なかつた。暫らく考へて居た藤助は、突如件の軸物を箱より取り出して懐中から袂へ斜めに入れた。蓋を元の通りにして暇を告げて出た。その足で直ぐ彌兵衛の所へやつて來て、事情を話して軸物の賣却方を頼むだ。彌兵衛は買つた差金で舊主が助かつて、その金の中かな借りた金を返へせば谷田にも損害のないことだから、その軸物を賣ると言ふことが惡事であると言ふ様な意識は全然なかつた。それが贓物故買と言ふ罪になつて監獄へぶち込まれたのであるから、不滿と不平の餘り獄則を破ることが屢々あつたので、光線の入らない暗室へ入れられることが度々あつた。それが爲めであらう。六ケ月の刑期をすまして出獄した時は、烈しい眼病に罹つて、手當が行き屆かなかつたのでとう〳〵盲にな

つた。こうした父の不幸はお鶴の身にも變化を及ぼした。折角貞之助と夫婦になれる樣になつて、子まで出來た仲を親が前科者になつたと言ふ理由で、緣談は遂に破談になつたばかりでなく、さう言ふ所へ榊原の血筋をやつて置く譯に行かぬと、生れた子供を引取らうと言ふ話まで持ち込むで來た。けれどもお鶴は承知しなかつた。自分の親がこう言ふ身の上となつたのであるから、貞之助との緣談は諦めたが、切めてこの子だけは自分の手で育てたいと言ふて居た。その時、お鶴の一家は殆ど餓死する樣な狀態にあつて、子供を渡せばやらうと言ふ百圓の金を斷るに忍びなかつた。兩親に泣きの涙で說きつけられた擧句、お鶴は命にも換へ難い愛兒を、百圓の金の爲めに奪はれることになつた。それは丁度櫻の花の散る頃であつた。それ以來、今年で三年、花見時分に嬰兒を見ると、氣が狂ひ出すのが病になつて居た。

三

今日も、花見で賑かな丸山公園で、可愛い嬰兒を抱いて居る女を見たので、毎の病氣が起つたのだと言ふことを聞いて、東京の客はいぢらしい美代鶴の狂態を見るに忍びなかつた。

『こう言ふ時に、子供さへ抱かしてあげると、直ぐ氣が落ちつくのどすけれど、知らんお方にそんなこと頼まれまへんさかい。しよがおへん。』

お春は吐息をついた。その時、

『ホギアー』

赤ん坊の泣き聲がした。

『筱ちやんが居る……』

美代鶴は立ちあがらうとした、小照と小奴が兩方から止めた。

『赤ん坊が居るじやないか』

『此所のうちのどすやろか』

『さうかも知れん』

『そやつたら、借りて來まへう』

お春と東京の客との間に、こうした會話が取り交はされて、お春は襖を開けて出て行つた。

『返へして、返へして、筱ちやんを返へして……』

美代鶴は小照と小奴の手を振り離さうと踠いて居た。そこへお春は可愛い赤ん坊を抱いて來て、美代鶴の前に立つた。

『あゝ居た、居た、筱ちやんが居た』

お春の手から赤ん坊を抱かして貰ふて、

『オゝよしく、筱ちやんかい、お前はどこへ行つてたんや、お母さんはお前に逢ひとうて逢ひとうて……』

美代鶴は嬰兒の頬に自分の頬を擦りつけて、はろく涙を零し

た。夜が更けて、花見客も大抵引揚げたと見え、外は靜かになつて居た。

『兼ちやんにお花を見せてあげよう』

踊子の髷のまゝ、派手な部屋着を着た美しい美代鶴は、生れて間のない愛くるしい嬰兒を抱いて、今を盛りと咲き亂れたる垂れ櫻の下に立つた。

『ねん〳〵、ねん〳〵、ねんねしよう、
　坊やのお守は何所へいた、
あの山越えて里へいた、
　里のみやげに何貰ふた、
でん〳〵太皷に簫の笛
　起上り小法師に犬張子』

哀れな聲で美代鶴が歌ふ小守唄が、花見客の去つた公園の靜寂を破つて、抱かれた嬰兒はすや〳〵と眠つて居た。知恩院の釣鐘堂で撞く午前一時の鐘が、丸山一帶に響き亘ると、風もないのに櫻の花がチラ〳〵と散つて來た。

春興五題

田中貢太郎

積つた上に積つて根雪になつてゐた雪が、數日來の雨に解けかけて、黒い醜い土の肌を露はしたかと思ふと、もう、枯草の下や石の間から青い色が見え出す。そして、鋼鐵のやうに張りきつてゐた空は、何時の間にか緩んで、魚の眼のやうな潤みを見せて、風が柔かになつて來る。

山の手の谷間に住んでゐる私は、ある日、家の近くの寺の石垣の下で、印半纏の男が蹲んで石の面から何か取つてゐるのを見た。覗いて見ると、これは青みかけた苔を剝いでゐる所である。寺の門を見ると、門口の石地藏に芽を吐いた猫柳の枝と赤い實のなつた南天の枝とが供へてある。

『もう、いよいよ春だな。』と思ふ。

郊外へ散歩に行つて見ると、何時も見かける稲荷の小さな祠に、二三本の幟が立つて、とん、とんと大皷を打つてゐるのが見える。その祠には木瓜の樹があつて、枝には蕾が脹らんでゐ

る。

梅の花が白く眼に著き出す。ある寺の墓地には、椿の花が咲いてゐる。花屋が室咲の桃の枝を持つて來るやうになると、直ぐ角の酒屋に白酒の立看板が出て、家々に雛壇がしつらへられる。

その時分、家の前の泥溝を覗くと、黄ろい疣だらけの蟇が、白い牛乳のやうな水の中を連立つて泳いでゐる。

こらへ性の無いやうな雨が、ぼたぼたと物の潰れるやうに降り出す。崖の下になつた二階家のガラス戸越しに見ると、崖の枯薄の根本に、あぎた蕗の薹が定紋のやうに見える。その崖には小松が其所此所に植つてゐる。崖の上の寄宿舎の婦が、崖へおりて來て蕗の薹や嫁菜を摘んでゐる時がある。木の芽が萌え、草が簇々と茂つて行く。

やがて、櫻の花が一時にぱつと咲いて、爛熟の春が來る。

併し、その期間は僅の間で、凄い顔をした風が吹き、黒い手の雨がやつて來て、この花を片つぱしから散らして行く。

その内に、ある日、空がからりと晴れると、悩ましい陽の光が見える。ある脳病院の横手の坂をおりて行くと、病院の内から御詠歌を歌つてゐる狂女の聲が聞えて來る。散り殘りの櫻の花びらは、はらはらと頭の上に落ちて來る。

雨と風とは、しつこくやつて來る。そして、今度天氣になつて見ると、新緑が眼に立つて、春はもう白丁化した蒲公英の花に乗つて飛ばうとしてゐる。

この周章しい季節の移り變りの間にあつて、人々は其所に常住の姿を見出すかして、春興に餘念がないと云ふのも、太平の民なればこそであらう。

凧揚げ

數ある春興の中でも、凧揚げは遣羽子の遊びと共に、その魁をするのである。凧は、もと、烏賊の形にこしらへて數條の脚をつけてあつたので、いかとか、いかのぼりとか云はれてゐる。今は蛸の形、鳶の形、奴の形にしたものや、その他種々の形をした物がある。凧と云ふ文字は、風巾の合字であると言海には云つてある。凧の文字は普通に紙鳶と書き、風箏と書く。この凧には方言が多い。九州のある地方では、龍、旗。奥州では、天旗。信越地方では、鷹と云ふ所があるらしい。

今年の正月四日は、すこしの風はあつたが、天が麗に晴れて、やがて來る春を思はすやうな日であつた。私は五六人の句友と一所に向島を散歩して、綾瀬と荒川との落合になつた三角洲から渡船に乗つた。氣をつけて見ると、その船は、灰色の帯を吐たばかりの小さな柳の樹に繋いであつた。

川の向ふは汐入村であつた。畑には冬大根や種々の菜の葉が顫へてゐた。生垣に圍まれた人家はその間を點綴してゐた。人家の庭前には、胡粉にする石灰を簀子の上に晒らしてある所があつた。此村の少年は、その人家の前の日當の好い所で凧を揚げて、畑の中も構はずに走つてゐた。鳶の形をした黒く塗つた凧が、きりきりと空舞をしながら私の鼻先を掠めて畑の中に落ちた。南千住の小さな停車場のある所へ行つてみると、汽車の線路に沿ふた、向ふに赤煉瓦の工場の見える廣つ場へ、五六十人の少年が集つて來て、燕などの群れ飛ぶやうに凧を揚げてゐた。空には赤い陽が燃えてゐた。高く揚つた凧は、ぶん、ぶんと云ふ呻吟を立ててゐた。私は、冬大根小さし子供等凧を揚ぐ——汽車去つて凧の呻吟の聞えけり——など云ふ囈日吟を口した。

凧は少年の玩具になつてゐるが、私の故郷では、壯年の者も之を揚げた。それは初めて男の子の生れた家があると、正月——陰曆——早々町内の若衆から、その祝ひとして酒を添へて凧を贈るので、その家では若衆をはじめ親類緣者を招き、朝から御馳走をしてそれを揚げて貰つた。せんか、けいちやう、かさがみ、など云ふ半紙を繼ぎ合はして造つた物で、皆四角の物であつた。角から角に太い竹の親骨を入れ、左右の肩には肩骨を入れ、それに横骨を弓のやうに張つて縛りつけた物で、疊の數にして四疊半から十疊位の物が普通であつた。その凧へは、夥しく買ひ入れた半紙を繼ぎ合はして四つ切にした物を、尻尾や横骨のあたりに一面に著けるので、凧は大きな孔雀が羽をひろげて飛んでゐるやうに見えた。その紙の尻尾は、凧をおろす度に取らする事になつてゐるので、村の人は枝のある長い竹竿を持つて取りに來た。

はつ凧、初めての男の子の生れた祝ひの凧と云ふ所から、それを初凧と云つた。酒に顏をほてらした若衆は、黄色か赤かの手拭を冠つてゐた。中には艶かしい娘の長繻絆を借りて着、顏に白粉をつけてゐる者もあつた。その若衆は、細引のやうな凧の糸を握つたり、紙の尻尾を入れた哄籠のやうな籠を脊負つたりして、村の通りと云はず畑の中と云はず、所構はず夢中になつて飛び歩いて、麥作をしてゐる人々の眼を睜らさした。

この凧揚げも、青年會とか風俗改良會とか云ふやうな物が出來た爲めに、殆んどやらなくなつたが、私が少年期の終る頃までは細民でない限りは必らずやつたものだ。日數はその家の都合で、一日だけの所もあれば、五日も十日もやる所もあつた。意固地になつた富家では、一ケ月も續けてやつて野良仕事の忙しい若衆を苦しめたと云ふやうな事もあつた。併し、それでも相當の資産のある者で、若衆からの凧を受けないとなると、乾

と一悶著が持ちあがつた。

私の村と狹い入江の潮を距てた隣村に、一軒の雜貨店があつた。其所は雜貨店と云ふものの、傍ら質屋のやうな事をやつて、村の人から質物を預つて金を貸してゐたから、平生から評判が好くなかつた。その雜貨店に初めて男の子が生まれた。土地の若衆は、今度こそ、うんと飲んで、うんと金を使はしてやれと云ふやうな氣で、其所へ凧を持ち込んだ。すると雜貨店では費用を惜んで受けなかつた。若衆の方では無理からでも受けさせやうとしたが、どうしても承知しない。で、若衆は當てつけに、別に眞白な凧をこしらへて、それを揚げ、そしてわざと海の中へ落して破つた上で、その骨を棺箱に入れ、一行でそれを擔いで、雜貨店の周圍をぐるぐると廻はり歩いた。

この日、母に隨ひて隣村の親類へ行つてゐた私は、奇怪なその行列に行き逢つた。葬式の行列にまがはした五六十人ばかりの行列は、棺箱を中にして動いてゐた。前の方に白張の提灯を持つた者や、旗を持つた者やがゐた。又線香を薰らしてゐる者もあつた。棺箱の直ぐ後には、頭をくるくるに剃つて僧になつた者が、古い袈裟をつけて三人ばかり歩いてゐた。その內の一人の横鬢の所に禿のあつたのが、今に私の印象に殘つてゐる。一行の多くは忌中笠を冠つてゐたが、それが皆口々に南無阿彌陀佛を唱へてゐた。その聲の絕間を鐃鈸の音が縫ふて響いた。

夜になつて雜貨店は、石の雨をあびて、半破壞な眼に逢はされた。一家の者は恐れて、翌日入江の西にある村へと逃げて行つたが、とうとう其所へ家を移してしまつた。

凧揚げは、又、初凧ばかりでなしに、各種の祝賀會の時にも催した。私の記憶に存してゐる物では、私の國から出てゐる有力な政黨の總理が歸國した時や、日露戰爭の休戰になつた時などであつた。

歌垣

社の拜殿の前から鳥井の方へかけては、所々に篝火が燃えてゐるので、その邊は白晝のやうに明るかつたが、その光を背ににへだてた森蔭では、高い所に星の光が覗いてゐるのみで四邊は暗かつた。その暗い中で、眞中を二坪か三坪ぐらゐ開けて、周圍に澤山の顏が並んでゐた。その澤山の顏は、眞中で問答をしてゐる若い男と女との聲に耳を傾けて、どつちが『口上』に勝つだらうかと、非常な好奇心を持つて靜まつてゐた。

男の方の言葉は澁つて來たが、女の方の言葉は、依然として威勢が好かつた。と、男の方の言葉がふつつりと切れて、その邊がさわめいた。それは男の方が逃げたのであつた。聞いてゐ

る者は笑ひ出した。

と、又、違つた若い男の聲がしはじめた。

『申し申しお姫さま、私事は川瀑七十五里も流れ至る、吉野川中ほどの北地、寺内は六百八十五番地に、獅子猿同樣の住居を致しまする、太郎左衛門の總領子、へけぺけのまいかわと申しまするは、私の事でございます。申し申し綺麗なお姫さまは、何處のいづこの何方さまのお姫さまでございますか、包み隱しなく綺麗薩張りとお名乘り下さいますやう、』

すると、初めの若い女の聲で答へ出した。

『申し申し私の事でございますか、勿體なくもお殿さまからのお言葉、有難うお答申しませう、恥しながら私事は、土佐國は香美の郡韮生郷は上野尻、一千三番地に住居致しまする、助兵衛の娘にて、おちよぼと申しまするは、私の事でござります。さうさう長々しいおん物語、私の肩にお手打ちかけて、何御用仔細あつての事でござりませう、早早御用件承はりたう存じます。』

『今日は七月六日、昔より寺内の柴折藥師とさへ名づけられましたる御緣日、私も先刻より和女へ心あつてこそ、あまり恐れ多いと思ひながら、思を重ね重ね相懸けましたる次第、何んとか私の心一つをお察し給はれ、すぐさまとは申しません、何時なりとも御都合好き日を指し定められまして、和女のお暇間へお誘ひ下さいますやう。お願ひ申します。』

『それはそれは、この不束な私に、それ程の御用件仰せつけられまして、誠に有難うは存じますれども、私は人の家に奉公の身の上、主人に非常に制統致されまして、思ふにまかせません體、どうか惡からず御勘辨を願ひ挙ります。その内都合好き日がきまりましたる時には、きつと手紙で御知らせ申しませう。』

かうした問答が續いた結局、女の方が云ひ負かされると、己の體を相手の男の自由にまかせたのであつた。これは土佐國長岡郡西豐永村の内の寺内と云ふ所にある藥師の緣日の夜に行はれた風俗であつた。同地は吉野川の峽谷に臨んだ所で、土佐から阿波に通じた國道から七八町の山上にあつた。昨年私は桂月翁と共にその藥師を拜觀した。それは峽谷の畑に麥が黃熟してゐる頃であつた。日本三藥師の一として聞えたもので、本尊の木像は國寶となつてゐた。その藥師の森蔭には、土地の小學校があつて、私の友人の岡本丞君が校長をしてゐた。右に引用した問答の文句は、同君が私の爲めに古老から聞いて知らしてくれたものであつた。その風俗の行はれたのは、維新以前までの事で、男女が問答する場所には、周圍に立樹の枝を折つて差してあつたから、俗に柴折藥師と云ばれてゐるとの事である。岡本君はその手紙の端に、男女の問答に、『うすゆき』と『大和言

葉』の二種があると書いてあつたが、右の文句がそのいづれに屬するかは書いてなかつた。

この風俗は昔の歌垣の名殘である。これは嘗て私が書いた物の中にも云つて置いた事だが、この歌垣こそ、古代人の性的要求から、風の暖な春の山野に群衆して、行樂した群婚の遺風であらう。我が國でこの歌垣の跡として遺つてゐるのが、常陸の筑波山と攝津の歌垣山とである。筑波山の方は、萬葉集の中に、筑波嶺に登りて嬥歌會を爲せる日に作る歌と云ふのがある。鷲の住む筑波の山のもはきつの、その津の上に、いざなひて、をとめをとこの往きつどひ、かがふ嬥歌會に、ひと妻に、吾も交らむ、吾が妻に、ひともこと問へ、この山を、うしはく神の、はじめより、いさめすわざぞ、今日のみは、目串もなみそ、事も咎めなし。嬥歌會は東國の歌垣である。その名殘と云ふではないが、麗な春の日には、山の遊女がしどけない細帶姿で、筑波神社の祠前で摘草をする。歌垣山の方は、攝津風土記に、雄伴郡波比具利岡、此岡西に歌垣山あり、昔、男女此山に集ひ登りて、常に歌垣を爲す、因て以て名と爲すと書いてある。歴史に記載された物では、日本書紀に小泊瀨稚鷦鷯天皇即ち武烈天皇が太子の時、物部麁鹿火大連の女影媛と海柘榴市の巷の歌場の衆で逢つたと云ふのがある。書紀の注に、歌場を字多我岐としてある。思ふに各地の暗がり祭や、盆踊の類も、皆同性質の物であらう。

併し、盆踊であれ、柴折藥師であれ、陰暦の秋季に屬してゐて、春季には關係がないので、ちよとおかしく思はれるが、それは單に季節に係はらずその風俗を模したと云ふだけの事であつて、おもの歌垣の春季に於ける行樂であつたのは疑のない事實である。それは、奈良朝時代になつて、朝廷でその狀を模して創めたと云ふ歌垣をみても分る。續日本紀の記す所によると、天平六年二月癸巳の朔、聖武天皇は朱雀門に出御し、歌垣を御覽になり、都中の士女にも縱覽さしたが、その時歌垣にあづかつた男女は二百四十餘人で、五品以上の風流有る者が皆交雜してゐたとしてある。又、同書に、寶龜元年三月、天子の車駕が由義宮に行幸すると、葛井、船、津、文、武生、藏、六氏の男女二百三十人が歌垣を供奉したが、その服は皆青摺細布の衣を著け、紅の長紐を垂れてゐた。そして、男女相並んで、行を分つて徐に進みながら、『乙女らに男立ち添ひふみならす西の都はよろづ世の宮』と歌ひ、それから歌垣になると、『ふちもせも淸くさやけしはかたがは千歳を待ちてすめるかはかも』などと云ふやうな歌を歌つた。そして、一歌ごとに曲折し、袂を擧げて節をなす、と云つてある所をみると、盆踊のやうな踊をなした

やうに思はれる。

朝廷の歌垣は、又民間にも模する者が出來て、風俗を害するやうになつたので、延暦十七年に禁止したと云ふやうな事もある。この歌垣に關聯して思ひ出さるゝのは踏歌の節會である。踏歌は正月の十四日と十六日との兩夜に行はれたもので、河海抄には、聖武天皇天平元年正月十四日、始めて男踏歌あり、同十四年、正月十六日、天皇大安殿に御し群臣を宴し、酒酣にして五節の田舞を奏し、畢りて、少年童女をして踏歌せしむ、是れ濫觴なりとあり、詞林拾葉集には、花鳥云ふ、正月十六日の節會をば、女踏歌と云ひ、舞姫すゝみ舞ふ也。男踏歌は十四日に有る也、殿上地下の四位以下の輩、然るべき所々をめぐりて、催馬樂を歌ひ舞ひかなづる事あり、これは上古、正月十四五日の比、京中の遊士月に乘じて、あなたこなたへめぐりて、歌ひたまひしより、事起れり、末の世に、千秋萬歳といひて、逸興を催す事あるは、それらの餘風也とある。この踏歌は、唐の風俗を模倣したものだと云はれてゐるが、直接の模倣は、唐からにもせよ、五雜俎であつたか、何であつたか、ちよと本の名を忘れたが、支那の風俗を書いた物で、支那の南方では春日男女が山野に出て、唱和して相戯れると云ふやうな事がある所を見ると、その唐の風俗も、矢張り人類史の過程となつてゐる群婚の遺風から來てゐるらしく思はれるから、私はこれも歌垣の同類の物とする。

花見

杉田觀梅遠足

一、三月九日（日曜）午前九時品川驛集合

二、院電（二十二錢）にて神奈川驛着

三、濱電（片路五錢往復九錢）にて八幡橋着

四、八幡橋より一里餘の海岸徒歩

五、辨當持參

六、會費十錢

七、雨天中止

右御同行如何に御座候哉

これは桂月翁の許から來た觀梅の通知である。この數年間、春とか秋とか、郊外の散策に好い時期を見て、桂月翁を中心にしてゐる遠足會の催しであつた。で、行く事にして、その朝になつてみると、宵から降り出した雨がびしよびしよと音をさして降つてゐる。そして、七時半頃になつて家を出る時刻になつても、やみさうにもないので、諦めて又蒲團の中にもぐり込んだが、今度起きてみると、二階のガラス戸に薄日がさしてゐる。もう時間も過ぎた事だし、無論中止になつたとは思つたが、そ

れでも何んだか氣が濟まない。十一時近くなつて桂月翁の所へ行つてみると、會は中止になつても、折角拵へてゐた所だから、家の者同士で行かうとしてゐると云つて、出かけの用意をしてゐた。で、私も隨いて行く事にした。

横濱に着いたのは一時過ぎであつた。八幡橋の終點から海岸に沿うて縣道を歩いた。梅時には珍らしい、ほかほかとする日であつた。干潮になつて黒い砂洲を露はしかけた海は、鉛色にとろりと凪いで、沖の方は霞んでゐたが、その霞は空の雨雲に連つて見えた。洲には汐干の人が出てゐた。その中に交つた若い女の帶は春らしい色彩を點じてゐた。道の右側には、切り崩して黄ろな肌を見せた岩山が、屏風を立てたやうに連つてゐた。その岩山の肌の見えてゐる邊は、左側にも枯草の生へた埋立地があつて、ぽつぽつ人家があり、中には二三軒の料理屋らしい家も見えたが、岩山が樹木の茂つた小山となつて、その麓に人家が軒を並べると共に、左側は直ぐ海となつて、稍灣曲した海岸線が一眼に見渡される。杉田はその見附になつた小さな岬の手前にあつた。

杉田に往來する自動車、人力車、自轉車の類が眼まぐるしく往き違つた。私達はそれをよけよけして歩いた。私は暖くて背が汗ばんだので、マントを脱いで手に持つてゐた。砂洲は沖へ沖へと干て、汐干の人はそれを追ふてゐた。洲の先には所々に海苔しびがあつた。しびに添うて船がかりしてゐる和船も見えた。海藻の匂が鼻に浸んだ。人家の垣根には梅が咲いてゐた。私はそれを句にしたいと思ひながら歩いた。

長い長い人家の列が、もう端にならうとした所で、自働車や人力車の道の上に置いてあるのが見えた。梅はその右側の人家の背後にあつた。私達はその前を行き過ぎて、人家のはづれから菜畑の間を通つて折れて行つた。畑の中にも人家の庭らしい所にも老木の梅が花をつけてゐた。其所には妙法寺と云ふ小さな寺があつた。寺の背後は直ぐ小山になつてゐた。丹塗の色のあせた古い寺門を入ると、左側に可成り大きな垂枝梅があつて、花の枝には澤山の短冊をつけてあつた。私は好奇心から、その一つ二つをめくつて見た。他にもそれを覗いてゐる者もあつた。拙い歌や句を下手な字で書いたものばかりだ。それには珠簾梅と云ふ木札が建ててあつた。左側の鐘樓に近い所に普通の白梅ではあるが枝ぶりの奇古な老木があつた。それには斜窓梅と云ふ木札があつた。斜窓梅の向ふの本堂に寄つた所には、野水梅と云ふ垂枝梅があつた。

私等はそれらの梅を一わたり見終ると、寺の横手から小山に登つて行つた。そして峯傳ひに行くと、直ぐ北はづれの眺望の

好い所へ出た。其所には二三段になつて掛茶屋を設けてあつたが、どの茶屋にも客が多かつた。私達は一番下の段にある茶屋へ休んだ。妙法寺は林の蔭になつて見えなかつたが、眼下の梅も、杉田の人家も、遠く砂洲の出た海も一眼に見渡された。海の果には、下總あたりの山が霞の奥から幽かに夢のやうな輪廓を見せてゐた。

　上の段では、若い男の騒ぐ聲がする。おりる時に見て置いた、十人ばかりゐた若い男女の群らしい。

『愚連隊が騒ぎますね、』と、私が云ふと、桂月夫人が笑つた。

『君は一本どうだね、』と、桂月翁が私の顔を見る。

『晝間はよしませう、』と私は云つた。桂月翁が禁酒してゐるから、一人では面白くない。南京豆をかじりながら生緩い茶を喫んだ。

『おばさん……、ばあさん……ばばあツ……』と、愚連隊の一人が怒鳴る。

　茶を一杯づつ注いで行つたきりで、きゆすも持つて來ないので、催促しても直ぐは持つて來ない。

『三つしかないだらう、もニつ三つ仕入ないといけないよ、』と、何人かが惡口を云つて笑ふ。

　やつとお神さんがきゆすを持つて來て、茹鶏卵があると云つた。お神さんがあつちへ行つた後で、夫人は子息達に云つた。

『お前達は、鶏卵はどう、いるなら買つてあげますよ、』

『喫べたくない、』と、小さな子息が云つた。

『ぢや家へ歸つて茹でて、あげませうね、』と云つて、それから、『こゝぢや一つ十錢もとられるだらう、高いから、』と云ふ。あゝ、あれが桂月翁の所謂ゆる山の神の聲だな、と、感心する。

　そして、暫く休んで、山をおりて歸りかけたが、歸る路で、もと杉田の梅の中心地となつてゐた東漸寺と云ふのに廻つてみた。其所にはもう梅はなくなつて、境内に一株立つた巨大な杉の梢に、夕陽が佗しさうに射してゐた。

　杉田の梅は、東京に近いのと、山海の眺望に富むのとで、聞えてゐるが、木が古く、數が多くて、梅林として趣のあるのは、越ケ谷と吉野村の梅であらう。その他久地の梅、蒲田の梅屋敷の梅なども、東京附近では聞えてゐる。

　梅が散ると、桃になり、それから櫻になるが、花見と云へば櫻の花見の事となつてゐるやうに、櫻は都會人の血を湧き立たせる。それは梅見の時のやうに寒くない氣候のせひもある。東京附近で花見をする場所はと云ふと、上野公園、飛鳥山、向島、荒川土手、小金井などは、普通人の好く知つてゐる所で、この

他に新武藏野、千川、沓の堤、江戸川、三里塚があり、すこし遠く離れた所には、熊谷土手、常陸の櫻川などがある。

私も東京に住むこと十餘年、毎年其所此所の櫻を見て歩くが、その中で、何時でも面白いと思ふのは、小金井の櫻である。東京に一般ある櫻は、染井の植木屋が大島櫻に人工を加へて變形さしたと云ふ吉野櫻ばかりであるが、小金井のは皆山櫻の老木で、それが玉川上水を挾んで花のトンネルを作つてゐる。小金井橋と云ふのが其所の中心になつて、上下一里半の間に櫻がある。

小金井橋の袂には、柏屋と云ふ料理屋があつて、花時には客が一杯である。ある年、私等も其所の客となつて、花見をあてに集まつて來てゐる旅藝人を、片つ端から呼んだ。そして、一組に十錢の纏頭をやる事にしてあつたが、づるい藝人の中には、頰冠を變へたり、組を違へたりして二度も三度もやつ來る者があつた。

『その編笠は今來た奴だ、いけない、いけない。』と云つて叱ると、見露はされた者は、ひよつとこのやうな口元に、にやりと笑ひながら出て行つた。

『その姉さんも、今、來てゐたぜ。』と、同人の一人が笑ふと、背の高い、蒼い眼をした妓は、三味線の手をとめて、すごすごと出て行つた。

道別君と二人で、飛鳥山の花見に行つた事があつた。雨あがりの風の無い日で、花が灰色に見えてゐた。何處か山の手あたりの藝妓屋や待合あたりで催したらしい一團が來てゐて、その中の者が追つかけあひをしてゐた。道別君と私とは、涼み臺を借りて、その上で私の家から持つて行つたウヰスキーを飲んでゐた。涼み臺の傍を醉ぱらひが往來して、人の見さかひもなく冗談を云つて通つたが、私等の方へは何も云はないで行つた。

花の碑の方から五六人の勞働者がやつて來た所で、この背後から十五六人の同じやうな勞働者がそれを追つかけるやうに走つて來た。そして、大勢の勞働者の方の二三人は、柵にしてある青竹を拔いて來て、前の勞働者に打つてかゝつた。打たれた勞働者の一人は、泥濘つた土の上に倒れた。道別君はこれを見ると、いきなり飛びおりて行つて、竹を持つた勞働者の二人の手を兩手に摑んで、例の調子で怒鳴りつけた。

『こらッ、何をするッ、馬鹿ッ、』

二人の勞働者は、じつと天神髯の生へた道別君の顏を見た後に、『どうもすみません、』と云つて、ちよと頭を下げた。

『よし、ちや、馬鹿な事をするなッ、』と、道別君は二人の手にした竹を持つて歸つて來た。

勞働者の群は、道別君の方を見い見い左右に別れて行つた。

二人は又ウヰスキーを飲んだ。そして、氣が付いて見ると、花見の群集は、二人の涼み臺の周圍から遠のいて、鬼ごつこをしてゐた若い藝妓も、廻はり道をして走るやうになつてゐた。

『あなたが、くだらん事をするから、こんな事になりましたよ。』と云つて、私は笑つた。

汐干狩

汐干狩は花見に次いでの春の行樂の一つで、その期間は四月三日の大潮を中にして、三四五の三ケ月にかけて行はれる。そして、その獲物には、蛤がある、淺蜊がある、横貝がある、汐吹がある、馬手がある、蜆がある。外洋に面した波の荒い磯には、蠑螺、いしもち、たま、しりだかなどがあり、又、鹿菜、こぶのり、かまど、とこぶしなど云ふ海草の類がある。磯に出て、それ等の貝や海草を獲つてゐる男女の、岩から岩を傳ふて行く姿を眺めてゐると、片手に覗桶を持ち、片手にヤスを持つた、赤銅色をした裸體の漁師が、ひよつこりと岩の蔭から出て來て、足もとの海の中を一心になつて覗き出すなど、畫のやうな光景を描點する事がある。

私の故郷は、港入江の一方の緣になつた所で、野中兼山と云ふ男が、江戸から歸りがけに蛤を買つて來て種にしたので、それ以後は蛤がゐるやうになつたと、小學校の教科書の中にまで書かれた土地だが、その實、蛤などは藥にしたくも無い。藥と云へば、時たま怪我をして醫者から貰つて來た膏藥の入れてある白い貝殼を、それが蛤の殼だと云はれて、はじめて蛤とは、こんな物かと知る位の所だが、その入江に面した方の磯には、淺蜊、横貝、蠣などが獲れるので、汐干には可成りの人出がある。丁度その時分村では桃が咲くので、汐干と桃をかねて、入江の北の市から、屋根船へ三味線を積んだ遊客が來るので、海岸は非常に賑ふ。

東京の汐干は、大傳馬や荷足船を仕立てて品川沖へ押し出す事になつてゐるが、その多くは船に酒を積み、旗を立て、幕を張り、提灯を釣るし、それに太鼓や三味線の鳴物を配して、汐干狩と云ふよりは、寧ろ船遊と云ふ風で出かけて行つて、海を見ずに歸つて來る。其所に都會人らしい趣もあれば、又、賢明なやり方でもある。一體品川沖あたりで、本氣になつて汐干をやらうとした所で、さう蛤のあらう筈がない。若し、あるにした所で、そんな手近な所を商賣人が手をつけずにそのまゝにして置くと云ふ事はない。汐干に行つて、たまに女子供に拾はれるのは、あれは船宿が客を呼ぶ爲めに蒔いてある物で、本當にある物と云へば、猿梻か小さな淺蜊ぐらゐの物だ。

一昨年の春、私も桂月翁の催した汐干狩に招かれて、柳橋から傳馬に乗り込んで大川口を出て行つた。汐霧に曇つた海の上には、紫の旗を立て、幕を張つた汐干船が、華かに浮んでゐたが、その中で何の色彩もない、私等の船は、老人の顔のやうに見えた。

暖な陽が出て、船も砂の上に膠着をしたので、私も酒を中止して潮の中へと入つた。汐はふくら脛までしかなかつた。同船してゐた婦人や子供は、遠くの方へと散ばつてゐた。私は小さな鍬を手にして底の砂を掻きながら歩いた。たまたま猿棒などが鍬の先に當つた。左の足の下に何か柔らかな物を踏みつけた。で、そつと手をやつて摑へて見ると、それは小さな鰈であつた。

『あげやうか、』

小學校へ入つたばかりの友人の子供にやると、彼はそれを手に入れて汐水を蹴ちらしながら、本船の方へと走つて行つた。

海苔しびが畑のやうに其所にも此所にもあつた。汐はたちまち落ちて、もう足の甲を浸すぐらひしかなかつた。私は興味が無くなると、本船へ歸つて行つた。船の中には、海を忘れてゐる酒徒が何か云つて面白さうに笑つてゐた。

野遊び

春の郊外散策は、花見や汐干狩と違つた、一種おちついた趣のあるものである。支那あたりでも昔は踏青と云つて、春日野外に出て、緑草を踏んで行樂する事が、年中行事の一つとなつてゐた。一年中鐵と石との街衢に立つて、塵と煙とを吸うてゐる都會人は、實際的にも郊外散策の必要がある。そして、散策の方法は、同族を同伴して摘草に行くのも好い。近郊の神社佛閣に參詣するのも好い。又、自分一人になつて、足を任せて歩くも好い。若しその時、路が分らなくなれば、獨歩の云つたやうに、自分の持つてゐる杖を立てゝみて、その杖の倒れた方へ方へと行けば好い。武蔵野の一團の自然は、あなた方の散策を心から待つてゐる。

私等の遠足會も好くこの時分に催される。ある時、品川の電車の終點に集合して、穴守稲荷へ行つた事があつた。その時は森ケ崎の方へ行つて、其所から渡船に乘つたが、滿潮の海は靜かで、碧い潮の水に澤川の海苔が流れてゐる。私はそれを木の枝にすくひ取つて持つて行つたが、稲荷の背後の方の茶屋で晝飯を喫ひかけた時、その海苔の事を思ひ出して、それに醤油をかけて一行の前に出したりした。

この三月の初めには、三四人で向島の方を歩いて、百花園に入つてみた。入口にある一株の梅の樹にちよと花が見えてゐた

のと、池の近く臘梅のやうな樹に咲いた黄ろな花との他には、春らしい氣持を起される物はなかつた。私達の心は直ぐ樂燒の方に行つた。茶店と一所にやつてゐる樂燒の前の腰掛には、二人の先客があつて、二人とも店に備へつけの手本の繪本を見ながら、茶飲み茶碗に畫を書いてゐた。傍には樂燒用の繪具や繪筆を散らかしてあつた。店の口では樂燒の職人が、土の竈の眞赤になるやうに火をおこして、客の書いたものを燒きつけてゐた。私は店の中へ行つて、づぐんだ瓢簞の形をした小さな灰皿を二つ貰つて來て、その一つに自分で俳句を書き、他の一つへ桂月翁の和歌を書いて貰つた。桂月翁も灰皿を二つ貰つて來て、それに白畫自贊をして、私のと一所に職人に渡した。職人は店の中へ引込んで行つて、バケツに入れたらいゝは藥を塗つた。そして、私等が池を一周して歸つて來た頃には、もう燒けて竈から出してあつた。

向嶋には翁の友人の關係のあつた女が、菓子屋をやつてゐた。何時であつたか暮春の頃であつた。百花園の傍で夕飯をすまして、其所の料理屋でくれた小さな提灯をつけながら、葉櫻の下を潜つてその菓子屋へ行つて、葉櫻に包んだその家名物の餅を買つて來た事もあつた。

郊外の散策について思ひ出されるは、曲水の宴である。年中故事要言には、曲水のことを、『三月三日は異國にも本朝にも曲水の宴あり。曲水宴は、流れ曲る水の岸に、文人ならび居て、水上より觴を流して、其の盃我が前を過ぎぬ前に詩を作て、盃を取て飲むなり。貴賤をいはず才智を重くする故なり。羽觴を飛ばすとも流觴などとも云ふも此の事なり。昔は大内にも今日は公卿など參りて御前にて詩を作りて講ぜられけるにや、御溝水に盃をうかべて文人以下是れを飲むよし、康保の御記に載せられけるにや』と云つてある。溶々たる春の流れに浮いて來た盃が、自分の前を通り過ぎないうちに詩を作つて、この盃を取りあげて酒を飲む、私は曲水その物はさほどとは思はないが、さうしたのんびりした氣持がたまらなく懷かしい。(完)

エチュード

生方敏郎

一句會

恰度梅花の盛りの頃文豪O氏が滿韓旅行から歸つたに就て、文壇の一部の人々が發起となり、その歡迎句會が某所に催された。そしてUのところへも出席しろと云つて來た。Uには俳句は出來ないが、何うせ其所へ集まる位の人間は皆な自分の同類だらうと、高をくゝつて出懸けて行つた。六十疊の長い坐敷には既に六十人ばかりも詰めかけて、皆々苦吟の態であつた。題は草餅と連翹各五句と白紙に認めて突當りの壁に貼り出してあつた。だが、一體、連翹とは何んなものか？　田舍育ちのUは炭薪になる樹木の名は知つてゐても、風流な庭木の名なぞは知らなかつた。そこで、彼は幹事のTに問ひたゞした。Tは、

「何でも、そこいらの垣根にそれ黄色い花が咲てるぢやらう。うむ。あれぢや！」

と答へた。Tは物は獨呑込でも聲さへ大きくすれば意味は先方へ通じると思つてゐるらしい。Tの聲の大きいのは地聲なのだが、何と思つたか一座の人々は驚いた顏をして、皆彼等の方を見た。連翹の何物たるかをさへ知らぬ者が、何那氣がして句會になんぞ飛び込んで來たのか？　とそれを驚き呆れたのだらう。だが、Uには、Tの說明が餘り簡單なので、まだ全く飮み込めないらしい。

「さうだと、春先四瓣の花の咲く、小さい葉の周圍がギザ〳〵になつてゐる。あの木のことかな？」

とUはまた問ひ返した。

「さあ、四瓣ぢやつたかなあ？」とTは皆の方を向いて赤黑い大きな顏を見合せたが、誰も何とも云ふ者がないので、またUの方を見て「垣根によくある黄色い花ぢやが……」と如何にも、もどかし相だつた。

「花だけ咲いて實の成らない、木はうつぎの様に心がガラン洞で、挿木にするとよく根付く……？　僕の國で黄梅と言つてる……？」

「さあ、何うぢやつたかな？」

とTは唯にこ〳〵した。皆もUの顔を見たが、差出てUの爲めに説明してやる者は無かつた。

　若し、あの木だとすれば、國の家の新藏の側の枝ぶりの惡い毛蟲の多い杏の樹の下に、有るか無きかに打捨られてあつた枝のひよろ〳〵蔓のやうに伸びる灌木に、相違ない。しかし、あの木に對する自分の記憶はその位のものだ。それに、實際それが連翹やら何うやらハツキりしないのでは、今此題の下に句を作るわけに行かない。……とUは思案した。

　いや、併し、まだ草餅といふ題がある。田舍に生れ落とされたばかりで、いつも江戸兒の友達が寄つて集つて、役者の話や江戸趣味の話などしてゐる時は、自分なんかは口も出せないで、隅の方に少さくなつてゐるより他はないが、馬の話や蜂や螢や魚を取りに行く話や、茸狩栗拾ひ、そんなものならお手の物だ。鷄の蹴合ひ牛のお産、鳥のぶつちめ落し、鼬の身振り、靑大將の卵、木兎の居睡り、蕎麪の燒餅、稗團子、繭子の煮びたし、蠶兒の病氣——東京帝國大學の博士先生だとて、一寸即答は出來相もないことまでも、知つてゐる。況んや、草餅なぞと來ては、あんまり初歩の田舍趣味で、聊か物足りない位だ。もつと江戸兒の膽玉をふん潰す樣な、づば拔けて田舍的の題だと面白いのだがなあ……

徐ろ思ひ返して、Uは自分の前に置かれた筆と小切紙とを取り上げた。そして彼もつい皆の眞似で作句してゐるのに釣り込まれて句を作るつもりになつた。

　彼は草餅を心の眞中に据えて、いろ〳〵のシーンを描いた。

四月末（舊暦三月）頃、彼はよく彼の姉や姉の友達の後にひつ附いて摘み草に行つた昔を空想する。それから土筆、蕗の薹、蒲公英の花、母子草、そんなものが後から〳〵幻のやうに彼の胸に現はれて來る。おんばこの葉の纖維で機を織つたり、蚊帳釣草の莖で四手の蚊帳を拵へたりしたとなど……それからそれと少年時代のなつかしい追憶を今更めて、頭の引出しの中から引張り出したので、彼は嬉しいやうな哀しい樣なセンチメンタルな氣分にはなつたが、それらは仲々句にはならなかつた。

　女中がUの前へ煎餅の盆を運んで來た。Uは餘儀なく煎餅をつまんで嚙つた。今度は彼の母が粉を挽いて餅草とを交ぜて搗き、餡子の團子を心に入れて草餅でくるんで拵へ上げる時の光景、それを網へ載せて燒くと餡が膨れて食み出して來るところ等次々に空想した。併し皆句には成り相もなかつた。

　早く來た人々は、もう皆五句づゝ十句認めて盆の上へ置いて來る。

　その中にUは今日家へ殘して來た自分の子供達のことを不圖

考へた。此頃道を歩いても女の子さへ見れば直ぐ思ひ出す女の赤ン坊のことをも考へた。そこで出來た。

草餅や家の娘の初節句

之でも句に成つてゐるか何うか分らないが、もう此先何うしても彼には句らしいものは出來なかつた。五句といふのに一句では餘りだと思つたが、何うしても彼には出來なかつた。

その中に〆切時間が來た。三四人手分けをして上座の机に對ひ坐へ集つた皆の句を書き取つた。書き取つた半紙の數は夥しく多數だつた。幹事は之を一枚々々順々に廻して中から自分の氣に入つた句を書き取り天地人共五句を選べと皆に言つた。Uは「文學のデモクラシーですね」等とおくれて來た隣の知合に言つたりして悦んでゐた。

Uは自分の前に廻されて來た半紙の句を見ると、皆とり〲に巧いと思はれた。蕪村几董大江丸成美といふやうな德川時代の大家の句と殆ど變りはなかつた。古雅な幽邃な閑寂な光景を寫した立派な句が並んでゐた。選は作よりも一層骨が折れた。殆ど何れを拔いて好いか彼には手の着け樣がなかつた。やがて面のやうな顏の持主の句界で有名なM老人が選句を盡く讀み上げた。そして、「何方」と一々作者を訊いた。作者は得意相にそれぞれ自分の俳號を名宣つた。書記は、それを忙しく書き取つてゐた。

Uは耳を澄まして、老人の聲を聽き逃すまいとした。何故なら、彼は自分の句は乾度少くとも十位までは天地人の何れかに這入るだらうと思つて居たからだ。併し、終ひまで、老人の口にUの句は乘らなかつた。六十人も居たのに、誰一人彼の句を選んでくれる者はなかつた。彼は先刻「運座は文學のデモクラシーだ」等と、嬉しがつてゐたのが餘り馬鹿々々しく感ぜられて來た。

その中に、鰻飯と正宗の一合壜が配られた。Uは肥つたお内儀さんに、「暖めて貰へますか？」と賴んだが、壜がハネますから、とて斷られた。冷で飮んでゐる人々も有つた。彼は冷は飮みつけてゐなかつたから、殘念相に壜を下に置いて、鰻丼に箸を附けた。それをUが喰べてしまふ頃は、いつしか一座は亂れてゐた。M老人を初め、俳句界の先輩達（何れも互選には一二點しか這入らなかつた大家連）が皆から短冊やら畫箋紙やらを突きつけられ、息もつかずに揮毫してゐた。誰も殆んどO氏から滿韓の談などを聽かうとする人は無かつたが、淋し相にしてゐるO氏に揮毫を所望する者は時々あつた。Uは默つて此光景を淋しい心持ちで見てゐた。

Uは捨てるも惜し、持ち歸るのも厭だといふ樣に正宗の壜を火鉢の灰の中に立てゝ時々手でさはつてみてゐた。暫くして顏

くゐるんで來た。Uは獨りでそれをチビ〳〵飮んで體がぬくもり、腹が出來ると、だん〳〵好い心持になつて來た。そこへ青年達が短冊を持つて來て、彼にも一句認めろ、と請ふた。
「私の句は一點も懸けられなかつたのですが、宜うございますか？」
「結構です。さあ、何卒、」
と一人は氣早く墨を磨り出した。
短冊はベタ銀で光つてゐて、宛で玩具の樣だつた。Uは自分のやうな惡筆で、それらを汚すのは、何だか勿たいないやうな氣がして暫くためらつてゐたが、こんな綺麗な紙に手習いをすることは、一生に何度あることでもない。死んで行くまでに少しでも多く、世界の物質を消費してやれ、といふ妙な横紙破りの心が起つて、八枚ばかりベタ〳〵と、忽ち書きなぐつた。そして、短冊に載つた自分の句を見ると、彼にはそれが誰か巧い人に作つて貰つた物のやうに思へて嬉しかつた。

二　大和コヽア

普段から朝寢のUは、昨夜遲くまで何か讀み耽つた爲めに、今日はまた毎もより一層寢すごした。顏を洗ひにお勝手へ行く時、女中部屋の柱時計が十一時四十分を指してゐるのを見るのさへ、誰に遠慮がある身ではないが、聊か極り惡く思はれた。
彼が何度も〳〵水を汲んで、手間取つて顏を洗つてゐる間に、女中はおみおつけを暖めたり澤庵を切つたりして、Uの食膳をしつらへた。
友達のMが先日土産に持參してくれた佃嶋の佃煮もあつた。親類から送られた海苔もあつた。Yから分けて貰つた玄海灘の雲丹、新聞社のKから貰つた尾張守口大根の切乾しで拵へたハリハリ、昨日妻淑子の里から屆いた甞め物等まで幾つもの小さな器物に盛られてチャブ臺の上に並べられた。
「何うしたんだ。今日は？　細々と澤山並べ立てたぢやあないか？」
とは箸Uを取り上げチャブ臺を見廻して言つた。女中と淑子とが顏を見合せて、クス〳〵と笑ふ聲が、茶の間の方でした。
「まだ後から卵燒が出來るのでございますよ。それから三ツ葉のおひたしも！」
「嘘をつけ。馬鹿」
「いゝえ、本當に今拵へますわ。また昨日みたいに、『俺にはおみをつけと澤庵ばかり喰はせて、お晝のおかずは何うしたんだ』なんて、あなたに仰言られると困りますもの」
Uは、何と言ひ返したものか分らなかつた。一寸間を置いて

「……だつて俺は二度しか喰べないんぢやないか？　二度の者と、三度の者と、おかづが同じでたまるものか？　飯は二度でもおかずだけは三度分喰べるんが當然だらう。お前は俺を仙人か何かと思つてる。霞と霧でも飲んでりやあ生きてゐられると思つてる。さうして坊やと自分達ばかり、うまい物をたべればいゝと思つてる。だから、昨日は言つてやつたんだ。」

　Uは恁う愚痴のやうな文句を罵倒のやうな勢で、言ひ乍ら、それでも口は忙しく働かせてガツ／＼と掻き込んだ。

「だつて、坊やは子供ぢやありませんか」

　といふ細君の聲は、前よりもずつと眞面目に堅くなつてゐた。

「坊やは子供でも、坊やかづけに甘酒を拵へたりお汁粉を拵へたりした奴等は、皆な大人だ。面當が目的で並べたものなんか俺は喰べなくもいゝ」

　とUの聲はだん／＼感傷的になつた。そして最後に爆發的に

「卵焼なんか、持つて來るな。俺はいらないぞ」

　とやつつけた。皆な默つてしまつた。

　Uは、併し、今の先、「喰べなくもいゝ」と放言した許りの、いろ／＼なおかずを、彼是と突つき廻してゐた。長男の光郞は親爺の氣嫌を取るつもりか？　父の氣づかずにゐる間に、彼の傍へ行つて

「パパ。切符やらう」

　と玩具の電車切符を白いエプロンのポケットから出して父の眼の前へ突き出した。Uは笑顔もせずに、それを受けた。子供はまた

「乘換やらうか？　三田行ですか？　上野行ですか？　パパ」

　と、此時玄關のリンが鳴つて、誰か人の氣はいがした。

「今日は」

　客は其聲で誰だか皆に分つた。Uの從兄弟の後妻であつた。

「をや、いらつしやい」

　と淑子が茶の間から言つた。客はずん／＼上つて、茶の間へ這り

「私、今ね、教會の歸りがけだけれど、一寸お寄りしやうと思つて」

「まあ、よくお寄り下さいましたこと」

　と淑子も愛嬌のある聲で言つた。

　客は色の褪めたメリンスの風呂敷から新聞紙のころ／＼した、小さい包を出して、

「これね。あの、少しばかりだけれど、茄子の芥子漬——[illegible]今頃喰べるやうにとつて置きましたの」

「あら、まあ」と淑子は殊更とん狂な聲を出して
「結構なものを、毎度頂いて恐れ入ります。本當に奥さん。お忙しい中で、よくこんな事までなさいますのねえ。」
Uは、ぼそ〳〵と飯を喰べながら、へ、猫め。今の先、人にツケ〳〵した事を言つた口で、あんな蜜の様なことを言つてやがる。大猫と小猫！ と心の中で嘲つてゐた。
淑子は、自分でも眞似るつもりか、それとも苦心談を聞いてやらうとのお世辭のつもりか、芥子漬の拵へ方を訊いたりした。客は得意らしくその製法を長々とくわしく説明した。そして、障子越しに
「Uさん。今の朝飯！ ずいぶんお早いのねえ」
と挨拶のやうな冷かしのやうな言葉を懸けたが、Uは、唯「ええ」と、そんな言葉はろく〳〵耳にも這入らぬ様子で「だから女といふものは……」と自分の女性に對する感想を考へ續けてゐた。
「お淑さん。こないだの大和ココアを召し上つて？」
「えゝ。香ばしくつて、本當に結構でございましたわ。早速頂戴しましたの」
猫と猫とは、よく喋るものだ。喋ること！ 嘘を吐くこと！ それが總て無用なことであるのに！ さうだ。女に取つてはお喋りと嘘と、それ等はそれ等自身が目的なのだ！ とUは默々として考へを結んだ。
「あれね。良人(うち)の關係してゐる會社で販賣してゐるのですよ。ですから私教會の皆さんに一罐づゝ差上げてみましたの。刺戟性がないつていふので今日皆さんから好評なんですよ。」
Uは「唯貰つたからさ。唯匁五分で貰つた物に對して好評を呈するのは、新聞の新刊批評ばかりぢやない」と考へた。
「刺戟の無い方が衞生にいゝのでございませうね!?」
と淑子は、百も承知で、こんな合槌を打つた。奥さんは直ぐ宗教的に解釋して
「衞生にばかりでなく、精神的にもね」
・Uは女中の運んで來た茶を飲んで、「宗教が尤も强い刺戟物なのに！ 時としては有毒な刺戟物ともなるのに！ クリスチヤンは宗教以外の刺戟物は皆な惡魔の贈物だと考へてゐるのだ」と思ひ乍ら、二階の書齋へ上つて行つた。
Uは机に向つて、書きかけの原稿を續けやうとしたが、階下で話す二人の話が兎角耳に這入つて、彼の考へが原稿に集中するのを妨げた。
をや、光ちやん。切符。ありがたう。教會へ行らつしやいな。綺麗なカードを上げますからね。お母さんと御一緒に教會

へいらつしやいなね。お淑さんも、本當に教會へいらつしやいよ。來週の木曜日は特に婦人會の爲めの集りでK先生の說教がありますの。ですから、皆さんで、どうぞね……」

「Kさんて、あの貯金の演說をなさるお方ですか？　私、田舍にゐた時分、お話を伺つたことがございますわ」

「えゝ、先生も、一時躓(つまづ)きなさいまして、貯金の演說なんかなすつた事もありましたが、今また教會の方へ歸られたのです。あの先生のお話はそりやあ、面白うございますよ」

四十近いのに自分の子供とては一人も持たないので、教會を唯一の樂しみとしてゐる此女信徒は、頻りにUの細君を教會へ引張り込まうとしてゐた。

玄關でまた鈴の音がした。

女中が名刺を持つて二階へ上つて來た。

「面會謝絕の札は出してないのか？」

とUが訊いた。

「えゝ、お斷りしたのですけれど、お手間は取らせませんから是非鳥渡つて仰言つて、お歸りにならないのでございます。」

通された客は五十がらみの極めて實體相なデップリした大男であつた。彼は上り口の椽の上へペッタリと坐つて「初めまして」と初對面の挨拶を型の通りに固くるしく長々と述べた。

「只今、外の本屋で先生のお著述を此所に此通り求めて參りましたが……」

といふところへ、女中が盆に載せてコーヒー茶碗を運んで來た。そして手を突いて

「あの、お客様からお土産を頂戴しました」

と云ひ置いて下りた。

「どうか、もう、そんな事は決して無いやうに」

「いや、もう、私の家で出來ました乾柿で、重いばかりで、つまらないものでございますが……」とへどもどして大男は「お多忙の中を誠に恐れ入りましたが……」とまたへどもどしてゐる。

Uは客に褐色の飲料をすゝめ、自分も一口飲まうとして口に含んだが、その粉つぽい澁苦い味に顏をしかめた。しかし、他人の前で吐き出すことも出來ないのでグッと飲み込んだ。

「オイ。こんな物はダメだよ。紅茶を入れて來な」

と叫んだ。下から微な聲の返事が聞えた。

「こんな物。味覺を持たない人間の飲み物だ」

とUは忌々し相に獨言ちた。

客はコーヒー茶碗には手も觸れないで、矢張り椽側に固く坐つたまゝ、

「實は御多忙のところを、こんな御邪魔に上りましたのは、他でもございませんが少々お願ひがございまして……」

とUの著書を膝にのせていぢくつた。

「何ですかね？」

Uは簡單に斷ひ度いと思つた。眉根を神經質らしく動かせて、訊いた。

「他でもございませんが、實は、その……此の本の扉へ一筆先生に書いて頂きたいのでございますが……」

Uは此間の句會の短册のことを思ひ出した。自分は、まだそんな年とも思つて居なかつたが、こんな事を頼まれるやうでは、よく／＼近頃は年寄つたものと見える。縁喜でもないといふ氣がした。

「何卒、此本を先生から私へ下された樣にお書きを願ひ度いのですが……」

と客はハンケチで額の汗を拭いた。Uは此奇拔な注文には驚いた。

「私から、上げた樣にですか？　でも、それはあなたが買つて來たのでせう。そりやあ、何うも變ですね」

「いけませんか」

「えゝ、何うも變ですから」

客はガッカリした樣に考へ込んで默つた。Uも、何となく氣の毒にもあり、早く片附けて終ひ度くもなつたので、

「では、扉に何か言葉を書いて上げませうか」

と言つた。客は救はれた樣に悦びを眼顏に輝かせて

「何卒、お願ひ申します。何でもよろしうございますから」

「さあ、何がいゝだらう。其本の中に何かあなたの氣に入つた文句が有りますか」

「青年は兎角虚僞な厭世思想に中毒し易く、老人は淺薄な樂天主義に囚はれ勝ちだ。といふのをお願ひ申ます」

Uはペタ／＼と無雜作に書きつけた。客は忽ち辭して歸つた。Uはそれを、玄關先まで送つて出た。

「之ですよ。今頂戴したもの。」

と淑子は新聞紙の包みを見せた。紙は破れて、黒い柿が處々から頭を出してゐた。

「馬鹿に大きな物ぢやないか。よくこんなものを遠くから持つて來られたものだ。だが、之も大和ココアの亞流ぢやないかな」「まあ先刻は困りましたよ。本當に！　奥さんがまだゐるのに、こんな物ダメだなんて仰有るんですもの。私ひや／＼しましたわ。そうして直き奥さんは歸つちまひましたよ」

と淑子は、そこへ立つたまゝ言つた。

「なあんだ。ゐたのか？」

「ゐたのか？　ぢやありませんよ。あなたは何時だつて、さうなんだから……紅茶を切らしたから使つたんぢやありませんか？」

Uは可笑しい様な氣もしたが、併し何だか罪を犯したやうな微かな後悔の心がきざしだ。併し、誰にも後悔の色を見せまいとして、

「いゝさ。まづい事は本當にまづいんだもの。……あんな物讀める奴の方が間違つてゐるんさ、嘘吐きなんだ。」

と言ひ切つて、彼の最後の避難所たる二階の書齋へ退いた。

だがUの心の暗い影は何時迄も染み付いたやうに脱れなかつた。ペンは持つても、落書の他は何も書けなかつた。

その落書

——不用意に語られた賞讚ほど危險な物は滅多に無い。それは語る人をも聴く人をも傷つける。殊に世上の交際に於いて……

花のさかりに

黑頭巾

一

●夢のまどかならんように、春の月滿ちて、町に近き二つの森影、水畫に描ける如くなりし一夜を、高樓に更けし朝。野外の花の、いづことも無く吾を誘ふ思するに、空、淡く曇りて、狭霧の雨の、晴れつ、降りつ、人を焦らすか那。

●卓上に置かれたる一瓶の花、頻りに吾輩を笑ふ。言はずして、眼に笑ふに似たり。笑つて人を留むるにもあらず。焦れつゝある吾輩に艶を含んで微笑するなり。

●今朝、さき滿ちたる此の花の顔に、天下の春を占め得たる誇りの色見ゆ。若し春の花を著けさる草木をして批評の能力を有せしめば、蓋し、世人が春の裝を凝らし、われは顔して出で來る。若き女を見るが如くならずんばあらさるべし。

●狭霧の幕少しづゝ次第〳〵に捲き上がりて、華やかなる春の舞臺、地上より現はれ來る。地上に爛漫たる春の花よ、天に、

麗はしく輝く春の日よ。

二

●花の前に、人間の榮華は忘れらる。如何に進みたる文明の人と雖、春の花に憧憬せざる能はず。花は地上の權威なり。然れども、花のさかりを樂しむは則ち人間の榮華にあらずや。

●櫻だらけ、花だらけなるを見れば、斯世は末世にてはあらざりけり。人間ありてより、既に十萬年、むかしより未だ嘗て、此ほどの花のさかりあらざりし。今より十萬年の後、地上、悉く花さきて、そこに常住平和の黃金世界あらん。

●照る紅の花のかげに、尾をひろげたる白孔雀かな。ソロモンの榮華は言ふに足らず、およそ如何なる人の力も、未だ此の如き美しきものを建設したること無し。

●壁に見る數千年前の宗教も、皆、花と鳥とにて飾らる。花の世界は、則ち昔より人間の理想にあらずや。今、地上に滿ちたる花のさかりに對すれば、理想の實現を思はざる能はず。

●開けざる國に花少く、開けたる國に花多し。花咲くところに文明あり。花は文明の象徵なり。花は則ち文明なり。

●湧出でゝ窮り無く新らしき花かな。人は花を見て、始めて新らしき花を知るを得る。文明は花を發見すれども、花を創造する能はず。花こそ文明を創造したるものに非ずや。

●一つの花に限り無き工智を寓し、上無き平和を表現しつゝあり。工智の進むところに花多く、平和の榮ゆるところに花も榮ゆ。

●花のさかりは人のさかりなり。花を破壞する者は、文明を破壞する者にして、花を愛する者は、人を愛する者なり。花は人の光にして、文明は花の影なるべし。

●國破れて山河在り。花咲くとも此の山河を奈何せん。今、ヴエルサイユの宮殿も、花を以て飾らるべし。森の中より咲き出でし文明の獨逸には、花に對して涙を灑ぐ者あらん。

三

●春來らざれば知られざりし溝の小草に、幽花を著けたるこそ可憐なれ。世に貧しき人あれども、地に貧しき花無し。草の庵に傍ひて月光、特地に明らかに、小さき花に春榮あつまる。

●綺羅びやかに、大きく、照り輝く花の美しきは言ふまでも無し。然れども幽草に咲ける小やかなる花の風姿は限り無く愛らし。仔細に看れば、幽花は巨葩に勝さるの思無くんばあらざるべし。

●古人も、天意、幽草を憐むと言はずや。春風のやさしき心を見んとせば、須らく幽草を見よ。幽草の小花には、「自然の愛」が深く刻まれたるを見る。華々しく咲ける花ばかりを見て、花の

さかりを歌ふことと莫れ。

●箏曲の長恨歌に、「求めても得難きは好色になんありける、されば楊家の女こそ妙なるものにぞありけれ」といへり。楊家の女は楊貴妃なり。好女は何の處に生るゝかを豫見しがたし。

●「美」の分布は、花片を春風に飛ばすが如し、飛んで何人の家に留まるかを知らず。貧家、往々にして好女を生ず、溝の小川の小草に幽花を著くるなり。

●春風は公道なり。いづれの草木をして悉く光榮あらしむ。人間に民本主義あるは、天に春風あるが如くなるべし。

四

●花のさかりに、花をして地上を織り成さしめよ。天に雲あるが如くに、地上に花の雲あらしめよ。仰いで雲を見るよりも、俯して雲を望むの愉快なると同じく、花下に逍遙するよりも、俯して花の雲を見渡しめよ。

●櫻花の爛熳たるは、春の日本の誇なるべし。然れども櫻花は下より見る。下より見る花は、花の裏を見るなり。すべて日本の花は、裏より見る花が多し。

●仰いで雲を見れば、雲の裏を見るなるべし。雲は、人間に見られんが爲に、天に飛ぶにはあらず。花も人に見せんとて咲くにあらず、高き花の表は自ら高し。

●雲影の地に布くが如く、花の雲をして天中の雲に映ぜしめよ。花の映ぜる雲を、地上より見ば、天にも花の雲あるなり。

●水に映ずる鳥、鏡に映ずる花、すべて映像は美し。雲に映ずる花の美くしさは如何ならん。地上に花滿つるとき、雲、低く飛んで花影を宿さん。たなびく霞も、花彩に燃えて、花の光を以て、地上を照灼するなるべし。

●小川に猫柳、河畔に紅の椿、白の椿、溪谷に櫻、野邊に、アネモネ、チューリップ、など咲き滿ち、廣き野に菜花限り無く、夕陽を浮べば、地上は、水に映つる花と錯綜して、春のサラサを織出すべし。人はサラサ模樣のなかを點綴して行く。

五

●花は、吾が眼前にさかりなり。花に對して花の世を想ふはならず。蝶と化して花に遊ぶは小さき夢なり。大なる鳥に翔して花の世に飛行せん。

●花より出でゝ花に入るは、花の世なるかな。行く袖に花觸れ、履む途に花落つ。雨かと見れば花の雨なり。花の香に、すべての香氣を壓し、花の光に、すべての光彩を熄す。

●花は飛んで佛頭を撲つ。仁王像の肩にも、花點ず。火を負ひ、劍を按じて立てる不動尊の前にも、花、開き、散り、飛

ぶ。

●花の心は平和なり、平等なり、公明なり、何物をも擇ばず、嫌ふことと無し。花の世に花をして主たらしめば、平和、平等、公平あらざること無し。

◉花の雲の中に、「大西郷」が短刀を帶びて、花だらけの世を睥睨しつゝあるは如何。大西郷をして、刀を脱し、薩摩カスリの衣に、黑の紋付羽織を著けて、悠然として立たしめば如何。

◉砲臺に、花の山無し。平和會議の結果が、花の山の砲臺を見るに到るの日は太だ遠からん。花の山に砲臺殘るの日は、花が世界を征服したるの日なるべし。

◉此の意味に於て、花の雲の中に、短刀を帶びたる大西郷の銅像の立てるを見れば、世界の大平和の來るべき希望の象徴として、感興淺からず。

六

●花影の滿ちて波立つ川に舟を浮べて、舷に倚つて、流を下りつゝ歌ふとき、花彩の殘る夕雲より月出でゝ、花と人とを照らせ。人に詩無く、世界は則ち詩なり。

●花の舟中に、友を思ふとき、友、鶴に乘つて花の雲を出で來る。雲上、舟中、ともに手を叩いて相呼ぶ。水畔の花、鶴に點頭せん。

●若し花をして言はしめば果して何を語るべき。詩か、趣味か、哲學か、科學か、夢乎。花言はず、言はざるが可し。

◉花の心、理、夢は、花に對して默契するを要す。拈華微笑をして、人と人との默解たらしめず、人と花と、併せて默解せしめよ。

◉花を見て足らず、飛鳥に觀して、花の雲に遊ぶ。花を見て夢むとき、花も亦た吾が夢に入り來る。夢に、花と語るとき、詩無く、哲學無く、科學無く、夢無く、唯だ花の世界あり。

◉食堂の壁に、花の背景を畫き、卓上の瓶に、さかりの花を活く。現實の世に、覺めて花の世を夢むは、食堂の花なるべし。

●羣芳は一芳に若かず、一芳は羣芳に若かず。羣芳の理想は一芳に表現され、一芳の香彩は羣芳に煥發せらるゝ。一芳を見れば羣芳足り、羣芳に對すれば一芳浮ぶ。萬花は一花にして、一花は萬花なり。唯だ花あれ、花の世あれかし。

七

◉夢に語る花は、理想の花なり。咲きて輝いて、而して其の萎ひを見ず。一花、萬花、夢に我を包圍するとき、誰か又た日前に見たる花を追憶せん。

●アントニイがシイザーの棺前に、羅馬人に向つて、稀世の雄辯を揮ひしとき、その初石楠木の苔の固くして綻びさるが如

し。機、熟し來つて、油の乘るとき、舌端、悉く花飛ぶ。

●吾輩、石楠木の花を、櫻花よりも美くしと思ふ。その花形、その花彩、眞に天下に敵無し。英國のキユー花園には世界の石楠木を集めたる花壇あり。吾が東京の公園にも、石楠木花壇あらしめよ。

●生きて演壇に、雄辯を揮ふと雖、夢に、羣芳に對して、理想を說きたる者は稀なるべし。花のさかりに、萬花を聽衆として、理想を高唱する夢を見ばや。

●霞に燃ゆる花、月に浮ぶ花、花のさかりは何時、盡くべしとも見えず。花のさかりは夢なるかな。麗はしく輝く春の日の何時、沈むべしとも思はれず。

大正八年三月、春の彼岸に、上野公園に遊び、歸りて記す。吾家の石楠木の蕾、少しく膨くらみて見ゆ。黑頭巾再記。

曲阜から泰山へ

明智瀧朗

夫は去年の十月であつた。商業視察の目的で朝鮮から支那を漫遊した。處が此旅行中振出しの釜山から終に近き揚子江沿岸の九江に到る迄吾輩と前後して度々回り遇ふ一紳士が居た。縮れた頭髮を左右に分けて鋭い眼玉を光らせながら偉大なる口を結んで窓外を見詰めてゐる彼の樣子が朝鮮鐵道の中で出遇た當初から強い印象を與へられたが、彼が何者であるかは一寸判斷が付かなかつた。吾輩同樣の商業視察にしては其人相が餘り鋭過ぎる。將取のモーニングを着てゐる處では資家らしくもない、さりとてお醫者の漫遊と云ふ風態でもないようだ。之が東海道なら胡麻蠅位にお互の心中に警戒を懷いて懷中物を確と握るところであるが、幸に吾輩は警戒される程特徵のある面相を所有してゐなかつたのと彼紳士も京城では金筋の御役人と同行してゐたから此疑はないにしても。京城で出遇ひ平壤の牡丹臺でも逢ひ朝鮮鐵道でも滿鐵でも同車し其後北京で宿を隣し漢口でも同じ松廼家の客となり揚子江を下る鳳陽丸船中で再び邂逅して遂に九江で別れて了つた

北京で宿を隣にした時に宿の女中の話で彼紳士が谷崎潤一郎氏であることを承知して疑雲を一掃することが出來た。其谷崎潤一郎氏が二月號に蘇州紀行を出されたので其當時の旅情彷彿として吾輩の腦裡に湧いて來た。谷崎氏は山海關から天津へ出られたそうだから泰山へは登られなかつた。同氏が九江で雨の廬山へ登られた時に吾輩は遺憾ながらも旅程を變更することを得ず甲板で袂別を告げたが何れ同氏から誌上で雨の廬山の御紹介を受けることゝ樂んで吾輩は曲阜泰山の一節を書いて見た。吾輩は素より同氏とは生活の方面を異にし簿書堆裡に鞅掌するの徒で文筆を弄する輩ではないが、蘇州紀行の一編から往時を追想して曾遊の山水を日記の一頁より引出して斯く記すのである。谷崎氏足下の高評を得ば幸甚の至である。

一

重き輪の驢車は沙漠の如き麥畑の中を悠々と軋る。荷車に布呂を被せたるが如き驢車に餘義なく身を托せる吾等は、驢馬の蹄に蹴立つる砂塵と御者の纏へる垢に穢れたる襤褸の衣服や其沐せざる辮髮から放つ臭氣に襲はれて、何んだか「復活」の文句ではないが西比利亞の荒野に流謫の憂目を味ふ囚人の様な氣がする。麥畑と雖も日本で見る様な收約的な小農ではない。さればとてテキサスに於るけが如き組織的な大農經營では勿論ない。徒らに面積が廣いので見渡す限りは青芽が果しもなくつゞき枯れ殘りたる高粱の處々に小高く堆積するの外は林もなく、丘岡なく、勿論灌漑の設備や施肥の法を講ずるでもなく、自然の恩惠を其儘甘受して僅に播種の人工を加へたるのみ。車馬の爲に道路を設くるでもなければ農夫の爲に畔を作るでもない。步行即道路で行くところ自然に道を作るのだから四五返も馬車が麥苗を蹂躙して往復すると其處が道路になる、之で地上權の紛擾もなく私有權の問題が起らない處が孔子の生れた土地だけある。天地開闢の始より灌漑の法なく僅に高粱の燒粕の外に施肥なく自然に放棄してゐるのだから、沃野千里と春秋時代に考へられたる豐土も今は漸く沙地に化して樹木雑草の發育を妨げ一目空潤、目に映ずるものは墳墓の無數に散在せると孔子父母の墓所たる防山尼山の淡く霞みて見ゆるのみ、洵に大陸と頷れる。支那は墳墓の國である、如何なる山間僻地と雖も苟も人跡を止むる處必ず幾多の土饅頭を殘す、孔孟を出せし國民だけに我子を質に置いても祖先の墳墓は之を守る、尤も墳墓と雖も別に石碑を立てるのではなく只土饅頭だけではあるが、土饅頭なるが故に面積を要する。日本の墳墓は假令石塔に百金を拋ても、其墓碑は先祖代々となれば埋む骨に按分すれば甚だ輕少なる金額で

而も面積に於ては各骨の配當坪數は寸餘に足るまい、殊に燒いて粉にして酒で飮むでしまへば墓地などは全く無用である。支那では斯ふ手輕にいかない、高曰レ墳平曰レ墓として兎角面積を充分占領しないと亡者の見識がないとしてある。而も禮記に奈何去二墳墓一也と記するが如く、此不動産は自己の活動を束縛して稍々其周圍に大小數多の土饅頭を連續せしめる。之が四百二十萬方哩の面積を所有する大國だから平氣に治まつてゐるのであるが日本であつたら將に由々しき國家問題だ、ならでも食糧問題が喧ましくなつて土地の不生産的消費を憂慮し都市の膨脹が問題となつて青山の縮少が論ぜられ電氣火葬——否電葬粉散が議せられる今日だから、假令禮節を尊ぶべしとするも支那風の土饅頭は禁物である。人間到處有二青山一と云ふ月性の詩は東坡の青山可レ埋レ骨と云ふ句から出たものたることを知れば支那に土饅頭が豐富たるを察せられる。乍然此土饅頭から只一の窒素や燐酸が吸收せられて麥の芽が發育する。墳墓の周圍は斯くて豐饒なる畑となり青芽の中から其土饅頭の圓滿な頭が併列してゐる、尤も膏血を絞り盡された屍だから樹木の發生迄には肥が廻らないと見えて依然露出する原野だ。けれども土饅頭の列が餘りに密接に連續するので驢車は其一角を車輪にかけて途を作る。曳く驢馬も馭つ御者も慣れてゐると見えて、亡者の態面を轍に潰しても平氣で孔子樣の樣な顏をして砂塵を浴びながら進むで行くが、前世の宿縁にや斯る驢車に一蓮托生の憂目を見せられたる吾等は其都度動搖が尻の骨迄こたえる。

頭に綸巾を戴き身に鶴氅を被て手に羽扇を持ち一輛の輪車に乘じ我は是れ南陽の諸葛孔明なり、と三國志でほざいてゐる伏龍先生も實は斯な尻の骨の笆棒に痛い驢車で三軍を指揮したに違ひあるまい。此車の構造から操縱の具合が如何しても數千年の昔時から大した進歩をしたように思はれない。按座をかけば車軸の響が背柱骨を傳て腦髓迄浸み込む、端座すれば向脛が薄ペラな座布團を透して床の荒板に摺付けられる。而も一蓮托生の御者君が無遠慮に吾輩の前に其穢れたる背を突き出して驢馬の少さな尻をヒッ叩く。孔明も甚だ辟易した。

小春の溫な日の光に半身を浴せて單調な前面の風光に倦み車の上で眠くなる。秋は酣でも麥芽は萠えて鵲が飛んでゐる、こんな所は日本にない趣だが眠氣を催す點は餘り變らない。元來田舍馬車の御者や髮結なんて云ふ輩は昔からお饒舌の者と定まつてゐる、村人の噂や旅行の奇談などは彼等の得意である。アーピングの Stage coach にも They were under the Particular gardianship of the Coachman, to whom, whenever on opportu-nity presented, they addressed a host of questions, and pro

-nounced him one of the rest fellows in the world と御者の僻を窺してゐる。寡言な者でも柄にない喉咽で追分位唄ふものにきまつてゐる、處が此御者君は原則に反して抑も乘車の當初より默々として馬をやり續々として鞭を振ふ。勿論不解の言語で話しかけられたら困るけれども、せめて都々逸ではない詩でも吟ずるなら多少の興味も湧くだらうに畫にもならず詩もなくさればとて瀟灑の歩もなければ、遊子の眼は自然に閉ぢられる。

閉ぢられた眼がフト妙な驢馬の嘶と車の動搖に開かれると、畫面は何時しか一變して數本の柳と栢の葉蔭に少さな村が見える。豚と鷄が仲好く肩を倂べて車の響に逃げて行く。乞食の樣な婆さんと子供が盛に聲高に話ながら御者の方に近付いて來た。御者の緘默は破れて大聲に何事をか談ずる。吾輩の皷膜には互に罵り合てゐる樣に極めて喧噪に響いたが、其態度及面相の悠暢たるより察すれば別事なしと思はれる。村を過ぎると車は再び砂烟の中を軋て漸て小丘を越へる、と其丘下には一條の河が練絹の樣に澄み亘てゐるのが見へた。赤褐の濁水にのみ見慣れて來た眼には玉川に比すべくもあらぬ程な此小流でも洵に靜かな氣分を漂はせる。水の淸きも理りなり之ぞ名に負ふ泗水である。孔子が幼時水惡戯したところで有名なので何も水が澄んでゐるから特別に名がある理由ではない。由來英雄拜敬心から出民は聖人英傑の足跡を無上に有難がる、弘法大師坐禪岩だとが辨慶鐙掛け松とか唱へて嬉しがつてゐても弘法大師は坐禪を組まず辨慶は何處へでも鐙を擔いで行つたものでもなからう。けれども夫れが有名になつて遊子を樂ましむるところに面白味がある、泗水と孔子は釣鐘と辨慶位の關係は確かにあると見えて孔子は死後其德を讃へられて泗水侯に封爵せられた。然し聖人の生湯となつた泗水だらうが、淸澄たる流だらうが御者には一向痛痒を感じない、否御者には馬の進路に當て橋も架せられざる小川の流れてゐることは正に一大苦痛である。御者は驢に一鞭を與へる、驢は驚いて渾身の力を四脚に集め砂に埋れる。車輪を無理に躍らせて傾斜に委せ泗水の流に馬車諸共引込んでしまう。秋の水に轍を洗て流れる。沙漠の如き茫漠たる四境の中を靜かに流れる一條の淸河——其流を亂して渡る驢車——驢車に端座する遊子——更に秋風に沐する點々たる彼岸楊柳——と客觀的に書くと詩にもなる、が現實に其驢車に乘てゐる吾輩は詩どころの段ではない。車が泗水に曳込まれた刹那は身體が車中でバウンドして帽子の山が天井で凹まされた。幸ひ帽子がお身替に立たので頭蓋骨は無難で濟んだようなもの、お蔭で山高帽子の側面に終生拭ふべからさる一線を劃してしま

った。更に中流では河水が座席を犯さんとして蒲鉾小屋の水害と一般起居に制限された空間に腰を浮かし心膽を寒からしめた。彼岸に到着するや驢君震慄一番泡沫四散して頭から浴せかけられた。然るに御者は平然として此飛沫を忝し晏子の御者然と意氣揚々粕麵麭を嚙つて御座る、之では乘客の苦痛などは問題でないわけである。

之から亦長い畑道がつゞいて車上に搖らるゝこと正に二時間半漸く曲阜城外に到着した。聳つ城壁を回つて蘆の群生したる堀がある。堀に沿ふて車が右轉すると一道は曲阜城門に連つてゐる。處が城門外には老若百餘の人々が或は驢に倚り或は車を曳き又は徒歩で喧噪を極めつゝ犇めいて吾等の車は近付くべくもない。

「如何したのだらう」と通譯の吾友を顧みた、後車の友は少頃路傍の男と話してゐたが失望の色を顏に表はしながら

「君、困た事が出來た。本城の後方に土匪の一隊が現はれて今に是處を襲撃に來る情報があつたから城門を閉して一切通行を禁止したのだとサ、此等の人々は城內の市民で午前中城外に仕事を探る爲め出掛けたものだが歸て來ても城門を閉さしたので這入れず騷いでゐるのだとのことだよ」

見れば城外市民の喧噪に引きかへて城內は兵士に充ち靜まつてゐる。カレーでもセバストポリーでもリエーヂでも無辜の民を殺すに忍びず最後の一人迄死守すべかりし城塞を遂に敵手に委ねて城民を逃してやつた。坂本城は町人庶民を落させて後無情の木石にすら淚を止めて敵手に將來を托し武士は城と共に消え果てた。之が武士道であり之が國家の生存である。堀を深くし壘を高くし而して平穩無事を貪るのが兵士であつて庶民は緩急に際して安全から遠けられる、之が足レ食足レ兵民信レ之矣と謂いたる孔子を祭る曲阜城に於ける現在の實景である。大成殿內の孔子像は何の爲めであらう。吾輩は遙々遠くより來り驢車の不快を忍び・至聖孔夫子の遺跡に拜せんとするものである。德孤ならず必ず隣ありとは論語に教ゆる處亦孔子の德三千年の今も尙四隣に普く亘るならば馬賊土匪胡ぞ此聖場を犯さんや、と考へたから是非共吾等の來意を告げて城內に入るを許されたしと護照を示し友を通じて依頼した。

「だめ〳〵自己以外には何物の存在も認めない奴等だから幾等頼んでもだめだ、隊長が城門の鍵を持て歸てしまつたから不可ないのだとサ、尤も時と場合では國家の禁制でも貨幣さへやればすぐ承知をするんだが、矢張奴等でも貨幣より生命と見えて今日は貨幣をやつても諾と云はない。あれを見給へ仰々しい武裝だ、尤も土匪數千名と號するのだから彼等にはボエ ルゾン以上

の戦闘を覺悟してゐるんだらう」と友は嘲聲をもらした。

見上れば成程城壁上には兵士隊をなして小銃を擬し小徑の大砲すら備へてゐる。土匪數千と號すれば十分の一と見て實數約數百名と見做ること骨董の云ひ値と同一なりとは曾て山東鐵道車中にて某支那通の話なりしが假令割引して聞くとするも數百名の土匪襲來しては此城外に屯することは頗る危險である、殊に賊共に平常操銃の訓練を得ない連中であるから發砲者に一定の標準なき以上命令に反いて彈丸が自由行動を採らないとも限らないから一刻も早く此危險區域を脱せなければならない。

孔子の餘徳に感想が盡きたから大成殿の建築を嘆美する迄もなし、君子は危きに近寄らずと之れだけは孔子の言を眞理たりとして空しく踵を返した。

二

「おい、折角是迄來たのだから至聖林を訪ねることにしよう」

と友は後車から聲をかける。

「何んだ至聖林とは」

「孔子の墓さ」

「成程大成殿は建築に詣でるので孔子に敬意を表するには墓の方が本當だね」と吾輩は曲阜城内に入れなかつた負惜みに土匪の危險も忘れて程遠からぬ至聖林を訪ることにした。滿洲では

馬賊山東では土匪、浪花の葦は伊勢の濱荻で兎に角同一系統に屬する曲者である。乍然馬賊土匪と罵るも其烏合の衆たる所以に歸するので督軍の兵隊も實質に於ては大差なく等しく窮すれば民を掠めて私腹を肥す、蓋し春秋の諸傑と云ひ漢楚の英雄と云ふも眞は馬賊の頭領土匪の親方に過ぎない、豐沛の賤より起て漢の高祖となつたのも土匪の頭が成功したのに過ぎない、壯士不レ死則已　死則擧二大名一耳　王侯將相寧有種乎　と志を立てるのは結構だが、立てたが最後之が爲めに庶民は財を奪はれ産を失ひて餓に泣き血に呪はれてゐるのである。夫れが春秋時代だらふが民國七年だらうが只武器に於て靑龍刀とブローニングと變化したのみで一向に頓着ないのが支那の大きなところかも知れない。南北の爭鬪も呉越の爭ひと同樣で畢竟調停が出來ても臥薪嘗膽とかなんとかで又々何かの動機で紛擾が起るに極まつてゐる。

夕陽西山に赤く漸く四境が夕暮の色彩を加へて來た。驢を急がせて只管至聖林に向ふ。一際茂る栢樹の林蔭から長い城壁が見えた、城壁が盡きると其處から栢の並木が長く長く何處迄も續いて途は洙水に斷たれる、其處に架せられたる石の小橋を文津橋と呼ぶ。此處では城門が閉されず平和に扉はくつろいで住民も何んとなく聖人面をしてゐる。土匪如何に獰猛を極むと雖

も聖徳犯すべからず假令大成殿の如き空居は之を襲ふとあるも孔子の墓所たる至聖林は濫に侵さず、實に君子の成徳宏大無邊なりと驚くと勿れ、大成殿は曲阜城内にて其處には商賈繁昌百貨輻輳して財寶婦女豐富である、反之至聖林は墓石の外は財物何物もなし、掠奪の資なく胡ぞ犯すべきや。ないが意見の總仕舞なりとは道樂息子と馬賊に效能あるお題目なり、本來無一物悟ればこそ孔子樣も廣い寂しき至聖林の奥深く安坐するのである「弟子及魯人往いて冢に從ひ家する者百有餘室因て命じて孔里と曰ふ」と史記に云へるも今は大成殿の宏麗に人集りて墓邊亦昔日の賑なし、道徳の廢頽盛榮の隆盛何處も同じ有樣にて大成至聖文宣王之墓のみ伯魚子思の墓を左右に靜かに立つてゐた。

至聖林を後にした時には夜は蒼然として迫つて來た。燦たる星は天文圖の樣に空一杯に鏤めいて地平線が障害物なしに一線を劃す。諸葛孔明も斯ふなると七星を案ずる處でなく少々無氣味になる。廣野を星明りに辿る騾車には燈もなければ御者は依然として緘默を守る。後車の友は元氣を聲量に鼓舞して、風蕭々易水寒、壯士一去亦不歸と蠻聲を張り上げたが、仲秋の夜風が肌を冷かに感ぜしめたと見えて妙に力が拔けて物凄さが一層骨に入る。恐怖が起たら糞度胸を拵へて見ることと正にワクチン注射の効能がある、糞度胸とは勿論人工的な落付である、俳句は此點に妙味があるものだとは蕪翁が教へるところだ、年寄の云ふことに間違はない筈と首をかしげて「盜人の噂や曲阜の夜ぞ寒むき」とやつて見たが、句にならない「聖人の沓を逃れたる夜寒哉」と考へたが面白くもない。元來斯んなところで俳味を感じるのは聖恩普遍の王土でなければ駄目だ、一茶が「御十夜は巾着切も月夜哉」と口吟さむことの出來たのは枝も鳴らさぬ御世だからである。土匪や馬賊の噂で喧しい際には風流氣は出ない、だから名句が浮ばないので素より吾輩の俳趣味の深淺を問ふものでない、と考へ付いたとき燈が間近に現はれて車輪の音が固く響く、漸く村里に近付いて來たのである。危惧から脫して落付が出て來たら急に空腹を訴へて來た、恐怖に壓迫せられて萎縮してゐた胃腑が壓迫に隙が見えたから急に擴張して食慾に膨脹して來た。落付が出來たら俳句が生るべき約束であつたが空腹が襲ふて遠慮なく此約束を打破してしまつた。衣食足つて禮節を知る、恐怖や空腹には俳味は伴はない、風流は滿腹から生れ爭亂は空腹から起る。本來無一物と禪の眞諦を得なければ生活の缺陷は決して恒心を造らない、ないと極つた刹那車が止まつて獰猛な男の面が布帛の中へ差し込むとともに「ライライ」と奇聲に驚かされた。

水鳥の羽音に逃げた平家の公達ならねど聊か過剰來の恐怖に

筋肉が妙に緊張してゐたので面相から直覺して「何をツ」と云ひさま右手は無意識に男の肩をつきのけた。

「おい降りるんだよ」

と友の言葉に氣が付けば車は宿の前に止まつてゐた、獰猛の面相の男は出迎に來た宿の男であつたのだ、氣の毒だとは思つたが元來ボン引の類には稀なる面相の所持者たる彼自身にも幾分の罪はあるものと斷定する。

抑も此客棧即ち旅宿は斯る惡相の男をボン引として旅客を迎することほど左樣に恐縮する宿舍である。外部から瞥見するところでは煉瓦造りの外廓の可成廣い構で、丁度丈の低い倉庫の樣に軒がつゞいて正面の白壁には筆太に客棧と大書してあるが門を入つて中庭を通り導かれたる儘左方の一室に入るに及んで假令一夜の假寢の床とは申せ如何にして夢を結ぶべきかに困じた。床もなき土間には一隅に白布を天井から垂れて其下にはビール箱を重ねた位の高さに戸板を併べアンペラ莚を一枚敷いたる外は一脚の卓子と椅子を除いて、火鉢もなければストーブもなく勿論寢具とては絶對に供給されない。携帶せる毛布一枚を頭から被つて横になつたが、如何に脂肪に富る豚うどんにカロリーが高くなつたからとて秋の夜寒は骨迄透る、加ふるに床板の繼目が丁度背骨に當て寢返りを打つ度毎に骨節に音を立てる。

「おい君、之でよく支那人は寢られるね」と寢られぬ口惜しさを友に訴へた、

「支那人の旅行は蝸牛と一般さ、鋪蓋を肩にし食器と洗面器と而して便器を混載せる籠を手にして何處へでも出掛ける。汽車の中でも此鋪蓋を擴げて寢れば野原でも此鋪蓋に横り籠の器で立派に生活が續けられる、だから旅宿は只部屋を提供するだけで寢具も食器も備ふる必要がない、此家などは未だ上等の部なのだよ、之でも壁には畫紙や文字を書いた紙が矢鱈に張付けてあるだけ結構な方だ、日本でも田舍の旅宿などと來ると隨分ひどい處があるよ」

「イヤ穢い汚いの問題ぢやない、日本の旅宿は如何に邊境なところでも曲りなりにも床には軸を掛け屏風や衣桁があつて小机の一つや銀紙にせよ鏡位は備へてあるものだ、第一冬になれば火鉢があり夏には團扇が置いてある、處が此處ぢや凡ての物が同盟罷工して此室內には只板床と吾々の身體のみが存在してゐるのは甚だ心細いぢやないか」

「致方がないよ、此家で滿足できなければ露營でもするさ、未だ修養が積まないね、文句を云はずにユックリ莚の上に眠る工夫でもしたまへ」と友は平氣で寢に就く。

友は數年間支那に住んで斯る優遇を忝ふすること屢々なので斯くの如く修養が積んで板床の上に安眠を貪ることが出來るのである、風流は寒きもの也と三馬が定義を下すなら修養とは痛きもの也と吾輩は注解したい。樹下石上を宿と修行する禪僧の生活も此の板床の修養から胚胎したものである、大智識の揺籃がアンペラ臺であると悟つた時修養も馬鹿にならぬと板床に敬意を表して靜かに眠る工夫を始めた。

工夫が成就したと思つたら宿の男に汽車が出るからとて起された。一體鷄と豚が互に相提携して大道を濶歩してゐるほど鷄の多い里なるにも不拘鷄が曉を告げないので吾輩は心外ながら宿の男から一喝の屈辱を受けたのである、吾輩は今朝未明に上り列車に乘るべく昨夜から用意をしてゐたのだ、正に時計は五時を示してゐる。日本の鷄は氣が早いから三時頃から一番鷄が東天紅を告げて周章て者を驚かせるが、如何に老大國だからとて畜生迄大國氣分にならなくてよささうなものであるが、中々雞と雖も君子自重すべしで輕擧盲動は敢てしない。孟嘗君が函谷關で閉口した譯である。吾輩と雖も孤驛の鷄鳴に曉の夢を破られしと美文的叙述をなすべき處を宿の男に洞喝されてしまつたのである。

手早く行嚢を空にして暗闇の中を宿舎の裏道から直ちに停車場に出た。月臺(プラットホーム)には乘客が既に群集してゐる、其中には東京の高等師範學校の生徒一行二十人程が制服に背嚢甲斐々々しく混つてゐた。彼等も御多分にもれず曲阜城で馬賊の噂に耳を廻らし昨夕は板床に修養を積んで今朝は同じく鷄鳴を聞かずして泰安府に向ふべく停車場に馳せ付けたのであつた。

三十分は既に過ぎたが未だ汽笛の響すら聞えて來ない。元來支那の鐵道位見掛け倒しのものはない。御承知の如く支那に於ける鐵道敷設は列強が利權獲得の標的である。蓋し鐵道は一旦敷設したる曉は永遠に撤去せらるるものでなく其沿線の經濟的事業經營を行ふ事が出來るのみならず、一旦緩急に際しては在留民保護の名目の下に兵力を延ばすに頗る便利であるから列強は競つて鐵道借款に應じる、尤も外國の豐富な資本を充分吸收して建設する鐵道であるから甚だ贅澤で立派である到底日本の如き狹軌の而も可成材料を儉約して造られたる鐵道とは比較にならない。出資國は自己の權利を可成多量に植付けたいから充分出資して其敷設の監督經營を自己の掌中に納める、素より支那其者の利害關係は第二位に置かれるから鐵道の線路も租借地たる一地方から租借地となれる他都市への交通機關で支那の都市連絡は必しも主なる問題ではないのだ、だから曲阜の如き人口幾萬と算する都會でも停車場は實に八哩を離れたる城外荒漠

たる野原の只中に寂しく立つてゐる、勿論支那自身でも鐵道は外國の勢力延長と見て兎角國際問題を惹起し易いから可成自國民の密集地域から離れて欲しい事實もある。鐵道が兎角國際紛紜の動機を作ると云ふ點から停車場には必す銃劍を肩にしたる兵士の三五人が屯ろして而も發着列車の一等客車の周圍を特に警戒せしめてゐるのには恐縮する。此津浦鐵道などは英佛の共同借款で英國の緬甸より支那縦貫策の一端を表はすものである、天津より揚子江岸浦口に至る延長二百三十六哩資金二百九十六萬磅を投じてゐる、元來外國の借款又は租辦の鐵道は合計壹萬六千餘哩投資額貳億八千餘萬磅の巨額中英國が投資せるもの實に五千五百二十哩四千四百三十六萬磅に達し英國の印度より鐵路西伯利亞を經て歐羅巴に到らんとする大規模鐵道政策に貢献せしめる。であるから津浦鐵道の如きは支那の鐵道か英國の鐵道か分明でない程停車場の掲示でも車内の注意でも支那語や佛語は只申譯に片書せられ、曲阜驛の掲示板にも

Next up train running late more than one hour と白墨で記せられ別に漢字は書き添へてさへない。英語を話せないものは到底驛長の資格がないなどは其處に借款の權威があるのかも知れない、尤も大きな聲では云はれないが日本でも英語が解らないと下等動物位に見られる世の中だから無理もないことだ。但吾輩の眼を驚かしむるものは其停車場の結構壯麗を極むることである、東洋の覇國として經濟上の先進國位に自負する我國の停車場では只中央停車場に其結構を集中して人口二百萬を超過する大阪でも、大支關として諸外國人に最初の印象を與ふる神戸でも、更に地方の都市を飾るべき停車場でも其建築の御粗末なること驛員の辦當と同様、内容の貧弱は申す迄もなく外形も豫算が許さないからとて廉價な材料で乾燥無味に建てられてゐる、片田舍の停車場になると共同便所の大形に過ぎない、否共同便所は未だしもペンキ塗だが小停車場は穢れたる木地の儘數十年の風雪に堪へ忍んでゐるのがある。然るに支那の停車場には借款の賜とは申乍ら如何なる邊土遠境の小停車場でも煉瓦やコンクリート造の垢拔けした西洋建だ、恰度東京なら築地邊の西洋館を大きくした位である。乍然支那は矢張支那で英國でも佛蘭西でもない、單に其資金と材料に依つて外觀美が造られ堂堂たる列車が運轉されてゐるのであるが、經營が自家の手に納められると汽車は時間表の指定に關係せず悠々と軌上を走る、だから午前四時發と掲上されたる列車が五時半を過ぎ東方が薄明るくなつて來たのに尚未だ到着しないのは別に不思議でもなんでもないのである。團太郎の馬車のやうな喇叭の音が四方の暗黑を破つて響いた、之は汽車の近付いた豫報である。喇叭は

今一度間拔な調子で鳴つて大きな機關車の姿が眼の前に現はれた。

悠々とやつて來た汽車は英國の資本と工業で出來上つたる堂々たるものではあるが、外觀と內容とは反比例して一度列車內に乘り込むに及んでは其亂雜なのに不尠驚かされた。尤も日本の列車內でも信玄袋が座席を占領して氣の小さい紳さんなどは却つて信玄袋の身替に床に蹲るやら給仕の注意を促される迄混雜の車內で悠々橫はる連中が少なくないが、さりとて腰に短劍を佩く御役人に取締られてゐる鐵道だけに斯程迄の混亂は花時の臨時列車を除いては滅多に見られ　い。頭等乘車券を有する吾輩は當然頭等車即ち一等車に座席を占める權利を持てゐる筈である、而し權利は有するも其座席は悉く鼠木綿の綿入軍服を着せる兵卒の不作法な寢姿で占領せられてゐる、毛布を纏ふて樂椅子（ソーファ）に睡る者、手荷物の上に座席を構へて毛皮外套を被る者、ズックの旅行圍團を敷いて床に悠然と夢を貪る者、之れが悉く中華民國の干城である。元來中華民國で尤も厄介なものは督軍の兵たることは等しく中外の認むるところである、殊に鐵道に祟ることは山陰の雪や東海道の水害處ではない、無賃乘車の特權を有する彼等は兵營の設備を怠つて列車內に宿泊せしむる、斯んなのは未だ手ぬるい方で督軍の最辣なのになると貨車を徵發して置いて人民の要求に從ひ高いブロカレージを占めて貸付ける、斯んな工合だから支那旅行中汽車と云へば兵士滿載で普通旅客は甚だ迷惑する。而も此兵士たるや國民の義務觀念に依つて服務するものでなく只僅に糊口の途を求むる爲めに苦力たらんより聊か體裁よく土匪たらんより聊か危險少なき故を以て身を督軍の旗下に委ぬる連中であるから正式の訓練なく勿論國家に對する義務の觀念もなく況んや旅客の迷惑の如きは別に問題でない、殊に南北紛糾の際討伐に藉口して北方より遠來せる此等干城諸君は先づ以て列車內を占領し武威の程を他國の人民に誇示して吳れる必要があると見えた。吾輩も此武勇の程に辟易して頭等車を見捨て隣室の食堂車に逃入つた。乍然室內の光景は更に一層の狼藉を極めてゐる、椅子に眠るものは未だ可なり、食卓上に氈布を重ねて腰かくるあれば卓下に例の圍團を敷いて長々と橫はるものもある。余は宋襄の仁に終るを覺え遂に一椅子を占めて腰を下した、足を延せば南無三脚下にも森嚴として橫はる干城の一人があつた。襲ふ眠氣に屈耻を忍んで椅子下に橫るは嘗膽ならずも確に臥薪位の思ひはある筈である、然るに三更過ぎて早や曉の夢深かるべき際突然僕奴の足下に蹂躙せられては武士の一分相立たぬことと跳ね起きるかと不尠心痛したが其處は韓信の生れた國

家である、男の生面を煙管で叩かれて鞘を拂ふ國民とは譯が違ふ、漂母が一飯の情を受け股間の恥を忍ぶとも由來敵本主義の國民性には吾人が味ふ如き眞面目なる屈辱は感じないと見える。

三

泰安府に汽車が到着するや否や轎夫が小旗を手にして車内に飛び込み泰山行きの轎を強請する。勿論登山には此轎に乘るを最便とすることは濟南で聞いたから何も拒絶せんとも思はないがさりとて多數の轎夫が吾等二人を圍繞して手鞠も毛布も殆んど掠奪に等しく取上げて自己の轎を勸めるには大に閉口した。供給過剩による自由競走の弊である。乍然いざ乘ると云ふヿにして轎を定めると需給の大原則に反して轎賃の低落を起さず却つて反對に酒手の割增を申出る、何も約束づくで轎を極めた以上勞務の完成をなした曉は多少の酒手を給することに決して異議はないつもりであるが、未だ轎棒を肩にもせざる先から既に酒手の割增を強請するは甚だ面白くない。萬事が之だ。朧を得て蜀を望むは啻に司馬懿のみならず彼等通有の國民性である。籐椅子の如き轎に腰して橫に貫ける二本の長き棒を二人の男に擔がれたる以上兎に角如何に文句を云つたところで致方がない、此際經濟原論を說く何等のオーソリティはない、只彼等の技術にすがつて安全なる登山を冀ふの外はないのである。昔時米國に或哲學者が在つた、或時大河を渡らんものと小舟に乘り込んだが此哲學者は頻りに船頭をつかまへて宇宙の原理を說いてゐた、船頭は船の舳と哲學者の青い高慢ちきな面を見較べながら宇宙の原理で如何して飯が食へるのかを詰問した、青い面の哲學者は日本の成金のやうに飯が一升五十錢もするとなどはてんで眼中にないから此至高至大なる宇宙の大原理を知らざるは人間として生活の價値なしと罵倒した、處が丁度舟が中流に出た頃俄に烈風吹き荒んで激浪高く舷を洗い艫舳は浪に呑まれて今は沈沒の外なきに至つた。哲學者の青い面は七面鳥のように紫白に變つて舷に縋りながら船頭の救助を賴んだが、船頭は顧みて冷笑一番「先生は泳を知つてゐますかい、俺ア飛込んで逃げますから先生は宇宙の原理でも說いておいでなさい」と云ひながらザンブと水中に躍込んだ、と云ふ話がある。此際吾輩の經濟原論も宇宙の原論と一般理論として成功するが實際は甚だ邪魔である、之が爲め登山中止の已むなきに至るを恐れたから先づ大枚の銀弗一塊を更にはづんで彼等最善の努力を促した。油を注げば機械は圓滑に運轉する、理論は何もない、轎夫の足取は敏速に進行して城外の小村を通過し小流を渡り曠野を橫切て道は漸く傾斜となる、之からが泰山である。

　泰山亦の名を岱宗と云ふ。岱は始にして宗長なりで、支那歴代の帝王は五年に一度巡狩をなし山に祭を營んだものださうである、尤も泰山が吾々の耳朶にしかく有名となつたのは泰山が大山に通じ動かざること大山の如しとか大山土壤を讓らずとか云ふ文句からであるが、又歴史的には秦の始皇が東巡して此山に登り封事を行ひ、殊に俗間には俄雨に逢つて松樹の影に立寄つたところ松は忽ち大木となつて其梢葉を茂らし雨を遮つたので始皇が松に太夫の位を授けたと云ふお伽噺が傳つてゐる、亦孟子に孔子登二東山一而小レ魯登二泰山一而小二天下一とあるので智識階級でも支那の泰山は丁度富嶽位に良解せられてゐる。一體泰山の靈山たることは傳説的崇高のみならず古代の帝王が親しく此山に登つて盛儀を擧げた點にある。乍然泰山は海拔僅に千五百米突だから高さに於ては我膽吹山にも及ばない山ではあるが、其處が事大主義の國家だから府記などには「泰山は南面して立ち高さ四千丈三千里の地を掩ふ」と書いてゐる、尤も山高きが故に貴からずである。泰山は全山悉く岩巖より成り登山道は一大谿谷に隨ひて石磴を築き山麓より頂上迄悉く三間幅に石を疊み石磴六千七百餘級其整然たるは正に泰山の如何に古來尊崇せられたるかを察するに餘りがある。

　先づ泰山第一關と稱する一天門を潜りて登ること數丁紅門と云ふ龍宮の門を彷彿する關門に出る、登山者は下界の塵埃に汚れたる衣服を脱却して淨衣と易ゆる處だと云ふのだがお富士山の胎内潜と同樣昔時簡單なる頭腦で神聖視した場所であるが、せち辛い今では錢を貪る乞食の巢居として殘るの外何等の印象をも與へないで轎子は通り過ぎてしまふ。此北には萬仙樓あり萬仙樓の東北を桃花澗と云ひ桃の名所、古磴一路は王母宮に到る王母宮は轎夫の下乘を命じて茶代を强請する程幽邃雅趣のある處と彼等の狹い見界で判斷する。溪あれば邃流あり峯あれば翠綠滴るものある日光とか箱根とかの風光から推論しては幽とは如何邃とは何かと伺ひたくなる。溪と云ひ山と云ふも等しく岩石の一は低く横はり一は高く聳ゆるのみにて成程幾星霜の風雨に研かれ刻まれ奇岩怪石其配置を面白くするあるも、さればとて寢覺の床の岩姿や鹽原の色彩の妙を見るが如き味は得られない。山高に在らずも仙あらば即ち名ありと云ふ。さらば其仙とは斯る巖石疊々たる一律の山姿を形容するものかと尋ねたい氣がした。尤も王母宮は往時多數の尼さんが住で登山者の宿泊に供し精進潔齋の程を示したとあるから其意味に於て仙なり幽なのかも知れない、成程高野山の夫れの如く和藻を伴はず斯る靈山には亦特別の有難味があるのだと思ふ。

　此處から溪底に下つて數丁廻ると有名な經石溪に出る、千疊

敷の花崗岩の半面に隷書で金剛經の全文三千餘字を刻まれてゐる。洵に根氣の仕事である。王羲之の書だと稱するも審ならず。多分唐宋以前六朝時代のもので千百有餘年を閲するものだと云ふ。古いものなら茶碗の破片でも尊重する支那のことだから古いに越したことはないが其刻字の明瞭にして磨滅を見ざるのは洵に不思議である、尤も近來例の石摺屋が矢鱈に紙と墨で謄寫してゐるから斯る貴重な骨董も寒山寺の碑と同樣遠らず破滅する事かと民國の爲に悲むだ。

元の磴道を登れば登仙橋あり「漸入佳境」と御念の入つた碑が立つてゐる、成程看板に僞なく之から石磴急に兩巖迫り佳境となる。磴盡きる處に門あり一天閣と云ふ。閣の北方重巖疊嶂たる石門を作る之を廻馬嶺と稱へて所謂馬返しである。之からは巨人の斧を揮るへが如く巨巖を斷ちたる間を磴により進む、丁度希臘の神話にあるシーシュースの山行の樣に斷崖途を遮て通ずべくもあらざるかと見れば山開けて雲梯を造り岩は巨漢シロンの屍の如く突兀として姿を聳たせる。漸く中天門に出て茶店に一憩した、此中天門は正に泰山登山の半徑である。首を廻らし越し方を顧れば石磴長蛇の如く斷崖の蔭に出沒し、前方遙かに見上れば山頂の南天門空中樓閣を望むが如く天の一角に毅然として見える、左手には月觀峯萬仞の姿を現し右手には嵊峰として險崖が懸る希臘の神話の中にゴルゴンスと云ふ三人の恐ろしい怪物があるが、此怪物の面を眞面に見たものは誰でも皆石に化してしまうと云ふとである。泰山の神樣達がゴルゴンスに出遇つて化石したように怪石が重々とする、其岩の平面を刻んで「山輝川媚」だとか「膚寸弁雲」とか「共登靑雲梯」とか面白文句が書かれてゐる、筆者の中には山東省督耳と云ふのも見えたし、按察使とか都御史とか云ふ古いものもある。同じ楽書でも斯ふなると堂々として中々手數がかゝる、藤井六輔や講中のお札などより餘かで興味が多い、轎に乘てゐながら作文の稽古が出來る譯である。

「もオ頂上かい」と下の方からせはしい呼吸遣ひがして靴の音が響いた、

「ア、苦しいもオ到底歩行けない」と他の者の聲がしたが四五人バタ〳〵と茶店に入るや金釦の上衣を脫ぎ椽に横倒れになつてしまつた。彼等は車を同ふした東京高等師範學校の一行だつた。見れば重さうに膨らんだ背嚢にハンマーを各携帶してゐる、鑛物採集の爲めにやつて來たのだと云ふ。

「鑛石研究處の話ぢやない、斯んな重い奴を背負つて徒步で登つて來たんだからもオ目が眩む計だ」と其中の一人が流るゝ汗を拭ひながら愚痴をこぼした。

「未だ之が中腹だよ、あれを見給へ頂上は遙か雲上に聳えてゐるんだ」と僕は南天門を指しながら激勵したつもりだつたが、彼等は落膽したやうに

「もオだめです、僕等は此處が頂上かと思つて凡てのエネルギーを絞り盡して上つて來たのですから此上には機關の運轉が出來ないんです」と斷念してしまつてゐる、

「なアに山東の鑛物は豐富ぢやない炭坑でも山東ぢや坊子も博山も炭質が惡いからな、泰山だつて新しい發見の出來るやうな岩石はありやしないや、頂上の岩でも此處のでも結構だよ歸つてから論文が立派に出來りや岩質の如何は事實問題ぢやない」と達觀して泰山を論文で胡麻かそうと考へてゐる連中もある、勿論金鵄勳章でも勇戰奮鬪より報告の巧拙で貰ふものだそうだから論文で礦石位失敬するのは何んでもあるまい。尤も彼等と雖も何も海拔千五百米突の山へ登るに青島や濟南附近で採集した鑛石で充滿せる背嚢を背負つて來るにも及ぶまい、成程彼等には多大の勞力を費し其目的を以て支拂した貴重な鑛石には相違あるまいが餘人は他人の石と洒落れる者もあるまい、龍の宿を極むることを得るのに不經濟な勞力の消費をやるから中途で弱音を吐くんだ、學者が事に跳き慣ひとは申ながら將來子弟を指導する身は常識的に發達して貰ひたい。

轎が動くと左方谿路の西北に當つて廣濶なる谿間に十數戶の新らしい西洋館が見える、之は山東地方に布教に從事する歐米の宣教師等の夏季避暑の爲めの別莊である、耶蘇は何んとなく虫が好かないが彼等宣教師の不撓不屈何處迄も喰ひ込んで行く根氣には本願寺が如何に力んで見ても敵はない。漸々轎は石橋を渡る、石花橋と稱して前面に巨巖屹立し「飛瀑起雲」と題してゐるが飛瀑は扨ておき普羽の瀧の水すらもない、其側に宋の眞宋帝駐蹕の跡と云ふ御帳岩がある、何處も同じく斯んな場所には何とか名をつけて遊子の心をそゝるものである。夫から其橋の上に一叢の松樹があつて例の茶店が建られてゐるが、此松こそ人口に膾炙する「大夫松」である、即ち秦の始皇帝が巡狩して泰山に上られた時俄雨に逢ひ松樹の蔭に憩ひて雨宿りせられたので五大夫の位を授けられたと云ふ昔譚がある、日本では遊女のお職を大夫と稱して松の位と唱へる、遊女が問題になるのでは餘り現實的だが古松森々として枝を繁らしてゐるところに妙味がある、之も高砂相生の松位に敬意を表すべきだ。之から東に飛龍峯西に朝鳳嶺を望んで峭探險崖の磴を登ると數百級遂に南天門下の長磴に出る、此長磴三百級迫立して欹ち敲之れ雲の梯と呼はれる。之を登り詰めると紅亞の紫雲臺の門とく

ぐると之が南天門だ。蓋し頂上正門と見るべき者にて門柱に「門闢九霄仰步三天勝蹟」「階崇萬級俯臨千嶂奇觀」と二聯句を勒す。之から東に數町輪に揺られて行くと其處が泰山の本殿とも云ふべき碧霞元宮である。丹碧燦爛たる一城廓を爲してゐる其結構中々規模宏大にして斯る山上に如何にして此堂廓を造りたるかを怪むばかり、古來歷代諸帝の崇拜偉大なるを思はしめる。ムーアは嘗て God is a great expense, but government would be impossible without Him. と云へるが泰山の崇拜は其眞理を語るものであらう。此神樣は觀世音菩薩の如く玲瓏温顏慈相の女體で碧霞元君と稱し萬民渇仰を受けさせ給ふ靈驗いやちこなる神樣だ。であるから始皇の如き玄宗の如き宇內統一を夢想する人君はムーアの罵倒せるが如く此碧霞元君に敬意を表して碑を立てたり堂宇を獻納したりしたので、孔子のような世間を冷眼視したる先生でも泰山に登り天下を小として神意にお諂をつかつてゐる。尤も廟後の峯頭に立ちて遙かに眼を放てば齊魯の諸山は脚下に展開し南方に徂徠山峙立し汶水白帶の如く流れ、遠く秦呉越の諸巒を縹緲の間に望み近く麓下に連ね、諸峯波濤の如く起伏して誠に悠大なる宇宙を悟らしめる。だから孔子が此大自然に接して蝸牛角上の爭に似たる七國の形勢に愛想をつかしたのは無理はない。其孔子が俯瞰して世間俗事を馬塵に思つて名利を斷念し隱遁を願ふたところに一碑を立て登山者をして益益事大思想の喧傳に力めてゐる。平將門は四明嶽へ登て「盛なる哉大丈夫」と變に悟て反旗を飜したと云ふ。兎角高山へ登ると氣が變になるものと見へて反謀したくなり萎縮したくなると見えるから、吾輩は最早天下を俯瞰することを止めて更らに奥の院とも云ふべき玉皇頂を訪ふことにした。玉皇頂は巍然として泰山最頂上を示し一字の堂廟例の紅壁を廻らしてゐる。廟內內庭の眞中に大巖石突出してゐるものがあるが之は泰山柱石と唱へて地軸に通じ泰山の支柱をなすものだと眞正のような詐を坊主が眞面目に饒舌る。デルフォイの神殿には地軸に通ずる裂目があると云ふ、是處では岩が地軸を貫ぬいてゐる。デルフォイは希臘で泰山は支那、共に神秘的の國たるところに斯る神話が殘るのである。此廟前に方形の臺基がある古登封臺と云ふ。山上封禪の場所で此臺下に一碑が建つてゐるが、之は無字碑と稱して或は始皇の立つた處と云ひ或は漢の武帝の建設に係ると云ふ。或人封禪の玉函此碑下に納めらるゝを考へ發掘をなさんとしたるに驟に風雷起り天地震動して乾坤碎くるかと怪むばかり大に恐れて遂に中止の已むなきに至りたりと云ふことである。

踵を廻らして玉皇頂から故の途を下ると東嶽廟に戻つて來る。廟は廢頽したが背後に有名な磨崖碑とて玄宗皇帝登山紀念

の碑がある。皇帝になると繪はがきにスタンプ位貰つたのでは威嚴にかゝはるから千餘字の大落書を施して石に刻みつけさせる。刀痕雄渾筆力遒勁にて磨損の箇所は其後補修されてゐるが誠に不滅の紀念である。松や杉を植えて紀念するよりも意義がある樣に思はれる。此側には宋や隋の諸名王臣の筆が刻してあつたものだが今は磨滅して影を止めず僅に稍新らしきものゝみ殘る。其中には淸の康熙帝や乾隆帝の御眞筆も見える。尤も乾隆帝は習字が御自慢で丁度芭蕉翁のやうに矢鱈に落書や詩を書きつける。然し落書も斯ふなると中々貴重なもので相合傘や猥褻な文句と異つて世界的に尊重せらるゝことと倫敦塔の壁書と同樣の價値がある。森羅萬象悉く經濟的に解決するの妙ある支那人は此等の碑や落書を單に名所古跡の一端位に濟ましてはゐられない。早速例の石摺として一枚幾錢として高價なる代金を請求する。斯くて幾年の間に碑書は磨滅して不明瞭になつてしまう。

下山の轎は轎夫の妙技を讃するより乘客の度胸を賞ふる必要がある。南天門より三百級垂直にかゝる磴階を二人の轎夫は靴裏に濕を與へ足取輕く丁度ミシンの針が運ぶ如く輕妙に運ばせて一氣に下る。脚下は遙か下方の石磴のみ見え體は宛然空中に浮いて飛行機にでも乘つてゐる樣である。

「轎夫が足を辷らしたら僕等の生命は助からないね」と吾輩は恐縮して問ふた。

「なアに萬一轎夫に粗相があると彼等の組合から除名せられる、殊に父祖傳來の業で生ひ立ちからの轎夫だからそんな間違はないよ」と友は答へる。

「組合から除名されるのは彼等だらうが僕等の生命はそれで償ふことは出來ないぢやないか」と呟いて見たがパアシユースが翅なければ此險崖を馳せ下ることも出來ない。吾輩はバーンスの詩 Soldier's Return の最後の一節

For gold the merchant ploughs the main,
The farmer ploughs the manor;
But glory is the Sodger's prize,
The Sodger's wealth is honour!

を思ひ泛べ名譽心を知らざる彼等は金錢の爲めに全力を注ぐものなることを考へ、轎が途中で少憩した時に更に數錢を寄附して其最善の努力を促した。上りに六時間餘を費したる轎は下り僅に一時間餘、以て如何に急勾配であるかを察するに足る。

斯くして泰山から下つた轎は[illegible]の町の方へ蒼然たる夜の幕に閉ざされながら消えて行つた。

支那の芝居の話

福地信世

支那の芝居の仕組

支那の芝居の仕組は日本の能と全く同じものである。それはもと兩方共元曲から來たもので、能も元曲から變つて來たのであり、支那の芝居も元曲から來て、其源を同じくして居るから、似て居るのは不思議でも何でもない。能と同じであるといふ事は、第一に舞台の構造に於て全く同じである。もと庭の眞中に一つの舞台を建てゝ、其背後には背景も置かず、何も置かず、唯踊子が踊るやうな趣向であつた。それが今日は見物席の上に屋根を置くやうになつて來たのである。かるが故に支那の或は離宮であるとか、或は貴族の家にある舞台は、見物席は野天で、恰度日本の本當の能舞臺を見るやうである。近頃日本でも觀世とか寶生とかいふ家の舞臺は見物席に屋根を掛けるやうになつて來たと同じに、支那の芝居も亦さうなつて來た。此處へ西洋の芝居が入つて來て、全く西洋の芝居或は日本の芝居の舞臺のやうな所で芝居を演ずるやうに近來は變化して來たものである。

囃し方

囃し方は日本の能と同じやうに舞臺の後ろに並んで居つて、其處で音樂をやる。樂器の種類は胡弓、月琴、蛇味線、銅鑼、鐃、太鼓、笛といふ風なものを非常に多く用ひて、可なり日本人には矢釜しいと思はるる程強いものである。其音樂家の着物は勝手氣儘であつて、甚だしく穢らしく、見る人をして不愉快を感ぜしめる事が多い。願くは日本の長唄のやうに、何等か舞臺裝飾の一部分として見らるべき衣裳を着けたらばいゝかと思ふ。尙願くは此物は舞臺から除けて、後ろの見えぬ所、或は横の邪魔にならぬ所に置いて之をやつたらさぞいゝだらうと思ふ。尤も西洋の芝居を加味して、建築方法の改良されて居る所に於ては、横の見えぬ所に此音樂師を入れて居る處も少くない。

の碑がある。皇帝になると繪はがきにスタンプ位貰つたのでは威厳にかゝはるから千餘字の大落書を施して石に刻みつけさせる。刀痕雄麗鉄力遒勁にて磨損の箇所は其後補修されてゐるが誠に不滅の紀念である。松や杉を植えて紀念するよりも意義がある樣に思はれる。此側には宋や隋の諸名王臣の筆が刻してあつたものだが今は磨滅して影を止めず僅に稍新らしきものゝみ殘る。其中には淸の康熙帝や乾隆帝の御眞筆も見える。尤も乾隆帝は習字が御自慢で丁度芭蕉翁のやうに矢鱈に落書や詩を書きつける。然し落書も斯ふなると中々貴重なもので相合傘や猥褻な文句と異つて世界的に尊重せらるゝこと倫敦塔の駄書と同樣の價値がある。森羅萬象悉く經濟的に解決するの妙ある支那人は此等の碑や落書を單に名所古跡の一端位に濟ましてはゐられない。早速例の石摺として一枚幾程として高價なる代金を請求する。斯くて幾年の間に碑書は磨滅して不明瞭になつてしまう。

下山の轎は轎夫の妙技を讃するより乘客の度胸を備ふる必要がある。南天門より三百級垂直にかゝる磴階を二人の轎夫は靴裏に濕を與へ足取輕く丁度ミシンの針が運ぶ如く輕妙に運ばせて一氣に下る。脚下は遙か下方の石磴のみ見え轎は宛然空中に浮いて飛行機にでも乘つてゐる樣である。

「轎夫が足を辷らしたら僕等の生命は助らないね」と吾輩は恐縮して問ふた。

「なアに萬一轎夫に過失があると彼等の組合から除名せられる、殊に父祖傳來の業で生ひ立ちからの轎夫だからそんな間違はないよ」と友は答へる。

「組合から除名されるのは彼等だらうが僕等の生命はこれで償ふことは出來ないぢやないか」と呟いて見たがパアシユースが翅なければ此險崖を馳せ下ることも出來ない。吾輩はバーンスの詩 Soldier's Return の最後の一節

For gold the merchant ploughs the main,
The farmer ploughs the manor;
But glory is the Sodger's prize,
The Sodger's wealth is honour!

を思ひ泛べ名譽心を知らざる彼等は金錢の爲めに全力を注ぐものなることを考へ、轎が途中で少憩した時に更に敷錢を寄附して其最善の努力を促した。上りに六時間餘を費したる轎は下り僅に一時間餘、以て如何に急勾配であるかを察するに足る。

斯くして泰山から下つた轎は肩摩轂撃の町の方へ蒼然たる夜の幕に閉されながら消えて行つた。

支那の芝居の話

福地信世

支那の芝居の仕組

支那の芝居の仕組は日本の能と全く同じものである。それはもと兩方共元曲から來たもので、能も元曲から變つて來たのであり、支那の芝居も元曲から來て、其源を同じくして居るから、似て居るのは不思議でも何でもない。能と同じであるといふ事は、第一に舞臺の構造に於て全く同じである。もと庭の眞中に一つの舞台を建てゝ、其背後には背景も置かず、何も置かず、唯踊子が踊るやうな趣向であつた。それが今日は見物席の上に屋根を置くやうになつて來たのである。かるが故に支那の或は離宮であるとか、或は貴族の家にある舞台は、見物席は野天で、恰度日本の本當の能舞臺を見るやうである。近頃日本でも觀世とか寶生とかいふ家の舞臺は見物席に屋根を掛けるやうになつて來たと同じに、支那の芝居も亦さうなつて來た。此處へ西洋の芝居が入つて來て、全く西洋の芝居或は日本の芝居の舞臺のやうな所で芝居を演ずるやうに近來は變化して來たものである。

囃し方

囃し方は日本の能と同じやうに舞臺の後ろに並んで居つて、其處で音樂をやる。樂器の種類は胡弓、月琴、蛇味線、銅鑼、鐃、太鼓、笛といふ風なものを非常に多く用ひて、可なり日本人には矢釜しいと思はるる程强いものである。其音樂家の着物は勝手氣儘であつて、甚だしく穢らしく、見る人をして不愉快を感ぜしめる事が多い。願くは日本の長唄のやうに、何等か舞臺裝飾の一部分として見らるべき衣裳を着けたらばいゝかと思ふ。尙願くは此物は舞臺から除けて、後ろの見えぬ所、或は横の邪魔にならぬ所に置いて之をやつたらさぞいゝだらうと思ふ。尤も西洋の芝居を加味して、建築方法の改良されて居る所に於ては、横の見えぬ所に此音樂師を入れて居る處も少くない。

尚ほ胡弓は唱の主なる樂器であるが故に、好い役者は自分專屬の胡弓彈きを有つて居るのを常とする。

役者

役者は衣裳を着け鬘を付けて出る。面を付けて出る事は極めて稀である。それで役者の歌ふものには大體に於て二通りの種類がある。一つは唱と一つは白との二つに分れて居つて、自分の思つて居る事、自分の働き、稀なる場合に於ては其の叙景等までを役者が唱によつて發表するのであつて、此點は甚だ能に似て居る。唯能の如く地唄といふものは決して無く、全部役者がやつて了ふ。其唱ひ方の種類は極めて多くあつて、いろ〳〵の名、例へば西皮とか二簧とか云ひ、其中にも亦いろんな種類があつて、或は慢板、或は摇板、或は快板などと云つて大變極類が多いのである。役者の最も苦心する所は此唱にあるのである。故に役者といふよりも或る意味に於て立派な音樂家として聞くべきものである。唱の調子には各種あつて、極く靜かな崑調などあるが、之は今日殆ど亡なて居る。稍々鄙びたる調子の漢調といふやうなものもあるが、之は南支那で行はるる調子である。派手な强い調子の京調なるものがあるが、之が北京の都の調子であつて、支那の大部分に行はるるもので、流行に都

調子だけあつて綺麗で面白い。

大體芝居の說明は以上の如きものである。

背景

背景は前に舞台構造の中に申したやうに、全く無しで、舞台の後は羽目であつて、其羽目の上手下手に出入口があるだけである。日本の能では其羽目に松を描いたりしてあるやうに、裝飾を施す爲めに綺麗なる幕を掛けるやうになつて居る。批評すれば其幕の色が餘り强い爲めに、前の役者の仕草或は氣分を防害する事が多いやうに思はるる。寧ろ此幕といふものは極く古い形のやうに羽目か、極く鈍い色の幕を以てやりたいと思つて居る。然るに今日の芝居では大分背景を用ひるやうになつて來て居る。例へば室内に事件が起るやうな芝居に於ては室内の書割を用ひ、山に於て事件が起るやうな芝居をやる時には山の書割を用ゆる。然るに役者の仕草は全く日本の能と同じやうに約束から成立つのが多いのであつて、例へば外から内へ歸つて來た時の氣分を示す爲めには、唯戶を開け敷居を跨ぐ形を示すのみである。馬に乘つて山河を跋涉する時には、唯鞭を持つて居るのであつて、それで馬に乘つた氣分を示すのである。斯の如き約束から成立て居る仕草の後ろに一々に室内の書割があり、山や河

の書割があるとすると、約束から成立つて居る所の仕草が全く無意味に見ゆる。書割を使ふならば何故入口を立てないか。山の書割を使ふならば何故縫ひ包みの馬に乗らないかといふ事になる。書割なしに芝居を見せるといふ事に一種の味があるのであるから、支那劇の本當の味は書割が無いといふ事の方を私等はいいと思ふ。

脚本の種類

脚本は多くは能の如く一幕物に拵らへてある。種類は大體之を別けて武戯と文戯といふ二つに分けてある。文戯と云ふものは日本の人情物に當るものであつて、武戯といふものは日本の立廻り物である。芝居に使ふ題材は歴史を本としたる所の作が多く、又全くの造り話もある。極めてよく出て來るものは三國誌、水滸傳の如きものから西遊記の如きものであり、其他支那の有名なる小説を材料としたものもあり、又紅樓夢の如きものから取つた全く新しい材料もある。

〔鬚生〕の一例



王鳳卿の扮したる珠砂痣の韓員外

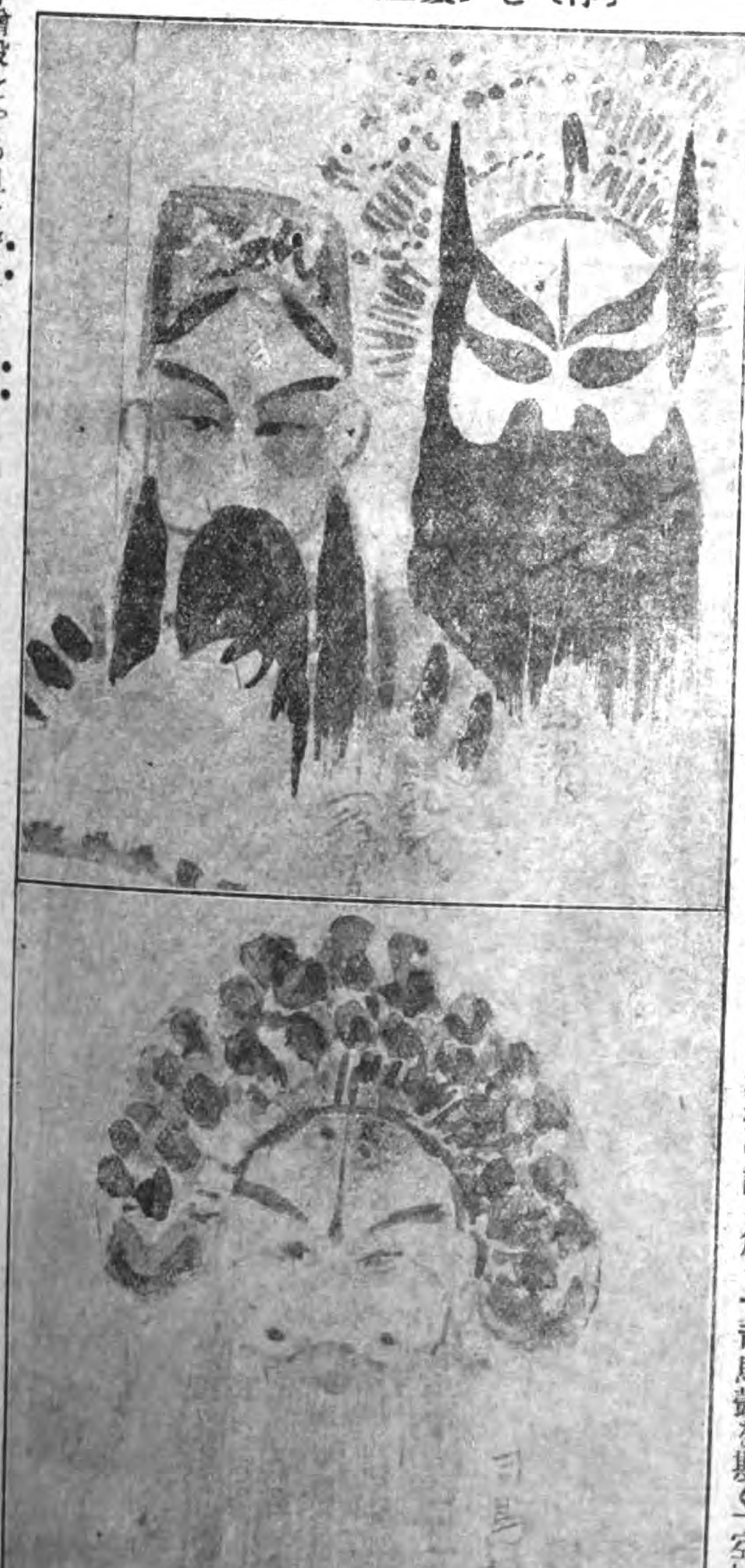
役者の種類

之は昔から區別があつて、其區別が四つに成つて居るのが普通である。一つは生、一つは淨、一つは丑、一つは旦の四つの區別がある。生は其中にいろ〳〵種類があるが、大體に於て顔を塗らずに出て來る男役であつて、それが年が若いものは鬚を着けて居ない。之を小生などといふ。壯年以上のものは長き鬚を着けて居る。それを鬚生などといつて居るのである。淨は顔をいろ〳〵の色で塗つて出て來る勢力のある人間

又は強き人物といふ風なものを演出する役目である。故に之を一名花面とも云ふ。丑は顔に僅かに白粉などを塗けたりして出て來る。滑稽役で所謂道化役者である。旦は女形であつて、若い娘役をやる女形は花旦などといひ、老け役をする女形を老旦、年増役をやる旦を青旦又は青衫と云ふ。今回來る梅蘭芳は旦としては支那第一流の名優である。

さてさういふ風に役者にはいろ／＼種類があるから、芝居の筋が何を主として居るかといふ事によつて、芝居も亦自ら種類別をされる事になる。其種類別けの方法を以て云ふと、鬚生を主として居るものはそれを鬚生劇と云ふ。例へば孔明が城の上で琴を弾じて空城の計を爲して司馬懿を欺く「空城計」に於て孔明は顔を塗らずに鬚を生やして出て來る役で、即ち鬚生である。司馬懿は顔を塗つて出て來る淨である。が此芝居は孔明を主として居るが故に鬚生劇である。次に武生劇といふものがある

〔淨〕と〔鬚生〕の他の例



空城計の馬稷と司馬懿（淨）と孔明（鬚生）

る。例へば「八大鎚」といふやうな劇で、其中に出て來る主なる人物は岳飛である。岳飛は可なり强い者であつて、人と大いに戰つて立廻りを爲す故に、此の如き生を武生といふのである。でして之を主にしてある故武生劇になる。といふ風な具合で其主になる役によつて、或は花面劇、老旦劇、青衫劇、花旦劇、小丑劇など云ふ風な分ちがある。

［武生］の例



沈高貴の扮したる冀州城の馬超

役者が舞臺の上でやるに苦心をする所は、唱と仕草との二通りに分れて居る事は前に述べた。所が劇の筋によつて唱に最も

重きを置く劇があるし、又筋によつて仕草の方に重を置かねばならぬものもある。其處で唱の方に重きを置いてゐる所の芝居を做唱戲と名づけ、仕草の方に重を置く方を做工戲と云ふ風に分類する事もある。

衣裳

衣裳は大體に於て元明時代の支那服から變化したものであつて、日本の今日の時代物に於て稍々足利德川時代の着物から變化した一種の芝居衣裳が出來てゐるやうに、支那劇にも一種特別な芝居衣裳が出來て居るのである。主として綺麗といふ點に重きを置いて居るのである。髪は之をスッポリ冠るものでなくて、毛を結はひ付けて結ぶものである。鬚は馬鹿に大袈裟に右の耳から針金で左の耳へ鼻下を通して橋を掛け、其橋に房々と長い毛を結はひ付けたものである。顔の扮りは之を説明するに役者の種類によつて分けよう。

［旦］（上圖）と［丑］（下圖）



打花鼓の鳳陽人と其妻

顔の扮り

生は役の手配によつて化粧を施し、眉の下より兩方の頬へ掛けて多少紅い色を施す。之れは日本人が見ても奇としない普通の事であるが、唯多少日本人が見て奇に感ずるのは、額の眞中に縦に薄く紅を施す事を普通とする點である。近來はそれを施さないものもある。又多少形を變へてやつて居るものもある。其の額の眞中に赤い紅を施すといふ事は、初めは多少奇妙に感ずるが、見慣れると其施し方によつて、男の犯すべからざる尊嚴又は優しき感じが現はれて、又取るべき所なしとせぬ。

旦は生と同じやうに眉の下より兩頬に掛けて紅を施し、そして額の眞中に桃の花の形位に赤い紅を入れる。そして眉は可なり大きく之を刷いて、口紅を濃くして所謂厚化粧である。但し老旦は斯の如き事をせず婆々らしく之を扮くる。

淨は顏を全く着色して居るものである。顏を大きく見せんがために額までも塗り潰して顏の部分に入れて終ふ。其塗り方は

〔淨〕の第一例



黃金臺の伊立

〔淨〕の第二例



上天臺の姚剛

いろ／＼あるが、大體に於て眼の邊りを馬鹿に大きく塗り、遂に耳の上に及ぼし、眉毛を馬鹿に太く塗り遂に額に及ぼし、鼻の兩端より頬に掛けて八字形に塗るやうなのが初まりで、次に複雜になつて來ると、尚額の眞中に八の字を入れ、眉毛と額との間の眞中に又逆さ八の字の線を施し、眼と鼻との間の八の字の間に又八の字を施すといふやうに段々複雜なる模樣が初まる。其模樣の色は或は餘あり、桃色あり、黑あり、紅あり、茶色あり、靑あり、綠ありなどして、其模樣の複雜なる事極りなく、有平細工と雖も之に及ばぬやうなものがある。其色を塗つたる顏は一見之を見ると何處が鼻で、何處が眼だか疑はしむるものにまで至る。日本の今日の隈取りは顏の筋肉の發達より現はるゝ凸凹を、或は力强き時は紅を以て之を示し、凄く見せる時は靑を以て之を示したのから初まつたのであるから、要するに日本の隈取りは解剖圖に於ける筋肉の位置を示したといふ事に基礎があるのであるが、支那の隈取りは之と全く違つて居つて、其隈取りが前述べた如く、或る場合には人間の顏を想像する事が困難な程變つて來たのであるが、其色の配合と形とを見ると、其處に何等かの强き印象を與へるやうになつて居る。例へば玆に有平細工がある、一つの有平細工は紅と赤とを以て綺麗に彩られて居り、一つの有平細工は綠と靑と黑とを以て毒々しく彩ら

れて居る時には、之を味ふ前に何やら違つた味の感じを與へられる。それと同じやうに支那の淨の隈取りは其色の配合と模様とを以て見ると、其處に何等かの一種の感じを與へる。其感じが恰度其役の性格に一致するやうに塗るといふ事に勗めたものである。かるが故に悪人にして常に歪める事のみをやつて居る人物などは、顏の色塗りが左右に歪んで全く均整的對照(シンメトリー)を缺いて居るものがある。神樣とか佛樣とか云ふ風なものを示す時には、印度佛像其儘に金色塗りをするの類である。淨の色塗りは此の如くであるが故に、日本人が之を觀ると全然面を被つて居るやうに見える。其で其色が餘りに強いために顏の色塗りから起る感じが遂に直接に其役の性格を現はして、先づ劇を見ない中に自づと顏の隈取りから性格を感じさせると云ふ風な一種の舞臺面上の技功が全く取去られて、唯奇妙とか、可笑しいとか、化物のやうだとか、馬鹿々々しいとか、滑稽だとか、巫山戯けて居るとかの氣分に葬り去らるゝ事が多い。然し之は味ふべき點があるだらう。大體に於て顏に白い部分が多いといふ事は悪人を示す場合が多く、黒い部分の多いものは愚直な者を示す事が多く、紅い部分の多い事は忠義の氣分を示す事が多い。

「淨」の第三例



陳永奎の扮したる白水灘の青面虎

茲に色塗りの後に附加して置くべきは紅面である。紅面といふものは元とは淨の中のものであつて、顏を全部眞赤に塗つて他の色を餘り交へない風のものであつた。卽ち關羽の如きは全然赤だけで一樣に塗るのが普通である。關羽の如き大忠臣は全然赤で塗るのである。此紅面はもとは淨の一部分であつたが、近來では斯くの如き性質の人物を演出するに、淨のやうな強い人物を演出すべき役者よりも、生のやうな理性的の事を演出する役者の方が都合がいゝものだか

ら、紅血は鬚生の一部分に組込まるゝやうになつて居る。然し之は失張淨の一部分として發達して來たものである。

丑といふものゝ顏の化粧方法は之と全く異つて居つて、大體に於て顏の中央の部分に白粉を施し、或は眼の廻りのみに白粉を施し、或は口の邊りのみに白粉又は墨を施しなどして居るのであつて、どういふ譯でさういふ風の化粧をするかといふと、顏を動かす度に、其動きが色がある爲に極めて誇張されて見える。で道化役者であるが故に、道化けた仕草といふものゝ印象を深からしむる爲に初めより用ひた塗り方であつて、舞臺效果の上に於ては道化たる時の氣分は非常によく現はるゝ利益があるけれども、道化けて居ない時には多少其色彩が邪魔になる氣味があるやうに思はるゝだらう。併し乍ら支那の芝居の脚本構造は全部唱で行くのであるからして、日本の能の如く、西洋のオペラの如く、常に唱つて居る人物又は白をいふ人物に見物の注意が惹きつけられつゝ移り行くから、道化役者が道化けて居ない時に、顏が塗つてあるからといつてそれが邪魔になるといふ事は少い。

〔丑〕の他の一例



空城計の老兵

道具及び小道具

道具といふものは、前に云つたやうな舞臺裝置なるが故に極めて簡單である。椅子、机、幕、城壁位なものである。机は室内に置いた時は机となり、野外に置いた場合には、此机一つを乗り超えて、行人が峠を踰して山の向ふへ行つた氣分を示す。椅子は室内に置かれた時は椅子となり、野外に於て椅子の上に立ち上つて見て、山の上から谷底を臨んだ形を倣す事も出來る。幕は鳥居形の竹に結び付けてあつて、それを机に結び付けて捲き上げれば政廳の模樣を示し、二つの椅

子の間に結び付けて幕を卸せば寢臺の氣分を示し、鳥居形の二本の棒を手に持つて、人の歩いて行く後ろより翳しかける時には輿に乘つた形を示すものである。城壁は極めて低き紺色の幕のやうなものであつて、入口が開いて居る。之を二人の人が引張つて大城壁と見せる事もあるし、此入口を開けて城門と見せる事もある。但し城壁の幕の高さは人間の背位であるが故に、其入口は僅に四尺位である。かるが故に其城門より大將軍の出入は如何にするかと云ふに、譯はない、簡單に其城壁の幕を持つて居る人が差上げて其下を大將軍が通るのである。偖て馬へ乘つて來た時は、馬はどう云ふ道具かと云ふに、それは唯鞭を持つて馬に乘つた時のやうに鞭を動かして歩けばよい。之れが馬に乘つて居ると云ふ約束である。馬より下りる時は下りた姿をする。馬へ乘る時は馬へ跨る姿をするのである。車に乘る時にはお伴が後から車の輪の書いてある旆を二本腰の邊りに差出す。それで車に乘つた形を示す。以上の如き極めて簡單なる方法によつて演出するのであるが故に、其處に約束といふ事を知つて居ないと支那の芝居が分らぬ事がある。尚之に附加へて云ふと、頭の上から白い御幣のやうな切紙を房々と下げると、それは此世に無い人間を示す約束である。但し日本の幽靈の如く足が無いのでもなく、他の點に於ては生ける人と少しも異る所が無いのである。

〔淨〕の第四例



李陵碑に出づる揚七郎の亡靈

元來は觀るよりも聽くもの

偖て支那の芝居を觀るといふ事は、本當は之を觀ると云つて

は不可ないのであつて、聽くと云はなければならないのである。役者の唱を聞くのが第一で、姿を見るのは第二の問題である。かるが故に北京正陽門外の廣和樓の如きは明の時代からの建物であつて、乾隆皇帝が之を改造し、而かも微行で屢々見に來られた芝居である。今日でも其建物が殘つて居るが、斯くの如き古い芝居であるが故に、見物席も古いやり方であつて、長きテーブルが舞臺面と直角に並んで居る。そして其の兩側に腰掛けが並んである。かるが故に見物人の顏は舞臺と直角に向つて居つて、見物人の一方の耳が舞臺に眞直に面して居るのである。之は即ち芝居を聽く爲めに最も便利であるからである。併し乍ら時勢の推移は此の如く頑固なる事を許さず、やはり段々に美麗なる舞臺面を見るといふ事になつて來たから、大抵の芝居は皆見るやうに見物席が出來て來た。舞臺は全部幕が無く、芝居が初まらうとすると音樂師が登場し、いろ／＼な樂器を持つて極めて單調なる、所謂音樂になつて居らぬ音を立てる。之は人寄せの爲めに音を立てるに外ならぬのである。さて其うちに大なる面を被つた高貴の人の姿をしたものが出て來る。之を五路財神と云つて、卷物を有つて來る。其卷物には天官賜福其他目出度い文字が書いてある。それを差上げ簡單なる舞を舞つて引込む。日本の三番叟と全く同じものである。之が濟むと芝居初まる。芝居は幾曲も幾曲も別々のものを演ずるのである。其間に幕無きを以て閉めず（新しき建物の芝居には幕あり、故に幕を閉める事あり）又能の如く間に狂言も挾まず所謂のべつ幕無しに藝題を遣つて居るのであるから、次から次ぎへと演じ行くので、初めて見る素人は、外題の變つた事に氣がつかずに居る滑稽もある。

私邸で芝居を演ずる場合には、主もな客が來ると、其客が來る毎に、芝居が途中であつても何でも構はず、一時一寸演劇を其位置に於て中止し、前述べた五路財神現はれ出で、入り來つた客の爲めに敬意を表し、其五路財神引込むと同時に芝居を續けて行く事がある。斯くの如き事に逢ふと、素人はいよ／＼迷つて終ふ。さて芝居の濟む一番仕舞には、以前は五路財神現はれ出て終演の祝ひ舞をやつたと云ふ事であるが、近來では之は全く無い。支那の芝居は一日に藝題を大概七つ八つ十位やるのである。

日本へ來る梅蘭芳

今度來る梅蘭芳は今年二十五才の女形即ち旦にして、寔に身體が優しく、顏が綺麗であつて、誰しも女と見間違ふ程である。此人の祖父さんは北京に於て立派なる所の役者であつた。

即ち役者としての名門の生れである。まだ年が若いが其藝と云ひ、其聲と云ひ、申分なき第一流の役者であつて、其人氣は恰度今の中村歌右衛門の福助時代のやうな人氣のある役者である。梅蘭芳は前に說明したやうな支那固有な劇についてすべて缺點が無いと云ふ外に、一つ獨特なる新しき藝風を發明して居るのである。其題材は祖父の有つて居つた院本であつて、今日世間に殘つて居らねものに取り、或は叉極く古い小說などに題材を取つて、樂音の調子を耳觸り好く靜かな音樂の調子となし、唱の調子は新らしく自分で案出して居つて、舞の手の如きは多少西洋の舞踏などを加味して居る點もあるし、衣裳は其當時の古き衣裳を用ひてやる。

表情の如きも今迄の舊支那芝居の有り觸れたる約束の表情と餘程變つて、心より表はれ出づる意味のある表情に富んで居る。恰度故市川團十郎が舊劇の好い所を參酌して、之に服裝などを故實に合はして活歷を演出したと同じやうな氣分があつて、其演出方法は團十郎の活歷より更に新しい所がある。之が梅蘭芳の獨特のものである。或は他日支那の芝居が現在の世界の大勢に合はないで、日本の能の如く一種の骨董的藝術品として實社會から離れて了ふ時期がありはしないかと思ふて居る今日、梅の新しいやり方は、此進歩しつゝある世の中と一致して進む事が出來るものであらうと、將來を希望して見て居る。日



梅蘭芳の扮したる黛玉葬花の林黛玉

本に來て日本の芝居を見、日本の踊を見たら尚ほ之に加味する所も多からうと思ふ。梅の新しい劇として有名なるものは「天女散花」「黛玉葬花」「嫦娥奔月」「千金一笑」などで、是等は皆梅の爲めに全く新しく作られたものである。今度梅が來れば必す支那舊劇に於ける梅の熟練なる手腕と佳き聲を聞く事が出來ると同時に、又新しき梅獨特の芝居を見る事が出來ると思ふ。聞けば王鳳卿も來るさうである。王鳳卿は今年三十二三かと思はるる北京第一流の鬚生であつて、頗る美男である。其人氣と云ひ、其藝風と云ひ、其格式と云ひ、恰度帝劇の今日の幸四郎といふ所である。此人の文戲は情溢るるが如くで、一つ一つ唱うたの變り行く節の間に言ふべからざる情がある。之は全く支那語の分らぬ人と雖も、分らない支那語を通して、直接に其人情を味ふ事が出來る藝である。

脚本は斯う云ふもの(脚本五六種の梗概)

▽**虹霓關** 之に出て來る人間の主なるものは二人で、一人は花旦であつて其れは東方氏である。一人は小生で王伯黨になるのである。筋は隋末に辛文禮が虹霓關を守つて居つた。所が遂に敵方の王伯黨の爲めに戰に敗れて戰死して了つた。辛文禮の細君の東方氏は女ではあるが武藝の達者で良人の戰死を大變口惜しがつて居つた。芝居の初まりは辛文禮お葬ひの場で、東方氏は喪服を著て葬ひの席上に列つて居たが、式が終ると自分は强いし武藝も出來るものだから其白裝束の儘馬に打ち乘つて(即ち鞭を持つのみ)槍を携へて戰場に飛び出して行くのである。と言つて舞臺上の仕草は唯上手より入り込むのである。故で舞臺に飾つてあつた葬場(即ち幕と机と椅子)を取り去る。其れ丈けで舞臺面には何も飾付をしないで山野の形と云ふ事に想像するのである。其處に以前の白裝束にて東方氏が現はれ、尚王伯黨も現はれて、其處で共に戰ふ。其戰の仕草と云ふべきものが最も見べきものなるが故に、此戲は做工戲である。さうして戰つて居る中に東方氏は王伯黨に惚れて了ふ。敵として戰ふ事と色男として愛すると云ふ事が仕草の中に交互に現はれて來る。此が最も技巧を凝らす所である。王伯黨は遂に捕虜となる。東方氏は王伯黨を虜としたが爲めに自分の亭主の仇は復する事が出來たが、然し色男であるが爲めに生命を奪らずに結婚して了ふ。此劇の主なる人物は東方氏であつて、東方氏が主なる故に花旦劇に屬するものである。今度梅が此劇をやると云ふ話である。

▽**玉堂春** 之れの主なる人物は青衫即ち女形で役名は玉堂春と小生即ち若男役の王金龍である。筋は玉堂春は藝者であつて、王金龍と云ふのと戀仲になつた。王金龍は餘り金の無い男

であつたが、遂に學校に行かねばならぬので、上京して了ふ。然し學費が無いものだから玉堂春が自分の櫛笄を賣つて之に貢いでやつた。斯の如き有樣になつたから玉堂春は遂に抱主の爲めに或人の妾にならねばならぬ事になつた。處が其旦那は家僕の爲めに毒殺されて了つて、其家僕は罪を妾になすり付ける。妾の玉堂春は捕へられて太原の獄屋に繋がるゝ事になつた。さうして裁判を受ける事になつた。其間に自分は身を妾にして了つて居るのであるからして、故らに色男の王金龍の所へは知らせもせず、又他日迚も王金龍と一緒になる時期も無いと思つて知らせもしなかつた。芝居は獄屋に繋がれたる所の玉堂春が今裁判官の前に引き出される所で開く。幕が開くと玉堂春が獄卒に引き出されて來る。此場合玉堂春は手枷足枷で鎖に繋がれて居るのであるが、其手枷足枷は非常に綺麗な、螺貝などを入れてある立派な板で作られて居り、其鎖は金を以て作られて居つて、總べて藝術的に美化して居る。形に於ては手枷足枷せの女囚ではあるけれども、見えに於ては女囚と思はるる所はちつともなく、一種の藝術美に美化されて居る。そこで裁判所に牽かれて來て見ると、其處の長官は誰あらう王金龍であつたのである。之より先き王金龍は玉堂春の貢いだ金で學問をして、遂に京師で文官試驗に好成績で及第して此太原の長官になつたのであつた。互に顔を見て昔の思を爲る。玉堂春は密かに自分の無實の罪なる事を頻りに訴へる。王金龍もそれに對して非常に同情はしたが、自分が關係があつたといふ事の爲めに他の臨席の裁判官が却つて疑ふ事無きかを惧れて、故らに一言も辯護しない。只一言人の居ない時に心からの慰めを玉堂春に與へた。玉堂春も無實の罪に服して死ぬ事は惧れない。只自分は妾になつて、其上斯くの如き犯罪をなす樣つた人間と王金龍に疑はるゝ事を惧れて居つた。だから只王金龍が自分の心を知つて呉れゝば滿足だと云ふ事を知らせれば足りる。此兩方の唱と仕草が最も聞くべき、又最も見るべき處である。殊に此女の唱は梅の得意とする所である。王金龍はわざと辯護もせずに居つたが、故らに其處を退場して了つて他の陪席の裁判官の判斷に任せると云ふのを以て終るのである。

▽**空城計**　この劇は鬚生の孔明が主なる人物である。其の相手として淨の司馬懿が出て來る。主なるものが鬚生なるが故に鬚生劇である。劇の起りは巳に馬稷が戰に敗れたと云ふ知らせが孔明の居る西城に傳へられた。然るに西城には兵隊が無いと云ふ。劇は城門の場所から初まるのである。孔明は獨り机に凭つて居ると屢々馬稷から敗戰の知らせが來る。街亭を失つたと云ふ知らせが來る。到底もいけない。之では[illegible]

と攻めて來るだらうと思ふが兵隊がない。仕方が無いから城を開けて空城の計をなすより外はない。只空城の計の旨く行くか行かないかは先帝劉備の遺徳に在る許りだと天を仰いで運命に任せる。其唱が第一の聽かせ所である。孔明が舞台の後ろに引込むと場面が代つて椅子やテーブルを片づけ、テーブル二つ積み、其前に城壁の幕を飾る。それで樓門の形となる。孔明が出て來て、老兵二人(丑)をして門を開けしめ、掃除をせしめ、自分は琴童二名を率ゐて樓門の上に上り即ちテーブルの上に上り琴を彈ずる。此處に司馬懿が大勢の兵隊を伴れて出て來る。(皆顏を塗つたる役者なり) 司馬懿は主もに白色である。何故かと云へば三國誌の本筋に於は敵である。即ち多少惡人であるから白塗である。それで司馬懿が來て門に入らうとすると、孔明はどうぞ入つて自分の琴を聞いて呉れんかと云ふ事を唱ふ。それが聽かせ所である。そこで司馬懿は或は非常の計畫があるので無いかと思つて遂に逃歸ると云ふやうな劇である。之などは王鳳卿が出すかも知れぬと思ふ。

▽硃砂痣(鬚生靑衫戲) 之は主な役者は鬚主の韓員外と旦の呉妻の二人である。韓員外は前に子が有つた人だけれども、其子は戰の時に何處かに見えなくなつた。又員外は細君も無い。其處でどうかして自分の子が欲しいと思つて、妾を一つ買つて見ようと考へて周旋屋に賴のむ所に此劇は始まる。周旋婆が韓員外の所に女を伴れて來る。其女は輿に乘つて來る。即ち車輪を書いた旗を翳した男が伴いて、自分は手でそれを押へて來る。輿を下りる即ち幕を二つに分つて身體を出す丈けで輿から下りた形を示す。それから敷居を跨ぐ眞似して室の內に入つて來る。婆は其女を置いて歸る。韓員外は其女即ち新しく雇入れたる妾が何やら浮かぬ顏して居るのを見て其故を訊く。さうすると其女の曰く自分の亭主が病身なるが爲めに貧苦に迫つて身を賣り、其金で夫の病を癒し度いのだと言ふ。そこで韓員外は同情して金を與へて歸してやる。次の場面になると病氣の亭主の所に細君が金を持つて歸つて來る。大變喜んで員外の德を感ずる。次の舞臺面になると又復び韓員外の家になる。其處に亭主が病氣が癒り細君と一緒に禮に來る。禮に來る時に、前に女が韓員外が自分の子供を失くしたので妾を置いて自分の子供を生ませ度いと言ふのを聞いたから、可愛い子供を買つて來て、之をお土產に持つて來た。其子供を見れば腕に赤い珠砂のやうな大きな疣があつた。それによつて之が本當の失くした子供であると云ふ事を知り員外が大變に欣ぶ。

▽五家坡 之は鬚生の薛平貴と其細君の王寶川の二人が主なるものである。之は平貴が戰に行つて居つて久しく歸らずにこ

十數年も經つて歸つて來た。軍に行つたものだから鬢髮共に白くなつて故郷の五家坡に歸つて來た。劇は五家坡の郊外に於て初まる。其處に平貴は歸つて來る。そこで其の郊外に於て王寶川が籠に菜を摘んで居る所に出つくわす。年が經つて居るから兩方で判らなかつた。そこで平貴は戯れに自分の名を匿くして、其女に金を與へてちよいと弄れて見せて、さうして一體此頃の女はどんな氣分のものであらうかと云ふ事を試して見る。と云ふのは自分の細君は孤閨を守つて居るかどうか心配な爲めに試す。處が女は非常に罵つて去つた。舞臺面が變つて自分の家になる。其處に王寶川が居る。平貴は歸つて來る。逢つて見れば今の女であつたと云ふので、孤閨を守つた情の厚い事を知ると云ふのである。此處に於て面白味は何處に在るかと云ふに、別るゝ時には兩方年は幾つか知らぬが、兎も角軍の大將なるが故に相當の年配になつて居らねばならぬ。それが十數年軍に行つて歸つて來たのであるから平貴は相當の爺になり、寶川も相當の年増になつて居なければならぬ。而も唱にあるが如く戰に行つた爲に鬢髮悉く白しで白髮爺になつて居る筈である。此白髮爺が中年増の王寶川をちよいと引つ張つて見る。或は家に歸つて昔戀しかつたと云ふ事を話して、密の如き戀が再び起ると云ふ事が如何にも不自然に感ぜしめるのである。其處を[illegible]では自ら歐つて、鬢髮悉く白しと云ふにも拘らず、其平貴はふさふさとした鬚を生やして全く若々しい姿で現はれ出づる。細君の王寶川も極く若い細君と云ふ形に現はれ出づる。之は劇のやり方は唱を聽かせる。唱の中には若き男と若き女との戀と全く同じやうな密の如き夫婦の戀の情が含まれて居る。唱が主であるが故に、其唱を助ける爲めには却つて若い男と若い女がいゝと云ふので若くして居る。無理に人物の年配に拘泥してない。斯くの如き妙な一寸日本に無い趣向が支那の芝居には屢々見らるゝ。之れ全く形を主にせずして唱を主にした結果である。

▽**黛玉葬花**　梅の獨得の藝なる所の「黛玉葬花」の事を一寸話して見よう。之は紅樓夢から材料を取つたものである。人物は花旦の林黛玉と云ふお孃さんと其の戀人の賈寶玉（小生）と云ふ二人が主なる人物である。而も此林黛玉が主なる人物である。劇は庭に賈寶玉が居る所へ林黛玉が來ると云ふのであるが、此劇は梅蘭芳が殊に自分の好みで作つたものであるから、立派な背景を用ひて、衣裳の好みの如きは大層昔氣分を見せるものであつて、全く普通の芝居の衣裳と違つたものである。所謂古裝である。賈寶玉は其處に花が散つて來るのを見、其花が人の足に踏み付けられて汚くなりはせぬかと思つて、之を箒で掃き寄せて、そして水葬をしてやらう、花も美人も大切にしてやるべきもの

と云ふ心持から、箒で水に流してやらうとして居る。其處に林黛玉が出て來る。其林黛玉は鍬を持つて嚢を掛けて出て來る。落ちた花を嚢に入れて出て來る。其時賈寶玉は花を掃くのを止めて本を見て居る所であつた。二人は互に顔を見合せていろいろ戀物語などあつて、其中に賈寶玉は林黛玉に花が可哀さうなるが故に水葬した事を言ふ。さうすると林黛玉は無慈悲の事をしたものだ、此邊は水も綺麗だが、流れ流れて汚い所に行つたら花も汚くならぬか、自分はそれが氣の毒な故に嚢に入れて、それを鍬で綺麗な所に埋けて永遠に花塚を立てゝ遣り度いと云ふやうな事を言つて、それに成り立つか成り立たぬか分らぬ互の戀物語を交ぜると云ふやうな非常に細かい情を示したものであつて、今までの支那の芝居に見られない細かい情を靜かに唱ふ艶つぽい劇である。此脚本の筋は割合に單調であるが、賈寶玉と林黛玉の花に對する同情と、其同情の深さが賈寶玉より林黛玉の方が深い事や、花物語の間に自分達の成立つか成り立たぬか分らぬやうな將來の戀などを交へて唱ふ所は、寧ろ西洋のオペラ氣分だが、然し此の方はオペラの如く合唱（コーラス）を用ふることなく、全然自分で唱つて行く所などは、音樂のみを主にするオペラよりも稍々劇に近くて一種の味があるものである。

附言

支那には其他女役者がある。それは日本の女役者と同じであつて男役者のやる通りにやる。漢口邊りには殊に多い。又支那には新劇團もあつて「カチユーシヤ」であるとか日本の「不如歸」であるとか、全く日本の新派及び新劇壇のやうな事を演つて居る。之は日本の新派と同じやうに取扱はれて居る。別に女優があつて、それは男役者と一緒に新派劇或は梅蘭芳のやうな活歴を演るが、之は極めて數が少い。


D-196
明けては櫻花乃春！
暮れてはベルリヤ乃春！
ベルリヤ笠にマツダランプの
丸型艶消を御併用
遊ばせ。御家庭の春
の空気は一新致します
TEC.
東京電氣株式會社
神奈川縣川崎町
東京出張所—銀座尾張町一ノ一
大阪出張所—西區阿波堀通一ノ五
門司出張所—西本町三ノ二九
名古屋、仙臺、札幌、大連、上海、
Day Time Makes Cherry Spring
Night Time Makes Veluria Spring

我國の軍事評論家

▽我國の軍事評論家について

法學博士　吉野作造

西洋には新聞や雜誌の記者に頗る軍事に精通する者があつて、此等の人の評論は軍事專門家の間にも、又一般政界にも傾聽されて居る。軍事評論家と云ふ文字に依つて我々は直ちに此種類の論客を聯想するが、かう云ふ意味の所謂軍事評論家は今日我國の操觚者に極めて乏しい。そこで我々は專門の軍人の中で、軍事上の通俗評論を時々公にする人々の間に軍事評論家を求めるの外無いが、此種類の人ならば今日相當の顔觸れを擧ぐる事が出來る。陸軍には佐藤鋼次郎、堀內文次郎、上泉德彌等の諸氏あり、海軍には佐藤鐵太郎、水野廣德等の諸氏がある。然し之等の諸氏は身軍事の要職に在り、又は在りしものにして、失禮な言分だが、他の廣汎なる修養を缺く所からして議論にどうしても偏する所あるを免れない。故に我々は之等諸氏の議論を專門家の立場としての說明として初めから割引をして聽く態度をとる。然し固より之に依つて大いに學ぶ所あるべきを期待してかゝるのである

が、其意味から言つても當今の所謂軍事評論家の評論家としての價値が頗る怪しげに思はるゝのは遺憾の次第である。諸氏は到底劍戟の人である。論壇に立つて尙故のロバーツ元帥、昨今のスマッツ將軍の向ふを張るなどは今の所到底思ひも寄らない。

予輩は比較的多く所謂軍事評論家の議論に耳傾くるを勉めて居るものであるが、彼等の好んで論題とする思想問題の議論に至つては、其無鐵砲なるに憤慨するよりも、寧ろ其稚氣滿々たるに一種の滑稽味を感ずる物である。然し彼等の純軍事上の意見に至つては常に眞摯な態度を以て之に臨むのであるが、其度每に予輩の遺憾とする所は、彼等の辯論其物が多くの場合に於て彼等の目的に裏切つて居る事である。彼等は軍人としての彼等の立場を主張せんが爲めに千言萬語を費しても、我々から見れば、それが却つて彼等の駁論の材料となるまいかと思はるゝ事がある。氣の毒だけれども一二の例を擧ぐるならば、本年正月頃或新聞に現はれた楠瀨中將の「戰後の國防觀」である。中將は高級軍人中比較的最も進步した思想を有つて居る人として予輩の私かに尊敬する人である。殊に同中將の支那並に西比利亞に關する意見に對しては同感の點が頗る多い。けれども同中將が從來我國の世界に重きをなして居つたのは一に軍備に在る、之を取り去つては歐米より敬重せらるゝ所以の何物も無くなる、隨つて歐米より依然敬重せらるゝが爲めには益々兵力を蓄はなければならないと言ふに至つては、吾人は只其思想の單純なるに苦笑を禁ぜざるを得ない。尤も同中將が擧國皆兵主義を主張し而も此目的は必ずしも徵兵制度に依るを要しないと主張せらるゝ見識は確かに一頭地を拔んずる物である。若し夫れ同じ頃之れ亦某新聞に現はれた福田參謀次長の「徵兵廢止反對論」に至つては滑稽を通り越して立派に愚論の部に入れなければならない。中將は云ふ、傭兵は生活の爲めにする謂はゞ職業である、徵兵は奉公の精神を基礎とする義務の履行であるから、戰爭の場合に於ても彼等は傭兵の如く死を厭ふことをしないと。茲に於て我々はそんなら將校も月給を與れずに皆雜兵と同一の取扱をせねばなるまいと言ひ度くなる。世界大戰の實驗は傭兵の失敗を語つて居るとか、英米兩國が中途から徵兵制を採用するに至つたのも之が爲めであるとか、ロバーツ元帥の徵兵論が南阿戰爭の際に傭兵の用ふるに足らざるを知つた結果であるとか、米國が戰爭の經驗に鑑み、今後永久に徵兵制度を持續するの必要を自覺したなど言ふが如きは皆事實の觀察を誤つて居る。斯く言へばとて予輩は直ちに徵兵廢止を主張せんとするのではない。只福田中將のような理屈では徵兵制度[illegible]の立たない、否、斯う云ふ牽强附會の理屈を捏ね[illegible]

制維持論には實際理屈が無いのではあるまいかと云ふ疑さへ唆られる。隨つて眞に國家の爲めに徴兵制度を維持し度いと云ふなら、もう少し筋の通つた議論をされた方がよからうと忠告したくなる。予輩は徴兵制度の存廢に就ては未だ十分の定見は無い。然し各國共に堅い約束の下に之を廢めようと云ふ話なら無論早速贊成していゝものと考へて居る。否らざるも徴兵制度は今日以上に大いに擴張する必要ありや否やに就ては多少の疑を有つて居る。けれども國民に軍事思想を注入し、又相當の軍事的訓練を與ふる事は常に必要と考へて居る。斯う云ふ點から軍事専門家より相當正確なる意見を聽いて自分の定見を立てようといふ際に、右述ぶるやうな暴論に接しては少くとも一時は一種の反感をさへ感ぜしめらるゝ。此點に於て予輩は所謂軍事評論家に對し、諸君の至誠より出づる言論が却つて時に軍事に對する國民の思想を冷却するの稀ならざるに反省せらんことを希望する。

福田中將は學校教育に於て一般軍事的訓練を與へんとするのが最近各國の趨勢だと說かれて居つたが、事實然るや否やは此處に爭はない。が只之を必要と考ふる點に於ては予は全然中將に同感である。只中將が此趨勢を以て徴兵制度維持の理由として居るのは、少くとも議論としては間違つて居る。何故なれば假令徴兵制度を否認しても、それは直ちに軍事的訓練の否認にはならないからである。

予輩は國民と軍事思想と云ふ問題に就ては常に斯う考へて居る、此問題に就て我々は常に二つの點に着眼する事を忘れてはならない。一つは國民に軍事思想を注入する事である。一つは軍人に(徴兵制度が今日の儘依然存續さるゝものとして)國民的常識を注入する事である。此兩面を巧くやらなければ國民と軍事との密接なる關係が成り立たない。而して今日の所謂専門軍人者流は國民に自己一流の軍事思想を注入せんこと許りを考へ、而も軍人に對する國民的常識の注入に關しては最も嚴重なる門戸閉鎖主義を取つて居るのは、洵に思はざるの甚だしきものではないか。

國民的常識を軍隊内部に注入するの必要に就ては、軍人以外の社會に於ては今日どの方面でも最も痛切に感じて居る。此點に就いて今日の軍事當局者が何時までも盲目であると云ふ事は、國家の將來にどれ丈けの禍根を貽すものであるかは最も慎重に考量して貰ひ度い。如何にして國民的常識を軍隊に注入し得べきかに就ては予輩に多少の意見あるも之は他日に期する。只此點に關する高級軍人の全然無理解なる事を斷言するに止めて置く。

次に然らば軍事思想を國民に注入するの方面は彼等の最も力

を注ぐ所たるに比例して成功して居るかと云ふに、之も實際の結果は全然當初の目的を裏切つて居る。故に此點に就ても予輩は軍事當局者並に高級軍人諸氏に向つて特別の反省を促し度い。之に就いても予輩に一個の成案があるが、主題の紛更を怖れて又他日に譲らう。

要するに軍事上の問題に就いては吾人の愼重なる講究を要すべき問題が澤山ある。此等の點に於て我々は專門家の說明を參考として與かり聽かんことを渴望して居る者であるが、今日まで此要求に應ずるものゝ殆ど現はれざるは甚だ遺憾とする所である。どうせ內部の細かい事は外間の素人には分らない。本當の軍事評論家は矢張り軍隊の畑の中から出て來るのを俟たねばならぬが、其專門軍人の言說と云へば悉く皆軍人と云ふ立場に執着した偏僻の意見のみである。近い例が巴里の講和會議で徵兵廢止が決議されたと云ふ噂が傳はると、ムキになつて常軌を逸した議論をする有樣は、恰も先年獨逸でエーリッヒ・秦兩博士の共同研究で六〇六號が發見されると、之が爲めに梅毒性の患者が減つては自分等が飯が食へないと云ふ懸念から一部の醫者が兎や角の批難を叫んだ醜態にも比すべきである。醫學の進歩は病人を無くする事を理想とする。軍備の目的は言ふ迄もなく平和でなければならない。自分達が飯が食へないやうな世の中になるのが自分達の努力の理想境だと考へる位の高い見識を有ち得るで無ければ眞に國家百年の計を談ずるに足らない。

△陸海軍出身の軍事批評家

鐵拳禪

一

國際聯盟の規約は、先づ先づ聯盟の中樞たるべき五大國の『白紙』の上に書かれなくてはならぬ。滿書の白紙の上で無ければならぬ事は、三尺の童兒でも知つてる處だ。それにも拘らず大學教授から大統領になつた大の男や、辯護士から大宰相になつた苦勞人が、米英の利害を摺り込んである大活字のインキの乾かない紙の上に書かうとして焦燥つて居る。その大活字が邪魔になつて、何うしても理想通りに旨く書けないのだが、無理にも旨く書かうとして居る。が、一たび巴里の市街でも散步して、ペンキ屋が看板か何かを書き直す爲に、全部を白く塗換へ、その上に描かんと欲する所を描いてる有樣を見たら、それから悟入して、全然自國の利害を塗り潰して掛からねば駄目だと云ふ事に氣が付くだらう。

併し與へられた題目は、そんな事では無かつた。國際聯盟が提唱されて、軍備縮少乃至徵兵制度撤廢と云ふ方面にまで火の手が揚つて來た。この際さうした思想に對する消防夫の任務を勤めんとし、若くは勤めつつある軍事批評家、換言すれば陸海軍の論客と云ふ者を評論して貰へまいかと云ふ事だつた。

國際聯盟と軍事批評家――身を軍籍に置く者が、如何に論客であつても然う大膽な事は云へる筈のものでない。怪氣焰の程度も略知れ切つてゐる。豫後備役の者は現役に比して氣焰を吐くに餘程樂であらうが、それでも思想の自由は拘束されて居ると見なければならぬ。徵兵制度撤廢などと云ふことを自由に、放膽に論議する事もなからうし、又然う云ふ頭にもなつて居なからうと思ふ。それは職業的軍人として、飯を食つて居るとか居ないとか云ふ問題を別としても、多年さう云ふ風に教養され、訓練されて來たのだから、その殼を脫する事が容易に出來ないのだ。

彼等の軍事批評と云ふも、それに對して徹底的な批評をすると云ふよりも、寧ろ軍備の充實とか、兵器の改良とか、國防上乃至作戰用兵上の見地から出立した論說が多かつた。さうした論說は、彼等の職業上無難でもあるし、又職業上それを鼓吹するのが當然でもあつた。偶ま他に反駁の態度を執る者があれば、それは軍國主義に對して下された鐵槌を受け返して、その鐵槌を以て反對に敵手の額を撃たしめようとするのだつた。で、彼等は縱令國際聯盟其物に公然反對しないまでも、矢張國家存立上から徵兵制度撤廢を不可なりとし、國防充實の必要を力說するに極まつて居る。それ以外の新說を彼等に聽かうとするのは、聽かうとする方が間違つて居るので、その餘りに軍國主義の黴の生えてるのに失望するだらう。

二

吾輩は彼等の論する所が千篇一律で、何う云ふことを書いてるかと云ふやうな讀まない先の興味を唆るものが無いので、或必要の外は餘り讀まない事にしてゐる。實は然う極めてるので無いが、讀んで見ようと云ふ氣に何うしてもならないのだ。彼等の軍事批評と云ふやうな樂屋落のものを、一般的讀物としようとして書き上げた論文よりも、軍事界の新智識、新研究、新發見とでも云ふやうなものを紹介した物の方が面白い。だから、樂屋落の軍事批評よりは、軍事紹介の方が、一般的讀物として、讀者の興味を唆ると云ふことになる。又それが、彼等の柄にも嵌まつてゐる。

特に彼等の新研究と、專賣特許的に銘を打つ程のもので無からうが、先年小栗孝三郎、子爵小笠原長生等が、軍事紹介物の

著述を發表して、讀書界に知られた。櫻井忠溫の『肉彈』、水野廣德の『此一戰』のやうな戰記物が、又馬鹿に賣行が好かつたので、急に無名の將校の市價を暴騰せしめた。市價の暴騰は、必ずしも彼等が職業的軍人としての地位を昂騰せしめた譯では無かつたが、無名を化して知名としたのは事實だつた。

小栗は軍事批評の筆も執り得る人だが、努めて筆を執らうとはせぬ。小笠原は肩の凝る論文よりは、寫生畫でも書いて居れば、それで滿足だと云ふ風がある。彼れの繪畫乃至圖說は、彼れの軍事的餘技で、そして彼れの趣味である。水野は戰記物や隨筆だけでは物足らず、その蘊蓄を論文に傾倒しようと云ふ風がある。小栗などに比べると、健筆縱橫、叱咤風生と云ふやうな處がある。

三

現に半職業的に盛んに筆を執つてるのは、水野廣德と佐藤鋼次郎の二人であらう。尤も佐藤は現役を離れて退屈でもあり、何等か不平を氣焰で慰めようと云ふ風も見え、又暇になつたから、之までの研究を統一し、整理して發表するのだと云ふ風も見える。何にしても閑人の研究と云ふ處がある。水野はそれと反對に、忙裡の寸暇を偸んで勉强する。抑へんとして抑へる事の出來ない智識慾の爲に東西の思想を攝取し、發表慾の爲に筆を執ると云ふ熱心が籠つてゐる。

彼れが原稿料を受けず、著書の印税收入を自分の衣食にのみは收めず、水交社の維持費などに寄附してるさうだから、彼れの原稿稼ぎを以て、直ちに半職業的と云ふは當らないかも知れぬ。が、彼れの著書には、軍事專門家の研究と云ふよりも、文學的製作品と云ふやうに臭味が芬と匂ふやうに感ずる。それだけ、職業的に筆を執つてゐる、駆け出しの青い者よりは、確かりした、達者な處がある。

『劍を捨てた時、筆でも飯の食へるのは水野だ。』から云つて、彼れの同僚が彼れの文藻を賞揚したのを聞いた事がある。文藻に富んだ者は、職業的軍人として上官の覺えの芽出度く無いものだが、彼れの頭腦才幹は却て之が爲に見出され、適所に拔擢されると云ふ風に、順調な昇進を經て行く。それは包容の裕かな海軍だからであつて、偏狹な陸軍では或は容れられないかも知れぬと云ふが、彼れの常識は筆を執るが爲に脫線すると云ふやうな事が無いから、自然排斥されそうな憂き目にも會はないのだらう。併し、何分にもまだ大佐だ。これからの運命が、彼れを職業的軍人としての最高所にまで持つて行つて吳れるであらうか。それは分らぬ。

佐藤は可なり有望視されたやうだつたが、伸びさうに思はれ

た生命の芽が惡戯者に丁切られて了つた。丁切られた芽は、それで枯死すると思ひの外、軍事批評家と云ふ新しい芽を吹いた。燃えるやうな氣焰の芽は、鮮かな色彩を以て世人の視野を刺戟した。唯それだけだつた。青年の血を躍らせるやうな新味も、讀者の眼を吸ひつけるやうな魅力も、感覺の惑溺を買ふ豁味も、彼れが論文の中から發見し得なかつた。

勿論彼れは人氣の爲に書いて居るので無からう。彼れの論文が人氣を博し得ないのも、彼れに於ては何等の痛痒を感じない事だらう。が、少くとも人氣の引立たないのは、時代思想と懸け隔つた、權威の纖弱な處があるからでは無からうか。他面彼れが文章の、餘りに索莫として滋味に乏しく、平板單調に失するからでは無からうか。何れにしても、黴臭いと見られるだけが損な立場にある。

佐藤は軍備充實の鼓吹者だ。その云ふ處、殆んど國防用兵の事で持ち切つてゐる。軍備を國防の必要上どの程度まで擴張する。若くは實際どの程度の充實を必要とする。飛行機を幾百臺建造する。艦隊の編成を何うする。さう云ふやうな事は、無論軍事專門家として研究しなければならぬ問題だが、更に軍政を何う改革するかと云ふ事の內面的觀察も忽緒に附する事は出來ぬ。彼れは軍備の充實乃至擴張を主張すると同時に、軍政の缺陷に對しても痛烈なる論評を加へて貰ひたいのだが、その方面に就ては餘りに云ふ事が尠いやうだ。尤も彼れは軍籍に在る關係上、さうした觀察を無遠慮に發表する事を憚るのかも知れぬ。下手に攻擊的態度に出ると、不遇に終つた太田三次郎の轍を踏むの虞れもある。そんな熟慮を以て、胸算用の上に筆舌を愼重の秤で行つてるのかも知れぬ。それを無難の道とするも、痒い處に手が屆かない憾はある。

彼れは軍事上の智識に經驗の草鞋を穿かせて、行く處まで行かうとしてるが、水野はそれ以上に何か思想で物を言つて見たいと云ふ處がある。彼れが軍國主義の衛角で以て、文博姉崎の人本主義に突つ掛つたから、それを言ふので無い。何となく佐藤の軍備充實と云ふやうな單純な調子で、論陣を押し進めたくないと云ふ風がある。奧底の方に光つてる或物がある。

四

今日北守南進論などを擔ぎ出した所で、格別耳を傾ける者も無からうが、その北守南進論がまだ淺漬の新味を以て人の口の端に上つた時代には、職業的軍人で軍事批評と云ふやうな物を新聞雜誌で發表する者は無かつた。偶ま陸軍の東條英教、海軍の佐藤鐵太郎等が比較的忌憚なき批評を國防の上に加へて、人意を強からしめた。

殊に佐藤は新進氣鋭、海軍部内にも羽振が利いたので、海軍擴張の必要をきびきびと論じて居た。雜誌の方で、却て官憲の眼を怖れて伏せ字にしなければならぬやうな假想敵國の問題なども、何の遠慮もなく痛論したものだ。それ程彼れは國防に對して一家の見を持つて居ると云ふ自負もあり、確信もあつた。國防論と云ふ纒つた著述もあつて、相應に賣り出して居た。此頃はその名だけが弟分のやうな鋼次郎に聊か御株を奪はれた觀があつて、國防に關する放膽文は餘り書かぬやうになつた。併し小笠原長生の妹婿で、義兄弟共に筆を揮ひたがる方だから、執筆を打切つたのでも無からうが、ちと地位が昇り過ぎたので、うつかりした事が云へないと云ふ點もあらう。

佐藤の氣焔を收めて、取澄まして居ると反對に、上泉德彌、堀内文治郎等は現職の水陸を離れると同時に、世間的活動を開始した。

堀内は信水と號し、筆を執るには執つても、詩歌書畫と云ふやうな趣味的方面には悠游するが、半職業的に軍事批評をやるだけの熱心が無ささうだ。それでも著述を公にしたり、ちよいちよい軍事批評を試みたりするが、突つ込んだ批評を下すことの出來ないやうな境遇に置かれてあるので、その筆鋒が兎角鈍りがちだ。一寸突つ込んだ事が言へさうであつて、それが言へないと云ふ風がある。

上泉に『豪傑』は動かない市價となつて居るけれども、その豪傑を看板として無鐵砲な事を敢てする譯にも行かぬ。根が義勇奉公の鋼鐵で鍛錬された正宗だから、平時は恩給年金の鞘に納つて、軍事思想の鼓吹にその鞘を拭ふと云ふ以上の切れ味は示さぬ。縱令その主張に多少の差異はあつても、海軍出身は海軍擴張、陸軍出身は增師と云ふことに反對せぬを無難なりとする。衣食上無難なりとするばかりでなく、彼等の頭腦は、軍備の縮少を以て直ちに國防の缺陥を豫想し、それを國家の深憂なのと考へるやうに馴されて居るから、一歩進んだ新思想を取り入れることに非常な苦痛を感ずる。新漬の嫌ひな者が、新漬を食へば嘔吐する。生半可な世界思想は彼等に禁物だから、それを取つて食はうとはせぬ。

地位を得なければ、鳴りさうた田中義一も處を得れば軍閥の寵兒で納つてゐる。青年團を統率し、少年を訓練して、全國を擧げて軍國主義化しようと云ふやうな、虫の好い考を以て猛進するやうに見えた。今日でも彼れはその考案を棄てずに、著々として步武を進めつつある。著書に、演說に、彼れはそれを力說して、實行の手を少しでも緩めようとはせぬ。かう云ふ手合が、陸軍に頑張つて居る以上、軍備縮少と云ふやうなことは殆

んど問題とならないだらう。

陸海軍出身の軍事批評家と云ふも、論客と云ふも、要するに、皆一様に軍備充實論者だ。國際聯盟が何うあらうと、軍備を縮少し、徴兵制度を撤廢して、其處に安泰に國家が存立し得ると考へる者は一人も無い。それ程に彼等の總てが、軍備を重要視して居るのだ。

五

先年偶ま職業的軍人の中から『軍政改革論』の西本國之輔を出したが、その時彼れは最早職業的では無かつた。軍事を痛論するに就て拘束されない、自由の環境を作つて居た。其後ち著書の有効性を發揮するやうな糺彈を續々送つて居たが、軍國主義中心の世界を破壊し、それを改造すると云ふ事は不可能だつた。それに彼れの改革論には、まだ研究の足らない處があつて、改革論としての强靱性が缺けて居た。併し彼等の蝸牛的偏見、井蛙的無智を開くの刺戟とはなつた。

頃日彼れは普通選擧運動の指揮長として日比谷に現はれ、軍人會當時に仕込んだ手並をその馬術の上に見せたさうだが、軍政改革の方は暫く御留守になつて居た。今少しく改革論の馬首を立て直して、世界の大勢を偵察し、それに順應した策戰をやつて見たら何うか。

實際陸海軍政に對して改革すべき事は多々ある。改良を要するは、單り兵器のみで無かつたのだが、兵器は改良されても、情弊は其儘となつて居た。軍事批評家と稱する者も、軍備の充實と兵器の改良に就ては、可なり八釜しく云つて居るが、情弊の剔抉には至極冷淡だつた。陸海軍の事とし云へば、到底門外漢の窺ひ得ないもの、素人の手を著ける事の出來ない物のやうに、一種の權威を以て威しつけて居た。從つて軍政局面にも、文官をして當らせることを避けてたから、内部から改革するを至難とした。尤も改革の名に依つて行はれた改革はあつたが、それは皆彼等に權威づけ、勢力づけ、そして彼等を有力の地位に置く爲のものに外ならなかつた。

民本的解決と云ふ事が近時の流行となつたが、縱令軍備を現狀の儘に維持するとしても、矢張民本的解決に向つて進むやうな方針を取らねばならぬ。軍事教育機關の改廢とか、職業的軍人と義務的軍人に關する待遇方法とか、新に研究を要する事が多々あらう。

就中速かに解決を著けねばならぬのは、從卒制度の改善である。從卒は兵卒中の成績の好い者を選拔して充てるのだと云ふが、それは必ずしも名譽でもなく、殆んど奴隷として扱き使はれると云ふやうな境遇に置かれてある。軍隊に於ては勿論、家

庭の私用にまで使役される。如何なる名義を以てするも、義務的軍人を驅つて奴隷同様らたしめるは、許すべからざる事では無いか。

斯様な事は、國防方針に關する堂々たる論議者から見たならば、些細な問題かも知れぬ。が併し、些細な問題として等閑に附することは出來ぬ。民本的解決は、先づこんな低處から手を伸ばして行かなくてはならぬ。何時まで軍閥の權力を以て、横車を押せる者でも無からう。軍事批評家の三思すべき點も、亦こゝに潛んでゐる。(大正八・三・一八)

▽軍閥的精神の興奮と煩悶

室伏高信

(一)

日本における軍事批評家とは主として軍人――恩給軍人の諸君であります。革命前の獨逸と同じように、主として恩給軍人の一團の諸君が日本における軍事批評家の地位を獨占してゐるといつても差支へない位ひに、恩給によつて衣食する軍人諸君が、日本の軍事批評界において跋扈してゐることの事實を見ます。單に軍事批評においてだけではない。政治問題にも、外交問題にも、社會問題にも、これ等の恩給軍人の一團の勇敢なる諸君の跳梁してきたことは、最近においてわれ〳〵の最も苦々しく思つてきたところであります。何故に苦々しく思つてきたか。この點を説明するためにはわれ〳〵は先づ獨逸の恩給軍人の行動について少しく語る必要があります。何となれば、日本の恩給軍人または現役軍人の諸君の政治的、社會的及び軍人的批評は、たゞあらゆる意味において獨逸の恩給軍人または現役軍人のそれをそのまゝに飜譯してゐるものに過ぎないからであります。

(二)

革命前の獨逸においては、いふまでもなく二大潮流の對抗があります。その一つを代表するものがソーシアル・デモクラシーであり、その正面に立つてゐるものが資本主義的軍國主義であります。さうしてこの資本主義的軍國主義が革命前の獨逸に覇權を掌握してゐたものであることはこゝに更めていふまでもないことであります。この資本主義的軍國主義――然り、資本主義的軍國主義である。これを單に軍國主義といふよりも資本主義的軍國主義と稱することが適切であります。福田德三先生が英米の資本主義を攻撃すること甚だ急であつたにもかゝわらず、獨逸の資本主義について少しも論及するところなく、獨逸

には資本主義なるもの存在しないかのごとくに論じたことは先生の論文の一大缺陷であると思ひます——は、單に軍事上においてばかりではなく、社會上にも政治上にも産業上にもまた對內的にも對外的にもその支配力を及ばし、その精神を鼓吹するに努めてゐます。革命前の獨逸においては資本主義と軍國主義とは決して別物ではなくして一體であります。即ち軍國的及び資本的精神のもとに組織されたる政治的、軍事的、社會的、または産業的のあらゆる國民生活の全體系を指して軍國主義または資本主義的軍國主義と申してきたのであります。この軍國主義のプロパガンダの任務を擔當してきたものが、例の汎獨主義のシエルンドルフだとか「大陸の幽鬼」のレベントロウだとかの勇敢な恩給派の一團であります。それ等の勇敢なる恩給軍人の一團の諸君の軍國主義のプロパガンヂストとしての活動は實に目醒ましいものであり、社會民主主義の勢力に對抗して、組織的にまたはプロパガンダによつて獨逸の軍國的社會征服を行ひ更に獨逸のために世界征服、即ち獨逸の資本的及び軍閥的勢力のために對內的及び對外的軍國主義のプロパガンダを支持してきたのであります。それゆゑにその對內關係において彼等の敵とするところのものは社會民主主義であり、對外的に目的とするところに外國の侵略または征服であります。この目的のためのプロパガンヂストとして立つてきたものが即ち獨逸の恩給軍人の一團の諸君であります。

（三）

この獨逸の軍國主義を輸入したものが日本の軍閥の諸君またはそのスポークスメンの諸君であります。それ等の諸君はデモクラシーの思想をもつて外國からの舶來品であり、從つて日本の國體を破壞するものであると主張します。丁度グラッドストーンが社會主義をもつて獨逸の思想であるとして排斥したように、また獨逸の祖國黨が議會政治をもつて英國からの輸入思想であるとして排斥したように、日本の恩給將校の一團の諸君もまたデモクラシーは外國からの舶來品であるとしてこれを排斥します。日本の一恩給將校たる陸軍中將佐藤鋼次郎君が尾崎行雄氏の政治論を批評した言葉をもつていへば、『デモクラシーの主張は「非國民といはれても辯解の言葉がない、』とされるのであります。然り、彼等は背後にサーベルの威力、軍閥の威力を挾みながら、高慢なる態度をもつて日本の若きデモクラシーの萌芽を威嚇してきたのであります。さうしてその威嚇的——態度まで軍國主義的である——のプロパガンダによつて日本の軍國主義を確立しようとしたのが例の恩給軍人の一團の諸君であります。彼等の間には決してシエルンドルフやレベントロウ

ヤベルンハーデーのような優れた人物はゐないにしても、その期するところはシエルンドルフたり、レベントロウたり、ベルンハーデーたらんとするものであることは明瞭にそれを觀取することができます。即ち彼等の期するところは軍國主義のプロパガンヂストとなることとであります。シエルンドルフやレベントロウやベルンハーデーの書物が軍國主義のプロパガンダとしてよりもより以外の價値と意味とのないごとく、日本の恩給將校――現役將校も加へて、日本の軍人批評家或は軍閥批評家の一團の諸君の發表するところの諸論文は、たゞ日本の軍國主義のためのプロパガンダとしての價値と意味とがあるのみであることは私の指摘するまでもないことと思ひます。從つてそれ等の諸君の目的とするところは日本のための貪慾なる侵略とその對內的關係においての社會、政治及び產業の征服であつたことは、獨逸の恩給軍人の目的とするところと全然同一のものであることに何の不思議もあるべきではない。彼等の大亞細亞主義といひ、大日本主義といひ、國際聯盟反對といひ、徵兵制度維持論といひ、國家總動員といふ、みなこの日本軍國主義のプロパガンヂストとしての心理から生れ出でゝきたものにあらさるはない。それゆえにこれ等の恩給軍人の一團の諸君の諸論文のごときものは、論文といひ、批評といふほどの價はない。たゞプロパガンダである。日本軍國主義のためのプロパガンダである。もつと正確にいへば日本の軍閥のためのプパガンダであるといふべきかも知れない。他の言葉をもつていへば、彼等の目的とするところは、日本の軍閥の永存のためと、さうして日本をして第二の普魯西たらしめることとであります。

(四)

彼等は普魯西的精神に興奮しながら「大日本」を高調します。「我が國」を高調します。然り、彼等の興奮してゐるのは普魯西的貪慾なる軍閥的の精神であります。彼等の思想は高天原的といふよりは寧ろ普魯西軍閥的と申すべきであります。レベントロウやベルンハーデーやシエルンドルフやフライタツハ・ローリングフオーヘンの翻譯であるに過ぎない。さうしてこの普魯的精神が直に日本に適するものであり、またそれのみが日本の國體に適するものであると吹泥するのが日本の軍國主義のプロパガンヂストの一團の諸君であります。その一團の諸君は現役連の軍閥一派の軍國主義的政策と相俟つて、その機關となつて、日本の軍國主義建設のために勇猛に活躍してきたことが過去幾年間の實際であります。その結果は決して無效果ではない、日本の軍國主義は確にある程度の果實を結んでゐます。けれども普魯西的理想に向つて進むものはまた同時に普魯西的の運命

に遭遇すべきものであることも頗る見易きの道理であります。普魯西はその軍國主義によつて僅にある程度の膨脹を遂げてゐます。けれどもその最後はどうなつてゐるか。その最後に到著する前にどうであつたか。革命の前、獨逸の社會民主黨の一議員は帝國議會の壇上から恩給將校連のプロパガンダを指摘して次のように述べてゐます。『獨逸が侵略主義の國家であることの印象を全世界に與へるに至つたものは實に恩給將校の汎獨逸的プロパガンダの結果である』と。この言葉は極めて味ひの深い言葉であります。さうしてまた移して直に日本の恩給將校連を戒めるの言葉となすことができるのであります。日本は、世界の人々に、恐ろしい侵略的の國家であるといふの深い印象を與へてゐます。日本軍國主義の印象は全世界の人々の心に深く刻まれゐます。リープクネヒトが日本を指して第二の獨逸であると論じたことは、決して彼れ一人の印象ではなくして全世界の人々の印象であると申すことができます。このことについては私は嘗つて「東方時論」において私の意見を發表してゐるからことにはこれを繰返すことをしない。けれどもこのような印象を全世界の人々の心の奧底に植えつけたものは抑も何人の責任であるか。それは日本の全政治家の負はなくてはならない責任であることは勿論である。加藤高明子の所謂第五號の對支要求のごときものは、この意味においてわれわれの強く指彈するところであることは勿論であります。また日本の軍閥の醜惡なる諸政策が遂に世界をしてこの印象を與へしめたことの最も有力なる原因であることも勿論であります。けれどもまた更に例の恩給派の軍人諸君粗暴にして高慢なる軍國主義のプロパガンダの責任の與つて大なるものであることもこゝに斷言するに躊躇するの必要はないと思ひます。今や獨逸――日本の軍閥の思想の源泉たりし資本主義的軍國主義の舊獨逸は滅亡してソーシアル・デモクラシーの新らしき獨逸が生れつゝあります。ファナアの言葉を借りていへばビスマークの獨逸が滅びてゲーテやシルレルやカントやレッシングの獨逸が生れつゝあります。その美しき獨逸においては、醜くき恩給將校のプロパガンダもまだ跡を絶つて、そのカイゼルは放逐され、その軍閥の諸君は小蟲の恐れおののくがごとくに社會民主主義の大潮流の前に恐れおののいてゐます。然り、日本の軍閥及びその軍閥の代辯者の理想國は既に悲慘なる破滅を遂げてゐます。ドイッチ・アーベントの酒に醉ふた一團の諸君、Deutschland über alles の思想に興奮してきた日本の軍閥の一團の諸君の感慨果して如何。

(五)

獨逸の軍閥が仆れて、最も深い煩悶に陷つてゐるものが日本

の軍閥、その軍閥のスポークスマン、及びその軍閥のプロパガンヂストであることはこゝに指摘するまでもない。この煩悶を最も雄辯に表明してゐるものは、上杉愼吉、長瀨鳳輔氏等の普通選擧論と佐藤鋼次郎氏の皇室中心社會主義とであります。上杉氏の「國體論」上からの普通選擧論が、彼れの生命とするところの獨斷的、感情的、空想的、且つ舶來的「國體論」の傷ましき破滅であることは既に他の機會において私の意見を述べてゐるからこゝにそれを繰返すことを避けます。長瀨氏の普通選擧論なるものに至つては一層傷ましい心理からの產物であります。彼れの主張してゐるところによれば、彼れの普通選擧の理由とするところは、對內的關係ではなくして一切對外的の必要からである。即ち對外的の必要からして日本は普通選擧を採用しなくてはならないと。世界始まつて以來の名論といはなくてはならぬ。たゞに名論であるのみではなく、長瀨氏のように、國際聯盟が空想であるとして一切の國際的民主主義の思想に反對するほどの勇者が、何を苦しんで外國に對する義理合ひからの普通選擧を主張するのであるか。佐藤鋼次郎氏の「皇室中心社會主義」なるものに至つては、また更に更に傷ましき軍閥心理の表現でなくてはならぬ。然り、「皇室中心軍閥主義」から「皇室中心社會主義」への飛躍！　さうして社會主義を主張してデモクラシーを排斥！　思へば獨逸の革命は何人に對してよりも日本の軍閥に大なる影響を與へたものである！　さうして獨逸の革命、外國の革命が日本の「國體論」者の信仰を轉覆したる力の偉大であることを見よ！　またさうして日本の「國體論」者の謂ふところの「日本の歷史の精神」なるものが、眞の日本の歷史の精神であるかまたは獨逸の歷史の精神であるかを一考せよ。

六)

斯くして恩給將校または軍閥のスポークスマンの諸君が明示的または默示的の兩方法において彼等の苦悶の如何に傷ましいものであるかを物語つてゐるのに對し、今日においても尙ほ敢然として軍國主義のために氣を吐くほどの强勇者は海軍大佐水野廣德君であらう。彼れが中央公論一月號において「我が軍國主義論」と題して述べてゐるところは實にこの「勇氣」を證據立てゝゐる有力なる紀念物であります。けれども勇氣あまりあるもの往々にして思想足らず。水野氏に從へば軍國主義には二つの種類がある。その一つは對內的であつて國家の强盛のために主張するもの、他の一つは對外的即ち之を主張して他國の强盛を阻むものだとのことである。繰返していへば水野氏の對外的軍國主義とは主として英國が獨逸の强盛を憎み、嫉み、これ

を阻むために主張するものであり、從つて嫉妬的軍國主義だというのである。隨分色々な軍國主義もあるものだ。この調子でゆけば福田徳三氏の排英米的資本主義論は差當り嫉妬的資本主義とでもいふべきものであらうし、水野氏等の排民主主義論は民主主義の盛んなることを嫉みての嫉妬的民主主義であるとでも申すべきであらう。また水野氏に從へば獨逸は英米佛伊の何れよりも强かつたものであり、その强かつたとはみな『軍國主義による國民訓練と國家組織と、社會制度の賜と云ふべきである』と。獨逸の軍國主義が其ように立派な功績のあるものであるとする水野氏は惜いかな更に二つの重要なる獨逸軍國主義の功績を付け加へることを忘れてゐます。『獨逸の革命もまた獨逸軍國主義の功績である。次ぎに獨逸が今日無條件降伏をなすの止むなきに至つたこともまた獨逸軍國主義の功績である』。水野氏はこういはなくてはならぬ。非論理に對する論理的良心の爲に。

(七)

ありていにいへば海軍大佐水野廣德氏の軍國主義論のごときものは、軍國主義論の最も幼稚なるものであります。その論文には何等の學術的根據もなく、たゞ軍閥的精神の興奮の跡を見せてゐるだけのことである。

彼れに從へば軍國主義とは政治上の主義ではなくしてたゞ行政上の方策であるとなされる。けれども敢て問ふそのような行政上の方策が果して何の役に立つものであるか。何のために軍事精神の鼓吹に努めるの必要があるのであるか。軍國主義が一つの精神であり、さうしてまたその精神の體現としての組織であることを理解しえない間はともに軍國主義を談ずるの資格はない。水野氏のような淺薄なる考で軍國主義を謳歌することは軍國主義そのもののためにも迷惑であらう。またそれのみではなく一方において軍國主義を侵略主義のように罵しるのは英國人の嫉妬心からの惡口であるに過ぎないと述べてゐるかと見れば(中央公論一月號一〇七頁下段)また翻つて軍國主義は侵略的精神であるとも述べてゐる。(同上一一六——七頁)何が何やら一向に分けの分らないものであります。

(八)

これを要するに日本の軍事批評家には何等の學問的基礎のないことが一大病弊であります。それ等のものはたゞ卑しき軍閥精神がそれでなければ Dutschland über alles の思想に興奮してゐるまでのことである。それゆえにその結果はたゞ外國人に日本の軍國主義の印象を與へることとさうして日本の國民の軍閥に對する反感を挑發するものであるに過ぎない。若きデモクラシーの日本は先づこれ等のものを排斥しなくてはならぬ。

"He is an Onoto-man"

新語――オノト・マン

机の上、衣兜中、書齋や事務室は勿論靑い葉の公園や赤い灯の夜るの町にもドコへ行くにもオノトを離さない人、機敏なる人、成功する人活動者、勝利者卒先者、新時代の人、流行兒等。（渠はオノト・マンであるといふは渠は機敏なる活動者又は成功者であるといふ義）

オノト萬年筆

無飾　金七圓
飾付　金八圓以上

オリオン萬年筆

無飾　金貳圓八拾錢



アルビオン萬年筆

飾付金五圓五拾錢
送料各金拾貳錢

東京日本橋通

丸善株式會社

大阪心齋橋筋　京都三條通
福岡上西町　仙臺國分町

評論

時論

法學博士　吉野作造

朝鮮暴動善後策

朝鮮の暴動は何と云つても大正の歴史に於ける一大汚點である。我々は玆に之を拭ひ去る爲めに非常の決心を堅むるの必要がある。之が始末に成功するとせざるとは、啻に東洋先進國としての面目に關するのみならず、尙ほ今後の國運の發展にも重大の關係がある。然らば如何の善後策を以て之に臨むべきか。

朝鮮に於ける某司直官吏は飽くまで暴徒の鎭定に努力し之を嚴罰に處して秋毫の假借する所なく、以て國法の威嚴を示すべしと言つて居る。暴動の形に現はれた以上之も必要であらう。然し之れ丈けで國民は問題の解決に安んずることは出來ない。

第二には之と正反對に鮮民に對する救恤と云ふことを唱ふる者があるかも知れない。未だ此種の言說に接せざるも、斯くの如き事件の後で一方に國法の威嚴を示しつゝ、他方巨額の御下賜金に依つて恩威並び行ふの仁惠を示し給ふが我が皇室の有難き慣はしであるから、今より此事の實現さるべきを密かに期待し奉るも不當ではあるまい。之も鮮民の心を和らげ、日鮮兩地の關係を改善する上に多大の效あるべきを疑はざるも、併し之を以て能事終れりとすべからざるは言ふ迄も無い。我々は更に他の努力を以て皇室の御趣意を完成するに努めなければならない。

さうすると第三に我々の差當り當局に希望する所は、一視同仁政策の徹底である。凡ゆる方面に於ける日鮮の區別を撤廢し、殊に敎育上の現實なる門戶開放は何よりの急務であらう。而して此精神は啻に之を法制の上に徹底するのみならず、又在留內地人と土人との社會的關係の上にも是非徹底せしめなければならない。

第四に一視同仁政策の必然の結果は、鮮人に或種の自治を認むる方針に出でなければならない。其方法と範圍と時期とに就

ては自ら別に攻究の餘地はあらう。只方針としては官吏萬能の政治を廢め、鮮民をして尠くとも在留内地人と協同して統治の監督に當らしむるとは絕對に必要である。官吏の採用につき彼我の區別を立つべからざるは言ふを俟たない。只併し乍ら此方針をどれ丈けの範圍に、又如何なる時期に如何なる方法を以て行ふべきかは、前にも述べた如く愼重なる攻究を要する。此點の攻究に當つて獨り鮮民の立場のみを考ふべからざるは又言ふを俟たない。鮮民が鮮民の手に依つて如何に治めらるゝかは日本其物の利害休戚に大關係がある。我々は從來の統治方針の餘りに日本的に偏したるを遺憾とするものなれども、さればと云うて全然「朝鮮人の爲めの朝鮮」主義に放任することも出來ない。我々が相當の程度に日本の立場をも參酌せられんとを主張するに對しては、熱烈なる獨立黨の諸君と雖も恐らく之を諒とするだらう。随つて此等の點は彼我双方隔意なき協議の上に之を決定するの方法に出でたい。而して之は今日の場合政府の仕事としては殆んど不可能に屬するが故に、我々は

第五の策として民間に日鮮協同の何等かの疏通機關が設立せられんことを希望する。斯の如きは差當り今度の事件の眞相を明かにし、日本の統治に對する忌憚無き批評を聽き、且つ又誤解を防ぐ爲めにも必要であるが、殊に將來の解決策を決めるには是非共之に依らなければならない。只問題は今日の場合斯う云ふ機關の設立は望み得るか否かである。予輩の觀る所では絕對に不可能とは思はないけれども、非常の困難事たるは疑ふべくもない。而して若し玆に斯かる機運を日鮮兩族の間に作興促進するに就いて最も有効なる働きを爲し得るものありとすれば、そは朝鮮在留の米國宣教師の一味である。斯く言はゞ世人或は内證事を第三者の捌きに任すの不面目を言ふ者もあらう。又彼等と暴徒との關係に關する風說を楯にして反對するものもあらう。けれども大體に於て宣教師に對する疑惑は恐らく誤解であらう。然らざるも彼等は說いて事理を解せざる輩ではあるまい。若し夫れ面目問題の如きに至つては、之れ取るに足らざるヷアニチイである。我等は同じく鮮民の問題の爲めに努力しつゝある、又努力して居るべき筈の彼等と胸襟を披いて此問題を懇談するの雅量なき以上、到底鮮民の隔意なき諒解を得ることは六つかしい。我々は先づ在留外國人を手に入るゝ事に成功せずんば鮮民を手に入るゝ事が出來ない。此意味に於て善後策の攻究につき外國宣教師の努力を借るは、取も直さず彼等宣教師を眞に日本統治の下に歸屬せしむる所以である。目前の姑息の解決は暫く之を政治家に任かするとして、日鮮兩者の眞の發達と幸福との爲め根本の解決を爲すの端緒は、右述べた

策を以てする外に道は無いと思ふ。

軍事思想の國民的普及

予は本號所載の他の論文に於て、軍事思想を國民に鼓吹することゝ、國民的常識を軍隊に注入することとの必要を說いた。併し此問題はたゞ其必要を說く丈けでは畢竟空論に終る。如何にして之を實行するかの方法の問題が大事である。玆には軍事思想の國民的普及の方策に就て一個の私案を掲げ、大方の叱正を乞ひ度い。

軍事思想の國民的普及につき今日軍事當局者の現に採つて居る方法は所謂軍事講話一點張りである。予輩は此點に關する當局の熱心と努力とを多とするけれども、概して彼等に國民的常識を缺くの結果往々無用の反感を買ひ、然らざるも誤解の種を蒔いて軍事思想普及其物を裏切つて居る事實の尠からざるを遺憾とする。殊に甚だしき弊害は彼等が軍事思想の鼓吹者たる本分を忘れ、僭越にも國民精神の支持者、國民の最高指導者を以て居らんとする事である。斯くして軍事講話其物が決して無用の事業ではないけれども、目下の所軍人其人に依つて直接に軍事思想を國民に普及するの目的は完全に達せられない。

第二は學校教育に依つて軍事思想普及の目的を達せんとする事である。此方法も頗る盛んに行はれて居ることは、普通教育の一科として兵式體操を置いて居ることに依つても明かである。高等の專門教育にも兵式體操を課すべしとの與論を時々聞く事もある程此方面が餘程世人の重んずる所たるは疑ひない。予輩も目下の所矢張り此方面をもつと有効ならしめて軍事思想普及の目的を達せしめ度いと考へて居る。只不幸にして從來は制度備はつて實際の効果は更に擧らなかつた。此頃兵式體操に代ふるに擊劍や柔道を正科とするものゝ増加せるは他にもいろ／＼理由はあらうが、少くとも一つの原因は兵式體操科の失敗にあらねばならぬ。體操科が單に所謂體育のみの爲めなら論はない。之に依つて同時に團體共同の訓練を與へんとするものなら、擊劍柔道を正科とするは確かに體操科の退化であらねばならぬ。

然らば問題は普通教育に於ける體操科をもつと有効ならしむる方法は無いかと云ふ事に歸する。之に就て予輩は次のやうな考へを有つて居る。第一に體操科殊に兵式體操は之を倫理と同樣に專門の教師の擔任に屬せしめざる事である。若し之を專門とすれば今日中學校などで見るが如く下士乃至下級將校の古手

を備ふの外は無い。之では生徒に對して威望が足りない。先生に對する輕蔑は即ち學科其物に對する輕蔑である。體操科の効果を擧げしむる根本の策は威望ある人をして之を擔任せしむることである。且つ又德育と體育とは物理や數學などと異り專門の學科たるべきものではない。苟しくも學校教師たるものは何人も之を敎へ得べき性質のものである。教師たるに必要なる普遍的資格の一つである。之を專門の學科と見たのが根本の誤りである。然し事實何人にも之を求むる事は出來ないから、多少の手當を給し、殊に此方に適任なるものを擧げて之に當らしむれば、其人に對する關係は自ら體操科其物を重からしむるに相違ない。然らば次に問題となるのは一般教師に如何にして兵式體操の知識を與へるかの問題である。そこで予輩は

第二に中等教員養成の學校に於て優秀なる現役將校をして體操教授の任に當らしむることを主張する。豫備の將校では之を職業とし、其職に執着するの必要より嚴格なる良教師たるを得ざるは今日までの例で明白である。體操の教官はどうしても現役の將校たることを要するが、之を澤山諸方に派遣することは財政が許すまい。然し高等師範程度の學校に止るなら決して不可能の事ではない。中學校の教師にも現役將校を派しては如何との說もあらんが、之は財政も許さないし、又時として起り得べき教育干渉に對して强く對抗し得ざるの懸念もある。そこで高等師範學校に止め、此處で十分の教育を施し、之が更に全國に散つて中學、師範學校の生徒を教練するといふ事であれば、其餘波小校學にも及び、乃ち人其物と相俟つて有効に軍事思想と軍事的訓練とを普及せしむることが出來ると思ふ。

予輩は軍事思想の普及の名の下に所謂軍隊の非常識が往々流れて國民を惑はす事あるの事實に憤慨するものである。けれども軍事思想の純なるものゝ普及は寧ろ之を喜ぶものなるが故に、敢て容易に實行し得べき案として之を世上に問ふ所以である。

予の選擧權擴張論の批評に就て

本誌二月號所載の「選擧權擴張問題」に對し鄭重な長文な批評を賜つた事について深く室伏高信君に謝します。併せて同君の批評により多大の啓發を得たことを重ねて感謝いたします。(「批評」創刊號參照)只之に關して予輩の立場を明にする爲に當り本誌の餘白を借り、次に二三言辯明する事を許して下さい。

（一）細かい點は暫く除き、最も大きな點丈けを取れば同君の批難は主として二つの點に注がれて居ると思ひます。一つは予のデモクラシーに關する理論に就てゞあります。之に就ては今日までいろ〳〵の方と論戰を盡しました。諸家の批評に依つて其蒙を啓かれ、自ら修正した點も少からずあることを明言します。同時に諸家の誤解と思惟した點に就いては相當の辯明を盡した積りであります。何れデモクラシーに就ては私に前後一貫したる動かざる信念があり、近く重ねて之を世の叱正に問ふ考でありますから玆には深く述べません。

（二）次に室伏君は天賦人權論はブールジョアジーの說であり、ソリダリテー・ソシアールは勞働階級の說であり、階級鬪爭の激成はブールジョアジーの責任であると云ふ點を力說して、私の選擧權の理論的根據に關する說明を批難して居られます。室伏君の說の當否は今爭ひません。併し之れ〳〵の說を何の階級が唱へたかは私の說に何の關係のない事を一言して置きます。私の述べんとしたのは選擧權と云ふものは昔から今日までどう云ふ根據に立つて唱へられたかを歷史的に明かにしようとしたのであります。之を誰が唱へたか、又始め甲の說を唱へたものが何時までも甲に執着して居つたかどうかは私の全く關れなかつた問題であります。天賦人權論はブールジョアジーが唱へたから正しいの正しくないのと云ふ議論は、私の全く關知せざりし所であります。誰が唱へたにしろ、選擧權の根據は一番適く天賦人權論で說かれたと云ふ事實に誤りなければ、それで足りるのであります。それから私は此第一の說明の廢るゝと共に起つた第二の說明は勞働階級の權利伸張の手段として唱へられたと云ふ事實を明に致しました。勞働階級の政權獲得運動は十九世紀の前半に既に初まりましたが、此等の主張の基調を爲すものは最大多數の最大幸福說であつたと信じます。けれども十九世紀の半ば以後に至り、勞働階級の階級意識の明白となるに及び、彼等は自家階級の權利伸張の手段として選擧權を要求することに變りました。室伏君は勞働階級は斯くの如き階級的利己主張をするものではないと言はれます。無論其通りでありませう。今日の勞働階級が室伏君の言ふ通りであること又昔の勞働階級も結局押し詰むれば室伏君のやうな立場に來るべき筈のものなることは私も認めます。併し乍ら獨逸で社會民主黨が出來た頃の所謂勞働階級の選擧權論は、假令其中にやがてソリダリテ・ソシアールを產むべきモメントを內在したにしろ、其表面に現はれた說は、飽くまで階級的利己主張であつた事實を看過することは出來ません。私が若し勞働階級の選擧權論は何時でも斯う云ふ利己的主張であると言うたのなら、室伏君の叱責は

意味をなします。けれども十九世紀中葉以後、勞働階級の權利伸張手段と云ふ意味に選擧權を解した事實があると、其說明に對しては室伏君と雖も別に異議はあるまいと思ひます。隨つて今日ソリダリテー・ソシアールが全然勞働者以外から起つたとも、又勞働者が之を唱へてはならないとも私は申して居りません。賢明なる室伏君並びに世上の讀者に向つて之れ以上の說明は不必要でありませう。予輩の立場に就いて誤解なきやうに願ひます。

尙ほ序に申しますが、ソーシアル・デモクラシーの字義に就ては私は飽くまで福田博士と同一の立場を取ります。然し之は文字の意味をどう見るかと云ふ丈けの問題であります。私は福田博士と同じ意味に解するが故に、ソーシアル・デモクラシーを非とします。之を室伏君の言ふ意味に解すべきものであるならば、私は同君の說に異るものではありません。要はソーシアル・デモクラシーに如何なる意味を附すべきかの問題に係るのであります。

(三) 終りに多少枝葉の問題であるけれどももう二つ三つ辯明さして頂き度い。

第一は第三階級の名辭であります。之は全然室伏君の批難に承服いたします。歷史上の術語として第三階級を同君の言ふが如く解すべきは、寧ろ歷史を專門とする私には分り切つて居つた事であります。只私は私の特別の見解に基いて平素政治史の講釋に勞働階級を呼ぶに第三階級の文字を以てし、而かも其が普通の用例に反する旨を注意して來ました。世上に公にする論文には此用例に從ふべきでは無かつたのをウッカリ使つたのが私の輕卒でありました。此事は偶然にも二月二十六日黎明會第二回講演會の壇上でも聽衆に明言したのであります。而して此事に我輩の注意を促したのは同じく室伏君の日本評論に出された論文に因つてゞあつた事は窃かに同君に感謝する所であります。

第二に佛蘭西で最初に普通選擧を採用したのは一八四九年なりと言つたのに對して、一七九三年であると訂されたのは一應尤もであります。時の前後を嚴格に爭ふならば、アメリカを發見した者はコロンバスに先つ事千年も前から幾人もあります。併し米國發見の歷史上に意味あるはコロンバスを以て初めといたします。此意味に於て私は今日の立憲國に於ける普通選擧制度の最初のものは一八四九年三月十五日の法律であると云ふべきだと思ひます。天賦人權論の發祥地を英吉利まで遡らしめなかつたのも此意味でありました。

第三に予が從來制限選擧論者であり、殊に五圓說を主張し

つたと云ふ批難は私の意外とする所であります。自分自らの記憶にして誤らずんば、私は私の公人としての最初の論文『民衆的示威運動を論ず』大正三年四月號(本誌所載)の中には民衆政治を鼓吹して切に制限制度の不可なるを說き、又室伏君の能く引かるゝ予の最初の憲政論(大正五年一月號本誌所載)には八六頁より九七頁に亘つて是非とも普通選擧を採用すべく姑息の擴張は却て得策に非る所以を力說して居る。其後でも五圓三圓と云ふが如き不徹底の擴張は却つて今日の弊害を增すものなりと激しく反對して來たものであります。普通選擧は私の學生時代からの確信であります。時々私の名に於て僞造の論文が諸雜誌に現はるゝ事を見ますが、私自身の口から制限選擧支持論を唱へた事は曾て無いと記憶して居ります。私にとつては制限選擧論者であつたと云ふ叱責は、某學者が吉野が戰後に於て獨逸帝國が始めて普通選擧になるだらうと言つたと云ふ誣言と同じく全くの寃罪であります。

次號小說豫告

本號に掲載する筈なりし芥川龍之介、谷崎潤一郎兩氏の小說は前者は其實父の逝去せられし爲め、後者は次に掲ぐる書簡にあるが如く、著者近來の力作にて締切間に合はざりし爲め、二篇とも田中貢太郎氏の新作と共に五月號の誌上にあらはるることとなれり。讀者諸君の御諒恕を乞ふ。(編者しるす)

■呪はれた戲曲…谷崎潤一郎

■南瓜の苗…田中貢太郎

■開化時代…芥川龍之介

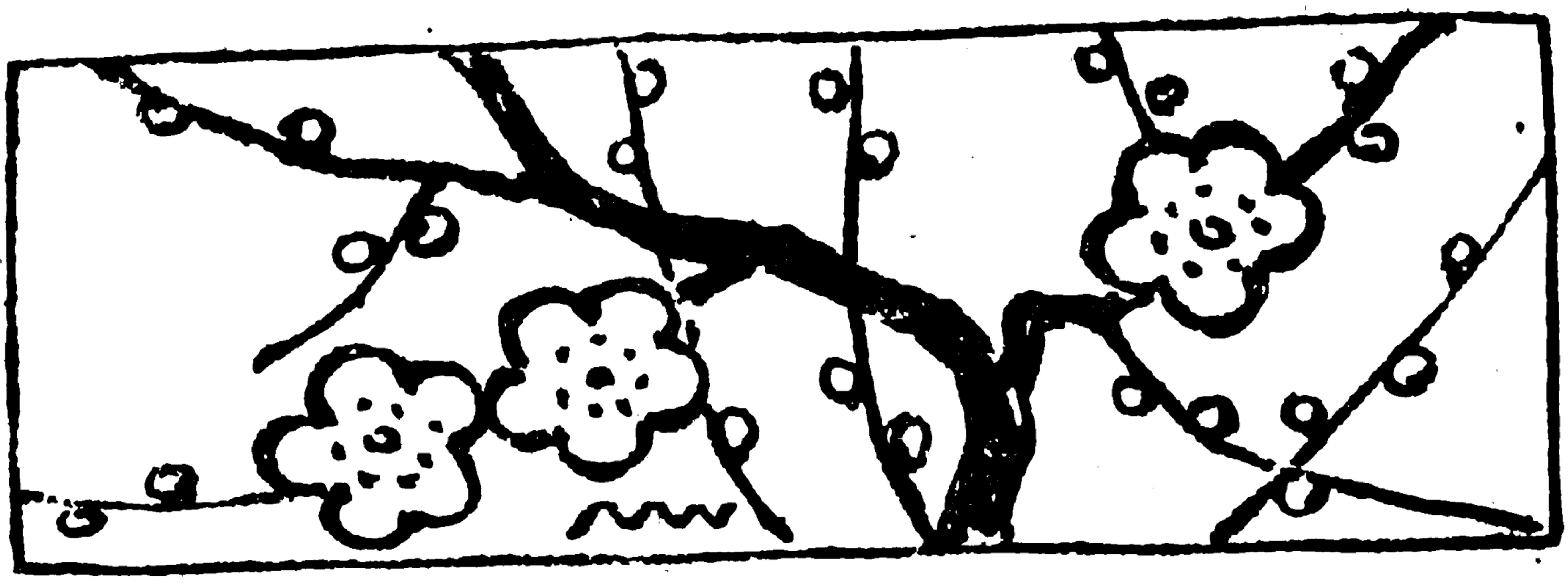
谷崎潤一郎氏の書簡

拜啓　御約束の原稿もう半分までは出來て居るのですが、まだ風邪が直りきらない爲めに後が涉々しく續きません。平熱に復したら起きて書かうと思つて居るのですけれど、此の樣子では到底締切に間に合ふまいと存じます。私も此の正月來父の病氣や何やかやで力作をしませんから、今度は大いに奮發するつもりで居たところ、病氣になつてしまつたのは如何にも殘念です。今度の小說は相當に長くなる積りですが、その形式上二つに分つて掲載しては面白くないものですから、未完のまゝで四月號に出すことは止めにして、病氣恢復の後全部脫稿するのを待つて、五月號へ一と纏めにして出して貰ひたう存じます。右、事情御諒察の上、御承諾下さるやう幾重にもお願申ます。

三月廿七日　谷崎潤一郎

瀧田樣

中央公論春期大附録



憐れな男

志賀直哉

小さい女は髪結ひの所で丁度解いた所を呼ばれたのだと云つて、その澤山ある髪の毛を紅い球のついた髪差しで襟首の上に留めて置いた。朝鮮の女のやうでせう、など云つて、後を向いて見せた。

戸外は未だ明るかつたが、天井の電燈がひとりでついた。風の音がする。而して部屋の中は妙に蒸し暑かつた。

小さい女は彼に早く歸つて貰ひたいやうに如何にも落ちつかない様子をして居た。その癖何かしら絶えず饒舌り續けて、仰向けになつて居る彼の胸を醫者の眞似をしてたゝいてみたりした。

彼は起き上つた。而して部屋を出ようとすると小さい女は失敬と云つて手を擧げた。彼も一寸手を擧げて、一人先に段々を降りて來た。………………

彼はその日午頃眼を覺ました。風の吹くいやな日だつた。彼は食事を濟ますと、急に氣が重くなつて何をする氣も起こらなかつた。若しかすると横須賀の兄が來るので、尚何をするのも半端な氣になつて、落ちつかない儘に茶の間でお榮を相手に雑談をして居た。お榮と云ふのは彼の祖父の妾だつた四十四五の女である。

彼は話しながら、アンナ・カレーニナの飜譯を四頁ばかり讀んだ。然し何時か注意が外れると、「今頃博覽會見物でもして居るかも知れない」こんな風に或る友達の上を想ひ浮べて居た。

「それはさうと、旅行から歸つたら時や島を博覽會へやるように云つて置いたが、何日がいゝでせう」

「何時でもかまわないわ」とお榮は答へた。

此頃の彼にはこんな事でも中々決められなかつた。決めて了うと何か其所に困る事が出來さうに思はれるのだ。

三時になつた。三時七分に横須賀からの汽車が着く。來ればそれだ。それで來なければ今日はもう來ない。彼は其邊まで出て見ようと思つた。羽織を着かへて時計を帶へ卷くと、財布も懷中した。兄に會へば自然その日の行動はきまるが、若し兄が來ないとすると、それから先どうするかまるでわからなかつた。實は漠然とした意志はある。然しそれを左うとハッキリ決めれば殆ど同時に厭になるのが癖のやうになつて居た。彼は決めたい事すら決められない心の状態になつて居た。

「一寸出ます。めし迄には大概歸ります。兄さんに會へば直ぐ一緒に歸つて來ます」左う云つて家を出た。

兄には會はなかつた。的にして居た汽車は鹿島谷と云ふ所を歩いて居る時に地響をさして東京の方へ走つて行つた。大森の停車場へ來たが、新橋行までは尚三十分程あつたので彼は品川行の電車の方へ廻はつた。

彼は懐から西鶴の小さい本を出して本朝二十不孝の仕舞の一節から讀み出した。二三日前或る友達に日本の小説家では西鶴に一番感心したと云ふやうな事を云つた。それを云ふ時彼は二十不孝の最初の二つを考へて居たのだ。それは餘りにといひたい位徹底して居る。もしくは病的にといひたい位だつた。若し自分が書くとすればあゝ無反省に慘酷な氣持を押し通して行く事は如何に作り物としても出來ないと彼は思つた。親不孝の條件を並べるだけは出來るとしても、それを強いリズムで一貫さす力は迚もないと思つた。弱々しい無益な反省に苦しめられて居る今の彼が左う思ふのは寧ろ當然だつた。兎も角西鶴には變な圖太さがある。それが彼には羨しかつた。自分が左うなれたら如何に此世が樂になる事かと思はれるのだ。

彼は仕舞ひから讀んでいつたが、最初の二つに較べると、どれもそれ程には思へなかつた。品川で市の電車に乘換へるともう讀むのが少し面倒臭くなつた。彼は只ぼんやりとして居たが、其内何氣なく見て居た向ふ側の客の顏が面白く感ぜられて來た。何んだか、どれもこれもが面白く見へ出した。畫家の眼に映つたやうにそれ等が彼の眼にも映り出したのだ。

薩摩原で彼は本郷の家へ行かうかしらと云ふ氣を一寸持つた。咲子と云ふ十七になる妹に會ひたい氣がしたのだ 然し父が居るかも知れないと思ふと又急に厭になつた。而して咲子とでも氣持がしつくり行きさうもない氣が直ぐして來る。末松か宮本の家へ行かうかしらと思つても、妙に居さうもない氣がする。假りに居ても此氣分で行けば屹度氣まづい事をするか云ふかして、變な氣持で別れて來るのは解かり切つて居た。それを避けようと氣分を緊張さすだけを考へても彼はつらくなつた。打克てないミヂメな氣持を隱しながら人と會つて居る苦み、而してヘトヘトに疲れてその人から逃れて來る憐れな自分、それを想ふと何所へ行く事も出來なくなる。結局只一つ、それは惡い場所だけが彼の爲めに氣輕く戸を開いて居る。彼の足は自然其所へ向かうのだ。

妾を抱へる事を彼は考へた。が、此上にも暗い影がつきまとひさうでそれは恐しかつた。もう他の事などは餘り云ひたくない。氣持に同情出來て、自分に忠實なら、他はどうでもいゝと思つた。それにしてもこれから行くやうな場所では中々左う云ふ女は見出せない。多分左う云ふ女も居るだらう。然し關係が惡いから見出す事が困難だ。時もかゝる。而して一ト通りは色々疑つて見ないと氣が濟みさうもない事を思ふと、もうそれだけで面倒臭くなつた。然し左うだ。キリストが弟子を作る時は如何だつた。恐らく一ト眼でよかつた。此場合キリストがキリストであれば實は對手は何者でも差支えなかつたに違ひないと思つた。

彼は自身をミヂメな人間に思つた。同じ電車の誰れよりも自分をミヂメな人間に考へた。兎も角彼等の血はどんどん循環して居る。而して眼には光がある。所が自分はどうだらう。自分の血はもうハツキリとした脈搏を打つてはゐない。生ぬるく只ダラダラと流れ廻はつてゐるばかりだ。何と云ふミヂメさだ。眼でも左うだ。もう外へ放つ程の光りな

どは全く消え失せて居るではないかと思つた。

……………段々を降りて出ようとすると彼は其所に若い女が坐つて居るのを見た。美しいと思つた。而して同情出來る女だと云ふ氣がした。彼はその儘戸外へ出て、今からならお祭に云つて來たやうに明かるい内に歸れるなど思ひながら、電車路の方へ歩いて行つた。それは左うと何故あの女はあんな所に坐つて居たらう。客が來てゐてあんな所に居るのは變だと思つた。彼はその女の名を訊いて置けばよかつたと思つた。此次ぎ行けば自分はあの女を望むだらう。どんな人でしたと訊かれる。その時如何云へばいゝか。云ふ事は何もない。實際何も特別なものを見ては居なかつた。俺が歸る時に下に坐つて居た女だ。美しい女だ。せいは？　それはわからない。肥つて居ましたか？　左うだな、瘠せた方ではないやうだ。こんな問答で結局要領を得ずに了うに違ひない。彼は何んだか此儘電車に乘つて了うのが惜しい氣がした。今の小さい女が未だゐるかも知れない。或は近所で出會ふかも知れない。「忘れ物をした」から云へばいい。左う思つて彼は又前の家へ引返へして行つた。

彼は格子の中に立つたまゝ女中と話した。

「今、其所に居たのはお客さんで來てゐるのか？」

女中にはそれだけで通じた。

「今上に一人呼んで居るんです。それと交代であの人が上がるんです。直ぐです。お上りなさい」

「俺を先にしないか」

女中は顏をしかめて見せた。而して又、直ぐですと云つた。

彼は下駄を脱いだ。次の間を通る時其襖のかげに、今の會話を聽いた女が隱れるやうにして立つて居た。彼はそれを見たいやうに二階へ上つて行つた。然し上がると直ぐ矢張り後は困ると思つた。彼は手を叩いて女中を呼んだ。壁一重の隣りにその客が居るので彼は小聲で云つた。

「隣りは別な奴を呼べばいゝぢやないか」

「いゝえ、名ざしなんです。それに先刻顔を見ちやつたんです」

「困るな」彼は氣六ケしい顔をした。

彼は何故と云ふ事もなく其女を音なしい、素人臭い、善良な女として考へて居た。これは彼の觀察とは云へなかつた。彼の同情が勝手に女を左う作つて居たのだ。而して女を二人呼んで一人を待たせて置く男を怪しからん奴だと思つた。他の女なら未だしも、あの女を左う云ふ氣で呼んで置くのは不埒な奴だと思つた。女中は露骨な氣休めを云つて降りて行つた。

隣りから女が出て行つた。間もなく其女が其部屋に入つて行つた。彼はかうしては居られない氣がして、又手を叩いた。

女中は入つて來ると、彼が何も云はない先に、

「今入つた所です。直ぐです」となだめ顔に云つた。彼は

「硯を貸して呉れ」と云つた。

懐の白紙を食卓の上に延べて、彼は下腹に力を入れて慈眼視衆生、福聚海無量と云ふ文句を書いて見た。これは此間の旅行で見た京都の清水寺に掛かつてゐた額の句であつた。彼は何氣なく書いたが、慈眼視衆生、福聚海無量、共に立派な美しい言葉だと思つた。然し急に、勿體ない氣がしてやめて了つた。兎も角彼は隣りの場面を頭に浮べたくなかつたのだ。

女が入つて來た。笑ひ顔をした。いやな顔ではなかつたが、彼が勝手に決めて居た顔とは大分違つて居た。

「ありがたう」左う云つて、少し斜向きに膝を突いて、彼の顔を見ながら高いお辭儀をした。それが如何にも只のプロスティチユートだと云ふ氣を彼にさした。先刻の神妙な様子とは別人のやうに思へた。

「何時から出て居るんだ」

「一ト月程前から」女は少しあやふやな調子で答へた。

「俺はお前が好きで歸つて來たんだ」

「さうお」

「お前ははたちだらう」

「十九よ」

「本統か？」

「本統、ほんまどつせ」

彼は女を膝の上へ抱き上げてやつた。女は自由になつてゐた。而して物憂さうて首を曲げて彼の肩に其頰を當てゝ休んだ。

「お前は俺と一緒に何所かへ行く氣はないか」

「何所へ？」

「遠くへだ」

「連れてつて下さい」

「俺は笑談で云つてるんぢやないよ」

「私だつて笑談ぢやないよ」

女は頰をつけ、眼を閉ぢた儘だるさうにそんな事を云つた。彼は肩をゆすつて

「オイ」と起こしてやると、女も

「オイ」と眼を開きざまに彼の鼻先でその二タ重になつた白いあごを突出した。

「貴樣は俺が出鱈目を云つてると思つてるな。馬鹿な奴らしいから解かるまいな」

「馬鹿だから解からない」

女は彼の膝に腰かけた儘、恥かし氣もなく眞面目な顏をして、突合はして居る彼の眼を上から凝つと見た。

女は少し本氣になり出した。實は半年ばかり前から出て居る事、自家(うち)は深川にあつて、母と姉だけだが、母は姉夫婦が見る事になつて居るから自分は只助けるだけでいゝのだと云ふやうな事を話した。

「姉さんの御亭主は何をして居るんだ」

女は暫く默つて居たが、

「納豆屋」と云つて笑ひ出した。うそか本統か知れなかつた。彼は

「納豆の作り方を敎はつてくれば俺が納豆屋になつてやる」と云つた。

「なつと。なつとう」と女は小聲でその眞似をして笑つた。彼は先刻お榮と職業の話から、臨濟を黃檗に何遍も差し向けた首座の僧と云ふのが生涯寺を持たずに桶屋で暮らしてゐた事や、ほう居士と云ふ人が矢張り笊屋だつたと云ふやうな話をした、それを想ひ浮べて居たのだ。

女は今居る家に七十圓ばかり借金をして居るが、それさへ返へして貰へば何所へでも行けると云つた。女は何故か時時京都訶を眞似た。「きつたいな事を云ひなはる」などゝ云つた。「奇體」と「怪體」を混同して居るなと彼は思つた。

「京都は好きか？ 京都に住まはうか？」

女は乘氣な返事をした。

翌日夕方になると彼は又前日と同じやうな氣持で居ても立つてもゐられなくなつた。彼は用意しかけた食事を待つ間も苦しい氣がして、家を飛出した。横須賀の兄は今日も來なかつた。彼は此度素通りをして本郷の家へ行つたのか。左う思ふと彼は侮辱されたやうな腹立たしさを感じた。今の彼には色々な事が直ぐ侮辱と取れた。それがひがみだと思つてもどうする事も出來なかつた。ひがみだといふ意識が直ぐ自身を侮辱する場合もよくあつた。生れ附きひがまねばならぬ境遇に置かれた上に、二年程前、愛子との事で、それがまるで爪の掛けようもない變な失敗に終つてからは彼は總ての人が自分に惡意を持つて居るやうに感じられて仕方なくなつた。自分の背後には恐しい、醜い顔をした亡靈が何時も立

つて居る。人々はそれを見るのだと思つた。彼は何所でゞも屈辱を感じた。彼にとつて現存してゐる物すべて、屈辱の種になり得ないものは一つもない氣がした。根こそぎに四圍から脱け出る、それより道はないといふ氣がするのだ。二重人格者が不意に人間が變つて了ふやうに自分も不意に全く別な人間になつて了ひたい。どんなに物事が樂になる事か。今までの自分――時任謙作、そんな人間を知らない自分、左うなりたかつた。今まで呼吸してゐたと全く別な世界、何所か大きい山の麓の百姓の仲間、何も知らない百姓、しかもその仲間はづれなら一層いゝ。其所で或る平凡な醜い而して忠實な、あばたのある女を妻として暮らす。如何に安氣な事か。全く回避だ。

彼は前日の女を憶つて少し美し過ぎると思つた。然しあの女が若し罪深い女で、それを心から感じてゐるような女だつたら、どんなにいゝだらう。互にミヂメな人間として薄暗い中に謙遜な氣持で靜かに一生を終る。笑ふ奴、憐む奴があるにしても、自分達は最初から左う云ふ人々には知られずに濟む場所に隱れて了うのだ。彼等は笑ふ事も憐む事も出來ない。自分達は誰れにも知られずに一生を終つて了ふ。而して自然の或る事、それは吾々にしか解らなかつたと云ふやうな事を解し得て靜かに一生を終る。どんなにいゝか。

汽車で新橋へ着くと兎も角彼は自働電話に入つた。その朝桝本からの手紙で「一昨日三越の前で宮本に會つたら君かもう歸つて居る事を聞いた。近かく會いたいが、都合を知らしてくれ玉へ」と書いて來た。それを考へて桝本を訪ねてもいゝと思つたのだ。所がベルを鳴らすともう迷ひ出した。幸ひ交換手が直ぐ出なかつたので彼は其儘受話器を掛けて出て了つた。

銀座通りに夜店あきうどの出始める頃だつた。彼は夜店のない左側の人道を京橋の方へ歩いて行つた。出來るだけシツカリした足どりで歩かう。左う思つて彼は下腹に力を入れて、口を堅く結んでみた。而して、これはベエトウヱンのやうな口に違ひないと思つた。彼はいつものやうにキヨロ〳〵と店を見たり通行人の顏を見たりしないように氣をつけた。晴やかな眼つきで行手を真直ぐに見て歩かうと思つた。不圖聯想から寒山詩でも讀んで見ようかしらと彼は考へた。寒山の世界、若しそんな世界が自分にも作れたら實に理想的だ。松が叫び、草が囁いて居る蒼茫の高原を一人通つ

て行く氣持を云つたものがあるさうだ（此記憶少しあやしいが）、兎も角そんな氣持でゐられたら、どんなにいゝかと思はれるのだ。彼は京橋と日本橋の間に二三軒洋籍を賣る家があつた筈だと思つた。彼は幾らかユツタリした氣分になれた。

間もなく彼は向ふから禮之助（彼より六つ程年上の男）が若い細君らしい女と一緒に來るのを見て了つた。左う云へば、もう少し前にも同じ中學で彼より四つ程下の級に居た渡邊と云ふ男が肉附のいゝ矢張り細君らしい人と往來の向ふ側を歩いて居たの見てゐた事を今更に氣づいた。禮之助は二間程の近さに來て漸く彼がわかつた。而して兩方で立止まつた。

「僕は今我善坊の×××番地に居る。夜は何時でも居る。遊びに來玉へ」と禮之助は云つた。

彼は素より行く氣はなかつた。然し、我善坊と云ふと何所だつたかなと考へた。よく知つて居るやうで想ひ出せなかつた。あの邊かしら。それともあれは狸穴だつたかしら、など心で迷つた。左うして「我善坊と云ふとどの邊だつけ」から云はうとしたら「我」を「がん」と云ひかけた。彼は一寸ドギマギしながら、

「芋洗坂のドだつたかしら」と不安さうに誤魔化した。

「まるで異うさ」と禮之助は笑つた。後ろに居た細君が何か注意すると、

「あゝ、電話を教えて置かう。芝の三千七百四十六だ」と云つた。

「迚も覺えられない」と彼は首を振つた。

「ミナヨムと覺れば わけないさ。いつでも夜は居るよ」から云つた禮之助はお世辭ばかりではないらしく彼にも思へた。然し行つて見る氣はなかつた。別れる時細君は叮嚀にお辭儀をした。その時彼は何所かでこれは見た事のある人だと思つたが、想ひ出せなかつた。

彼は禮之助と會つた事で大分心持を亂だされて居た。こんな事では駄目だ、寒山どころではないと思つた。

松山書店と字劃きの書いた看板を出して居る店へ來た。顏眞卿の千字文の楷書が眼について、彼はそれを開けて見

た。それから高い兩側の棚を叮嚀に見て廻はつた。聞いた事のあるやうな、ないやうな古い本が一杯につまつて居た。一休何とか双紙と書いた紙切れを見て、彼は一休の隨筆か何か〻と思つて下ろして見ると、柳下亭種員の戯作だつた。

「寒山詩はないか」

「丁度持合はして居りません」左う座つて居た番頭が答へた。

「宗門葛藤集は？」

「へえ、それも相憎持合はしません」

暫くして彼は何も買はずに其所を出た。

丸善の前へ來ると店はもうしまつて、小僧達が横手の口から歸る所だつた。若し知つてゐる小僧が出て來たら、先日買つたシヤワンヌの本の挿畫が一枚脱けて居るのを換へて貰はう、それから別にグスターヴ・モローの本も賴みたいし、そんな事を思ひながら少時其所に立つて居たが、知つて居る小僧は出て來なかつた。彼は歩き出した。飾窓には埃及模樣をつけた趣味の惡い本棚が飾つてあつた。それを見ると彼は胸が惡くなるやうな氣がした。

青木嵩山堂と云ふ本屋に來た。その前に小林嵩山堂といふ本屋があつた筈だがと彼は思つた。もうなくなつたのか、それとも見落したのかしらと思つた。彼は青木嵩山堂で李白の小さい詩集を買つた。十年程前にも同じ本を此店で買つた記憶があるが、あの本、何處へやつて了つたらうなど考へた。

腹はへつてもゐなかつたが、食事をするなら此邊がい〻と思つて、彼は魚河岸の中へ入つて行つた。馴染のある怠け者のすし屋が珍らしく屋臺を出してゐたが、彼はその前を素通りにして先の天ぷら屋に行つた。彼は前を通る時にすし屋が怒つて自分に何か仕はしまいかと云ふ不安に襲れた。而して少時して今度は天ぷら屋を出る時に、其所にすし屋が待伏せをしてゐて自分を袋叩きにしやしないかと云ふ愚にもつかぬ不安を感じた。彼は自分ながら馬鹿氣た事だと氣がついた。

それから彼は橋を二つ渡つて右へ折れて行つた。前日彼れはそれから少し行つた所の時計屋で多分プラチナ[illegible]

思ふ時計を見て一寸欲しい氣を持つた。百九十圓と云ふ札がついて居た。彼はそれをもう一度見て若し今日も欲しい氣がしたら買つてもいゝ、三ケ月程貧棒暮らしで我慢すればいゝのだと思つた。所が、今日見ると前日程欲しい氣は起らなかつた。淋しいやうな安心したやうな氣がした。五六年前までは欲しいと思つた物、例へば浮世繪のやうな物でも、手に入れるまでは氣になつて仕方のない方だつたが、近頃は妙に一つ物に執着が感じられなくなつた　彼にとつて此意識は矢張り淋しかつた。

彼は尚暫くその飾窓の中をガラス越しに眺めてゐたが、不圖店の者に泥棒と思はれはしまいかと云ふ氣がした。彼は一寸顏の紅くなるのを感じた。而して急いで歩き出した。

前日の家へ來た。下の部屋では三味線を彈いて騷いて居た。彼は二階へ上がると、「昨日の人を呼んでくれないか」と云つた。女中は降りて行つた。彼は本屋で包んでくれた李白の詩集をほどいて見て居たが、「昨日の人」だけでは不充分だつたと氣がついた。手を叩くと異う女中が登つて來た。

「昨日呼んだ後の人だ」と彼は云つた。前の女中もそれを呼びに行つたのだと云ふ事だつた。彼は安心したが、今度は家に居ればいゝがと一寸不安に思つた。

詩集の初めに傳記が二つついて居た。それは現在の彼には實に理想的な生活と思へるやうなものだつた。然し餘りに性格は異つてゐると思つた。――――下の騷が八釜しい。尤も「白猶與飲徒醉於市」こんな事がある。李白ならこんな中でも平氣で自分の世界にして呼吸して居た筈だなど考へた。「囊中自から錢あり」と云つて酒屋でひつくり返つて居る李白を杜甫か誰れかゞうたつて居ると云ふ話を想ひ出す。李白が酒好きだつた事は鬼に鐵棒のやうに思へた。が、六十餘才で死んだのは酒の爲めとある所を見ると、酒から來る不快もあつたに相違ないと云ふ氣がした。彼は酒が少しも飮めない方だつた。それ故猶その鐵棒の方は羨ましがる事はないと思つた。――――女は中々來なかつた。

本文を雜に見た。「莊周夢蝴蝶。蝴蝶爲莊周」こんな句に彼は心を惹かれた。

女が漸く來た。彼は前日とは大分異つた印象を受けた。前日程に女のいゝ所が彼には見えなかつた。表情をすると一

寸美しかつた。笑ふ時八重齒が見えるのが妙に誘惑的だつた。然し濟まして居ると如何にも平々凡々だつた。彼は多少裏切られた氣持で前日した話は全く云ひ出さなかつた。女も忘れたやうに一切それには觸れようとしなかつた。

彼は然し、女のふつくらとした重みのある乳房を手の掌で柔かく握つて見て云ひやうのない快感を感じた。それは何か非常に價うちのある物に觸れて居る感じだつた。それをゆすると手の掌に氣持のいゝ重みが感じられる。彼はそれを何と云ひ現はしていゝか解らなかつた。而して

「豐年だ。豐年だ」と云つた。

そんな事を云つて彼は幾度となく、それを搖すぶつた。何か知れなかつた。然し兎も角それは彼の心の空虚を滿たして呉れるものゝシムボルのやうに思はれたのである。



死兒を抱いて

廣津和郎

家庭教師のよし子は、無口で、細面の青白い顏に、ヒステリイ性とも云ふべき陰鬱な表情を持つてゐて、子供達の相手をしない暇の時には、自分に當てがはれた部屋の中に閉籠つて、何か深い考に陷つてゐるもののやうに、殆んど物音ひとつ立てずに、ぢつと机の前に坐つてゐた。けれども、子供達に對する彼女の態度は、心から深切であつた。だから、子供達も彼女に心からよく馴ついてゐた。石川家の主人夫婦は、彼女の暗つぽい陰氣な樣子に、何となく心がかりを感じながらも、併し此子供達に對する彼女の誠實を、何よりも喜ばしい事に思つてゐた。

『何か秘密を持つてゐるやうなところもありますがね、それでもあの人のお蔭で、みつ子も淸一も近頃はほんたうに面白さうに勉強をするやうになりましたよ』細君は良人に向つてよくこんな事を云つた。實際、尋常五年に通つてゐるみつ子も、尋常三年に通つてゐる淸一も、よし子が來てから、その成績が際立つて好くなつてゐるの

でゐつた。

ところが或日、よし子が外出してゐる間に、下女のおていが、彼女の部屋に入つて行つて、そこの戸棚を開けた。それはどう云ふつもりで開けたのか、何の用事があつて開けたのか、たうとう詳かにされずにしまつたが、或は無智な女性の好奇心から、よし子がどんな著物を持つてゐるかと云ふやうな事を、彼女の留守の間に覗いて見ようと云ふやうな氣であつたのかも知れない。

その戸棚の隅に、おていは茶色の毛布でくるくると卷いてあるものを見つけた。おていはそれを取り出して、地がべとべとにへばつてゐる古びた毛布を恐々解して、その中に包まれてゐるものを見た。

『あれ……』と彼女はけたたましい驚きの聲を揚げて、恐ろしさにわなわなと身體を震はせた。毛布の中からは、かちかちに干乾びて、みいらのやうになつてゐる、生れて未だ間もない赤子の死體が現れて來たからである。

おていの叫聲を聞きつけて、一家の人々はその部屋に駈けつけて來た。そしてその不氣味な赤子の死體を見た。石川家は瞬く間に、上へ下への大騷ぎとなつた。

『これは飛んだ事になつた』と細君は思つた。『何か秘密があるに違ひないとは、前から思つてゐたが。――併しいづれにしても、こんな噂が世間に洩れてはよくない。どうせ一度は警察に屆けなければならないにしても、今によし子が歸つて來るだらうから、歸つて來たら一應自分が問ひ質して見よう。そして良人とも相談して、出來るだけよし子の身に善いやうに取計はなければならない』

よし子に對してかねがねから厚意と同情とを持つてゐる細君は、かう決心して、一家の者達を呼び寄せ、固く口止をして、それからその赤子の死體は、元通りに毛布に包ませて、戸棚の隅の元の位置に置かせた。

そしてよし子の歸りを待つてゐた。

けれども、その日たうとうよし子は歸つて來なかつた。細君はその夜外から歸つて來た良人にその話をした。その翌日もよし子は歸つて來なかつた。そのまた翌日も歸つて來なかつた。良人は細君の反對にも拘らず、兎に角餘り長引か

せてはいけないから、警察に一應屆けなければならないと云ひ出した。

四日目の朝、丁度その事について夫婦が云ひ爭つてゐるところに、よし子から細君に宛てた一通の手紙と、中版の西洋紙にインキで細かく書いた「死兒を抱いて」と云ふ長い文章とがとどいた。

手紙にはかう書いてあつた。――

「奥樣、私は奥樣の私にお示し下さいました御深切に對しては、かねがね何とも御禮の申し上げようもない程感謝いたして居ります。飛んだ事で、奥樣はじめ皆々樣に御心配をかけまして、まことに何とも申譯はございません。私の深く秘して居りましたものが、皆樣のお眼に觸れましたことを、最早私は存じて居るのでございます。あの日、私がお宅に歸つてまゐりますと、蟲が知らせると申しますか、何となくおうちの中がざわざわして居るやうな氣が致しましたので、若しやと存じ、いつもの内玄關から上りませず、お庭の木戸を開けまして、そつと中庭の戸袋の蔭から、御樣子を窺ひました。私の部屋の前で、皆樣が騷いでいらつしやるのを見ますと、私はもう總ての事を覺りました。たうとう『その時』が來たと存じました。どんなに隱して居りましても、いつか一度は人に知れる時が無くては濟まされぬと、かねがね覺悟を極めて居りましたので、私の心は割合におちついて居りました。私はその場で直ちに奥樣にお眼にかかつて、總ての事をお打明けいたさうかと存じましたが、いやいや、それよりももう一度自分でよく考へて見なければならないと咄嗟の間に思ひ直しました。――幸ひ私の姿は何方のお眼にも觸れませんでしたので、そのまま忍び足に、御門の外に出てしまひました。

それから三日間もお便りいたしませんのですから、奥樣には嘸かし御心配遊ばした事と存じます。それを思ひますと、全く奥樣には申譯ございません。ですけれど、その三日の間に、私はいろいろと自分の身の上を考へました。そしてやつぱり自首して出る事に決心いたしました。明日（それはつまり石川家の主人夫婦が此手紙を受取つた日である。）の午前中に××署に自首しようと存じて居ります。

何卒旦那樣に宜しく申上げて下さいまし。今後どんな身の上になりますか解りませんけれども、旦那樣奥樣の御恩は

決して決して生涯忘れは致しません。お嬢さまにもお坊つちやまにも、今一度お眼にかかりたいと存じます。ほんたうにお二方とも私によく馴ついて下さいました。勿體ない申しやうではございますが、自分の親身のきやうだいのやうに存じて居りました。どうか御丈夫に御成人遊ばすやう、蔭ながらお祈りいたして居ります。申上げたき事は未だ數々ございますけれども、今は取急ぎますから、申し上げません。——くれぐれも皆様御身御大切に。

それから別封にて御送りいたしました拙き文を、奥様に一度讀んで頂きたいと存じます。これをお讀み下さいませば、何も彼もお解りになる事と存じますから、此處では何も申し上げません。此文はいつか何方かに見て頂く機が屹度あると存じましたので、一昨年書きましたものでございます。それから二年間、肌身はなさず持つて居りました。私の秘密が世に知られる時がまゐりましても、心ある方にそれを讀んで頂きましたら、その方は私が此世で受けました苦しみを理解して下さるに違ひないと存じたからでございます。御なさけ深き奥様に讀んで頂きませば、これ程幸福な事はございません。奥様は屹度私の不幸を御理解下さる事と存じます。——私はすつかり決心いたしました今は、これからどんな事が私にまゐりましても、恐ろしくはないと存じます。その點についてはどうか御心配下さいますな。私の爲てまゐりました事が、法律上ではどんな風に解釋されますものか、私は少しも存じません。けれども、たとひそれがどんな風に解釋され、どんな風な罰を身に受けましても、恐ろしいとは少しも思ひません。——私は自分の過去を恥ぢては居りますが、こんな風になりました事については、疚しいと思つて居りません。どうか御安心遊ばして下さいまし。——それではこれで失禮いたします』

これから『二伸』として、荷物の處分をどうして貰ひたいと云ふやうな事が、かなり用意周到に、こまごまと書いてあつた。そしてあの荷物——死兒は、御迷惑でも、警察から調べに行くまで、今暫く預つて置いて下さいと書いてある邊は、冷靜な、おちついたよし子の手紙の文章も、文字も、流石に心の亂れを示してゐた。

手紙を讀終つて老人夫婦は、次にその『死兒を抱いて』と云ふ長い文を讀み初めた。

これは次のやうなものであつた。

……その人に初めて會ひましたのは、私の十七の時でした。十七と云ふ年は、私に一生忘れられないいろいろな變動が、起つた年でした。それまで少しも知らなかつた此世の悲しみが、一時につづいて身に襲つて來たのでした。二月の初めに、父が死にました。父は平生から丈夫な方で、病氣などした事はめつたになかつたのですけれども、それが急性の腸加答兒で、僅に一週間ばかり臥せつただけで、死んでしまひました。私達はそれを悲しんでゐる暇のない中に、早くも第二の不幸に見まはれたのです。父の死にましてから一ケ月半ほどして、さうです、三月の十三日の、折角春が來たのに、又冬に舞戻つたと思はれるやうな、薄曇りした風の寒い日でした。かねがね腹膜の悪かつた母は、突然病があらたまつて、父の後を追うて行きました。……父の死がすつかり母の氣力を弱めてしまつたに違ひありません。

兄の耕吉は、その前の年に中學を卒業したばかりで、高等學校の入學試驗を受ける準備をしてゐました。けれども、兩親の死後、財産整理をすつかりして見ますと、意外にも、兄にもうそれ以上の高等の學校に通はせるだけの餘裕は殘つてゐなかつたのでした。兄にはそれが殘念でならなかつたに違ひありません。けれども、無口の割合に心のしつかりしてゐた兄は、此突然の境遇の變化に對して、あんまり不平らしい事は申しませんでした。その當時、毎日毎日泣いてばかりゐました私に向つて、却つて笑ひながらこんな事をよく云ひました。

『お父さんは流石に司法官だつたんだね。お父さん位の地位になれば、他の省の人だつたら、多少の財産が殘つてゐなければならない筈なのだが、少しも殘つてゐない。併し僕は貧乏なんか何とも思やしないよ。それよりも、お父さんが清廉潔白を何處までも立て通していらしつた事を嬉しいと思ふよ。お前は子供だつたから、よくは知らないだらうけれども、××事件の時などは、お父さんの同僚の人達は隨分固いと云はれてゐる人でも、買收されたんだぜ。――けれどもお父さんは頑として賄賂をはねつけなすつたんだ。お父さんは生きてさへいらつしやれば屹度出世なすつたに違ひないよ。司法官はあれでなけりやいけないんだからね』

父が近い中に××局長になるだらうと云ふ噂のあつた事は、私も母から聞いて知つて居りました。父はおとなしい、

無口な人でしたが、何處か恐い感じがして、私には母のやうには親しめませんでしたけれども、それでも何となく心強いと云つたやうな尊敬の念を、私の心に始終起させてゐました。

私の一家には、親戚が至つて尠かつたのです。それにこれはやはり兄に聞いたのですが、兄の云つた言葉を借りて云へば、父は『水清ければ魚棲まず』で、餘りに正直一徹な人だつたものですから、却つて同僚や部下の者に、人望がなかつたさうです。そんな風なので、親戚に代つて、父の遺族――兄や私の面倒を見て呉れようとする友達も父にはありませんでした。

『よし、僕は獨立獨行でやつて見せる。なに、大學など卒業しなくたつて、心掛け一つでは、どんなにでも勉強して行けると思ふよ。……お前も後二年で女學校を卒業が出來るのだけれど、氣の毒だが、退學して貰はなければならないよ』

兄はかう云つて、『五年だ。五年經てば僕も屹度、一人前の男になつて見せる。五年の辛抱だ。五年の辛抱だ。――さうなれば、お前にも相當な事はしてやれると思ふ』

利かない氣の兄は、父の昔の同僚などに頼まないで、履歴書を自分で持つては、方々求職のために歩きまはりました。高等女學校の三年だつた私は、その三月が進級試驗でしたが、丁度母の不幸のために、それを受ける事が出來ませんでしたので、四月になつて追加試驗を受けまして、三年を及第すると共に、退學してしまひました。――友だち達に別れるのが、どんなに辛かつたでせう。一番親しかつたみよ子さんは、私の境遇の變化を知ると、手を取つて一緒に泣いて呉れました。けれども、私の悲しみよりも、兄の悲しみの方が、尚一層ひどいだらうと思ひますと、自分ばかりか我儘な不服を云つてゐては、濟まないと云ふ氣がしました。

今まで下女を二人つかつてゐた廣い大きな家から、二人は麻布の市兵衛町の、とある露路の小さな家に移りました。裏長屋と云ふ程ではありませんでしたが、三軒つゞきの長屋の眞ん中の家で、左隣りには小學校の教員、右隣りには芝浦製作所の職工が住んでゐました。――口數の多いそのかみさんは、『うちは職工長で、これは大勢の者を監督しなければなりませんから、ひと通りやふた通りの骨折りぢやないんですよ』といつもその亭主の事を賞めてゐました。いやし

い女で、隨分いやらしい事を平氣で口にするので、なるたけ避けるやうにしてゐましたけれども、それでも私の事を『お孃さん、お孃さん』と云つて呼びました。

私は父や母の事を考へては泣き、考へては泣きしてゐましたが、それでも今から思ひますと、ほんたうにその時分は悲しいとは云つても、心が單純で、素直で、無邪氣でしたので、どんなにか幸福だつたらうと思ひます。悲しい中にも、どんなにか清い樂しさを味はつてゐたらうと思ひます。——下女など使へなくなつてゐたのは、勿論の事でした。私は馴れぬ手で、急にひとりで炊事やら掃除やらをし初めましたが、そんな事は辛くも何ともありませんでした。兄が求職に奔走して夕方歸つてまゐりますのを、兄の好きなものを拵へて置いて迎へますのが、どんなに喜ばしかつたでせう。——あの頃に今一度なつて見たいとつくづく思ひます。

『おや、よしちやんの手は、可愛さうに、大分おさんどん見たやうに赤く腫れたぢやないか』兄は食事の時、私の手を見て、こんな事をよく優しく云ひましたつけ。——ある時、私は庖丁を使つてゐる中に、誤つて、左の手の小指の先をかなり深く切りました。私はそれをきれで縛つて置きましたけれども、何となく夕方歸つて來た兄に、どうかして見つからないで濟ましたいと思ひました。私は御飯の時、態と風呂敷を持ち出して、それで左の手を隱さうとしましたが、やはりたうとう見つかつてしまひました。

『どう、お見せ。——可哀さうだなあ。そんなに汚いきれで卷いて置いては駄目だよ』心配さうに、かう云ふ兄の顏を見てゐると、何故と云ふ事もなく、涙が止度なく出て來ました。——その時の事を、私は今でも特別によく覺えてゐます。

兄はどう云ふものか、それまで交際つてゐたお友達とも交際はなくなつてしまひました。——お友達たちの幸福さうな、何の苦勞もなささうな顏が、だんだん兄の心にそぐはないものとなつて行つたものに相違ありません。それで、私達の淋しい一家に、訪ねて來る人と云つては、ただ牛込の叔母たつた一人だけでした。

牛込の叔母と云ふのは亡くなつた母の妹で、未だ三十五でしたが、その良人にはもう六年前に死に別れてしまつて、

この後ずつと後家を通して、僅ばかりの良人の遺産と、裁縫の收入とによつて、小さな下女をひとり置いて、つゝましやかに暮してゐました。親戚の尠い私達には、此叔母が東京でのたつたひとりの親戚なのでした。

『耕さんとよしちやんとで、かうして暮してゐるところは、まるでお雛樣のまま事見たやうだよ』快活な叔母は、よくかう云つて笑つては、來るたびに、煮物などをして持つて來て與れました。『此海苔は靜岡の人から貰つた海苔でこしらへたんだよ。……割合にうまく出來てよ。……おほほ、自分で持つて來て賞めてりや世話はないわね。だけれど、外國ぢや何なんだつてね、これは不味いけれどもお食んなさいと云ふのは失禮で、美味いからお食んなさいと云ふのが禮儀なんだつてね』こんなやうにはきはきした物の云ひ方をする人でした。

二十の兄と十七の妹とで家を持つてゐるのは、あんまり痛々しくて見てゐられないから、自分の家の方へ一緒にならないかと、始終叔母は云ひましたけれども、兄はたうとう承知しませんでした。すべて負嫌ひな兄は、叔母に負擔をかけたくないと思つてもゐたのでせうし、又私に一度洩らした口吻に依ると、叔母のところに近邊の娘達が、裁縫を習ひに來るのが、煩くて堪らないだらうと思つてもゐたのでしたらう。——『淋しいけれど、當分兄妹たつた二人で暮さうね。その中には何とかなるから』こんな事をよく云ひました。

けれども、その『何とかなるから……』もなかなかうまくは行きませんでした。その頃は世の中に、さうさらには職業の落ちてゐない時分でした。大學を卒業した人々でも就職難に苦んでゐた時分でしたから、まして中學を出たばかりの、殊に一本氣な世間知らずのお坊つちやん氣質の兄には、さう云ふ中から適當な仕事を目つけて來る事が出來ませんでした。『畜生、四五ケ月給仕代りをして我慢してゐれば、その中に拔擢すると云ひやがつた！』こんな事を云つて憤慨しながら、歸つて來た事もありました。私は紺飛白に小倉袴を穿いてゐる兄の樣子を見ると、せめて銘仙の羽織とセルの袴だけでもお拵へなすつたら如何ですよと勸めましたけれども、『なあに、いゝよ。なりふりなんか構ふものか』と兄は一言の下にはねつけました。——銘仙の羽織とセルの袴位は、拵へようと思へば、どうにかならない事はなかつたのでしたのに

もう夏が來てからでした。兄が中學時分に敎へて頂いてゐたS——先生から、『どうだ、名古屋に出かけて見る氣はないか？』から云ふお話が突然ありました。それは或保險會社の社員の口で、割合に待遇もいいのでした。兄は三日間ばかり一生懸命に考へてゐました。なるたけなら、此東京で探したいと思つてゐたらしいのですけれども、さうさうはもう待つてゐられないやうな狀態にもなつてゐたのでした。

『どうだい、よしちやんは一緒に名古屋に行くかい？』そんな事を私に云ふかと思ふと、『名古屋なんてどうせ不景氣な田舍だらうから、お前だけは東京で育てたいな』と云ふやうな事も云ひました。兄は私とはなれたくないと思ふと同時に、又自分ひとりなら足手纏がないから、思ひ切つて活動出來ると思つてもゐるらしかつたのです。——私は兄の云ふ通り、どつちでも不服はないと思ひました。牛込の叔母さんは、大變私を可愛がつて呉れましたし、何は兎も角、叔母さんから裁縫を習つて置きたいとも思ひましたので。

『五年だ。五年の辛抱だ！　これから暫くの間僕は隨分奮闘しなければならないから、それではよしちやんは當分叔母さんに預かつて頂からか』そんな事をたうとう兄は云ひ出しました。土地不案內なところに行つて、兄妹ふたりが、兄の貰ふ月給で暮して行けるかどうか、それも兄の心には不安だつたに違ひありません。

叔母さんは、喜んで私を引受けて呉れました。『大きな娘が急に出來て、あたしはこんなに嬉しい事はない。……これからは毎日お乳を飮ませて上げますよ』叔母は例の調子で、こんな冗談などを云ひました。

兩親の亡くなつた當座に、ひとつは必要から、ひとつは邪魔になりますところから、家財道具のめぼしいものを大概賣つてしまひましたが、それでも未だ多少は殘つてゐましたので、それを賣拂ひ、それに前から殘つてゐましたお金を合せると、ざつと四百圓ほどのお金が出來ました。これが私達兄妹の全財產だつたのですもの、若し兄の職業が尙なかなか目つからなかつたとしましたら、近い中に、私達はほんたうに路頭に迷はなければならない狀態になつてゐたのでした。出發の前の日、兄はその貴重なお金の中から、百五十圓を取出して、私が幾度も幾度も辭退しても承知しないで、それを無理やりに私の手に握らせました。

『いや、そんな事は云つても、どんな場合に要るかも知れないから、持つておいで。僕は初めの中こそ、洋服などを拵へるので、多少要るけれども、併し何と云つたつて男だもの、裸一貫だつて心細くはないからね。――そこに行くと、女はいざと云ふ場合に、金でもなければ、ほんたうに仕様がないからね』

それは全く兄の云つた通りでした。その後になつて、若しその時のお金がなかつたら、私は全くどうしていいか途方に暮れたらうと思はれるやうな場合に出會つたのでした。――その話は、後になつて追々述べますが、私は兄に對する感謝の念に涙ぐみながら、そのお金を背負揚の中に納ひました。

プラットフォォムで、兄の乘つた汽車が動き出しました時には、流石に堪らなく悲しいと思ひましたけれども、それでも、全體として、その時の私の悲しみ方が、あまりに不足で、あまりに飽氣なさ過ぎたと云ふ氣が、今思ふとします。名古屋と東京との間だから、急行で行けば僅か八時間で行ける、かう兄が申しますので、そんな事も多少は私の心持を暢氣にしてゐたのでせうし、それに叔母さんが大變好い人で、あたしを可愛がつて呉れますのと、その叔母さんから裁縫を習ふと云ふ事が、何となく樂しみに思はれてなりませんでしたのとが、（私はほんたうに何よりも裁縫が好きでした。）悲しい中にも一種の明るい希望を、私の胸に湧かせてゐたのでせうけれども、併しその時別れた後、私は兄にたつた一度しか會はないのです。それも會社の急用で、兄は一寸東京に出て來た序でに寄りましたので、ほんの三十分も話してゐる暇はありませんでした。――兄はほんたうに好い兄でした。私は今誰よりも兄に會ひたいと思ひます。たつたひと目でも會ひたいと思ひます。けれども、今更おめおめと兄に會はせる顔のない身の上となつてしまひました。あの兄の事ですから、總ての事を打明ければ、屹度心から私の不幸を憐んで、何處までも何處までも私を庇つて呉れるに違ひありません。――ですけれども、さう思へば思ふ程、益々兄に會はせる顔がないと云ふ氣持がして來ます。――さうでした。その後一度、私の方から兄を訪ねやうとして、わざわざ名古屋まで出かけながら、たうとう會ひもせず、訪ねもせずに、歸つて來てしまつた事がありました。その理由は、これを讀んで頂く中に、自然にお解りになります。その時、これからお話しようとする私の不幸は、もう殆んど頂上に昇りかけてゐたのでした……

今から思へば、兄が名古屋に行つて、私が東京に殘りましたと云ふところに、既に私の不幸の萌しがあつたのでした。――私はあの時、何故兄に從つて、自分も名古屋に行つてしまはなかつたのでせう。若し名古屋に行つて、兄の側にゐましたなら、總べての不幸が起らなかつたでせうのに。――それを思ふにつけ、私は最初の別れの當時、何故もつともつとずつと悲しまなかつたらうかと悔まれて來ます。ほんたうに、いくら悲しんでも悲しんでも悲しみ足りない筈だつたのでした。

二

父母を失つた事、兄と別れた事、折角途中まで行きながら退學してしまつた學校の事、さう云ふいろいろな悲しみのために、暗く沈んでゐた心が、次第次第に又昔の明るさを恢復して來ると、もうやがて秋が近づいてゐました。叔母との生活は、確に私に取つて愉快でした。叔母は私が行つてから、今まで雇つてゐた小女に暇を出しました。全く叔母と私と女二人のつつましやかな生活なのですから、小女などの必要はなかつたのです。

その時分、私は自分の身體がめきめきと大きくなつて、何ですか、今まで知らなかつたやうな熱い血が、身内を迸るやうに流れる氣がして、何を見ても、妙に嬉しくて、躍りたいやうな心持になりました。過ぎ去つた悲しい事は、未だ悲しみの色を心に投げながらも、併しそれとは別に、又はそれを押しのけて、さうした變化が肉體的にも精神的にも起つてゐたのでした。何か知ら樂しい事が自分を待つてゐる、そんな氣が絶えずしてゐました。毎日私を見てゐる叔母さんまでが、時々特に私の顔をじつと見つめて、

『まあ、よしちやんはほんとうに奇麗な娘さんになつたね』と吃驚したやうに云ひました。そんな事を云はれると、恥しさに顔ぢうが火照りながらも、併し自分でも、毎日鏡を見るのが、何とも云はれない樂しみだつた事を隱すことは出來ません。

叔母の家は西五軒町の、或大通から他の大通へと通り抜ける小路の中にありました。五軒つづきの、長屋と云つてもかなり奇麗な二階建の中の一つで、往來から小奇麗な格子戸までの間に、二段の石段がついてゐました。室數は二階

が四疊半二間、下階が八疊と三疊とでした。この室取は此五軒の長屋のいづれにも共通なもので、叔母の話によりますと、家族は階下に住み、二階は他人に又貸しすると云つたやうな人々のために、建てられたものに違ひないとの事です。そして實際に又、どの家もどの家も、その室貸をしてゐるのでした。殊に此邊はW――大學やN――齒科醫學校などが近いので、主に學生がさう云ふ二階の室を借りてゐました。

九月の初旬の或日でした。叔母と私とはいつものやうに、おはりをしてゐましたが、裁板でへらを使つて屈んでゐた叔母が、突然顔を上げて、

『よしちやん、うちでも二階を貸さうかね？』と云ひ出しました。『お隣りの奥さんに、さつき大變勸められたんだけれどね、よしちやんはどう思つて？……あんなにして唯明けといたつて、勿體ない、お貸しなさいよ、つてお隣りの奥さんは、それや熱心に勸めるんだよ。近頃の學生はおとなしいようだし、どうせかうしてゐても、忙しい事はないんだしするから、ひとつうちでも貸す事にするかね？　それに女ばかりで無人だから、二階に男の人がゐて呉れたら、安心にもなるし……』

『あたしは何方でも構ひませんわ。叔母さんのお將へのやうに……』私はさう答へながら、何故か妙に胸のふるへる感じがしました。

貸間をするならば、丁度九月の新學期の初まる時で、暑中休暇の間故郷に歸つてゐた學生達が、續々上京して來るから、今が一番いいと云ふお隣りの奥さんの注意によつて、その翌日二階の戸袋の外側に、『貸間あり』と云ふ紙を、斜めに貼りつけました。……叔母と私とは、その出來榮を見るために、態々外に出て、その戸袋を見上げて見た程、何となく此新しい企に子供らしい好奇心を動かされてゐました。

その日の中に三人 きに來ました。あの人は丁度その三人目なのでした。私は恥しいので引込んでゐましたが、二階に案内して行つた叔母は、歸つて來ますと、

『直ぐ越して來るからつて、手附を三圓置いて行つたよ。色の靑い陰氣な顔をした人だけれども、おとなしい事は確にお

とだしさうなんだよ。……折角貼つたばかりで、惜しいけれど、「貸間あり」は早速除らなければならないね」こんな事を云つて笑ひました。

あの人が引つ越して來たのは、それから三時間ばかり後でした。荷物の持ちはこびには叔母が手傳つて、私はやつぱり引つ込んでゐましたけれども、併しお茶を持つて行くときは、叔母の命令で、私が行かなければなりませんでした。──私が二階へ上つて行くと、丁度あの人は本箱に本を入れてゐましたが、一寸此方を振向きました。私はひと目見ただけで、直ぐ俯向いて、お茶を置くと、逃げるやうに梯子を下りて來てしまいましたが、それでも、叔母の云ふ通り、大變色の青いと云ふ事と陰氣くさいと云ふ事とは、頭に殘りました。

それは午後の三時頃でした。三十分ばかり二階では、荷物を片付けるらしい物音がきこえてゐましたが、やがてそれが片付くと、それきりことりと云ふ音もしなくなつてしまいました。まるで人がゐるのかゐないのか解らない位に、寂然としてゐます。叔母は讀書でもしてゐなさるのだらう、と云ひました。けれども、二時間ばかりして、私が夕御飯のお膳をはこんで行つた時、あの人は椅子に此方向きに腰かけて、片手で頬杖を突きながら、ちつと疊の上を見つめてゐました。それが何か深く考へ込んでゐるやうにも見えましたし、唯ぼんやりしてゐるやうにも見えました。あの人の顔は決して輪郭の整つた立派な顔ではありませんでしたが、それでゐて何となく特色のある、人に或際立つた強い印象を與へる顔でした。額が大變廣くて、鼻が高い、美しい恰好をしてゐて、眼が神經質な鋭い光を持ちながら、それでゐて何か憧れてでもゐるやうな女らしい優しみを持つてゐました。その時は勿論氣がつきませんでしたが、次第に馴れて來るにつれて、その眼の表情が始終變化するのが解りました。晴々としてゐるかと思ふと、急に雲がかかつたやうにどんよりして來て、妙に陰鬱な感じになります。自分にもそれが分ると見えて、『僕の眼は今變に暗くなつて來たでせう。これは僕の頭に霧がかかつたからです』こんな事を後になつて、私に云つた事がありました。──『頭に霧がかかる』さう云はれても、頭の中がどんな風になるものか、私には想像もつきませんでしたけれども、あの人は何かを話す場合に、さう云つた言葉の使ひ方をよくしました。『これが僕には堪らない氣持なんですよ。急に濛々と霧がかかつて來るの

です。すると、大變危險な心の狀態になつて來ます。もう生きてゐるのも厭だ、さう云つた心持が込み上げて來るのです』こんな事を云つた事もありました。

口が至つて小さくて、心持上唇が出てゐましたが、それはそれ自身としては、何となく愛らしい形を持ちながら、あの人の顏の全體の輪廓から云ふと、妙に不調和でした。若し口が今少し大きくて、强さを持つてゐましたなら、あの人の顏は締りのある立派なものとなり得たに相違ありません。やはり後になつて、その口について、『僕の口、これが僕の心の缺點をよく表してゐるんですよ。――何かにきつぱりした決斷心がないのがこれによく表れてゐるんです』さう微笑しながら、私に云つた事もありました……

『學生さんぢやないんだつてね。もとW――大學の文科に一寸ゐた事はあるが、今は止めて行かないんだつて、さう云つてよ』と翌朝、寄留屆の事で二階に話しに行つた叔母は、降りて來ると云ひました。『それでも學生さんぢやないのにあんなに本を持つてゐて、勉强が好きらしい人ね。今も橫文字の本を熱心に讀んでゐなすつたよ』

二三日經つと、『變人ね、水沼さんは』叔母はかう極めてしまひました。けれども、變人でも、おとなしくて、しづかで、始終本を讀んでゐる勉强家と云ふ點で、確に此の止宿人は叔母の氣に入つたやうでした。

『ああ云ふ內氣なんゝは、少しぐらゐの事はなるたけ口を利かずに默つてゐるものだから、始終此方から氣をつけて世話をして上げなければいけない』そんな事も叔母は云ひました。

あの人は大概始終部屋に引つ込んでゐました。そして前にも云つた通り、そこに引つ込んでゐる間、人がゐるのかゐないのか、解らないほど、ことりと云ふ音も立てません。梯子などを降りて來る時も、まるで女のやうにしづかに足を踏んでゐました。――夕方から每日一度づつ外に出て行きましたが、八時頃には大概歸つて來ました。それが暫くの間は何をしに出かけて行くのか、少しも解りませんでしたが、後になつて、或る商店の店員たちに英語を敎へに行くのだと云ふ事が解りました。それによつて受ける報酬が、あの人の生活費の大部分なのでした。秋田が故郷で、そこに父がひとりでゐるのですが、その父からも、時々五圓、十圓の小爲替を送つて來る樣子でした。

それから又四五日經つた夕方、それは日曜か何かで、あの人は英語を教へに行かない日だつたと見えますが、私が勝手仕事をしながら、何かの歌――たしか『ローレライ』だつたと思ひます――を小聲で歌つてゐると、二階からそれに節を合はせた口笛が聞えて來ました。おや、あの人が口笛を吹いてゐる、さう思ふと、いかにも思ひがけない事だつたので、私は吃驚してしまひましたが、それと共に、さうして口笛で節を合はされたのが恥しくもあつたので、歌ふのを止めてしまひました。けれども、あの人は暫くの間、そのまま口笛を續けてゐました。いろいろの歌の節をやりましたが、讃美歌が多いやうでした。

　私が晩御飯を持つて行くと、あの人は江戸川から小石川の臺の方を見渡される北向きの窓に立つて、暮れかかつた町の方を見下してゐましたが、急にくるりとこつちを振向いて、

『今階下で歌つてゐらしつたのは、あなたですか？』と訊きました。

『ええ、駄目ですの』と私は眞赤になつて答へました。

『いや、そんな事はない』さう云つて、あの人は窓からはなれて、座蒲團の上に戻りながら、今は何處にも學校には行つてらつしやらないのですか？と云ふやうな事を訊きました。

『此三月まで行つてゐましたが、途中で止めました』と私は答へながら、餘りいろいろな事を訊かれたくない氣がして困つてゐますと、もうそれきり深く訊きただしても來ませんでした。そこで、私は直ぐ階下に降りてしまひましたが、その時のあの人の顏付は、大變晴々として、やさしく見えました。その時の澄んだ、微笑を含んだあの人のまなざしは、今でも私の眼に殘つてゐます。

　いえ、でもその時分は、私は未だあの人の事を何とも思つてゐはしませんでした。後にあの人を愛するやうにならうたとは、思ひも寄りませんでした。それよりも、却つて何となく寄りつき難い氣むづかしい人と思はれてゐました。恐ろしいやうな感じも混つてゐました。叔母の云ふやうに、『變人』と思つてゐました。けれども、それにも拘らず、何となく尊敬の念が湧いてゐた事は確でした。

快活な叔母は、それでも、何呉れとなく、いろ〳〵注意をしては、世話をしてゐました。叔母はあの人の事を『世間知らずのお坊ちやんなんだよ』とも云ひました。私などはああ云ふ氣質の人に向つては、なか〳〵云へないやうな事を、叔母は平氣でどん〳〵云ひました。

『水沼さん、あなたももう少しなりにお構ひなさいよ。殿方はなりふりを構はなくつてもいいと云つたのは、あれは昔の事ですよ。――今度お金をお取りになつたら、私に預けて御覽なさい。二ケ月か三ケ月であなたが何處に出ても見つともなくない風を私が工夫して上げますから』などとも云ひました。

さう云ふ時、あの人は默つてにやにや笑つてゐました。ほんたうに、叔母の云ふ通り、あの人はなりに少しも構はない人でした。十月になつて、袷を著るやうになつた時見ると、羽織も著物も紡績の絣で、それもいつ頃洗ひ張したものか解らない程、垢がついて、襟がよれよれになつてゐました。

『水沼さん、あなたはそんなに學問ばかりなさつて、どうなさるんですの？ 英語など敎へに行くばかりでなく、新聞ちやんとした會社か何かにお勤めなすつたら如何です？ 折角なすつた學問が惜しいぢやありませんか？』さういふ事も、叔母はよく云つてゐました。

『僕はそんな處に勤めるのを好まないのです』あの人は眞顏になつてから答へて、未だ何か說明でもしさうに、口をもぐもぐさせてゐましたが、叔母が相手の言葉を理解しようともしないで、尙も同じ事を繰返したものですから、それきり默つて、唯微笑むだけでした。――『今の世の中といふものは、どうも僕には向きません。僕は人中に出ると、直ぐ頭の支配を失ひかけて來ます。――例の霧がかかつて來るのです』後にさう云つて、自分が職業を探さない理由を私に話した事がありました。あの人は腦が大變弱いと自分でも云つてゐましたが、世の中に出て行くのを嫌ふのは、そればかりの理由からではないやうでした。

『僕には醜いもの、汚いものが、餘りに強く心に感じられて來ます。例へば、往來で、車夫のやうなものが喧嘩してゐるとしますね。そんな事からも、僕は妙に胸に痛みを覺えさせられるのです。――兎に角、いろいろな事に平氣でゐられ

ません』こんな事を云ふ時のあの人の眼付には、妙に世の中を輕蔑して、自分ばかりが穢れない誇を持してゐると云つたやうな、傲慢なところと、又一種憂ひ憤るやうな熱情とが見えました。けれども、それを傲慢などと私が思ふのは、やつと近頃の事で、その頃の私は、さうした時のあの人の言葉を聞くと、全く世の中と云ふものが大變穢れてゐるもののやうに思はれて、あの人がその世の中に比べて、非常に高尚に、氣高く見えたものでした。——併し實際あの人は、その言葉通りに、高尚な、氣高いところのある人でした。唯私の心を惹かうと思ふために、言葉を飾り立てるやうな人では、決してありませんでした。けれども、その高尚な、その氣高いものと一緒に、あの人の何處かには、又濁つたところがあつたのは確でした。——その濁りが、理性に勝つた、綺麗な心を持つたあの人を、ややもすると妙に暗いものにしてしまふのでした。

『これは生理的なんです』かうあの人はそれについて私に云ひました。『腦が惡い、と云ふよりも、僕は鼻が惡いのです。——蓄膿症が、額に來て居るので、醫者にも手の施しやうがないと云ふのです。これがために、頭が變になり出すと、もう手が附けられなくなります。一體弱い意志の力で、一生懸命に押へつけてはゐますが、それで押へつけられない場合には、自分でも後で恐ろしくなるほど、頭の調子が變つてしまふんですよ。——ずゐ分不道德な事も頭に浮んで來てね』さう云ひながら、眼をそらして、一種變挺な苦笑を浮べました。『だから、いろいろ世の中の醜さを平生は攻撃してゐても、ああ云ふやうに頭がなつてゐる時には、僕だつて何をするか解らないと云ふ氣も實際しますよ』

そんなやうな事を私にあの人が話すやうになつたのは、かなり後の事ですが、あの人と私とが親しく口を利くやうになり初めたのは、或日叔母に向つて、あの人が、『よし子さんに英語でも敎へて上げてもいい』と云つた事からです。學校を途中で退學したと云ふ事が、何と云つても、私には殘念でならなかつたので、そんな口吻を時々洩らしてゐたものですから、それを叔母がひよつとした事からあの人に話したのださうです。さうしたら、あの人が、『それでは自分が』から云ふ風に云ひ出したのださうです。

そこで、その翌日から、晝間は裁縫(はり)やその他の用事で忙しいものですから、夜分、あの人が商店から戻つて來ると、

一時間ほど私は英語を習ひ初めました。

三

習ふのはチョイス・リイダアの四でした。あの人はその中から、あの人の趣味に從つて、多少文學的の味のあるものばかりを撰んで、熱心に講義して呉れました。ベトオフエンの『月光曲』の出來上つた夜の事を書いた美しい物語は、殊にあの人の趣味に適してゐたので、一層熱心に講義して呉れました。あの物語は、ほんたうに心の底まで泌み通るやうな美しさと涙とに充ちてゐますので、私も非常に好きでした。あのベトオフエンが町を歩いてゐるところから、とある陋屋で自分の作曲を演奏してゐるピアノの音を聞いて立止るあたり、その陋屋の中にきこえる不幸な親子の會話を聞くあたり、そして殊にベトオフエンが即興的に、あの『月光曲』を奏き初めるあの條、それが、今でも尚私の心になつかしく殘つてゐます。あの人が熱心に、夢みるやうな眼付をして、それを講義したその顏付が、今でも尚ありありと私の眼に殘つてゐます。……思ひ出すと、その時、そしてその時分が、一番私には喜ばしかつたのです。兩親の死や兄に別れた事やによつて、此世の悲しみを知りかけてゐた私の心にも、未だ此世の濁りと云ふものは入つて來ませんでした。ほんたうに胸の中で感じ易く踊る血汐も、少しも穢れない處女の美しい血汐でした。私は悲しみは知つても、どうする事も出來ない暗い濁りは、未だ少しも知りませんでした。悲しみには未だ何處か透明な、心を慰める何ものかがありましたけれども、その後に私が受けました、又今でも受けてゐます苦しみには、さうした透明なものや、心を慰めて少れるやうなものは、一つもありません。唯どうする事も出來ない濁りと、渦卷くやうな暗さとがあるばかりです。……けれども、その時分は未だそんな不幸な心持は、私には全然解らなかつたのでした。

講義が終ると、後二十分ほど、あの人は私にいろいろな話をして聞かせました。それが主として文學の話で、外國の面白い小說などの略筋を、あの人は私に解るやうに、巧みに話して聞かせました。――私にはさう云ふ難しい議論はよく解りませんでしたけれども、あの人に云はせると、藝術は人間のする事の中で最も高尙な、最も正しいものでした。けれども、今の日本の小說家は、一二の人を除くほかは、大變輕蔑してゐました。始終原稿用紙を擴げて、何か書かう

としてゐましたが、一つも出來上つたものはないやうでした。『頭が惡い、頭が惡い！』さう云つては、書きそこないの原稿用紙を、くしやくしやにもみ丸めて、陰氣な苛々した短氣な顔付をしました。……でも、若しあの人が今でも尙生きてゐましたら、乾度いつかは何かを書くだらうと云ふ氣がします。

私が若しもつとさう云ふ方面についての素養を持つてゐましたら、あの人の言葉をよく理解して、もつと詳しくあの人の思想を此處に記して置く事が出來るのですけれども、悲しい事には、さう云ふ素養が私にはありませんでした。けれども今でも覺えてゐます一つ二つを此處に擧げれば、『今の日本では理想主義と云ふものが、妙に輕蔑されてゐるが、併し僕は純然たる理想主義者です』とよくあの人は云ひました。あの人の口癖になつてゐたのは、『此世の不完全と醜惡とから、一歩々々人類を救ふ、そこに今後の藝術の使命があるのです』と云ふ言葉でした。その他未だそれについてのいろいろ細かな説明を聞きましたけれども、今は私は覺えてはゐません。併しさうした事を述べる時のあの人は、ほんたうに熱情的で、いたく昂奮してゐました。何となく人を壓しつけるやうな力がありました。

あの人に對する尊敬の念が、次第々々に一種のなつかしさに變化して行つたその變化の仕方は、大變自然で、順調でしたので、いつからそんな氣持が起つて來たかを、私は今はつきりと云ふ事は出來ません、英語が濟んで更に例のやうに二三十分話をして居る間に、何となく座を立つのが名殘惜しい氣が濃くなつて來るのを感じ初めたのは、やはり十月になつてからだつたと思ひます。さうです、或日突然うすら寒い日が來たので、叔母が、

『水沼さんに火鉢を上げなければいけないね。煙草盆だけでは、もう寒いから』そんな事を云ひながら、棚から火鉢をおろして、自分でそれを二階にはこんで行きました。その晩、英語を習ふ時間に、私は自分とあの人との間に、火鉢が横たはつてゐるのを、妙になつかしく思つて、その上に自分の手をかざすと、それと向き合つて、あの人の手がかざされてゐるので、心ひそかに二人の手を見較べた事を覺えてゐます。あの人の手は細くて、皮膚が滑らかで、うす靑い血管が、氣味の惡い程太くふくれて表はれてゐました。こんな風に血管が、ぷつくりふくれるのは心臟が弱い證據なんです』さうあの人は云つた事がありました。あの人は炭を燃すのが非常に下手でした。それで始終氣をつけてゐないと、

直ぐに消してしまひました。その癖妙に火著をいぢるのが好きと見えて、私がいくら折角うまく熾るやうにして置いても、直ぐに消してしまふのでした。――けれども、それは幾度となくあの人の室に行く口實を與へるので、私に取つては便利でした。『水沼さん、火が熾つてゐますか？』私はさう云ひながら、二階に上つて行くのです。食膳を持つて行く時と、夜英語を習う時との外は、あの人の室に上つて行くのが、何となく後めたいやうな氣がしてゐたからでたとひ私が度々あの人の室に上つて行つたところで、叔母はあの人をも信じ、私をも亦信じてゐますので、決してそんな事を怪む筈がないといふ事が、私にはよく解つてゐたのですれども、それでも私は何か口實がつかなければ、何とは知れず氣がとがめるやうな氣がしてなりませんでした。――その時分から、私のあの人に對する心持は、もうかなり強く進んでゐたのでした。

　それからもう一つ、私の心にその頃から初めて感ぜられて來た或氣持がありました。と云ふのは、私に殆んど知らず識らずの間に、叔母の前ばかりではなく、あの人の前でも、殊更に無邪氣に見せようと努めるやうになつてゐた事でした。――叔母には勿論、あの人にも、自分の心の底を見抜かれるのが恐ろしかつたのです。……これが私の心に生じた一番最初の濁りであつたと云つても差支へないと思ひます。屹度かうした心の動き方は、人間と云ふものに取つて、必然なものなのだと今は思へますが、その時分には、半意識的に動いてゐるさういふ心持が、はつきり意識の面に浮んでは來なくとも、やはり半意識的に私を苦めてゐたのでした。何故かと云ひますと、あの人の室から階下に降りて來た時とか、又はあの人の話が叔母との間に出た時とかは、私は平靜ではゐられませんでしたので、それを隱すために、心にもない小さな嘘を云つたり、話題を轉じさせるために、今の自分には何の興味もないやうな事を喋り出したりしなければなりませんでしたから。

『水沼さんは好い人ですけれど、でも陰氣なところは厭ですわ』とか、『叔母さん、それはさうと、今日あたしの針をお使ひになつて？』とか。

何も知らない叔母は、『いくら陰氣でも、何よりも深切でおとなしいのがいい』と云つて、あの人のために辯解した

り、『いや、使はないよ。失くなつたんぢないやかい？　そこらに落ちてゐると針はほんたうにあぶないからね』さう云つて、落ちてゐない針を探すために、疊の上をすかして見ながら、手さぐりなどをしたりしました。

さう云ふ時、私は顏が火照つて、自分の心持が何とも云はれず苦しく恥しいものに感ぜられました。

ある晩、やはり英語の濟んだ後で、話をしてゐる中に、あの人は急に眞劍になつて、多少羞ひを含みながら、『よし子さんは未だ無邪氣ですから、戀といふものをほんたうに考へた事はないでせうね――』と云ひ出しました。

私は全身の血が全部頭に上つてしまつたやうな氣がして、氣が遠くなるほど胸が波打ちました。けれども、あの人は私が吃驚したのとは、全然違つた事を話さうとしてゐたのでした。

『一般の人が持つてゐるやうな不眞面目な概念からはなれて、さう云ふものを眞面目に考へる事が、あなたには出來さうです』かうあの人は云ひながら、机の抽斗から、一冊のノオトを取出しました。『これは僕の昨年の日記なんですよその頃僕はある女と戀じてゐました。今は別れてしまつた、と云ふよりも、その女の人の方で僕を捨てて、他の男へ走つてしまひましたが、併し僕はその人に今でも或好意を持つてゐます。昔のやうな熱情ではなく、それと全然違つた或好意なのです。……僕はあの人の事を考へる度に、今でも幸福であれかしと祈らずにはゐられません』

それが如何にも穩かな、おちついた、淀みない滑かな聲でしたので、私はあの人の眼をぢつと見つめたほど、その言葉に惹きつけられました。

あの人は『少し讀んでもよござんすか？』と私に斷つて、その日記のところどころを讀んだり、その日記から思ひ出したやうに、その頃の話をぽつりぽつりしたりしました。日記の文句そのままには、今は記憶してゐませんが、それは大變美しい文でした。そして大變熱情的でしたが、併し相手の女の變心して行く經路を書いてあるところでも、女に對する恨は一言も述べてありませんでした。憤つてゐるやうなところもありませんでした。女が他の男に走る前、あの人の前で、他の男を愛してゐるといふ事を告白するところでも『彼女の氣持は私にはよく理解出來る』そんな言葉をさへあの人は使つてゐます。けれども憤と恨との言葉が一言もない代りに、そこには何とも云はれぬ淋しみと悲しみとが

ありました。そしてその淋しみ悲しみを、ぢつと嚙みしめて味はつてゐるやうな一種のおちつきの熱情を持つてゐました。その女と云ふのは、やはり文學に志を持つてゐる人で、あの人の日記の中では、そんな風には書かれてゐませんでしたけれども、後になつて他の人から聞いた話によると、かなり心の變り易い女だつたらしいのです。それを話して與れた人は、水沼の友人で、やはり文學志望の青年でしたが、『あれはコクエットです』こんな事を云ひました。『コクエティッシュなところが、又あの水沼を惹きつける所以となつたのでせう。水沼は妙に自分の性格とは反對の女に惹きつけられる男ですからね』――その最後の言葉は、或はさうかも知れないと云ふ事を、後になつて私に思ひ當らせた時がありましたが、今はそれを話す時ではありません……

小娘のセンチメンタリズムが手傳つてゐた事は、今から思へば爭へませんが、私はあの人がその日記を讀んでゐるのを聞いてゐる中に、涙が眼から溢れて來ました。私はしくりしくり啜り上げました。――あの人は讀むのを止めて、私を見てゐたやうでしたが、別段何も云ひませんでした。そしてそれきりもう讀みつゞけませんでした。

その時あの人が何のためにそれを私に讀んで聞かせたものか、はつきりした處は未だに私に解りませんが、併し私は、あの人が或成心があつてさう云ふ事をしたとは、決して解釋したくありません。さう云ふものを讀む事によつて、小娘の私の心を惹きつけようとするやうな、さう云ふ種類の不眞面目な事は斷じてあの人に限つてないと思ひます。あの人は何と云つても大變弱い人でした。そして弱い人であるために、淋しさに堪へられずに、私のやうなものにまで、さうした昔の思ひ出を話す事によつて、何等かの慰めをみづから感じたいと思つたに違ひありません。――私はさう云ふ風に解釋したいと思ひます。

けれども、その話が、その時の私の心に與へた影響は、かなり強いものでした。私は寢床に入つてからも、それについて考へました。私はあの人の過去のさうした事件に對して、嫉妬らしいものは少しも感じませんでした。唯あの人が氣の毒になりました。あんな優しい、あんな深切な人を、どうして捨てたかと思ふと、相手の女の氣持が解らなくなつて、その女が憎らしくさへも感ぜられました。その頃眠られないやうな事のなかつた私が、時計が一時を打つまで、眼

を覺ましてゐました。いろいろな事が頭の中に浮んで來ました。嘗て考へなかつたやうな事まで浮んで來ました。私は何度となく涙を浮べて、枕を濡らしましたが、併しそれはあの人の過去の不幸に對する同情のためばかりではありませんでした。私はそれに關聯して自分の事についても考へました。悲しみからではない、唯妙な昂奮から胸が迫つて、涙が止度なく流れました。

その後もあの人はよくその女の事を口にしました。『久野さんは多少ヒステリイはありましたが、併し人間としては正直な人でした』と云ふやうに、その女の人を名で呼ばずに、姓で呼んで、そしてそれに敬稱の『さん』をつけてゐました。――これはあの人の趣味であつたに違ひありません。後に至つて私の場合にも、よし子と云ふ名を呼び慣れてゐるために、改めて私の性を呼びはしませんでしたけれども、敬稱の『さん』だけはいつになつてもつけてゐました。私が『よし子』と呼び捨てにして下さいと頼んでも、承知して呉れませんでした。それと同じに『お前』とは云はずに、『あなた』と云ひました。言葉も最後まで、初めと同樣に『あります』言葉を使ひました……

『そんなに思つていらつしやるのに、何故あなたは久野さんとお別れになつたのです？』とある時私が訊きますと、

『併し久野さんが心から他の人を思つた場合には、仕方がありますまい。いくらどうしようとしても人間のほんたうの感情は變へる事は出來ませんからね』とあの人は淋しく頬笑みました。

『それにしても、それでは餘りぢやあございませんか。向うの男の人も男の人ですわ』

『併し僕はそれでいいのです。さうなつた以上は、もう爭つたり談判したりする事が僕は嫌ひなのです。……總て荒々しい事とか醜事とか、さう云ふものに這入つて行く事は、僕の性格がゆるしませんからね』

併し何かにつけて、あの人がその『久野さん』と云ふ女の事を口にするのが、いつか私には平氣でゐられなくなつて來ました。さうです、たしかに嫉妬でした。私は嫉妬を感じ初めたのでした。そしてその嫉妬から來る苦しみが強くなつて來た時、私はもうほんたうにあの人に戀してしまつてゐたのでした。

あの人を捨てた『久野さん』、浮氣な殘酷な『久野さん』――私はその女に代つて、あの人を何處までも慰めようと決心

しました。いゝえ、それは餘りに小娘らしい云ひ方です。その時分に、そんな風に考へる事を私自身好んでゐたので、自分の身を犧牲にして、あの人を慰めてやる、と云つたやうなところに、非常に美しい詩を空想してゐたのでした。けれども、ほんたうは、あの人を此方(こつち)から慰めて上げると云ふよりも、私があの人から慰められたいと思ふ心の方が強かつたのでした。あの人に對して抱いてゐる自分の感情に向つて、あの人からも同じ熱情の酬ゐを得たいと思つてゐたのでした。

今の基督教の教會のやり方には賛成が出來ないが、併しあの讃美歌が聞かれるために、時々日曜日に教會に出かけて行くと云つてゐたあの人は、ほんたうに唱歌が好きでした。あの人は多少喉にいりつく神經的なところはありますが、それでも如何にも細い、甲の好い聲を持つてゐました。叔母や私と馴染むにつけ、あの人は遠慮がなくなつたと見えて、よく大きな聲で讃美歌を歌ひました。『よし子さん、歌を歌ひませんか？』そんな事を云つて、あの人は私にいろいろな讃美歌を教へて、そして一緒に歌ひました。――若い娘と一緒に讃美歌を歌ふ、それが唯それだけの意味であの人には美しくも愉快にも思はれたらしいのです『洗禮を受けるのは厭ですが、僕に日曜學校の先生をさせたら、それやうまく子供達を喜ばせてやりますがね』さう云つた事がありましたが、それは全くさうだらうと思ひます。あの人の趣味は確にそれに適當してゐました。あの人は貴族的――物質的に贅澤をすると云ふ意味ではない意味の――でした。凡庸、通俗、それがあの人の趣味に一番背いたものでした。

クリスマスの晩は、大變寒いけれども、よく霽れた晩でした。あの人は自分の知人がB――といふ東京でかなり有名な教會にゐるから、その人を訪ねて、B――教會のクリスマスを見せて貰はうと私を誘ひました。私達二人は初めて一緒に外に出ました。あの人と肩を並べて歩いた事が、電車内で一緒に並んで腰かけた事が、私はどんなに嬉しかつたでせう。けれども、惡い事には、あの人の訪ねたその知人が、その夜は風邪を引いたとかで、その教會に來てゐませんでした。髮の毛を奇麗に分けた、紺の背廣の胸に花を挿した男の人が、代りに出て來て、『何の御用ですか？』と訊きました。けれども、若しクリスマスを見せて下さいと云つたならば、その人は屹度直ぐ承知して呉れたに違ひないにも拘らず、あの人はその人に向つてさう云ふ事を頼みませんでした。さう云ふのがあの人の性質だつたのです。私達二人はB

――教會の門を出て、それから銀座に行きました。クリスマスと歳末とで銀座は隨分賑つてゐました。あるカツフエで珈琲を飲んで、それから歸つて來ました。

その時でした。築土八幡前で電車を降りて、それからうちの方へ歸つて行く途中は、かなり淋しい町でした。クリスマスは見られないでも、それでも一緒に銀座を歩いた事が嬉しかつたので、私はかなり快活に昂奮してゐました。すると築土八幡の裏手の一寸坂を上つてそれから直ぐ右手に東五軒町の方へ降りるあの暗い細い路です――普通ならば、廣い明るい通の方を通つて歸るべきが當然ですのに、その時はどうしたものか、別段申し合せたわけでもないのに、二人の足が自然とその暗い細い路の方へ向つてゐたのでした。――そこまで來ると、妙にその時が來たと云ふやうな豫覺が、私の胸に感ぜられました。

二人は默つて歩いてゐましたが、急にあの人が、

『よし子さんは、ほんたうに素直で可愛いのね。僕は妹のやうな氣がしますよ』と云ひました。それは何氣ないと云ふ風でした。が、私の耳にはさうは聞えませんでした。後であの人が私に取つた態度から考へると、ほんたうにあの人にはそれがその時何氣なく口から出たのかも知れませんけれど。

何と云ふ大膽な力が私にあつたものでせう。後から何ものかに押し進まされでもするやうに、私は殆んど自分でも無意識のうちにあの人の手に取り縋つたのです。『妹ぢや厭』と私は小聲で云つたのです。私は嬉しいと云ふよりも、何だか自分があの人の手でやつと自分を支へてゐる、小つぽけな、みじめな、か弱いものに思はれました。私は泣きました。泣きながら自分の身體の震へてゐるのを覺えました。……

その時、私は夢中でしたので、あの人の樣子を一々注意して見る餘裕はありませんでしたけれども、それでも、あの人がその時私の感情に向つて、滿足を與へる答へ方と態度とを取つて呉れました事だけはしつかりと覺えてゐます。――それをあの人は、後になつて、自分は魔がさしたのだ、と云ひました。私にはそれがよく解りません。あの人は自分の頭にいつものあの霧がかかつたのだと云ひました。自分の頭の支配を失つたのだと云ひました。けれども、私には解

りません。あの人の性格の底にある或弱いところは、私にはよく解ります。けれども、その性格の弱さばかりから、あの人がその時のあたしを抓ねつける事が出來なかつたのだ、と云ふ風に解釋する事は、私に取つてあまりに殘酷です。……私には解りません。

その證據には、私は二人の戀にそれ以上を望みもしませんでしたし、望む氣さへもありませんでしたのに、それをあの人が望み初めたではありませんか。私は自分はあの人を愛してゐる、あの人も亦自分を愛して呉れてゐる、さう思ふだけで、すつかり滿足してしまつてゐるのに、あの人はそれでは滿足しなかつたではありませんか。――それをみんなあの人は、後になつて私に、『それはみんな僕の頭にかかつて來たあの霧のためなのです。僕の良心がその霧のために隱されてしまうたのです。――何と云つてあなたにお詫びしていいか解りません』かう云つたのです。

あの人が私の滿足してゐるだけの事では滿足しないで、それ以上の恐ろしい事――ほんたうに、ほんたうに恐ろしい事ですわ――を望んだ時、私はどんなに許しを乞うたでせう。するとあの人は大變不機嫌な陰氣な顏をしました。私はあの人を怒らせたのかと思つて、どうしたらいいかとほんたうにはらはらしました。あの人の眼はすつかり濁つて、妙に動物的に光つてゐました。――私は二日二晩考へました。そしてあの人の滿足と思ふところのものを知るより外ないと決心しました。――私はその時泣いたのです。

それがみんなあの人の頭の『霧』のためだと云ふのです。――私にはそれがよく解りません。さういふ事が、あり得るものかどうか、それが私には解りません。……

四

それは兎も角、その翌年の正月、二月と、私は夢のやうに暮しました。何と云つても初めての經驗ではありましたし、私は唯あの人の事ばかりを考へて、毎日毎日を過してゐました。あの人は前よりも一層機嫌の惡い、陰氣な顏をしたり、妙に腹立たしさうに苛々したりしてゐる事が多くなりました。……でも、その機嫌の惡さ、陰氣さ、腹立たしい苛々しさが、どういふところから來るのかと云ふ事については、その頃の私には深く考へられませんでした。あの人の

頭の加減だらう、と唯さう思つてゐました。あの人の頭の『加減』——それを私はどんなに悲しみ、どんなに心配したでせう。あの人と話してゐる時、急にあの人は右の手の指で、眉間のところを、さも苦しくて堪らなさうに押します。あの人が眉をひそめると、私も、それがまるで自分自身が苦しいやうに感ぜられて、やつぱり眉をひそめるのでした。『手術の出來ない蓄膿症』と云ふ言葉が、私の頭をも絶えず痛めました。——私はあの人を出來るだけ慰めて上げようと思つて、『頭をもみませうか？』と心配して云ふと、『いえ、それには及びません』とあの人は答へるのでした。さう云ふ氣分の惡い時のあの人には、なるたけ氣に觸るやうな事はしないやうにと、私はそればかりを注意してゐました。

……けれども、その時分のあの人のその不機嫌さは、後から思へば、さう云ふ生理的の病患からばかり來たのではなかつたのでした……

そこに突然、私に取つて、恐ろしい出來事が起つたのでした。と云ふのは、三月になつて、空が何處か春らしく青みを帶びて、梅の花がぽつりぽつり綻び初めた時分、私は自分の身體に變化が初まつたのを氣がついたのです。……私はその時までは、そんな事は夢にも思つて見た事はありませんでした。そんな結果について、少しの危惧を抱いた事さへありませんでした。ほんたうに、私は子供らしかつたのでした。

ですから、私は全く吃驚してしまひました　どうしたらいいだらう、と思つて、ひとりで苦しんでゐました。その月だけ身體がどうかしてゐるのかも知れない、強ひてさう思つて、心持をおちつけてゐると、四月になつても、やつぱりい、もと通りになりませんでした。あの人に打明けようと云ふ心持は、なかなか起つて來ませんでした。私はさう云ふ事の書いてある本を、恥しい思ひをしながら、縁日でひとりで買つて來ました。よくそんな風にして買へる大膽さが出たものだと思ひますが、何しろその時は一生懸命だつたものですから、自分を顧みてゐる遑はなかつたのでした。……讀めば讀むほどその本は恐ろしい本でした。そしてその中に書いてある恐ろしいいろいろな兆候と自分の身體の具合とを照らし合はせて考へて見ると、そつくりそのまま當てはまるところと、又さうではないと思はれるところとがありまし

た。私はもう到底駄目だと思つたり、又或はさうでないのかも知れないと強ひて自分に説いたりするやうな半信半疑の氣持に、毎日苦しめられてゐました。

ところが、或朝、起きると胸がむかむかとして、今まで一度も覚えた事がないやうな、何とも云はれない心持の悪さを覚えました。私は堪らなくなつて、はばかりに駈け込むと、ゲエツと云つて嘔しました。

かうなつては、もう疑ふ餘地は少しもありませんでした。私は煩悶しました。もう今更どうする事も出來ないと思ふと、悲しさ苦しさが、一時に胸に込み上げて來ました。何よりもさしづめに、叔母さんに知られるのを恐ろしいと思ひました。未だ子供を産んだ事のない叔母は、比較的かう云ふ事に敏感ではありませんでしたが、それでもやがて近い中に知られずには濟みますまい。そして名古屋の兄――あの名古屋の兄に知れたら、ほんたうにどうしたらいいでせう？――世間に知れたら、どんなに笑はれて見つともないでせう？　學校時分のお友達の顔なども眼の前に浮んで來ました。若い娘が子供を産んで、それからいろいろの悪い事をしたと云ふのを、嘗て新聞で讀んだ事がありましたが、それも浮んで來ました。自分が今さう云ふ身の上になつたのかと思ふと、まるで夢のやうな浅猿しい氣がしました。――私は往來で、晴々として何の曇りもない白山さうな他所の若い女の歩いてゐるのを見ると、ほんたうに悲しくなりました。自分にはもうああ云ふやうな無邪氣に歸れないのかと思ふと、不思議なやうな悲しい悲しい氣がして……いいえ、悲しいのだか苦しいのだか、世の中が暗くなつたやうな氣がして、苦い苦い涙がぽろぽろと眼から溢れて來ました。

さうなつても、その事をあの人に打明ける事がなかなか出來ませんでした。話さう話さうと思ひながらも、あの人の顔を見ると、ついそんな事が云へなくなつてしまふのでした。――けれども、心の底では、私にかう信じてゐました。若しその事を打明ければ、あの人は屹度何とかして呉れるに違ひない。と。あの人は學問もありますし、高尚な心持を持つてゐて、おちついてゐますし、それに私よりも年が六つも上――あの人は二十四でした――なのですから、前以てかうなる事はちやんと覚悟してゐるに違ひありません。ですから、私が打明けさへすれば、あの人は私がひとりでくよくよ大袈裟に心配してゐたのを笑つて、「何もそんなに心配する事はありません、みんな僕が知つてゐます」から云つて僕

れるに違ひない。と。――から思ふのは、いかにも小娘らしい考ですけれども、併し私は全くあの人ばかりが頼りだつたのですから、から信じないでは堪らなかつたのでした。そこで、或晩、あの人の割合に機嫌のいい時を撰んで、たうとう思ひ切つて、その事を打明けました。私は自分が悲しい顔をしてゐて、あの人に笑はれるのは厭だつたものですから、態と笑顔を粧つて、何でもない事のやうに、

『あの……私……』から云ふやうに初めました。

ところが、私が思つてゐたとは反對に、あの人は『えツ』と云つて、眼を瞠りました。そして私がぢつと見つめると、あの人は眼をそらしてしまひました。失望と苦痛との色が見る見る中に、その瞳に表れて來ました。絶望と云ふよりも、何となく狂氣じみたほどの暗い暗い色でした。私はそれを見ると、あの人の機嫌を直さうと思もつて、『御免なさい』と云つたら、その自分の聲の餘りの心細さに、堪らなくなつて、聲が出さうになるのを叔母に叱えてはいけないと思つて耐へながら、そこに泣伏してしまひました。

『それはいつからです？』とあの人は苦しさうな聲で訊きました。

『先月からですの』

『たしかですね。間違ひぢやありませんね？』

『ええ、どうもさうだと思ひますわ』私はさう答へて、泣きながら、總ての兆候を殘らず話しました。

机の上に肘をつきながら、あの人は暫く默つてゐましたが、『ああ、困つたな』と呟いて溜息しました。そして眼をつぶりました。瞼がピクリピクリと動くのを見て、あの人の心がどんなに苦しんでゐるかを想像すると、私は自分の事よりもあの人が氣の毒で堪らないやうな氣にもなつて來ました。

『どうしたらいいでせうね？』と私がいくら訊いても返事をしませんでした。私はあの人の態度ひとつでどうにでもなるのだと思つて、はらはらしながらその答を待つてゐると、あの人はそれに直接には答へないで、

『やつぱり僕が弱かつたのだ』とひとり語のやうに、口の中で呟きました。

『あなたが弱かつたつてと?』私がその意味が解りませんでしたので、訊き返すと、

『いや、併しそれは云ふ必要はありません。あなたにはほんたうにお氣の毒な事をしました』と如何にも私を憐むやうな悲しげな優しい眼付をして、云ひました。

『だつて、それはお互さまですもの。あたしに氣の毒だなんてそんな……』と云ひかけると、あの人は又眼をそらして、そのまま默つてしまひました。そして暫くしてから、

『よく考へて見ます。よし子さんは安心していらつしやい』と云ひました。私はあの人の手をしつかり握つて、いろいろ云ひたい事を云はないで、泣きました。

『どんな事でも僕の云ふ事は聽いて呉れますか?』

『ええ、どんな事でも』

『それでは僕も考へてる事があります。明後日まで待つて下さい』あの人は最後にきつぱりかう云ひました。私は幾分輕くなつたやうな氣持で梯子を降りました。

約束のその翌々日は、あの人は例の商店に英語を教へに行く出がけに、『今晩九時頃、大曲の側まで來て下さい』と私に云ひました。

私は云はれた時間に、約束の場所に行つて見ますと、あの人はもうそこに來てゐて、橋の向う側――小石川の側――の電車道の側に、しよんぼり立つてゐました。あの人はそれ程身長が高くはないのですけれど、大變痩せてゐるので、すらりと、と云ふよりも、ひよろひよろに見えました。鳥打帽子をかぶつて、薄暗い電燈の光の下に、俯向きながら佇んでゐる姿を見ると、妙に不吉な感じに見えました。まるで自殺でもしさうな人、そんな感じがして、ぞつとしました。

私達は電車の通らない側の江戸川緣に沿うて歩き出しました。未だ八重櫻が二三分は殘つてゐる時分なので、賑かではありませんでしたが、かなり人出があつたので、細い横丁を目つけて、奥の方へ入つて行きました。

『どんな事でも僕の云ふ事を聽いて呉れますね』と先夜も云つた言葉を、念を押すやうにあの人は云ひました。私は

『ええ』とはつきり答へました。

あの人はそれから暫く歩いて行つてから、

『それでは』と云つて、袂の中から藥の包を取出して、それを私に渡しながら、『之を飲んで下さい』

私はそれを開いて見ると、中に焦茶色をした小さな丸藥が、五六粒入つてゐました。私はその藥を見て、それからあの人の顔を見ると、默つて、身體を固くして、ぶるぶる顫へながら、俯向いてゐました。……『あつ』と私は思はず聲を出しました。その藥が何かと云ふ事が、電のやうに私の頭に閃いたのでした。――私はその時の事を今でも忘れられません。そんな恐ろしい事は考へても見なかつたのでした。あの人が、優しい、おとなしい、何も彼も知つてゐるあの人が、そんな恐ろしい事を云ひ出さうなんて、夢にも思ひ及びませんでした。……それでは一昨日の晩、あの人が『僕も考へてる事があります』と云つたのは、それでは此事だつたのか！　私は『そんな事は厭です、私には出來ません！』と身を悶へて、往來なのも忘れて、狂氣のやうに泣叫びました。私はあの人を憎らしくなりました。こんな恐ろしい事をよくも考へついたものだと思ひました。もう何を云つても聞きませんでした。『厭だ、厭だ！』と首を振つて泣きつづけました。

あの人はどぎまぎして、聯絡の取れない言葉を震へ聲で云つてゐました。『僕の云ふ事を一應聞いて下さい』とか、『僕は二人を一層の不幸に導くよりもその方が……と思つたんです』とか、『それについては、あなたに向つて、今僕は告白しなければならない』とか、そんなやうな事を取留めもなく云つてゐました。――若しその時、私の心に今少し餘裕があつて、あの人の言葉をよくおちついて聞く事が出來たならば、後になつて知つたあの人の心持を、その時既に知る事が出來たのですけれども、そしてその時知れば、私に何か他の考へ方があつたのでせうけれども、私はもうまるで夢中でした。

『あなたは卑怯な方ですわ、あなたは卑怯な方ですわ！』と私は口惜しまぎれに叫びつづけました。そしてあの人が、さう叫ぶ私を押へようとして、手を取つた時、私はそれを振拂つて、そして往來を一生懸命に馳出しました。

私は往來を駈けながら、もう二度とあの人に會ふまい、もうその云ふ言葉を聞くまいと思ひました。『死んでしまはう、死んでしまはう！』と心の中で叫びました。駈けて行く中に、涙がだらだらと頰を傳はつて來て、口の中に流れ込んで、鹽つぽい味がしました。道行く人がこんな風に駈けて行くのを見たら、嗤笑ふだらうと思ひましたが、見つともない位の事は何でもないと思ひました。

私は裏通を通つて、石切橋に出て、そこから又裏通の賑かな通を辿つて、そして久世山に上らうとした時、心臓が餘りにはげしく波打つて苦しくなつたので、駈けるのを止めました。子供の時に、何かが口惜しくて、やつぱりこんな風に夜の町を泣きながら駈け出した事が一度あつたやうな氣がしましたが、それがどんな事柄のためだつたかは思ひ出せませんでした。

あの人が後から追つて來ました。そして私が未だ丘の頂上まで登らないうちに、私に追ひつきました。振拂はうとするのを、獅嚙みつくやうに私の手を取つて、自分が惡かつた、自分の考が足りなかつた、併し自分は非常に苦しんでゐるのだ、どうか許して呉れ、から云つて懇願しました。『實際僕らしくないやりかたでした。すべての責任を僕が引受けますから堪忍して下さい！』と殆んど涙聲で云ひました。

そこで、結局私はあの人をゆるしてしまつたのです。何故かと云ふと、あの人が氣の毒に思へてならなかつたからです。……何と云つても、私はあの人をやつぱり心から愛してゐたのですもの……

五

それから五日して、私は置手紙をして、あの人と一緒に無斷で家を出て、代々木に小さな家を一軒借りました。總ての事を叔母に打明けるのは、私には到底堪らない事でしたし、それにあの人も、頭が少しおちつきを恢復して來るまでは、出來得る限り身を隱してゐたいと云ふ考を持つてゐたからでした。それでも、何處をどう探したものか、一週間ほどすると、叔母が私達の住居に訪ねて來ました。『さう云ふ事だつたなら、何故私に打明けて呉れなかつたのです？』と叔母はあの人に向つて、こんな風に詰りました。あの人は言葉少なに、唯その無禮を叔母に謝してゐました。終りに叔母は

私を外に呼び出して、自分のところにお歸りと云ひました。平生あの人を氣に入つてゐた叔母も、今はもうあの人の事をよくは云ひませんでした。何處で聞いたものか、『前にも女があつたのださうぢやないか』などと『久野さん』の事を云ひました。』それに乾皮肺病の筋だよ。』あの顔色つてはないもの』こんな事も云ひました。あの人の事を惡く云はれるのは好い氣持がしませんでしたけれども、叔母の私を思つて呉れる情は、ほんたうに優しいものでした。けれども私しは『叔母さんにはまことに申譯ありませんでしたけれども、此事ばかりはどうか私の我儘を通させて下さい！』と涙を流して、飽くまで強情を張り通しました。

『それではお前の勝手におし。どんな事があつてももう私は知らないから』と叔母は、たうとうかう云ひ殘して、歸つて行きました。私は終にあの深切な叔母を怒らせてしまつたのでした。……その後私は一度も叔母に會ひません。……叔母が知らせたと見えて、兄から手紙が來た時には、私は泣きました。兄は優しい調子で不心得を責めて來ました。もとより私が懷姙してゐると云ふ事などは知らないのですから、『後一年經てば自分の方へ引取るやうにするから、それまで叔母さんの方へ歸つておいで』と書いてありました。私はその手紙を抱いて、殆んど終日泣いてゐました。けれども、その兄の手紙に、たうとう私は返事を出しませんでした。出さうとするにも何と書いていいか、解りませんでした。その後又兄は同じやうな手紙を寄越しました。私はあの人が大變好い人である事、自分をよく愛して呉れる事、ですからどうか自分の我儘を通させて下さいと云ふ事、そんな事を兄に書いてやりました。……それきり兄も亦手紙を寄越さなくなつてしまひました。手の附けられない墮落娘――そんな事を叔母さんが兄に云つてやつたのではないかと思ひます。

でも、私達は決して幸福ではなかつたのでした。あの人は毎日毎日、益々陰氣になり、益々打沈んで行くばかりでした。それを心配して、『御氣分がお惡いのですか？』と私が訊きますと、『いや、何でもありません、どうか捨てといて下さい』とあの人は、さも煩さうに横を向いて眉をひそめました。

あの人の趣味と云ふやうな事を私はいろいろ考へて、私は庭――粗い竹垣根で取卷かれた三坪ほどの庭――に草花を

植ゑました。あの人が喜んで手傳ふだらうと思つてゐましたのに、手傳ふどころか、笑顔ひとつ見せて與れませんでした。もうあの人は讃美歌も歌ひませんでした。私の考へてゐた事はみんな違ひました。代々木の郊外の晩春の景色を見ながら、あの人は散歩にひとつ私を連れて行かうとしないのです。――私はひとりでよく泣きました。すると、あの人は『どうか陰氣な顔はしないやうにして下さい』と自分の陰氣は棚に上げて、こんな叱言を云ひました。それだから私が今度は機嫌を取るやうににこにこ笑つて、慰めようとしますと、あの人は『あなたは人間の苦しみと云ふ事について考へた事がありますか?』そんな事を云つて、不機嫌な顔をしました。どうしていいか私には解りませんでした。

そればかりでなく、この頃になつて、あの人は眼に立つて身體が惡くなつて來るやうでした。氣がいらいらして、一寸した事にも直ぐ癇癪を起しました。あの人は粗暴な言葉を吐く事などは、めつたになかつた人でしたが、それが、近頃は隨分荒い調子で物を云ひました。それでも例の英語を教へに行く商店にだけは、毎夜行つてゐました。けれども歸つて來ると、さも疲れたやうな凹(くぼ)んだ、晴つぽい眼付をして、そのままぐつたり床の上に仰向けになりながら、『あゝ、厭だ』と深い溜息などをしました。夜も眠れない事が多いやうでした。『よし子さん、僕はこんなに痩せました』そんな事を云つて、腕を出して、たるんでゐる皮膚を抓み上げながら、淋しく頬笑む事がありました。全くその皮膚は若い人のものとは思はれない程彈力がありませんでした。――併し私は益々あの人を愛する氣持が強くなつて來ましたので、何とかして慰めて上げなければならないと、そればかりを始終考へてゐました。

或日、私は私達の生活が、どうして幸福に行かないのでせう、とあの人に向つて云つた事がありました。『どうかして幸福に行くやうに出來ないものでせうか?』かう云ひました。

するとあの人は默つて眼をねむつてゐましたが、非常に冷笑的な、と云ふよりも、寧ろ意地の惡い微笑を浮べて、『恐らく、それは駄目でせう!』と云ひました。

何と云ふ恐ろしいものの云ひ方でせう? 私はさう聞くと、もう直ぐ涙ぐまれて來ました。『何故、駄目ですの、何故駄目ですの!』

あの人は再び眼をつぶつて、瞼をぴくりぴくりさせてゐましたが、やがて又眼を開いた時には、前のやうな冷笑的な意地の悪い色はすつかり消えて、その代りに妙に改まつた、何處か恥しげな、そして非常に苦しげな色が浮んでゐました。

『よし子さん、僕はあなたに告白しなければならない事があるのです』と昂奮した聲で云ひ初めました。『僕はあなたにあやまらなければならない事があるんです。僕をゆるして呉れますか？』

『それは何の事ですの？……急にそんな事被仰つて……』と私は吃驚してさう云ふと、あの人は悲しげな眼付で、ぢつと私を見つめましたが、やがて、眼を伏せて、瞬きをしました。あの人は泣きさうになつてゐるのでした。

『僕は此事は云ふまいと思つてゐました。云はないで濟むやうになると思つてゐました。けれども、僕はいくら努力しても、自分の心が自分の自由にならないのです。此ままあなたを欺いてゐるのはあんまり苦しいものですから、やつぱり云つてしまつて、あなたの許しを乞はなければならないと思ひます。……僕はそのために毎日々々苦しんでゐるのです。あなたが姙娠されたと聞いてからは、一層その苦しみが強くなつて來たのです。――僕がいつぞやあなたに恐ろしい事を勸めた氣持もそこから來てゐるのです』

『まあ、どうなさいましたの、そんなに……』と私はおろおろして訊きました。

『僕は……』とあの人は云ひかけて、暫く云ひ難さうに澁つてゐましたが、『それではここを讀んで見て下さい』と決心したやうに、机の抽斗からノオトを出して、その中を開いて　私に見せました。――それはあの人の日記で、開かれたところは、あのクリスマスの晩のところでした。

『自分はY（これは云ふまでもなく、私の名の語文字を取つたのでした。）を嫌ひではない。Yは可憐な少女である。彼女によつて、自分は隨分淋しさを慰められてゐる。自分は彼女を好きである。けれども、自分は嘗て彼女に戀愛的の感情を感じた事は一度もない。――それだのに、自分はどうしてああ云ふ事をしたか。どう考へても、自分にはそれの辯解がつかない。K（これは例の『久野さん』の語文字を取つたのでした。）が殘して行つた自分の傷跡の痛みのためか。

自分は未だKを愛してゐる。そして自分の忌み嫌ふ人々のやるやうに、自分もやつぱりあれでなければこれと云つた風に、Kに去られたために、直ぐその不足をYによつて充たさうとする氣持が、暗默の間に心の底に動いてゐたのであらうか。――今日は自分は頭も惡い。意志の力の衰退をしきりに感ずる。――自分は今どうしていいか解らない。嘗てない自己嫌惡を感ずる。こんな算盤に合はない事の中に、自分を投げ込んだ事は今までに覺えがない。自分の平生から摑んでゐたものは　瓦礫にもひとしい薄弱なものだつた事をまざまざと見せつけられたのだ。――併し何よりも絶望に身をまかせてはいけない。自分は未だ意志の力を信じてゐる。――』

あの人は默つて、その二ペエジ後を指さしました。それはそれから四五日後の日記でした。

『自分はまるで自分を失つてしまつたやうだ。自分の心の中は何と云ふみじめな亂れ方だ。Yに對して戀愛的感情の湧かない自分が、却つて、あべこべに不思議な恐ろしい力によつて、益々Yを追窮しなければゐられないやうな心にさせらる、――抵抗出來ない或勢力のやうな强い力だ。――今日も頭が惡い。めまひを度々感ずる。意志の力がまるでなくなつてしまつたやうだ。こんな狀態がつづいては危險だ。どんな事になるか解らぬ……』

そしてその次の日には、

『Yは可憐な少女だ。自分の此二三日の態度に、彼女は實に苦しんでゐる。――彼女は心から自分を愛してゐる。一本氣な美しい處女の愛だ。――それに反して、自分の心は何と云ふ穢れ方だらう。自分はあの可憐なYをどうしようとするのだらう。自分は自分で自分を責め拔いてゐながら、Yが近づいて來ると、もう到底抵抗出來ないものが、全身から湧き起るのを感ずるのだ。――その癖Kの事が始終やつぱり頭にある。――自分のYに對して犯してゐる罪は恐ろしい……』

その翌日のところには、

『自分はたうとう惡魔になつた。清きものを自分の犧牲にしたのだ。……總ての事を明瞭に解つてゐたのだから、それでゐてこれが同じ結果を惹起すとは何と云ふ事だ。――かうなつた上は、自分の努力は唯ひとつしかない。どうかしてYを、

愛さうとする事だ。Yに較べると、Kは較べ物にならない程輕薄で、眞實と云ふものを持つてゐない。それだのに、Kの事が忘れられない。——唯Yを愛さう、Yを愛さう。—その外に自分を救ふ道はない。——』

それを讀んでゐる中に、私の胸は、何ものかにめちやくちやに掻きむしられるやうに苦しくなつて來ました。初めはそこに書かれてゐる事が、餘りに意外で、餘りに殘酷でしたので、信じられない氣がしました。けれども、さう云はれれば、なるほど、あの人の態度には、今から考へて、思ひ當る節がいくらもありました。……けれども、今になつて、こんな事を知らせようとは……

『どうか許して下さい』とあの人は、讀みかけたままそこに泣伏してしまつた私の肩に手をかけながら云ひました。『僕が惡かつたのです。總て僕が惡かつたのです。何から何まで僕の責任です。……併し、僕があなたをどんなに愛さうと努力したか、今でも努力してゐるかと云ふ事だけは信じて下さい！』そして自分が如何に弱かつたかと云ふ事や、その頃の自分が始終頭の發作に惱まされてゐて、道徳的の觀念の薄らいでゐた事や、さう云ふ事を取り亂した、聯絡のない言葉で語つては、一言一句に私の許しを乞ひました。『姙娠と聞いた時には、たうとう罰が來たと思ひました。けれども僕は尚一層の不幸に陷るよりは、未だしも……さう思つて、ああ云ふ恐ろしいたくらみをしたのでした』と大山の晩の事をもあの人は辯解しました……

私の心はあの人の言葉を聞いてゐる中に、自分でも不思議に思はれた程、一種のおちつきを覺えて來ました。——私は顏を上げて、涙を拭いて、少し意地惡い氣持にさへなつて、

『それでは、あなたは何故かうして私と同棲してゐるのです？』と訊きました。

『自分の犯した間違ひに對する責任感から、どうしてもあなたと別れる譯には行かないと考へたのです。あなたを捨てるのはほんたうの人間のすべき道ではないと考へたのです。……僕はさう思つてあなたと同棲したのです。——僕は又かう思ひました。今からでもあなたに對してほんたうの愛が起れば、僕は救はれる、と。ほんたうに僕は毎日毎日それを努力してゐるんです。今でも努力してゐるんです』

『それではあなたは御自分を救ふために私と同棲なすつていらつしやるんですね？』私は自分でも自分の言葉が皮肉に過ぎたと思つた調子で云ひました。

『どうか堪忍して下さい！』さう云つた時のあの人の伏眼になつた、弱々しい顔は今でも私の眼に殘つてゐます。』さう云はれると、實際僕は苦しくて堪りません。――でも、僕はあなたを心からお氣の毒に思つてゐます。心からあなたに同情してゐます。あなたを愛さうと思つてゐます。けれども、どうしても愛が起らないんです、愛が……』

あの人が聲をはり上げて泣出したのを私は聞きました。すると、私はあの人の心持が自分にも理解出來るやうな氣がして來ました。私は腹は立ちました。あの人の勝手を憎みもしました。けれども、それにも拘らず、私はあの人に對して、同情しないではゐられませんでした。さう云ふやうな事に立到つた氣持が、自分にも解ると云ふやうな氣がしないではゐられませんでした。

兎に角、そんな場合になつても、あの人の態度は、たとひそれが手前勝手であるとしても、正直でした、眞實でした。嘘がありませんでした。それが私の胸に強く感ぜられたのです。けれども、私は悲しかつたのです。私はどうしていいか解りませんでした。ほんたうに私達のやうな不幸な者はないと思ひました。でも私はこれ以上あの人を苦しめないためには、自分がどうかなつてしまへばいいと思ひました。(かう思つた心の底には、又不思議な事には、あの人に對する復讐の氣持も混じてゐたのでした) いつだつたか思つたやうに、自分は死んでしまはうと思ひました。で、私は袂で顔を隠して、立上りかけますと、あの人は私のそぶりを直ぐに覺つて、

『ああ、僕はそゝなつもりで云つたのではありません。あなたと別れようなどと云つたのではありません。どうか誤解しないで下さい。今あなたと別れたつて、決して自分の苦痛が消えるものではないのです。――僕はいつまでもあなたに隠して置くのが惡いと思つたものですから、それで打明けたんです。併し僕はあなたが僕に捧げて呉れる愛に對しては、感謝してゐます。僕は決してあなたを嫌つてゐるんではありません。……僕はあなたを愛さう愛さうと努力してゐるんですよ。今でも、今後も、僕はどうかしてあなたを愛さうと努力しようと思つてゐるんですよ』

私はあの人の胸に顔を埋めて、默つて泣きました。あの人もそれきり默つてしまつて、啜り泣いてゐました。

六

その後私達は、兄妹のやうに、文字通りに兄妹のやうに生活しました。そしてそれが今までのやうな暗い疑惑で苦しめられないだけ、それだけ却つて私には晴々とした氣持を與へました。あの人の苦しんでゐた原因が解つたと云ふ事は、私には堪らない苦痛ではあつても、併し今までのやうにめあてのつかない苦痛ではありませんでした。知らないよりも、いくら苦しくとも、やつぱり知つた方が心がおちつきます。――私はどうかしてあの人が自分を愛して呉れるやうになるやうに心に祈りました。自分の眞心で以て、あの人の心を屹度動かして見る、さう思ひました。

あの人はそれからは、努めて私に優しくして呉れました。暗い顔を見せまい見せまいと努力してゐるのがよく解りました。……けれども、やはり快活にはなつて呉れませんでした。そればかりでなく、幾ら外に示すまいとしても、あの人の心が、日に日に益々陰氣になつて行くのが、解りました。

或晩、それはもう夏でした。夜の涼しい風が快かつたので、私は縁側に出て涼みながら、あの人が出教授から歸つて來るのを待つてゐました。空は多少の濕氣を帶びながら霽れてゐたので、星が瞬いてゐました。星の光を見てゐると、いろいろの事が思ひ出されて、私は感傷的な氣持になりました。――私はあの人の日記を取出して、開いて見る氣になつたのです。私はそれまでは決して、あの人に默つてさう云ふ事をした事はなかつたのですけれども、それでもその時は、それが惡い事のやうに思はれませんでした。

近頃のところを開いて眼を通しますと、こんな事が書いてありました。

『Yは自分をよく理解して呉れてゐる。Yの自分に持つて呉れる愛に對しては、自分は感謝の言葉がない。――併し自分の心も近頃は或程度までおちついた。自分は未だYに對して愛情が起つたとは云へない。併し愛情は起らなくとも、自分が自分の氣持の中に、彼女を包むだけのおちついた抱擁性を見出せるやうになれば、それでも自分のこはれかけた生活が、再び一つの統一されたものとならないとは限らない。Yはほんたうに哀れな女だ。そして自分よりも弱いもの

だ。戀愛でなくとも哀憐でいい。哀憐が彼女に對する自分の氣持を統一して吳れればいい。――さうだ、マリア・リルケが此氣持をよく知つてゐる。――此氣持は此人生で經驗しても、決して損にはならない氣持だと自分は思ふ。――何よりもおちつくのが肝要だ。そこから屹度或る光が來るに違ひない。――併し頭はやはりよくない。その中に前額のよと除れなくとも、上顎の腫だけでも除去しなければならない――』

『戀愛よりも哀憐――愛よりも憐み！』私は此言葉を口の中で呟き呟き、堪へられない心細さと淋しさとを感じて、ひとりでしくりしくり泣いてゐました。

そこにあの人が歸つて來ました。私は涙を拭いて、玄關に出迎へると、あの人は、

『よし子さん、僕は寒くつて堪らない。まるで背中に氷でもついてゐるやうな氣がする――』さう云ひながら、身體を縮めるやうにして上つて來ました。

『まあ、お寒いんですの？……どうなすつたんです、こんなに暑いのに？』さう云ひながら、あの人の手を取つて見ると、私は吃驚しました。手はまるで火のやうに熱があるのです。

その時、私はどんなに悲しかつたでせう。あの人は『なあに、風邪でせうから、寢てゐれば直ぐ癒ります』と云つて、途中で買つて來たアンチピリンを飮むと、そのまま直ぐ床に入りましたが、併し私には不吉な事ばかり考へられてなりませんでした。あの人が玄關から上つて寒い寒いと云つた時の恰好が、いつぞやの晩大曲の電車道に立つてゐた時のあの自殺でもしさうに思つた恰好のやうに、何となく影が薄くしよんぼりと見えました。その他いろいろな不吉な事ばかりが頭に浮んで來ました。……そしてさうした私の不吉な豫感は根のないものではありませんでした。あの人はその時寢たきり、たうとう起上る事が出來なかつたのですから……

あの人と同宿で、中學時代に先輩だつたと云ふ若いS――醫學士が、診に來て吳れました。『右肺尖加答兒だ――』醫者は患者の前では云ひました。が、歸りに玄關のところで、私の耳にそつと口を寄せて、どうもかなり結核が進んでゐる。昨日今日起つたものではない、と云ひました。叔母さんがあの人の事をさう云つたのも、嘘ではなかつたのでした。――

私にはよくは解りませんが、檢痰をした結果、黴菌のゐた割合は、何でも大變多かつたと云ふ事でした。

『隠して呉れるのが一番いけません。さうならさうとちやんと打明けて貰はないと、却つて覺悟がきまらなくていけませんから』私があの人の病氣を隠さうとしても、あの人は直ぐ見抜いてしまつたのでした。

『僕は未だ生きてゐたいと思ふ。今死ぬのは、何よりも一番厭です。自分のこはれた生活を取返したいと思ひます――未だ未だ僕には此世の中にする事があるやうな氣がする』こんな事を突然云ひ出して、非常に苛々するかと思ひますと、又、『いゝ、併し死ぬものなら仕方がない。厭だけれど、仕方がないから、あきらめなければなりません』と云つて眼をつぶつて、しづかに何か考へてゐる事もあります。

熱を一日の中に何度もはかつて、それに枕許の紙に鉛筆でしるしては、『今日は昨日よりも少し高い』だの、『九分朝より低い、午後が朝より低いのは、却つて變調なんぢやないか知ら』だの、ひとり語のやうに呟いてゐました。――聲は割合に出ない方でしたが、聲の調子が非常に變つて、一體が喉にいりいりする聲でしたのが、一層いりいりして、耳の底に泌み入るやうな感じを與へました。

私の顔をぢつと見つめて、

『よし子さんには、ほんとうにお氣の毒でなりません。……あなたが今後どうなさるかと思ふと、それが……』そんな事を何度となく云ひました。そしてさういふ事を云ふのにも、その様子が日によつて違ひ、又時によつて違ひました。或時には、眼に涙を浮べて、深い自責に充ちた聲で云ふかと思ふと、或時には又、妙に投げ出したやうに、『併し人は各々苦痛を背負つてゐるのです』から附加へて、單に自分ばかりではなく、他の何ものか――何か人力以上のものにも責任があるのだと云つた表情をしました。――併しさうして何も彼もが解らなくなつてしまふと、あの人は頭と心との混亂を包み切れずに顔に出しながらも、あわててそれを防止するやうに、『けれども、僕は人生を否定しようとは思はない。人生そのものが醜いとは決して思はない。さう思ふ事はあまりに潜越だ。間違つたのは、やつぱり僕自身であつて、人生そのものではないのです。人生は美しいのです。光つてゐるのです。僕はその階段を踏み外したのです――』こんな事

を昂奮して云つて、そしてその昂奮が強くなつて來ると、掛蒲團の襟に顔を埋めながら、啜り泣き初めるのでした。

感情をたかぶらせないやうにと、私はそればかりを注意してゐました。――私は全く自分の身の今後の成行きを考へると、心細さと淋しさと頼りなさとで、心がいつぱいでしたが、それでも、後の事は後の事として今は考へない事として、何よりも眞心にあの人の看護をしようと決心してゐました。あの人が病氣になつてから、私は却つて一層あの人に對する愛が強くなつたやうな氣がしました。

それから又秋田の田舎にゐられる父上の事をも、あの人は時々口にして、自分の病氣をどんなに心配してゐるだらうと云ひました。

『僕の親父は平凡な田舎の爺さんに過ぎないが、氣の毒な人です。あんまり善人なのでね、相當にあつた田地も、大概人手に渡してしまつたんですよ。――尤もこれは、僕がかなり長い間、學費を送らせた事も、與つて力があつたわけなのです』こんな事を云ふ時は、あの人はさも父を哀れだと云ふ顔付をしましたが、それでもそんなに昂奮はしないで、冷淡と云つては語弊がありますが、割合に熱した氣色がなく、かすかな頬笑をさへ浮べるのでした。

さうでした。その父上からは、あの人の病氣以來、五十圓づつ二度送金がありました。隨分苦しい中を――あの人はさう云つて、流石に感動した眼を輝かせました。

けれども、言葉に出しては云ひませんでしたけれども、あの『久野さん』の事は、やはりあの人の頭からはなれないやうでした。夜私が寢てしまつてから、あの人はそつと病床から起き出して行つて、昔の日記の書いてあるノオトを探し出して來ては、それを讀んでゐる事が度々ありました。そして又時によると、そのノオトの端に、檢溫表を書くに使ふあの鉛筆で、仰向けの姿勢のまま、何か書いてゐました。――何よりも私にはそれが一番苦痛でした。寢間あの人の眠つてゐる時を見計つて、私はそのノオトを開いて、鉛筆で書かれた斷片的なものを、讀んで見た事がありました。『Ｙに感謝す』さう書いてありました。かと思ふと『Ｋは今何處にゐるだらう？』とも書いてありました。『爭ひ、爭ひ合ひ、さう云ふものを趣味の上から好かないと思つた私は、實はそれが趣味からではなく、自分の弱さのおもひになれだつた事に

氣がつかなかつたのだ』――から書いてある中には、恐らく私に見られた時の用意にでせうが、態とＫと云ふ文字などは使つてありませんでしたが、それでも私には、その意味が明瞭でした。『久野さん』の後を何處までも追はうとしなかつた事に對する悔に違ひません。『自分は弱い。すべてがそれから來てゐるのだ。何も彼も……』さうも書いてありました。何も彼も……私にはその意味も亦よく解りました。――私はそれを見ながら、いろいろな事を考へてゐると、やはり涙が流れずにはゐませんでした。これ程まで思つても、これ程までに盡しても、それでも私はその會つた事のない『久野さん』に敗北してゐるのです。あの人の心を飽なら奪ふ事が出來ないのです。――私はその『久野さん』をつくづく怖いと思ひました。時によると、あの人をも恨めしいと思ふことさへありました。

けれども、あの人自身もそれには苦しんでゐたのでした。『かたくなな心……自分はどんなにこれを持て餘してゐるだらう。Ｙに感謝す』――『感謝』！　何と云ふ厭な、何と云ふ親しみのない、何と云ふつめたい響を持つた言葉でせう。私はその字の形にまで今以て嫌惡を感じてゐます。『感謝』でなくて『愛』、それが私の望なのでした。いえ、その外に何ものもなかつたのでした。『感謝』だの『好意』だのと、そんな生ぬるい言葉は、もう私には我慢がなりませんでした。私は泣いた揚句は、いつでも再び勇氣をふるひ起して、『今に屹度、あの敵からあの人を奪つて見せる！』から決心するのでした。

八月の暑い盛りにあの人はかなり多量の喀血をしました。私の氣にした程、あの人はそれを見ても驚きませんでした。何も彼もあきらめか悟りかしてしまつたやうに、しづかな、穏かな顔をして、眼なども妙に青く澄んでゐました。けれども、その事あつて以來、あの人は全く別人のやうでした。『どうかよく消毒をして下さい。あなたに感染でもしたら大變だから』――痰壺の中にクレゾオル石鹸液の入れ方が足りないと云つて、よく私に注意しました。

本箱からいろいろな本を取つて呉れと私に命じました。あの人は仰向になつて讀んでゐると、手に力がなくなつた事

がよく解ると云ひました。それでも、『近頃は割合に頭はいい』こんな事を云つてゐました。

心配だつた暑熱のきびしい頃が過ぎて、やがて秋らしくなりかけようと云ふ時分になつて、病勢が急に加はつて來ました。私はどうかして、少しでも長くあの人を生かして置きたいと思つて、一生懸命に看護しましたが、併しそれは無駄でした。――九月の十一日からあの人の病氣はあらたまりました。

それでも電報に驚いて、十三日の晩に急いで父親が上京して來た時には、あの人は未だ氣力が確でした。なかなか意識がはつきりしてゐました。――尤も、意識は死ぬ時まではつきりしてゐましたけれど。――

父親は如何にも質朴な田舍のお爺さんでした。あの人が私の事を話すと、私がきまりが惡くなつた程莫迦丁寧にお辭儀をしました。

いろいろ私の事について、あの人は父親に頼みました。『この人は大變氣の毒な頼りない人なのです。大變正直な素直な人なのです。そうして僕の子供をお腹に持つてゐるのです』さういふ風におちついて語るあの人の言葉の一語々々に父親はうなづきながら、涙が眼から流れて、鼻の頭に傳はつて來るのを、四角に疊んだ手拭で拭いてゐました。けれども、涙は父親よりも私の方が餘計に流してゐたのでした。『僕の子供をお腹に……』と聞いた時には、もう堪へられなくつて、私はあの人の枕許に泣倒れてしまひました。

あの人の死がすぐ目前に迫つてゐるのを知ると、私は一種押へ切れない焦燥を覺えて來ました。かうしてはゐられないと云ふ氣がして來ました。――それは自分の今後の事だの、お腹の中の子供の事だのと云ふやうな、そんな事ではありませんでした。そんな事は今はどうでもいいのでした。いゝえ、今はもうあの人が直ぐ死ぬと云ふ事その事さへも、その時の私の焦燥の原因となつてゐるものに較べれば、そんなに重大ではないのでした。

私は男の死ぬ前に、たつた一言、ほんのたつた一言でも『愛する』と唯それだけが云つて貰ひたかつたのです。――『愛する』その一言が、他の何事にも代へがたい私の一番大切な望だつたのです。――私の總ての努力も、他の何事も投げ打つた獻身も、唯その一言を聞きたいばかりにつゞけられて來たのでした。

その夜は久しぶりで父親に會つたためでせう、あの人も病勢が少し見直したかと思はれる程元氣でしたので、父親も私も、かなり夜が更けるまで、あの人の枕許に坐つて話をしてゐました。——日夜の看護に疲れてゐるだらうからと父親が云つて與れますので、一時頃私は寢につきまして、それから三時間ばかりして、父親と交替しました。その時あの人はすやすやと割合に安らかに眠つてゐました。脈搏も呼吸も、そんなに變ではないやうに思はれました。——やがて、隣りの室から、今寢たばかりの父親の鼾の聲がきこえ初めました。昨日までの一人での看護ではなく、今はあの人の父親が居ると思ふと、私の耳にはその鼾の聲までが何となく氣づよく感ぜられました。

それでかなり安らかな氣持になつて、私は或雜誌を開いて、讀むでもなくペエジに眼を通してゐました。三十分ばかり經つた時でした。あの人が急に眼をさまして、『足が寒くていけないから懷爐を下さい』と云ひました。私は懷爐の代りに湯たんぽを入れてやりました。それでも寒い寒いと云つて顏をしかめました。手で觸つて見ると、足が冷たくなつてゐました。

『よし子さん、お父づあんは?』

『今しがたお寢みになりました』

『何だか非常に淋しい心細い氣がして來たから、お父つあんを呼んで來て下さい』

たうとう時が來たのだと云ふ事を私は覺りました。すると私は一時に胸がいつぱいになつて來て、父親を呼びに行く前に、あの人の手を取つて、

『お願ひです、どうか私を愛してゐると一言云つて下さい』と云ひました。こんな場合にあの人を昂奮させてはいけないと云ふ事は、私は百も承知でしたが、今が過ぎ去れば、もう取返せないのだと思ふと、終に我慢が出來なくなつたのでした。言葉と共に涙が出て、眼が霞んで來ましたが、私はそれを振拂つて、握つた手に力を入れながら、あの人の眼を見つめました。すると、どうでせう、ぱちぱち瞬叩をして、あの人の視線が私を避けたのです。そしてそれは何とも云はれない、如何にも私を憐れんでゐるやうな、又自分自身の心を責めてゐるやうな複雜した表情を浮べました。

『たつた一言、たつた一言……』と私は夢中になつて迫りました。

あの人はやつと口を開いて、

『あなたには全く感謝してゐます……』と云ひかけましたが、私はそれを皆までは云はせませんでした。

『感謝なんて厭です、感謝なんて厭です、どうか愛すると云つて下さい、一言、たつた一言、たつた一言愛すると……』

あの人は默つて眼をつむつて、何とも答へませんでした。瞼がピクリピクリと動いて、涙の小さな玉が睫毛のところに滲み出て來ました。

『たつた一言……』と云つて私は狂氣のやうに泣き叫びました。『ああ、あなたはやつぱりあの方の事を思つてらつしやるんでせう、久野さんの……あんまりです、あんまりです、あんまりです！』

云ひやうのない苦惱の色が、あの人の顏に浮んで來ましたが、やはり何とも答へませんでした。唯あの人は私の手を握らうとしました。それは恐らく私に向つて、すべてを許して呉れと云ふ意味を傳へるつもりだつたのでせうが、もうそれには力がありませんでした。私の泣聲に驚いて、父親が眼をさまして來た時には、あの人はもう息を引取つてゐました。

たうとう私の望は達せられませんでした。私は泣きながら、その室から駈け出して、夢中で臺所の戸を開けて外に出ました。どうするつもりだつたか覺えてゐません。夜が明けかかつて、東の空の眞黒な雲と雲との切目が、薄い赤褐色の條を描いてゐるのが陰鬱な感じに見えました。此家に越して來た當時私が植えたコスモスが、薄暗い中に、弱々しく風に動いてゐました。

七

もうその時分は、お腹の子供の動くのがよく解りました。あの人の父親が、兎に角自分の田舍に來るやうにと云つて、熱心に勸めましたが、私は氣が進みませんでした。と云つて、今更叔母の家に歸つて行くわけにも行きません。あの叔母さんの事ですから、私が歸つて行つたら、屹度私をゆるして、いろいろ相談相手にもなつて呉れたに違ひありません

けれども、併し男に死なれて、みもちになつた身を、叔母の家に歸つて行く事は、叔母に對してばかりではなく、叔母の家の近所の人に對しても、餘りに恥しい事でした。

そこで私の頭に一番強く浮んだ事は、名古屋の兄をたづねて、兄に相談して見ようと云ふ事でした。兄もああ云ふ怒つた手紙を寄越したままにはなつてゐますが、それでも乾度何處までも私を心配して庇つて呉れるに違ひありません。それに名古屋ならば、他に知つてゐる人がありませんから、さう云ふ世間の氣兼も多少尠いわけです。

遺骨を携へて、秋田の田舍に歸つて行くあの人の父親を上野の停車場に送つた翌朝、私は東京驛から六時二十五分發の列車に乘りました。私は長距離の汽車に乘るのは初めてでした。それに女のひとり旅ですし、況してお腹の子はもう八ケ月にもなつてゐるのですから、その心細さつたらありませんでした。——私はその約半年ばかりの間に大變苦勞したので、自分では相當に年を取つたつもりでゐましたが、それでも何と云つても未だ十八なのですから、そんな年でこんな大きなお腹を抱へてゐる事を考へると、今更に顏が火照る氣がしました。でも私の隣りに腰をかけた京都まで歸ると云ふお婆さんが、大變に深切にして呉れましたので、割合に途中は安心でした。

汽車の進むに從つて、どんな風にして兄に會つたらと云ふ考が胸を苦しめて來ました。その前の年に亡くなつた兩親の事までが考へられて來ました。あの時から思ふと、僅一年半ばかりの間に、何と云ふ身の變化でせう！　兄が海軍の水兵服を着てゐた時分ですから、隨分子供の時分でしたが、その時分に兄と私とが母につれられて、大磯に行くので汽車に乘つた時の事が浮んで來たりしました。箱根を越えると、空がすつかり曇つてしまつて、靜岡を過ぎた頃から雨が降り出しました。それがさうした悲しい氣持を一層強めました。濱名湖か濱松か、何でもあの近邊ですが、赤土の小さな丘陵の間を汽車が通つて行くと、小さな小さな松が、その赤土の上ににょきにょきと行儀よくつつましげに並んでゐるところがあります。その赤土が雨に濡つて、飽くまで赤い上に、鮮かな綠の小松の並んでゐるのが、へんに私の淋しい心を誘ひました。それをどんどん走つて行く汽車の窓から眺めてゐると、涙が眼に滲んで來るのを覺えました。

名古屋に着いた時には、雨はどしやぶりでした。停車場の出口に佇んで外を眺めると、どしや降りの雨の中に白つぽ

く煙つて見える夕暮の町には、灯がぽつりぽつりとぼかしをかぶつて光つてゐました。堪らない不安が胸を襲つて來ました。兄の住んでゐる筒井町までは、電車に乘つてその大部分を行けるやうに聞いてゐたので、私は俥に乘らずに電車に乘りました。後で聞くと、それが惡かつたのです。電車　中の人々は、どれもこれも親しめない顔をしてゐました。車掌に教はつた停留場で電車を降りますと、筒井町までは、細い横丁を通つて、それから未だ殆んど十丁近くあるかなければならないと云ふのです。その時になつて急に俥と思ひましたけれども、その近邊には見當りません。——私は低下駄に、傘も白い夏の洋傘でしたので、爪先立つて、裾を端折つて歩いても、頭から足の先まで、まるでぐしよ濡れでした。足袋がすつかり泥だらけになつて、ぴしやりぴしやりと、端折つた所にまではねが上りました。みじめと云ふ感じがつくづくしました。私は泣出したいやうな氣持で歩いて行きました。自分ほど不幸なものはないと云ふ情なさが、背中邊まで沁み通つて來る雨の不快な感じにつれて、心ちゆう、と云ふよりも、身體ちゆういつぱいに擴がつて來ました。

その晩、たうとう私は兄をたづねないでしまつたのでした。今から考へると、何故たづねるのを止めるやうな氣持になつたものか自分でもよくは解りません。何よりも兄に此醜いみじめな有様を見られたくないと云ふ氣持がして來たのでした。唯自分の身體の變化ばかりでなく、着物から足袋から下駄からぐしよぐしよになつたと云ふ事までが、急にさう云ふ氣持に私を誘つたのでした。それは何と云つても、通常の考へ方からは考へられません。けれども、乾度一種のヒステリー的な氣持が突發したのではなかつたかと今考へると思ひます。——物の本末が私には解らなくなつてしまつたのです。何がほんとうに大切な事で、何がそれ程大切な事でないか、その區別がつかなくなつてしまつたのです。足袋だとか着物だとか、そんな事が、へんに私を抑へつけてしまつたのです。

その癖、再び停車場に引つ返して、上り列車に席を占めた時には、急に今度は又兄をたづねなかつた事が口惜しくなるほど殘念に思はれて、それを思ひ出し思ひ出し、たうとう東京まで泣き通してしまひましたのに……

三日後の夕方、私は東京の南の郊外の或海に近い淋しい村に、一軒の産婆の家を見つけ出しました。此處なら人眼にも觸

れないでいいと思ひました。北に小さい丘を背負ひ、南は開けて、ずつと田と畑とを見渡し、割合に氣持のいい位置でした。それに日當りのいい二階家でした。二度三度その前を行きつ戻りつした揚句、たうとう思ひ切つて、その格子戸を開けて案内を乞ひました。

出て來たのはもう五十に近い、如何にも産婆らしい人馴れのした婆さんでした。一寸恐い氣がしましたが、笑顏を見ると、それ程空々しいところがなく、割合に質實な、人の好ささうな人でした。

お宅にお産をして身體の恢復するまで置いて頂きたいと云ふ旨を述べると、兎に角と云つて二階の六疊の間に案内しました。旦那様は、と訊かれて、私ははつとしましたが、今朝鮮の方へ行つてゐると云ひ抜けました。すると續いて、それでは何方か東京に身許を引受けるやうな、お身内の方でもおありですか、と訊きました。それにも困りましたが、私はあの叔母さんの事を云ひました。私がたつた一人で行つたと云ふ事が、不安を與へたに違ひありません。――産婆は私のみなりなどをそれとなく注意して見てゐましたが、宜しうございます、只今は丁度室も開いて居りますから、と云ひました。

『隨分御無理をなさいましたね。……でも、一體が御丈夫ですから、別段異狀もございませんが』と産婆は、私の身體を見ながら云ひました。私はその時になるまで未だ何處の産婆にも見せなかつたのでした。そして岩田帶さへも未だしてゐなかつたのでした。

いろいろな事を私から訊き質した末、指など折つて數へてゐましたが、『少しは御早産かも知れませんよ』と云ひました。

私はそこで、兎に角お産までの身がきまりがついたと思ふと、少しく安心したおちつきを感じましたが、安心したとなると、今度は今まで昂奮のためにおちついて考へる暇のなかつた事が、しみじみと考へられて來ました。たうとう強情に沈默を守り切つて死んでしまつたあの人、恨めしくも憎らしくもその時は思へたあの人、併し私は今はあの人の心持についても、しづかな氣持で理解する事が出來ました。あの人は一體何と云ふ正直者だつたでしよう。嘘と云ふものが、

の人にはこれつぱかりも吐けないのでした。あの臨終の時にあの人が、どんなに苦しんでゐたか……その氣持がしみじみと感ぜられました。

……けれども、もう私はいつまでもあの人にばかりかまけてゐる場合ではありませんでした。あの人は永久に過ぎ去つた人なのです。過ぎ去つた人としてしまはなければならないのです。何故かと云ふと、もう過ぎ去つたものにばかり心を向けてゐる時ではない程、私には現在の問題が、そして將來の問題が、そこに壓倒して來てゐるからです。

お腹の中に動く子に、次第次第に愛情が湧いて來るのは、悲しい中にも、決して不愉快な事ではありませんでした。男の子か女の子か、產婆は男の子だと云ひますから、男の子なら、今に自分の賴りになつて、どんなにいいだらうと思ひました。けれども亦、女の子であつて欲しいやうな氣も少しはしました。可愛い可愛い女の子、それに手を引かれて歩く自分を考へると、堪らなく優しい氣分になりました。……併し、今後自分の身の振り方をどうしようと思ひました。何も知らない若い女の身で、世の中と云ふものに出て行つて、何が出來るだらう、と思ふと、これは又頭から振拂はうとしても振拂はうとしても振拂へない心細さを感じました。一體自分に何が出來るでせう？……せめて女學校でも卒業してゐたら、さう思ふと死んだ兩親の事が又思はれて來ます。若し又あの叔母にもう少し裁縫が習つて置けたら。……そんな事を思つてゐると、世界が眞暗になつて行くやうな氣がしました。……すると、考は又これから生れる子供の事に戻つて行つて、自分は併しどんな事があつても、その子だけは手放すまいと思ひました。どんな事があつてもその子だけは、どんな苦勞をしても、たとひ死んでも……かうなると、妙に感激して來て、センチメンタルになつて來て、ひとりでに涙ぐまれて來るのです。

『誰が放すものか！』私は相手もゐないのに、口に出してから叫んだ事もありました。

私のゐる二階の欄干からは、大森から蒲田にかけた廣々とした田畑が見渡されます。田畑の先には人家があつて、人家の先には東京灣の海が、細い條ぐらゐの細さに横たはつてゐます。霽れ渡つた日には、その先に上總あたりの山々が、かなりくつきり見えます。――私はそれをぢつと見つめてゐると、眞青に澄んだ空に、赤とんぼがさも輕げに飛んで行

きます。すると、そのかすかな蔭が、私の直ぐ足許の出つぱつた板屋根の上を、すいすいと走るのです。もういつか十月でした。

ある日、産婆は、

『あの、お子さんは何處かにお遣しになるおつもりでも、それとも里子にでもお出しになるお考でもおありですか？』

と診察の時に何げないと云ふ風に訊きました。産婆はもうすべてを感付いてゐるのです。——朝鮮にゐる良人、身許を引受けてゐる叔母、さう云ふものがゐないと云ふ事を、すつかり知つてゐるのです。かう云ふ事に馴れ切つてゐる人の用意周到さから、無暗に口に出しては云ひませんが、併し私のやうにして來る若い女が、どんな狀態にゐるかは、直ぐ知つてゐるのです。

『いいえ、そんな事は少しも……』私はどぎまぎして顔を赤くしながら答へました。

『いえ、若しそんな風に、お遣しになつたり、里子にお出しになつたりなさるやうですと、なかなか急と云ふわけにはまゐりませんから、今の中から探さなければならない、とさう存じまして……』

『そんなつもりは少しもございません』さう答へた時には、もう恥しいと云ふよりも、何んだか堪らない不愉快をさえ覺えました。

前の田圃の稲が次第に色づいて、その穗が垂れ下つて來るやうになると、滑稽な、けれども淋しい形をした案山子がそこここに立てられ、からからと妙に底淋しい音を立てる鳴子の綱が、縱横に張られました。澤山の雀が群をなして、そこに降りて來ます。かと思ふと、百姓に追はれて、まるで青空に粉を振蒔いたやうに、ぱつと飛び立つて行きます

……

十一月に入つて、ところどころ刈り取られた跡が、眞四角に凹んで見える時分になると、お腹の痛みが、時々はげしく感ぜられるやうになりました。そしてその痛みと痛みとの間が、だんだん接近して來ると、もう産期の近づいた事が自分にも感ぜられました。

そして或朝午前十時頃、それは十月十日の事でしたが、私はたうとうお産をしました。割合に輕く濟みました。生れた赤ん坊は女の子でした。——眼のあたりがあの人そつくりでしたが、併しそれ程綺麗な子でもありませんでした。それでも産婆は『まあ、玉のやうなお孃さまで』と單なるお世辭ではないらしく云ひました。——その生れた子供が、どんなに可愛らしかつたか、そんな事は今此處では述べてゐる暇はありません。——秋生れたのですけれども、私はなるたけ陽氣な名をつけたいと思つて、はなと名付けました。

一週間ほどすると、産褥にゐる私の枕許に來て、産婆がかう云ふやうに云ひました。

『あの、赤さんのお籍はどうなさいますか、未だよろしうございますが、二週間以内にお屆けにならなければいけない事になつて居りますから。御承知ではございませうけれど……』

それは勿論、私も知らない事ではなかつたのでした。けれどもその時は、子供の生れた事を朝鮮に居ると云つた良人にも、身許を引受けてゐると云つた叔母にも、別段電報を打たなかつた事によつて、露骨に産婆に不安を與へてしまつてゐるのだ、と思ふ事の方が、尚一層心に苦しかつたのでした。それでも、その他に一寸云ふ事が頭に浮んで來なかつたものですから、嘘だと云ふ事を相手が明らかに知つてゐるのを知りながらも、

『あの、朝鮮の方から、今月の上旬に歸る事になつてゐますから、二三日中には此處にたづねて來ると思ひますから……』

こんな風に吃り吃り云ひました。

人の好い産婆は、私の顏を眞面には見ないで、私を憐むやうな表情を浮べながら、それ以上は追窮はせずに、階下に行つてしまひました。

でも、四日程して、産婆は又同じ事を云ひに來ました。

『幸ひお孃さまも今までは御丈夫ですから宜しうございますが、併しもしもの事でもございますと……』

私は明ら樣な嘘はもう口に出ませんでした。産婆にさう云はれて見ると、恐ろしさと不安とがひしひしと胸にこたへて來ます。もしもの事があつたら、全くどうしていいか解りませんでした。私が殆んど泣きさうな顏をして、默つてゐ

るのを見ると、産婆は、

『それで、私も及ばずながら御心配いたして居るのでございますが、何ならば何處かにお遣しになりますとか、若し又お遣しになるのがどうしてもお厭でございましたら、何處かに賴んで籍だけでも入れて置いて貰ふやうになさいましたら……』そして『ようくお考へになりましてから御返事を願ひます。』さう附加へて、階下に降りて行きました。

此可哀いはなを人に與るなんて、考へて見ても厭でした。それから又、折角の自分の子を、たとひ後で自分の養子と云ふ事にするにしても、人の子として屆けるなんて、それも親としては堪らない事でした。産婆の云つて呉れる深切はよく解りますが、けれども、養子にするのも、籍だけ人に借りるのも、共に私には出來ません。……それならば、自分の子として屆けるか？　若し自分の子として屆けると、私生兒としなければなりません。――『私生兒』それは又除りに可哀さうでした。はなが大きくなつてから、『私生兒』と云ふ事のために、どんなに恥しい思をしなければならないかを思ふと、それも私には出來ませんでした。

と云つて、他に仕方のないのは解つてゐました。あの人の秋田のお父さんに相談したらと云ふ心も湧きましたが、さうしたら、此子をゆくゆくは秋田の方へ引取られてしまふに相違ありません。……いえ、どんな事があつても、手放す事は私は斷じてしません。……涙が枕の上にしつとりと濕つて行きました。ちゆうちゆうと乳を飮んでゐるはなを見ると、此まま二人で一緒に死んでしまはう……などと云ふ氣もしました。

産後の肥立が好かつたので、私は間もなく起きて、室の中をはなを抱きながら、小聲で歌を歌つて歩きまはりました。私の寢てゐた間に、前の田圃の稻はすつかり刈り取られてしまつて、黄ろいいなむらが、廣い田圃のそここに出來てゐました。眼に見えるものが、もうすつかり晩秋――と云ふよりも初冬の悲しさを語つてゐます。小春らしい晴天はつづいてゐましたが、もう赤とんぼは飛んでゐませんでした。

或日、それはもう産婆が心配した二週間目の次の日でした。産婆はいつもよりも強い調子で、赤子の籍の事を云ひ出しました。

『籍だけどうかなさいませんと……實は、近所の車屋のかみさんにも話して見たのですが、籍だけ入れて上げるなら差支へないと申しました。如何でございませう、さうなさいましては？……それは車屋なんかしてゐても、大變好い人なのです。長い間此附近に住んでゐますが、正直者だと誰でも云つてゐる位なのですから……若しもの事がありますと、あなたばかりお困りではなく、此私でもかう云ふ看板を掲げて、あなたをお預りしてゐる以上は、やはり責任があるのですから……』

それにもたうとう私は確答を與へる事が出來ませんでした。……車屋の子、そんな事は今から思へば何でもない事でしたが、私はその時は、頭が混亂して、妙に涙ばかり流れて、決斷心と云ふものが心の何處にもなくなつてゐました。

そこでたうとう、産婆はかう云ひました。

『若しそれでもあなたが赤さんを今のままにしてお置きになりますなら、甚だ申しにくくはありますが、私共でもいつまでもお世話いたして居りますわけにはまゐりません』

そこで、私はもう産婆のところにもゐられなくなつて、その翌日の夕方、荷物だけを後で取りに來る事にして、はなを抱いて、外に出ました。私には何處にも行くアテはありませんでした。

産婆のところの拂ひを濟ませた後には、昨年兄が名古屋に行く前に殘して行つて呉れたお金が、未だ半分ばかり殘つてゐました。……私は赤ん坊を抱いたまま、院線の電車に乘り、それから又市内電車に乘り換へて、麻布の方へ行きました。私は何處か深切な家に間借をして、そして何とか生活の道を考へようと思つてゐたのでした。未だ衣類も少しは殘つてゐましたから、そんなものもどうかすれば、半年位は、質草にすれば生活が出來ます。その間には何とか後の工夫もつくだらうと思ひました。

ところが、女ひとり赤子を抱へてゐる姿を不審さうに見つめて、なかなか宿を貸して呉れるところがありませんでした。私は小さな宿屋に二日泊りました。……そして三日目の朝、はなが咳をし初めました。もう十一月も末で、吐く息が、寒い空氣の中に白く見えました。……私は赤兒を抱いて、麻布から芝の白金の方へ歩つて行きました。手の中で赤

子の身體が火のやうに熱く感ぜられました。あやしてもあやしても妙な泣聲を立てました。けれども、それは死ぬなんて、そんなにひどいとは思つてゐませんでした。私は肩掛にくるんで、なるたけ風のあたらないやうにして行きました。……が、その晩、私が又前夜泊つた宿屋に歸つて行かうとする途中で、赤ん坊は死んでしまつたのです。……手足をぶるぶると痙攣させて、眼が上ずつて來たかと思ふと、それきり動かなくなつてしまひました。あんまり思ひ掛けなく、あんまり簡單でしたので、私は暫くは呆然として涙が出なかつた程でした……

籍の屆けてない赤子の死をどう屆けていいか解らない、生れて二週目を過ぎ去つたのに未だ屆けてなかつた、そしてそれが死んだ、さう云ふ時には、その母親は罪になると云ふ事は、産婆の口からもよく聞いてゐましたが、併しその時、私はさう云ふ罪が恐ろしくてばかり、それを隱蔽しようと思つたのではありませんでした。……あまりに思ひ掛けなく、あまりに簡單に死んだので、呆然としましたが、やがて我に返ると、私は悲しさと可愛さとに、前よりも一層強く死んだ赤ん坊を抱きしめながら、涙をぼろぼろ流して往來を歩いて行きました。もう前の宿屋に歸るわけに行かなくなりました。私は麻布を通り拔けて、青山の通に行つて、そこで粗末な毛布を買ひました。私はその毛布で、丁度荷物に見えるやうに、赤子の身體をすつかり包んでしまひました。……私はその晩から、毎晩その毛布にくるんだ死んだ赤子を抱いて寢ました。そして日を經るに從つて、益々私はその死んだ赤子が可愛くなつて行くばかりです……

それからもう二年になります。幸ひ赤子は腐らずに、みいらのやうに固まりました。一生私は此赤子を抱いて寢ようと思つてゐます……

* * * * * *

よし子の裁判の時には、石川の細君はすすんで證人として出廷した。そしてよし子のために辯じた。――赤子が腐敗せずにみいらのやうにかちかちになつたと云ふ事について、檢事とそのみいらのやうになつた赤子の死體を檢視した醫師との間に、かなり込み入つた議論があつたが、それは裁判には關係がなかつた。――赤子は參考品としてそのまま保存される事になつた。

裁判長は結局無罪と云ふ判決を與へた。

けれども、それから五日して、よし子は或海岸から投身して死んでしまつた。その時石川の細君に宛てて郵送した書置にはこんな事が書いてあつた。

『私はもう堪へられません。悲しみの重荷が何處までも私についてまゐります。何處まで行つても追ひかけて來ます。それを慰めて呉れてゐた唯一のもの——はなの死骸はたうとう私の手から奪はれてしまひました。もう私には生きるめあてはございません。無罪と云ふ判決は、私には何の喜びも與へません。——これから、若し長い間生きてゐるとしましたなら、悲しみの記憶の重荷が、その間始終私を苦めてゐなければなりません。——私はさうして生きてゐるよりも、寧ろ死を撰ばうと決心いたしました』

作者附記　此材料は嘗て作者が他の觀點よりして、書きかけて完成しなかつたものであるが、近日新聞の社會欄にあつた或記事によつて、新たなる刺戟と問題とを與へられた。——此材料を他の觀點より取扱はうとした未完の作『お京の話』は、此作の發表と共に抹殺する。



瑞西の旅

成瀨正一

一　里昂

七月十三日、里昂へ來てから、今日で、丁度一月になる。昨日縣廳から通知があつて、豫て出願して置いた瑞西旅行が許可になつたので、思切てこの町を去ることにした。

幸なことには、停車場へ行くと、常には閉鎖されて、通行を許されない佛蘭西瑞西の國境が、今日は、一日開いてゐることを耳にした。煩雜な旅券の手續を濟したを幸、國境の一寒村で開通の日を待つ心算(つもり)でゐたのであるが、偶然汽車に乘らうとした朝、その日に限つて自由に瑞西へ入れることを知つたのである。まづ不潔な田舍宿に泊まる苦を逃れた譯である。

何が幸になるか知れない。入國許可を待暮しながら倦怠に苦しむでゐたのが、結句仕合になつた。

長い銃劍を擁した佛蘭西兵士に切符を改められた後昇降場(プラットフォーム)に出る。人の山で中々歩けない。恐らく、私と同じく、國境開通を耳にして、瑞西へ行く人達なのであらう。様々の服裝(なり)をした乘客の群に混じつて、乘るべき汽車を訊ねながらやうやく車室を探しあてると、先を爭て乘らうとしてゐる人には、老爺あり女あり、軍人あり僧侶あ

り、たゞ戰時中のため、軍服以外の若者の姿が見當らないことが非常に眼につく。先程から私がその後にばかり從いて歩いてゐた老僧侶は、舊教の僧侶が皆然る如く、奇妙な山高帽に足まで屆く黑外套を着て、頻に人波を掻分けてゐたが、乘車口まで辿着くと、高い踏段に足を掛けて、やつこらさとばかり、大きな尻を一つ振つて乘込まうとすると、丁度そこに來合せた女の帽子を肱で撥飛して人々の笑を招いた。

Père gâté!

「だゞつ兒老爺」と「だゞつ兒坊主」と云ふ二つの意味にとれるさう云ふ洒落が、帽子を飛された女の呪咀の叫と共に、哄笑に混じつて誰かの唇を衝いた。更に笑が湧上る。「だゞつ兒坊主」の尻馬に乘つて私もやうやく車內に割込むことが出來た。

席は占めたが、汽車は中々出ない。後から後からと人が這入つて來る。昇降場の人山は、數が減りさうにも見えない。

時はまだ七時を少し過ぎたばかりであるから、里昂の市街は、薄絹のやうな霧に包まれて、一段高い停車場の下に澱む如く横はつてゐる。

暫の間足を停めた旅の地であるにもせよ、土地に馴染い私の心は、稍ともすれば、去るにのぞみ、不思議な愛着の情を抱くのが常である。窓際に倚つて、機關車の吐く白煙を眺めながら、呆然として、取止もない妄想に耽つてゐる中、直ぐ側の構內に、佛蘭西兵に護られて、悄然と佇むでゐる一隊の獨逸の捕虜が眼にとまつた。

戰爭に倦切つた佛蘭西人達は、格別捕虜が珍らしくもないのであらう。誰も側に立つてゐる者がない。十人許の獨逸人は、立つてゐるのも、線路や貨物の上に腰を下してゐるのもある。皆、獨逸を出た時からそのまゝ着てゐるやうな褪い鼠服に、赤い筋の這入つた古帽子を頂いてゐる。誰も話を交す者がない。雜沓の中に彼等は、一樣に默々として、各各、何かを凝視てゐる。その中に一人、若い捕虜が、首から下げた繃帶に腕を凭せて、何か一心に見入つてゐるのがある。恐らく肩か腕にでも負傷したのであらう。彼の顏は蒼白であつた。その眼も底深く澄むでゐたが、併し、その靑味

は、私が始めて見たやうな青味であつた。殆水のやうに淡い、併し透きとほつた兩眼を、憔落ちた双頰の間に潤ませて、若い獨逸人は、囚はれた仲間と共に、場内の鐵路に休むでゐたのである。側に立つてその一團を監視してゐる佛蘭西兵の茶色がゝつた眼とは、同じ歐洲人とは云ひながら、何と云ふ相違であらう。飽まで青い前者の眼は、空ばかり見て育つた北歐の眼で、鋭い視線を持つた後者の眼は、都會的情緒に養はれた南歐の眼である。兩方とも、云難い憂愁を湛へてゐる。けれども、捕虜の憂愁は何物かを訴へてゐる。番兵の憂愁は、恰も摑みかゝるかのやうに、絶えず何物かを探してゐる。

それは、決して強い眼ではなかつたけれども、不思議に魅力のある眼であつた。吸込まれるやうに私は、その方ばかり見てゐたが、彼の淡青い眼と私の眼とは、遂に視線を合す時が來なかつた。間もなく彼は、仲間と共に、護衛のために拉し去られたからである。その後姿が、人混の中に消去つた後、私は、何氣なく、彼が見入つてゐた方角に眼をやつたけれども、そこには、汽車と群集の外、何も眼星しいものがなかつた。

陽が昇つて、霧が滲むだやうに赤くなつた頃、私の汽車は、やうやく、里昂を後にして瑞西に向つた。鮨詰の大混合である。佛蘭西はかう云ふ時、よく、Sardine のやうに混むと云ふ。Sardine と云ふのは、鰯をかたく鑵詰にしたものである。旅客の半分以上が立つてゐる汽車は、ロオヌ河に沿ふて、次第に速力が鈍るかと思はれる程遲く、溪谷を縫ひながら國境に向つた。

乘合の客は大半女であつた。大抵大きな荷物を携へてゐる。中には、日本人がするやうに、風呂敷に包むで、その上を細紐で縛つたのを持てゐる女さへある。恐らく彼等は、捕虜となつて瑞西に抑留されてゐる家族を訪ひに行くのであらう。種々そのやうな話が女達の間に交される。

私の側の女は、汽車が動出すと間もなく、腰掛の下から大きな籠を取出して、何か呟きながらその口を開けた。すると、中から可愛らしい犬が一匹出て來た。誰も笑はずに漫乎と眺めてゐる所を見ると、佛蘭西では、犬と一緒に旅をすることが、そんなに珍しくもないのであらう。女主人の膝に溫柔しく前脚を揃へて座つてゐる小犬は、見馴れない周圍に

始終頭を向けたり鼻を押着けたりしてゐる。その犬のことで、又一しきり話に花が咲く。飼主が頭を撫しながら、その犬が亞弗利加の殖民地から來たことや、よく主人の言葉を解することや、小さいのに澤山食料が要ることなぞを早口に述立てると、側に聳耳を立てゝゐた合客が、口々に色々な質問を出す。今度は、默つて側に控へてゐた私に向つて、女主人が口を切つた「日本には狆と云ふ犬がゐて、大層愛らしいと云ふが本當か」と云ふのである。「狆」と云ふ字を「シン」と發音したのも佛蘭西人らしい、――――(Chin と云ふ羅馬字を、お國の習慣どほりに發音するのだから。

「此頃は犬を飼ふのも大變でせう。」

側の女がさう云ふと、飼主の女は、今更らしく嘆息した。

「戰爭で碌に肉も喰べさせることが出來ません……」

さう云終らぬ中女は愛犬に頬擦して云つた。

mon pauvre petit!

可愛くて仕方がないやうに見える。

犬の話が濟むと、一寸話が下火になる。人々は汽車の遲さに焦れて、欠伸半分窓外に眼をやつてゐる。幾度となく隧道に出入する。暑さが加はつて、人々の額に油汗が滲出す。

山が大分險しくなつて、高峰モン・ブランが、その白い頂を見せはじめた頃、國境の停車場ベルガルドに着いた。次の停車場はもう瑞西である。

ベルガルドは、ロオヌ河の上流、兩岸が高い絶壁となつた所に、四五百軒の赤屋根が、一本の橋を挾むで相對してゐる寒村である。こゝで汽車を換へなくてはいけない。旅券や手荷物の煩雜な檢査が濟むで、私は、愈々ジュネエヴ行の汽車に腰を下すことが出來た。

六人詰の小室内には、私の外、伯刺西爾人夫婦と、英吉利人希臘人とが各一人宛、都合六人の同勢であつた。各々自分の國の話をする。英吉利人は、十年程前に日本へ行たことがあると云つて、聞々その時分の経驗を物語つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

島國に生れた私には、どうも「國境」と云ふ概念が明り解らない。佛蘭西から瑞西に進入る時、汽車の窓からでも、若しそれらしいものが見えやしまいかと思つて始終注意してゐたけれども、とうとう氣がつかずに濟むでしまつた。ベルガルドを出て、次に停車した所で、見馴れない暗色帽を被つた巡査が乘込むで、吾々五人の同勢に旅券提示を請求した時、始めて私は、自分が既に瑞西にゐることを知つたのである。

旅券檢査のため一時停つた汽車は直ぐ進行を始めた。

やうやく瑞西へ來た。同乘の英人は、英語が解るのは私一人であるまゝ、私を省みて云つた。Now let us cry Banzai! と。

ジュネエヴの停車場で、又もや旅券荷物の檢閲を受けた上、麺麭牛乳その他食料品を求める切符を買つて、夕刻宿屋に落着く。Beau Rivage と云ふ大きなホテルであつた。

二　レエマンの湖水

何所へ足を運むでも、常に私の旅行を案內する忠實なベデカアは云ふ――Switzerland is famous for its hotel と。

有名か有名でないか知らないが、私の泊つた宿は、藍の色濃い湖水を前に控へた形勝の地に位してゐて、その窓から、嘗てルッソオが住むでゐたと云ふサレエヴの山を越えて、遙に、サヴオワの空高く聳えてゐるモン・ブランまで、一眸のもとに指呼することが出來る。

旅の疲に一夜を熟睡に過した翌朝、早く、深紅の毛氈を踏みつゝ窓側に歩寄つた時、私は、よくこそこの町へ來たと思つた。

湖水も市街も皆、今將に明け放れやうとする光に照らされて、浮上るやうに眼の下遠に擴つてゐる。窓の直下を走つてゐる遊歩路(プロムナアド)から、噎せるかと思はれる程強いアカシヤの香が立上る。まだ行人の影は稀である。白塗の遊覽船が數艘、湖水の上に浮むでゐる。その間を白鳥の群が、靜な波紋を曳きつゝ、縫ふ如く滑つて行くのが見える。大きな鳥の姿は、朝靄の影に、現れたり消えたりする。湖水の上に島がある。その上に白楊樹(ポプラ)が茂つてゐる。その側に橋がある。

その向ふに高い尖塔を持つた教會が二つ三つ見えてゐる。針のやうな塔の頂が、金の如く輝き初めたのは、もう陽が昇るからであらう。モン・ブランの雪は既に、銅(あかがね)の如く旭を浴びてゐる。凡ての上には、これから醒めやうとする靜けさがある。

偶然早起をした私は、窓の景色を眺めては、小供の如くこの町へ來たことを悦んだ。

朝食後直ぐ、洋杖(ステツキ)を振廻しながら宿を出た。

ジュネエヴの町は、レエマンと云ふ湖水（通常ジュネエヴ湖と云はれる）の西端が、愈々幅狭くなつて、終に、昨日私が辿つて來たロオヌ河の激流となる所に立つてゐる。湖尻の南岸は古い町で、寺院その他の古い建物が並むでゐるし、北の岸は新しく開けた町で、宿屋別荘などが軒を連ねて並むでゐる。モン・ブランを始め、アルプスの連峯を眺望するには、無論北岸の方が優れてゐる。湖と市街を前景にして、それらの高峯を眞正面に見渡すことが出來るからである。

宿を出ると私は、窓から見下した、すぐ前の遊歩場(プロメナアド)に出てゐた。頭の上には、さゝやかな白い花をつけたアカシヤの枝が、湖岸遙に續いてゐる。足許には、眼が醒めるやうに鮮な草花が、赤黄紫桁白紅の花をつけて、芝生の間に點々としてゐる。松のやうに尖つた葉を持つたのもある。蓮のやうに丸い葉をしたのもある。

それ等の花に見入り、湖上に眼をやり、更に仰いでモン・ブランの頂を眺めた私は、強烈なアカシヤの芳香に、恰も、魔醉した如く呆然となつて、暫の間は、右へ歩を向くべきか、或は又左へ行くべきか決しかねて、たゞ一人湖畔に佇立してゐた。

この町に生れたルツソオやカルヴィンの俤が、眼の前に浮むやうな心地がする。

私はやがて、湖尻の方へ歩いた。窓から見た時、靜に舫(もや)つてゐた遊覧船が、その煙突からゆるやかに煙を吐き初めた。客を乘せて湖上を行かうとするのであらう。

レエマン湖の水は、「世界中有名な位水が蒼くて綺麗に澄むでゐる」と私のベデカアは云つたが、それにしてもこの深味のある蒼さはどうだらう。人間が造つた色は、どんなに細工しても、こんな深い印象を與へることが出來ない。丁

度湖が河になる所に、Pont du Mont Blanc と云ふ橋が架してあるが、その上から俯瞰した水は、私が、生れて始めて見たやうな水であつた。それ程深くもないけれども、見れば見るだけ深さが増すやうな感がせられる。蒼い蒼い水が、背を立てつゝ橋の土臺を洗ひながら、徐に河へ馳下つてゐる。淡い綠色を帶びた水底を凝視めると、そこには、雜多の水草と水藻とが、底を隱す程密生して、流に靡きながら、縺合つたり解合つたり、黒ずんだ葉を見せたり、時には又閃くやうに白い裏葉をかへしたりして、たゞ水勢に飜弄されてゐる。その間に縞のある小魚の群が、恰も玻璃窓の彼方にある如く游いでゐる。連を離れた白鳥が二三羽、橋の下を過ぎる時、餌を漁るとて、首を倒に底深く潜ると、その純白の姿が、不思議な綠に染められて、水草の間に、さながら手に取る如く鮮に望まれるのである。幾度か私は橋の上に立つて、白鳥の逆姿に見惚れたのである。その水が次第に深さを増して湖心に近づけば、そこに又、濃い夏空の蒼さにも勝る藍色となつて、溢れるばかりに擴つて行く。陽が昇るに從つて濃さが强くなる。白帆が浮び快走艇が出るやうになると、湖岸を限る山影から、白雲が現れて、何所ともなく漂ふのである。濃藍は益濃くなつて、殆黒ずむで來る。

「この湖の水は、水とは思へない程濃い。時には、固まりのやうな氣がする。」

その後私が知合になつた、ある佛蘭西の旅行者がさう云つた言葉も强ち誇張ではない。

陽が大分高くなつた頃、橋の側にある島へ渡る。小さな橋がこの島を、他の大きな橋と繋いでゐる。

そこへ行つた時始めてこれが、彼の有名なルツソオの島であることを知つた。島の眞中にこの革命思想家を紀念する像がある。椅子に腰掛けて、堆高い書籍に取圍まれながら、鐵筆を手に、何か考へてゐる姿である。下の銘にかう刻してある。

JEAN JACQUE ROUSSEAU
CITOYEN DE GENÈVE
MDCCXII MDCCLXXVIII

ルツソオ自身も、その著「懺悔錄」の中に、自分が、一七一二年この町に於て、時計屋の息子として出生したことを

物語つてゐる。

「余は思ふよりも先に感ずるを學べり。そは人類の必然なる天性として、各人皆共通なることなれども、余は、たゞその天性を、他人より多く有せしのみ。」

「懺悔錄」の中にさう叫むだ彼の聲は、時あつて心の底深く滲込むのを、私は奈何ともなし難い。私自身も、白の幼年時代を顧みて、「感ずること」は、考へることに先立つたと思ふからである。否、今でも、成人した今でも、私は、事物に對する時、知識の活動が、感情の活動に次いで起ることを認めざるを得ないからである。そして更に、ルツソオが云ふ如く、「この天性は、あらゆる幸不幸の原因となる」やうにしか信じられないからである。

銅像の前に据えてある椅子に腰を下して、暫の間私は、取止もない妄想に耽つてゐた。十八世紀以後の思想に、自分の死後、あれ程の大影響を及すなぞと云ふことは、彼も、夢にさへ見たことがなかつたであらう、——一生薄幸で、土地から土地へと彷徨を續けた彼のルツソオは。

側に小さな店を出してゐる老婆の所で、思出のため銅像の繪葉書を二三枚買つた。

島にはたゞ、ルツソオの像と老婆の店以外には、數脚の椅子が、芝生と草花との間に配置してあるばかりではあるが、丈の高い白楊樹が茂つてゐるので、中々捨難い趣がある。私がこの島へ行つた時は、近所の小供等が、竿を手にして、一生懸命に縞のある小魚を釣つてゐた。聞けば戰爭で食料拂底のため、さうして粢食の不足を補ふとのことであつた。

＊

希臘人のやうでもあり葡萄牙人のやうにも見える私の容貌は、多くの人の好奇心を惹いたに相異ない。中食をするとて卓子に向つた時、周圍の西洋人達が、方々から流眄を送つた中に、食堂の一隅に座を占めてゐる肥滿し切つた一老婦人は、柄のついた眼鏡を手にして、頻に私の顏を覗いてゐた。自分がまだ日本にゐた時、彼等の妙な風俗に眼を睜つたのも、今は、所を換へて、彼等に不思議がられる身となつたことも面白いことである。

空腹を感じてゐるまゝ、給仕が運むで呉れた皿に皆手をつけた、けれどもその中に、たゞ一つ躊躇したものがあつ

た。それば、牛肉に添へた二三本の靑菜の上に、小さな蛞蝓が這つてゐたからである。それは小さい蛞蝓であつた。怯づ怯づと細い角を伸して、今水を切つたばかりの靑菜の上を、あちこちと歩いてゐる。佛蘭西人は Escargot と呼んで、蝸牛を食用に供することがあるが、それは、私も嘗て、名產地ディイジョンの田舍で試みたことがある。併し、生きた蛞蝓を皿の上に這はせて食ふことは、未嘗て耳にしたことがない。透きとほるやうに白い蛞蝓であるから、或は食はせるつもりなのかも知れないと思つて、隣の卓子に向つてゐる佛蘭西人の皿を盗見して見たが、彼の靑菜には蛞蝓が居ないらしく、愉しさうに口を動してゐた。當惑して暫の間私は、あちこちと這廻つてゐる樣を凝視めてゐたが、とうとう蛞蝓を食ふことは止めにした。その靑菜にも手をつけなかつた。

けれども憐むべき蛞蝓は、却つて私が落した一滴の牛肉の煮汁に噎せて、皿の中に小さく縮まつて死むでしまつた。牛肉の汁の中に、鹽分があつたのであらう。

*

今日は日曜とあつて、湖畔のカッフエや音樂堂などから、快い奏樂の音が響いて來る。戰爭のため、凡てが陰氣と暗黑に閉された佛蘭西から來た私にとつて、見るもの聞くもの、皆平和な感を與へる。長距離砲と飛行機に脅かされた巴里人の頭は、思はしくない戰況に、一層憂鬱であつた。食料品は缺乏する。夜になつても街燈が點かない。大通を行けば、黑い喪服姿の婦人と休暇の軍人にばかり遇ふ。さう云ふ土地から旅立して來た私にとつては、たゞ、戰報を傍觀的態度で讀むと云ふに過ぎない中立國でさへ、凡てが平和に滿ちて感ぜられるのである。

況してこの町の空氣は、至る所快樂に溢れてゐる。殺氣立つた顏や憂愁の俤は、その片影さへ認めることが出來ない。宿の側に、Kursaal と云ふ奏樂堂がある。そこには、簡單な歌劇や、合奏つきの酒場やカフエ、その他、賭博場舞踏場などがあつて、アカシヤ菩提樹などが快く案配されてゐる。

午後私はそこへ杖を曳いた。

この奏樂堂は字の示す如く、獨逸の町にあるものを眞似たのであらう。湖水に面した愛すべき音樂堂である。階上の庭園に席を占めて、名前は兼々聞いてゐたが、生れて始めて飲むラインの酒を盃に滿して、清水が流れるやうな音樂に聞入つた。その音樂が誰人の曲であつたか、今はもう思出せないが、(否、その時も氣がつかなかつたが)その Melodie に耳を傾けてゐる中、日曜の午後、呆然、湖水とその汀を限る遠山の頂を眺めながら聽いた一曲は、不思議に私の心地を浮立たせた。

菩提樹の幹に椅子の脊を凭しながら、眼下の遊歩場を瞰下した。水が蒼いやうに、碧瑠璃の色が、凄い程濃い空の下を、流れる如く人の群が續いて行く。佛蘭西とは異ふ。若い男が澤山ゐる。大抵女と同伴してゐる。壯年者を强制的に召募する戰爭なぞと云ふものが、此碧瑠璃の國を浸さないためであらう。彼等は皆、日曜の午後を、湖畔の散歩と、奏樂堂の音樂に過さうとするのである。

すべては輕く、すべては明るいこの町の人は、皆それに適しい色を纏つてゐる。佛蘭西の女が着けるやうな拗い都會的流行や、あまりに人巧的な色彩や模樣なぞは、永久に、この水郷に育つた乙女等の嗜好に合する時があるまい。彼等の心は、あまりに人爲的な、あまりに「文明的」な巴里婦人の、惡毒いまでに濃厚な傾向とは、全く趣を異にしてゐるからである。

その土地の女が着る衣裳の趣味によつて、そこの氣分を感じることを常とする私は、この町でも同じ經驗をした。澄切つた湖の水に産湯をつかひ、菩提樹の芳香を吸ひ、遠山の雪を眺め、常に音樂の曲を聽いて成長した乙女達は、生れながらに、透きとほるやうな膚と、涼しい眼とを持つてゐる。その歩は輕い。他國の女達が、華奢な裝をして意匠を凝らす時、彼等は、たゞ輕い薄絹を纏へばそれで足るのである。淡桃、淡青、淡黄、純白を着ければそれで足りるのである。清い空氣と持つて生れた清楚な體は、それを、錦にも勝つた美しい衣裳とするのである。さう云ふ衣裳を着て湖畔を行く乙女等を見てゐると、もう女と云ふ氣もしない。着物も眼に立たない。たゞ、恍惚として魂を奪去るやうなある美しい姿として感じられるのみである、少くとも、奏樂堂の階上庭園から、輕い夏裝束をして笑ひさゞめき

から遊歩場を行く乙女達の群を眺めてゐた私にとつては。

何時の間にか私は、群を離れて、たゞ一人佇むでゐる桃色姿の乙女を凝視めてゐた。遊歩場の側から、遊覧船の乗降に用ひられる白塗の棧橋が、湖上に突出してゐる。私の乙女は、その棧橋の上に帽子も被らずに、豊な金髪を風に靡かせながら佇立してゐるのである。その姿が、沈まうとする夕日に照されて、鏡のやうな湖に細長い影を投げてゐる。その影に乙女は見入つてゐるやうに見える　彼女の背後には、人の流が限もなく續いて行く。その人の流に振向もせずに彼女は、凝乎と己の影を眺めてゐるのである。暫乙女の姿から眼を放さなかつた私は、やがて、白鳥が二三羽、桃色姿が佇むでゐる棧橋の下の穹窿を、滑るやうに過行くのを見た。けれども乙女はそれを知らなかつた。何時までも自分の影に見入つてゐた。

＊

暫間の旅に私は、夕食後、微に湖上を渡る微風を浴びて、宿の露臺に休むでゐると、又しても、それからそれへと、種々な想が限もなく頭を過ぎる。獨旅をしてゐる私には、どうも仕方がない譯である。

暮れたばかりの空を仰げば、僅に褪せた水色の中に、眼に映る星がたゞ一つある。その星は淡青い空に、火玉のやうに赤く瞬いてゐる。

——星はたゞ一つかしら。この大空に、星はたゞ一つかしら。

その赤さを訝つて凝視を續けてゐる中、私の心に不圖そんな考が浮むだ。さう思つて更に眼を瞬ると、その側に、螢火のやうに閃めく淡い微光がある。

私の仰いだ眼は云つた。

——これは星だらう。小さい星だらう。

けれどその星は直に消えた。今はもう何も見えない。たゞ赤い星が光つてゐるだけである

——星と見たのは、自分の幻影であつたのだらう。

そのやうな取止もない想に浸つて、眼を側に轉ずると、何時の間にか、露臺の鐵柵に小さな蜘蛛が、一匹這寄つて、一心に巣を架けてゐる。指の尖より小さいその體で、巣を架けて何を捕らうとするのであらう。

町の人も夕食を終へたのであらう。前の遊歩場に、一時絶えた人の流が、又も續いて行く。杖を曳く人、犬を連れた人、戀人を伴ふた若者なぞの笑ひさゞめく聲が、丁度側に奏樂を始めた音樂堂の音に混じつて、靜に私の耳を打つ。微風が起つて、芳しいアカシヤの香を送つて來る。

もう星も今は澤山現れて、數へることも出來ない。空も青味を失つたけれども、その代り、丸い月が今昇る所で、將に、ルツソォの島に茂る白楊樹の梢を離れやうとしてゐる。

湖畔の家は、カツフエと云はず音樂堂と云はず、皆色の着いた燈火を點け、折柄歸つて來た遊覽船の電燈と共に、種種の波が湖の上に搖ぎ、兩岸に奏する樂曲の音、或は相合し、或は相反し、云ひがたい情緒を構成する。人の流も益々繁くなり、笑ふ聲談ずる聲も、それにつれて高くなる。夜が更けるに從つて、次第に賑になる。

私の幻想は、湖畔の露臺にあつて、止度もなかつたのである。給仕が持つて來た珈琲を飲みながら、覺えず時を過してしまつた。

瑞西を熱愛したトルストイは、一八五七年この地に旅行して、レエマン湖を見た時云つた。

「余は自がその中に沒入する時、熱く自然を愛す。瑞西に於いては、無限の遠方を眺むる時、その中に云ひ難き美感あるを常とす」。

湖水に就いて愛すべき紀行文を記した後、更にかう附加へてゐる。

「併し余は、此所に於いては單なる一外人に過ぎず。余はこの美しき自然と、何等關係なき一外人なりとの感を奈何ともする能はず。」

さうして見ると、「歐洲の樂園」として名高いこの瑞西も、彼トルストイに執つては、ヤスナヤ・ポリアナの田舍に如かなかつたであらう。

私もそんな感がしないでもない。寝臺を引上げて自分の室に歸つた後、日本の友人達に繪葉書でも出さうと、獨机に向つた時、その感が更に強く起つた。

所が、直ぐ次の瞬間に私の眼に留つたものは、偶然とは云へ、不思議に、さう云ふ場合私の心を惹くものであつた。何氣なく、書終つた葉書を、備附の吸取紙で押さうとした時、不圖その上に、二三の日本字を吸取つた痕があるのを發見した。東京の東の字や、名前の一部分らしい田と云ふ字なぞを、消えかゝつた他の字の間に讀むことが出來た。恐らく、前に、誰か、泊つた日本人があつたのであらう。その字はもう古いらしく、黒いインキも大分褪せてゐた。

外國旅行中、元來日本人に遭ふのがあまり好でなかつた私も、不意に瑞西の一客舍で、吸取紙の上に消えかゝつた日本字を見出した時は、實際誇張なく、懐しい想が胸を衝いた。

寝臺の上に横つてもそのことが妙に頭を離れない。近頃この町を通過した日本人の名前を胸の中に繰返したりして、當てもない主の詮鑿に時を費してゐる中、何時の間にか眠に落ちてしまつた。

何でもない積でゐても、私も、懐郷病（ホオムシツク）に囚はれてゐるのかも知れない。そんなことに心が惹かれるのであるから。

＊

一週間の間を、毎日そんな風に過してしまつた。

七月二十日、私は、數年來吾師と仰いで、片時も邂逅を欲して止まなかつたロマン・ロオランを、その假寓の地なるヴイルヌウヴに訪ふため、湖水の上を通ふ遊覽船に乗つた。ヴイルヌウヴは、レエマン湖の東端にある小村で、ロオランは、歐洲戰爭の勃發以來、そこにある客舍オテル・ピロンに居を構へてゐるのである。瑞西に入ると同時に手紙をやつて面會の都合を問合せたのであるが、親切な彼は、道順まで敎へて呉れた上、何日でも來るやうに返事を呉れたのである。

五年前にその大著ジヤン・クリストフを繙讀して以來、私の心は絶えず彼に向つてゐた。時折の通信こそ相互の間に交されてゐたとは云へ、彼は歐洲に、私は東京にあつて、萬里を隔てながら、夜も晝も、折に觸れ時に觸れ、彼の寫眞を

眺めてはその風貌を想ひ、さては、想像の趣くまゝに、對面の樣まで胸に描いてゐたのであるから、やうやく瑞西に辿着いた今、私は、不思議な神經の昂奮を奈何ともすることが出來なかつた。

七月二十日は瑞西にも珍しい程奇麗に空が晴れた日であつた。サヴオワと云ふ贅澤な遊覽船に乘つて、宿の前の棧橋を離れる。

窓から眺めることを常としたあの敎會の尖塔や、白楊樹（ポプラ）の茂るルツソオの島や、階上庭園のある奏樂堂（クウルサアル）なぞが、並木や遊歩場（プロメナアド）や橋と共に、立並ぶ人家の間に際立つてはつきりと眼に映る。

船はもうジユネエヴの町を後にして、そろそろ湖心に出やうとしてゐるのである。赤地に白十字を染拔いた瑞西の國旗が船の艫に飜つてゐる。

湖上から見た水の蒼さは又格別であつた。太平洋大西洋を越えて來た眼には、水色の濃さもそんなに珍しくもないけれども、レエマン湖の水は、他に多く類がない特徵を持つてゐる。如何に深く水が積むでも、たゞ積むだけでは到底現れないやうな特徵を持つてゐる。甲板の上から俯して水面を眺め、行すの水路に眼を移した時、私は、決して、自分の足下に深い底があると感じたのではない。それは何とも云ひがたい淸澄の感であつた。殆濃藍と云つてもよい位深く積むだ水の色が、蒼いと同時に、水晶の如く澄切つてゐると云ふ感であつた。小波さへ立たずに靜まりかへつてゐるので、その蒼さも淸澄さも亂されない。そしてそこには、あの大海の潮のやうな不純な重々しさもない。墻壁の如く汀を取卷いた周圍の山頂に積む雪が解けて出來た湖であるから、從つてその水も、浴して泳ぐさへ勿體ない位澄切つてゐる。レエマン湖の水のこの性質に就いては種々說をなす人がある。空氣にその原因を歸したり、或は又氣溫の爲だとする人もある。私はそれ等の說の中、どれが當つてゐるか知らない。水底を覗込むと、何故か知らないが、底が見え相に思はれる。けれども視線は藍の中に盡きてしまう。盡きてはしまうが、時々、透明な水面の直ぐ下を泳いでゐる鮒の子の群なぞがはつきり眼に映ると、如何にも淸澄と云ふ感が心に閃くのである。そして又更に藍の底を凝視してゐると、矢張そこには紺碧の藍より外何もない。何時までも眼を離さないと、私には、そこに人を吸込むやうな魅力があるのを感

する。五體凡てその中に沈み、冷な水が肌に觸れ、周圍が渾然たる紺青の世界となり、光も水も物も、みなその別を失ひ、たゞ模糊とした煙霧の中に居るやうな心地がするのである。稀に、波紋を描きながら、水面にその銀色の腹を跳らせるかと思ふと、直ぐ姿を沒する小魚が二三、須臾の間この夢のやうな心持を亂すだけで、凡ては濃い紺青の中に融合してゐるのである。

忽ち船尾の甲板に鋭い聲があがつてこの夢心地は醒された。首を振向けると、それは、音樂團の一隊が奏樂を始めたのであつた。長髮の音樂家が、細い四絃琴(ヴァイオリン)の絃にあてた最初の調子高い音が、湖心に見入つてゐた私の頭を轉ぜしめたのである。

船はもう餘程進むで、ジュネエヴの町は、今はもうその影も認めることが出來ない。今丁度船尾に當つて見えるあの青い岬の彼方になつてしまつたであらう。兩岸は離れて遠くなつた。サヴオワ號は、船首に雪のやうな白波を起しつゝ水の上を滑つて行く。左舷の空に一かたまりの白雲が現れて、涼しい微風が頰を撫でるやうになつた。

音樂團の一行は六七人であつた。四絃琴(ヴァイオリン)を奏する者と大四絃琴(ヴァイオリンセロ)を奏する者とがある。何れも等しく、肩に垂かゝる長髮を蓄へて、大きな黑襟飾(タイ)をリボンの如く結むでゐる。

何時でも、音樂に素人な私は、何を聽いても、その時の自分の氣分に從つて解釋する癖がある。曲(メロディ)を自分の情緒にあてはめやうとさへ努めるのである。

二年を過した亞米利加を去り、假寓の巴里を後にして、町から町へと旅を續け、越え難い佛蘭西瑞西の國境を越え、終に、數年來憧憬に憧憬を重ねたその人の風貌に接するため、夏の午後湖水を航して行く今の心は、抑へやうとして抑へることの出來ない怪しい緊張に滿ちてゐた。その緊張した心にとつて、不意に始つた甲板の音樂がたゞの音であり得やう筈はない。私は忽ちその、流れるやうな、歔欷するやうな、或は短い、或は長い音曲(メロディ)に、すつかり魂を奪はれてしまつた。憧れるやうな、何かを訴へるやうなその音曲(メロディ)に引込まれて私の心はたゞもう落着かなかつた。浮々としてそのある所を識らずに、私の魂はもう身に添はなかつた。そして自由になつたその魂は、飄々としてその趣くまゝに移り行

き、過去現在未來を問はず時の柵を越え、あらゆる Pathetic な經驗を、（背てした、及これからしやうとする）漠然繪巻のやうに眼の前に擴げたのである。或は又、花野を飛廻るあの夏蜂のやうにさまよひ、私を拉してあらゆる想を味はしたのである。

音樂は今高調に達してゐる。船は相變らず進行を續けてゐる。不思議な旅愁の念が胸を衝く。鄕愁の情が湧上る。不圖又一轉してロオランを想ふ。聞えるやうた憧れが心に溢れる」それに從つて異樣な昂奮が全身を襲はせる。

そのやうな張詰めた心持は直き中斷された。奏樂が止むだからである。樂器を鞄の中に藏込むだ後、彼等は、打連れて船客達に金を乞ひに歩いた。私も他の人に倣つて、その一人が差出した帽子の中へ、一枚の銀貨を投入れた。音樂家達は、ヴェルソワと云ふ所へ船が着きさうになつたので、下りる仕度を始めたからである。

湖水の南岸は、もうこゝへ來ると、佛蘭西である。北岸は瑞西になつてゐる。ヴェルソワは瑞西の岸にある小村である。船が棧橋につくと、音樂家達は、大きな鞄を提げてずんずん陸へ上つて行つた。

瑞西の小村に始めて接した私にとつては、ヴェルソワは中々面白さうに思はれたが、船はすぐ埠頭を離れたので、上つて見る暇もなかつた。たゞ、將にこの水村を去らうとした時、大きな土の壺を持つた若い乙女が、樹蔭の細路から一人現れて、汀に俯して水を汲むでゐたのを、船の上から遠眼に見ただけである。散らしたその金髪は、蒼い湖に俯した時、水に着くかと思ふ程ふさ〳〵として長かつた。その髪に想を殘して、私の船は更に東に進むだ。サヴォワ號は瑞西の岸にばかり寄つて行くのであるから、又そんなものも見えるかも知れない、と自分自身を慰めながら。

再眞中に出ると、湖は、前にも勝つた靜けさであつた。この湖水に有名な、あの如何にも Picturesque なバルクと云ふ帆掛舟が、舟の長さより長い大きな白帆を孕むで、あちこちに散らばつてゐるのもある。雲も大分周圍の山巓から湧出たやうである。

これ等の景色を眺めて、何年かの間、筆を執る各國の文豪達が絕えないのも、まことに無理がないよ思はれる。ルッソオも、この著 La nouvelle Heloïse の場所を湖畔に置いた。スタンダアルも、大作 La Chartreuse de Parme を書く時、

この湖水を用ひた。バイロンもこの湖水に就いて歌つた。ニイチエとワグネルも、その友情が最濃かつた時代をこの湖畔に過した。幾年かレエマンの湖は、さう云ふ天才の群を送り迎へたことであらう。ルツソオを想ひ、バイロンを想ひ、追想は綿々として盡きる時がない。

やがてロオザンヌに着いた。

ロオザンヌは、如何にもその名前が音樂的に響くので、未だ來ないうちから、遠く想像を馳せてゐた所であるが、その最初の瞥見は、兼て思つてゐたとほり快いものであつた。

町は汀から少し引込んだ丘陵の上に位置してゐる。高い教會の塔や、赤屋根の邸宅や、贅澤な別莊なぞが、丘の頂から斜面へかけて、綠蔭の間に散在してゐる。湖畔の棧橋とこの丘陵を繫ぐため、登山鐵道(フイニキユレエル)とアカシアの並木路とが、斜面を登つてゐる。地勢から云へば、この、南に湖水を控へ北に高地を負ふた愛すべき町は、雛段の上に案排された如く存在してゐる。そこに列むでゐる家も、亦雛人形を容れるに適するかと思はれる程清楚で趣味(グウ)に富むでゐるのである。けれども、殘念なことには、十分も經たない中又も船が出てしまつた。再遊を期して埠頭を去る。

そろその雪の山が見えるやうになつた。湖水の東端に近づくと、行手にあたつて、高い山が澤山聳えてゐるためであらう。右手から前方へかけて、恰好のよいサヴオワ及ヴアレイの山脈が連つてゐるし、眼かけて進む正面を仰げば、絕頂を鑿で刻むだやうな Dent du Midi の連峯が、中腹以上、眩い雪を被つて、その秀麗な山容を鏡のやうな湖水に映してゐる。それ等の山は、皆堅い岩壁で、その麓が切立てたやうに湖を限つてゐる。やうやく傾きかけた夕陽を受けて、湖の色が心持褪せ始めると同時に、頂の雪は次第に茜色に輝き、麓の岩もそれに從つて赤く染まうとしてゐる。湖水の東岸が、もう前の方に、模糊の中にもはつきり見えるやうになつた。私の目差して行くヴイルヌウヴはそこにあるのである。

ロオザンヌを出てから後は、北岸の瑞西側の方にも、小高い丘や山なぞが、高低參差として湖畔に連つてゐる。それ等の山は、屏風のやうな岩山でなければ、必ず、なだらかに傾斜した丘陵で、その上に、旅館や展望臺なぞが澤山設

けてある。暫く湖水の上から見渡すと、山腹にかたまつてゐる家の群が、妙に鋸歯状に並むでゐる。屹度それは、そこへ登る路が蛇行してゐるためであらう。さう思つて更によく眺めると、成程、細い一條の路が、二列に並むだ家に挾まれて、左曲右曲しながら上の方へ續いてゐる。小山を過ぎると、又新しい丘を迎へる。その丘を送ると又別なのが眼に映る。景色は絶えず移るが、常に同じやうな眺望である。

黄昏に近付くと、陽が、今日旅立つたジュネエヴの方に傾いて、それ等の丘も、やうやく夕日を受けるやうになる。青空に漂ふ雲も赤くなる。湖水も赤くなる。平な水面に波を起しつゝ、長い痕を曳いて、船は次第に東へ滑つて行く。

忽左手に當つて、湖畔近く、奇異な恰好をした古城が眼界に現れた。案内記ベデカアは、これがバイロンの歌つたChateau de Chillon であると敎へてくれた。その詩 Prisoner of Chillon は、學生時代に馴染になつた所である。自由に憧れた奔放なバイロンは、十六世紀の初葉この城に幽閉されたと稱せられるボニヴアルを追想して、熱烈な憤激を詩の中に洩らしたのである。ションの城は、その後、内部だけは修理を加へられた相だが、形狀は十六世紀當時のまゝに殘つてゐるとのことである。城に關する私の智識はたゞそれだけで、凡て、例のベデカアから出たものである。内部(なか)へ行つて見れば、恐らく又種々(いろいろ)面白いものがあるのであらう。

目的地ヴイルヌウヴは、もう眼の先にある。着いたのは、空が一面に焼けて、湖水に雲の影が明な時であつた。直ぐオテル・ビロンへ急ぐ。

女優志願

正宗白鳥

「從兄さんは大阪の方へ行つてらつしやるんですつてね。新聞に出てましたから、お留守見舞ひをかねて、久振りにお喋舌りしようと思つて上りましたよ」

從姉の上山令夫人のきさ子が、溫室育ちのフリージアの鉢植えを手土産に持つて訪ねて來た時には、あさ子は退屈な所在のない身體を、火の氣のない炬燵に寄せてゐた。

「風邪でもお引きなすつたの」と、きさ子は例になく髮を亂してゐる相手の樣子を見たが、圓く肥つた顏付には病人らしいところが見えないのに安心して、寛ろいだ話の出來るやうに、自分から進んで炬燵の側へ寄つて來て、牡丹の模樣の浮出てゐる厚ぼつたい炬燵蒲團の中へ膝を入れた。

「今日は寒いけれど、考へ事するには都合がいゝから、今朝からかうしてゐたのよ。御馳走に火でも入れませうかね」と、あさ子は大儀さうに立つて、長火鉢の火を炬燵へ移しながら、「昨日も今日も貴女をお訪ねしよう〳〵と思つてゐたのですけれどね、お訪ねすれば貴女にだけ會ふ譯に行かないから、つい氣が進まなくつて」

「姉さんもこの頃はいやに偏屈におなりなすつたのね。上山は暫くお目に掛らないやうですけれど、此家のお噂はよくしてゐますよ。……今度の日曜の上野の演奏會には、上山も出ることになつたのですから、今度は是非姉さんにも聽いて頂きたいと云つて

ゐますの。私がお誘ひしますから、聴いてやつて下さいね」

「えゝ」と、あさ子は氣乘りのしない返事をして、「私ね、この頃は自分でも愛想の盡きるほど無性になつて、そして偏屈になつたのよ。先日大野の旅立を停車場へ見送つた後で、江藤さんの奥さんに誘はれて、帝劇の女優劇を觀に行つたのですがね。見てるといやな氣持になつて、お終ひまで辛抱しきれなかつたんですの」

「今何をやつてるのか知ら?。……帝劇にでも女優には藝の上手な人はそんなにはゐないやうですわね」

「藝の上手下手は私なんかにはよく分らないけれど、舞臺に立つて晒し者のやうになつて、いろんな藝をしてゐるのを見ると、人事ではないやうに思はれて、何だかいやあな氣持になるの」。

「……さう云へばね、姉さん」と、きさ子はふと思出したやうに、事ありげな顔して、「おふくさんが女優になりたがつてるんですつて。私は岩谷さんの奥さんから又聞きしただけだけれど、おふくさんは此間中から北村さんのところへ幾度も出掛けちや、女優として使つて貰へるやうに頼んでるんですつて」

「へえ、おふくさんが女優に?」あさ子は目を丸くして呆れて、「それは本當のことなの?」

「大變熱心なんですつてね。北村さんもはじめは戯談にして取合はなかつたさうですけど、當人の熱心に感動して、親身に世話をする氣になつたのですつて。どうせ何も藝がないのだから、はじめの間は碌な役はつかないでせうけど、あの人は一風變つてるから、勉強次第で案外成功するかも知れませんよ。私おふくさんのためにいゝ事だと思つてよ。これで音樂の方だと人に知られるまでは容易なこつちやないけど、女優だと、ちよつとしたことで當てると、當分人氣の出ることがあるんですからね。おふくさんも今から音樂を習はうと云ふのなら、意見して止めさせたいと思ふけれど、女優なら私勸めて見たいやうな氣がしますよ」

「おふくさんがそんな考へを起す人とは、私少しも思ひませんでしたよ。……あの人にでも矢張り虚榮心があるんだわね」あさ子は、おふくに對してかねてもつてゐた信用を俄かに失つて、「あの人ばかりは違つてゐると思つてゐたのに矢張り駄目なのね。私のやうな無學な者には、音樂家とか俳優とか美術家とかゞどれほど偉いものだか、些とも分らない

のだから、人様に向つて大きな口は利けないんですけどね。大野なんかゞあゝして、高い所に立つて顔を晒して、人様のお慰めにヴアイオリンを弾いたりしてるのを見ると、情けない氣がすることがあるの。私どもは今更商賣替えは出來ないし、身過世過ぎで仕方がないけれど、知り合ひの人でこれから新奇にさういふことをはじめようつて人があつたら、思止まらせたいとつくゞゝ思ひますよ。男でさへさうなのに、女だてら藝術家とか何とか煽てられて、いゝ氣になつて、人樣の前で唄つたり踊つたりして何處が面白いんでせう。私のやうな無學な者にはどうしても分らないわ。それにおふくさんは女優といふで柄もないやうぢやありませんか。大して容色よしつてこともないしね」

「顔は奇麗でなくつても、脊が高くつて目が大きいから、舞臺へ立てば引立つていゝんでせう。どうせ北村さんのお仲間だと新しい芝居をするのだから、素養がなくつても、役によつちやおふくさんにでも勤まるんでせうよ。姉さんのやうなことと云つてゐ　日にやどんな稼業だつて出來やしませんわ。……私ね、この頃大分水彩畫のお稽古に身が入り出したのよ。近日見に來て下さいね。この春には女ばかりの素人の展覽會へ出さうと思つてゐますの。……姉さんもお暇なんだから、繪の稽古でもなすつちやどう?」

「私が水彩畫でも油繪でも書きだしたら隨分滑稽だわね。」

「姉さんは器用だから、私なんかよりは屹度早く上手になりますよ」

「さうでせうとも。煽て賃に何か奢らなきやならないわね」

「おつたさんは和歌が旨いし、材木町の姉さんは琴の名人だし、この上おふくさんが女優になつて、姉さんも繪を習ひなされば、私達の身内は皆んな藝術的な生活をする譯だから、愉快ぢやありませんか。上山は音樂のために生命を亡ぼしても悔ひないと云つてゐますよ」

きさ子は夫から聞かされたり、雜誌で讀んだりして知つてゐる藝術の尊とさを、何時ものやうに得意になつて說立てた。そして、夫がどれほど音樂のために苦心してるかを、言葉を強めて得意になつて說立てた。

「音樂で大家になるのは容易ぢやないのだから、おふくさんも女優にでもなつて身を立てなすつた方がよ御座んすわ。

女優なら、大した才がなくつても、どうかした機會で、パツと人氣の立つ望みがあるんですからね

あさ子は從妹の元氣のいゝ藝術話をも亭主自慢をも、時に取つての座興として素直に聞いてゐたが、おふくのことについては、ます〱厭しさと氣遣はしさを感じて、從妹が口にしてゐるやうに面白ずくで見過してはゐられなかつた。

「そして、從兄さんからはお音信があつて?。彼方では成效していらつしやるでせうか」と、きさ子が話を轉じたが、

「どうですかね」と、あさ子は冷淡に答へた。夫からは一度端書が來たばかりなので、絶えず夫の身の上を案じたり、疑ひを寄せたりしてゐるのであつたが、從妹に向つてそれを明らさまに話す氣にはなれなかつた。

「從兄さんが作曲なすつたそがれの唄はよく賣れるんでせうね。この頃方々であの唄を聞きますよ」

「演奏なんかはしないでも、著物の印税の上り高だけで生活が立つやうだといゝんですけどね。そうしたら何處かでこつそり暮すことにしたいと思つてよ」

「その方が氣樂でいゝかも知れないけれど」

きさ子は、先づ夫婦連れで歐米も漫遊して來て、それから金があつたら、藝術家の住居に相應しい家を郊外に建てゝ藝術家としての理想的な生活をすると、やがてそれが實行の出來さうな口吻で話して、西洋には傑れた藝術家を保護する富豪があるのに、日本の成金は、高尚な音樂なんかの味はへる耳を持つてゐないから駄目だと憤慨したりした。

きさ子がお喋舌りして歸つて行つた後で、あさ子は元のやうに炬燵蒲團に額を當てゝ、旅先へ出てゐる夫の放縱な擧動を想像してはいやな氣持になつてゐた。世の幸福を一人占めにしてゐるやうな從妹の話つ振りには、彼女の心を一層憂鬱にさせたのであつた。二度も出來かゝつた縁談が破れてから、生涯を獨身で通す決心をして、ある宣教師の家へ奉公して、傍ら信仰の道にも志してゐるおふくが、女優にまで成下らうとしてゐるといふ噂は、ことにあさ子の心を暗くした。思切つて性の合はない夫から離れて、おふくのやうに、自分も獨り身になつてひつそり世を送らうかと、平生をりを辿つてゐたので、つい先つきにも、從妹が訪ねて來るまで、その事を考へ事の一つにしてゐたのに、肝心のお手本にしてくれだされては、物足りない思ひがされるのであつた。

「この頃些とも遊びに來ないし、音信もしないと思つたら、そんなことを秘密で企んでるんだもの」と、あさ子は自分のためにも當人のためにも、女優志願を一刻も早く思留らせねばならないと考へて、俄かに元氣づいて炬燵を離れた。

手早く髮を結つて衣服を着替えて、きさ子の持つて來た鉢栽えを提げて家を出て、春らしい日ののどかに照つてゐる午後の街上をせか〱と歩いた。

おふくが身を托してゐる宣教師の家は、霞町の裏通りにあつて、四邊が小瀟洒してゐて閑靜で、滿開の梅などが彼方此方に見られた。潛戸を開けて入ると、庭先には木瓜が可愛らしく芽ぐんでゐた。

訪ねるまでもなく、おふくの姿は直ぐに目についた。廊下の椅子に腰を掛けて、日向ぼつこをしながら、編み物をしてゐた。首垂れてゐる彼女の口から唄聲が洩れて來るので、呼掛けるのを躊躇して、耳を傾けてゐると、唄つてゐるのはあさ子の夫が節をつけたたそがれの唄であつた。「どんな氣持でそんた者を唄つてゐるのか知らん」と、一くさり唄ひ終るのを待つて、側へ寄つて行くと、

「あら、姉さん」と、おふくは振向いて吃驚した顔した。大きな目に涙が一杯溜つてゐた。

「急に思立つて遊びに來たのよ。貴女今お暇なの？」あさ子はさう云ひながら、相手が涙を拭ふまで目を外してゐた。

「よく來て下すつたわね。……この頃は二時から四時までの間は、私の自由になつてるんですから、緩くり遊んでゐて下さいな。」と云つて、おふくが、自分の部屋に案內しようとするのを、あさ子は押留めて、

「家の中よりも此處の方がよ御座んすよ。今日は温かいから」。

おふくもそれを望んで、扉を開けて肱掛椅子を持つて來て、あさ子に與へて、無沙汰の詫び言などしてゐたが、やがて、

「私ね、今日姉さんが來て下すつた譯が、何も仰有らない先にちやんと分つてるやうな氣がしますわ」と、淋しい笑ひを浮べた。

「さう？。機敏ね。……ちや云つて御覽なさい」

「……姉さんは幾度私に意見して下さるおつもりなんでせうけれど、私一生懸命に考へた揚句なのですから—
「それほどの貴女の決心を、私が強いて留めようなんて思つてやしないけれど一應私の考へだけは云つて置かなければ親切が缺けると思つてるのよ」。
「有難う。ぢや、姉さんのお考へを聞かせて下さいな。私今從兄さんがお作りになつた、たそがれの唄を唄つて感動して泣いてゐたところへ、姉さんが意見しに來て下すつたんだから、妙な氣がしますわ。—
「貴女もいやに涙脆くなつたわね」
あさ子はふと夫の唄の力を思ふとゝもに、意見の鋒さきを折られたやうであつた。
「私、女優にならうと決心したのは、誰れにも煽てられたのぢやありませんの。私一人の思付きなのですから、姉さん、笑はないでゐて下さいね。……おきささんでも、おつたさんでも、材木町の姉さんでも、皆んなそれ〴〵に藝があるのに、私ばつかりは何も出來ないで、おまけに他所の家へ奉公して生きてるのですから、皆さんに輕蔑されるのも仕方がないけれど、姉さんだけは晒はないでゐて下さいね。あの藝無しが女優になるなんて身の程を知らんと皆んなが晒つてるでせうけれど」
「人のことはどうでもいゝぢやないの。笑ひたい人には笑はせてお置きなさいよ。……だけど、貴女も皆んなと同じやうに人にチヤホヤされて暮したくなつたの。白粉をつけて黄ろい聲を出して、大勢の前で飛んだり跳ねたりもしたくなつたの。上山さんだつて大野だつて、貴方には羨ましい人間に見えだしたのね」
「さう思つてらつしやるの? 姉さんは。私が上山さんや從兄さんのやうな立派な藝術家の境涯を羨ましがつて、自分もそんなお仲間入りをしたいと、大それた考へを起したと思つてらつしやるの?。いくら私が馬鹿でも、今から女優になつて出世しようなんて思つてやしませんよ」
「ぢや、舞臺へさへ出ればいゝと思つてるんですか。尚いけないわ。貴女が何の何子と番付に書かれて、物好きな人達の噂に上ることゝ考へても、私ゾツとしてよ。このお家で勤めてゐるのがいやになつたのなら、身の振方については—

どうにでも相談に乘つて上げますから、惡いことは云はない。北村さんのお仲間入りすることだけは止めて頂戴な」

「私姉さんにだけは本當のことを云はなければならないか知ら」

おふくは椅子に凭れたまゝ首向いて、暫く口を噤んでゐた。油氣のないバサ〳〵した髮を無器用に束ねて、幾度も水を潜つた地味な銘仙物を着てゐる頸の太いこの女も、此家にゐればこそ懷しいけれど、あさ子は相手の不似合な女優姿を見るに忍びないと思ひながら、暫く口を噤んでゐた。

「本當のことつてどんなこと?。どうせ貴女が決心するには深い考へがあるんでせうね」と、あさ子は皮肉に訊いた。

「私、名譽な稼業だと思つて女優を撰んだのぢやありませんの。姉さんが思つてらつしやるよりも、もつと〳〵幾層倍も卑しい稼業だと思つてゐますわ。世間を離れて一人で神樣に事へて暮すのが、人間として何よりも尊いと思つたればこそ、此家へ來て二年も勤めてゐたのですもの。……だけどね姉さん。神樣はちつとも當てにならないのよ。人間ばかりぢやない、神樣からして當てにならないのよ。いくら此方で慕つたつて、只の一度だつて神樣の方から私を可愛がつて下すつたことはありませんよ。私この頃になつてやうやくそれに氣がつきました。……私が男であつたら、今まで神樣に釣られてゐた仕返しに、お酒も飲むし惡い遊びもするでせうけれど、女だからせい〳〵女優になるくらゐで諦めなきやなりませんの。神樣からお裾分けして下すつた魂の入つてるといふ私の身體を、思切り嬲つてやるつもりなのです」

「なる程貴女は一風變つてるわね」

あさ子はつけ〳〵と云つたおふくの權幕に呆氣に取られてゐた。

「姉さんだからこそこれだけのことでもお話したんですわ」

おふくは昂奮した顏を和らげて椅子を離れて、「お茶でも入れますから、私の部屋へ入らつしやいな」と、先に立つて案内した。

彼女の部屋は薄暗かつた。西洋の繪像が懸つてゐる外には何の裝飾もなかつた。

「ぢや私も今日がこの部屋の見收めね」と、あさ子は、來るたびに何となく、浮世離れた靜さを感じてゐた部屋の中を見廻してゐたが、ふと、戯談のやうに、「おふくさんの代りに私が此處へ置いて貰うか知ら」。

「お止しなさい、此處には私の怨靈が留つてますから。私がこれまでその肖像の前で毎晩何をお祈りしたと思つてゐらしつて」

「……だけどこのマリア樣とかは何時も柔しさうな顏してゐるぢやないの？」あさ子は目を凝して見上げてゐると、手を合せて拜みたいやうな氣持になつた。この敬虔な心のふと現はれてゐるあさ子の目付を、おふくは見のがさないで、

「姉さんにも信心氣があるんですわね」と冷かすやうに云つた。

「私にだつてありますさ」。

「私、姉さんは全くの無信心な人かと思つてゐましたのに」

おふくは紅茶を注ぎながら、自分が神の道へ入る前に、身内の人々に笑はれたことを話して、

「おきさんは御亭主を信心してゐるし、おつたさんは敷島の道を大變なことのやうに信心して入らつしやるし、あの時私の信心を笑へなかつた譯ですわね。……今度の私の決心でも姉さんだけは笑はないでゐて下さいな。私の女優志願は決して藝の道を一ぱしえらい者のやうに崇めて迷つたんぢやないのですから」

「でも貴女は思つたことをやり遂せるだけ、えらいと云へばえらいのね」。

あさ子は危險な道へ入りかけてゐるおふくを說諭する餘裕のないやうに自分の身の上を考へだした。二階の上から洩れて來るピアノの音に、喝采に渇いて晴がましい舞臺で樂を奏してゐる夫の姿を思出させた。

「おふくさんも何時までも、マリア樣を拜んで生きてゐられないですかね」

あさ子は獨言のやうに云つて、再び肖像を仰いだ。



ある抗議書

菊池寛

司法大臣閣下。

少しの御面識もない無名の私から、突然かゝる書狀を、差上げる無禮をお許し下さい。私は大正三年五月廿一日千葉縣千葉町の郊外で、兇惡無殘な强盜の爲に慘殺されました角野一郎夫妻の肉親のもので厶ります。卽ち一郎妻とし子の實弟であります。私の姉夫婦の悲慘な最後は、當時東京の各新聞にも精しく報道されましたから、「千葉町の夫婦殺し」なる事件は、閣下の御記憶の中にも殘つて居ることゝ存じます。私は肉親の姉が受けた悲慘な運命を、回想する度每に、今でも心身を襲ふ戰慄を抑へることは出來ません。人間の女性の中で姉ほどむごい死方、否殺され方をした者はないと思ひますと、私は今でも胸の中がうづくやうに思ひます。私は、當時の色々な記憶を頭の中に浮べることさへ、不快に思はれます。が、私は此の書狀に於て、申上ぐる事の前提として、當時の事を一寸申上げて置かなければなりません。

私の義兄の角野一郎は、大正三年の三月迄東京で雜誌記者を致して居りました。が、その頃固疾の肺がだん／＼惡くなりかけましたので、轉地療養の爲、妻の實家卽ち私の家の所在地なる千葉町へ參つたのであります。そして、私の父母とも相談の上、海に近い郊外に六疊に四疊半に二疊の小さい家を借りまして、そこで病を養ふことにな

つたのであります。私の父母は、今迄東京に住んで居た爲に、月に一二度しか逢ふ機會のなかつた姉が、つい手近に移つて來た爲に、毎日のやうに顔を合はせることが出來るのを非常に欣んで居たやうでありました。殊に養兄の病氣も、夏に向ふに連れて段々快方に向ふやうで、一夏養生を續けたならば健康を快復するだらうと、姉夫婦も私も私達の父母も、愁眉を開いて居たのでありました。が、かうした小康を欣んで居た時、あの怖ろしい運命が姉夫婦を襲ひかけて居たのであります。

忘れも致しません。夫は大正三年の五月廿一日の夜と申しても、正確に云へば、翌廿二日午前の四時頃でありました。私の家の表戸を割れるやうに烈しく亂打するものがありました。私が、驚いて戸を細目に明けますと、警察署の印が付いた提灯が眼に付きました。私は巡査か、でなければ探偵だと思ひましたので、何事が起つたのかと胸をとゞろかせました。が、その男は巡査でもなく探偵でもなく法被を着た警察の小使らしい男なのです。この男は私の戸を開けるのも待たず、息をはづませながら、

「此方は、角野さんの御親類でせう。今角野さんの御宅が大變なのです。直ぐ誰か來て下さるやうに……」と、云ひながら、その男は、スタ〳〵と馳け出さうとしましたので、私は追ひ縋るやうに、

「大變つて、一體何うしたのです。何うしたのです」と、訊き返しました。後から考へますと、小使は姉夫婦が殺されたことは、知つて居たのでしようが、さうした怖ろしい惨事を、自分の口で知らせると云ふ嫌な仕事を避けたのでしよう。

「何でも強盜が、はいつたと云ふ事ですが、私は精しいことは知りません。何しろ、早う來て下さるやうにとの事でした」と、云ひながらドン〳〵歸つて行きました。私は強盜と云ふ言葉を聽くとある怖しい豫感に胸を閉ざされてしまつて、跣足にかすかな慄へをさへ感じました。玄關へ取つて返して來ますと、そこに父と母とが寢衣のまゝに立つて居ました。母はもうスッカリ慄へを帶びた聲で、

「何うしたの〳〵」と、オヅ〳〵訊きました。私が、

「姉さんの家へ強盗が、は入つたんです」と、云ひますと、母は「ひえー」と、云つたまゝ父の肩にすがり付きながら、ガタ〳〵慄ひ出しました。氣丈な父は、道に色も更へずに「走つて行け。直ぐ行け。わしも直ぐ後から行くから」と、申しました。私は慄へる手で、衣服を着換へると、用心の爲に臺所にありました樫の棒を持つて家を馳け出しました。振りかへると、母は最愛の娘を襲つた變事の爲に烈しい激動を受けたらしく、口もろく〳〵利けないやうに目をパチ〳〵させながら、玄關に腰をかけたまゝ慄ひ續けて居たやうでありました。

私の家から、姉の家迄は十五町位隔つて居ました。千葉の町を離れて田圃の中の道を十町ばかり行くと、松林が道の兩側にあつてその松林を過ぎると、姉の家を初め、二三軒の家が並んで居ました。私は、その十五町の道を後で考へれば十分位で馳け付けたと思ひますが、その夜はその歩き馴れた道が何時もの二倍も三倍もの長い道のやうに思はれました。が、私は、姉の家へ急ぎながらも、姉夫婦が殺されたとは、夢にも思ひませんでした。たゞ強盗に襲はれた爲に、氣の弱い姉夫婦が、何んなに強い激動(ショック)を受けたゞらうかと、そればかりが心配でした。殊に、その爲に義兄の病氣が重りはしないかなどゝ心配して居ました。姉夫婦の衣類などの中で目覺(めぼ)しいものは、皆私の家へ預けてありましたから、盜られたとしてもホンの小遣錢位だらうと思ひましたから、その點は、少しも心配いたしませんでした。姉の家に近づくに連れて氣が付くと、姉の家の雨戸が一枚開いて居て、其處から火光が戸外へ洩れて居るのが見えました。私は、姉夫婦が強盗に襲はれた跡仕末をして居るのだと思ひました。私は一刻も早く顔を見せて、姉夫婦に安心させてやらうと思ひまして、勢よく姉の家の門の中へ飛び込みました。すると、いきなり門の中の闇から、

「コラッ誰だつ!」と、云つて聲をかける人がありました。私は強盗でないかと思つて、ハッと身構へをしました。私は、夫でも擬勢を張つて、

「貴樣こそ誰だつ!」と、怒鳴りました。

すると、闇の中から私に近づいて來た烏打を被た男がありました。前と丸切り違つた落着いた聲で、

「千葉署の刑事です。貴君は」と、訊きました。さう聴くと私はホッと安心して、
「さうですか。何うも御苦勞です。私は角野一郎の妻の實弟です」と、云ひました。すると、刑事は、
「それならば、何うかお這入り下さい。が、まだ檢屍が濟んで居ませんから、手を觸れてはいけませんよ」と、申しました。私は、刑事にかう云はれた時、頭から冷水を浴せられたやうにぞつとしました。
「えつ！　檢屍！　誰が殺されたのです、角野ですか、妻ですか」と、私は急き込んで訊きました。
「まあ！　行つて御覽なさい。お氣の毒な事です」と、職業柄、かうした被害者を見馴れて居る刑事さへ、心から同情を表して居るやうでありました。
　私は、心の中で義兄かそれとも姉かと、思ひました。義兄が抵抗した爲に斬られたのであらうと思ひました。肉親に對する私の利己的の愛は、やつぱり被害者が義兄であつて姉でないことを、心私かに祈つて居ました。
　門から、玄關迄は四間位ありました。私は玄關の格子を開けると、
「姉さん」と、呼んで見ました。内からは、寂として何の物音も聞えないのです。その癖、電燈はアカ〳〵と灯つて居るやうなのです。
「兄さん！」と、私は繰り返して見ました。が、やつぱり何の物音も聞えないのです。私は何だか冷めたい悶くるしい物が、咽喉からグン〳〵胸の方へ下つて行つて、胸一杯に擴がるやうに思ひました。格子を持つて居る私の手が、ブルブル顫へた爲でしよう、格子が無氣味に、ガタ〳〵と動きました。私は、障子一枚の向ふに姉夫婦の死骸が横はつて居るのを、マザ〳〵と感じました。私は、必死の覺悟を固めて玄關の障子をあけました。が、その二疊の間には、何の異狀もありませんでした。私は、怖る〳〵次の四疊半の襖を開けました。その四疊半にも何の異狀もありませんでした。が、ふと四疊半と六疊との間の襖が二尺ばかり、開かれて居る間から六疊の間を見ました時、私は思はず「姉さん！」と、悲鳴に似た聲を出しました。夫は、確に姉の足です、敷かれてある布團から斜に疊の上に投げ出されてある色白な二つの足は、姉の兩足に相違ありません。その二つの足を見ると、私は今迄の恐怖を丸切り忘れて、一氣に六疊

の間に馳み込みました。そこで私が如何なる光景を、目撃しましたらうか。その當時から、足掛五年になる只今も、私はその光景を思ひ出す毎に、胸が裂け四肢の戰くやうな、恐ろしさと忿とを感ぜずには居られないのです。

司法大臣閣下。——閣下は、閣下の肉親の方が、兇惡なる人間に慘殺された現場を御覧になつたことがありますか。否少くとも、閣下の肉親の方が他人に依つて慘殺されたと云ふ御經驗をお持ちでしようか。若しかうした經驗がお有りにならなければ、私がその光景に依つて感じた怖ろしさと忿と悲しみとの混じつた名狀しがたい心持は、とても御想像も及ばないだらうと思ひます。

私の姉は、私のたゞ一人の姉のとし子は、ついその前日私を微笑を以て送迎した姉は、髮を振り亂したまゝ布團の上に投げ出されたやうに倒れて居ましたが、その首に捲かれて居る細い紐を見ました時、私の全身は烈しい暴風のやうな怒の爲に、ワナ〳〵と慄へるのを覺えました。私は刑事が手を觸れてはいけないと云ふ言葉も忘れていきなり、姉の頸からその呪ふべき紐を解かずには居られませんでした。姉のあさましい死狀や、烈しい苦悶の跡を止めた死顏の事などは申上げますまい。回想するさへ私には恐ろしいのです。姉のあさましい死體に、私は兩手をかけて、號泣しようと思ひました時、私はふと義兄の安否を思ひました。私が目を上げて室內を見廻すと、椽側へ面する障子が開いて居る事に氣が付きました。丁度六疊間に足だけを置いて、身體の大部分を椽側の上に投げ出して殪そべつて居るのは、義兄に違ひありません。私は、姉の屍體を捨てゝ義兄の方へ馳け寄りました。が、兩手を後手に縛られた義兄は、姉と同じやうに絞殺されたと見え、刳いた眼に死際の苦悶を見せながら、もう全身は冷たくなりかけて居ました。私は、その後手に縛られた兩手を見ました時、腸を切り苛むやうな憤と共に、涙が、——腹の底から湧き出すやうな涙が、潸々として流れ出ました。私は、狂氣のやうに家から飛び出すと其處に居た刑事に、

「誰が殺したのです。犯人は〳〵」と、叫びかけました。刑事には、私が狂亂したやうにも見えたでしよう。私は、まだ右の手から離して居なかつた樫の棒を握りつめながら、此の刑事にでも、飛びかゝりさうな氣勢を示しました。刑事は、眞に氣の毒に思つたのでしよう。

「いやお察し申します。先刻見えました警部さんなども、大變氣の毒がつて居たやうです。非常線を張りましたから、犯人は案外早く上るかも知れません」と、云ひました。が、私は姉夫婦を殺された無念と悲しみとで一刻もぢつとして居れんやうに思ひました。が、何をしてよいのか何う行動してよいのか丸切り夢中で、たゞ異常に興奮するばかりでした。私は息をはづませながら「犯人は強盗ですか、それとも遺恨ですか」と、訊きました。

「いやまだ判りませんが、多分は強盗でしよう。長生郡の強盗と遣口が、同じだとか云つて居ましたよ」と刑事は答へました。私は、さう答へる刑事の職業的な冷淡さが、癪に觸るやうにさへ思ひました。姉夫婦が、悲慘な最後を遂げたのも、つまりは千葉縣警察の怠慢であるやうに思ひまして、私は此の刑事を頭から罵倒してやりたいやうないら／＼した氣持をさへ感じました。その時、私の父は、近所の俥屋を起したと見え網引で馳け付けて來ました。私は、父の顔を見ると、一旦止まつて居た涙が再び流れ出るのを感じました。父は、私の顔を見ると、しやがれた聲で、

「どうだ。おとしには怪我はないか」と、申しました。夫には、子を思ふ親の慈愛が、一杯に溢れて居ました。私は、父の言葉を聽くと、胸が閉がつて言葉が出ないのです。

「何うだい。一郎もおとしも怪我はないのかい」と、訊き直しました。私は、すゝり泣きながら、

「姉さんも兄さんも、やられた」と、云ひました。父は遉に聲を立てませんでした。老眼をしばたゝきながら、默つて家の中へは入つて行きました。私が父の後から引返して見ますと、父は姉の死體を半ば抱き起しながら、

「おとし／＼」と、背中を力強く叩いて居りました。が、そんな事で姉が蘇る筈もありませんでした。父は、姉の死體を放すと義兄の死體を抱き上げながら、

「一郎／＼」と、同じやうに背中を叩いて見ました。が、兄の唇はもう紫色に變つて居ました。父は、スゴ／＼と立ち上ると老顔をしばゝきながら、

「おのれ！酷いことをしやがる。酷いことをしやがる」と、云ふかと思ふと、痩せた右の手の甲で老顔を幾度も／＼こすりました。私は父の悲憤を眼にしますと、再び胸の裡が湧き返るやうな激怒を感じました。

「俺は、諦めるが、お信は何う思ふだらう」と云ひました。そう云ふのを聴くと、私は家に殘つて最愛の娘の安否を氣遣つて居る老年の母を思はずには居られませんでした。母がどんなに姉を愛して居るかを、知つて居る私は此の慘事の報道が母に對して何れほど、致命的であるかを考へずには居られませんでした。父は、姉と義兄との死體を等分に見て居ましたが、

「夫婦二人揃つて、殺されるなんて、何と云ふ因果な事か……」と、云ふかと思ふと無念に堪へられないやうに齒噛みをいたしたやうでありました。丁度、その時に戸外に、數臺の車の音がしたかと思ふと、先刻の刑事がは入つて來て、

「今豫審判事が出張になりました」と、云ひました。私は、夫でも豫審判事が來たことを頼もしい事のやうに思ひました。その人達の手に依つて此の兇惡な犯人が一日も早く捕はれることを祈らずには居られませんでした。

夫から後のことは、簡單に申し上げましよう。私達は、尙、姉のあさましい死を、姉を何物にもまして愛して居た母に告げると云ふ、心苦しい仕事をしなければなりませんでした。夫を聽いた時の母の狂亂に近い悲痛の有様は、今でも何んなに精しくでも申上げることが出來ます。父は、母が必死に賴むにも拘はらず、姉夫婦が慘死の現場へは、母を行かせませんでした。棺に收めた姉の死體に對し、僅かな名殘りを惜しませた丈でありました。

母は、姉の非業の死を聞いてから、三日の間は一食も咽喉を通らない程でありました。その時は、丁度六十一でありましたが、元來瘠せて居た身體は、僅か二三日の中に、ゲツソリと衰へ、たゞ二つの大きに眼だけが狂人のそれのやうに血走つて、絶えず不安な動き方をいたして居りました。夜も娘の死を思ふて、易々とは寢付かれないと見えまして、ウトウトとしたかと思ふと、「おとし〳〵」と、叫んで、狂氣のやうに跳ね起きて布團の上に端座して、何やらブツ〳〵と申すかと思ふと、又さめ〴〵と泣き伏すのでありました。

姉が病氣で死にましたならば、いくら氣の弱い母でも、之ほどの悲嘆には暮れなかつたのでありましようが、夫婦諸共兇猛な强盜の爲に慘殺されたと云ふ恐ろしい激動は、母には堪へられなかつたのでありませう。その事件があつて以來、ボンヤリとしてしまつて日に衰へて行つたやうであります。

姉の頸に纒ひ付いて居た細紐を見、義兄の後手に縛られた兩手を見た時に、私は犯人の肝を喰はねば滿足しないやうな烈しい憎惡を感ぜずには居られませんでした。私は、犯人が捕まつたら、最先に馳け付けて行つて、思ふ存分踏みにじつて姉と義兄との無念を晴してやりたいと思ひました。私は、昔の人間が肉親を殺された場合、敵打に出でゝ幾年もの艱苦を忍ぶ心持が充分に解つたやうに思ひました。私は、今でも復讐が許されるならば、土に喰い付いても犯人を探し出して、姉の無念を晴したいと思はずには居られませんでした。若し、姉夫婦の殺された原因が、遺恨だとか痴どでありましたら、夫は姉夫婦にも何等かの點に於て、少しは責任があることですから、私の無念は之程でも憫ななかつたでしようが、殺された原因が、全く強盗の爲であつて、その兇漢は罪も怨もない姉夫婦の命を、何の必要もないのに、不當に非道に、蹂み躙つたものであることを知つてからは、私達の無念は二倍にも三倍にも深められぬ譯には行きませんでした。殊に、その夜張つた非常線が、何の效果もなく三日經つても五日經つても犯人の手懸りが、少しも無いのを知ると、私は警察の活動が、愈々まだるつこいやうに思はれて、ぢつとして居られないやうないら〳〵した心持に、ならずには居られませんでした。

父は遉に心の裡の悲憤を口には出しませんでしたが、母はよく口癖のやうに、「おとしの敵はまだ捕まらんのか」と、申して居りました。が、私達の一家が、一日も早く犯人の捕はれることを祈つて居りましたにも拘はらず、一月と經ち二月と經つ間、警察からは何の音沙汰もありませんでした。その中に、警察の方でも、新しい事件が起れば、その方へも力を割くと云ふ譯で、時日の經つと云ふことは犯人逮捕の可能性を段々、少くして居るやうでありました。私は、待ち遠いやうな心に驅られて、時々知り合の警部の家を尋ねました。警部は私の顔を見ると、一寸氣の毒さうな顔をしながら、「もう少し待つて下さい。之が遺恨などの殺人でなく強盗丈に、一寸擧りにくいのですが、なあに、その中に貴君方の御無念を晴して上げますから。今年中には、乾度です。東京の警視廳へも、よく賴んでありますから」と、申しました。それは、姉が殺されてから、三四月を經たその年の十月頃でした。私は今年中には必ず逮捕してやると云ふ警部の言質

を、せめての慰とし、母に傳へて居たのであります。

所が、その年も押しつまつた十二月の半ばでした。姉の遭難以來、生きた屍骸のやうになつて居ました母は、胃臓炎を起して僅か四日か五日かの病ひで倒れてしまひました。姉が、生きて居ましたら、まだ三年や四年は生き延びたゞらうと思ひますに付けても、私は姉夫婦を殺した强盗は、同時に私の母の生命をも縮めて行つたのだと、思はずには居られませんでした。私は、名も知らぬ顔も知らぬその獸の如き人間に對して、更に倍加した憎惡と恨みとを持たずには居られませんでした。

母は、死際にまで姉の事を、クド／＼と申して居りました。

「まあ可愛相な事ぢや。夫婦揃ふて殺されるなんて、あの子はよつぽど不幸せな子ぢや」と申して泣くかと思ひますと、

「えゝ憎い畜生め！ようもおとしを殺したな」と、申して怒り罵りました。そして、口癖のやうに、

「まだ捕まらんのかな。人を殺した人間が、大手を振つて歩いて居るとは神さまも佛さまもないのかな」と、恨んで居ましたが、又諦めたやうに、

「まあ！えいわ。あんな極惡な人間は、此世では捕まらんでも、死んだら地獄へ落ちるのぢや。地獄で、ひどい目に逢ふのぢや」と、申して居りました。かうして、母は、娘を殺された恨みと悲しみとに悶えながら、十二月の廿日でしたか、最愛の娘の後を追ふて死んでしまひました。犯行の表面では、姉夫婦丈が殺されたことになつて居ますが、私は母もその同じ犯人に慘殺されたものだと云ふ感銘を受けずには居られません。母と姉とを非道に殺された私と父とは、不快なあさましい記憶から絶えず心を苛なまれながら、怏々としてその日／＼を暮して居りました。「千葉町の夫婦殺し」と云ふ題目も、段々世間からばかりでなく、警察當局者の記憶からも薄れて行つたと見え、犯人捜索に就いての消息なども、新聞紙上に一行も出ないやうになりました。私と父とは、段々心細く思はずには居られませんでした。夫と共に、かゝる兇惡無殘な惡徒を、逮捕し得ざる警察を呪ひ、またかゝる惡徒の横行濶歩して居る世の中が嫌になりまし

た。

所が、時運到來と申すのでムいませうか。大正五年の十月でした。犯人坂下鶴吉は――私は、その時初て姉を殺した兇惡な人間の名前を知りました――警視廳の手に依つて逮捕されました。何でも擧動不審の爲に拘引されたのですが、訊問の結果、多くの兇行を自白しました。その多くの兇行の中でも、私の姉を殺した事件が、丁度烏の黒い身體の中でも、その兇惡な眼が一番怪しい光を放つやうに、あの事件が一番恐ろしい光彩を放つて居ました。「千葉町夫婦殺しの犯人捕はる」と、各新聞紙は報道しましたが、彼は此の事件ばかりの犯人ではありませんでした。新聞紙の報ずる丈でも、彼は十指に餘る人間の命を絶ち、多くの子女の貞操を蹂躙し、數多の良民をして無念の涙に咽ばせて居るのでした。

父は、犯人逮捕の通知を、警察署から受けると久し振りに晴々しく笑ひました。そして、「之でおとしも、お信も浮ばれるわい」と、申して非業に倒れた娘と、悲嘆に死した妻とを弔ふて居ました。その夜は、佛壇に燈明を灯して、姉と母との靈に、犯人逮捕の欣びを告げました。

私は、初て現代の日本の警察制度に感謝しました。そして、天網疎にして洩さずと云ふ古い言葉にも、深い人間の世の攝理を知つたやうに思ひました。

私達が坂下鶴吉の公判の經過に至大の注意を拂つたのは、勿論でありました。が、道に恐ろしい惡黨である丈に、諦めもよいと見え、地方裁判所で死刑の宣告を受けると、控訴もしないで、大人しく服罪しました。その判決のある日でありました。私は、私達の一家の運命に、殘虐な打撃を與へたその男の顏を、一目見たいと思つて、わざ／＼傍聽に參りました。

あの公判廷の被告箱の中に、傲然として屹立して居るその男を見ました時、私は姉夫婦の慘死の光景を見た時と同じやうな戰慄を感ぜずには居られませんでした。骨組の如何にも逞しい身體、眼は血走つて眉毛は飽く迄も濃く、獰惡な大きな低い鼻と云ひ、太く横に走つた唇と云ひ、人間の獰猛な獸性が、身體全體に溢れて居るやうな男でありました。

こんな男の手にかゝつては、あのかよはい姉夫婦が一溜りもなかつたのも無理はないと思ひました。

が、遉に獰惡らしい此の男も、裁判長の嚴かな死刑の云ひ渡しを受けると、顔の色をサツと易へて、頭を低くうなだれました。私は、正當な刑罰が、否彼の犯した罪惡に比ぶれば輕過るが、然し現在の刑法では極刑に當る刑罰が宣告され、その男が刑罰に對する相當な恐怖を感じた時、私は初て私の限りなき憤忿の心が和げられたのを感じました。が、私の本當の感情から云へば、まだ〳〵之位の事では、私の憤や恨は充分に晴されたとは思ひ出しませんでした。

私は死刑と云ふことが、かゝる場合に充分な刑罰であるか、何うかを考へて見ました。此の坂下鶴吉は、私の姉夫婦を加へて、丁度九人の人間の命を奪つて居ます。が、彼が奪つて居るものは單に九人の被害者の生命だけではありません。私の姉が殺されたに付いて、私の母が怖ろしい精神上の打撃を受けた如く、他の八人の被害者の父なり母なり兄弟なり姉妹なりが同じやうに怖ろしい打撃を受けて居るに相違ありません。九人の被害者の爲には、四十人五十人の肉親の者が、親なり子なり兄弟なり姉妹なりを殺された無念の涙に咽せんで居る筈です。生命を奪はれると云ふことも人生の悲慘事には相違ありません。が、肉親の父なり母なり子なり兄弟姉妹なりを、何の罪なくして絞殺され斬殺されるのを見、夫から受けた怖ろしい激動を、生涯持ち續けて行くと云ふことも、同樣に人生の悲慘事であります。殺人の場合、被害者は單に殺された當人丈ではありません。その被害者の親なり子なり兄弟なり姉妹なりは命こそ奪はれないが、精神的には、恐ろしい打撃を受けるのです。坂下鶴吉が殺したのは、僅か九人かも知れません。が、彼の兇悪な所業の爲に苦しんで居るのは、私達親子の者ばかりではありますまい。さうした點から、考へて行くと、死刑などゝ云ふことは輕すぎる位、輕いと思ひます。九つの命と一つの命。私は數學的な數の點から丈云ふのではありません。坂下鶴吉が宣告の日から、處刑の日迄、獄中でどんなに苦悶しても、彼の爲に苦しんで居る數多くの人達の感情の十分の一をも償ふことは出來ますまい。殊に、不當に絞殺され不當に斬殺された被害者達の末期の無念と苦悶との百分の一をも償ふには足りますまい。從つて私は、坂下鶴吉の如き重惡人に、死刑以上の刑罰を課し得ないと云ふが如きは、司法制度に於ける文明主義の缺陷でないかとさへ思ふのです。何等の理由もなく、責任もなく、何等の豫期もなく、不當に不意に强

盜に慘殺される被害者の斷末魔のやるせない心外さ、限りなき苦痛、燃ゆるやうな無念を考ふれば、死刑囚の苦しみの如き、餘りに輕すぎると思ひます。自分の犯せる罪惡の爲に、殺されるのですもの、其處には充分の諦めも付き、覺悟も定まるだらうと思ひます。

が、現代の刑法の下には、私達は坂下鶴吉の死刑を以て、滿足せざるを得なかつたのであります。從つて、私は死刑囚の苦痛と云ふことを色々に、想像してやつと姉夫婦の慘死に對する無念を晴すことにして居りました。

どんなに兇惡な人間でも、國家の鐵の如き腕に依つて禁獄され、不可抗力の死を宣告され、否やでも應でも死に對する覺悟を定めなければならぬ恐怖と苦痛とを想像したり、又日一日と處刑の日が近づくにつれ、生に對する執着が却つて段々強くなり、必至の運命から逃れんとする無益な然しながら懸命の身悶へなどを考へると、私は姉夫婦の横死以來鬱積して居た悲憤を漸く洩すことが出來ました。

殊に、毎朝々々、今日は死刑の執行される日ではないかと、怖れをのゝく心持、執行の手續をする爲に何時看守が監房の扉を開きはしないかと期待する恐ろしい不安などを考へると、たとへ充分とは云へない迄も、ある程度迄は姉達の無念が償はれると、思ふやうになつて居ました。

さうして居る裡に坂下鶴吉が死刑を宣告されてから、半年も經つたでせう。私はある朝新聞で、「夫婦殺し犯人處刑」と云ふ三號表題の記事に依つて、愈々坂下鶴吉が此の世界から驅逐されたことを知りました。私は長い間の緊張から逃れたやうに、安易なホッとした心持を感ずると共に、此の惡人に對しても、僅かな憐憫の情を催さないこともありませんでした。

私は之で萬事了つたと思ひました。私の心を長い間苦しめた憎惡の心も復讐の心も全く取拂はれて、私は普通の人間と同じやうになだらかな平和な心持を持つことが出來るやうになりました。私は、再び現在の司法制度なり刑法なりに對し、ある感謝の心持を懐かずには居られませんでした。

司法大臣閣下。

若し事件が此の儘で終つたならば、私はかゝる書狀を閣下に呈出する必要は少しもなかつたのであります。

所が坂下鶴吉が處刑されてから一年も經つた此の頃であります。私は新聞の廣告に依つて、ふと「坂下鶴吉の告白」なる一書が、ある辯護士の助力に依つて、上梓されたのを知りました。私は、坂下鶴吉なる人間の痕跡が世の中に公々然と發表されることが少し不快でありました。被害者の多くが彼の兇惡なる打擊に依つて、世の中から永劫に葬られ、墓穴の下に默々たる無名の骨を朽ちさせて居るのにも拘はらず、坂下鶴吉の告白なるものが兎に角にも書冊の形式に依つて公表され。彼が如何なる形式に於ても彼の思想を披瀝し得ると云ふことは、私にとつては可なり不當のやうに思はれましたが、そんなことは何でもありません。私は「坂下鶴吉の告白」なるものを、讀むに當つて、私は國家の刑罰なるものが、此の男に依つてその效果を蹂躪され、彼は彼自身に適はしい恥多き苦しみ多き刑死を遂ぐる代りに、欣びに溢れ光榮に輝き凱旋的に此の世を去つたことを知つて、私は憤忿の念に堪へないのであります。

彼の手にかゝつた被害者の凡てが、無念の中に悲憤の中に、もだえ死、もがき死んだにも拘はらず、彼坂下鶴吉は、欣々然として絞首臺上に立ち、國家の刑罰そのものに對して何等の恐怖を示さず、何等の羞恥をも示さず、自若として死んだことを知つて私は實に憤忿の念に堪へないのであります。然かも典獄なる人迄がその最後の情景を敍べて「罪の重荷を投げ下して戀しき故鄉に旅立ち歸る心持にて、喜色滿面勇み立つたその姿は、坐ろに立會の官吏達を感歎せしめざるはなかつたと申します」云々と、まるで決死隊の勇士を送るやうな讃嘆の言葉を洩して居ます。若しも私の義兄の角野一郎、此の坂下鶴吉に後手に縛り上げられ、絞殺されてもがき死んだ私の義兄の角野一郎が、此の處刑の情景を見たらば何と申しませう。自分の目前で夫を絞め殺され、相次いで自分自身を絞め殺された私の姉が、此の情景を見たら何と申しませう。彼等を殺した惡人が、彼等よりも十倍も百倍も幸福な死を國家の看視の下に遂げて居ることを知つたら何と申しませう。こんな不公平な不合理な處罰が世の中にあるでせうか。

若しも、坂下鶴吉の欣々然たる最後が、――國家の刑罰に對して何の恐怖をも感じない態度が、彼の惡人としての根性から自發的に出たものならば、私は何とも申しません。九人の人間を殺しながら、欣然として絞首臺上に立ち得るやう

な恐ろしい人間に姉夫婦が殺されたことを、不幸中の不幸と諦める外はありません。が、坂下鶴吉のかゝる態度は彼の自發的のものではなくして、彼が在監中キリスト教に改宗した結果なのであります。私は、今玆でキリスト教そのものに對して、何の非難をするのではありません。キリスト教が罪人の教化に努めやうとすることは、當然なことかも知れませんが、キリスト教の感化が、本當に効果を示して坂下鶴吉の場合の如く、絞首臺に上ることを天國へ行く梯子段にでも上るやうになつては、夫で刑罰の目的が達せられるでしようか。世の中に於て、多くの人間を殺し、多くの婦女を辱しめた惡人が、監獄には入ると、キリスト教の感化を受け、死の苦悶を少しも感ぜず、天國へでも行く心持で、易々と死んで行つては、刑罰の効果は何處にあるのです。キリスト教にとつては、如何にも本懐の至りかも知れませんが、その男に依つて、殺され辱しめられた多くの男女、若しくは私の如き遺族の無念は何處で晴らされるのです。幸にして凡ての被害者やその遺族が悉く基督教徒であり、左の頰を打たれた時には右の頰を出すやうな人や、敵を愛し得るやうな人であれば坂下鶴吉の改宗を欣び、彼の欣々然たる死刑を欣んだでせうが、私の如く姉夫婦を鷄か何かのやうに慘殺され、母までをその爲に失つたものに取つては、坂下鶴吉が刑罰の効果を適當に受けることは、内心の絶對な要求であります。私は國家の善良な臣民としてその事を、要求する權利があると思ひます。刑罰の効果が、宗教的感化に依つて薄弱となつては堪らないと思ひます。世の中に「死ぬ者貧乏」と云ふ諺があります。坂下鶴吉の殺した人達は、私の知る限りでは、國家の良民であります。然るに、被害者なり被害者の遺族なりが國家の手に依つて毫頭慰藉を受けて居ないのにも拘らず、惡人でも、坂下鶴吉の如き惡人でも生きて居る者には、宣教師との接見を許し、その改宗を奬勵し、死刑の精神上に及ぼす効果を緩和してやると云ふことは甚だ不當な片手落なことだと考へずには居られません。坂下鶴吉は、その告白の中で、こんな事を申して居ります。「私は今日では、有難い事には主イエスキリストの御慈愛に依りてこの身も心も共に救はれた爲に、今日の監獄生活は他の在監者が日々夜々煩悶に苦痛を重ねて、心の中では男泣きに涙を流して居りますが、私はそれと反對で日々夜々何一つの不安をも感ぜず、喜は溢るゝばかりでムいます。これと申しますのも、前に申しました通り他人樣から御覽下されば、何も有せざるに似たれども凡ての物を有するのでムいまする。

そこで私達が造つた品物や金錢は使へば無くなりますに依つて、限りがありますが、神樣から私は頂きました凡ての物がありますから、如何程澤山に使ひましても、それは無くなると云ふことはなく無限でありまする。以上申述べましたのは、私の肉體上の生死を述べたのではございません。肉體の生死と云ふことは今日では頭に置きませぬ」と、又かうも申して居ります。「基督教信者は神樣より外のものは、如何なるものにても、恐れませんのは、私がたゞ口實を以て申すのではございませぬ。マタイ傳に『身を殺して魂を殺すこと能はざる者を懼るゝ勿れ』と、あります。之が確かな宣言でございまする。」

以上、坂下鶴吉の言葉に依りますと、彼は監獄に在つてキリスト教の信仰を得た爲に、彼の强盜時代よりも、もつと幸福に暮したやうであります。そして、死刑を少しも恐れて居ないことは、「身を殺して魂を殺すこと能はざる者を懼る勿れ」と、申して居ることで明かであります。若國家の監獄が基督教の修道院でありますれば、之で結構であるかも知れませんが、監獄が國家の刑罰の機關である以上、監獄に繋ぎながら、囚人を彼等の罪惡時代よりも幸福にし、刑法上の極刑たる死刑を、「身を殺して魂を殺し得ざるものとして」何等の威力なからしめて、夫で監獄の目的死刑の威力が發揮せられるでせうか。

私は、よくは解りませんが、ある法學者から刑罰の目的に就いては、相對主義と絶對主義と、一つあるのだと云ふやうな事を聞いたことがありますが、キリスト教の信仰さへ得れば監獄も幸福に、死刑も懼るに足らずと云ふことになつても、刑罰の目的は立派に達せられて居るのでせうか。又囚人が幸福に禁獄され欣々然として處刑されると云ふやうな心持を、典獄なる職務にある人が讃美しても差支へないものでせうか。禁獄とか死刑とか云ふ現世的な刑罰が、宗教の信仰に依つてその効果を滅茶滅茶にされて居るにも拘はらず、その現世的刑罰の執行機關に長たるものが感賞の言葉を洩してもよいものでせうか。「坂下鶴吉の告白」なる本に依りますと、典獄とか檢事とか云ふ連中が、坂下鶴吉の信仰を獲たことを宛も猫が鼠を取つたのを賞めるやうに、賞めそやして居ります。國家の刑罰なるものは、肉體にさへ課すれば、その囚人が心の中ではその刑罰を馬鹿にして居やうが欣んで居やうが、措いて問はないものでせうか。犯罪なる

ものが、被害者の肉體のみならず、精神をもどんなに苦しめるかを考へたならば、囚人が刑罰の爲に肉體的にも精神的にも苦しむと云ふことは、至當なことではないかと思ひます。私の如き遺族の數多くが肉親を殺された爲に悶々の苦しみに苦しんで居るのにも拘はらず、その加害者が監獄の中でも幸福な生涯を送り、絞首臺上に欣々然として立つたことを、典獄迄が讃美するに至つては被害者なり被害者の遺族なりは一體何う思へばよいのでせうか。

殊に、此の書の中に、「看守と巡査とに說教」なる一項があります。キリスト教の立場から云へば會心のことかも知れませんが、國家の刑罰機關の役員が、刑罰の客體から、說教を受けるなどに至つては、寧ろ醜體ではありますまいか。

坂下鶴吉が、國家の刑罰を受けて惡人に適はしい最後を遂げたゞらうと、想像することに依つて、僅かな慰めを受けて居た私は、此の告白を讀んで、自分の感情を散々に傷けられてしまひました。姉夫婦の恨みや、私達遺族の無念は何處に晴されて居るのでせうか。刑罰の目的に就ての學說は何うか知りませんが、私達の復讐心が、國家の刑罰機關の活動に依り、正當に適法に充たされることだと信賴して居た私達良民の期待は、全く裏切られてしまひました。私の姉夫婦を慘殺した人間は笑つて絞首臺の上に立つて居るのです。懺悔をして居るのだ、許してやつては何うかと云ふ人があるかも知れませんが、私は基督教徒(クリスチャン)でありません。殊に坂下鶴吉の如き惡人を許せよなど云ふ人は、未だ自分の親愛なる人間を、强盜に依つて慘殺された經驗のない人です。自分の肉親の姉が、虛空を摑み、目を刳き舌を嚙み、衣服もあらはに慘殺された現場を見た私に取つて、その兇惡な下手人を許すなどゝ云ふことは、夢にも思はれない事です。愛も仁もない劣等な人間だと云はれても平氣です。私は姉の無念が、又自分の無念が正當に晴されることを、良民の一人として國家に要求する權利があると思ふのです。若しも坂下鶴吉が、國家の手に依つて、あんな安易な氣樂な死を遂げるのであつたならば、私は外にもつと決心があつたと思ひます。私は、彼を公判廷で瞥見した時に、彼を倒さないまでも、セメて恨みの一擊を與へなかつたことを今更痛切に後悔します。

私が、此の告白を讀んだ時に、最初は「坂下鶴吉の奴め、芝居をやるのだな」と、思ひました。もうどうせ、死刑は免れないのだから、全く改心して基督教徒になつたやうな顏をして、典獄はじめ周圍の同情を得て、華々しく死刑にな

つたのではないかと思ひました。

此の告白に依ると、此の坂下鶴吉は、一度千葉の監獄で、善行の結果殘りの刑期を免除されて放免になつたと書いてあります。而も、善行の結果、刑期を短縮された坂下鶴吉は、放免になつてから九人の人間を殺して居るのです。千葉監獄の典獄が、此の男の善行を認めなかつたならば、私の姉などは少くともまだ世の中に生きて居られた筈です。善行に依つて、殘りの刑期を免除された男が、出獄後直ちに罪を犯したばかりではなく、僅か六ケ月の間を置いて、私の姉夫婦を殺したのです。坂下鶴吉は、その夜のことを次の樣に申して居ります。廿一日の夜ある家へ忍び込みて、家人を縛りまして、妻君に金を出せと脅迫いたして居りますと、主人が盜賊（どろぼう）〳〵と、大聲を發しますから、隣の人に聞えては惡いと思ひまして、その場にあり合せたる手拭にて首を締めるのを、妻君が見て居りまして、妻君が精一杯の大聲を發して人殺しと呼びましたから、又其の場に在り合はせたる細帶にて遂に二人共殺してしまひました。目の前に夫が、締め殺されるのを見て居る妻君の心持は何んなに恐ろしく思はれたでせう」と、呑氣な事を書いてあります。此の犯行の後を見ますと此の男に人間らしい處が、何處にあるのです。而かも、此の男でも、監獄では善行を爲し得るのです。私は、かうした男の刑期を、監獄内の善行なるものに依つて、短縮した當局者の不明を痛嘆するものですが、然しそれはそれとして置いて、坂下鶴吉の善行がこの程度の善行であつた如く、彼の監獄内の信仰なるものも、やつぱりかうした種類の信仰ではなかつたかと思ふのです。彼が、善行遊戲（ごつこ）をして、千葉監獄を、まんまと放免されたやうに、今度はとても免れないと見積つて、信仰遊戲（ごつこ）をして、周圍からやんやと喝采を受けながら、死んだのではないかと思ふのです。坂下鶴吉の善行なるものが、如何なるものであつたかは、直ぐ正體を現したのですが、今度は彼と一緒に天國若しくは地獄へ同伴するものがない丈に、彼のヤマは以前よりも、もつと成功したと思ひます。彼の信仰を、ゴマカシと見、絞首臺上で欣々然たる容子をしながら、その實は差し迫る死の前に戰慄したゞらうと想像することが、私のセメてもの慰めです。

が、佛教にも惡人成佛と云ふ言葉があるやうに、彼坂下鶴吉が、背負ひ切れぬ罪惡を背負つて居たことは、却つて眞

の信仰を得る機縁であつたかも知れぬと思ひます。従つて、私は坂下鶴吉の信仰を、心から全然輕蔑することは出來ないのです。彼は、彼の告白する通り、本當の基督教徒となり、基督教徒の信ずるが如く神の手に迎へられて、天國へ行つたかも知れないとも思ふのです。彼坂下鶴吉の信仰が本當のものだとすれば、彼自身「人の世の罪の汚れを淨めつゝ神のみ國へ急ぐ樂しさ」と、辭世に述べてある如く、天國へ行ける積であつたと思ふのです。

基督教の教義を眞實とし、坂下鶴吉の信仰を眞實のものだとする時は、坂下鶴吉は、明かに天國へ行つて居るのに違ひありません。が、坂下鶴吉は天國へ行つたとして、彼の被害者は、何處へ行つたでしよう。

私の義兄にしろ、姉にしろ、平常から何の信仰も持つて居ません。また縱令、如何なる信仰を持つて居たにしろ、突差に生命を奪はれた、死際の刹那を苦悶と忿怒との思で魂を攪したものが極樂なり天國なりへ行かれやうとは、思はれません。よくは、知りませんが、基督教では死際の懺悔を、非常に大切なものだとされて居るさうですが、姉夫婦の如く虐殺されては懺悔どころか、後生を願ふ心も、神を求める心も影だに射さなかつたと思ひます。殺される刹那の心は、修羅の心です。地獄の思です。若し、基督教の教義が本當なれば、地獄の底に陷ちるより外はなかつたと思ひます。姉夫婦ばかりではありますまい。彼の爲に、殺された他の七人の人達も、その人達の信仰は兎も角、死際の苦惱の爲に天國なり、極樂なりへは、決して行かれなかつたと思ひます。然るに、彼等の生命を奪つたばかりではなく、その魂をさへ地獄へ墮した筈の坂下鶴吉は、さうした罪惡を犯した事が却つて懺悔の材料となり、天國へ行けると云ふことは、少くとも私にとつては奇怪至極な理屈のやうに思はれます。まるで、坂下鶴吉に殺された者が、脚臺になつて此の惡人を——基督教的には聖徒を、天國へ昇せてやつて居るやうではありませんか。基督教徒が、彼等の教斤の爲にどんな事をしやうが、夫は彼等の勝手で、彼等の方には充分な理屈があるかも知れませんが、現世的な刑罰機關の長たる典獄迄が、その便宜を計り、夫を奬勵するに至つては、被害者達の魂は浮ばれやうもないではありませんか。

昔、ある伊太利人は「愚人聖職に上り、ガリレオ獄中に在り」と云つて咏嘆したさうでありますが、若しも天國の存在が本當だとすれば、「加害者天國に在り、被害者地獄に在り」です。宗教の立場から云へば、現世的な法律的な區別は、

何うでもいゝのでせうが、國家の司法當局が、その現世的な職務を忘れ、「加害者を天國に送る」事を奬勵し、讃美するに至つては、私の如き被害者の遺族は、憤懣に堪へないのであります。

況んや、その信仰の告白を發表し、國家の刑罰機關の效果が、キリスト敎の信仰によつて蹂躪されたことを公表し、併せて被害者の遺族の感情を傷くることを許すに至つては司法政策の上から考へても如何なものでムいせうか「刑罰の目的は改過遷善に在り」など云ふ死刑廢止論者などは、自分の妻なり子なりを强盜にでも殺されて見れば、私の憤慨がどんなに自然であり、正當であるかを了解するだらうと思ひます。

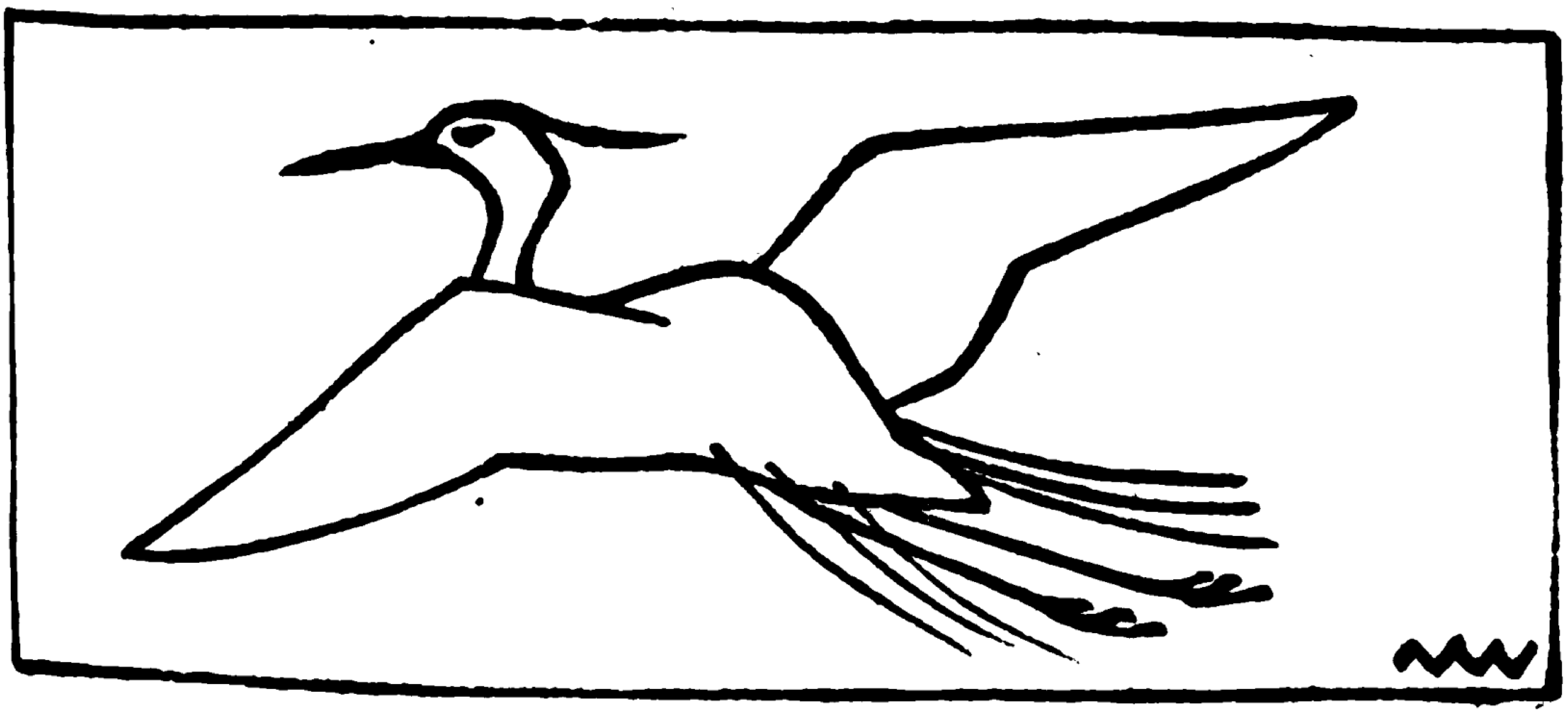
私は、此の書狀を了るに當つて、はしなくも坂下鶴吉の逮捕を見ずして、娘を殺された悲しみに倒れた私の母の事を想ひ出しました。母は、死際に「あんな極惡な人間は、此世では捕まらんでも、死んだら地獄へ落ちるのぢや。地獄で、ひどい目に逢ふのぢや」と、申して居りましたが、母の考へなどゝは丸切り違つて、坂下鶴吉氏は（典獄や辯護士などはかう呼んで居る以上、どんな極惡人でも改心した以上罪人扱ひには出來ないのかも知れません）此世では捕まつた代りに、先きの世では天國へ行つたことになつて居ます。私は、母の愚かな期待を思ひ出す毎に、彼女の無智を憫む潸々たる涙を抑へることは出來ません。

寓話二つ

佐藤春夫

形影問答

1



『見知らない筈だ、私は月から來た者だから。』

と、その見知らない、青ざめた額の人が、私にむかつてさう言つた。

『私は月から、この哀れな星へ、君たちが地球と呼んでゐる星へ來た。』

『月から？　あなたも追放されたのですか？』

『追放？　いやいや私は派遣されたのだ。』

私は、そこで、おどろいて彼に尋ねた。

『一たい、何んのためにです。』

『私は來た、二つの目的をもつて。私の故鄕、切ない故鄕、月といふものが、外の星から見るときに、どんなに見えるか？　といふことを報告する通信員として、それからまた孤獨と退屈との研究といふ、私にはいかにもふさはしい題目を持つて。それ故、私はひとりで來た。私はちようど故國で失戀をしてゐたので――私はそこではほんの大學生であつた、しかもそれでゐて國の女王の黑くこほつた水のやうな眼に戀をした。私はこれの苦しみから逃れようと、この星へ來る通信員を自ら進んで

志願した。私はたうとう地球へ來た。さうしてこの國へ、君の國へ來た。けれども私は、君のまへだが、私の來るべき國を捜ふことに失敗したと言ふべきだ。私は何故、この地球でも、戀のこころとノスタルジヤとで夜歌をうたふ鶫のゐない地方へ、わざわざ來てしまつたのであらうか。一たい、私はこの星の地理をあまりよく知らなかつたので。……それはそれとして、かくて私は、常に孤獨と退屈との研究に沒頭する。さうしてやがて、私は空想の旅人になり、氣分の行者になつて來た。さうして、それの忠實な研究をつづけた。夜が來たとき、私は、かうして、遠い故國の方へ、それがいかに美しく、優しく、悲しく、冷やかに、青く、ふるへて、燃えて、かがやいて見えるかといふことを、夜ごとに通信する。あの私の女王の宮廷學者たちのところへ。』

から言つて、その人は、ずつと月の方へ、永い瞬間を凝視した。私は彼を横顏から見た。實際、その時、その人の目は、何か特別の作用でもあるかのやうに、月に對して、はげしくかがやいた。さうして最後に重い瞬きを一つした。

われわれは燈臺の下のところで別れた。別れぎはに、その人は私に次のやうに言つた、

『私の友達よ。私は、私の孤獨と退屈との研究錄を君に讀んでもらひたいと思ふ。』

2

その次の夜、それはあまり寒かつたので、さすがに私も、今日は、好きな海岸の散歩も見合せた。さうして、ひとり部屋のなかに閉ぢこもつてゐた。窓からは燈臺の青い灯が見えた。窓の下では波が騒いでゐた。今日も月夜であつた。さまざまなことを考へてのち、私はふと、昨夜の不思議な私の新らしい友だちのことを考へてゐた。

その時、別莊守の妻は私の部屋へ這入つて來て、私の目の前の卓の上へ、私にとどいた郵便物を置いた。それは、見ると書物の這入つた小包であつた。私は直ぐあけて見た。それは私の近ごろ出版した第一短篇集で、やつと出來上つたものと見えて、私の出版書肆がそれをとどけたのである。私は自分の初めての集を手にとつた。それをひろげた。それを讀んで見た、讀みつづけて行つた……

『どうです、私の友達。君に約束した私の研究錄は。面白いか？ つまらないか？』不意に、私のうしろから昨夜の人

の聲がした『私は君の手をかりて、この土地の文字で、それを書いて貰つたが……』

私はいささか不平でふりかへつた。

そこには、腰かけてゐる私のうしろに、床からかけて花模樣のある壁の上に、いびつに踞んでうつつた私自身の影があつた。

私は考へ込みながら答へた、

『私の友達よ、君はお說のとほり來るべき國を誤つた。君はなぜ、韻律のある國語の地方へ行かなかつた? 場所錯誤だ! その上、月の大學生、君は時代錯誤だよ! 地理ばかりか、われわれの地球の歷史も知らん!』

かう言つて私は、影などがものを言ふのにだんだん腹が立つてきて、手もとにあつたペンを壁に投げつけた。ペンは壁にささつた。小な投げ槍はささつてふるへた、壁の上で――ちやうど今まで私の影のあつたところで。

それ程、私は威たけだかになつたが、やがて妙に、非常に頑くるしく悲しくなつた。さうして、その花模樣のある壁から、ささつてゐる私のペンを拔いた。それのそそくれた尖をもつて、私は、君の目のまへに今あるこの文章を書きつづけた。

薔薇と詩人との話

その庭園の中心にある、石と銀とで出來た日時計のそばに、私は立つてゐた。この古い器はかうして、くつきりとした細い影を石の上におとして、その刻々に動いて行く己の影をぢつと見つめながら彼の役目を果してゐるうちに、彼自身もその影の動くままに、一刻一刻と時代遲れなものにならなければならないのだ。彼の影と彼の奇妙な運命とに私は眺め入つてゐた。その時、ふと、低い聲があたりから洩れ聞えてくるのを私は聞いた。私は日時計の方へ耳を傾け

た、彼が私にものを言ひかけたのだと思つたから。けれども、それは日時計が語るであらうやうな聲ではなく、また噴水のひとりごとのやうでもなく、何か、年のまだ極く若い戀人たちの囁きだと思へるやうなものであつた。その美しい低い聲は私をひきつけた。そそのかした。私は忍び足で歩いた、聲がもつとはつきり聞える方へ。

『……そんなわけで、或る人は私の木を見て、「これはいつまで經つても柱にはならない」と言つて嗤ひます。或る子どもたちは「こんなものは食べられやしない！」と言つて、足の指で私をさして、私に唾を吐きかけます。その人たちや子どもたちは、一たい、それなら森林や果樹園へ行かなければならなかつたのですのに。それにその人たちは、自分たちが間違へてここへ來てしまつたことなどは言はないで、反つて私を咎めるのですよ。』

『さうですわ』と別のほがらかな聲がした。これは戀人同士ではなささうだ。姉と妹とであらうか、それともやはり同性の戀人たちであらうか『……今日も旅人がひとりこの庭のなかへ來て、「ここは我れ我れの行かうとするところへの近道ではない、まあ、この道の無用にうねりくねつてゐることを見ろ」と、そんなことを言つて、その人は大變に怒つてゐましたわ。』

『……今では人は賢くなつて、誰も戀をいたしません。戀は決して結婚への近道ではないからでせう。さうして戀人たちのために咲いてゐる私は、全く無用なものになり果てました。なるほど、材木ならばいくらやくざなものでも安普請に役立つ。さうして今日では安普請の方が多いのですから。また今日では貧乏な子どもたちは落ちたくだものでも喜んで食べます。さうして人は決して無用なものを喜びません。どうしてまあ、私は材木の樹にならなかつたのでせうね實になる花にならなかつたのでせう、こんな時代に。……思へば、わたしたちの祖父さんや祖母さんの時代には、最も華美で典雅であつたこの庭も、今日では全くの廢園になつてしまつたのですもの。人は庭園よりは停車場や事務所の方が好きになつたのですわね！』

これは確に戀に就ての話ではない。この何ものかの述懷を立ち聞きして、私は感に打たれた。そこでつかつかと思はず進み出た。その時、鶯は私のけはひに驚いて槲の枝の方へ飛び去つた。薔薇の花の枝はそれの下でゆれてゐた。

『美しい薔薇の花よ』揺れてゐる枝の花を見ながら、私はさう言つた『今の述懐はあなたではなかつたのですか。私はものかげで、あなたの悲しいさうして尤もだと思へる訴へを聞きました。けれどもその歎きは、お友だちよ、あなたひとりの專有物ではなりません。それの分け前を私も持ちたいものです。』

『不意に現はれたぶしつけな「私」とは、一たい、どなたの事でせう。さうして私に同情して何を求めようとおつしやるのでせう。あなたは蜜蜂ですか。それならば、お氣の毒さま。私にはもう蜜もないのですよ。』

優しい、けれども刺のある花の答へは、このとほり、案外にも冷やかでシニカルなものであつた。しかし私は腹を立てなかつた。却つて、それほど彼の女をシニカルなものにした彼の女の周圍を思うて、私は更に同情した。それに薔薇の自尊心は私のものよりももつと强かつたのである。それの苦しい心持がうつかり人に聞かれたことを羞ぢ、怒つてゐるのである。さうして尚この上のことを、見ず知らずの私に話したくはないのである。私はこの貴婦人の自尊心を尊敬した。私はそれ故に重ねて言つた。

『いや、お孃さん或は奥さん。私は蜂ではないのです。あなたから私の求めるものは蜜ではない。たゞ分けていただきたいのは、今も言ふとほり、あなたの歎きの半分だ。私はあなたたちの言葉の一つ一つを聞き分ける者だ。私は常にあなたがたに感謝してゐる。あなた方の一家と一族とは、それぞれ、私のさまざまな心持に、その時折の最もいいスタイルを與へてくださる。それ故に、私はあなたがたの美しさをほんとうに知ることが出來る――一たい、私は詩人といふものだが。その上、私は詩人のうちでも、われわれの大師匠の「自然」さへもつくることの出來なかつた青い花を、月の光からつくり出さうとして苦しんでゐる者に屬する一人です。さうして、私もこの世界では全く無用な人間だと言はれてゐます。』

けれども花は、私のこの言葉を聞いても、なかなか機嫌を直さうとはしなかつた。それでも持ち前の快活で、しやべることだけは好きらしかつた。默つてしまふやうな事はなかつたから。さうして語つてゐる間だけは樂しいといふ風であつた。

『詩人？　なるほど聞いたことのあるやうな言葉ですことね。昔はさういふものもあつたやうに伺つてゐます。けれどもわたしたちの字引きでは、その言葉はもう古語の部に編み込まれてゐました。その筈ですとも、詩人がわたしたちに反いてからも、ずいぶん久しいものですからね。それに、わたしは詩人といふものでたらめにも、もう倦きてゐます。ほんとうに詩人といふものは、いつもいつも同じことばかり言つてゐて倦きない人たちですこと。或る詩人などは一つ詩を書けば、きつと一ぺん以上私の名が出て來るのですもの。さうして下手な詩人ほど私を歌ひたがるのです。そこで、詩人と御自分でお名告りになるお方。今どき、どう間違へてか、あなたがほんとうに私に同情なすつたとすれば、あなたはよくよくの時代遅れですね。それとも、わたしたち花の傳説にあるあの近代の半神半人――わたしたち花を友達として、よくわたしたちに御自分のお心持ちを打ち明けて、人間の娘さんたちへの言傳てを私たちの祖先に頼んだといふ人、ハイネ未だ生きてゐて、今そこにゐらつしやるとでも言ふのでせうか。』

『あなたはなかなかの才媛だ』私は實際おどろいてさう答へた『あなたの言葉の刺はハイネ先生のものほど鋭い。で、實を云へば私はハイネ先生の使徒なので、しかしそんなことは別として、私はあなたの言ふとほり、全くの時代遅れだ。さればこそ、この古風な庭園へ來て、毎日かうして樂しんでゐるのです。』

私がかう言つた時、薔薇は初めて私の心を知つたやうに見えた。さうして自尊心の強い薔薇は、やつと本來の優しい女性にかへつた。さうしてちやうど花の方へまわつて來た日脚のなかで、滿足でかがやいて私を見上げた。

『おゝ、今こそわたしは……』

花は、私にむかつてもつと何かを打解けて言はうとした。その時、花の枝ははげしくふるへ出して、薔薇は一時に碎けた。荒い、黒い色の、さうして背の低い風が吹いて來たからであつたか、それとも、最も感動した時には身を擲つといふそれの情熱的な氣質からであつたか、私は花がこんなことになつた原因を見究めるひまがなかつた。それほどこれは突然のことであつた。

このとほり、ほんの束の間であつた我れ我れの友情を悼んで、私は身をかがめて、地びたに重く落ちちらばつた花の

かけらの一つを拾つた。

私は家にかへつたとき、その花びらを自分の著したばかりの詩集のなかへ挿んだ。さうして、その時から、私は時々

『おゝ、今こそわたしは……』

と、かうあの薔薇が最後に言つた言葉を思ひ出す。さうして、あの時あの花はあのつゞきの言葉を、私にどう言ひかけようとしたのであらうかと、それを私はひとりでいろいろと考へるやうになつた。そんな時には私はきつと、かがやかに私を見上げた時のあの花の形を、幻で回想する。同時に私の心では、その幻が息づくのであらうか、重い甘い匂ひがどこからか漂ひ出して、やがてそれが私の心に濃密に立て籠もつて、甘く、重く、苦しく、悩ましく、楽しく、私を酔はせる。氣がついて見ると、私はいつの間にかあの薔薇に、もうこの世には形のない薔薇に戀をしてゐたのである。束の間の友達と思つたものは、かうして私の永遠の戀人になつてゐた。

私は毎日のやうに自分の新らしい詩集をあけては、この不思議な戀人の片身である花びらを見つめる。さうして私の心のなかでは益々紅くなるにかかわらず、本のなかではそれがだんだん灰色に萎びて來るのを見て悲しんだ。

或る日のことである。私はいつものとほり、窓のところで自分の詩集をあけて、氣に入つた章句を讀むやうな顔をしながら、あの枯れて行く花びらを、また見入つてゐた。

『あなた。その花びらはどうなすつたの。まるで女學生のやうなことをしていらつしやるのね。』

この言葉で、私の顔は赧くなつた。私のうしろから私の妻が覗き込んでゐたものと見える。いかに詩人だとは言へ、苟も人間でありながら、薔薇などに戀をして身の痩せて行くことは自分ながら恥しいことでもある。私はどぎまぎしながら、何か不得要領なことを言つて、それから本を兩手で捧げて口の高さまでもつてくると、そつと、妻には内緒で、はかなく枯れたその花びらに一つ接吻した。それは私の唇に吸はれ寄つた。私は私のつぼめた口から熱い吐息を一度に吹出した。壓されて、しなびて、枯れて、灰色になつて、雁皮紙よりもうすくなつた花びらは、吹き飛ばされて、風のない空間をひらひら翻りながら庭へおちて行つたは。窓の下には、どこから來てゐたものか、一羽の大きな立派な雄雞が

ゐて、何か落ちて來たと見ると、大股で急いでその方へ步み寄つた。するどいその嘴をもつて、すばやくそれを一突きした。けれども、直ぐ、それが食べられないものだつたと知ると、

『monxéme！』

と、呟きながら、彼はさも卑しむやうにそれの上を踏みつけて、もうふりむきもしないで、えらい批評家のやうに胸を突き出し、堂々たる大股で、あの薔薇のやうに紅い立派なとさかを悠然とふり立てながら、再び步み去つた。──どこへだか知らない。



慾

里見弴

……子供の無鐵砲とは云ひながら、たつた一人の知るべもない東京へ、私を嬰兒から育てゝくれたツイこの南條在の叔父夫婦の側がイヤなばかりに、ブイと飛び出して來て了つたのが十五の年、——もとより足ない路用は程ケ谷あたりで盡きて、それからは着更の包一つない乞食同樣です、——思へば一生あのまゝ浮び上れなかつたとしても、ちつとも無理はないのです。誰を恨むところもないのです。

それが、——全く御主人樣のお陰、殊には、亡つた先の親方のおめがねにかなつたばかりに、二十年ほどの後には、かりにも、喜多兼の粂さんか、粂さんの喜多兼かなどゝ人樣から云はれる身になつてゐたのですもの、有難いともなんとも、空恐しいほどに思つて、一層骨身を惜まずお店のために働きましたよ。そりや、そこまで漕ぎつけるまでには、ずいぶん辛いことも悲しいこともありましたけれど、私はゆめさらそんなことを、立志談めかしてお話しやうとは思ひません。何んと云つても、人間、運と云ふやつには勝てませんや。よしんば、あの千倍萬倍の辛い思ひを辛抱したとしたところで、運がなけりや、今頃どうなつてるか知れやしません。——現にあの時だつてさうです、——田舍を飛び出して來た時でさア、鐵道線路にくつついて行けばイヤが應でも東京へたどり着けると思つたから、あの子には辛い東海道を、ことこと歩き

憎い線路づたいにやつて來たものです。何んでも神奈川か鶴見か、あの邊でした。春さきのまツ晝間です。もう今にも目が廻りさうに、腹がすいて〳〵やりきれませんでした。いきなり耳のそばでゴウツと云つたと思ふ途端に、私は、いやに温かくつて焦臭い突風を激しく身に感じると、そのまゝゴロ〳〵と土手を轉げ落ちたのです。やゝ平なところに來て、眞ん中になつて止まりましたが「汽車だな」と思つたきりで、身動きをしずにヂツと竦んでゐました。何故と云つて、一寸でも動いたなら、足が片ツぽなくなつてゐるとか、背骨が折れてゐるとか、何んとかそんなことになつてゐるのが分るに違ひない、いつそ、なんにも知らずにこのまゝ死んだ方がいゝ、と思つたからです。――ふと氣がつくと、――寢床のなかで電燈を見詰めてゐて、ヒョイと目をふさいだ時のやうに、イヤに明るい黄色が、ツイ鼻のさきをいつぱいに染めてゐました。もうそれが、よみぢと云ふところへはひつて行くせいでさうなのだとばかり思はれたのです。で、思はず、子供の時から耳馴れてゐるお題目を口のうちに唱えながら、目をつぶらうとすると、何か柔かに睫にさわるものがある。薄目をあくと、また世界はまツ黄色です。少し頬をうしろにずらせてみました。するとね、頬の下に折り敷かれてゐた蒲公英の花が、擴大鏡で見るやうに大きく目に映つたのです。『あゝ蒲公英だな』と思つた時には、もう汽車のことはすつかり忘れてゐました。麥畑が、菜の畑が、百姓家が、青黒く樹の茂つた遠くの岳が、蒼空が、――丁度活動の映畫面をずり動かして行くやうに、次々に私の目にはいつて來る、――それが、股倉からのぞいた景色よりも美しく見えたのです。――暫く私はボンヤリと見惚れて了ひました……。

――と云つたわけだつたからよかつたやうなものゝ、あの時もう五寸私の體が軌道の方によつてゐたからつて、何んの不思議もなければ、どこに文句の持つてきやうもない。そのまゝ蒲公英にも遇えずに、死んで了つたばかりのことでせう。生死がさうですもの、いつばし見てくれ顔に手柄話をするところはありません。善とか惡いとか、エライとかエラクないとか、そりや人間いろ〳〵ありませうが、エラからうが善からうが、運が惡くつちやアたすかりませんからね。

なんて、イヤに悟つたやうなことを云つて了ひましたが、――そんなら何も、汗水たらしてアクセクするがものはな

いわけですが、そこが、「人間の」と云ひませうか、「俗人の」と云ひませうか、「浅間しさで」と云ひませうか、「有難さ」と云ひませうか、兎に角、自分を動かす力は、自分のほかには何もない、死ぬも生きるも思ひのまゝだ、と云つた氣持は、どうして容易にぬけ切るわけのものではないでせう。また實際さうのやうにも考へられますからね。たとへば、私が今こゝで、皆さんの前で、腹を切つて死ぬとしますね、とまア、馬鹿な奴だとか、ヘンな奴だとかは云はれるでせうが、誰も運の悪い奴だとは仰有らないでせう。少くも、その瞬間には私が腹を切りさえしなければ死なないのですからね。往來を歩ツてゐて、突然看板が頭の上へ落ちて來て死ぬのとは、どう考へてもちつと具合が違ふやうですからね。だからまア、運は運として、俺は俺でやるよりほか仕方がありますまいと思ふのです。

さアさうなると、——自分と云ふものを樹てるとなると、人間、慾の一點張りです。粹いにしろ悪いにしろ、高尚にしろ下業にしろ、人間のすることなすことに、何かの意味で、慾から出てゐない行爲が一つでもありますか。人の身替に死ぬなんて云つても、しんからイヤなら逃げちまひます。イヤなやうでも死ぬからには、どこか自分の心に満足するところがあるからでせう。そりや、目先の私慾と云ふものからは脱けられるでせうが、人間本然の慾、——あゝしよう、かうしようの慾、——つまり自分で自分を動かす力——はなくせつこありません、白痴か氣違ひでない限りはね……。

オヤ、またイヤに御法話じみて來ましたね。一代身上で、——決して自慢するんぢやないが、かうして今では楽隠居同様にやつてゐる私だ、そりやアもう、ひと様の蔭口に聞くまでもなく、我利々々亡者のシワンボウで押し通して來たことは、自分が一番たしかに承知してゐます。そんな、目先の私慾よりほかに識らなかつたやうな男が、人間の行爲が、一つとして慾から出ないものはないなどゝ云つたなら、我が田に水を引くやうで、——と云ふよりも、古今の聖人、君子、教祖、英傑、と云はれる人たちの行爲、——つまり人間がどれほどまで善くなれるかと云ふ標本のやうな行爲にまで、わが泥沼の腐れ水をトパッチリにはねかけるやうで、さぞ醜悪とも、滑稽とも思はれるかも知れませんが、まさかに、私も、そこまでは腐れてないつもりですよ。私にも、命に換えがたいものがあつた。そのためにはもう一歩で命まで捨てゝやうとしましたがね、イヤ、命だけは容易なことで捨てられるものではない。それで、死なずには済んだやうなも

のゝ、結局また、に返つて來たまでのことだ。考へてみればくだらない話ですが、まア、私のやうな守錢奴とまで云はれてゐる人間でも、そんなことがあつたのかと云つて、笑つて頂きたい。——ねえ、さつき云つたでせう、全く慾を離れられるのは、白痴か氣違ひばかりだとね、——さア、そこで、まるで嘘みたいなお話だが、このゴウツクバリの私が、慾を離れたいために、氣違ひになつたことがあるんだから不思議でせう。——とまづ、氣をもたせて置いて、いよ〳〵本題にはいるけど、勿體らしい話でもないのですがね……。

たかゞ、一寸した材木屋の小僧から成り上つた身上ですもの、いづれ一錢二錢のはしたで積み始めたのです。一通りの慾の皮や、シワンボウではおツつきません。私と云ふものは、心も體も、一に金、二にも金、金々々で人となつたのです。菓子にも、衣裳にも、煙草にも、何一つわき目はふりませんでした。全く一心不亂です。ましてや、酒だ、女だ、——そんなことは考へてみやうともしませんでした。

それほどだつた私が、どうでせう、三十七で、始めて茶屋と云ふものに連れてかれて、酒と云ふものを飲まされて、藝者と云ふものを見せられたのですが、——これがやみつきにならうとはね……。

目當のが二十八、——藝者の二十八だ、何もかもいゝ加減爛熟してゐますから、年こそ十近くも上だが、その時の私がまるで嬰兒同然。そこへもつて來て、こちらはイヤモウお話にならない逆上かたなのですから、むかふを向かせて置かうと、こつちを向かせやうと好き勝手にされるのでしたが、不思議に女がかたくなつた、惚話ではないが、本氣で惚れ込んで來たのです。そしてこつちはブル〳〵ものでせう、丁度かれこれ半年、お互に思ひ思はれながら、こいつが、どつちからも手を一つ握り得ないで、たゞワク〳〵ワク〳〵するばかりさ。もうさうなつて來ちやア、虎の子のやうな貯金も何もあつたものですか、通つて、たゞ顏を見てゐるだけの嬉しさで、通ひつめる。有繫にはたの見る目もいぢらしかつたか、女將のとりもちで出來た。兵粮の手薄は初めから知れてあるから、もとより旦那ぢやアない。恥しながら、——笑つちやアいけませんよ、——イヤだなア、さうヘンにひとの顏ばかり見ないでさ、……でせう。ですもの、たまりませんや……。

「戀の慾」と云ひますが、これほど慾ばつた慾もありませんね。そこへ行くと、八十七圓二十錢たまつた、さアあと十二圓八十錢で百圓だ、八十錢に、あとが一圓で十二疋だ、なんて云ふ慾は罪がありませんや。顔さえ見てゐれば、たゞもう嬉しくつてたまらなかつた昨日までの自分が、忽ち自分で馬鹿らしくなる。逢つてゐながらヂリ〳〵する、ね。無理な逢ふ瀬の愚痴が、一度でいゝから氣がねなしにシミ〳〵逢つてみたい、でせう。シミ〳〵逢へば、泊りたい、泊らせたい。泊れば、朝は歸し惜い、歸りともない。流連の無理に、何んとなくはかなく悲しく涓ぐむと、せめて三日なり五日なり。――イヤ全く、ノホウズもなく、ヌケ〳〵とつけ上ると云つて、こんな慾張つた慾がほかにありますか。

見る間に私は手づまる。女は旦那をしくじる。事態容易でないから、女將も薄氣味惡がつてせく。せかれゝばなほつのるから、無理をして、無理を重ねて、たうとうギッチリつまつて了ひました。

いつそ死んで了ひたい、――痴話にはよく云ふ口だが、しん底その氣になつて來れば、いくら慾張でも、「戀」もやがて行き止りでせう。木の根草の實を食つても、人跡絶へた山奥か無人島で、たつた二人一生他人と云ふものを見ずに暮さう、とは一寸思ひません。世間の義理で添遂げられないのなら、その世間を仇がたきと思ひさうなものだが、矢つ張り初めから世間に敗るくらゐで、イクヂがないから、恨みながらもたつぷり未練がある。旁々、世間に對する面當なり、二つには、のぼりつめた戀のあとに何が來るか、それが朧げながらもの寂しく心に映つて來て、いつそ二人一緒に死なうとなるのではないでせうかね。もとより間違つてはゐます。雄々しくもなければ、立派でもないが、その氣持は、決してヨタぢやアない。當人同士のことにすれば、お[illegible]屋の爺さん婆さんでも感じさうな、泪と[illegible]えを禁じられないくらゐの悦びです。古往今來誰一人見て來た者のない未知の世界へ、絶對に安心な新世帶をつくれるものと信じ切つて、喜び勇んで引越して行かうと云ふのですものね。か、然し、さう信じ切らなければ怖いからで、内實、何もすき好んで行きたいところぢやアない。工面さえつくことなら、誰も洒落や醉興で、知らぬ他國へ夜逃げはしませんよ。湯に行くたつて、一つや二つ知つた顔があつた方が、張合があります。成らうことなら、矢ツ張り馴染の深い一町内で住んでゐたいのが人情でさア。これがいま[illegible]無理から無理で、――顔が廣くなるには、相當年數[illegible]るが、[illegible]

めるとなると、ツイいツ時です。十年振りで會ふ人にも、何んだか合はす顔がないやうな氣がする。世界中の人間を向ふに廻して、こちらは二人きりの仲間はづれのやうに心細い。夫婦づれの法界で生恥を晒さうよりはと、——俣を洗つてみれば、半分内乘でさアね。

さア、、そこまで行つてながら、まだ慾張つてる。行きがけの駄賃てえ氣で、——序に白狀して了へば、實はこゝへ來たもんだ。氣を惡くなすつちやアいけない。宿は違ひますよ。宿は違ひますが、——一緒温泉場てのがフテ〴〵しいやね。で、今はないが、——いえ、本當、もうあなた三十年も以前のことですもの、——今の、——さやうさ、丁度澤喜の別館になつてるあたりが、久野屋と云ふ安宿でね、そこへ宿をとつた、何故また、同じ温泉でも、特にこゝを撰んだかと云へば、とんだ忠兵衞だが、私の生れ在所に近いからと、一つはあの旭の瀧もあたまにあつたのです。故郷忘じ難しと云ひますが、もの心がついてから一度だつて嬉しい、有難いと思ふやうな、優しい言葉一つかけられたことのない叔父夫婦のほかには、おでんさんとか云ふ近所の婆さんで、私を可愛がつてくれた人や、二三人より覺えてゐる人とてもない、併も東京へ出たきり、唯の一ぺんのたよりもしなければ、隨つて生死のほども分らない人たちの方へ、私の心が惹かで行つたのですからね、妙なものですよ。

餘談は措いて、さていよ〳〵となつてみると、今夜は、明日はで、容易に死ねない。宿のものや相客に氣取られまいためと云ふところも、幾分ありましたらうが、これが、どうして中々陽氣でね、とても芝居すでる心中者のやうな、シホ〴〵としたものぢやアない。この世の樂みを、餘瀝一ツたらしあきさず舐め盡して行かうと云ふんだが、ヒドイ面のあとで錢金のかゝるまねは出來ない。——イヤモウお話になりません……。

二三日するうちに、私も女も目が窪んでヒヨロ〴〵なつて了つた、なんさアヒドイが、おかげで心持も弱々と暗々なつて來た。道で百萬兩拾つたところで、急に氣が變りさうもないくらゐ、シミ〴〵死ぬ氣になつ來た。——どうです、不思議ですか。だがね、新聞にもノベツ心中の記事が出るが、空に考へてるやうなものぢやない、相手さえありやア企くさうさなく、見てる間に、そんな氣持へはいつて行くものですよ。トン〴〵トンと、から相撲で云ふハタキ込まれた

形に、頭からノメリ込んで了ふんだが、カラキシたわいがないね。これが、ほかのことぢやア、おいそれでひツ腰なく死神の誘ひに乗れるわけのものぢやアなからうが、――考へてみると、男から云つても、女から云つても、お互が、あんまり結構な道づれぢやアありませんね。人間が根絶えない限り、戰爭や流行病をのけて、まづ心中が死神のかきいれでせう。これに、一つ手間で、間違ひなく二ツつあがりがあるんだからね。

シミ〴〵死ぬ氣になつて來たと思ふと、――さうは思ひたくないのだが、今度は、何故かさう女が前ほどに可愛くなくなつて了つた。あの世の新世帶なんぞどうでもいゝやうな氣持で、ふと默り込んで了ふと、自分だけの過去をいろいろ思ひ出したりしてゐる。女も、どうもさうらしい。そのくせ、一寸でも側を離れられると、たまらなく淋しい。夜など、はばかりに一人が立つと、きつと一人も一緒について行く……。

五日目の午後四時頃でした、どこへ行くともなく、勿論いよ〳〵死に行くなんてつもりぢやアないが、フイと私たちは宿を出たんです。もう二人ともまるきり口を利かなくなつてゐた。ヅシン〳〵、ヅシン〳〵と、低く鈍い音でも立てながら、地の底へメリ込んで行きさうな、イヤアな重みが私の心へかゝつて來ました。また、それ故にこそ戸外へでも出てみたくなつたのでしたが、同じことです。いや、なほいけない。

無作法に、鳥が落葉の柿の木へおりた。撓むだ枝が、コツ、コツ、コツ……とあとが消え入るやうに、下枝に當つて揺れ動きました。鳥は横着らしくあたりを見廻してから、枝へ二三度嘴をこすりつけると、キヨトンとして、カア、カアと二聲三聲鳴いたんだが、桃色をした大きな口のなかまで見える。……夕日をうけて青光のする黑と、吸取紙のやうな濁つた桃色と、そのイヤな鳴聲とが、實際もどしたくなつたほど、氣持が惡かつたのです。

「いよ〳〵、死ぬ時が來たな」

と、その時私は感じました。

雜木の落葉が、カサ〳〵、カサ〳〵、と枝や幹へこぼれかゝる音ばかりで、靜まり返つた山きわの道を、ポツリ〳〵やゝ暫く歩きました。旭の瀧の下に茶店一軒ない頃で、道もろくについてゐないくらゐでしたが、子供の時分の記憶が

導くのか、殆どひとりでのやうに、そつちへ出て行つたのです。

私たちが瀧の上へ出る小道を登り切つたのは、もう一間と離れては人の顔がはつきりしない頃でした。立木に片手をかけて、そこへから額を當てがつて、ハツハとなつた息を休ませながら、私は、二三間おくれてゐた女を待ちました。追ひつくと、女はいきなり私の頸へ兩手を絡むで、吊る下るやうに、膝を折つて了つた。

「早く、……早く」

さう喘ぐやうに繰り返しながら、時々咽の奥で、老人が目をこすると、どうかして鳴るが、あんな音をさせてゐました。――實は私も、こゝ一二年前から鳴るのだが、イヤだから、こすらないことにしてゐるんです……。

私には、その音がイヤらしかつただけで、死ぬに就いては、まるで何んの想ひもありませんでした。

「よし、よし」

そこは、何んと云つても男だね、私は勇氣をつけるやうに、シツカリ云つてやりました。そして、立たせてやらうとして、抱き上げると、――何んてます、今の言葉で、キスですか、あれをしやうとして、女が口を寄せて來た。――その時です、つい近くで、「アツ」と聲を立てたものがある。見ると、背負梯子で頭よりも高く柴を背負いこんだ小男が、立つてゐます。

よくは分らないが、私は何よりも恥かしかつたやうです。とんでもないところを見られた、と云ふやうな恥かしさだつたやうに思はれるのです。いきなり女を突きのけました。と、何んと思つたか、その男がワツと云つて逃げ出した。――どう云ふつもりですかね、直ぐ私も續いて駈け出したのですがね……。

十間も行くと、私は、突然、その駈けて行くことが、無上に可笑しくなつて來た。馬鹿々々しい話だが、どうもたまらなく可笑しいんです。初めこそ聲を忍んでゐたが、たうとうワハヽヽ、ワハヽヽと大聲に笑ひだして了ひました。さうなると、何もかも可笑しくなつて來るんです。引捌に背負梯子が當るので、思ふやうに馳けられない、その小男の、腰を曲げたチヨコ〳〵走りが可笑しいのです。第一、私に追はれて一生懸命逃げて行くことが可笑しい。一生懸命であつた

から、私が追ひつからうと思へば、直ぐにも追ひつけるくらゐのろくさいのも可笑しい。時々立ち止つて腹を擁へなければ苦しくつてたまらなかつたほど、私は笑ひ續けました。

――何故小男が逃げ出したか、何故あんなに可笑しかつたか、擧めてそれを考へてみやうとした時、――と云ふのは、この不思議な笑ひの發作がやゝ靜まりかけた時は、もう私が氣違ひとして、村の人たちに取り押へられてからでした。向脛を竹の棒でカッパラはれたのも、砂利まじりの往來に頰ぺたをギュウ〱押しつけられたのも、何もかもそれまではたまらなく可笑しかつたのです。

――氣がついてみると變なものでした。その變なのが、まだ可笑しいので、クス〱笑ひながら考へたのです。が、私は實際氣が違つたわけではないから、「こりやア、どうしたつてちつと可怪しいぞ」と思つた時には、ヒヤリとしました。額に手をあてがつてみました。カッカと火のやうになつてる。

「こいつア、ほんものかな」と思ひました。――「何、そんなことがあるものか。あぶなく死神の手からすりぬけて來たんで、その嬉しさまぎれにかう可笑しいんだ」と思ひ返しました。「當然のことだ。ちつとも變でもなきやア、可怪しいところもない。こんな時には、誰だつて機嫌がよくなつて、矢鱈無上に可笑しくなるだらうぢやないか」

私は至極眞目面にさう決論したのです。するとね、今度は、「それほど當然のことを、何故可怪しく思つたんだらう。どうしてまた、ほんものか知ら、なんぞと思つたんだらう。そんなことを思つたのが、ちつと可怪しいぞ。可怪しくもなんともないことが、可怪しく思はれると云ふのは、どうも、こりやちつと可怪しい。イヤだぜ、こいつア、ほんものかも知れない」――ね、また同じ順序で、同じ論理で否定するでせう、直ぐまた同じ疑が起つて來るでせう、何遍となく繰り返し〱迷ひぬいたんですよ。今から思ふと、神經衰弱つてやつにかゝつてゐるところへ、いきなり心に激動を受けたんで、ちつとはどうかしてゐたんでせうね。

でも、翌日はもう、自分が氣違ひでもなんでもないことがしつかりと信じられるやうになつてゐましたが、今度は利害の打算から、相變らず變なことを云つたり、ゲラ〱笑つたりしてゐたのです。何しろ馬鹿に機嫌がよくつてね。堅

山戲たくつて仕樣がないやうな氣持だつたから、あんなまねが平氣で出來たんです。それに、――あゝ、こりやア云ひおくれて、私と云ふものが何んだか馬鹿に不實な人間になつて了つたが、――女も村の人に助けらて、無事に久野屋へ歸つたと云ふことは、村の人たちがお互同士にしてゐる話で分つてゐたのです。私？　私は駐在所のご厄介でさア。先年亡つたが、お店の新どんつてのが迎ひに來てくれて、心中未遂で東京へ連られて歸つたんですがね、あんまりキマリが惡いから、一と月ほど、體氣違ひでおッ通してゐました。仕舞にやア、イラ〳〵して來て、このまゝ本統に氣が違つて了ふのぢやアないかと思はれるやうでしたよ……。

女とは、それツきり綺麗に切れて了つて、私はもとの杢阿彌で、十算盤をいろに、無事泰平と心がけました。金とは心中が出來ませんからね。――全く女は慾々です。今の家内だつて、あいつの前ぢやアさうも云はれないが、五十を過してから、押しつけるやうにされて、イヤ〳〵貰つたんですからね。

さつきも云つたが、然し、人間、ツク〳〵運ですなア。私らには、あの柴かりの小男が、命の恩人ですよ。あれがまた臆病者で逃げてくれたからこそよかつた。へたに止めだてでもされりやア、間違ひなく飛び込んでまさアね、――おかしなもんだ。

死ぬに死なれず、生きるに生きられず、と云つた場合にさ、――あゝ、氣違や白痴くらゐ結構なものはないと、後にツク〳〵感じ入つたわけですがね、あゝしよう、かうしやうの慾に纏りがないほど、人間、泰平な、安心なものはないでせう。――けれどもまた、死なうとしても死なれないと思へば、死にたくなくつても殺されるやつもある。私なんざアとても生きてる氣なんぞなかつたんだが、――ウツプンに死ぬよりほかに道はないやうに思へてゐたんだが、ヒョイと一つひツ外されると、ケロ〳〵としたものです。業晒しな、この年まで生きのびて、――をまけに年甲斐もなく、若い方々の前で、心中未遂の話なんぞしてゐるんですからね。一生と云ふやつ、一體どうなつて行くものやら、分りませんね。――全く、考へてみりやア、おかしなもんだが、生きたいと云ふ慾――こいつが、何んと云つても、人間にやア大根の慾だとみえますね……。

――八年三月作――

◉本號特價 金八拾錢 郵稅金四錢

中央公論大賣捌所

東京市	神田區表神保町	東京堂
同	神田區裏神保町	上田屋
同	京橋區銀座三丁目	東海堂
同	京橋區元數寄屋町	北隆館
同	京橋區西紺屋町	良明堂
同	日本橋區本石町	至誠堂
同	本鄉區本富士町	盛春堂
大阪市	北區梅田町	盛文館
同	北區東梅田町	立盛堂
京都市	七條停車場前	共盛社
同	四條西洞院	前田大盛社
朝鮮	京城本町二丁目	日韓書房

○定價 金四拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金貳圓四拾錢	金貳圓八拾八錢
十二冊	金四圓八拾錢	金五圓七拾六錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金六圓八拾錢外國は金八圓拾六錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

廣告取次所

博報堂、弘報堂、正路喜社、一星社
金蘭社、萬年社、電通社、信賴社
三誠社、東亞通信社

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一振替貯金口座は東京三十四番なり

一郵券代用は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず

一代金引替小包の取扱は一切謝絕す

一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず

一金一圓迄 金六錢
一金五圓迄 金七錢
一金拾圓迄 金八錢
（集金委託料及送料共）

一受領證請求は必ず返信料を要す

大正八年三月卅一日印刷納本
大正八年四月一日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人 菅谷憲治
印刷人 高木酉三

發行所 東京市本鄉區駒込西片町十番地
中央公論社
電話（長小石川一四四〇 小石川三四二〇）
電信略號コウロン

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十二年十月十九日第三種郵便物認可

…なる賣品の廣告掲載は謝絶す